山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市・柏田遺跡の調査

第 4 集

上 巻

1 9 7 7

福岡県教育委員会

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

春日市・柏田遺跡の調査

第 4 集

上 巻

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本国有鉄道の委託を受けて昭和46年度から実施している山陽新幹線建設路線内および博多総合車輛基地内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は，昭和48年から50年にわたって実施しました春日市大字上白水所在の柏田遺跡の調査報告を内容とするもので，『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第4集として公刊することになりました。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが，本報告書が文化財保護の一助となり，学術・研究にも活用いただければ，望外の喜びとするものであります。

なお調査に対してご協力いただいた調査員・地元の方々をはじめ関係各位のご援助などご配慮により本書を発刊するはこびになりましたので心からの感謝を申し上げます。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　森田　實

例　　言

1. 本書は，昭和48年11月1日から昭和50年5月26日までに福岡県教育委員会が，日本国有鉄道下関工事局から委嘱されて，山陽新幹線建設のため破壊される柏田遺跡を発掘調査した報告書である。これは山陽新幹線関係調査報告書の第4集にあたる。
2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ	松岡　史・井上　裕弘
Ⅱ	小池　史哲
Ⅲ	馬田　弘稔・藤瀬　禎博
Ⅳ	富永　直樹
Ⅴ－1	松岡　史・小池　史哲 高田　弘信・藤瀬　禎博
Ⅴ－2	小池　史哲・石橋　新次・藤瀬　禎博 若月　省吾・橘　昌信・大石　昇・西田　正規
Ⅴ－3	小池　史哲・安田　喜憲・藤原　宏志
Ⅴ－4	小池　史哲・橘　昌信
Ⅵ	松岡　史・井上　裕弘 馬田　弘稔・藤瀬　禎博
Ⅶ	井上　裕弘・藤瀬　禎博

3. 本書は全体を上・下2巻にわけ，上巻にⅠ～Ⅴ章を，下巻にⅥ・Ⅶ章と図版をおさめる。大きな挿図は別添付図とした。
4. 掲載の写真の撮影，実測図の作成および製図は，図版目次と挿図目次に示すとおりである。なお，一部実測・製図・執筆には，東中川忠美・石橋新次・大石昇氏並びに賀川光夫教授を中心とする別府大学考古学研究室の協力をえた。
5. 本書の編集は小池史哲が行なった。

本　文　目　次

柏田遺跡の調査
Ⅰ　調査の経過 …… 1
1.　第1次調査の経過 …… 1
2.　第2次調査の経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 5
Ⅲ　層序 …… 8
1.　B列の層序 …… 8
2.　C列の層序 …… 9
Ⅳ　先土器時代の遺物 …… 10
Ⅴ　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
1.　遺構 …… 13
(1)　住居跡 …… 13
(2)　土壙 …… 20
(3)　溝状遺構 …… 21
(4)　炉跡 …… 21
(5)　V字溝 …… 23
2.　遺物 …… 24
(1)　中期の土器 …… 24
(2)　後期の土器 …… 26
(3)　晩期の土器 …… 80
(4)　尖頭状石器 …… 91
(5)　石鏃 …… 93
(6)　つまみ形石器 …… 113
(7)　刃器 …… 143
(8)　台形状石器 …… 156
(9)　石核・残核 …… 158
(10)　彫器 …… 162

(11) 石　　錐…… 166
(12) サイドブレイド…… 170
(13) 削　　器…… 172
(14) 掻　　器…… 177
(15) 石　　錘…… 189
(16) 石　　斧…… 193
(17) 磨　　石…… 198
(18) 石　　皿…… 198
(19) 砥　　石…… 198
(20) 石　庖　丁…… 200
(21) 装　身　具…… 200
(22) 木　炭・種　子…… 201
3. 自然科学系の調査…… 202
(1) 泥土の花粉分析…… 202
(2) プラント・オパール分析…… 211
4. お　わ　り　に…… 217
(1) 立地条件をめぐる問題…… 217
(2) 出土後期土器について…… 221
(3) 生産用具をめぐる問題…… 224
(4) 西北九州における黒曜石製の縦長剝片についての一考察…… 227
(5) 折断技法の考察…… 235
(6) サイドブレイドについて…… 239
Ⅵ 古墳時代の遺構と遺物 …… 261
1. 遺　　構…… 261
(1) 住　居　跡…… 261
(2) 円形竪穴状遺構…… 262
(3) 方形竪穴遺構…… 262
(4) 長方形土壙…… 262
(5) 掘立柱建物跡…… 264
(6) 旧河川状遺構…… 265
2. 遺　　物…… 267
(1) 土　師　器…… 267
(2) 須　恵　器…… 299

(3) 木　製　品…… 301
(4) 土　錘・石　錘…… 301
(5) 砥　　石…… 302
(6) 勾　　玉…… 302
(7) 土　製　円　板…… 303
3. お　わ　り　に…… 304
Ⅶ 歴史時代の遺構と遺物 …… 312
1. 遺　　構…… 312
(1) 掘立柱建物跡…… 312
(2) 溝　状　遺　構…… 317
2. 遺　　物…… 318
(1) 瓦 …… 318
(2) 土　師　器…… 321
(3) 須　恵　器…… 324
(4) 土師質土器…… 328
(5) 瓦　質　土　器…… 328
(6) 磁　　器…… 330
3. お　わ　り　に…… 335

図　版　目　次

本文対照頁

図 版 1 (1) 遺跡遠景航空写真（松岡史撮影）……13
(2) 遺跡遠景航空写真（松岡撮影）……13
2 (1) 遺跡全景航空写真（井上裕弘撮影）……13
(2) 遺跡全景航空写真（小池史哲撮影）……13
3 (1) A・B－5～7区全景地上写真（松岡撮影）……13
(2) B4～5区全景航空写真（井上撮影）……13
4 (1) B1～3区全景（宮崎貴夫撮影）……13
(2) B1～3区全景（松岡撮影）……13
5 (1) B4～5区全景（小池撮影）……13

(2) B５～７区全景（小池撮影）……13
6 (1) B７～８区全景（小池撮影）……13
(2) B10～14区全景（小池撮影）……13
7 (1) A・B－８～９区全景（小池撮影）……13
(2) A・B－８～９区全景（小池撮影）……13
8 (1) １号住居跡全景（松岡撮影）……14
(2) １号住居跡全景（松岡撮影）……14
9 (1) １号住居跡遺物出土状況（松岡撮影）……14
(2) １号住居跡遺物出土状況（松岡撮影）……14
10 (1) 住居跡群全景（小池撮影）……13
(2) ２号住居跡全景（小池撮影）……14
11 (1) ３・５号住居跡全景（小池撮影）……18
(2) ６号住居跡全景（小池撮影）……18
12 (1) ４号住居跡全景（小池撮影）……18
(2) ４号住居跡遺物出土状況（小池撮影）……18
13 (1) １号土壙全景（松岡撮影）……20
(2) ２号土壙全景（松岡撮影）……20
14 (1) １号土壙遺物出土状況（松岡撮影）……20
(2) １号土壙遺物出土状況（松岡撮影）……20
15 (1) １号土壙遺物出土状況（松岡撮影）……20
(2) １号土壙遺物出土状況（松岡撮影）……20
16 (1) 溝状遺構全景（松岡撮影）……21
(2) 溝状遺構全景（宮崎撮影）……21
17 (1) 溝状遺構遺物出土状況（小池撮影）……21
(2) 溝状遺構遺物出土状況（小池撮影）……21
18 (1) 溝状遺構遺物出土状況（宮崎撮影）……21
(2) 溝状遺構遺物出土状況（宮崎撮影）……21
19 (1) 溝状遺構遺物堆積状況（小池撮影）……21
(2) 溝状遺構土層堆積状況（小池撮影）……21
20 (1) 炉跡全景（小池撮影）……21
(2) 炉跡全景（小池撮影）……21
21 (1) Ｖ字溝全景（小池撮影）……23
(2) Ｖ字溝全景（小池撮影）……23

22 (1) V字溝土層堆積状況（小池撮影）……23
(2) V字溝土層堆積状況（小池撮影）……23
23 縄文時代中期土器（小池撮影）……24
24 縄文時代後期土器（小池撮影）……26
25 縄文時代後期土器（小池撮影）……26
26 縄文時代後期土器（小池撮影）……26
27 縄文時代後期土器（小池撮影）……26
28 縄文時代後期土器（小池撮影）……26
29 縄文時代晩期土器（小池撮影）……80
30 (1) 先土器時代の遺物（小池撮影）……10
(2) 尖頭状石器（小池撮影）……91
31 石鏃（小池撮影）……93
32 石鏃（小池撮影）……93
33 石鏃（小池撮影）……93
34 つまみ形石器（小池撮影）…… 113
35 つまみ形石器（小池撮影）…… 113
36 つまみ形石器（小池撮影）…… 113
37 つまみ形石器（小池撮影）…… 113
38 つまみ形石器（小池撮影）…… 113
39 刃器（小池撮影）…… 143
40 刃器（小池撮影）…… 143
41 (1) 台形状石器（小池撮影）…… 156
(2) 石核（小池撮影）…… 158
42 (1) 彫器（小池撮影）…… 162
(2) 石錐（小池撮影）…… 166
43 サイドブレイド・削器・掻器（小池撮影）…… 170
44 石錘（小池撮影）…… 189
45 石斧（小池撮影）…… 193
46 石斧（小池撮影）…… 193
47 石斧（小池撮影）…… 193
48 磨石・石皿・砥石・石庖丁（小池撮影）…… 198
49 (1) 木炭・種子（西田正規撮影）…… 201
(2) 装身具（小池撮影）…… 200

50　板付遺跡Ｊ-23地区の花粉ダイアグラム（安田喜憲作成）…… 210
51　長崎県里田原遺跡Ｉ－６トレンチの花粉分布図（安田作成）…… 210
52　プラント・オパール顕微鏡写真（藤原宏志撮影）…… 211
53　プラント・オパール顕微鏡写真（藤原撮影）…… 211
54　プラント・オパール顕微鏡写真（藤原撮影）…… 211
55　プラント・オパール顕微鏡写真（藤原撮影）…… 211
56　プラント・オパール顕微鏡写真（藤原撮影）…… 211
57　プラント・オパール顕微鏡写真（藤原撮影）…… 211
58　(1)　７号住居跡全景（松岡撮影）…… 261
　　(2)　８号住居跡全景（小池撮影）…… 261
59　(1)　円形竪穴状遺構（小池撮影）…… 262
　　(2)　円形竪穴状遺構内土器出土状態（小池撮影）…… 262
60　(1)　１号方形竪穴遺構（松岡撮影）…… 262
　　(2)　２号方形竪穴遺構（小池撮影）…… 262
61　(1)　１号長方形土壙（小池撮影）…… 262
　　(2)　完掘後の１号長方形土壙（小池撮影）…… 262
62　(1)　１号長方形土壙内土器出土状態（小池撮影）…… 262
　　(2)　１号長方形土壙内土器出土状態（三村修次撮影）…… 262
63　(1)　１号長方形土壙（小池撮影）…… 262
　　(2)　２号長方形土壙（小池撮影）…… 263
64　(1)　Ａ９・Ｂ９区全景（小池撮影）…… 264
　　(2)　１・２号掘立柱建物跡全景（小池撮影）…… 264
65　(1)　１号掘立柱建物跡全景（小池撮影）…… 264
　　(2)　２号掘立柱建物跡全景（小池撮影）…… 265
66　(1)　旧河川状遺構（松岡撮影）…… 265
　　(2)　旧河川状遺構と堆積土層（松岡撮影）…… 265
67　７号住居跡出土土師器 (1)（井上撮影）…… 268
68　７号住居跡出土土師器 (2)（井上撮影）…… 269
69　７号住居跡出土土師器 (3)（井上撮影）…… 270
70　８号住居跡出土土師器（井上撮影）…… 274
71　円形竪穴状遺構・２号方形竪穴遺構出土土師器（井上撮影）…… 276
72　(1)　２号方形竪穴遺構出土土師器（井上撮影）…… 278
　　(2)　１号長方形土壙出土土師器 (1)（井上撮影）…… 279
73　１号長方形土壙出土土師器 (2)（井上撮影）…… 280

74 (1) 2号長方形土壙出土土師器（井上撮影）…… 280
(2) 旧河川状遺構出土土師器 (1)（井上撮影）…… 283
75 旧河川状遺構出土土師器 (2)（井上撮影）…… 284
76 旧河川状遺構出土土師器 (3)（井上撮影）…… 285
77 旧河川状遺構出土土師器 (4)（井上撮影）…… 286
78 旧河川状遺構出土土師器 (5)（井上撮影）…… 288
79 包含層出土土師器 (1)（井上撮影）…… 290
80 包含層出土土師器 (2)（井上撮影）…… 291
81 包含層出土土師器 (3)・土製品・石製品（井上撮影）…… 299
82 (1) 7号掘立柱建物跡全景（小池撮影）…… 313
(2) 8号掘立柱建物跡全景（小池撮影）…… 314
83 軒丸瓦・丸瓦・平瓦（井上撮影）…… 318
84 丸瓦・平瓦（井上撮影）…… 320
85 丸瓦・平瓦（井上撮影）…… 320
86 丸瓦・平瓦（井上撮影）…… 320
87 土師器（井上撮影）…… 321
88 白磁（井上撮影）…… 330
89 (1) 白磁（井上撮影）…… 331
(2) 青磁（井上撮影）…… 332
90 青磁（井上撮影）…… 334

挿　図　目　次

第 1 図　山陽新幹線の路線と博多車輌基地の位置（佐々木隆彦作成）…… 4
第 2 図　山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡分布図
（日本国有鉄道原図 1:5,000　木下修作成）……折込み
第 3 図　柏田遺跡地形全体図（日本国有鉄道原図 1:1,000　小池史哲製図）……折込み
第 4 図　春日・那珂川地区縄文時代遺跡分布図
（国土地理院地形図福岡南部・不入道 1:25,000　小池作成）…… 折込み
第 5 図　先土器時代の遺物実測図（小池・富永直樹実測，小池製図）……11
第 6 図　1号住居跡実測図（松岡史・馬田弘稔・市川富久・織笠昭・
川道寛・稲富裕和実測，松岡製図）……15

第 7 図　2・4号住居跡実測図（小池・藤瀬禎博・高田弘信実測，高田製図）……16
第 8 図　3・5・6号住居跡実測図（小池・藤瀬・高田実測，高田製図）……17
第 9 図　1号土壙実測図（馬田・市川実測，高田製図）……19
第 10 図　2・3号土壙実測図（馬田・市川実測，高田製図）……20
第 11 図　炉跡実測図（小池実測，高田製図）……21
第 12 図　V字溝実測図（小池・藤瀬・高田実測，高田製図）……22
第 13 図　V字溝土層図（小池・藤瀬・高田実測，高田製図）……23
第 14 図　中期土器拓影（小池実測，手拓）……25
第 15 図　1号住居跡出土土器 (1) 実測図（若月省吾実測，小池製図）……28
第 16 図　1号住居跡出土土器 (2) 実測図（若月実測，小池製図）……29
第 17 図　1号住居跡出土土器 (3) 実測図（若月実測，小池製図）……30
第 18 図　1号住居跡出土土器 (4) 実測図（若月実測，小池製図）……31
第 19 図　1号住居跡出土土器 (5) 実測図（若月実測，小池製図）……32
第 20 図　1～3号住居跡出土土器拓影（若月手拓）……34
第 21 図　3・4号住居跡出土土器拓影（小池手拓）……35
第 22 図　4号住居跡出土土器実測図（若月実測，製図）……36
第 23 図　4～6号住居跡出土土器拓影（小池手拓）……37
第 24 図　1号土壙出土土器実測図（若月実測，小池製図）……38
第 25 図　住居跡周辺出土土器 (1) 拓影（若月・石橋新次手拓）……43
第 26 図　住居跡周辺出土土器 (2) 拓影（若月・石橋手拓）……45
第 27 図　住居跡周辺出土土器 (3) 拓影（若月・石橋手拓）……47
第 28 図　住居跡周辺出土土器 (4) 拓影（若月・石橋手拓）……49
第 29 図　住居跡周辺出土土器 (5) 実測図（若月・石橋実測，石橋製図）……53
第 30 図　住居跡周辺出土土器 (6) 実測図（若月・石橋実測，石橋製図）……57
第 31 図　底部接合手法模式図（石橋作成）……59
第 32 図　底部径計測値分布（石橋作成）……59
第 33 図　溝状遺構出土土器 (1) 実測図（小池実測，製図）……61
第 34 図　溝状遺構出土土器 (2) 実測図（小池実測，製図）……62
第 35 図　溝状遺構出土土器（1・2）拓影（小池手拓）……63
第 36 図　溝状遺構出土土器 (3) 拓影（小池手拓）……64
第 37 図　溝状遺構出土土器 (4) 拓影（小池手拓）……65
第 38 図　溝状遺構出土土器 (5) 拓影（小池手拓）……67
第 39 図　溝状遺構出土土器 (6) 拓影（小池手拓）……68
第 40 図　溝状遺構出土土器 (7) 拓影（小池手拓）……69

第 41 図　溝状遺構出土土器 (8) 拓影（小池手拓）……70
第 42 図　溝状遺構出土土器 (9) 拓影（小池手拓）……71
第 43 図　溝状遺構出土土器 (10) 拓影（小池手拓）……73
第 44 図　溝状遺構出土土器 (11) 拓影（小池手拓）……74
第 45 図　溝状遺構出土土器 (12) 実測図（小池実測，製図）……75
第 46 図　溝状遺構出土土器 (13) 拓影（小池手拓）……76
第 47 図　溝状遺構出土土器 (14) 拓影（小池手拓）……77
第 48 図　溝状遺構出土土器 (15) 拓影（小池手拓）……78
第 49 図　溝状遺構出土土器 (16) 拓影（小池手拓）……79
第 50 図　晩期土器 (1) 実測図（藤瀬・小池実測，藤瀬製図）……82
第 51 図　晩期土器 (2) 拓影（若月・藤瀬手拓）……86
第 52 図　晩期土器 (3) 拓影（若月・藤瀬手拓）……89
第 53 図　尖頭状石器実測図（富永・小池実測，小池製図）……92
第 54 図　石鏃の地区別分布（小池作成）……93
第 55 図　石鏃実測図 (1)（小池・富永実測，小池製図）……94
第 56 図　石鏃実測図 (2)（小池・富永実測，小池製図）……96
第 57 図　石鏃実測図 (3)（小池・富永実測，小池製図）……98
第 58 図　石鏃実測図 (4)（小池・富永実測，小池製図）……100
第 59 図　石鏃実測図 (5)（小池実測，製図）……102
第 60 図　石鏃実測図 (6)（小池・富永実測，小池製図）……104
第 61 図　石鏃実測図 (7)（小池・富永実測，小池製図）……106
第 62 図　石鏃実測図 (8)（小池・富永実測，小池製図）……108
第 63 図　石鏃実測図 (9)（小池実測，製図）……110
第 64 図　石鏃実測図 (10)（小池実測，製図）……112
第 65 図　つまみ形石器実測図 (1)（小池・富永実測，小池製図）……114
第 66 図　つまみ形石器実測図 (2)（小池実測，製図）……116
第 67 図　つまみ形石器実測図 (3)（小池実測，製図）……118
第 68 図　つまみ形石器実測図 (4)（小池実測，製図）……120
第 69 図　つまみ形石器実測図 (5)（小池実測，製図）……122
第 70 図　つまみ形石器実測図 (6)（小池・富永実測，小池製図）……124
第 71 図　つまみ形石器実測図 (7)（富永実測，小池製図）……126
第 72 図　つまみ形石器実測図 (8)（富永実測，小池製図）……128
第 73 図　つまみ形石器実測図 (9)（小池実測，製図）……130
第 74 図　つまみ形石器の地区別分布（小池作成）……131

第 75 図　つまみ形石器実測図 ⑽（小池・富永実測，小池製図） …… 132
第 76 図　つまみ形石器実測図 ⑾（小池・富永実測，小池製図） …… 134
第 77 図　つまみ形石器実測図 ⑿（小池実測，製図） …… 136
第 78 図　つまみ形石器実測図 ⒀（小池・富永実測，小池製図） …… 138
第 79 図　つまみ形石器実測図 ⒁（小池・富永実測，小池製図） …… 140
第 80 図　つまみ形石器実測図 ⒂（小池実測，製図） …… 142
第 81 図　刃器実測図 (1)（小池・富永実測，小池製図） …… 145
第 82 図　刃器実測図 (2)（小池・富永実測，小池製図） …… 146
第 83 図　刃器実測図 (3)（小池・富永実測，小池製図） …… 148
第 84 図　刃器実測図 (4)（小池・富永実測，小池製図） …… 150
第 85 図　刃器実測図 (5)（小池・富永実測，小池製図） …… 151
第 86 図　刃器実測図 (6)（小池・富永実測，小池製図） …… 153
第 87 図　刃器実測図 (7)（小池・富永実測，小池製図） …… 155
第 88 図　台形状石器実測図（小池・富永実測，小池製図） …… 157
第 89 図　石核実測図 (1)（小池実測，製図） …… 159
第 90 図　石核実測図 (2)（小池実測，製図） …… 160
第 91 図　彫器実測図 (1)（小池・富永実測，小池製図） …… 163
第 92 図　彫器実測図 (2)（小池・富永実測，小池製図） …… 164
第 93 図　石錐実測図 (1)（小池実測，製図） …… 167
第 94 図　石錐実測図 (2)（小池・富永実測，小池製図） …… 168
第 95 図　サイドブレイド・不明石器実測図（小池・富永実測，小池製図） …… 171
第 96 図　削器・掻器実測図 (1)（小池・富永実測，小池製図） …… 173
第 97 図　削器・掻器実測図 (2)（小池・富永実測，小池製図） …… 174
第 98 図　削器・掻器実測図 (3)（小池・富永実測，小池製図） …… 176
第 99 図　削器・掻器実測図 (4)（小池・富永実測，小池製図） …… 177
第 100 図　削器・掻器実測図 (5)（藤瀬・富永実測，小池製図） …… 181
第 101 図　削器・掻器実測図 (6)（藤瀬・富永実測，小池製図） …… 183
第 102 図　削器・掻器実測図 (7)（藤瀬・富永実測，小池製図） …… 185
第 103 図　削器・掻器計測値分布（藤瀬作成） …… 187
第 104 図　石錘実測図（小池・富永実測，小池製図） …… 190
第 105 図　石錘の地区別分布（小池作成） …… 191
第 106 図　石錘の長さと幅による分布（小池作成） …… 192
第 107 図　石錘の重量分布（小池作成） …… 193
第 108 図　石斧実測図 (1)（井上裕弘・富永・小池実測，小池製図） …… 194

第109図　石斧実測図 (2)（井上・富永・小池実測，小池製図） …… 195
第110図　石斧実測図 (3)（井上・富永・小池実測，小池製図） …… 196
第111図　磨石・石皿・砥石・石庖丁実測図
（大石昇・富永・小池・井上実測，大石製図）…… 199
第112図　装身具実測図（大石実測，製図）…… 200
第113図　地形分類図（安田喜憲作成）…… 202
第114図　花粉分析試料採取A・B地点（小池作成，高田製図）…… 203
第115図　花粉分析試料採取C地点（小池作成，高田製図）…… 204
第116図　花粉分析試料採取地点の層序（安田作成）…… 204
第117図　イネ科植物珪酸体標本の作製（藤原宏志作成）…… 213
第118図　土壌試料の定性分析（藤原作成）…… 213
第119図　土器片の定性分析（藤原作成）…… 213
第120図　縄文時代遺跡時期別分布（小池作成）…… 219
第121図　石鏃の長さと幅による分布（小池作成）…… 225
第122図　7号住居跡実測図（松岡・馬田・市川・織笠・川道実測，松岡製図）……折込み
第123図　円形竪穴遺構実測図（藤瀬・高田実測，高田製図）…… 263
第124図　1号方形竪穴遺構実測図（市川実測，高田製図）…… 264
第125図　2号方形竪穴遺構実測図（藤瀬実測，高田製図）…… 264
第126図　長方形土壙実測図（富永・三村実測，高田製図）……折込み
第127図　1・2号建物跡実測図（藤瀬・高田実測，高田製図）…… 266
第128図　7号住居跡出土土師器実測図 (1)（井上・東中川忠美実測，井上製図） … 268
第129図　7号住居跡出土土師器実測図 (2)（井上・東中川実測，井上製図） …… 269
第130図　7号住居跡出土土師器実測図 (3)（井上・東中川実測，井上製図） …… 272
第131図　7号住居跡出土土師器実測図 (4)（井上・東中川実測，井上製図） …… 273
第132図　8号住居跡出土土師器実測図（井上実測，製図）…… 275
第133図　円形竪穴状遺構，1・2号方形竪穴遺構出土土師器実測図
（井上実測，製図）…… 277
第134図　2号方形竪穴遺構出土土師器実測図（井上・東中川実測，井上製図）…… 278
第135図　1号長方形土壙出土土師器実測図（井上実測，製図）…… 281
第136図　1・2号長方形土壙出土土師器実測図（井上実測，製図）…… 282
第137図　旧河川状遺構出土土師器実測図 (1)（井上・東中川実測，井上製図） …… 284
第138図　旧河川状遺構出土土師器実測図 (2)（井上・東中川実測，井上製図） …… 286
第139図　旧河川状遺構出土土師器実測図 (3)（井上・東中川実測，井上製図） …… 287
第140図　旧河川状遺構出土土師器実測図 (4)（井上・東中川実測，井上製図） …折込み

第141図　包含層出土土師器実測図 (1)（井上・東中川実測，井上製図） …… 291
第142図　包含層出土土師器実測図 (2)（井上・東中川実測，井上製図） …… 293
第143図　包含層出土土師器実測図 (3)（井上・東中川実測，井上製図） …… 294
第144図　包含層出土土師器実測図 (4)（井上・東中川実測，井上製図） …… 297
第145図　包含層出土土師器実測図 (5)（井上・東中川実測，井上製図） …… 298
第146図　須恵器実測図（藤瀬実測，製図）…… 299
第147図　木器実測図（馬田実測，製図）…… 300
第148図　土製品・石製品実測図（井上・小池・大石・富永実測，小池製図）…… 302
第149図　砥石実測図（大石実測，製図）…… 303
第150図　3・4号建物跡実測図（井上・小池実測，高田製図）…… 313
第151図　5・6号建物跡実測図（藤瀬・高田実測，高田製図）…… 315
第152図　7・8号建物跡実測図（小池・高田実測，高田製図）…… 316
第153図　9号建物跡実測図（藤瀬・高田実測，高田製図）…… 317
第154図　軒丸瓦・丸瓦・平瓦実測図（井上実測，製図）…… 319
第155図　瓦拓影図（井上手拓）……折込み
第156図　土師器実測図 (1)（大石実測，井上製図） …… 322
第157図　土師器実測図 (2)（大石実測，井上製図） …… 323
第158図　御笠川南条坊遺跡との対比（井上作成）…… 324
第159図　須恵器実測図（藤瀬実測，製図）…… 326
第160図　須恵器，土師質土器実測図（藤瀬・大石実測，井上製図）…… 329
第161図　土師質・瓦質土器実測図（大石実測，井上製図）…… 330
第162図　白磁実測図（井上実測，製図）…… 331
第163図　青磁実測図（井上実測，製図）…… 333

表　目　次

表　1　山陽新幹線関係遺跡一覧表（鷲久嗣郎作成）……折込み
表　2　春日・那珂川地区縄文時代遺跡地名表（小池史哲作成）…… 7
表　3　先土器時代遺物計測表（小池作成）……11
表　4　尖頭状石器計測表（小池作成）……92
表　5　石鏃計測表 (1)（小池作成） ……95
表　6　石鏃計測表 (2)（小池作成） ……97
表　7　石鏃計測表 (3)（小池作成） ……96
表　8　石鏃計測表 (4)（小池作成） …… 101

表　9　石鏃計測表 (5)（小池作成）…… 103
表　10　石鏃計測表 (6)（小池作成）…… 105
表　11　石鏃計測表 (7)（小池作成）…… 107
表　12　石鏃計測表 (8)（小池作成）…… 109
表　13　石鏃計測表 (9)（小池作成）…… 111
表　14　石鏃計測表 (10)（小池作成）…… 113
表　15　つまみ形石器計測表 (1)（小池作成）…… 115
表　16　つまみ形石器計測表 (2)（小池作成）…… 117
表　17　つまみ形石器計測表 (3)（小池作成）…… 119
表　18　つまみ形石器計測表 (4)（小池作成）…… 121
表　19　つまみ形石器計測表 (5)（小池作成）…… 123
表　20　つまみ形石器計測表 (6)（小池作成）…… 125
表　21　つまみ形石器計測表 (7)（小池作成）…… 127
表　22　つまみ形石器計測表 (8)（小池作成）…… 129
表　23　つまみ形石器計測表 (9)（小池作成）…… 131
表　24　つまみ形石器計測表 (10)（小池作成）…… 133
表　25　つまみ形石器計測表 (11)（小池作成）…… 135
表　26　つまみ形石器計測表 (12)（小池作成）…… 137
表　27　つまみ形石器計測表 (13)（小池作成）…… 139
表　28　つまみ形石器計測表 (14)（小池作成）…… 141
表　29　つまみ形石器計測表 (15)（小池作成）…… 143
表　30　刃器計測表 (1)（小池作成）…… 147
表　31　刃器計測表 (2)（小池作成）…… 149
表　32　刃器計測表 (3)（小池作成）…… 152
表　33　刃器計測表 (4)（小池作成）…… 154
表　34　刃器計測表 (5)（小池作成）…… 156
表　35　台形状石器計測表（小池作成）…… 157
表　36　石核計測表（小池作成）…… 161
表　37　彫器計測表（小池作成）…… 165
表　38　石錐計測表 (1)（小池作成）…… 169
表　39　石錐計測表 (2)（小池作成）…… 170
表　40　サイドブレイド・不明石器計測表（小池作成）…… 172
表　41　削器・掻器計測表 (1)（小池作成）…… 175
表　42　削器・掻器計測表 (2)（小池作成）…… 178

表　43　削器・掻器計測表 (3)（藤瀬禎博作成）…… 185
表　44　削器・掻器計測表 (4)（藤瀬作成）…… 186
表　45　石錘計測表（小池作成）…… 191
表　46　石斧計測表（小池作成）…… 197
表　47　磨石・石皿・砥石等計測表（大石昇作成）…… 200
表　48　柏田遺跡における木炭分析結果（西田正規作成）…… 201
表　49　花粉・胞子出現個体数（安田喜憲作成）…… 206
表　50　土壌のプラント・オパール分析結果（藤原宏志作成）…… 214
表　51　出土土器のプラント・オパール分析結果（藤原作成）…… 214
表　52　未掲載石器計測表（小池作成）…… 242
表　53　1号建物跡計測表（高田弘信作成）…… 265
表　54　2号建物跡計測表（高田作成）…… 265
表　55　土錘・石錘計測表（小池作成）…… 301
表　56　土師器の器種構成（井上作成）…… 306
表　57　3号建物跡計測表（高田作成）…… 312
表　58　4号建物跡計測表（高田作成）…… 314
表　59　5号建物跡計測表（高田作成）…… 314
表　60　6号建物跡計測表（高田作成）…… 314
表　61　7号建物跡計測表（高田作成）…… 314
表　62　8号建物跡計測表（高田作成）…… 317
表　63　土師器皿計測表（井上作成）…… 321
表　64　土師器杯底部計測表（井上作成）…… 323
表　65　磁器出土点数と比率（井上作成）…… 334

付　図　目　次

付図 1　梶原川流域縄文時代遺跡分布図（微地形図）（1/5000）（小池史哲作成，高田弘信製図）
付図 2　柏田遺跡遺構配置図（井上裕弘・小池・藤瀬禎博・高田実測，高田製図）
付図 3　柏田遺跡旧地形図（井上・小池・藤瀬・高田実測，高田製図）
付図 4　柏田遺跡B列層序（松岡史・馬田弘稔・市川富久実測，高田製図）
付図 5　柏田遺跡C列層序（小池・藤瀬・高田実測，藤瀬製図）
付図 6　柏田遺跡溝状遺構実測図（井上・小池・藤瀬・高田実測，高田製図）
付図 7　柏田遺跡古墳時代遺物分布図（井上作成，高田製図）
付図 8　柏田遺跡歴史時代遺物分布図（井上作成，高田製図）

柏田遺跡の調査

I 調査の経過

(1) 第1次調査の経過（昭和48年11月1日～12月27日）

遺跡は，山陽新幹線関係埋蔵文化財地点番号の第18地点とされていたものである。国鉄新幹線車輛基地建設に並行して，この基地以南の新路線建設の準備として，車輛基地線に平行して新たな高架橋の建設が実施された。その際に柏田の部分のみ周囲水田より僅かに高く畑地として耕作され，地表に須恵器及び土師器片の散布を見た。従ってこの部分に対する施工の延期を国鉄側と交渉し，暫時の猶余を得たのであるが，それも瞬く内に過ぎ，遂に発掘調査を実施せざるを得ない時が来たのである。しかし車輛基地建設予定地内の多数の遺跡群の調査は既に文化財保護当局の能力の限度に達している時期でもあり，平安博物館の来援も得て更に急速度で調査を進展させつつあった。柏田遺跡も一度は平安博物館側に調査を依頼したのであるが，「地表で見る限り学術調査結果を期待し得る情況ではなく」博物館側も基地内の門田古墳ならば調査に応じようと言う事となり，柏田遺跡としては宙に浮く結果となった。しかしながら調査は急を要すとの国鉄側の要望を受け当教育委員会においては文化課調査係長と技師一名を急派し，この調査を実施したのである。調査実施に当って県文化財管理調査委員前田軍治氏及び同恵美子夫人，合志幸子氏の来援を得た。なお，調査終了後の出土遺物整理に当っては軟質の脆い縄文土器・土師器であり，水洗，分類，復原作業は調査係長自らこれに当ると共に前田軍治氏，同夫人，合志幸子氏の細心の心遣いの許に共同でこれらの困難な作業を完了させた。調査の結果については項を改めて詳述するが，福岡平野における低地縄文集落を検出し，これらの遺構に伴う縄文後期中葉の土器組合せが初めて明確となった。類似の土器が東光彦氏により早くから熊本市渡鹿の北久根山において，各時代の遺物と共に採集されて学界の注意をひいていた。又，同県天草の沖の原貝塚においても故坂本経堯氏を団長に筆者を加えて層序を確認していたものの報文の刊行が不能のまま今日に及んでいる。これら先行する調査なり，研究はあったが，単一時期の遺構との共伴関係における遺物組合せの明確化は，単に縄文土器編年の好資料たるのみならず，当時の文化内容をより明確にし，文化の広がり，他地方との交渉等，地理学的にも多大の資料を提供する事となるのである。また土師器についても近年北部九州における

調査，研究が著しい進展を見ているが，本遺跡においても遺構との共存を示す好資料であり，初期の土師器を考える上に逸する事のできないものと思う。　（松岡　史）

(2)　第２次調査の経過（昭和50年２月13日～３月25日・４月３日～５月10日・５月22日～26日）

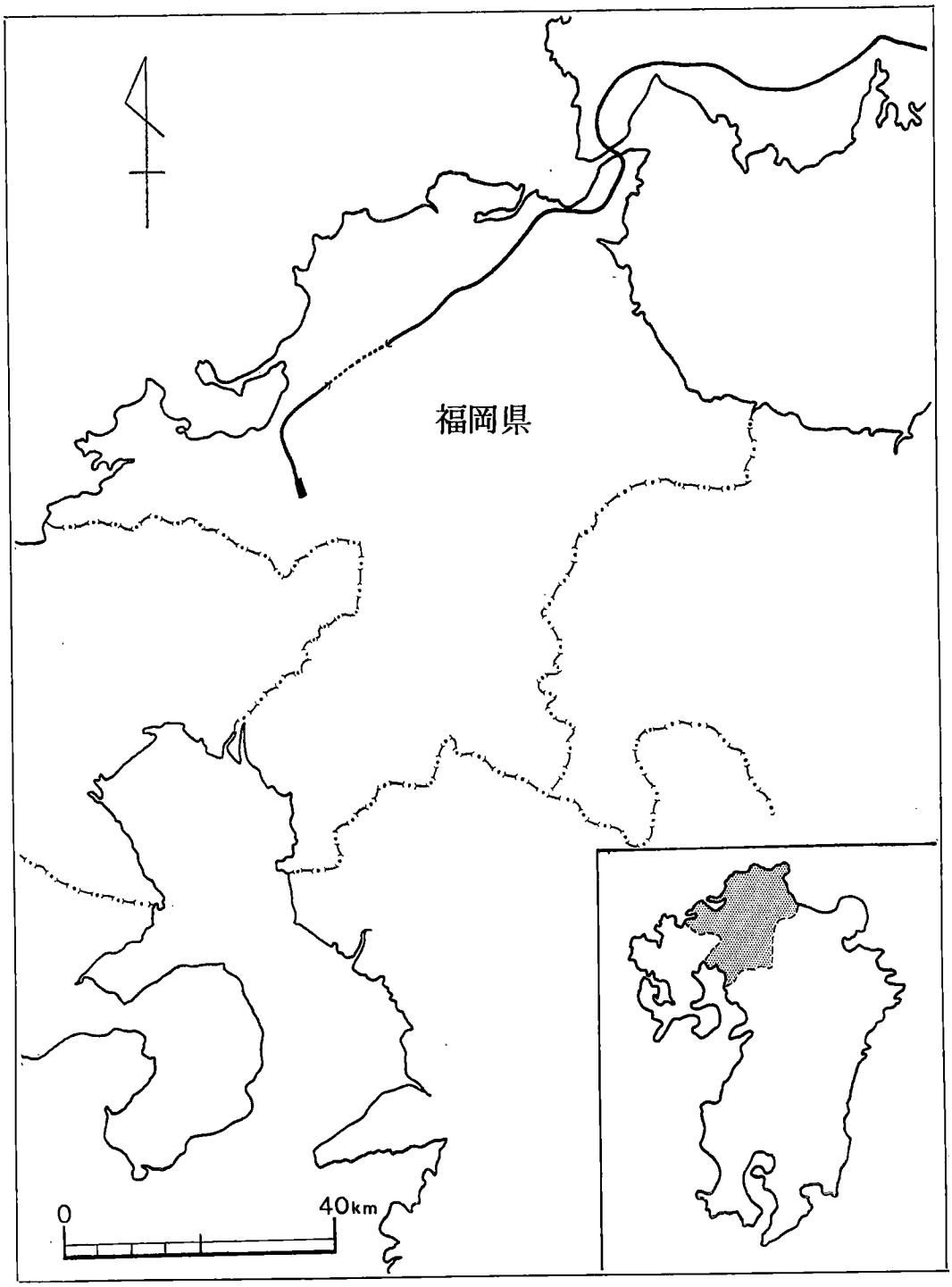
１次調査により，本遺跡が縄文時代・古墳時代・歴史時代にわたる重要遺跡であることが確認され，さらに遺跡は拡大することが明らかになった。従って，側道敷として建設が予定されている地区にも拡がるため，追加第18―１地点として調査をすることになった。しかし，調査は用地買収の遅れからやっと２月に開始できる状態であったため，さらに，縄文時代の重要遺跡であることから，別府大学文学部考古学研究室の協力を得て実施した。また，遺跡の生活環境復原を目的として，５月22日～26日には遺物包含層・遺構内の土壌を対象とした花粉分析調査を安田喜憲氏，プラントオパール分析調査を藤原宏志氏，出土炭化材の分析調査を西田正規氏に協力いただき実施した。当初より予想されたように縄文時代の竪穴住居跡５・溝状遺構１・Ｖ字溝１・炉跡１等の検出とともに多量の土器・石器類が発見され多くの成果を得た。これで，１次調査で発見された住居跡１軒と併せて計６軒を確認できたことになる。これにより，縄文時代の遺跡は，従来，水田面という低地での立地は想定されなかったものであり，今後の調査の方向を明らかに，低地まで向ける必要性がでてきたことを示す重要な調査であったといえる。とりわけ，九州における縄文時代の竪穴住居跡の発見は極めて少なく，且つ住居跡群を形成する例は皆無に近いことから本遺跡で発見された６軒の住居跡は，今後の集落研究に欠くことのできない貴重な資料といえよう。　（井上裕弘）

調査団の編成は以下の通りである。

総括	福岡県教育委員会	教育長	森田　實
	同	管理部長	西村太郎
	同	文化課課長	森　英俊
	同	同	藤井　功
	同	文化課課長補佐	菅　隆
	同	同	今井岩男
	同	同	平井元治
	同	同	野上　保
	同	同	川崎隆夫
庶務担当者	福岡県教育委員会文化課	主事	植田　實
	同	同	加藤俊一

	同	同	瀧　龍二
	同	嘱託	吉村源七
調査担当者	別府大学文学部	教授	賀川光夫
	同	助教授	橘　昌信
	宮崎大学農学部	助教授	藤原宏志
	近畿大学医学部	助手	西田正規
	広島大学総合科学部	助手	安田喜憲
	福岡県教育委員会文化課	調査係長	松岡　史
	同	技術主査	栗原和彦
	同	技師	井上裕弘
	同	同	馬田弘稔
	同	同	小池史哲
	同	嘱託	宮崎貴夫
調査補助員			市川富久
			織笠　昭
			川道　寛
			稲富裕和
			藤瀬禎博
			富永直樹
			三村修次
			若月省吾
			高田弘信
調査協力者			前田軍治
			前田恵美子
			合志幸子

また，発掘作業には春日市・那珂川町在住各位の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

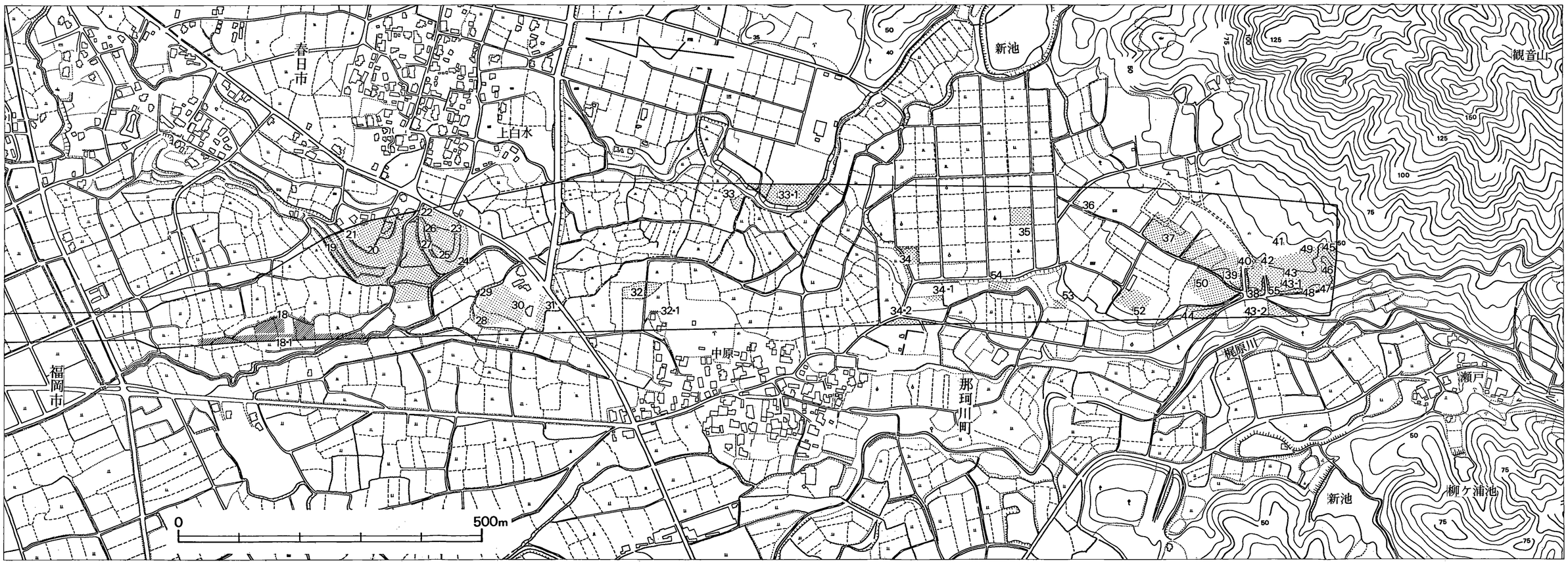


第 1 図　山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置 (1/1,000,000)

表 1　山陽新幹線関係遺跡一覧表

地点番号	遺跡名	所在地	内容	調査終了面積 46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	51年度	備考
				m²	m²	m²	m²	m²	m²	
3	小田山墓地	鞍手郡鞍手町中山	近世墓地		—					
4	下松尾墓地	〃 〃 〃	近世墓地		—					
5	京尾遺跡	〃 〃 室木	中世配石遺構		—					
6	若宮条里	〃 若宮町	条里遺構		229					
6—0		〃 〃 金丸	近世墓地			—				調査前に工事のため改葬。
6—1	田尻遺跡	〃 〃 金丸・水原	古墳・歴史時代：住居跡		2,035		3,000			
6—2	別当塚	〃 〃 竹原	古墳		146					遺構・遺物なし。
6—3	八幡塚	〃 〃 〃	古墳		16			300		
7	杉園遺跡	〃 〃 稲光	土師：散布地		—					遺構なし。
8		粕屋郡久山町山田	条里遺構		100					調査の結果条里ではなかった。
18	柏田遺跡	春日市上白水	住居跡8軒・円形遺構・溝状遺構			790				
18—1							2,100	1,000		昭和49年度は，別府大学に一部調査委嘱。
18—2		〃 〃								
19～27及び周辺	門田遺跡	〃 〃				7,170	9,700	4,570		昭和48年度に，門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱。
28～31	下原遺跡	〃 〃	古墳時代：住居跡	2,784						
32	油田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地		690					
32—1	〃	〃 〃 〃	古墳時代：甕棺墓				300			
32—2	久保遺跡	〃 〃 〃							700	
33		春日市上白水	古墳時代：散布地			197				
33—1	原古墳群	〃 〃 〃	円墳3基・周溝墓8基・土壙墓4基			1,725	800	400		
	原遺跡		縄文時代早期・弥生時代甕棺墓							一部保存。
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代：散布地		135					遺構・遺物なし。
34—1	鳥ノ巣遺跡	〃 〃 〃	先土器・縄文時代：散布地		267					
34—2						288				別府大学に調査委嘱。
35		〃 〃 〃	中世：散布地			200				
36		〃 〃 〃	近世：道標(かんのん道)			—				
37,39 50,55	井手ノ原遺跡	〃 〃 〃	中世：方形区画遺構・溝状遺構	1,814	1,515	1,500				
38，40～43 45～49 49-1～4,51	観音山古墳群 中原支群	〃 〃 〃	古墳31基	707	6,400	220				
43—1	深原遺跡	〃 〃 〃	縄文時代：石組炉跡32基・円形竪穴遺構		1,840	2,540				昭和47年度は，別府大学に一部調査委嘱。
43—2						140				
46—1									1,021	
44		〃 〃 〃	中世：散布地		271					
52		〃 〃 〃	中世：散布地		452					
53		〃 〃 〃	古墳時代：散布地		123					遺構なし。
54		〃 〃 〃	弥生・古墳時代：散布地		150					
54—1		〃 〃 〃	古墳時代：散布地			95				
合計				5,305	14,369	14,829	15,900	6,270	1,721	

註1　面積欄に—で示したものは調査面積としてあげてないが当該年度に調査したことを示す。
2　路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は左表に含めてある。
3　地点番号1・2は北九州市教育委員会、9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。



第2図　山陽新幹線博多総合車輌基地付近地形図及び遺跡位置図（1/5000）

第3図　柏田遺跡全体図　(1/1000)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

柏田遺跡は，福岡県春日市上白水字柏田（カシワダ）に所在し，広大な山陽新幹線博多総合車輌基地の北東隅にあたり，那珂川右岸の水田面に位置する。那珂川は，佐賀県との境をなす背振山（1,055.2m）に源を発する，全長約25kmの一級河川である。九千部山（847.5m）に源を発する大谷川や下代久事川等の水を集めて，市ノ瀬・不入道の急流を下り，西隈付近で，片縄山（292.6m）塊と牛頸山（448m）塊による狭い谷を抜けると川幅を広げ平野部を形成しながら博多湾に注ぐ。

一方，背振山塊の一部であり，花崗岩によってなる牛頸山塊からは，梶原川が流れる。梶原川は，花崗岩を浸蝕した土砂を運び，瀬戸の谷を抜けると，その両側に土砂を堆積させ，段丘面を拡げる。このような活動は，牛頸山の北方に延びる春日丘陵から派生する小河川にもみられ，那珂川の右岸は3段の丘をなしながらも肥沃な幅広い沖積地をなす。

柏田遺跡は，このような那珂川の低位段丘上に立地し，観音山塊（169m）の東から北上して那珂川に注ぐ小河川右岸に位置する。

付図1は柏田遺跡周辺地域の微地形図である。これによると，柏田遺跡の西側を流れる小河川は，遺跡の東側を流れたこともあり，扇状地を呈しながらも小さな自然堤防を形成することを知る。標高21m前後の狭長な微高地とこの東側にみられる低湿な水田が，自然堤防上と後背湿地を示す。柏田遺跡はこの自然堤防に立地するのである。

この地域においては，従来水田面という低地での遺跡立地は想定されることはなく，主に弥生時代の集落及び墓地の立地する台地上に主眼がおかれており，柏田遺跡も当初は土師器の散布地として取り扱われていたにとどまる。また福岡平野部においては縄文時代遺跡・遺物の発見もそれほど顕著ではなく，弥生時代以降の遺跡調査によって副次的な遺物出土をみるに留まっていた。

このような低地遺跡の存在を知ることによって，この地域では水田面等の低地にも視点がおかれるようになり，最近では縄文時代の遺跡の新たな発見も増加している。

柏田遺跡周辺での遺跡の分布については，既に紹介されているので（註1）最近の増加例も含めて縄文時代のみを取り扱う（第4図）。

付近の縄文時代遺跡の分布は，那珂川流域・牛頸川流域にみられるが，殊に那珂川右岸の梶原川沿いに集中する。これはこの地域の分布調査が他の地域より密であったことにも起因するとみられるが，この地域の主な遺跡を概観する。

6. **弥永遺跡**　柏田遺跡の北方約800mの標高18m位の微高地に立地する。山陽新幹線本線建

設に伴う福岡市教育委員会の発掘調査（1972年3月～8月）により縄文時代晩期の遺物の出土がみられ，正式報告されている（註3）。

7. **地余遺跡**　那珂川の河岸段丘上の標高21m位の梶原川右岸微高地にある。柏田遺跡の西方約300mである。大規模宅地造成工事に伴う東京教育大学の発掘調査（1975年9月）で縄文時代晩期の凸帯文土器等が出土した。

8. **宗石遺跡**　梶原川の右岸河岸段丘上の微高地で自然堤防を形成する標高22m位に立地する。柏田遺跡の西南西約600mである。那珂川町区画整事理業に伴う那珂川町教育委員会の発掘調査(1977月1月)で縄文時代後期後葉三万田式土器・スクレイパー等の出土がみられた(註4)。

9. **中原遺跡**　梶原川右岸の標高25m位の河岸段丘上に立地する。柏田遺跡の南西方550mである。那珂川町区画整理事業に伴う那珂川町教育委員会の発掘調査（1974年11月）で縄文時代前期前半及び晩期前半の土器が出土した。（既に安徳中原遺跡と記したことがある（註1）。安徳中原地区区画整理事業名から使用したが不適当であり中原遺跡とした。）（註5）。

10. **松ノ木遺跡**　梶原川の左岸で，那珂川との間に挟まれた段丘先端部標高24mに立地する。宗石遺跡の南方250mである。那珂川町区画整理事業に伴う那珂川町教育委員会の発掘調査（1976年2月）では縄文時代晩期中～後半の土器片多数と南福寺式土器の出土がみられた。

12. **鳥ノ巣遺跡第3地点**　梶原川右岸段丘上の標高29m位に立地する。柏田遺跡の南方約1,200mである。やや広い段丘上に後晩期に属するとみられる土器片及び石鏃の散布がある（註6）。

13. **深原遺跡**　観音山山麓の傾斜変換点付近の扇状台地に立地し，柏田遺跡南方に1,800mを測る。山陽新幹線車輛基地建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1973年8月，1976年8月）により，縄文時代早期～晩期にわたる遺物が出土しており，早期の石組炉が多数確認された。集落を形成する遺跡であり，詳細は正式報告の予定である(註7)。

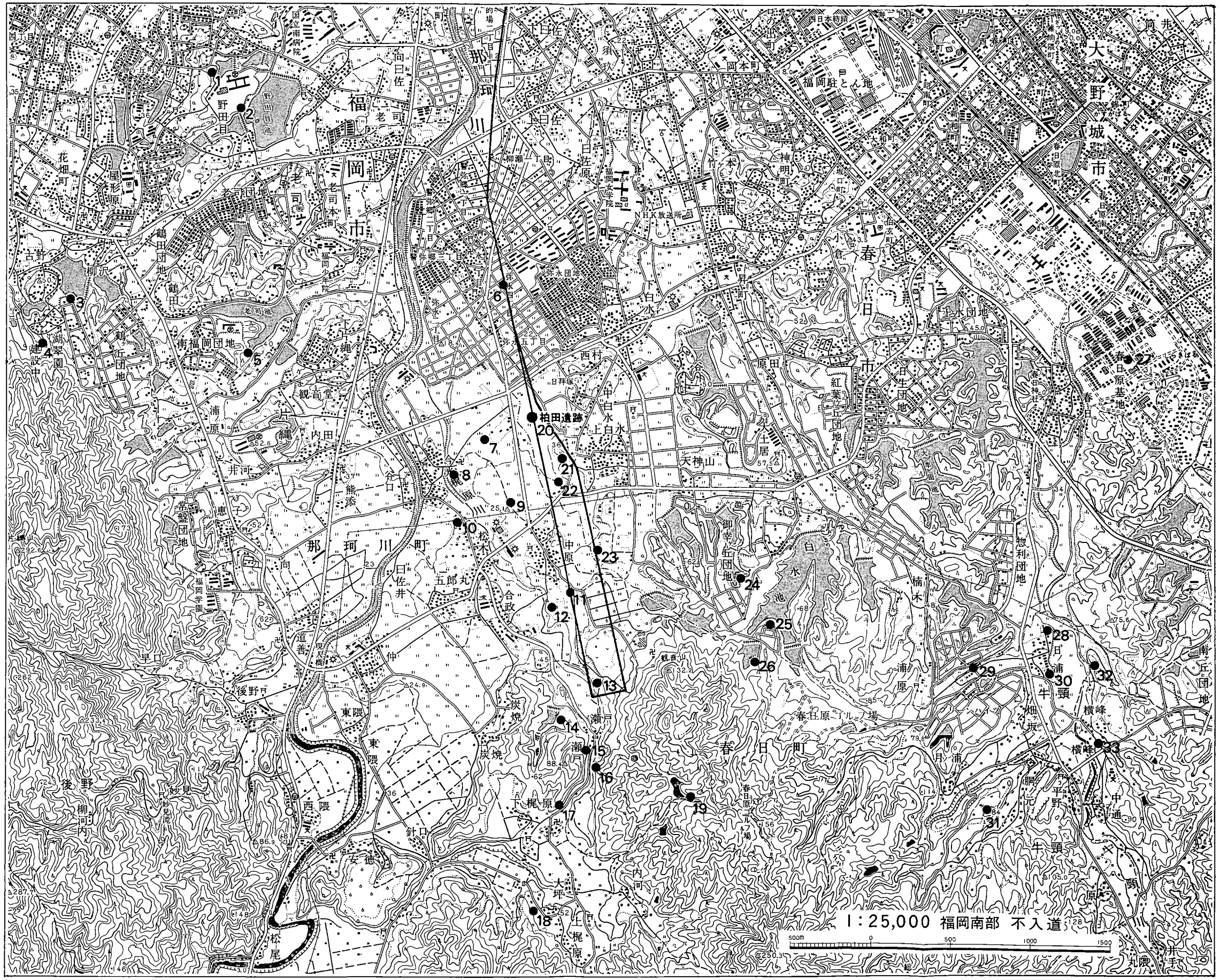
21. **門田遺跡**　那珂川の中位段丘とそれを刻む谷部に位置する。柏田遺跡の南東250mである。山陽新幹線車輛基地建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1972年7月～1975年10月）で谷部において，縄文時代早期・晩期の出土がみられた。詳細は正式報告の予定である(註6)。

22. **下原遺跡**　柏田遺跡の西側を流れる小河川の上流約350mにあり，門田遺跡の西約200mである。山陽新幹線車輛基地建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1971月11月）で縄文時代前期前半の土器が出土している。詳細は本報告第3集に譲る(註9)。

23. **原遺跡**　柏田遺跡横の小河川の上流約800mの那珂川中位段丘上に立地する。山陽新幹線車輛基地側道建設に伴う発掘調査（1973月8月～1976年3月）により縄文時代早期の石組炉跡が5基確認された。詳細は正式報告の予定である(註10)。

このように那珂川右岸の河岸段丘上にあって梶原川の流域をなす地域は縄文時代の遺跡が比較的密集しているのである。

柏田遺跡はこのような分布範囲のほぼ北端のすなわち下流域に位置し，自然堤防上に立地す



第4図　春日・那珂川地区縄文時代遺跡分布図（福岡南部・不入道 1/25000）

ることから，低地性の自然条件への適応を考える上に重要な遺跡であるといえよう。

現況では，新幹線建設や道路建設及び宅地造成等の開発の進行している地域であり，当時の自然景観は著しく変貌させられている。当時の生活環境を復原していくことが，我々に課せられた責務であることはいうまでもない。　（小池史哲）

表2　春日・那珂川地区縄文時代遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	遺構	出土遺物	註
1	浦の池	福岡市南区野多目浦の池	池畔	後期	包含層	土器	2
2	野多目池	〃　野多目池	〃	〃	〃	〃，石鏃，石斧，掻器	2
3	箱の池	〃　柏原・古野	〃	早・後期	〃	〃，〃，〃，石匙	2
4	大牟田	〃　大牟田	丘陵谷	前・晩期	散布地	土器	2
5	老司池	〃　老司・老司池	池畔	前期	〃	〃，石鏃	2
6	弥永	〃　弥永町4丁目	微高地	後・晩期	包含地	〃，〃，掻器，石錘	3
7	地余	那珂川町今光・地余	段丘	晩期	〃	夜臼式土器	
8	宗石	〃　・宗石	微高地	後期	〃	三万田式土器	5
9	中原	〃　中原	段丘	晩期	〃	晩期精製土器	4
10	松ノ木	〃　松ノ木・瀬戸口	〃	後・晩期	〃	南福寺式，黒川式土器	
11	鳥ノ巣第2地点	〃　中原・鳥ノ巣	丘陵	早・後晩期	pit群	押型文，土器，石匙	7
12	鳥ノ巣第3地点	〃　〃　〃	〃		散布地	〃	
13	深原	〃　中原・深原	扇状地	早～晩期	石組炉 円形竪穴遺構	押型文・石器多数	
14	瀬戸第1地点	〃　松ノ木・瀬戸	丘陵	後・晩期	散布地	条痕文土器	1
15	〃　第2地点	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	1
16	〃　第3地点	〃　〃　〃	〃	早期	包含地	押型文土器	1
17	〃　第4地点	〃　〃　〃	〃	〃	〃	〃	1
18	大坪	〃　上梶原・大坪	〃		散布地	石鏃	1
19	内河	〃　〃　内河	〃		〃	土器，黒曜石製石鏃	1
20	柏田	春日市上白水・柏田	微高地	後・晩期	住居跡6軒円形遺構	北久根山，夜臼式土器，石鏃，石斧，つまみ形石器	7・8
21	門田	〃　〃　・門田	台地・谷	早・前・後期	包含地	爪形文土器，石鏃，石斧，スクレイパー	8
22	下原	〃　〃　・下原	段丘			曽畑式土器	9
23	原	〃　〃　・原	台地	早期	石組炉	押型文土器	10
24	ヒシャテガ池	〃　〃　・ヒシャテガ池	池畔		散布地	石匙	11
25	白水池	〃　〃　大堤	〃	早・前・後期	〃	押型文，曽畑，西平式土器，石匙	11
26	東浦池	〃　〃　東浦池	〃	早期	〃	押型文土器	11
27	春日原基地内	〃　春日原基地内	台地	晩期	〃	土器，石器	12
28	日ノ浦	大野城市牛頸・日ノ浦	丘陵		〃	石鏃	13
29	下ノ原	〃　〃　下ノ原	微高地		〃	〃	13
30	塚原	〃　〃　塚原	〃		〃	〃	13
31	胴ノ元	〃　〃　胴ノ元	丘陵		〃		13
32	花無尾	〃　〃　花無尾	〃		〃	石鏃	13
33	横峰	〃　〃　横峰	〃		〃		13

註1　鷲久嗣郎他編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」1　福岡県教育委員会　1976
2　福岡市教育委員会編「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』12 1971
3　塩屋勝利・折尾学編「山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』32 1973
4　新原正典氏教示
5　森田勉氏教示
6　1975年福岡県教育委員会実査
7　柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」　福岡県教育委員会　1975
8　小池史哲編「昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」　福岡県教育委員会　1976
9　井上裕弘編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」3　福岡県教育委員会　1977
10　木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」　福岡県教育委員会　1975
11　亀井勇氏教示
12　中原志外顕・渡辺正気「福岡県筑紫郡春日町米軍板付基地内出土の縄文土器」『九州考古学』10 1960
13　福岡県教育委員会文化課「大野城市遺跡分布図」　1973

Ⅲ　層　　序

1.　B列の層序（付図4）

第1次の調査区は，北から南方向に伸びる沖積低丘陵上に開田された標高20.80～21.60mの5枚の水田にわたっている。しかし，当初の調査区は，軌道中心線上に位置する標高21.50～21.60mの一枚の水田をその軌道幅20mのみとし，土層断面図は，その中軸線上を南北方向に作成した（付図4）。その後，その北西部で落ち込みが検出され，またその中央部で縄文期の円形竪穴住居跡・同土壙が検出されるに及んで，南側に拡張区を設定した。付図4に示した土層図はその旧河川状遺構の東西方向横断面の一部である。なお，竪穴住居跡（第1号住居跡）に関しては，第3層の下部から掘り込まれているが，その上層では，奈良期の瓦片が出土しており，遺物の出土状態からは明らかに2つの層に分離すべきであるが，発掘時では明瞭に区分されなかった。同様に1号土壙も遺物は第3層下部からまとまりのある範囲で出土したが，その掘り込みは第4層に至って明確に区別された。しかし，この出土状態からしても第3層は少なくとも2層に分かれることになるが，旧河川状遺構の埋土状態から，最終的には，3層に分か

れるものであることが言える。付図4の1と付図4の2により，発掘時第3層と一括したものが，流入再堆積土層として2区分されるべきであった為である。以下その各土層について補足していく。

第1層：　現水田耕作土（褐色土層）

第2層：　現水田床土（褐色土層）にマンガン粒を含み，深耕によって波状を呈し，また一部認められない箇所もある。

第3層上層：　付図4の2の旧河川状遺構の最上部埋土層で，黒色砂層。

第3層中層：　付図4の1の奈良期の瓦片を包含する土層で，旧河川状遺構内へと続く。これによってその旧河川の下部の流域肩が一度埋没したことになろう。黒色砂層。

第3層下層：　縄文期遺物出土層で住居跡や土壙はこの沖積土層によって形成された低丘陵上に掘り込まれており，この層の流失土が第3層の上・中層となったものである。

第4層：　灰褐色粘土層（無遺物層）

第5層：　茶褐色土層　（　〃　）

第6層：　青色粘土層　（　〃　）

第7層：　黒色粘土層　（　〃　）

第8層：　黒褐色砂層　（　〃　）

第9層：　橙褐色砂層　（遺物包含層）

第10層：　黒色粘土層　（　〃　）

第8層には土師器が包含され，多量の出土があった。第9層にも土師器は多少出土するが，縄文土器片が多少と木器が出土している。第10層には明らかな木器は出土せず，流木と言える枝木や木根，それに植物種子等が出土している。

第11層：　茶褐色砂層

第12層：　青白色砂層（植物を含む）

第13層：　黒色粘質土層

（馬田弘稔）

2.　C列の層序（付図5）

発掘調査は新幹線本線に沿った道路に伴う事前調査という性格上，東西の幅は限定され，南北は逆に非常に長距離に及ぶ区域となった。従って同層位でも区域の違いによって土質・土色が相違する場合が多かったので，土層図作成には慎重を期した。発掘区全域の西壁を通観し，土質・土色等の相違については出来るだけ留意し記録した。

第1層は耕作土及び水田の床土である。耕作土は砂粒混じりの灰褐色土層。床土は固くしまった黄褐色土層が一般的である。B—9・8・7南半区には全くといって良いほど遺物を含んでおらず，床土も他と比べて薄く，褐色を呈している。これはこの区域が柏田地区では最も高所に位置する故，水田開削等の際，上部を削平し土砂を移動させた為かと思われる。B—6南半区・B—5北半区は調査当時畑地であった。耕作土は他と違い暗黄褐色を呈している。

第2層は黄砂粒混じりの黒褐色土層である。先述したB—9・8・7南半区では，この層も薄いか，殆どない場所が多い。B—7区付近の第2層はいくぶん粘質度が強い。B—7北半区以北は他と若干異なり，黄砂粒混じりの褐色土層となる。V字溝の部分は砂粒少なく，やや黒味がちの褐色土層となる。以上述べた第1・2層は古墳時代以降の遺物を多く含んでいる。

第3層もB—9・8・7南半区にはみられず，又，B—5・B—4境界付近から様相を異にする。B—7北半区以北からB—5区にかけてはやや粘質の暗黒褐色土層である。B—4区以北は褐色土の混在する黒褐色土層でやや粘質を帯びている。V字溝第2層はそれよりも黒っぽくなり有機質土層となっている（註1）。第3層には主に縄文時代晩期の遺物を包含している。

第4層は粘土質の褐色土層である。部分的には砂粒を含んでいる。遺物は主に縄文時代後期のものを包含している。

第5層は粘質の黒色腐植土層である（註2）。縄文時代溝状遺構にだけみられる層位である。溝では最も厚い堆積を示している。遺物は縄文時代中～後期のものを含んでいた。

第6層はF・G—2区以北にみられる溝の堆積土層である。土質は第5層とほぼ同じであるが，若干の砂粒を含み褐色度が強い。又，溝底付近には砂粒を含まず粘質土の強い堆積もみられた。遺物は第5層と同様である。

いわゆる地山は黄砂の粒子を含む粘土質の褐色土層が一般的である。部分的に，卵黄色土層・暗褐色土層もみられた。（藤瀬禎博）

註1　縄文時代晩期V字溝の第3層以下についてはV—1で詳述するので参照されたい。

2　縄文時代の溝状遺構についてはV—1で詳述するのでここでは素描だけに留めた。

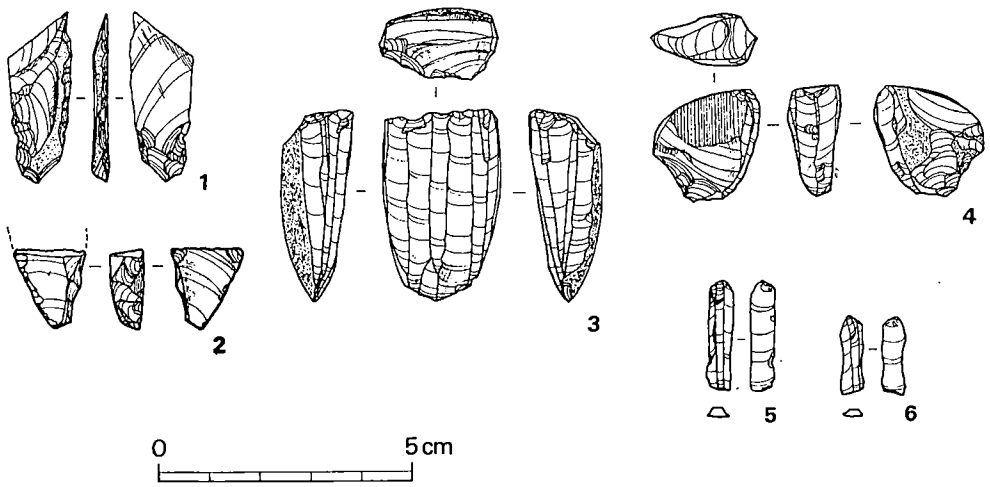
Ⅳ　先土器時代の遺物

本遺跡から出土した先土器時代の遺物は，第5図に示した6点である。すべて明確な文化層から出土したのではなく，後世の遺構や生活面から出土したものである。（表3参照）

1・2はナイフ形石器で共に黒曜石製。1は形態的には切出し形ナイフに属し，幅広の扁平な刃器状剥片を素材としている。剥片の末端部を斜めに主要剥離面からの急斜なブランティング加工によって切断し，バルブ部を予め思惟的に切断した後，半ばまでリタッチを加えて整形

している。刃部は剝片時の鋭い縁辺をそのまま残しており，使用痕と目される細かな刃こぼれが観察される。背面右側には自然面が残され，剝片末端部利用を証左している。本例は，いわゆるカッティング（切り裂く）としての機能を有していたであろう。しかしながらパティナが，他と較べて新しく，しかも縄文時代後期の石器群に本例と類似したブランティング的加工を施した，石器も若干見受けられ，多少疑問が残るナイフ形石器である。

3・4は黒曜石製の細石刃核であるが，形態的・技術的に著しい差異を呈している，3は半円錐形を示し，背部全面に自然面を残す。細石刃剝離作業面は4分の3周を占め，12本の細石刃を剝取した面が残されている。径5～6cm位の円礫を半割し，それを素材として側面を調整することなく，打面主軸方向に打面を形成して連続的に細石刃を剝取している。現打面と作業面のなす角度はほぼ70度を測り，技術的に最も理想的な角度で細石刃剝離を行なっている。頭部微調整が著しく，1回剝取する毎に調整している。残された現作業面を観察する限りにおいては，右から左へ剝取した後，左から右へ逆戻りに剝取している。従って最も両側から剝取された細石刃は片側に自然面を残すものであり，それは使用されずに破棄されたものと考えられ



第5図　先土器時代の遺物（⅔）

表3　先土器時代遺物計測表　（単位mm・g）

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考	
1	KKN—1	B2—11	4層	黒曜石	33.5	15	3.5	1.35	ナイフ形石器	完形
2	KKF—7	A10	1層	〃	(15.2)	(14.0)	6.3	(1.05)	〃	基部
3	KKMC—2	B4	1層	〃	37	24	14	3.95	細石刃核	完形
4	KKMC—1	B10—15	3層	〃	21.5	21	10.5	13.1	〃	完形
5	2次S—201	3号住		〃	21.3	4.9	1.9	0.2	細石刃	完形
6	1次S—486	B5		〃	15.3	4.7	1.6	0.1	〃	完形

る。本例は細石刃剝離が可成り進行したもので，多くの細石刃を量産したものと思われる。堂崎遺跡に類似（註１）が知られる。４は半舟底形を呈し，小円礫を２・３分割した自然面を残す円板状の剝片を素材とする。打面形成は細石刃剝離作業面側から背部に向かって行なわれており，平坦である。特別な打面調整はなされていない。両側面は下縁ないしは上方から側面調整されているが打面作出前に行なわれており，致って簡単に半両面加工のブランクを作っている。５面の細石刃剝離痕が観察され，規則的な剝離順方向はなかったようである。細石刃剝離作業面幅が素材により自ら制約されている為，細石刃剝離数は３ほど多くない。現打面と作業面のなす角度は約90度を測る。頭部微調整も３同様顕著である。なお，左側面の主要剝離面にはローリングに拠る磨滅・擦痕が不規則に見られる。

５・６は細石刃で非常に整っている。５は細石核と比べて風化が進んでいる。６は末端を僅かに欠損するが，意識的に折断された（註２）ものかも知れない。両側辺には錯向状に微細なリタッチが観察される。共に黒曜石製。

当該遺跡出土の先土器時代遺物は，前述した如く，再堆積であり，他からの流れ込みと考えられる。従って，これら総てが同一時期の所産かどうか時期決定に明確さを欠く。しかも，当該遺跡内に遺物としての痕跡は残されているものの居住していたとは考えられない。しからば何処から流れ込んだものか。当該遺跡の南東背後の春日丘陵上に門田遺跡（註３）が所在し，そこから先土器時代の細石刃・細石刃核が多量に出土しており，生活面が捉えられている。柏田遺跡と門田遺跡とは指呼の間と離れていず，本遺跡出土の遺物は門田遺跡からの流れ込みと考えた方が無難である。しかも第５図の４の半舟底形細石核は門田遺跡出土のそれと，形態的・技術的に極めて類似性を示し（註４）先述の流れ込みを裏付けるものであろう。本遺跡の第７層以下を形成する地山は幾度も繰り返された那珂川の氾濫原で，その際に門田遺跡から流れ込んだものが，後世の遺構掘り込みによって再遊離したものと考えられる。　　（富永直樹）

註１　正林護他「堂崎遺跡」『長崎県文化財調査報告』10 1971　本書第８図⑳の半円錐形細石核である。

２　細石刃の使用には２～３分割して利用することが指摘されている。杉原荘介・小野真一「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』３－２　1965

３　木下修「門田遺跡の調査(1)(a)先土器・縄文時代の調査」『昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』　1975　同「第19～27地点（門田遺跡）の調査(1)(a)先土器・縄文時代の調査」『昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』福岡県教育委員会　1975

４　木下修「門田遺跡」『日本の旧石器文化３』雄山閣　1976　所収本論文中の第４図１～５

V　縄文時代の遺構と遺物

1. 遺　　構

遺跡は，既に工事に着工していた部分もあり，また遺物包含層が予想外の方向に延びたこと等により，3次にわたって発掘調査された。

調査方法はトレンチとグリッド発掘を併用したが，グリッド調査も，車輛基地側道用地内の幅7～8m，長さ280mという狭長な部分がほとんどで長大なトレンチと同様な状況であった。

調査により，遺跡の東端及び南北両端がほぼ確認されたが，縄文時代住居跡群を含む遺構の全貌，及び西端については確認できなかった。

確認された遺構は，縄文時代住居跡6軒・土壙3・溝状遺構・炉跡・V字溝でA6・B1～B7区に検出された。このうちB4～B7区等では古墳時代・歴史時代に属する遺構も重複し，無数のPit群もみられた。この他の地区には縄文時代の遺物の出土も少なく，B11～B14区に至っては生活の痕跡を認める遺構は全くみとめられなかった。

(1) 住居跡

縄文時代の住居跡は6軒が確認された（1～6号住居跡で，7・8号住居跡は古墳時代の構築によるものである）。全て竪穴式の住居跡であり，これらは縄文時代後期の遺物包含層である第4層の黒色砂層中，または4層下面にみられた。住居跡の分布は，A6区・B5区・B6区にわたり，発掘調査区域外にも及ぶと推定される。住居跡の構築される地区の地山は，黒色系の色調を呈す砂層で，遺物包含層に比して色調が淡く粗い砂粒を含む堅緻な土層である。しかし遺物包含層との境界は，漸染した状態であり，識別には困難であった。住居跡の覆土も遺物包含層と同様である。このため住居跡の輪郭は明瞭に認められず，数次にわたる輪郭確認作業を実施した。住居跡の周壁はこのため本来の壁高より低くなっているとみられる。

2～6号住居跡の発掘にあたっては，住居跡内下部の覆土，床面上の土壌を全て採取した。これらは多量に及ぶため，まず遺跡西側を流れる河川で1mm方眼の網を用いて水洗選別し細砂と粘土を流失させた。この作業により各住居跡及び溝状遺構・V字溝内の土壌を含めてプラスチック製平箱約15箱に減じることができた。この土壌は室内に搬入され，改めて水洗選別が実施された。これによって植物種子・木炭等を摘出したが，細片が多く，比較的大きな破片を選

び植物種子同定・木炭樹種同定の供試資料とした。この結果についてはⅤ—2に報告する。

また，縄文時代の環境復原作業を目的として，6号住居跡の覆土・床面の土壌を採取し，花粉分析の供試資料とした（採取作業は，安田喜憲氏が実施）。この結果についてはⅤ—3に報告する。

（小池史哲）

1号住居跡（図版8，第6図）　第3層黒色土層中に竪穴上縁があり，床面は第4層灰黒色砂混土層に及ぶ，円形竪穴住居跡であり，生活時の床面は竪穴内に数層の厚く敷き固められた砂の上に形成され，柱穴はこの面から下方に深さを異にして掘り込まれ，北寄りの1穴と西寄りの2穴は住居跡中心に向って僅かに傾斜し，他は垂直に掘られている。前者は住居跡形成時の穴と考えられるが，住居跡東半は後の水田経営時に削平され，北東側は最も深く削平され，住居跡の遺構は最終床面には残されず，床に敷き込まれた砂層下に柱穴が見られた事は，竪穴構築後に低地であるため，床に4回に及ぶ敷砂をして湿気を防止した事を物語り，調査時住居跡の壁との間隔が短い事に奇異の念を懐いた事が，調査の進展に伴ない，内部の改装及び柱の建て替えが行われた事が考えられるに至った。

中央部に僅かに北に傾く柱穴が見られ，これには柱の周囲に埋土をした事が明瞭に認められた。この柱穴から西寄りの床面とその上の堆積土中に木炭が集中して遺存した事は，この辺りが炉というか，火所であった事を意味する。本住居跡の最終床上に約10㎝程度の黒色有機土層の堆積があり，大部分の遺物はこの上と床面との間に見出された。

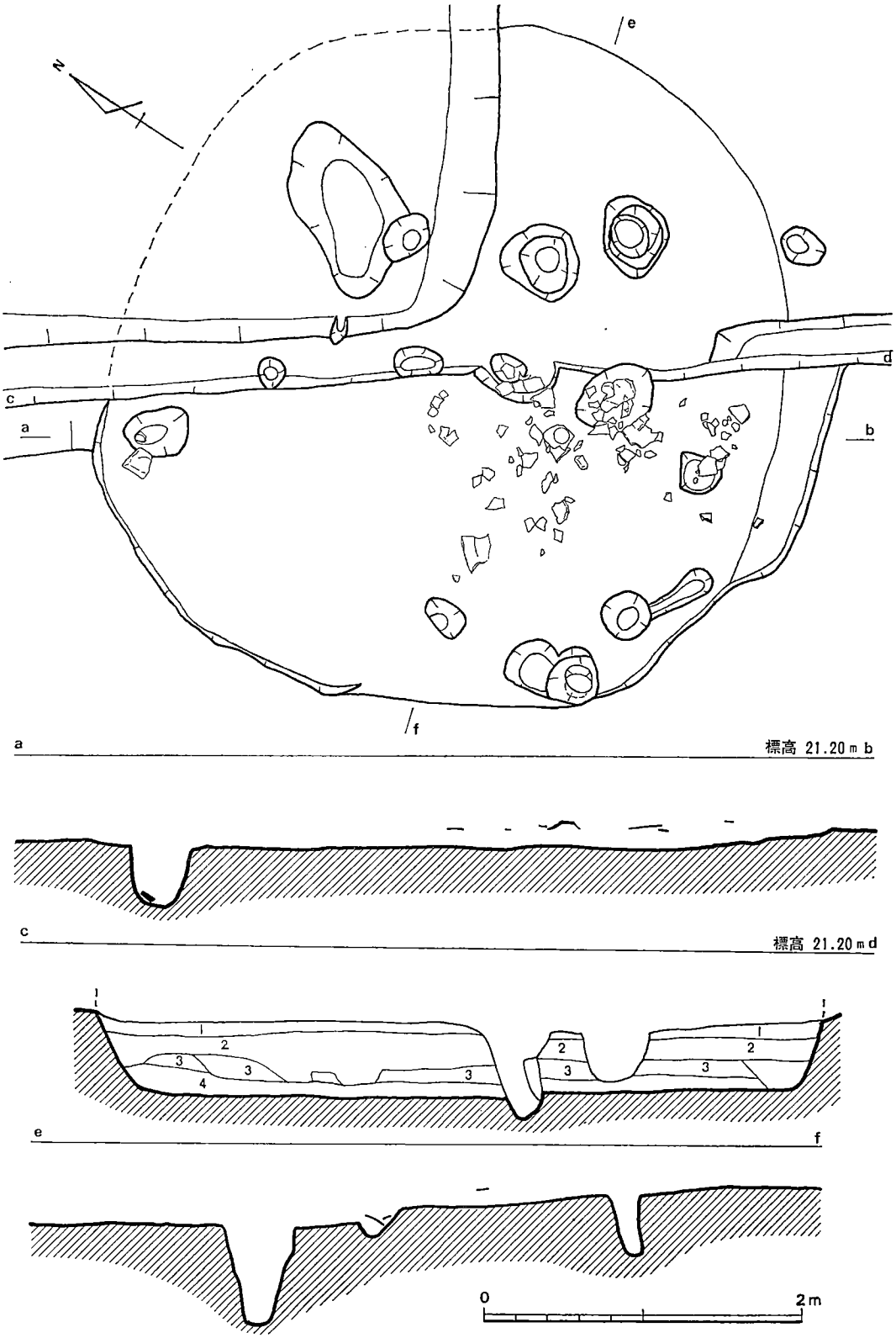
住居始用時から廃棄される期間，即ち生活期間がこの土砂の移入堆積の厚さにより示されるのであり，決して短時間のものであったとは言えないのである。なお本住居跡の西方に土器を主体とする遺物集積坑が見られ，この土器片と住居跡内の土器片の一部は相互に接合できる事が資料整理時に判明した。この事は住居の廃棄時に相方に土器片が投入された事を意味するものである。

（松岡　史）

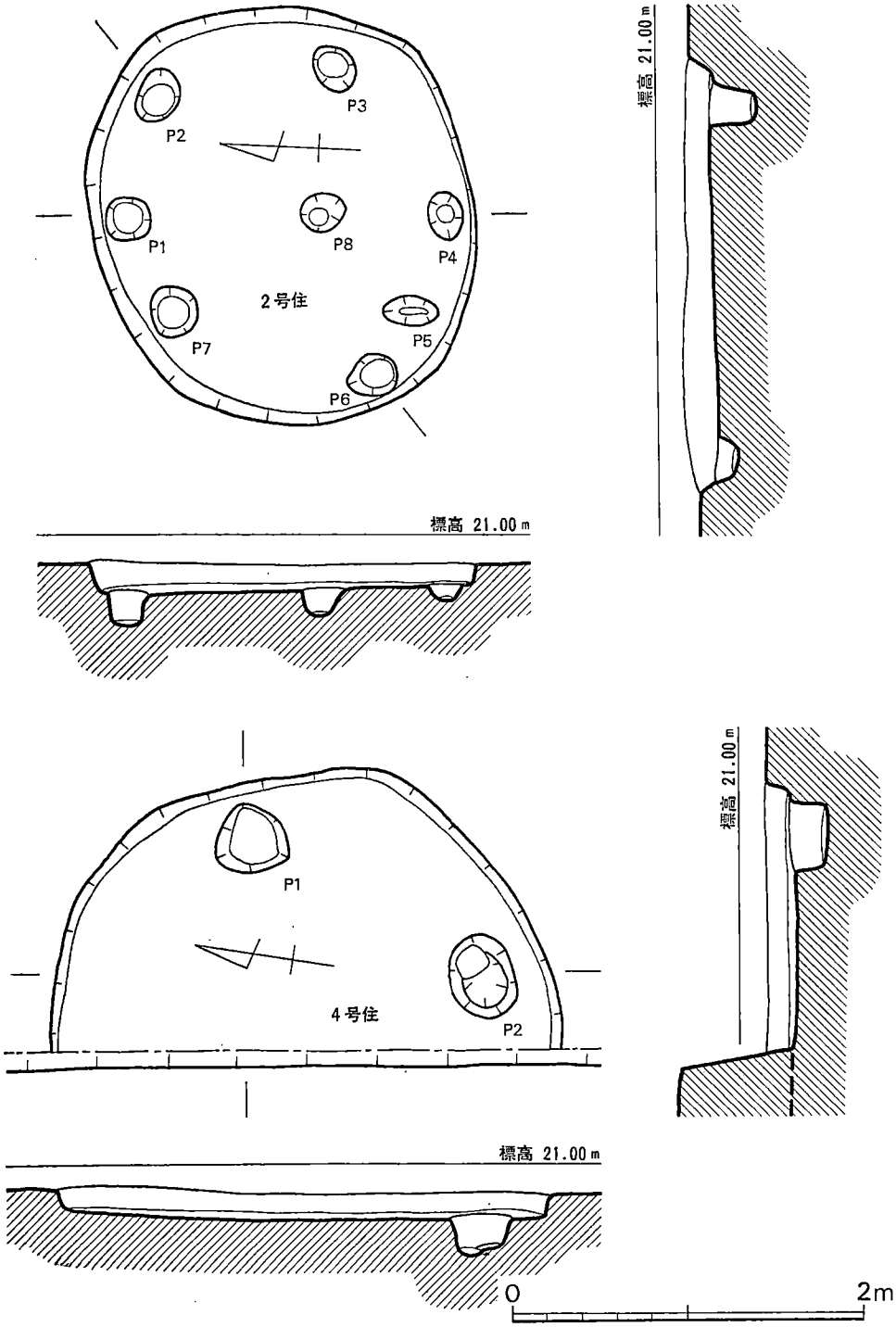
2号住居跡（図版10，第7図）　B5—16区中央部やや北東寄りに位置し，平面形はほぼ円形を呈し，南北2.2m，東西2.4mを測る。周壁は明瞭で，10～20㎝を残す。床面は堅く，炉跡は存在しない。柱穴は周壁に沿って7個と中央部やや南寄りに1個の計8個ある。柱穴の直径は約30㎝で，深さ10～15㎝を測るが北側の3個はやや深い。P1とP2・P5とP4・P5の間隔は狭小であるが，周壁に沿ったP2・P3・P4・P6・P7は約1mの間隔を有している。柱穴を除いた床面の面積は約32m^2である。

この住居跡の覆土はややシルト質を呈すが，有機質の黒色土であり，覆土内からは，第20図52～57の土器を含む1.5㎏の縄文時代後期土器片が出土し，石器では336石鏃，583・823つまみ形石器を含む数点がみられる。また，植物種子断片・木炭等もみられた。

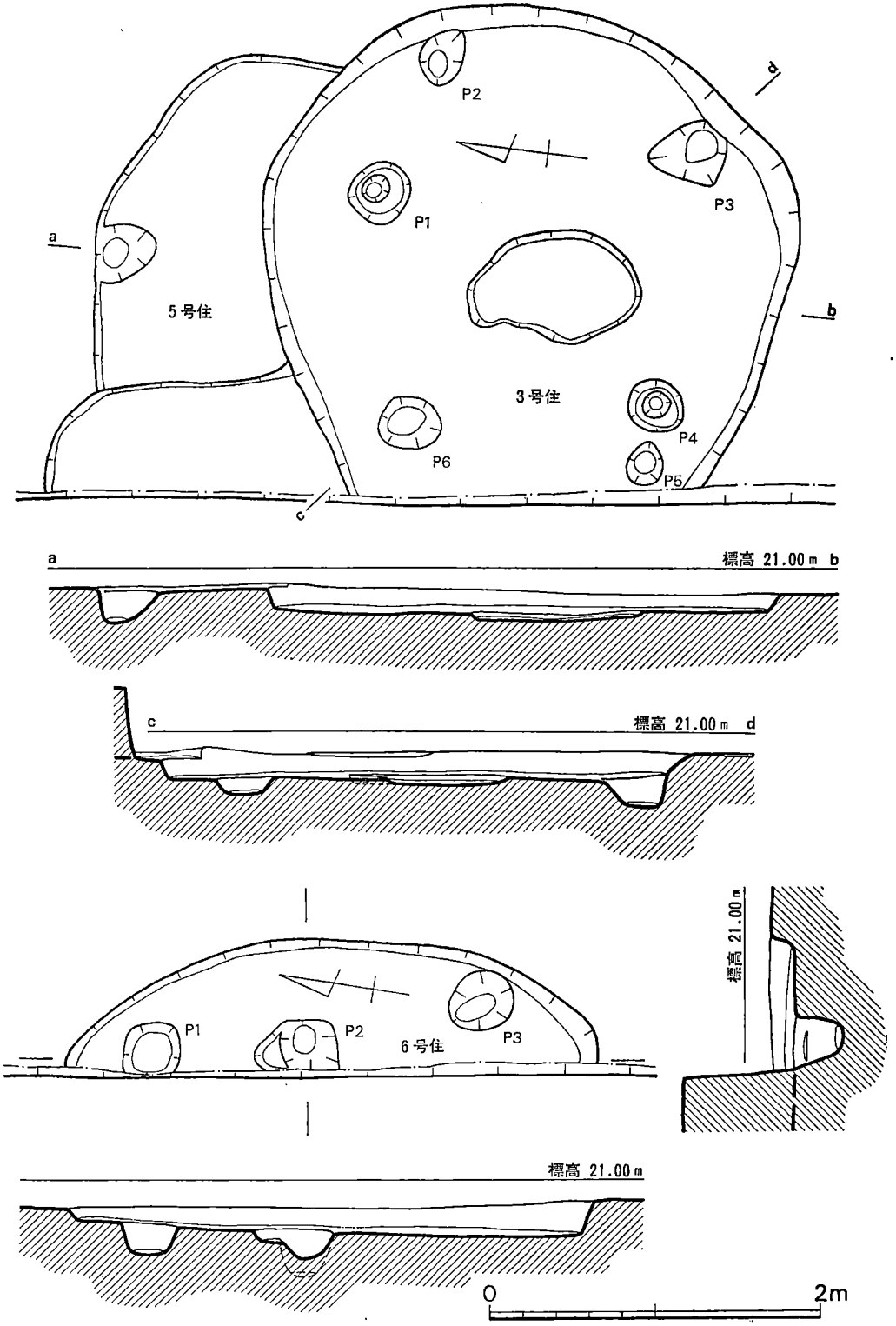
3号住居跡（図版11，第8図）　B6—14区のやや北寄りに位置し，西側の一部は調査区域外に及んでおり未発掘である。平面形は不整円形を呈し，南北3.3m・東西3m+αを測る。



第 6 図　1 号住居跡実測図 (1/40)



第 7 図　2・4 号住居跡実測図 (1/40)



第 8 図　3・5・6 号住居跡実測図（1/40）

周壁は10〜15㎝を残すが，北東部を8号住居跡によって削平される等重複がみられる。床面は堅く，炉跡は明瞭ではないが，中央部には，木炭細片を含む南北1m・東西0.6mの浅い凹みがみられた。

柱穴は周壁に沿って6個みとめられるがP4〜P6は8号住居跡の柱穴である可能性もあり，柱穴の位置からP5は3号住に伴わない可能性が高い。P1とP2間は1mに満たないが，P1—P3—P4—P6—P1はそれぞれ約1.4mを測る。柱穴及び中央部の凹みを除いた床面の面積は5.6㎡＋αである。

この住居跡の覆土は有機質の黒色土で，覆土から，58〜76土器を含む5.5㎏の縄文時代後期土器片と，石器多数・種子・木炭片が出土している。石器は，335石鏃，462・581・587・596・793・794つまみ形石器，1097石錘等である。

なお，北部に重複する5号住居跡よりは新しい構築による住居跡であることが確認されるが両者の土器には特に顕著な差異がみとめられず両者の新旧関係の時期差は極めて短いものと推定される。

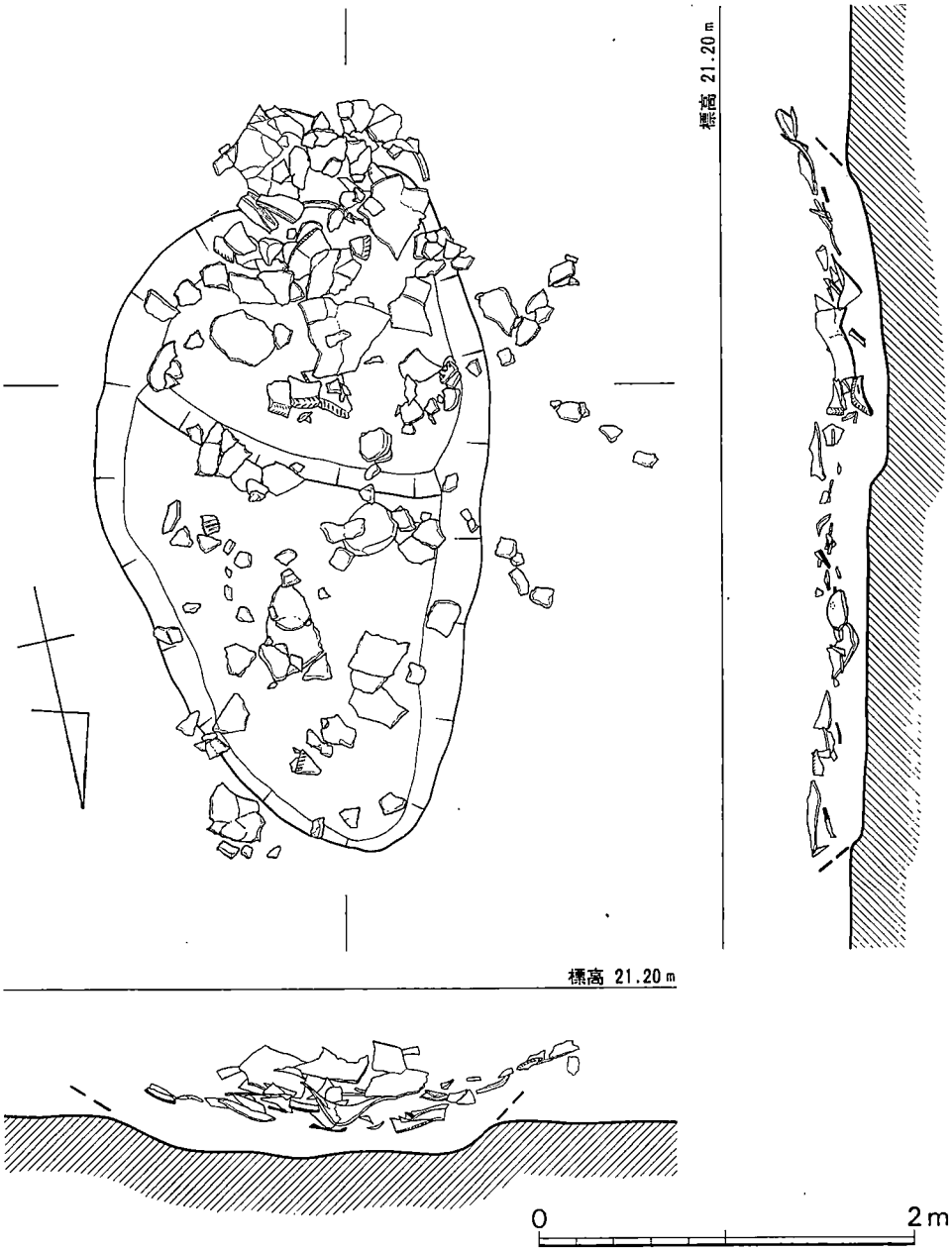
4号住居跡（図版12，第7図）　B6—14区とB6—15区にわたり，西側半分は調査区域外に及び未発掘である。平面形から円形プランと推定される。南北2.9m，東西1.6m＋αを測る。周壁は10〜15㎝を残す。床面は堅緻で炉跡はみとめられない。柱穴は2個確認され，各々直径40㎝，深さ20㎝を測り，P1とP2の間隔は1.4mである。柱穴を除いた床面積は，3.1㎡＋αである。

この住居跡の覆土はシルト質の黒色粘質土で，覆土のやや上位に77〜83土器を含む3㎏の縄文時代後期土器片と，714つまみ形石器を含む，石鏃・刃器・石斧等が出土している。

5号住居跡（図版11—1，第8図）　B6—13区とB6—14区にわたり，西側を8号住居跡に，南側を3号住居跡によって削除されており，平面プランは明確ではないが，残された周壁の曲線から円形ないしは，それに近い形状が推定される。円形プランを想定すれば直径3m程度であろう。周壁は10㎝未満を残す程度で緩傾斜である。柱穴は1個しか検出できず周壁の北端部に接し直径30㎝余り，深さ18㎝を測る。床面は北端部に接し直径30㎝余り，深さ18㎝を測る。床面は堅いが3号住よりやや軟弱で色調も濃い。床面の柱穴を除いた面積は1.2㎡が残される。3号柱の平面輪郭がやや明瞭であり，3号住に貼り床などの施設が認められなかったことにより，3号住よりも先行する構築をみとめる。覆土にみられる土器は3号住同様の土器であり第23図84・85を含む1.5㎏が出土した。また刃器状剝片の出土もみられる。

6号住居跡（図版11—2，第8図）　B5—15区とB5—16区にわたり，発掘区域の西端部に位置するため，そのほとんどが未発掘である。円形またはそれに近い平面形を推定できるが，円形であれば直径4m以上であろう。現状では南北3.2m＋α，東西0.8m＋αが検出される。周壁は15㎝を残す。床面は堅緻で柱穴が3個みられる。柱穴は直径30㎝，深さ20〜30㎝でP1・

Ｐ３に比してＰ２は深い。各柱穴間の距離は約１mを測る。確認される床面積から柱穴を除いた広さは約1.2m^2＋αである。覆土より，第23図86・87の土器を含む0.8kgの縄文時代後期の土器片と刃器状剝片等が出土している。　（小池史哲）



第９図　１号土壙実測図（1/40）

⑵ 土　壙

1号土壙（図版13—1，第9図）

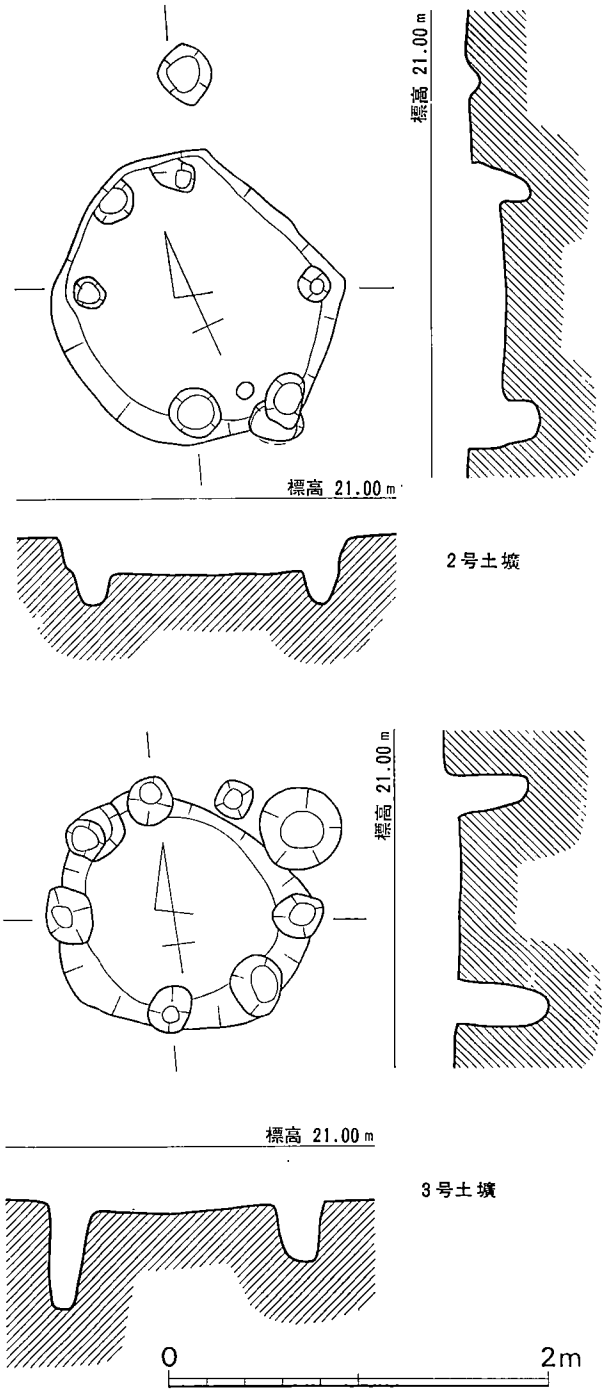
第3層黒色土層中に集中して土器片が出土し始め，その範囲が不整楕円形にまとまりを見せる所から土坑の存在を想い，土色変化によるその輪郭を探ったのであるが，遂に不明のままであった。さらに調査が進み遺物も取り上げた後に第4層基盤の粘土質層に南半が深く北半が稍浅い不整楕円形の坑が認められ，この坑を表面にした皿状の浅い「くぼみ」が当初に存在し，この「くぼみ」に遺物が捨てられたものと考えられるに至った。坑底から高い所で20㎝，低い所では5～6㎝の位置に土器及び石器類が見られ，住居跡と同様に黒色有機質土が堆積したその中と上面に遺物が載る事は，住居始用時を同じくしてこの土坑も何らかの目的で掘りくぼめられ，最後に多量の土器片及び黒曜石片を捨てられたのではないかと思われる。なお坑中堆積土中には木炭片を少なからず見出された事を付言しておく。

2号土壙・3号土壙

（図版13—2，第10図）

第3層から始まり基盤層に掘り込まれた円形坑であり，内部に6本の柱穴をもつ径80㎝（1号）と70㎝（2号）の遺構である。

内部から少量の土器片と1号から



第 10 図　2・3号土壙実測図（1/40）

はつまみをもつ石匙とが検出された。土器型式は１号住居跡と同型式である。　（松岡　史）

(3)　溝状遺構（図版16，付図６）

Ｂ１区―Ｂ３区にみられ，Ｂ３区の中央部西側より，Ｂ１区の北東隅へと蛇行しながら流れる。低平なＵ字状の溝状遺構である。約７ｍ幅の調査区域のほぼ全面にわたり，Ｂ１区の北西隅とＢ２区の１部・Ｂ３区の南東側半分を残す程度である。溝状遺構は幅約５ｍ，深さ約0.5ｍを測り，Ｂ１区での底面とＢ３区の底面との比高は10cm余を測るのみで，南から北へと流れるが勾配は２／1000で，ゆるやかな流れというよりはむしろよどみに近い。この溝は排水等の人為的な溝とは考えがたく，自然地形に起因せる溝であろう。堆積土は上部が黒色を呈するシルト質，下部には黒色の有機質粘土がみられる。出土遺物としては，下位に縄文時代中期の土器及び後期の土器が，上位には後期の土器が石器類と共に多量にみられた。また出土状況は，溝状遺構の西側肩部からなだれ込むように拡がっており遺構の西側の調査区域外にも及ぶ。調査区域外にこの時期の遺構が存在する可能性は極めて高いといえる。

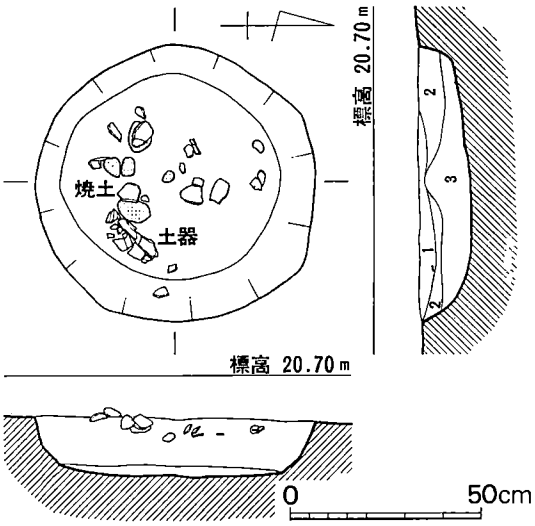
溝状遺構の発掘にあたっては，遺構内下部の堆積土の一部を採取し，水洗選別した。この結果，若干の木炭片等を摘出しえたが，極めて細片であり，樹種同定の供試資料となしえるものはなかった。また，植物種子等は含まれなかった。

なお，縄文時代の環境復原作業を目的として堆積土の土壌を採取し，花粉分析・プラントオパール分析の供試資料とした。採取作業は安田喜憲氏が実施した。この結果についてはⅤ―３で報告する。

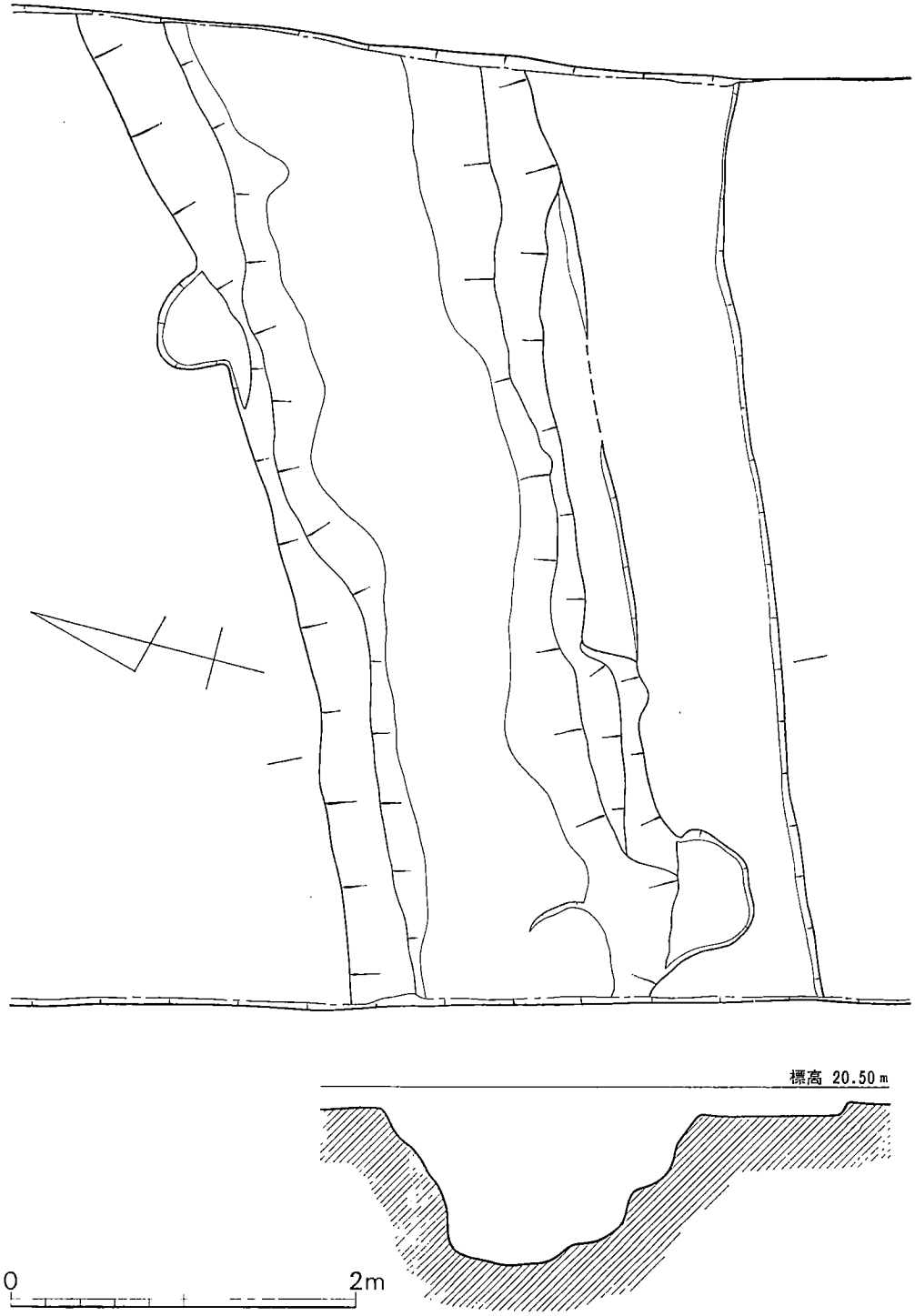
（小池史哲・高田弘信）

(4)　炉　跡（図版20，第11図）

Ｂ４区南側に位置し，直径72cmの円形プランを呈する炉跡である。深さは16cmを測り，断面形状は低平な「Ｕ」字状である。炉は第７層つまり地山面に切り込んでいる。炉跡内には焼土・灰土粒と後述する土器片若干量がみられた。土層の堆積状態は図の如くである。１・２層共に焼土・灰土粒を含んでいたが，２層に灰土粒がより多く認められたので別の層序にした。２層と３層の境目には土器が多くみられた。



第 11 図　炉跡実測図（1/20）



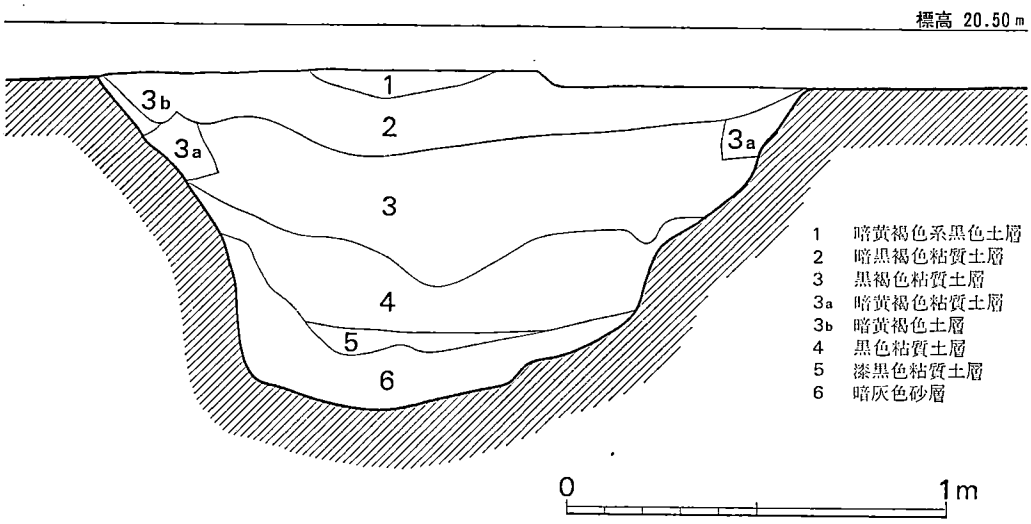
第 12 図　V 字 溝 実 測 図 (1/40)

3層にも灰土粒の混入が認められたが，土器を全く含んでいなかった。出土遺物は土器片のみで他は出土しなかった。時期は縄文時代晩期黒川式土器に比定される。

この炉跡を何らかの住居跡状遺構に伴うものと考えるのが最も妥当であるが，土器の散布状態・柱穴等のそれを実証する痕跡は認められなかった。上部が水田開削による削平かあるいは河川の氾濫等により土砂が移動した為かと考えられる。

(5) V字溝（図版21・22，第13図）

B 4区最北部に位置し，幅約1.7*m*・深さ約0.8*m*を測る溝状遺構である。溝の長さについては発掘調査の性格上約5.6 *m*までしか確認出来なかった。断面形状は溝底のやや低平な「V」字状を呈する。溝底は東側から西側にかけて約10*cm*の落差があり，東から西への水流であると判断される。これは旧地形等高線にほぼ直行する方向性をもっている。V字溝周辺には同時期の何らの遺構も確認出来なかった。堆積土層の状態は第13図の如くである。自然堆積の状態を示しており，6層に分れた。1は暗黄褐色に近い黒色土層で，2は粘質土の暗黒褐色土層がみられた。3は黒褐色粘質土層で，4もほぼ同様の土質であるが3とくらべてより黒っぽいので別とした。この3・4層で溝の堆積土の大半を占める。5は漆黒色の粘質土層がみられ，6は暗灰色の砂層が堆積していた。遺物の出土状態は第1層から第3層にかけて順次増加し，第4層以下から減少し最下層の第6層までみられる。これも自然堆積と考えられる状態を示している。出土した遺物は土器が多く，石器は極少量である。出土土器については後で詳述するが，時期は全て縄文時代晩期夜臼式土器に比定されると思われる。



第13図　V字溝土層図（1/20）

なお，V字溝の発掘にあたっては，V字溝内下部の堆積土を全て採取し，水洗選別した。この結果，木炭片・土器片等を摘出出来たが，木炭片は極めて細片であり，樹種同定の供試資料となりえなかった。又，生活環境復原作業を目的とする花粉分析及びプラント・オパール分析も実施した。なお，プラント・オパール分析については溝底面付近の土壌のみで，花粉分析は遺構を切り込む堆積土についても実施した。この結果についてはV－3で報告する。

（藤瀬禎博）

2. 遺　　物

発見された遺物のうち縄文時代に属するものは，中期～晩期の遺物である。早期・前期の遺物の出土はみられない。土器は，後期中葉頃に属するものを中心に中期～晩期終末の土器が多数出土している。石器は，尖頭状石器・石鏃・剝片鏃・つまみ形石器・刃器・台形状石器・石核・彫器・石錐・サイドブレイド・削器・掻器・石錘・磨製石斧・打製石斧・石庖丁・すり石・砥石等が出土している。その他，装身具の出土がみられる。また，植物遺体の出土もみられる。

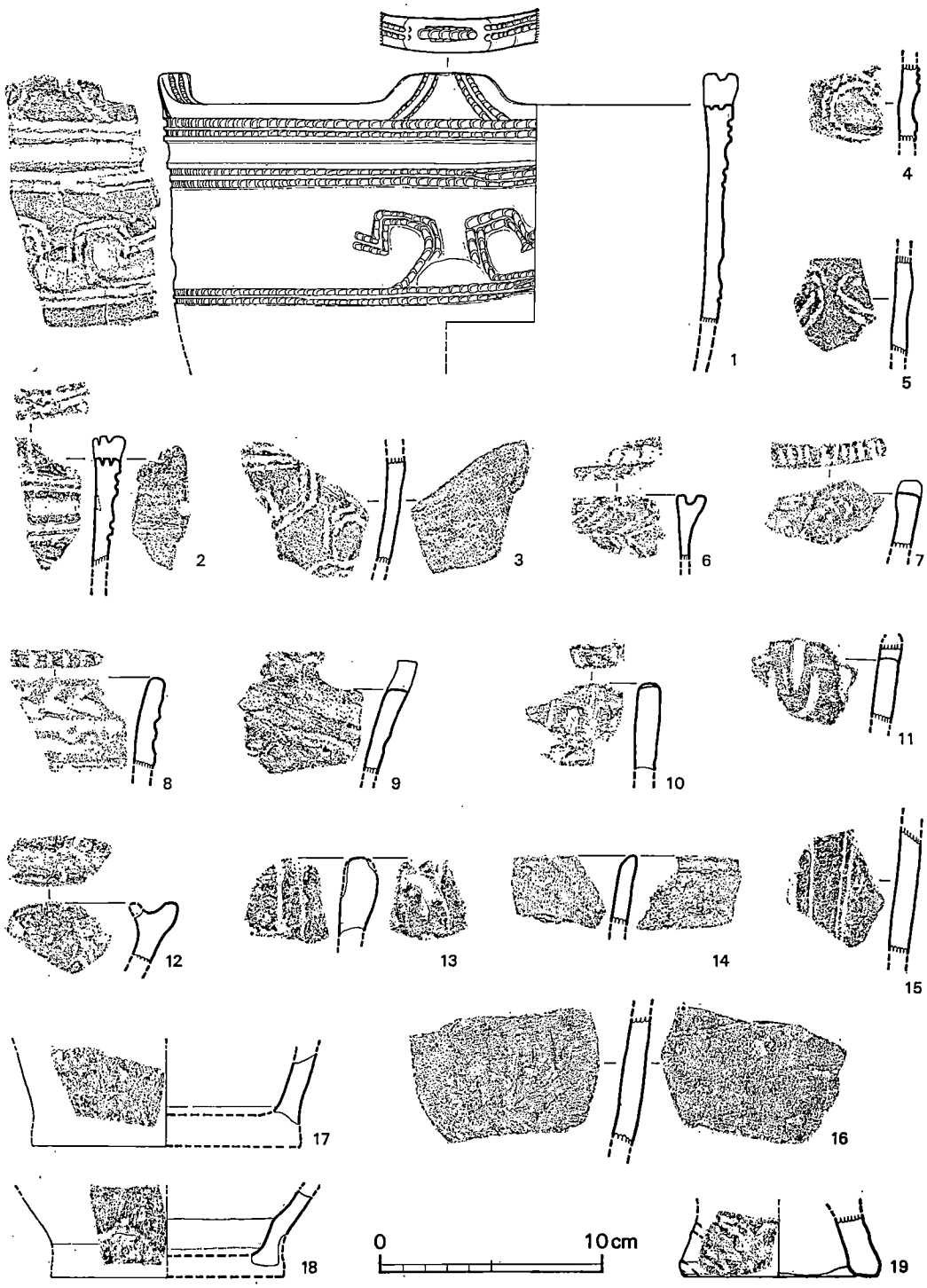
縄文時代に属する土器はA６，B１～７区において出土し殊にA６・７区とB１・２，B５・６区に集中する。総重量約380 *kg*という多量の出土をみるが，この内訳は，中期に属するものが0.2%の0.9*kg*，後期に属するものが98.7%を占める約375 *kg*を測り，晩期に属するものは4.2*kg*で全体の1.1%である。但し，中・晩期の資料を数量的には比率以上に極力取り扱うように努めたため，後期の資料中には，挿図に取り扱わずに割愛した資料が多いが，器形・文様や手法の明確な資料は極力図示するよう努めた。

(1)　中期の土器（図版23，第14図）

B１区～B３区において出土し，そのほとんどは後期の遺物を多量に含む溝状遺構の下部第５・第６層から出土している。器形の明確にわかる例は１の深鉢形土器のみで復原図を図示したが他の資料は，復原するには余りにも細片で，部位と文様の明確な例を拓本によって図示した。

これらの資料は全て滑石の粉末を多量に混入した光沢のある器壁を有している。色調は淡灰褐色ないしは，淡褐色を呈するものがほとんどで８・14・17の資料等は暗褐色に近い色調を呈す。

１～５は２本単位の細い櫛状の原体を，連続押し引きし，沈線内の列点文の如く，文様を施文した例で，いわゆる中期・並木式と称される土器に類似する。６．７も２本単位の細い櫛状



第 14 図　中 期 土 器 拓 影 (1/3)

の原体によって施文されており，6は1・2の如く口唇上面にも列点様の押し引き文をみることができる。7は口唇上面に2本単位の短い沈線文を連続させている。9は無文であるが，上に広がる口唇突起を有する。8は口唇に刻み目を有し，指頭による太めの凹線が連続し，阿高式土器に類似する。10・11は太い箆状の原体で，曲線文を施した例である。12は口縁を肥厚させ口唇上面に指頭による凹線をめぐらしており，一部に2本単位の沈線がみられる。13・15には，深い沈線がみられ，13は肥厚する口縁突起部である。14・16～18には文様はみとめられず，16の資料の外面はヘラケズリの痕跡がみられ，内面にはわずかに条痕をみとめる。19は2本単位の列点文を有する脚台とみられる破片である。1～5の資料は福岡県直方市旭橋の遠賀川河床発見例に類似を認めることができる。6・7・19も同一型式に分類できるが，8～11は阿高式むしろ後期にみられる阿高系の土器である可能性が強い。

(2) 後期の土器（図版24～29，第15～49図）

後期に属する土器は，B2区を中心とした地域とその周辺及びB6区付近において，多量に出土し，総重量は約375kgを測る。しかしながら時間的制約・場所的制約があり，それらすべてについて詳細に検討することはできなかった。従って住居跡等出土資料・復原可能な破片を中心とし，文様の明確な資料437点を選別して取り扱った。

このうち20～98は1号住居跡～6号住居跡覆土及び1号土壙覆土からの出土資料であり，以下，住居跡群周辺（A6～7・B5～7区）の出土資料144点，B1～3区の溝状遺構出土資料214点を取り扱った。

1号住居跡出土の土器　（第15～20図）　32点を取り扱った。深鉢形土器・鉢形土器等であり，器形の明確な例は20～38に示した。深鉢形土器・鉢形土器には波状口縁の例と平縁の例があり，それぞれ1・2類として区別される。

(1) 深鉢形土器1類　20～25・29がこの分類に含まれ，更に施文される文様によって3種類に区別される。

（a）綾杉文をなす例

（b）口縁部に貼付文を有して，斜線文をなす例

（c）口縁部に貼付文を有さない例

（a）に属する例は20にみられる。4単位の波状口縁を有し，波状の頂部から頸部にわたる橋状把手が貼り付けられている。やや内彎し，肥厚する口縁部には，深くて明瞭な斜線文を反転させた綾杉文が施文される。また波状頂部では2本単位の斜線文を交互させ「M」字文状を呈し，橋状把手にかかる斜線文は長く，把手中央に直径1cm，深さ0.5cmの凹点が施文されている。器面はヘラ磨きされるが粗い。

（b）に属する例は21・23・24にみられる。いずれもヘラ磨きされた器面を有する。23には「N」字・逆「N」字を連続させた貼付文に2本単位の沈線が交互に斜行する。各頂部間の口縁部については欠損しているため明確ではない。底部に脚台が付く可能性がある器形。24も同様の文様を有し，貼付文には1本の沈線が斜行する。各頂部間は，左下りの連続斜線文で繋がれる。21の波状口縁の頂部は，わずかに貼付けされてつまみ上げられて内彎する。頂部には2本単位の斜線文で「N」字文が描かれ，各頂部間は右下りの連続斜線文によって繋がれる。

（c）に属する例は22・25・29にみられる。いずれもナデによって無文化されているが条痕文の痕跡を留め，29の内面胴部にはアナダラ属（又はアルカ属）条痕文が残る。22・25の波状口縁の頂部は角ばり，頂点から左右に各4本，計8本の明瞭な沈線が斜行し，22は放射状を呈する頂点に凹点が付され各頂部間には浅くて短い連続斜線文がめぐり，疑似斜縄文ともみえる。25には，連続斜線文がみられない。29は大きく波状を呈して外反する口縁を有し，22・25に比すと胴部のふくらみは大きい。アナダラ属（又はアルカ属）貝の殻腹の肋を押捺することにより，口唇部を飾る。25の連続斜線文に似るが頂部に放射状の斜線文はみられない。疑似縄文として取り扱うべき例である。また頂部のやや右下頸部に焼成前とみられる穿孔がある。

(2) 深鉢形土器2類　35～38がこの類に含まれる。いずれも条痕文が施文されるが内外面のいずれかが無文の例もある。条痕の原体の違いによって，

（a）　ヘナタリの貝殻腹縁を用いる条痕文（以下「ヘナタリ条痕」と略記する）と，

（b）　アナダラ属（又はアルカ属）貝殻腹縁を用いる条痕文（以下「アナダラ条痕」と略記する）に区別される。

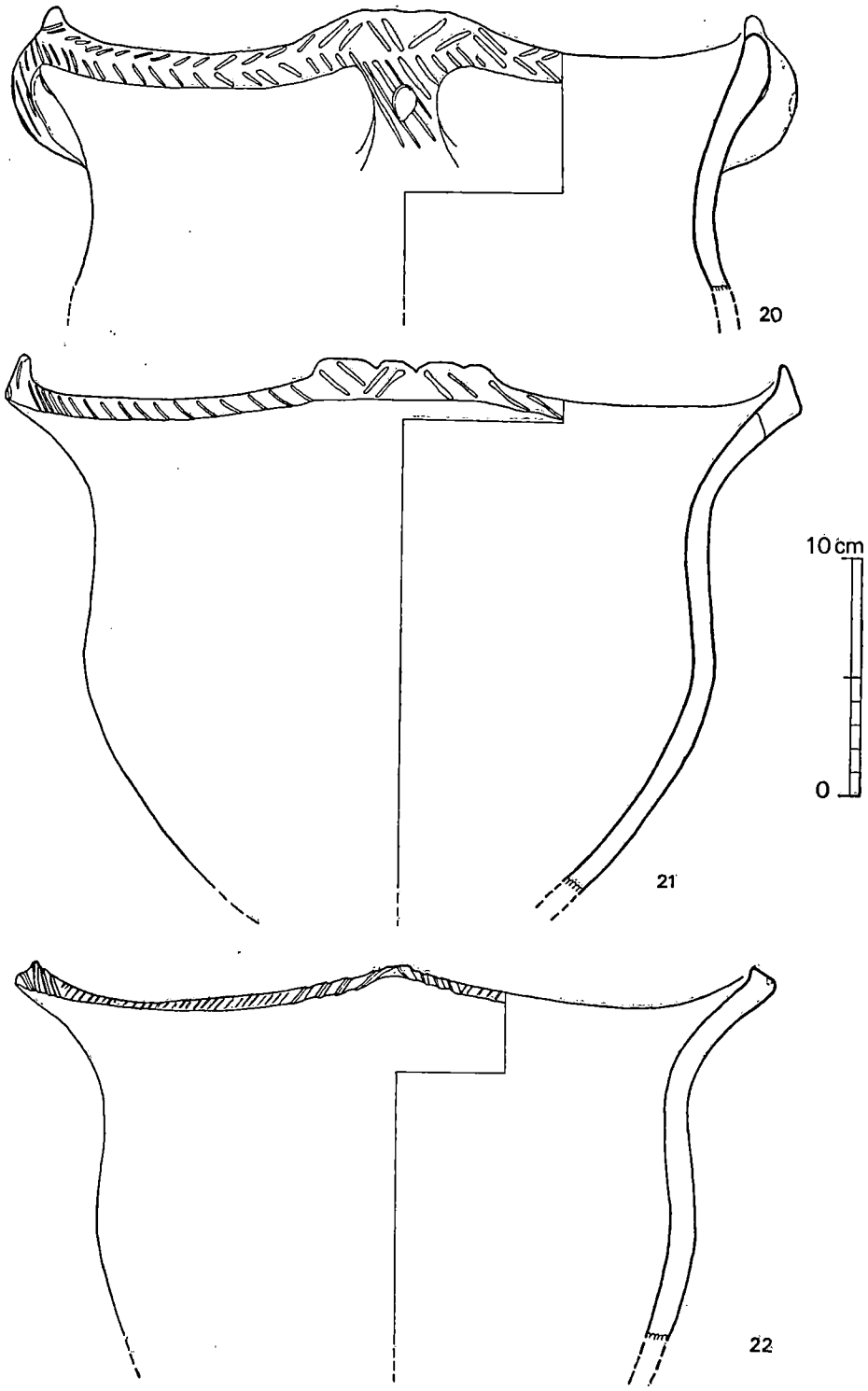
（a）の例としては36・37があり，36には内外面共に認められる。37は薄手の土器で外面はヘラ削りされ無文であるが内面の胴部にヘナタリ条痕がみとめられる。

（b）の例としては35・38があり，35の外面はナデられており無文で内面に横方向のアナダラ条痕がみられる。38は外面に粗くアナダラ条痕が施文されるが内面はナデられ無文であり，口唇上には，アナダラ属貝殻の放射肋を押捺し疑似縄文的な効果をあげている。

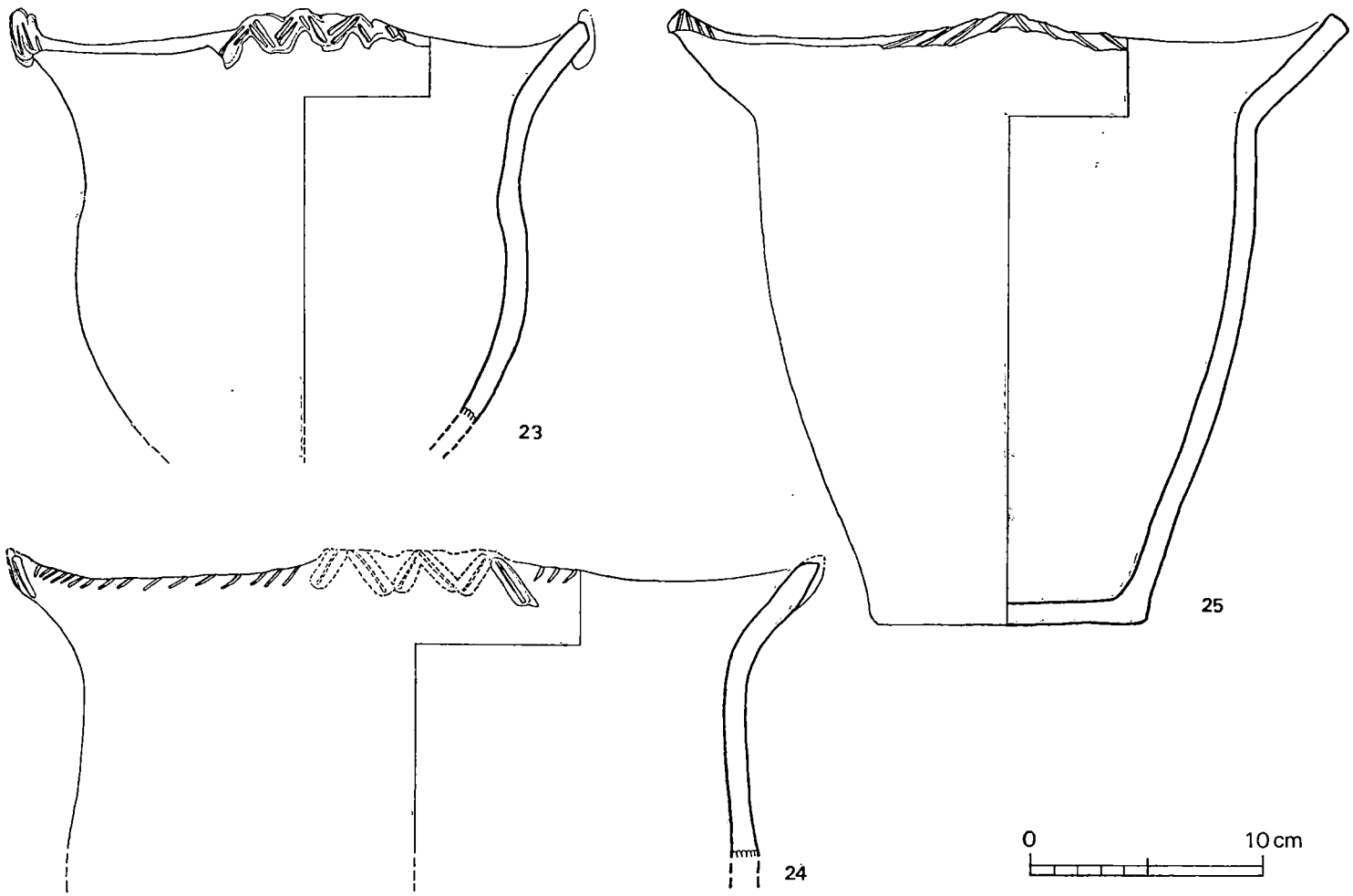
(3) 鉢形土器1類　この類に含まれる例としては26・27がある。磨消縄文の手法が用いられ，縄文はいずれもR{L で回転施文される。また口唇部外面と肩部から胴部にかけて文様帯がある。肩部から胴部にかけての縄文帯は，2本単位の沈線で直線・曲線を描き，これによって区画された範囲及び外部をヘラ磨きにより丁寧に磨り消される。内面もヘラ磨きされ精製である。

(4) 鉢形土器2類　この類に含まれる例としては28があり，31も含まれるかと思われる。いずれも平縁であるが，口唇上にコブ状の突起が2個連ねられて貼り付けられている。口唇部には文様はなく，28の胴部には，沈線で区画された範囲内に，2本単位の斜線文による「V」字状文とアナダラ属貝殻腹縁を用いた疑似縄文を短く縦走させ，充填疑似縄文をなす。

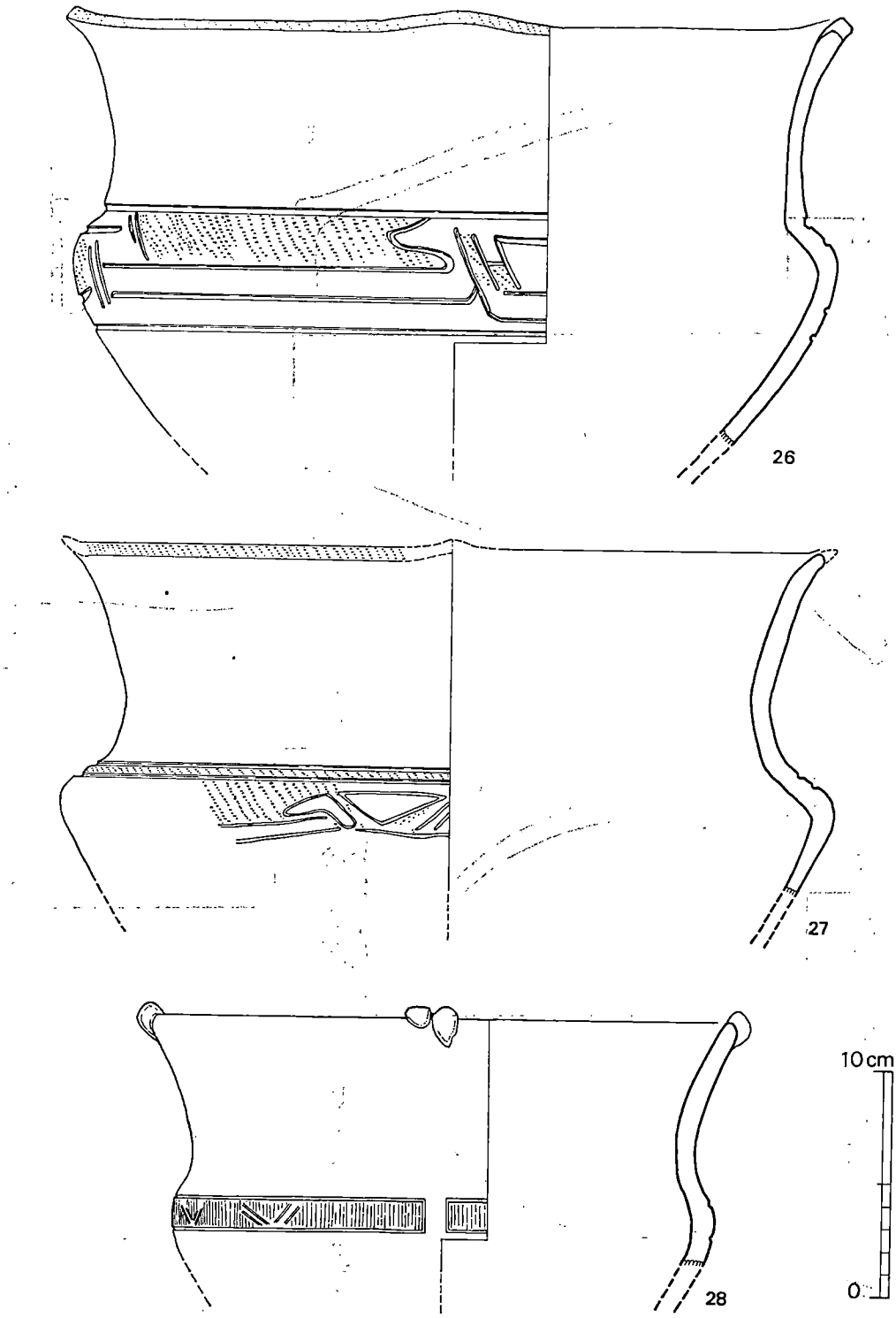
(5) 鉢形土器3類　頸部がしまることなく口縁から直接胴部につながる器形で，32がこの類に



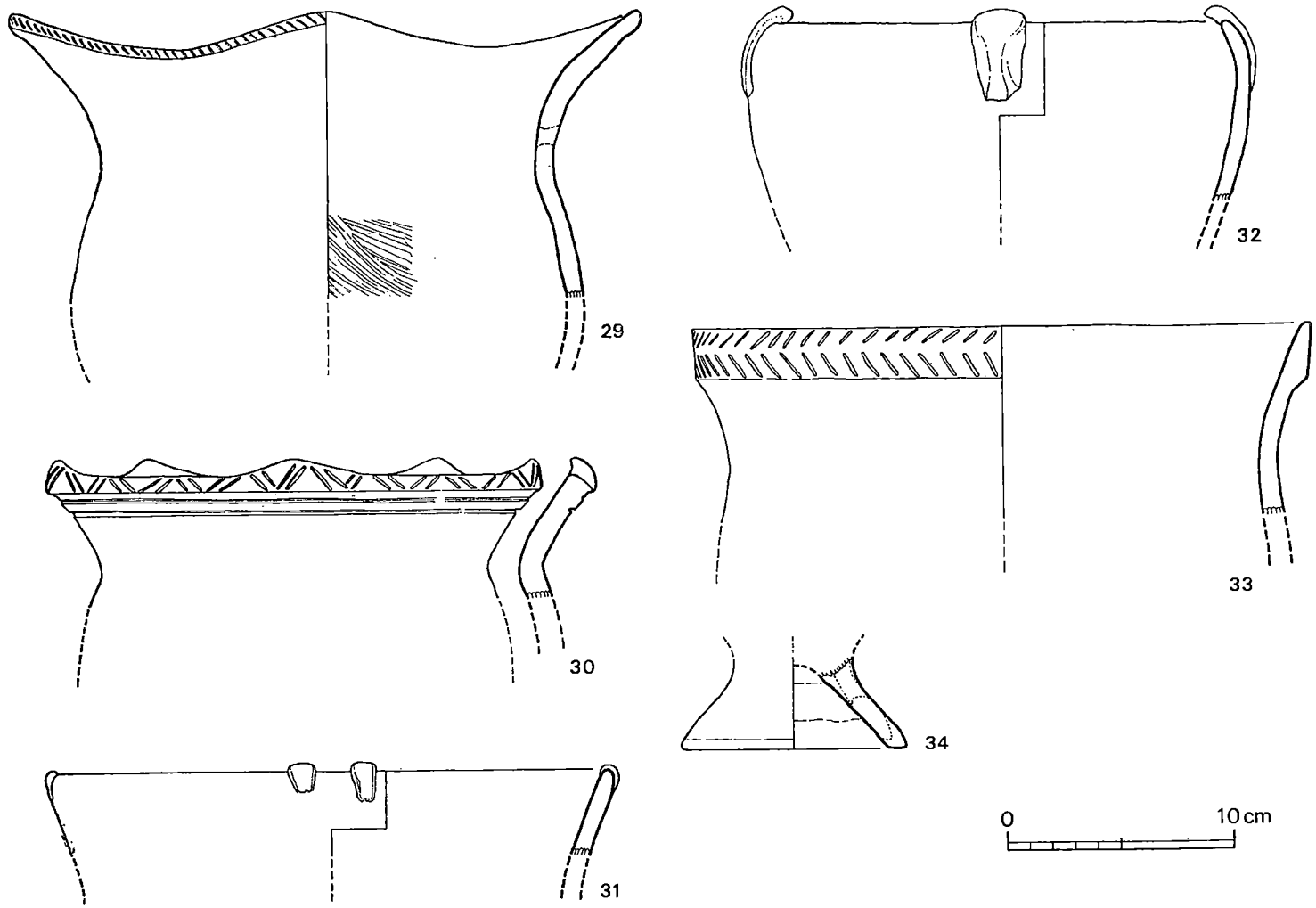
第 15 図　1 号住居跡出土土器実測図 (1) (⅓)



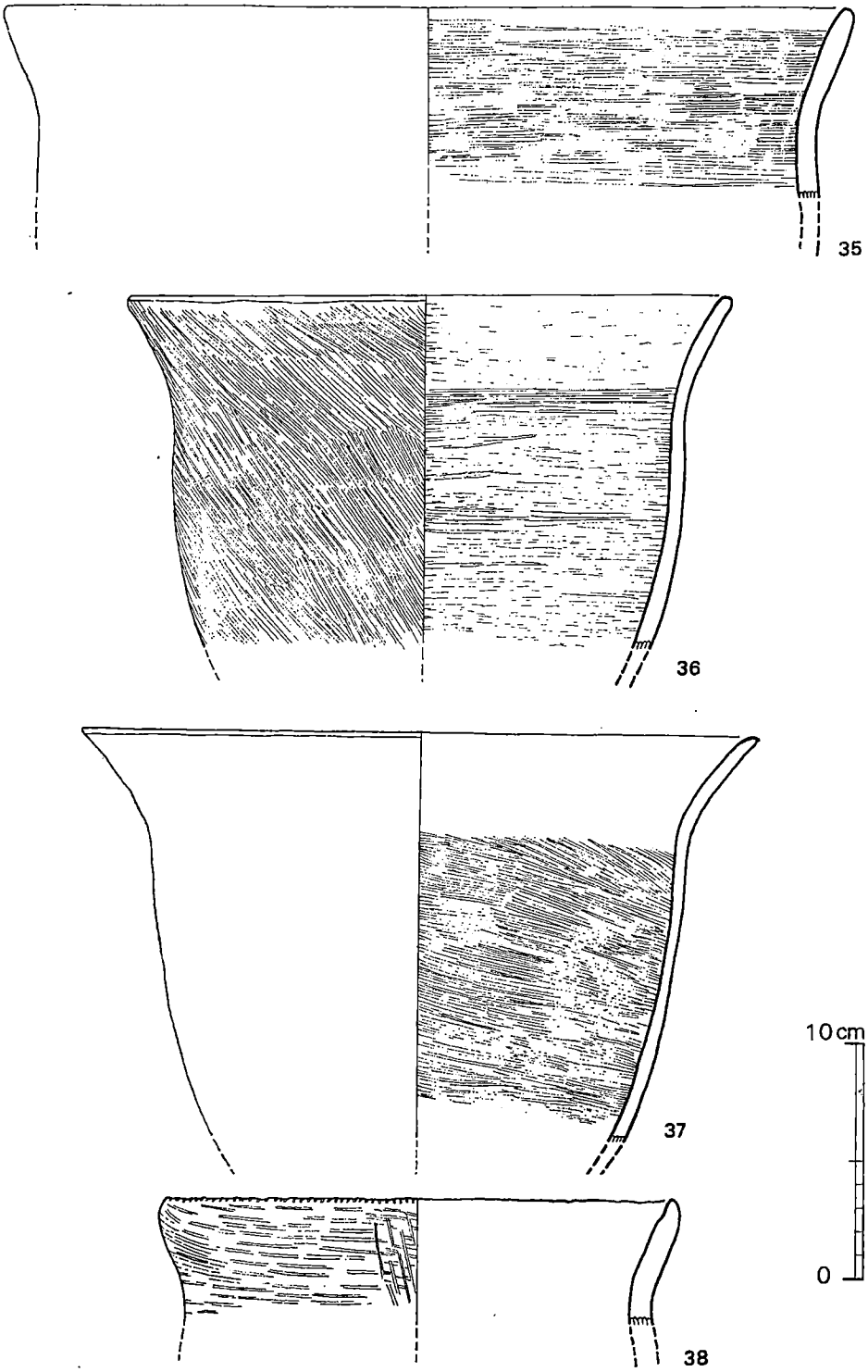
第16図　1号住居跡出土土器実測図(2)(1/3)



第 17 図　1 号住居跡出土土器実測図(3) (1/3)



第18図　1号住居跡出土土器実測図(4)(1/3)



第 19 図　　1号住居跡出土土器実測図(5)（⅓）

含まれる。平縁でキャリパー形に内彎する，口縁の上部から肩にかけてコブ状の突起が貼り付けられる。内外面ともナデによる無文である。

(6) その他の一群　いずれも頸部以下を欠失しており，器形は不明であるが，深鉢形土器ともみられる。30は5単位の波状口縁を呈するつまみ上げられたような突起を有する。やや尖りぎみに内彎する突起を含め口唇外面に2本単位で斜線文が交互しながら1周する。またこの文様帯の直下には2条の沈線がめぐるが，必ずしも平行せず1条づつ独自にめぐらされたことを知る。ナデによる無文を素地とする。33は平縁の口縁を呈し直立する口唇肥厚部には左下りの連続斜線文と右下りの連続斜線文が上下にみられ，綾杉文を描く，内外面ともヘラ磨きされ精製である。

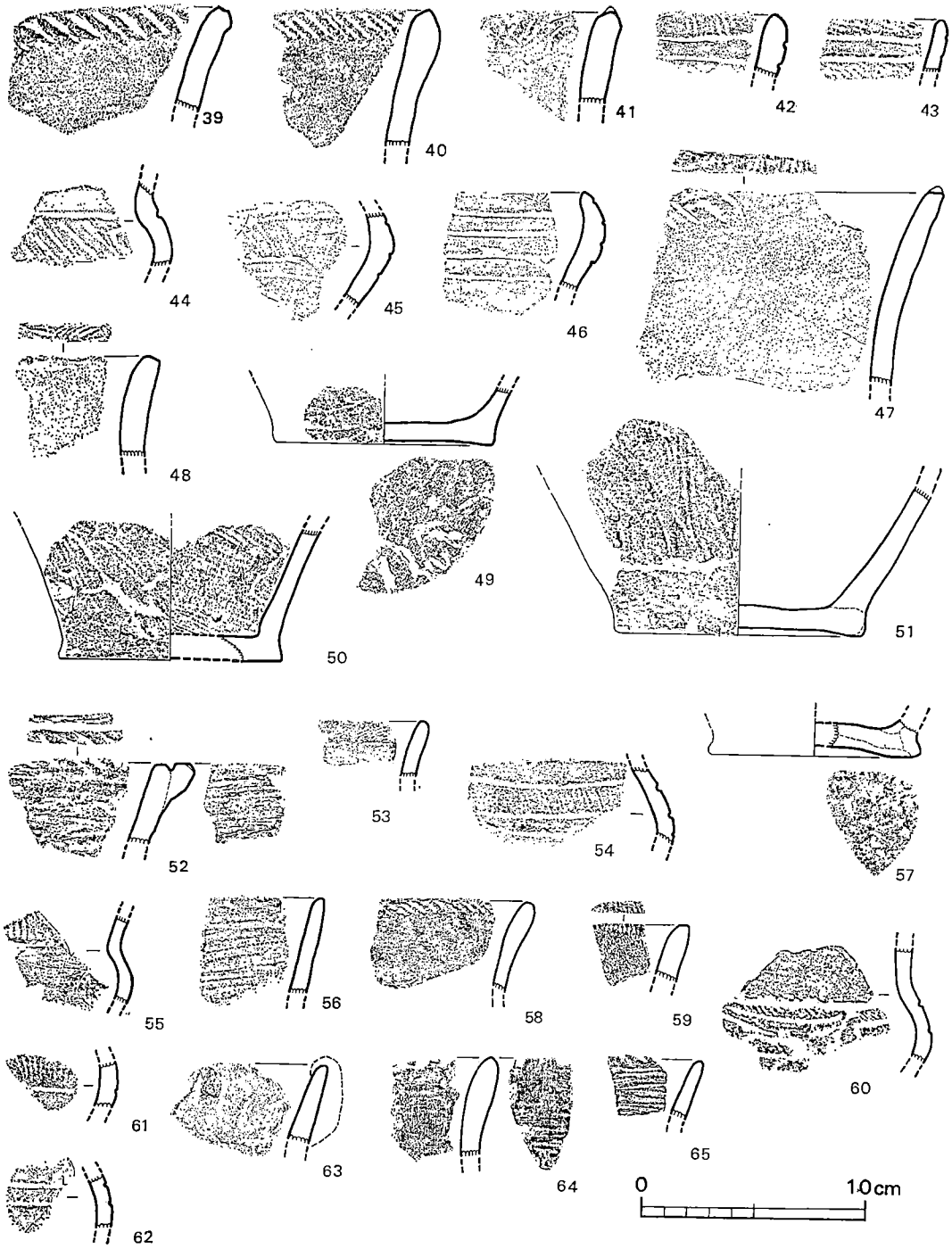
器形の不明確な例ではあるが，文様の明確な例としては39～98がある。これらの文様の分類について，及び器形の分類との関連については，住居跡群周辺の土器・溝状遺構の土器を含めて後述する。39～42は斜線文を施した口縁部破片で，42には口唇直下に平行沈線文もみられる。また43にも平行沈線がみられるが沈線の上下は斜線文ではなくアナダラ属貝殻肋による疑縄文である。44・45は胴部に沈線文がみられる例で，平行沈線で区画された範囲内に押し引きによる明瞭な斜線文を充塡させている。46はキャリパー状の口縁部破片で4条の平行沈線がみられる。47・48は口唇部上面に施文がみられる例で前者は沈線文・後者は扇状貝圧痕で疑似縄文としている。34は脚部破片で無文である。49～51は底部付近破片でいずれも条痕文が施文され，50はアナダラ条痕，51はヘナタリ条痕文である。49の底面には深くて明瞭なヘラによるともみられる凹みが無雑作に付けられている。

なお1号住居跡出土遺物は，後述する1号土壙の出土遺物と相互に接合するものがあり，両者の遺物を総合して一括土器として考える必要があると思われる。　（小池史哲）

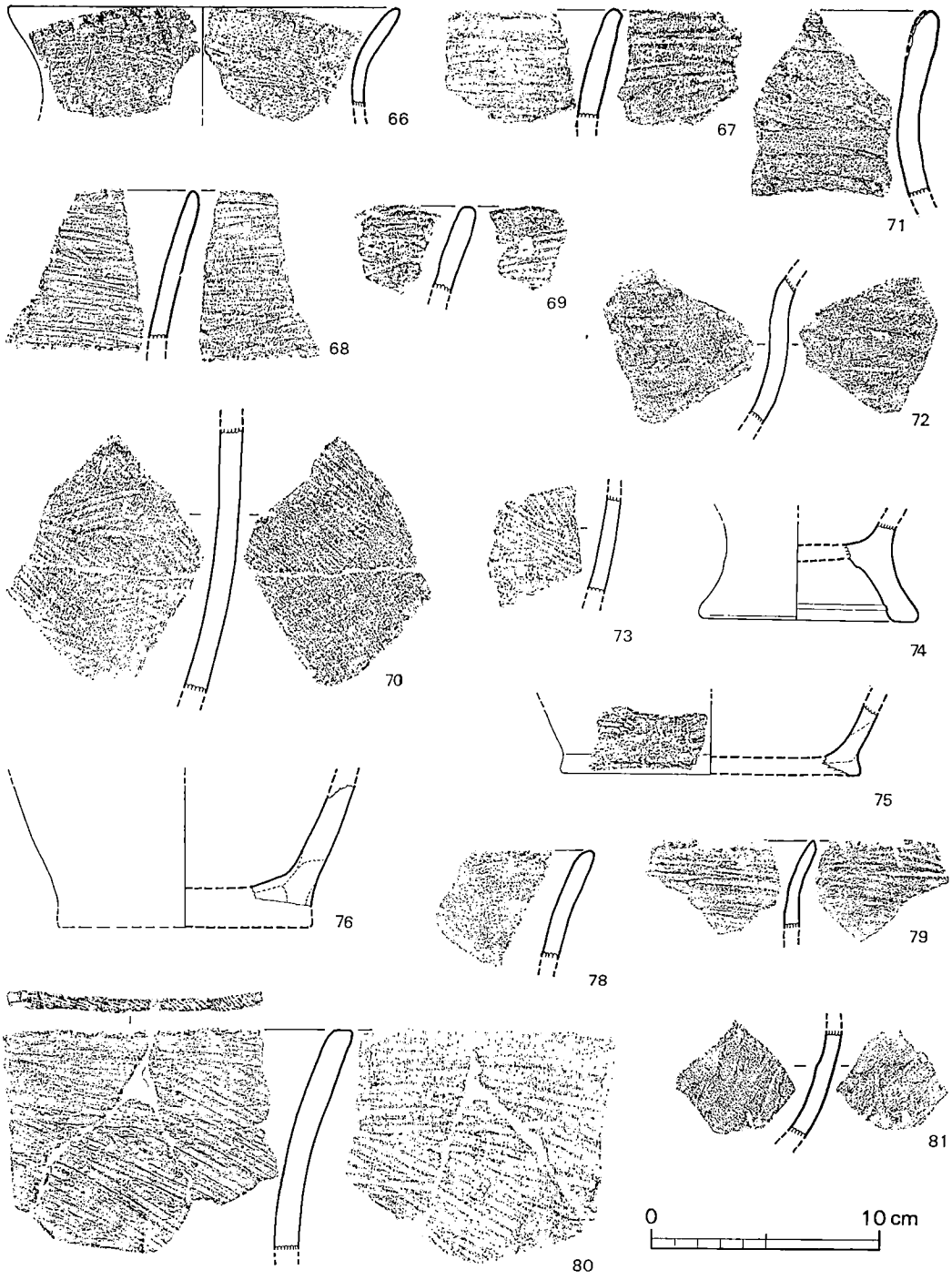
2号住居跡出土の土器（52～57）　2号住居跡からは総計1.5㎏に及ぶ土器片が出土しているが細片が多く，6点を図示した。52はヘナタリ条痕文の素地を有し，口唇部上面には沈線が一条めぐる。口唇外面には刻み目文が施され大きく肥厚した口縁を飾る例である。53は扇状貝圧痕疑似縄文，54は縄文R $\left\{\begin{smallmatrix}L\\L\end{smallmatrix}\right.$と2本単位の沈線を用いた磨消縄文がみられ，55はアナダラ条痕文が頸部にみられヘラ磨きされた肩から胴部にかけては細かい沈線文で曲線が描かれる。56はヘナタリ条痕文の口縁部，57は底部破片で底面には細かな凹みが無数にみられる。

3号住居跡出土の土器（58～76）　3号住居跡からは5.5㎏に及ぶ土器片の出土があり，19点を図示した。58～59は扇状貝圧痕肋による疑似縄文が口唇部に施文され，60～62も同様の疑似縄文を用いた胴部破片で沈線文も加える充塡疑似縄文である。63は橋状把手が剝脱した状態のものである。64・65はアナダラ条痕文で口唇部に刻み目が付される。66～70はヘナタリ条痕文が付される。71・72・74・76はナデによる無文である。　（小池史哲・若月省吾）

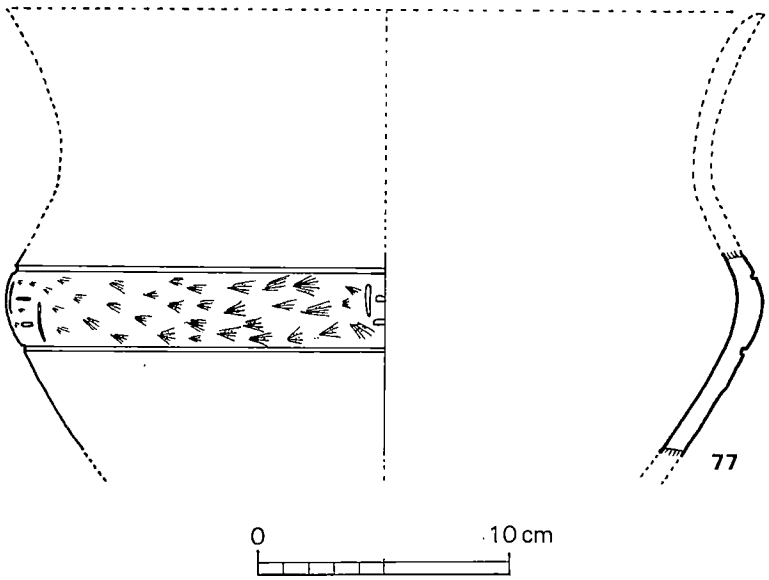
4号住居跡出土の土器　4号住居跡からは3㎏に及ぶ土器片の出土があり，77～83の7点を



第 20 図　1～3 号住居跡出土土器拓影（⅓）



第 21 図　3・4 号住居跡出土土器拓影 (1/3)



第 22 図　4号住居跡出土土器実測図（⅓）

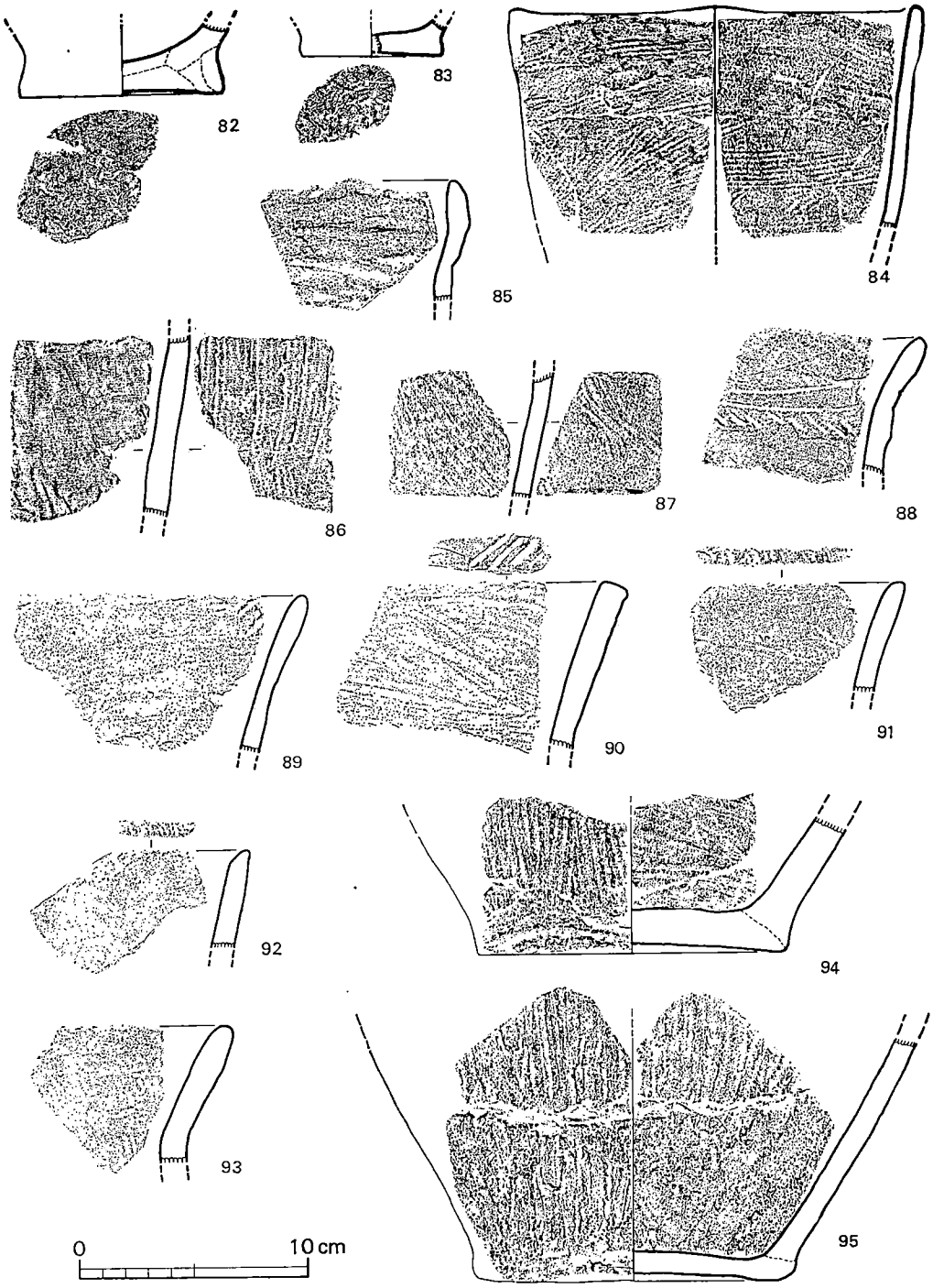
図示した。

77は胴部に文様帯を有する鉢形土器とみられ，2本の平行沈線に区画された内に短かい沈線文と扇状貝圧痕を充填するが，短かい沈線文の付近には磨消しもみられる。鉢形土器2類である79・80はヘナタリ条痕文土器片で79の口唇には刻み目を有し，80の口唇上面には，浅い条痕があり，これはアナダラ属の貝殻腹縁の肋側を用いた条痕とみられる。81～83は無文土器片で，82・83は底部破片である。82には接合面が顕著にみとめられる。83の底面には凹点が多数みとめられる。

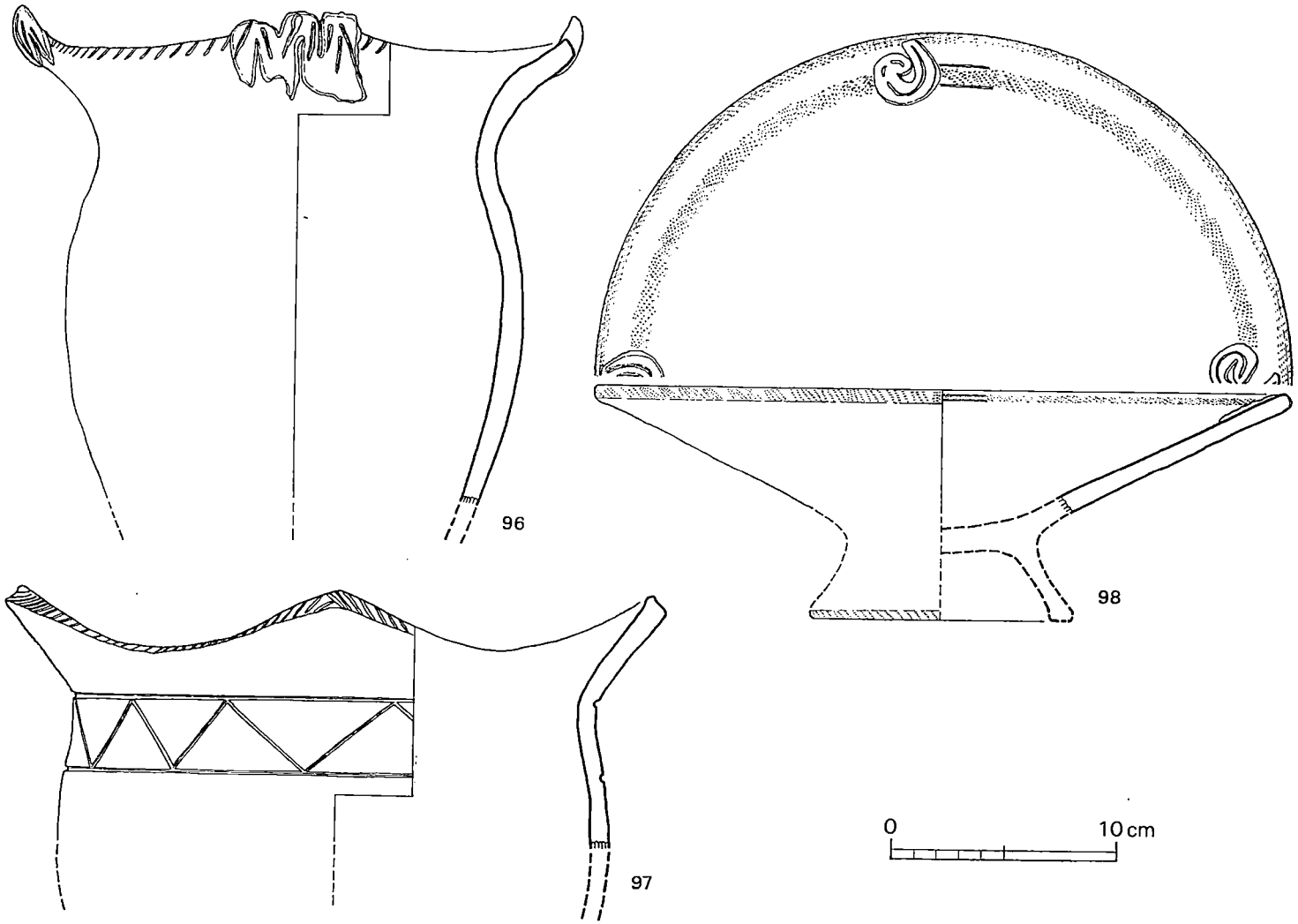
5号住居跡出土の土器　5号住居跡は重複によって遺構の面積が少く，土器片の出土は1.5㎏にとどまったが，2点を図示した。84は口径18㎝でわずかに波状口縁をなす深鉢形土器で口縁部はやや平らに肥厚し，頸部はほとんどすぼまず胴部もはり出さない，直線的な断面形を呈す。アナダラ条痕文が内外面共にみとめられる。85は無文土器で口唇部には深い刻目がみられる。

6号住居跡出土の土器　6号住居跡はそのほんの一部が調査されたのみで主体は発掘区域外になるため，土器片の出土も少なく，総量0.8㎏を測るのみである。86・87の2点を図示したが，86は外面無文ナデ，内面には縦方向のアナダラ条痕文がみられる。87はヘナタリ条痕文が施文される。

1号土壙出土の土器（88～98）　1号土壙から出土した土器は前述した如く，1号住居跡出土の土器と相互に接合する資料を多分に含むが，一応11点を取り扱った。88は肥厚した口縁部に浅い斜線文が連続し，やや下位の頸部上端も肥厚して深い斜線文が連続する。また両者の間は2条の不規則に並ぶ沈線がめぐる。素地は全体にヘラ磨きがかかる。89～92はヘナタリ条痕文の口縁部破片で，89の一部には深い沈線による斜線文がみられるが，90の口唇上面の一部にもみられる。91・92には口唇上面に浅い刻目文が施文される。93は一部にアナダラ条痕文の痕



第 23 図　4～6 号住居跡及び 1 号土壙出土土器拓影（⅓）



第24図　1号土壙出土土器実測図(⅓)

跡を認めるが，ナデられており無文土器の範疇に含まれるものである。94は外面にアナダラ条痕文がみられる底部破片で，95は内外面ともヘナタリ条痕文が施文される底部破片である。いずれも深鉢形の土器の底部破片である。96・97は器形が明らかな例で，96は深鉢形土器１ａ類に分類される。波状口縁の頂部には「*m*」字貼付文が付され，深くて明瞭な沈線が１条づつ交互に斜行して「N」字・逆「N」字連続文をなす，各頂部間は右下りの連続斜線文がめぐる。97は深鉢形土器１ｃ類に分類される。ナデによる無文の素地の頸部から肩部にかけては，平行沈線の間に１条の斜線文が交互して連結しながらめぐる文様帯を構成する。98は皿形土器で，底部を欠損するが，おそらく脚台付の器形を呈するものと推定される。口唇部に扇状貝圧痕による２条の疑似縄文帯がめぐる。また内側の疑似縄文帯には４単位で「の」字渦巻文が貼り付けられ渦巻上に沈線が一条施文される。なお，この渦巻文の右側には平行沈線がわずかに認められるが，２単位になるようである。全体にヘラ磨きされ，磨消縄文に似た効果をあげている。

これらの遺構内出土の土器は，その特徴から後期中葉北久根山式土器とすることができる。しかし，磨消縄文手法が充塡疑似縄文に変化し，平行沈線文等もみられ西平式にも近い。北久根山式の継続期間がより永いものと仮定すればその後半に位置づけるべきであろう。

（小池史哲）

住居跡周辺出土の土器（第25～30図）　ここでとりあげる土器はＡ・Ｂ５～７区出土の土器である。当該地区は，１～６号住居跡とその周辺部にあたり，いずれも１～６号住居跡周辺の包含層出土の土器である。ここでは包含層出土という遺物の性格上，住居跡内出土の土器と区分し一括してあつかった。

土器は従来口縁部におけるW字状貼り付け（逆W字状）を特徴とするところから，北久根山式土器と呼称されてきたものを主体とする一群である。北久根山式土器は，そのW字状貼り付けという特異な文様が注目されたわりには，かならずしもその内容は明確ではなかった。北久根山式土器の一括資料の報告も少なく，加えてその標準遺跡である北久根山遺跡のまとまった資料報告も見ない。近年わずかながら当該時期の資料報告例が多くなった。なかでも沖ノ原貝塚の報告では，土器形式の解明へ向けて積極的な試みがおこなわれている。しかしその分布・系統・起源等，いまだ不分明な点は少なくない。そのことは北久根山式土器に関する基礎資料の少なさにも起因すると思われる。以上のような土器研究の現状と筆者の力量不足などから，ここでは北久根山式土器の内容にふれるということよりも柏田遺跡出土土器自体の検討に主眼をおいた。したがって土器の説明はできるだけ詳しくおこなうことに努めた。

分類にあたっては土器がほぼ単一時期の一群でかつ包含層出土という性格上から形態分類という方法をとった。形態分類においても土器の製作過程と使用過程の問題は十分検討されなくてはならない。しかし満足すべき方法を十分に活用することができず，文様と器形と種々の形状を中心にした区分にならざるを得なかった。又，器種については，土器が小破片であること

や形状の特質・器形のデータ化が一定の数量のもとにはかられない限り断定するにはあまりに任意的すぎるきらいがあり，その判断をさけた。なお他の類例をも考慮して明確に器種の判定が可能なものに限っては，ふれることにした。したがってここでは器種別を前提にした分類は避け，土器を単純に均質化し文様と形状の類似・差異等をもって機械的に区分した。そして分類に関する他の種々の要素を補う意味で観察過程で気づいたことはできるだけ記すことに努めた。胎土については肉眼観察で判別可能な砂粒はすべて記した。科学的分析を経たものではなく問題もあるが，今後小地域単位での土器の詳細な検討等が必要になってきた場合，胎土は重要な検討要素になると思い，素人の肉眼観察であるがあえてふれた。以上の点を考慮しつつ，有文土器と無文土器とに大別し，そのなかで文様，形状等を見ていった。ここで無文土器としたものには条痕文土器と無文土器の二者が含まれる。なお底部については別個にあつかった。

有文土器（99～163）　有文土器には口縁部破片と胴部破片がある。文様を問題にする場合，器形と文様の関係・文様構成等を含めて検討されなければならない。口縁部文様と胴部文様を機械的に分離し同様にあつかうことはできない。又，同一器種でのやや異なる形状・文様部位の差異等を考慮しなければならない点は多い。以上問題点もあるが，以下個々の土器の説明にはいりたい。

口縁部A形（99～106）　口縁に粘土紐で貼り付けを附する土器である。99～106はいずれも波状口縁の土器で貼り付けの位置は，その山部に限定される。貼り付け方に2種認められる。1本の粘土紐で貼り付けを完成するもの（99～103）と数本の粘土紐を繋いで貼り付けを完成させるもの（104～106）である。いずれも，逆W字状に貼り付ける癖を，それぞれ形状差はあるが有する。その内，102だけは単に口縁に沿って直線状に貼り付ける。逆W字状の貼り付けを問題にした場合，明確に逆W字が意識されているもの（103・104・106）と，くずれて特に逆W字に意味が認められないようなもの（99～101）がある。前者には逆W字状の貼り付け上に，1～2本の浅い沈線を施こすもの（103・104）と貼り付けのみのもの（106）があり，後者には貼り付け部に貝殻圧痕を附するものがある。貼り付け以外の文様としては，口縁及び口縁下に斜線や平行沈線を施すもの（99～101・105）があり，文様構成から見た場合「貼り付け」＋「斜線及び平行沈線」と「貼り付け」のみのものに分けられる。口縁部の形状は，いずれもゆるく外反するが，厳密に見れば，口縁先端部付近の内面の内彎状態に差を見い出すことができる。胎土はいずれも，石英・長石・角閃石粒を含む。ただし，106には金雲母が加えられている。器壁はいずれも横方向にナデられており，なかでも特に，102・106は丁寧にナデられている。99～106はいずれも波状口縁であるが，他遺跡例では平縁に貼り付けを附す例もわずかながらある。100・103・105は橋状把手を有する。なお口縁が平縁をなすか波状を呈するかという差異や，橋状把手の有無等は分類上問題になると思われるがここでは触れ得なかった。

口縁部B形斜線文土器（第25図107～第26図131）　口縁部に斜線を附す土器である。文様は口縁部に限定される。口縁部外面に1～1.5㎝の幅で斜線を附すものと口縁上端に附されるものとがある。口縁外面に斜線を施すものは平縁が多く，口縁上端に附されるものには波状口縁をなすものが多い。又口縁外面に斜線を附すものには文様部が肥厚するものと，しないものの2者がある。斜線の方向は右下りと左下りの両方あり特に規則性は認められない。ただし斜線を附す場合，いずれも口縁先端を起点に引いたものと思われる。なお，斜線の深さや引き方に種々の差異が認められるが，以下個々の説明の時にふれることにする。

B－1　107～109は平縁口縁でやや肥厚した口縁外面に斜線を施した後，その上端部に貝で押圧を加えたものである。したがって，斜線上部は粘土が圧迫されてややつぶれている。斜線は鋭く口縁端を基準にした場合左下方に一気に引かれている。器壁は内外面とも横方向にナデられ斜線を施す土器では比較的丁寧に作られている。器形的には107と108・109は異なり107はほぼ直線的に外反するが108・109は口縁下部がくびれたようにわずかにしまりやや肥厚した口縁に続く。又108・109は107に比し口縁上端を平坦にする傾向が強い。しかし107・108・109共口縁部肥厚の手法は同様で，先端が角ばった器壁本体の口縁外面に低い山状の貼り付けを施す方法をとっている。

胎土は107～109共，長石・石英粒を主体にし，わずかに角閃石と金雲母を含む。なお，108・109の色調はあずき色がかった暗褐色を呈し，斜線の附し方，形状共によく似ている。

B－2　110・111は平縁口縁の端部付近に斜線を施したもので短かい斜線が右下りに附され器壁は内外面共ナデられているが粗く横位条痕が認められる。胎土は細かい長石粒を主に含む。色調は褐色を呈する。

B－3　112～115は端部が尖りぎみに丸まって終るやや肥厚した口縁に左下りの斜線が附されるものである。非常に細く浅い斜線が，左下方へややカーブをえがいて引かれる。先端の鋭いヘラ状のもので，粘土を切るようにさっと引かれたものと思われる。施文具を粘土に強く押しつけ，押す，あるいは突くように直線的に引かれる斜線とは異なる。器壁は丁寧にナデられる。特に114は研磨とまちがう程丁寧にナデられている。口縁部肥厚の手法は112に関して不明。113～115は器壁本体を途中で止め，その上に粘土をつぎ足したり，壁内外に貼り付けたりして口縁部肥厚を作っている。したがって器壁本体自体が口縁部を形成するものではない。胎土はいずれも細かい長石粒を主に含む。

B－4　116～118は端部が丸みをもって終る平縁口縁の外面肥厚部に斜線を附した土器である。斜線はやや太めで，線はにぶく断面は角ばらず丸くなる。肥厚部はゆるくふくらんだ程度でなだらかに盛り上るにすぎない。器壁は内外面共横方向に丁寧にナデられる。色調は灰褐色を呈する。口縁部肥厚の手法は器壁本体を途中で止め，その上に粘土をつぎ足したり，器壁内外に貼り付けたりして肥厚部を作っている。112～115の手法と細部においては異なるが，器壁

本体自体が口縁部を形成しない点では共通しており，したがって，形状は似たものとなっている。胎土は長石を主に，石英と角閃石を加える。

B—5　119～121は断面三角形状に肥厚する平縁口縁に斜線が附される土器である。斜線の状態はそれぞれ異なるが口縁形状が共通するところから，ここでは一括してあつかった。120は短かい斜線で押圧ぎみに引いている。121は112～115に類似し細く浅い斜線が，ややカーブをえがいて引かれる。なお，121には口縁肥厚部下に2本の平行沈線が横に引かれている。器壁は119～121共内外面横にナデられている。特に121のナデは丁寧である。色調はいずれも灰褐色を呈する。胎土は細かい長石粒を主にする。口縁部肥厚の手法は器壁本体を口縁部端近くまでもってきて，それに粘土をかぶせるように前後から貼りつける。

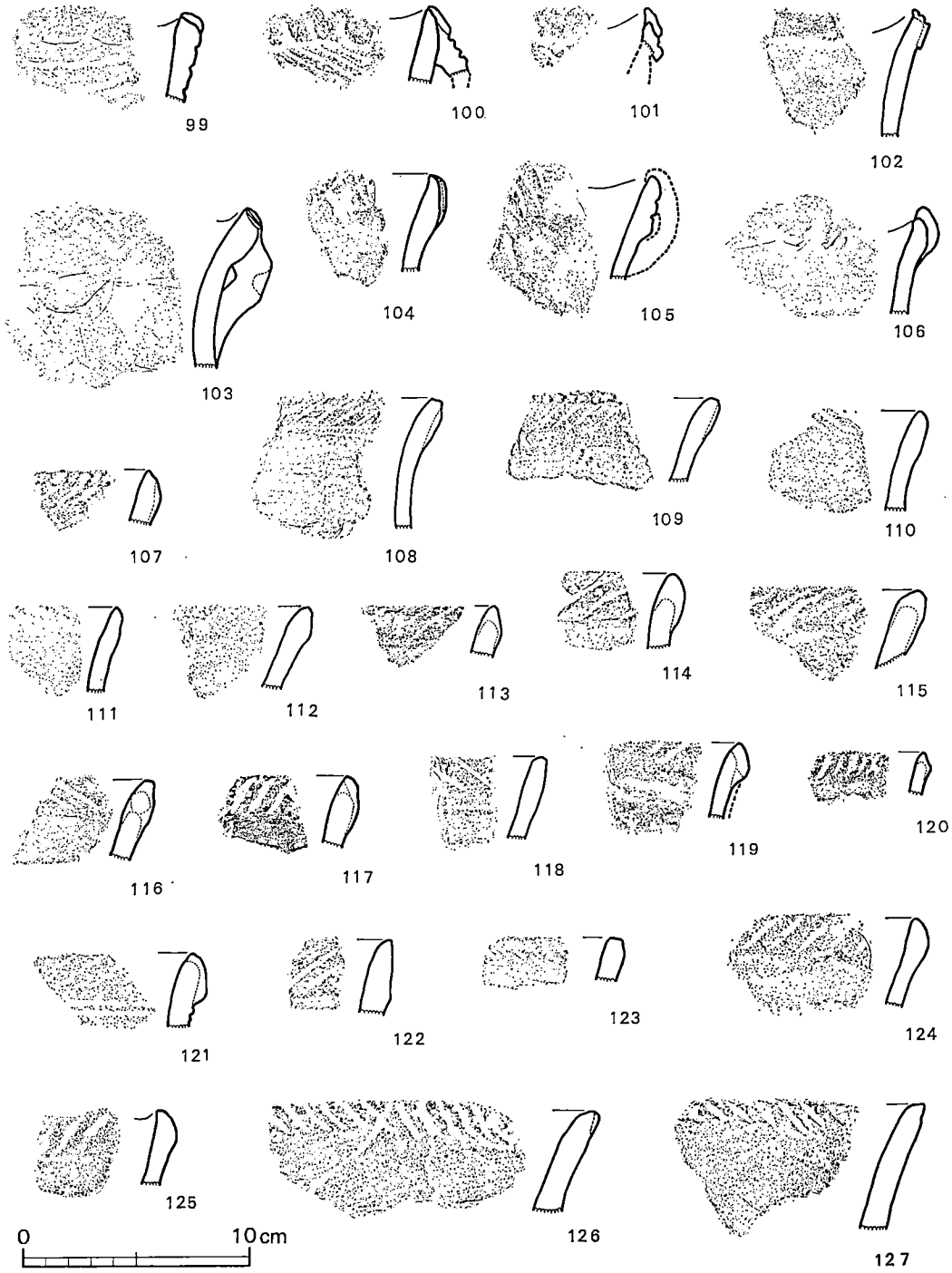
B—6　122は先細りぎみに終る平縁口縁の肥厚部に，施文具の先端を左下方に斜めに押しつけて斜線を附すものである。胎土には極く細かい長石粒を含む。

B—7　123は口縁上端が平らな角ばった平縁口縁に斜線を附した土器である。口縁部肥厚はない。口縁先端付近の外面を横にナデ斜めの平坦部を作りそこに短かく浅い斜線を右下りに附している。器壁は全面丁寧にナデられ研磨に近い状態に仕上っている。色調は暗褐色を呈する。胎土は細かい長石粒を主に含む。

B—8　124・125は肥厚した波状口縁にやや太めの斜線を左下りに附す土器である。口縁部内面がやや内反りになる特徴をもつ。器形的には波状口縁で4—5個所に山部を作る深鉢形の土器になると思われる。胎土は極く細かい長石粒を主にわずかに角閃石を加える。

B—9　126・127は肥厚のない平縁口縁に太くて深い斜線が附される土器である。口縁上端は横にナデられ平坦面をなし角ばる。斜線は口縁上端を一部切って深く引き下げられる。器壁は内外面共，粗い刷毛状施文具でナデられている。全体に作りは雑で一部ナデの下に条痕を認めることができる。器形的には他の斜線を附す土器に比し口縁下の屈曲が弱く，ほぼ直線的に開く口縁をなす。器壁も厚く口径もかなり大きいと思われ，他の斜線を附す土器とは趣きを異にする。色調は灰褐色。胎土は細かい長石粒が主である。

B—10　128は内彎する波状口縁の上端部に斜線が附される土器である。口縁山部で斜線方向を異にすると思われ斜線が交叉している。器壁はうすく内外面共刷毛状施文具でナデられている。内面と外面とでは，刷毛状の痕跡が異なり内面に比し外面が粗い。内彎しながら外へ開く口縁で，器形は一度すぼまりながら外へ開く波状口縁の深鉢形を呈すると思われる。色調は明褐色。胎土は細かい長石粒を主に含む。この土器は器形・斜線の附し方等他の一群の土器と異なる。柏田遺跡出土の縄文後期土器を特徴づける波状口縁の山部を中心に斜線を附し，口縁が内彎して開く深鉢形土器の一部と思われる。従来言われていた斜線文土器とは明確に異なり別個に分類すべきであったが，一応ここでは斜線文のなかで説明した。



第25図　住居跡周辺出土土器(1) 拓影 (1/3)

C形（第26図130，141，142，144）

内外面共ていねいにナデられた平縁口縁の端部外側に貝殻疑似縄文を附す土器である。器壁はていねいに調整されるのが特徴である。器形的には鉢形を呈すると思われるものが多いが，細部に差異が認められ一概に鉢形のみとは断定できない。

C—1　130はゆるやかに開く平縁口縁の端部外側に貝殻疑似縄文を附す土器である。貝殻圧痕はやや太めで一定の間隔をもって右下りに附される。あたかも斜線を意識したかのようである。器壁はうすく内外面共ていねいにナデられている。器形的には口縁下でゆるく屈曲する鉢形を呈するかと思われる。なお，口縁上端はやや丸みがかった平坦面をなす。胎土は細かい長石粒を主に，わずかに金雲母と石英粒を含む。

C—2　141・142・144，はやや開きぎみに直行する平縁口縁の端部外側に貝殻疑似縄文を附す土器である。いずれも内外面は磨かれたように，ていねいに調整されている。ナデであるか磨きであるかは不明。口縁先端近くでわずかに屈曲ぎみに外に反る器形上の癖をもつ。器形的には土器が細片で確定はできないが鉢形をなすかと思われる。胎土は細かい長石と雲母粒を主に含む。

D形（第26図131）

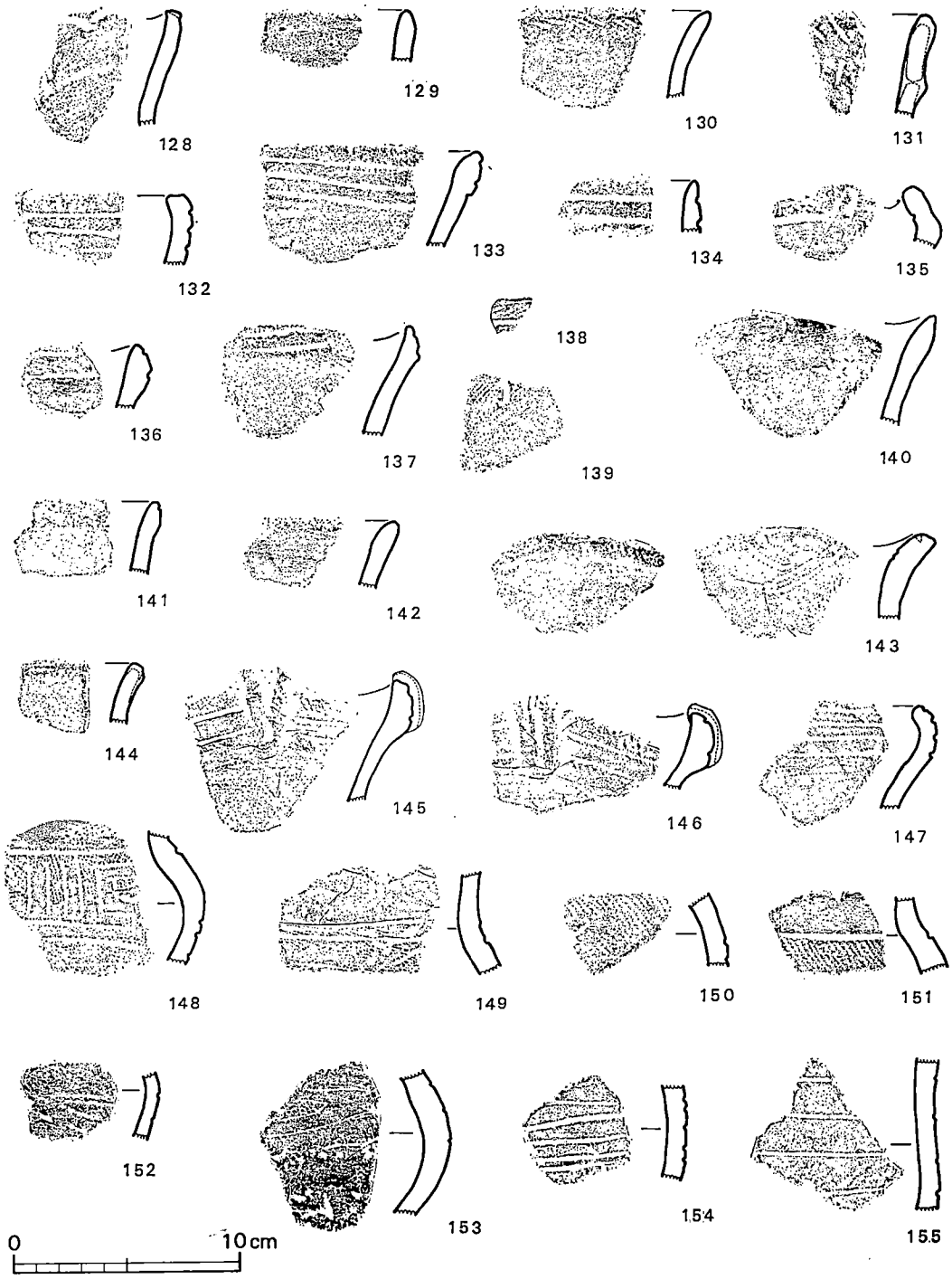
平縁口縁に上下二段の山形の肥厚部を作り，肥厚部に斜線を附す土器である。ここでは131，1点のみである。

131は端部が平坦面をなす平縁の口縁に，上下二段の山形の肥厚部を作り，肥厚部に斜線を附す土器である。斜線は引いたと言うより刺突に近く上下で方向を異にする。文様的には稜杉状を呈する。山形部の肥厚手法は，器壁本体を二段目の山形部で内傾ぎみに角度を変えて接合しその先端部と接合部に粘土を張り上下二段の山部を形成している。器壁は内外面共横にナデられる。胎土は長石粒を主に雲母と石英粒を含む。色調は赤っぽい褐色を呈する。文様の附し方，肥厚手法，色調等やや他と趣きを異にする土器である。

E形（第26図132～134，136，137）

数本の沈線を口縁に施す土器である。沈線はほぼ平行に引かれ，沈線間に貝殻疑似縄文を附す例が多い。沈線の状態・器形・色調等それぞれ異なる。器形・文様構成等を考慮した場合，分類上区分されなければならない土器を含むと思われるがここでは一括してあつかった。系統論・型式論等筆者に不分明な点が多く力量不足から混乱する危険をさけたしだいである。以下の説明で個々の特徴をできるだけ詳しく記し一括してあつかう不備をおぎないたい。

132は内傾ぎみにほぼ直行する平縁口縁の土器で口縁外面を中心に横走沈線が附される。小破片で沈線の本数・文様構成等は不明。沈線はかならずしも平行ではなく，上から1本目と2本目の沈線はそれぞれ右上りと右下りの傾向をみせている。器壁は内外面共ナデられている。疑似縄文は明確には認められない。沈線間に疑似縄文らしき痕跡が認められなくはないが，ナ



第26図　住居跡周辺出土土器(2) 拓影 (1/3)

デられていて確定はできない。仮りに疑似縄文があったとしても基本的にはナデによって消すものと思われる。器形的には浅鉢形を呈すると思われる。色調はやや赤味がかった褐色。胎土は長石粒を主に雲母を加える。

133はやや肥厚した平縁の口縁に3～5本の横走沈線を巡らす土器である。沈線はほぼ平行に走るが雑でゆがんでいる。貝殻疑似縄文の有無は器面の状態が悪く不明。器形的には深鉢形を呈すると思われる。ゆるく外反する肥厚した口縁の形状は第25図105等のA形土器に比較的類似する。色調は灰褐色。胎土は長石粒・黒雲母・酸化鉄粒(?)を含む。

134は先端になってすぼまり直行する平縁口縁の肥厚部に横走の平行沈線を施こす土器である。沈線の本数・文様構成等は土器が細片の為不明。貝殻疑似縄文の有無は器面の状態が悪く不明。胎土には石英・長石・雲母粒を含む。良く精選されている。色調は白っぽい灰褐色を呈する。なお，形状・文様・胎土・色調共に他の土器と異なる。数本の平行沈線を口縁に巡らす晩期の土器かと思われる。

136は肥厚する平縁の口縁に2本の横走沈線を巡らす土器である。沈線はゆるく山形に肥厚する口縁の先端寄りの一辺に附される。下部はていねいにナデられる。沈線間には貝殻疑似縄文が附される。内外面共比較的ていねいにナデられる土器で，その断面形状は第25図119等に類似する。色調は灰褐色。胎土は長石粒を主に雲母と石英粒を含む。

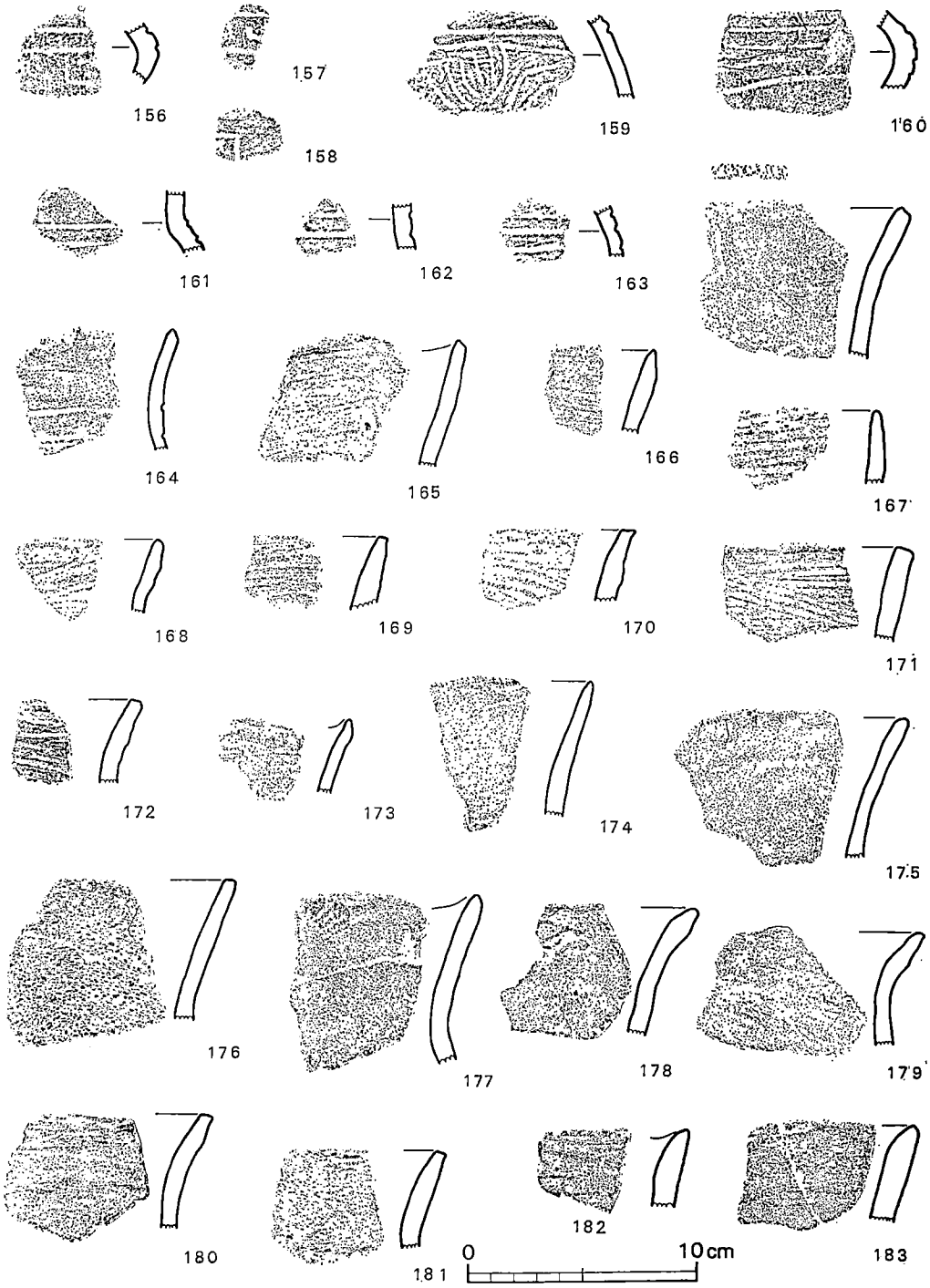
137は内面先端が内彎ぎみに外反する波状口縁の土器で肥厚したようにやや内傾する口縁外面に2本の横走沈線を施す。沈線間に貝殻疑似縄文を附す。口縁部先端付近の内面に一本沈線状の凹みが横に走る。口縁部は肥厚したように見えるが，斜線を附す土器にみられるような明確な肥厚手法は認められない。器壁は内外面共ナデられている。色調はやや赤みがかった明褐色。胎土は長石粒を主に雲母と石英粒を含む。他の土器に比し石英粒の混入が多い。器形は鉢形を呈すると思われる。外面が直線状に返る点や，内彎ぎみの内面，口縁が内側にやや傾斜し，その下部と器壁傾斜を異にする等，細部にわたって器形上の特徴が認められる。全体に，本遺跡の一群の土器に比し後出的な感じを与える。

F形（第26図140，143）

口縁端部の外面に貝殻疑似縄文を附す波状口縁の土器で，内外面共磨かれたようにていねいに調整される。143は内面に文様を有し140とは形状もやや異なるがここでは一括してあつかった。

140は肥厚ぎみにややふくらむ波状口縁の土器で，口縁先端はとがりぎみに終る。口縁端部外面には貝殻疑似縄文が附されるがナデの為その一部を認める程度である。器壁は内外面共ていねいに調整されている。特に外面はていねいに磨かれている。胎土は長石粒を主に雲母と石英粒を含む。器形的には波状口縁の鉢形を呈すると思われる。

143は端部がやや角張りぎみの平坦面を作る波状口縁の土器で貝殻疑似縄文を施す。疑似縄



第27図　住居跡周辺出土土器(3) 拓影 (1/3)

文は口縁端部外側に附される。内面には口縁山形部を中心に文様が附される。山形部の頂点に刺突を附し，その左右に2個の刺突を起点に沈線を直線状に巡らす。沈線内には貝殻疑似縄文が施される。刺突と沈線と疑似縄文を組み合わせた文様は，山形頂部の刺突を中心に左右から上下交叉するように延びる。内面の文様は口縁山形部に限定されると思われる。外面の文様は口縁端部を全周すると思われる。器壁は内外面共，磨かれている。胎土は長石・雲母・酸化鉄粒(?)を含む。粒子は細かく精選されている。

G形（第26図145～147）

口縁先端付近がキャリパー状に内彎する土器である。口縁外面に2～4本の横走沈線を施す。器壁は内外面共ていねいに調整される。特に145の外面はていねいに磨かれている。145・146と147は口縁形状・貼り付けの有無・疑似縄文の状態等差異が認められるが，キャリパー状の口縁を基本にする点や，胎土・色調・器壁調整等に共通性が認められるところから，ここでは一括してあつかった。

北久根山式相当の土器と思われる柏田遺跡出土の他の一群の土器とは，口縁形状を明らかに異にする。土器を形成する系統が異なる一群と考えられる。

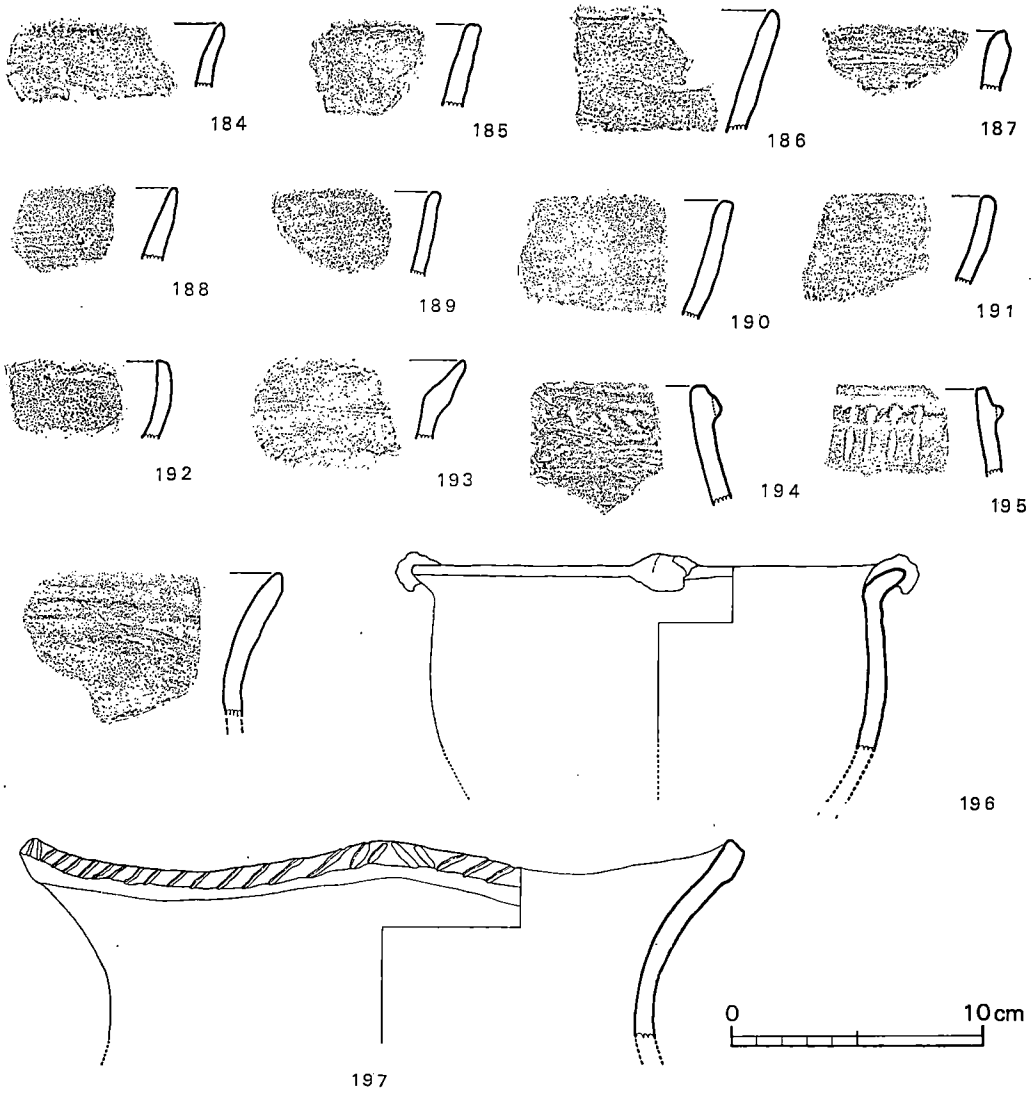
145はキャリパー状に内彎するゆるい波状口縁の土器である。口縁外面の波頂部に縦に粘土を貼り付け，その頂点に刺突を附し下部に向けて沈線を施す。貼り付け部は沈線によって左右に分けられ，あたかも2本の粘土ひもを連らねて貼り付けたように見える。貼り付けを中心に2本の横走沈線が巡らされる。2本の沈線に分けられた口縁部分には貝殻疑似縄文が附されている。2本の沈線にはさまれた部分は磨かれ疑似縄文はすり消されている。貼り付け部分にも貝殻疑似縄文が附される。器壁は内外面共磨かれる。色調は灰褐色。胎土は長石・雲母粒を含む。

146はキャリパー状に内彎するゆるい波状口縁の土器である。文様及びその構成は145に類似する。粘土貼り付けの頂点に刺突を施さない点が異なる。又，口縁形状もやや異なる。器壁は内外面共磨かれる。色調は灰褐色，胎土は長石粒を主に雲母を含む。全体に146と類似する特徴を有し同一時期，同一系統の土器と思われる。

147はキャリパー状の口縁に4本の横走平行沈線を巡らす平縁口縁の土器である。器壁は内外面共ていねいにナデられている。したがって貝殻疑似縄文はすり消され一部にわずかに認められるにすぎない。色調は灰褐色。胎土は細かい長石粒を主に雲母を含む。

胴部（第26図148～第27図163）

胴部破片はいずれも小片で，全体の文様構成をうかがうことはできない。したがって，文様の一部をもって分類を試みなければならない危険がある。文様は沈線のみのものと，縄文と沈線を組み合わせるいわゆるすり消し縄文のものとに大別される。なお，沈線のみの土器には縄文がすり消されてしまっている土器を含む。土器が小片であることから器形の区分はせず文様



第28図　住居跡周辺出土土器(4) 拓影 (1/3)

を主体に一括した。文様の附し方等には細部に差異が認められ以下個々に区分し説明する。

A形（図148～151）

縄文と沈線を組み合せる文様を胴部上半に附す土器ですり消される部分は少なく縄文を多く残す。縄文は（貝殻の疑似縄文・148～149）と（縄文・150～151）に分離される。後者が縄文を主に沈線を加えたという感じに比し，前者は縄文と沈線が組み合うことによって，文様を構成するという違いが感じられる。又，小破片で確定はできないが，前者（148・149）にはすり

消しが見られ，後者（150・151）にはすり消しは認められないかと思われる。すなわち文様形成過程での手法に「疑似縄文」＋「沈線」＋「すり消し」と「縄文」＋「沈線」という差異があるのではなかろうか。文様構成的には上下に平行沈線を巡らし，その間（胴部上半）を文様帯とするものであると思われる。確定はできないが特に148についてはその可能性が強い。縄文の附し方，文様構成上に占めるその意味等を主に考えた場合，前者（148・149）と後者（150・151）は区分されなければならないが，ここでは一括してあつかった。

148は胴部上半を文様帯とし疑似縄文・刺突・沈線・すり消しを組み合わせて文様を構成する。文様帯の区画は上下共1本の横走沈線でなされる。文様帯内には右下りの貝殻疑似縄文が施されている。文様帯内の疑似縄文は直線をモチーフとした沈線によって区画され，その一部は規則性をもってすり消される。すなわちこの土器では刺突を起点に4本の垂下線が引かれその間がすり消される。又，垂下線の右は方形区画状に二重に沈線が引かれその間はすり消される。器形的には，ゆるいカーブをえがく胴部の丸い鉢形を呈する土器と思われる。色調は暗褐色，胎土は長石粒を主に雲母を含む。

149は胴部上半を文様帯とする鉢形の土器と思われ，文様は貝殻疑似縄文と沈線によって構成される。文様帯を区画すると思われる2本の平行沈線が胴部と頸部の境付近に横に引かれる。沈線下には貝殻疑似縄文が不規則に施こされる。又，その貝殻疑似縄文の文様帯に沈線が附されるが詳細は不明。すり消し部分は認められない。この土器で見る限り貝殻疑似縄文と沈線で文様は構成されると思われる。ただし土器が小破片で特に文様部分の下部を欠失している為，はたして文様帯として区画を有するか，文様構成を形成する手法にもっと他の要素がないか等について明確な断定はできない。ここでは類推をおこなったにすぎない。器形的には148に類似しており鉢形を呈すると思われる。器壁は文様部分を残して内外面共よく磨かれている。色調は暗い灰褐色，胎土は長石粒と金雲母を含む。

150・151はいずれも胴部上半に縄文を施す土器で，文様部に沈線を附す。文様構成等は不明。器壁は文様部分を残して内外面共ていねいに調整されている。ナデであるか磨きであるか断定できない。器形的には鉢形を呈すると思われる。色調は150が黒褐色，151が褐色。胎土は両者共，細かい長石粒を主に雲母を加える。

B形（第27図152～154）

胴部に沈線のみの文様を附す土器で，ゆるい曲線で文様構成される。器壁外面はていねいにナデられる。153にはわずかに貝殻疑似縄文の痕跡が認められるがナデの結果すり消されている。つまりこの一群の土器は，本来縄文を附すにしても，その上をナデか磨きを施すことによって縄文を消し，沈線のみを文様とする土器と思われる。152・153と154では沈線の状態が異なる。前者の沈線は細く浅い。後者の沈線は前者に比し，やや太めで深い。又文様も，前者には船のヘサキ状に連なる沈線が認められるが後者にはない。文様状態に152・153と154では一

定の差異が認められることから，厳密には両者は区分される可能性もあるが，ここでは一括してあつかう。

152・153は胴部に細く浅い沈線で，ゆるい曲線文様をえがく。船のヘサキ状に連なる沈線が附されるのが特徴である。貝殻疑似縄文の痕跡がわずかに認められるが，基本的には，ナデあるいは磨きによってすり消され沈線のみを文様とする。器壁外面はナデあるいは磨きによって調整される。色調は152が黄褐色。153が灰褐色。胎土は両者共，長石粒を主に雲母を加える。器形的には鉢形を呈すると思われる。

154は胴部に，ゆるい曲線を含む平行沈線で文様をえがく土器で沈線は152・153に比しやや太めで深い。船のヘサキ状に連なる沈線文様は認められない。器壁外面はナデあるいは磨きによって，貝殻疑似縄文をすり消している。したがって基本的には沈線のみを文様とする。色調はやや灰色がかった褐色。胎土は長石粒を主に，わずかに角閃石と石英粒を加える。

C形（第27図155）

155のみで屈曲のゆるい，ほぼ垂直に立つ胴部に横走の平行沈線が引かれる。沈線の間隔が約1.5～1.7㎝あり幅広である。器壁外面はナデられている。内面も粗くナデられているが，貝殻条痕が全面に残る。色調は赤みがかった褐色。胎土は長石粒を主に，わずかに雲母と角閃石粒を含む。器形的には，深鉢形を呈するかと思われる。

D形（第27図156～158）

胴部に直線を組み合せた文様を附す土器で，かぎの手状，あるいは方形区画状の文様構成を一部に有する。いずれも小破片で全体をうかがうことはできない。156には貝殻疑似縄文の痕跡が認められる。しかし156～158共，器壁外面をナデており，縄文は消され沈線をもって文様の主体をなすと思われる。いずれも胴部破片で器形的には鉢形を呈すると思われる。文様構成は不明。器壁は内外面共，ていねいにナデられる。色調は156が明褐色。157・158は黒っぽい褐色。胎土は156が長石粒を含む。157・158は長石粒を主に雲母を加える。厳密にみれば156と157・158は貝殻疑似縄文の有無・色調・胎土等やや異なるが，文様の状態が類似するところから一括した。いずれにしても小破片であり断定することはできない。

E形（第27図159～163）

いずれも貝殻疑似縄文の一部をすり消し，沈線と組み合せて文様を形成する土器である。沈線間は交互にすり消されるのを特徴とする。なお，いずれも小破片で全体の文様構成は不明である。したがって文様構成の差異にはふれることができない。その点一括してあつかうには問題も残る。わずかにうかがえる点として，渦巻き状の文様が認められる土器（159）と横走平行沈線を主体にする文様の土器（160）とに分けられる。159と160はいずれも沈線間を交互にすり消すような，共通性を見うけられるが，文様構成上は明確に異なる。おそらく時期差・系統差に関わるものかと思われる。以上の点からすれば（159）と横走平行沈線を主体にする文様

の土器（160～163）とは区分されるかと思われる。色調は159・162が赤味がかった褐色。160・161・163が褐色。色調の差は個々あるが全体に他の土器に比し，やや赤みがかかった明るい感じを与える一群である。胎土はいずれも長石粒と石英粒を含む。石英粒を他の土器に比し多く含む特徴がある。

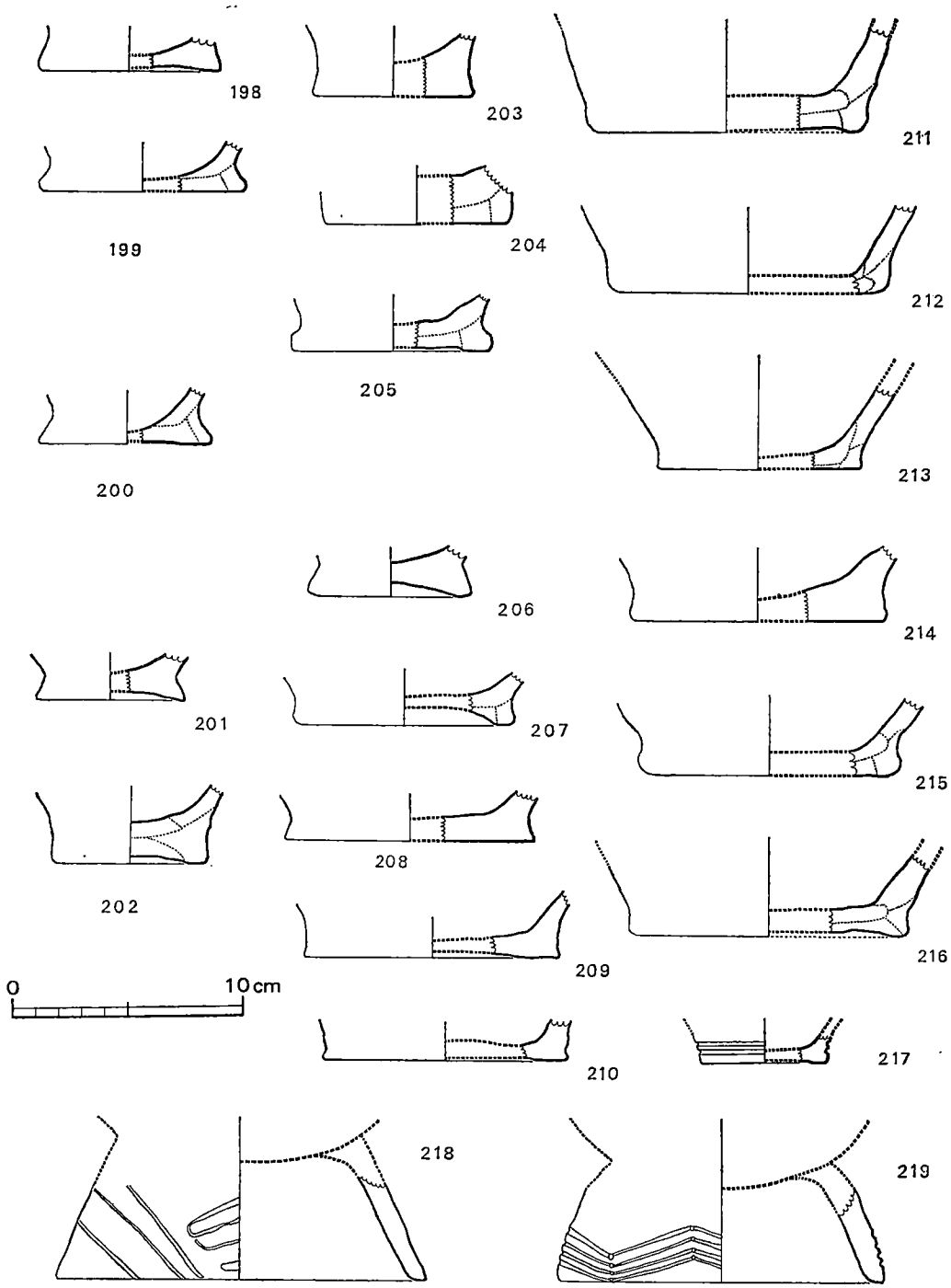
無文土器（第27図164～第28図193）

ここであつかった土器には，条痕文土器と無文土器の２者が含まれる。当然両者は区分されなければならないが，筆者の力量では無理であった。したがってここであつかう無文土器には条痕文土器と無文土器が含まれることを，まずもって断っておきたい。基本的には他の個所であつかう分類に準ずることは言うまでもない。ここで無文土器としたのは単純に文様を有さない土器の事を指す。一括してあつかったなかで，まず注意したのは器壁の状態についてである。条痕を強く残す土器とナデなどによって条痕があまり認められない土器とに区分して，そのなかで各器形等を見ていった。164～173が器壁に条痕を強く残す土器である。174～193が条痕の残りが顕著でない土器である。尚，174～193のなかには磨きに近い程，丁寧にナデられた土器も含み，条痕の有無を中心にナデの状態なども考えに加えたら，もっと多く区分される。条痕の施文具には，アナダラとヘナタリが考えられるが筆者の力量不足からその断定を避けた。一般に言える事は条痕を強く残す土器の施文具がアナダラだと思われることである。以下各土器の説明に移りたい。

164～173は器壁外面に条痕が強く認められる土器である。平口縁（163～172）と波状口縁（164・165・173）の土器に分けられ数的には平口縁が多い。一般に平口縁の土器の方が器壁は厚いようである。口縁部形状は種々異なり，反りぎみに外反するもの（164・172・173），内彎ぎみに外反するもの（165・167・168），直行ぎみに外反するもの（166・169～171）などがある。口縁部先端の形状も種々異なり，丸く収まるもの（167），尖り気味のもの（164～166・168・173），角張るもの（169～172）などがある。器形にも大小が認められる。以上の様な差異が何を意味するものであるかは不明。

174～194は条痕が顕著に認められない土器である。ナデによって条痕が消えているものと施文具がヘナタリのため強い条痕が認められにくいものとに区分されると思われる。ここでは区分の断定は避けた。174～176はほぼ直線状に外反する口縁の土器で，おそくヘナタリを転がしたと思われる浅い条痕様の痕跡を器壁外面に認めることができる。口縁端部はやや角ばりぎみのもの（176）もあるが一般に角が取れた丸みがかかったものが多いようである。

（177～180）は強く屈曲ぎみに外反する土器で特に178・179にその特徴は顕著である。177は波状口縁で他は平口縁である。なお177については屈曲も弱くその形状，器壁の状態など（174～176）の土器に類似する。178・179は他の一群の土器の色調が一般に暗褐色であるのに対し，赤みがかかった褐色を呈する。



第29図　住居跡周辺出土土器(5) 実測図 (1/3)

181～187の土器は口縁がほぼ直線状に外反する土器で条痕は強く認められない。

口縁部内側が内傾ぎみのもの（181～184）と直線状のもの（185～187）とがある。特に 184は，屈曲ぎみに口縁部内側が内傾する土器で他の土器とは，やや形状を異にする。一般に条痕の上はナデられているものが多い。口縁端部には角張るもの（181・185・186）と，尖り気味のもの（182～184・187）がある。

188～192は口縁が内彎しながら開く土器で，器壁は薄いものが多い。特に 192の内彎は顕著である。口縁がほぼ直線状に外反する他の土器とは器形を，やや異にすると思われる。器形は円筒状の胴部が，ややすぼまる上に内彎しながら開く口縁を附ける土器と思われる。器壁はナデられるものが多い。

193は口縁途中が一回膨らみ，やや段をなすように屈曲して開く口縁の 土器である。先端はやや尖がる。器壁は粗くナデられているが，条痕は残っている。器形は188～192に類似する土器と思われる。

以上が，ここで無文土器としてあつかった土器の概要である。条痕を主に問題とした場合，単に施文具の差異ばかりでなく，施文の方法，器壁の状態等にも違いがあるようである。ここでは明確にし得なかったが，そのような差異が土器の器形とも関係することが指摘できそうである。今後，条痕土器，無文土器などは施文の方法，器形の差異に注意しつつその機能・用途の解明がなされなければならないと思われる。有文土器の重視から条痕土器・無文土器の重視へ向わなければならず，又分類においても文様を中心にした分類からの脱却をはからなければならないであろう。器形を問題にした場合，少なくとも二つには大別できそうである。

口縁がほぼ直線状に外反する土器と内彎して開く口縁の土器がある。口縁端部や細部の形状等を考えれば，もっと多くの器形上のバラエティが考えられる。特に斜線文の土器と対比した場合，条痕土器・無文土器には器形上の差が多いのが顕著である。土器の使用の痕跡などの検討をも加えて今後，その器形上の種々の差の意味を明らかにしなければならない。特に条痕土器，無文土器については重要な課題であろう。ここであつかった無文土器には時間的制約上，詳細な検討ができなかった。今後に託したい。

刻み目突帯文土器（第28図194～195）

194・195の 2 点で内傾ぎみに直行する口縁に粘土紐を帯状に貼り付け，その上にヘラ状，あるいは棒状の施文具で連続に押圧を加えた土器である。晩期の突帯に比し雑な貼り付け方で，又刻目も押圧を加えただけで鈍い。特に胎土は晩期のものと明確に異なる。晩期の土器に比べ胎土は精選されない。194はやや大きめの石英粒に長石粒と雲母を加える。雲母は小さく量も少ない。195は長石粒と石英粒を含む。色調は194が暗褐色で，195が明褐色。器壁は両者共粗くナデられる。194の器壁外面には横方向の条痕が認められる。195の器壁外面には刻目（押圧）から連続して短かく浅い垂下線が引かれている。柏田遺跡出土の縄文後期土器が一般に細かい長

石粒を主に含み，あまり石英粒を含まないのに対し，194・195に多く石英粒が含まれるのは注目される。

A 7区付近3層出土土器（第28図196～199）

A 7区付近3層出土の土器で破片も大きいことから他と分離して一括してあつかった。196は深鉢的な文様，形状の特徴をもつ鉢形土器で，197は深鉢形土器である。いずれも有文土器。196は平口縁の土器で，口縁の4個所に瘤状の粘土貼り付けを施こす。胴部は，ゆるく内彎しつつほぼ真直ぐに立ち，口縁のところで，外側に曲げられる。器壁外面は比較的ていねいにナデられる。胎土は細かい長石粒を主に，雲母と石英粒を加える。197はやや肥厚ぎみの波状口縁端部に斜線を施す深鉢形土器である。波状口縁の頂部に当るところに限り，2～3本の斜線を単位に交叉状に方向を変えて附す。大きく外反する口縁をなし胴部の屈曲はゆるい。器壁はヘラ状の施文具で良く調整されている。この土器は柏田遺跡出土の縄文後期土器を特色づけるもので，出土量も少なくない。

底部（第29図198～第30図242）

底部の分類に際しては，底部接合の差異として認められる成形手法と形状の特徴の2点を考慮して区分をおこなった。成形手法上3つの異なるタイプがあることを確認することができた。明確に形状が異なる2つのタイプを加えて，ここではつごうA～Eの5つのタイプに分類した。明確に形状が異なるD・E形を除く，A・B・C形については形状の特徴より成形手法の差異を重視し区分をおこなった。したがって，A・B・C形には形状的には異なるものが含まれる。なお，A・B・C形として区分した底部は，明確に接合の把握ができたものに限った。不明瞭なものに関してはA～Eのタイプから分離して一括してあつかった。ここで確認できた底部接合手法は3タイプであるが，これが柏田遺跡出土土器の接合手法の全てであるかどうかは不明である。以下A～Eの5タイプを中心にした説明をしたい。

A形（第29図198～207）

比較的底部径の小さい土器に見られる「形」で，成形において，粘土紐で輪を作り短い脚状の台部となし，その台部に器壁本体を斜めから接合し，脚状台部に粘土を埋め込むことによって底部を作るタイプである。したがってA形では基本的には「脚状台部」・「器壁本体」・「埋め込み部」の3部分から底部が作られることになる。この3部分に器壁本体と底を補強する意味で，底部に上張り，あるいは，器壁本体と埋め込みを粘土で斜めに押さえるという方法が加えられる場合がある。202・204・205等はその一種だと考えられる。底部を補強する種々の方法が他にも考えられるが，要するにA形の場合上述の3部分を組み合わせて底部を作るもので，特に「脚状台部」にその特徴をうかがうことができる。ただし底部を形成していく過程での各部分の製作工程まで明らかにすることはできなかった。以上の様な成形手法をとるが故に，底部下面をよく観察すれば脚状台部の輪郭を認めることができる。埋め込み部が浅く凹み，その

凹みを取り囲んで幅約0.6〜1.4㎝の高まりが円形にまわる。なお，この円形にまわる脚状台部が，底部径になる。したがって成形段階での脚状台部の大きさが底部径を規定することになり，ひいては器形及びその大きさにも関係するかと思われる。次にA形の底部の特徴として，器壁がナデられ，他の土器に比し丁寧に作られるという点を指摘できる。器形の形状的には以下の特徴が認められる。

①底部径が小さいものが多い。②底がわずかに凹み上げ底になるか，平底かに限定される。③底部裾は広がるか，ほぼ真すぐ立つかのどちらかで，特に広がるものの方が多い。④器壁本体から底部へかけての内面のカーブが，ゆるやかで強く屈曲しない。以上の諸特徴について，それぞれ以下の事が指摘できる。

①底部径の大小は，器形の大小に関連する一定要素の一つとして考えられるであろう。つまりA形の底部が小さいということは，A形の土器の器形の大きさを推定させると思われる。もちろん底部の大小のみをもって器形の大小を断ずることができないのは言うまでもない。底部径にその形状をも考慮することによって器種の推定もできる可能性があるのではなかろうか。

②底がわずかに凹み，上げ底状になるか，平底になるかの差異は成形過程での「埋め込み部」の状態に起因するものである。すなわち「脚状台部」に「埋め込み部」が完全に平らに埋め込まれるか，中心部に向けてやや斜めに埋め込まれるか，完全に埋め込まれず凹むのか，等の違いである。

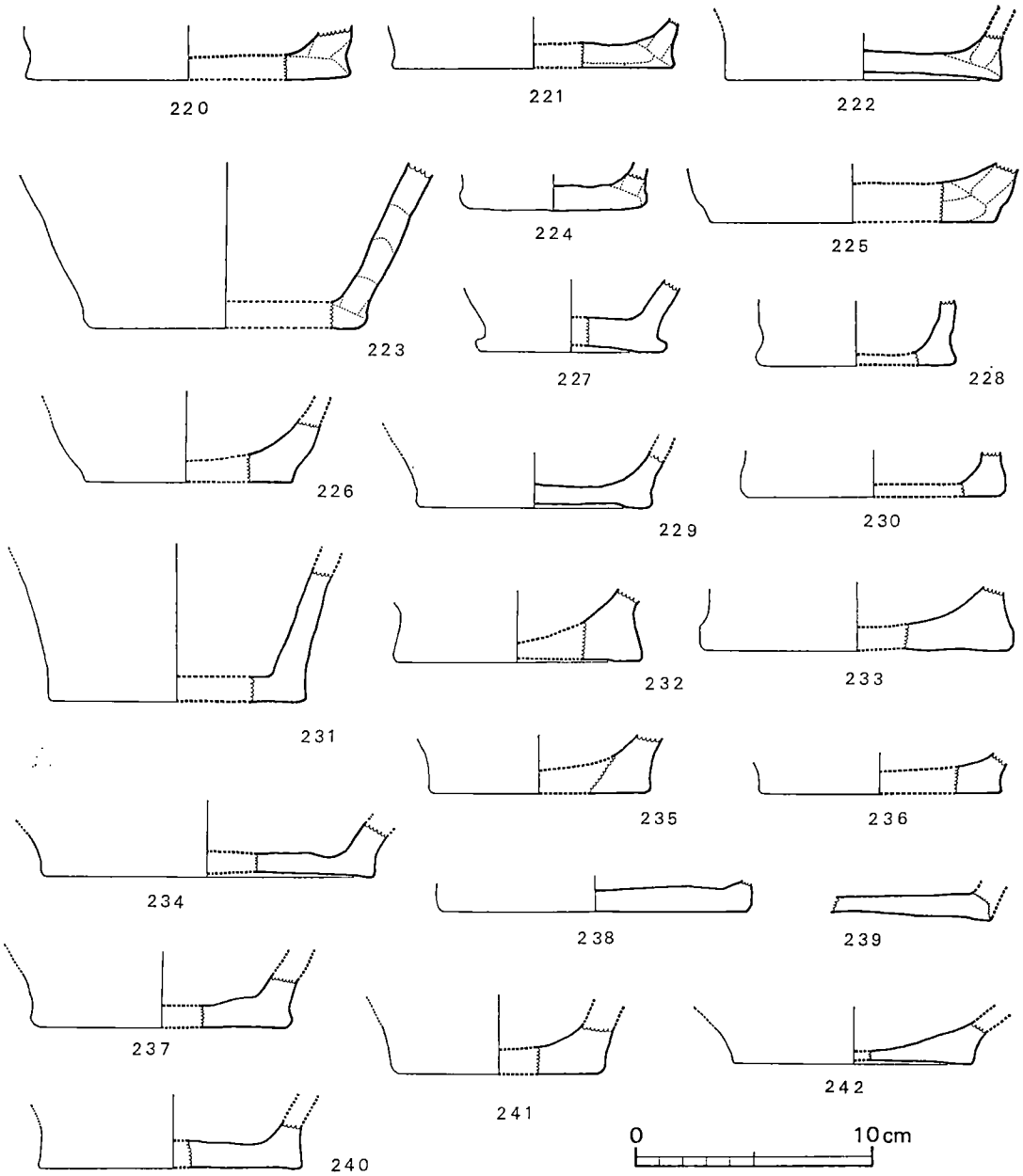
③底部裾が広がるか，ほぼ真すぐ立つかのちがいは「脚状台部」のすえ方，形状等に起因するものである。裾が広がるものが多いのは「脚状台部」の機能に，底部の補強と器壁本体を支えるという二重の性格が考えられるからである。A形底部の器壁本体はB・C形に比し外方により広がるように接合される。その為，小さい底部で器壁本体をささえるには，粘土の可塑性，重量等を考えた場合，裾広がりの脚状台部にした方がよいと思われるからである。もちろん成形上の意味からだけでなく土器の器形と密接に関係することは言うまでもない。

④器壁本体から底部にかけての内面のカーブが，ゆるやかで強く屈曲しないということは，器形上の特徴として注意されなければならない。又，底部裾の広がり，器壁本体が斜めの広がりをもって接合される等をA形底部に共通する特徴として考えれば，この土器の器種をも想定しうる可能性があるのではなかろうか。

以上の4点を中心とする諸特徴を総合すればA形底部＝精製の鉢形土器という成形手法と器形の関連を指摘できるかと思える。

B形（第29図211〜213・215〜216）

2枚の平板状粘土を張り合わせ，二重底を作り，それに器壁本体を斜めから接合し，底と器壁本体を横から粘土で補強して底部を作るタイプである。したがってB形は基本的には「二重の円板状粘土張り合わせ部」・「器壁本体」・「周囲補強部」の3部分から底部が作られるこ



第30図　住居跡周辺出土土器(6) 実測図 (1/3)

とになる。周囲補強部及び二重の円板状粘土張り合わせ部の接合の違いによって，底部形状が種々異なってくる。器壁本体と底の接合部の内側を粘土で張って補強する場合が当然ある。器壁にはナデが施されたりするが雑で，粗い条痕を残すものが多い。器壁本体から底部へかけて

のカーブもA形に比し屈曲が強くなる。又，器壁本体はA形に比し広がらず，底に対して立ちぎみに接合されるものが多い。底部径はA形より大きく11～12㎝前後のものが多い。

C形（第30図220～225）

円板状の粘土で底を作り，それを台部にして器壁本体を斜めから載せて接合し，その前後，つまり接合部の内側と外側を粘土で張って補強して底部をつくるタイプである。円板状粘土の端は外側に斜めに成形され，その斜めの成形部に器壁本体は載せて接合される。「円板状台部をなす底」・「器壁本体」・「周囲補強部」の3部分から底部が作られる。円板状台部をもって底とし，それに器壁本体を斜めから接合し，接合部を中心に内外面を補強するという点では，B形と成形手法は基本的に一致する。B形と違うところは，円板状台部の底を二重張りで作るか，一枚の粘土で作るかという点と器壁本体を接合するために円板状台部の端を斜めに成形するか，しないかの差だけである。B形に比しやや大形の底部が多い。底部が大きいということは円板状台部の端を斜めに成形して器壁本体を載せる手法と，粘土の重量，可塑性を考えた場合関係すると思われる。A・B形にくらべ器壁の調整が雑で，ほとんどが条痕を残している。又，胎土も非常に粗い。以上の点を考慮すれば器形的には粗製の深鉢が想定される。

D形（第29図218～219）

脚台をなす底部である。平底の底部とは一目で形状が異なりここでは形状差をもってD形とした。柏田遺跡出土の底部を構成する一部として重要である。いずれも脚部裾付近に文様を附している。

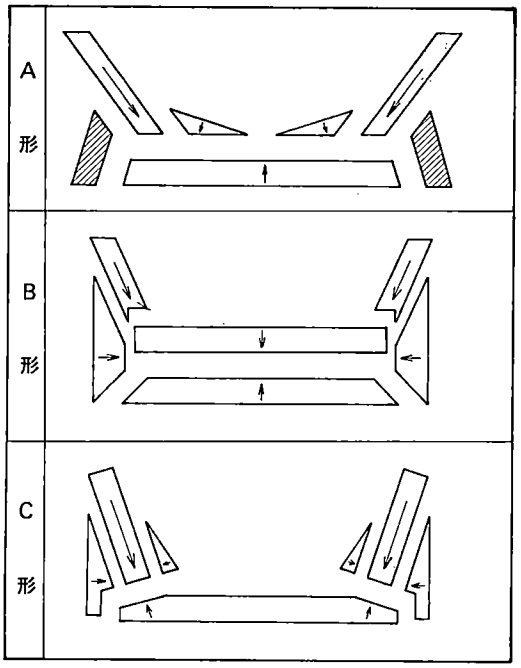
218は脚がほぼ直線状に開いている。脚部中程から下にかけて，粗い周結沈線を施し，沈線に囲まれた部分に雑に貝殻疑似縄文を附している。器壁内面は粗くナデられている。色調は褐色。胎土は細かい長石粒を主に雲母を含む。

219はやや内彎ぎみに開く脚である。脚部中程から以下に縦に刺突列点を4個連らね，各刺突間を横に沈線で結んでいる。隣り合わせの刺突列点は交互に高さが異なる。したがって鋸歯状に沈線が結ばれる。

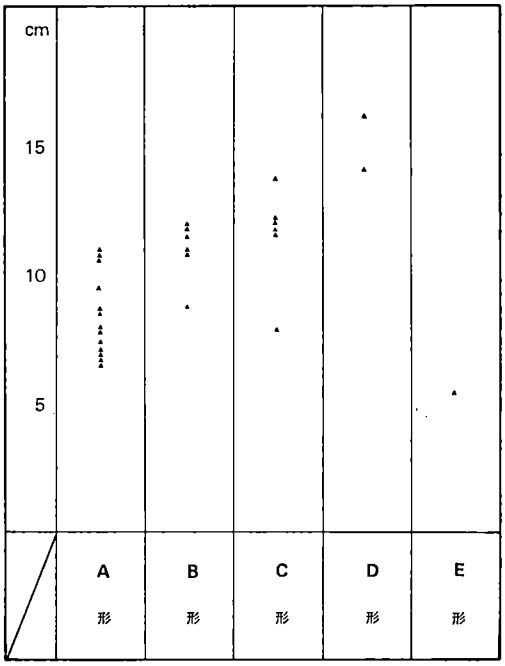
E形（第29図217）

217の1点のみである。底部径（5.4㎝）の非常に小さい，よく精選された土器で2本の細かい平行沈線が附されている。底はわずかながら明瞭な上げ底をなす。色調はやや黄色味がかった褐色。胎土は良く精選されている。いずれも細かい長石・石英・雲母粒を含む。色調・胎土・形状共に他の底部と異なり，後出的な，時期差が認められる底部と思われる。

以上A～E形を説明したが，成形手法が不明瞭な底部（第30図227～242）については一括した。器形上A～C形に類似するものがほとんどで，いずれかのタイプに属するものと思われる。しかし，242などはなかでも器形が異なる。それがどのような差異を示すのか不明であるが注目される。成形手法の差異をもって主に区分を試みたB・C形には，種々の器形が異なる底



第31図　底部接合手法模式図



第32図　底部径計測値分布

部が含まれる。B・C形のなかの種々異なる器形を，形態上からより厳密に見れば3種類（第29図213・第29図215・第30図224）くらいには区分されそうである。その器形差に，ほぼ対応して底部径も異なるところから同一成形手法内での器形の差は，(器壁に粗い条痕を残すことが多い），（作りが雑である），（A形に比し一般に底部径が大きい），などの他の共通要素とあわせて考えれば，粗製深鉢形土器における機能・用途に関わる差として認識できるのではなかろうかと思われる。最後に，判明したA～C形底部の接合手法の模式図第31図とA～E形土器の底部径に関する図表（第32図）について簡単に説明したい。なお，数量化をはかる場合，精確度を期するためには一定程度以上の資料数が必要であることは言うまでもない。しかし，ここでは資料数が少なく精確度，あるいはデータから把握される意味等にかなり疑問があるかとも思われるが，あえて試みた。まず気づくことは，ここで分類したA～E形の底部に対応して底部径もそれぞれ異にする傾向が認められるということである。底部形状がまったく異なるD形・若干時期を異にすると思われるE形を別にしても，A形とB・C形においては底部径の差を指摘できるのではなかろうか。又，B形とC形においてもわずかながら底部径の差を指摘できるのではなかろうか。それぞれの形で一番多く見られる底部径の数値を示せば次のようになる。A形—6.5～11㎝で特に10㎝以内7.5㎝前後に一番多い。B形—8.8～11.9㎝で特に11.5㎝前後に多い。C形—7.9～13.8㎝で特に12㎝前後に多い。A～C形における器形差・成形手法以外のナ

デ，条痕などの器壁の状態の差等を考慮して，A形を精製される鉢形土器の底部，B・C形を粗製の深鉢形土器の底部と考えた。又，B・C形が両者共粗製の深鉢形土器の底部と仮定されるならば，粗製の深鉢形土器には底部の成形手法を異にする2者が存在すると言える。加えてB・C形にはそれぞれ器形を異にする3種類くらいの底部が含まれることを先に指摘したが，その差を粗製の深鉢形土器における機能，用途等に関係するものであろうかと考えた。以上の点からすればB・C形底部については，今後製形手法の差，器形の差を複合させて考えられなければならない。以上大胆に推論を展開したが，ここでは第31図と第32図との有機的な関連を読みとっていただければ幸いである。今後，製作手法の問題，器形のデータ化などの土器における重要性を考えてあえて論じたしだいである。（石橋新次）

溝状遺構出土の土器　B1～B3区の溝状遺構では，その西側からなだれ込むようにして多量の土器片が出土し，総重量は約156 *kg*を測る。このためこの項では，溝状遺構内とその肩部にみられた土器を併せて一括して取り扱い，214点を図示した。

器形の明確なものも含めて，文様の明確なものは次の如く分類される。

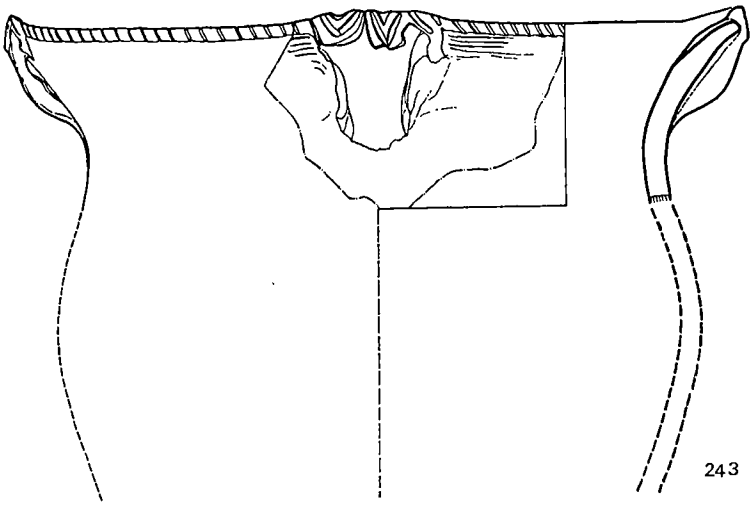
(1)　1類（第36図）綾杉文・斜線文を施文した一群で，平行沈線文等を併用することもある。口縁部は波状を形成する例と平縁の例がある。また橋状把手を有する例もある。

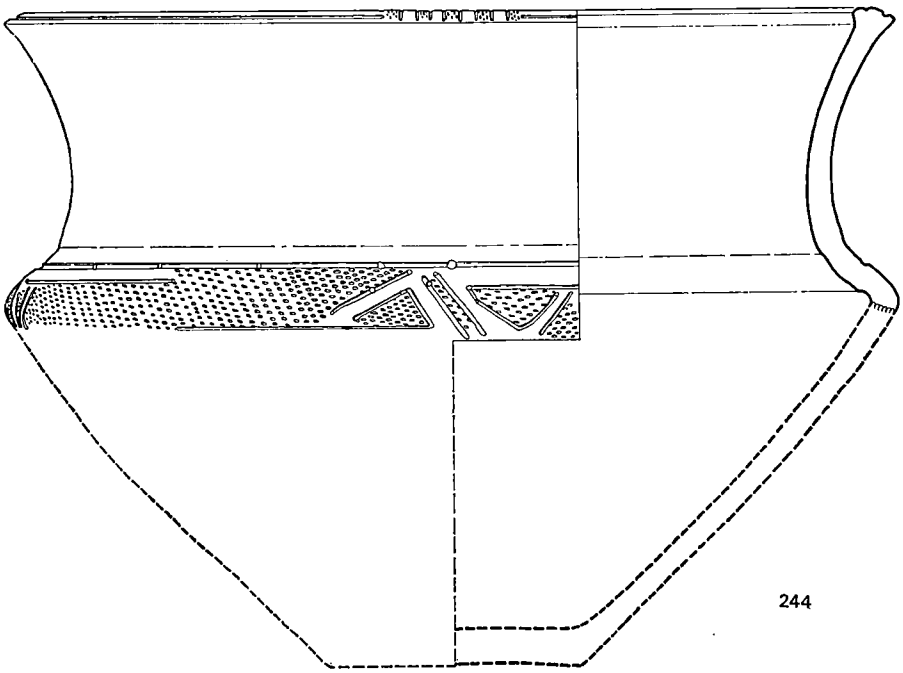
（a）綾形文をなす例としては249～255・271・272があり，全て斜線文を反転させており口唇からまず左下りに始まる。249は波状口縁をなす。250・252はヘナタリ条痕がみとめられる。253の内面は条痕の如くみられるが，粗いヘラ磨きで仕上げられている。255の口唇部には1条の沈線がめぐり，口縁直下は太く凹み，ここにも綾杉文が続き斜線文が5段にわたって反転させていることを知る。271・272は275と同様の頸部破片である。全て沈線は口唇から左下りに始まる。

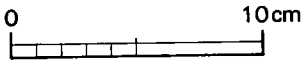
（b）　斜線文をなす例は，243・256～270・349があり，斜線の方向は左下り，右下りの両方がみられる。243は深鉢形土器1b類に分類される。橋状把手を有し波状口縁頂部から貼り付けられ「N」字・逆「N」字貼付文がつけられる。貼付文には，明瞭な沈線を1条づつ交互に斜行させている。また各頂部間の口唇には右下りの短かい斜線文が連続する。267も同様な形状を有し「M」字貼付文をみとめるが橋状把手は有さない。256は平縁の口唇に貼付文を有する例である。257・259・260には条痕文がみられる。257・258の口唇部は特に肥厚せずに斜線文はやや不規則に延びる。269はわずかに突起する口縁部破片で，頂点から左右に斜線文が分かれ，貝殻の放射肋に似る。270は斜線文の下に間隔をおいて反転する斜線文帯があり，この間を3条の平行沈線が埋める例である。また306～309も270と同様のものであろう。

(2)　2類（第37図）縄文・疑似縄文を施文した一群で，沈線文を併用して磨消縄文及びこれに類似した文様を形成することが多い。

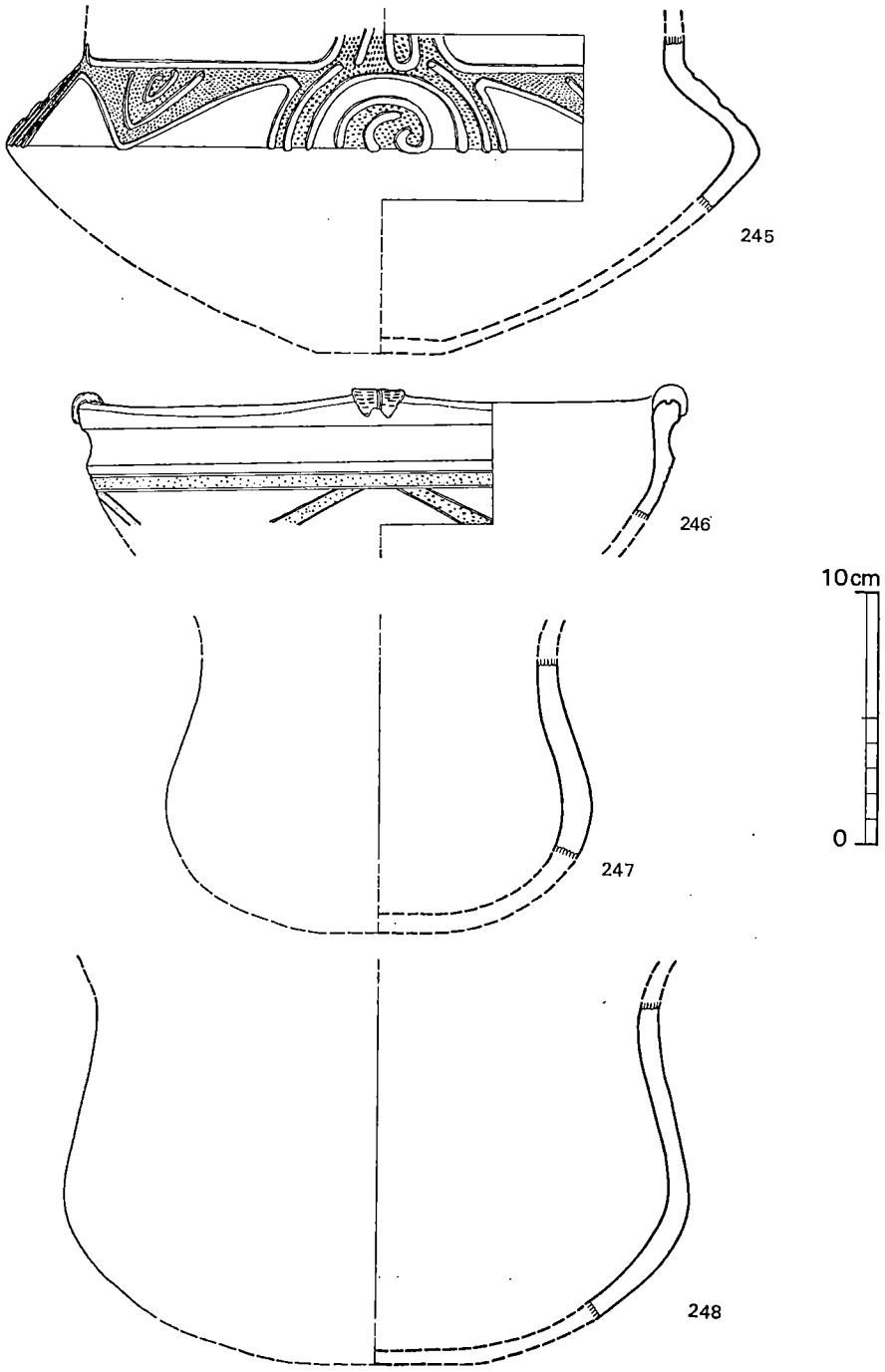
（a）縄文を施文する例としては，244・245・273・275・283～289があり，287のR$\left\{\begin{matrix}L\\L\\L\end{matrix}\right.$を除い



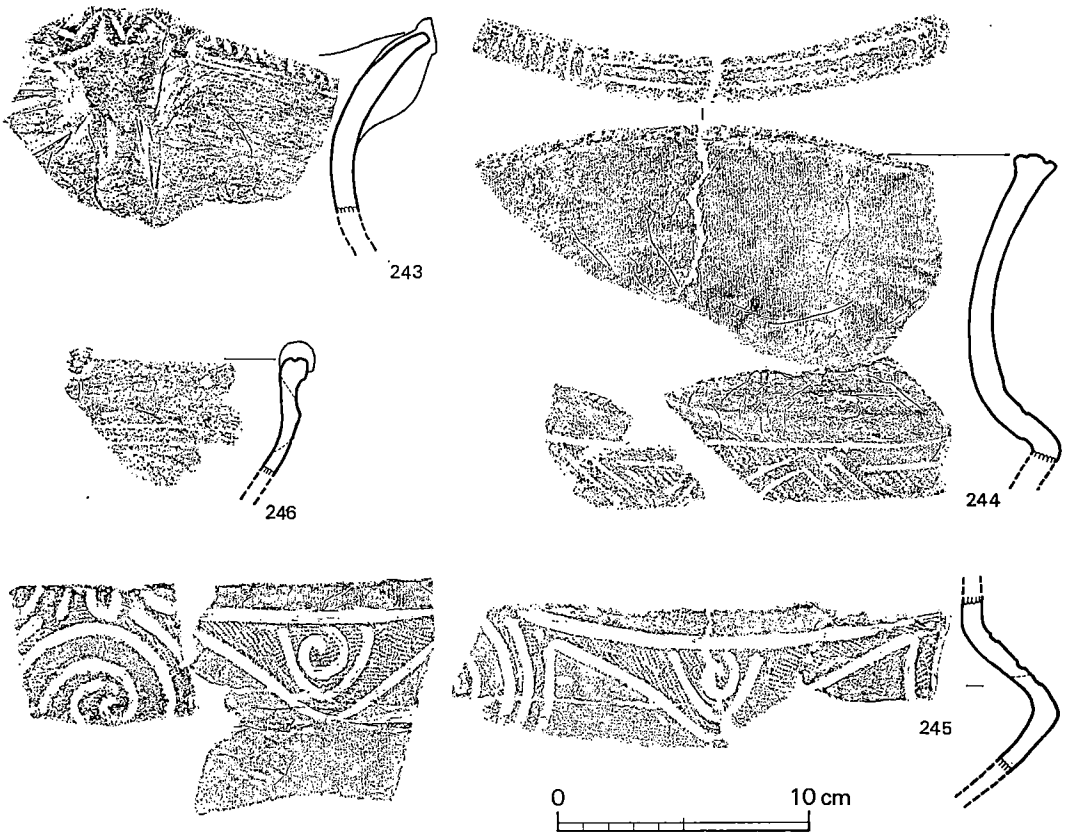




第33図　溝状遺構出土土器(1)実測図　(1/3)

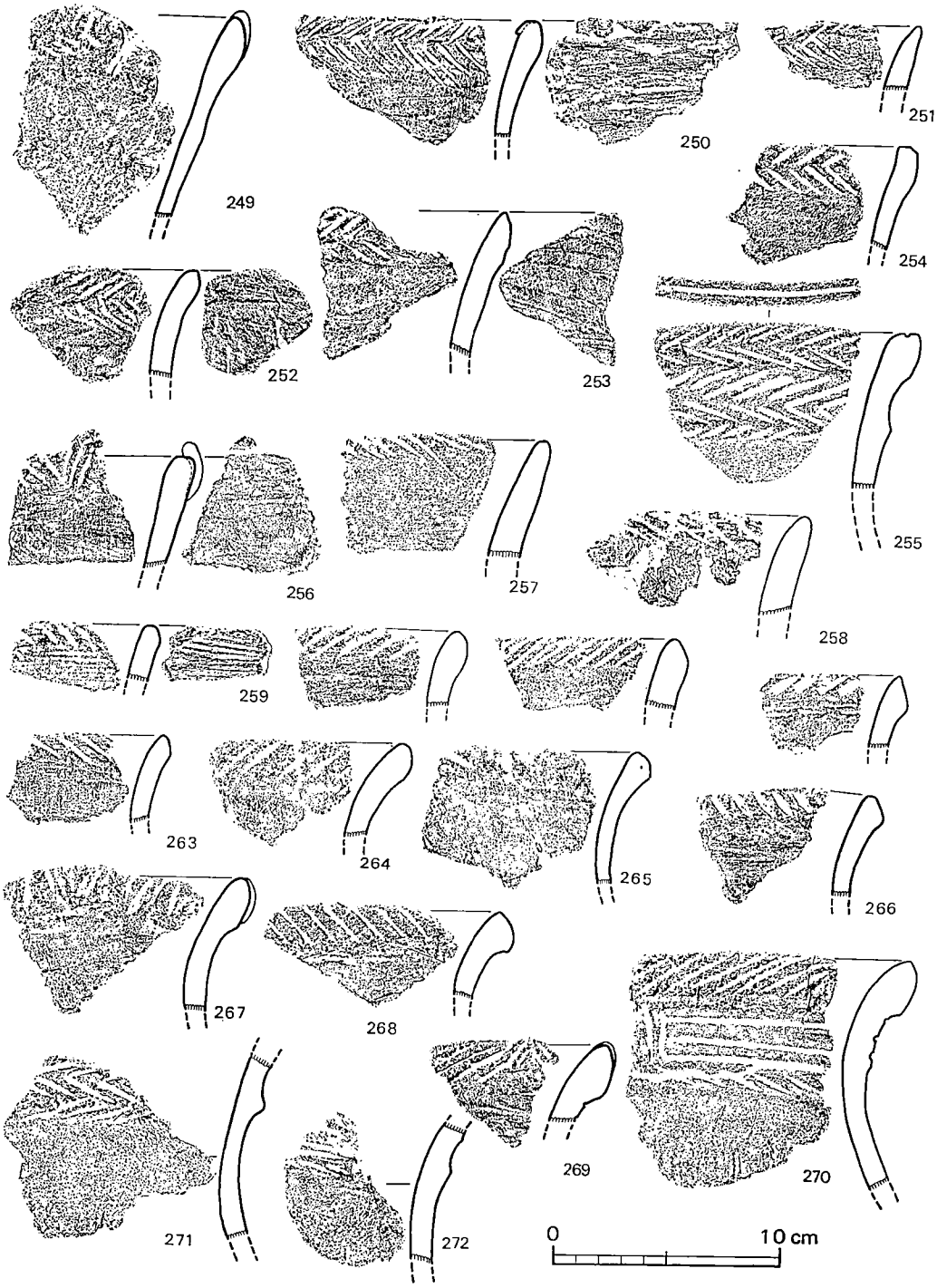


第34図　溝状遺構出土土器(2)実測図　(1/3)

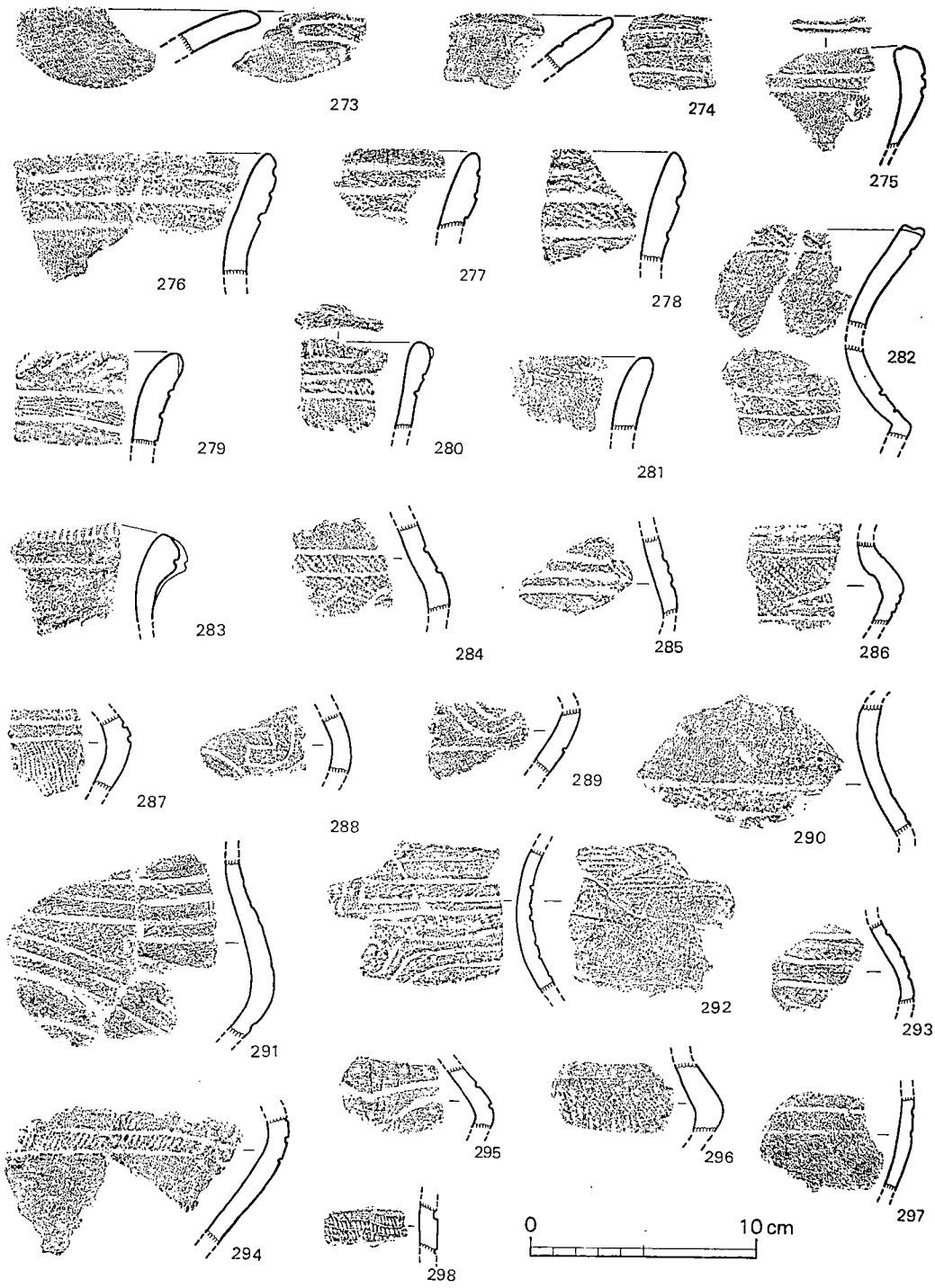


第35図　溝状遺構出土土器（1・2）拓影（1/3）

て全てR{L/L}で，回転施文される。244は口唇と胴部に文様帯を有する鉢形土器2類であるが磨消縄文を伴う。口唇部の縄文帯は2条を単位とする沈線が4列横断して区切られ沈線間は磨り消される。またこの文様の部分を繋ぐように刺突を伴う2条の沈線がめぐり，沈線間は磨り消される。また胴部の縄文帯の上部に1条の刺突を伴う沈線がめぐり，縄文帯には刺突を伴う沈線が2条単位として三角に折り返しこれによって区画された部分を磨り消している。内外ともヘラ磨きされる。245は，肩～胴部に縄文帯がめぐる浅鉢形土器で，口縁部及び胴下半は欠失している。頸部はほとんど直立し，胴部は「く」字形に大きく屈曲する。縄文帯に沈線で「の」字渦巻文を含む重弧文と，逆「の」字状V字文が連続して4単位描かれ，空間をヘラ磨きし，磨消縄文をなしている。内外面ともヘラ磨きで仕上げられており，精製で焼成も良好である。273は皿形土器の口唇部上面及び内面に磨消縄文がみられる例である。275は口唇上面に1条の沈線がみられる，キャリパー形を呈する鉢形土器の口縁部破片である。283の口縁は波状を呈す例で，口唇上面にはアナダラ属貝殻腹縁を用いた刻目様の疑似縄文もめぐる。284・286は



第36図　溝状遺構出土土器(3)拓影　(1/3)



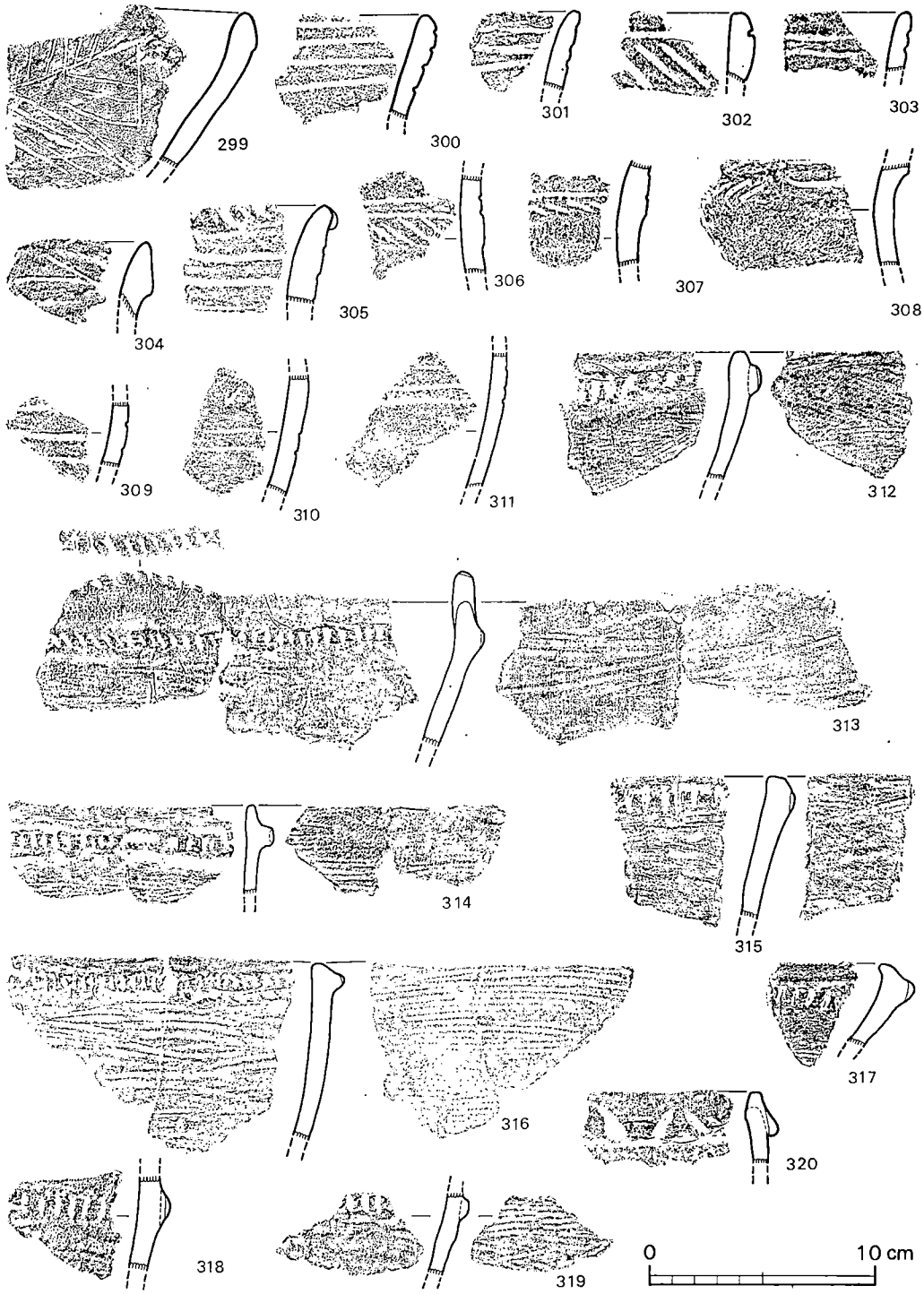
第37図　溝状遺構出土土器(4)拓影　(1/3)

刺突を伴う沈線で画された磨消縄文である。285は3条の平行沈線がみられるが上の1条は右端で上部にはね上がる。288・289の沈線は曲線的に描かれており，284・286とやや趣きを異にする。

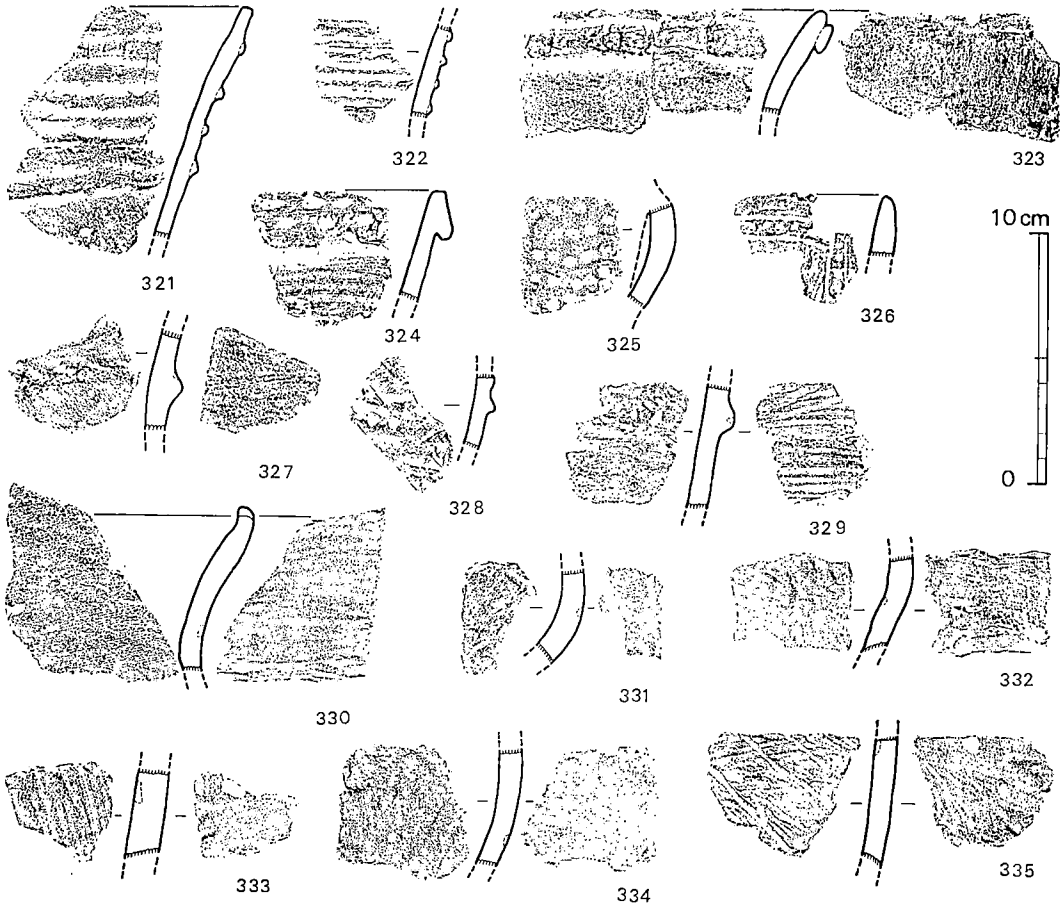
(b)疑似縄文を施文した例は246・274・276～282・290～298であり，246・298にヘナタリ回転施文の疑似縄文をみとめる以外は全てアナダラ属貝殻による疑似縄文である。アナダラ属貝殻の疑似縄文では，292の例の疑似縄文の一部に腹縁押捺をみとめる以外は全て殻頂部付近及び殻腹の肋を押圧した扇状貝圧痕によるものである。246は4単位の波状口縁をなす浅鉢形土器で，胴下半を欠失する。波状の頂部の口唇上には2つのコブ状突起が連らねて貼り付けられ，各頂部間は一条の沈線で繋がれる。外面では浅くくびれる頸部を有して，「く」字形に屈折する肩部を形成するが，内面では口縁部は，やや内彎ぎみになる。胴部に2本単位の平行沈線がめぐり，正面では2本単位の平行沈線が左右に斜行する。沈線で囲まれた範囲に疑似縄文が充塡されているが器面が細かく剝脱し，やや不明瞭であるがコブ状突起の上面にはヘナタリの回転押捺による疑似縄文がみとめられる。298はヘナタリによる疑似縄文の明瞭な例である。274は，皿形土器の上面及び内面に扇状貝圧痕のみられる例で，279・280は斜線文を伴う例である。280・282の口唇部には小さな突起がみとめられる。281には沈線は伴わず直接扇状貝圧痕が施文される。291・292は文様帯が広くみられ，292には頸部にも文様帯が及ぶ，また沈線文は直線的のみならず曲線的なものがとり入れられている。

(3) 3類，沈線文を用いた一群で，巨視的には1・2類に含まれるが，やや様相の異なるものを取り扱った。この例としては299～305・309～311があり，299はやや内彎する，波状口縁の頂部から垂直に下がる沈線と口縁に沿う沈線及び口唇から下がる短かい沈線と全体に及ぶやや不規則な沈線によって構成される。300には4条の平行沈線がみられ，302は2条の平行沈線の間を斜線文によって充塡される。304では押し引きの細い沈線がみとめられる。また305では刻目突帯が伴う。

(4) 4類，突帯を有する一群で(a)刻み目突帯と(b)刻み目を有さない突帯がある。なお(a)のグループには，肥厚する口唇以外の器面に刻み目を付けた例も含めた。313～319がこの類に入る。213は，やや内彎し波状を呈する口縁部破片で，波状の頂部の口唇上と口縁直下の突帯上に刻み目がみられる。素地はヘナタリ条痕文である。314・319はアナダラ属貝殻腹縁による条痕文を素地としているが314の突帯は極端にはり出し，刻み目は刺突に近い。316・317はやや内彎する口縁で，口縁直下に突帯がらみれる。315は肥厚した器面上に刻まれたもので刻み目はやや長めで，318の刻み目もやや長めである。320はこの類に含めるよりも，1類に含めるべきであったかもしれないが，折り返した口縁が突帯をなし，交互に斜めの刻み目を付したものである。320を除けば全て条痕文が施文される。(b)の例としては321～323があり全て無文で321・322には4本の細い突帯が貼り付けられる。323は口縁直下に1条の扁平な突帯が貼り



第38図　溝状遺構出土土器(5)拓影　(1/3)



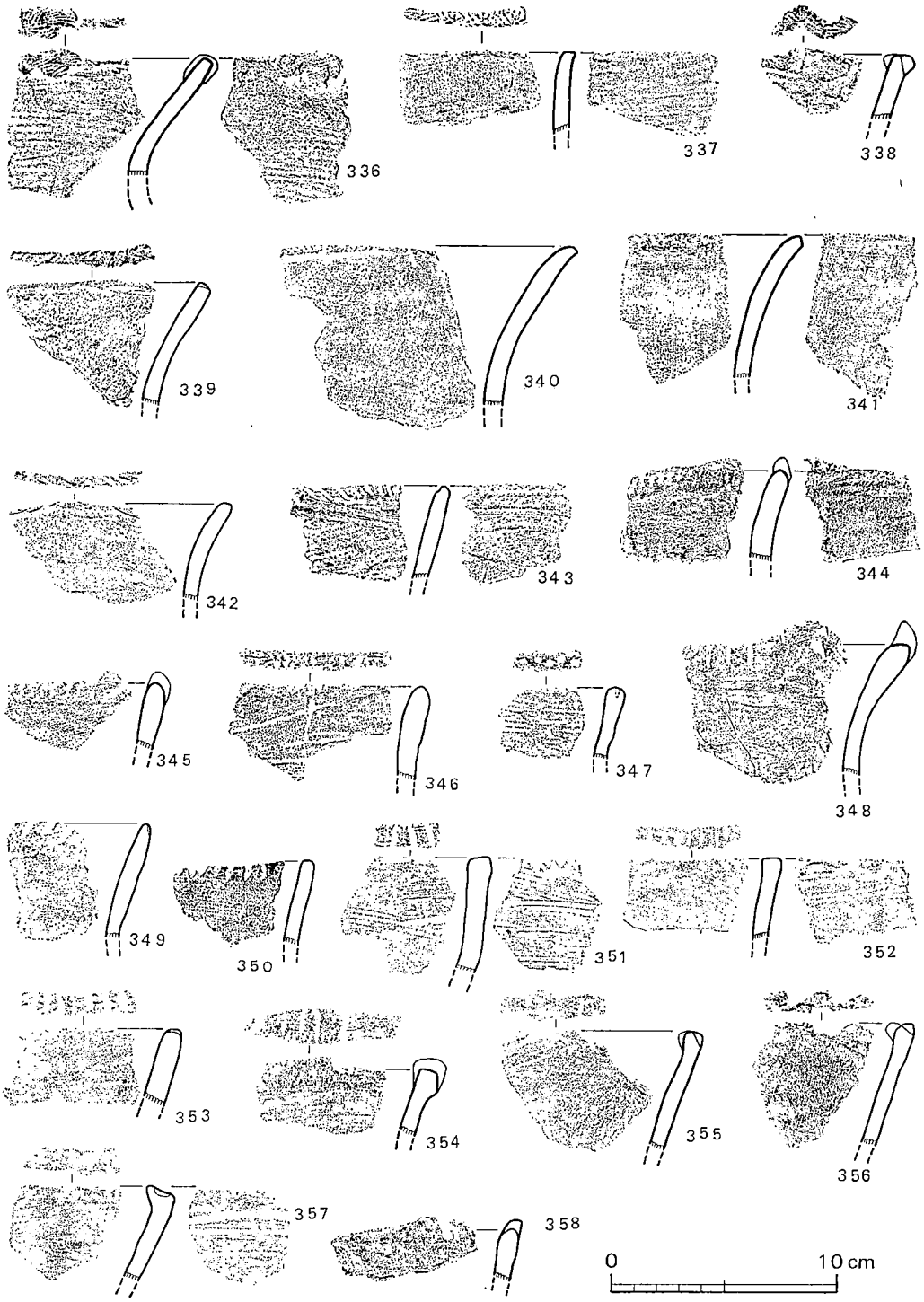
第39図　溝状遺構出土土器(6)拓影　(1/3)

付けられる例である。

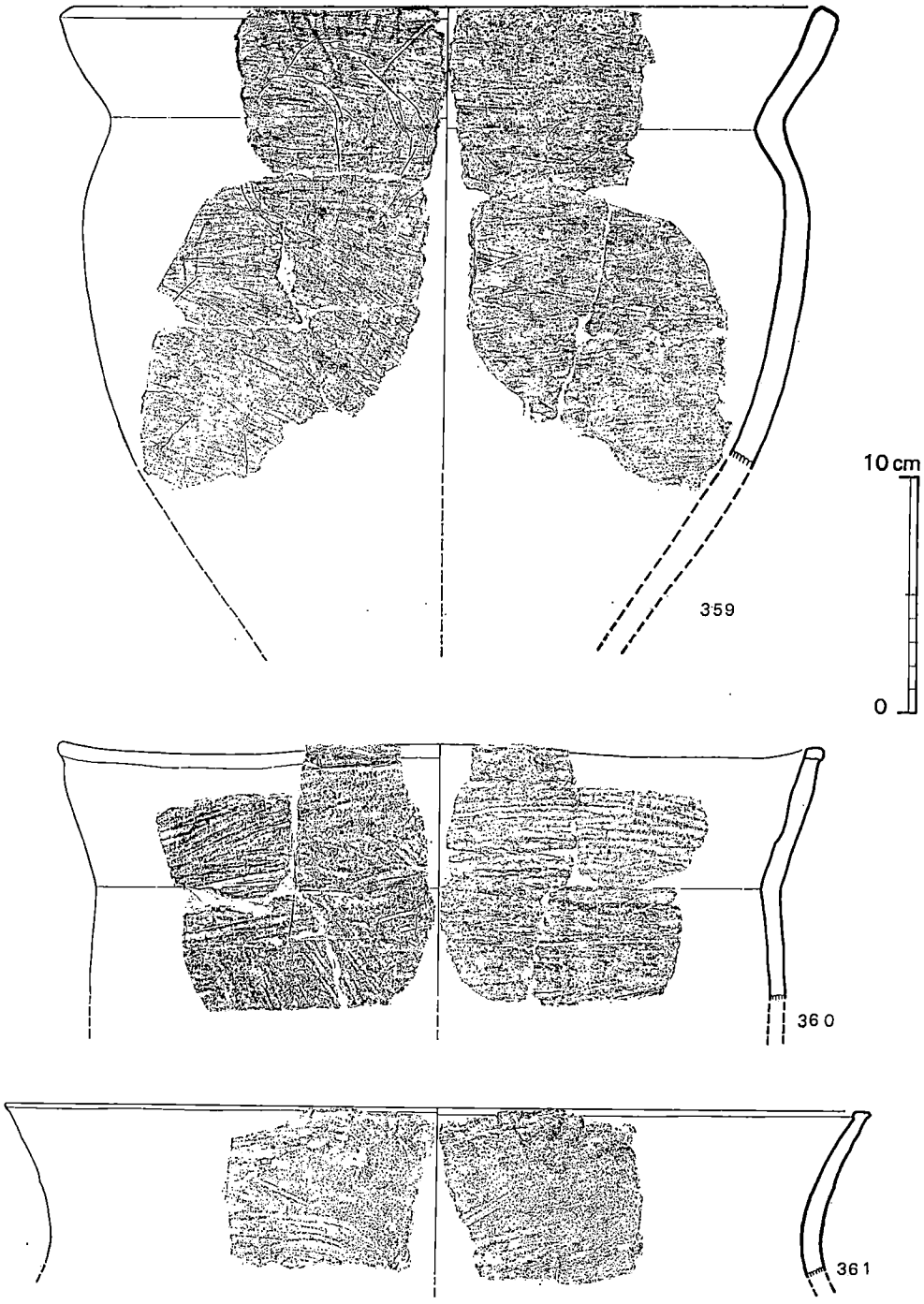
(5)　5類，列点文を有する一群，この類に含まれる例としては324～329がある。324は折り返された口縁外面に2列の列点がみられ，下部はヘナタリ条痕文である。325は橋状把手の表面を点が埋める例である。326は平行沈線が口縁に対して平行・垂直にみられ，この沈線間を埋める。327～329は突帯を伴う例で4類の刻目文のバラエティとも考えられるものである。327は突帯の上半の列点がいずれも押し引きされる。

(6)　6類，口唇部に施文がみとめられる一群で1～5類に含まれない例を6類とした。また施文される文様は各類に含まれるものがほとんどで，視点を転ずれば1～5類に分類することも可能であるが，特徴的なので一応区別した。

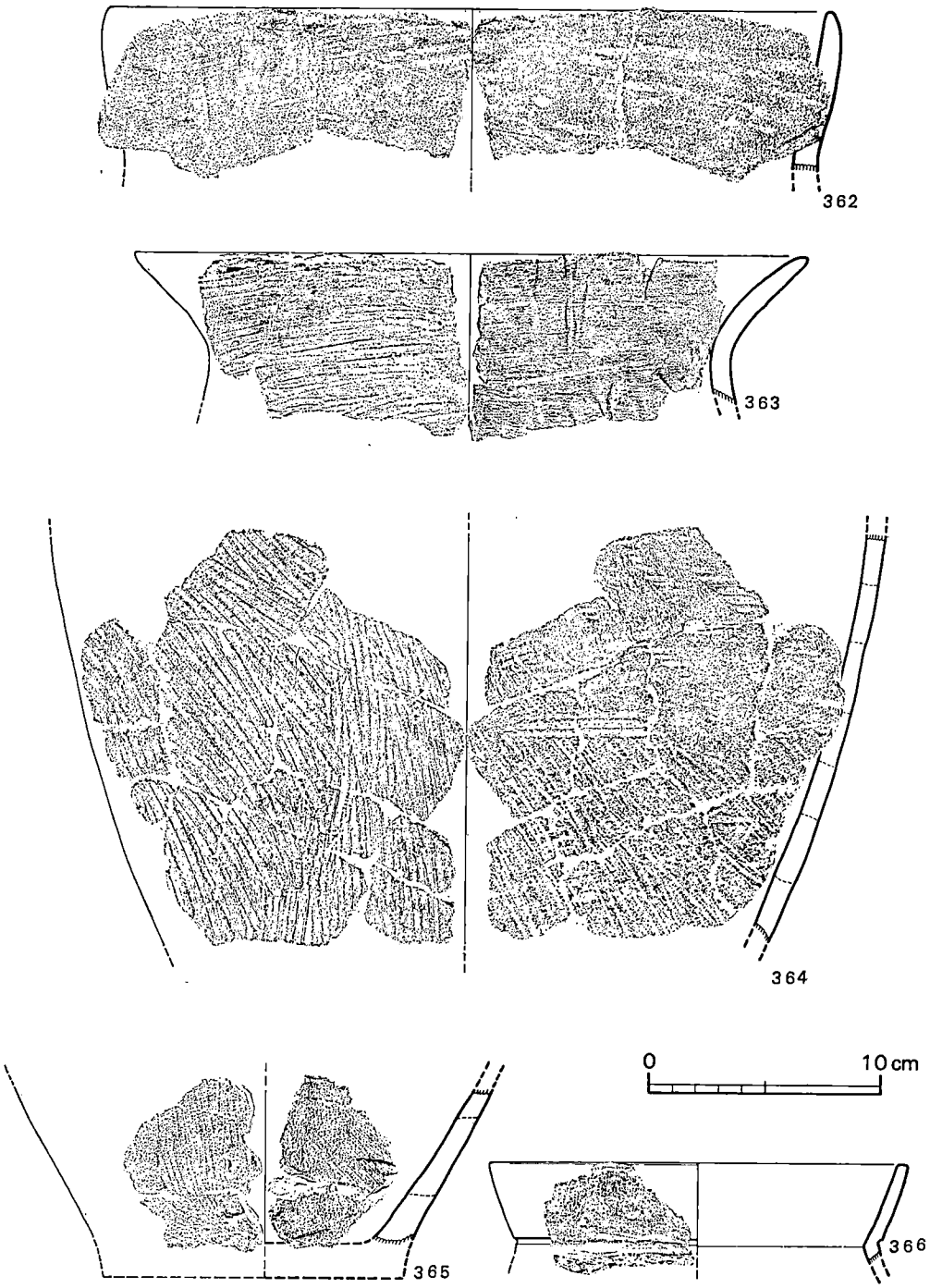
これに含まれる例では，施文された文様によって(a)縄文を付した例，(b)疑似縄文を付し



第40図　溝状遺構出土土器(7)拓影　(1/3)



第41図　溝状遺構出土土器(8)拓影　(1/3)



第42図　溝状遺構出土土器(9)拓影　(1/3)

た例，(c)刺突を付した例，(d)刻目を付した例，(e)凹凸をつくり出した例等に区分される。(a)の例としては，340・341があり2類(a)に伴う。(b)の例としては336・338・344・345・354があり2類(b)に伴う。扇状貝圧痕が施文され，336はコブ状突起上に施文され，また338はS字状突起上に施文される。

354は口唇上にコブ状突起が4つ連ねられた状態の外面側に扇状貝圧痕のみとめられるものである。345もコブ状突起に扇状貝圧痕がみられ，これ以外の口唇部にはアナダラ属貝殻腹縁の刺突による疑似縄文がみられる。この類に337・339・342・343の例も含められ，斜めの刻目を連続させることによって疑似縄文を形成するものである。(c)に含まれるものも広義の疑似縄文に含めることも可能でありまた5類に伴う。356・347及び357がある。(d)としては351～353及び358があるが，4(a)類に含めた213はこの類にも入る。358は頂部に穿孔してそのまま原体をひき上げることによって刻目を形どった例である。(e)としては355・356があり，文様は有さないが，S字状文を連続させている。

(7) 7類，器面に条痕文が施文される一群で1～6類の例も，これに含まれるものが多く。ここでは1～6に含まれなかった例を取り扱った。同一個体の破片が他の分類に含まれている可能性も高い。この類に含まれるものは，原体の違いによって(a)ヘナタリ条痕文，(b)アナダラ条痕文等に細分される。

(a)の例としては，361・363～365・367～377・379～381・383～385がある。380には橋状把手が付されるが，貼付文は欠損のため明確ではない。

(b)の例としては，360・378・386～401・404・405がある。378の口唇の一部には右下りの斜線文がみとめられる。(a)(b)両者共，深鉢形土器に伴う。

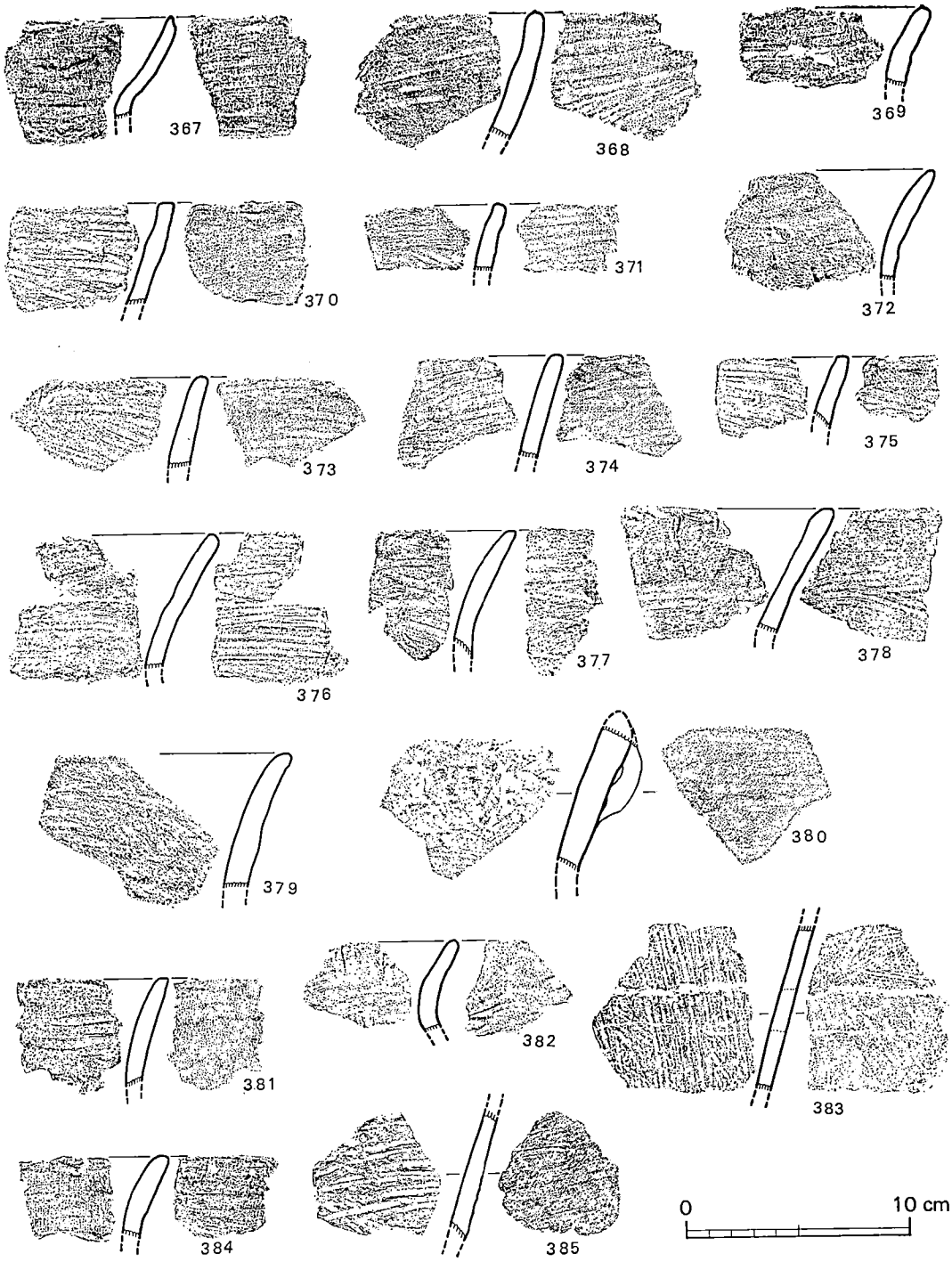
(8) 8類，無文の一群である。ヘラ磨き・ナデによるものあるいは，手づくねの凹凸のある器面をそのまま残すものがある。深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・皿形土器等の器形があり359・362・366・382・402・403・406～415・417が含まれる。

深鉢形土器に含まれる例は，359・362・366・382・403・415・417等。359は平縁の深鉢形土器でヘラ削りが細かく，条痕文の如くにみえる。417の頸部には把手が貼り付けられる。扁平に突起し手を掛けやすいように弧を描がく。

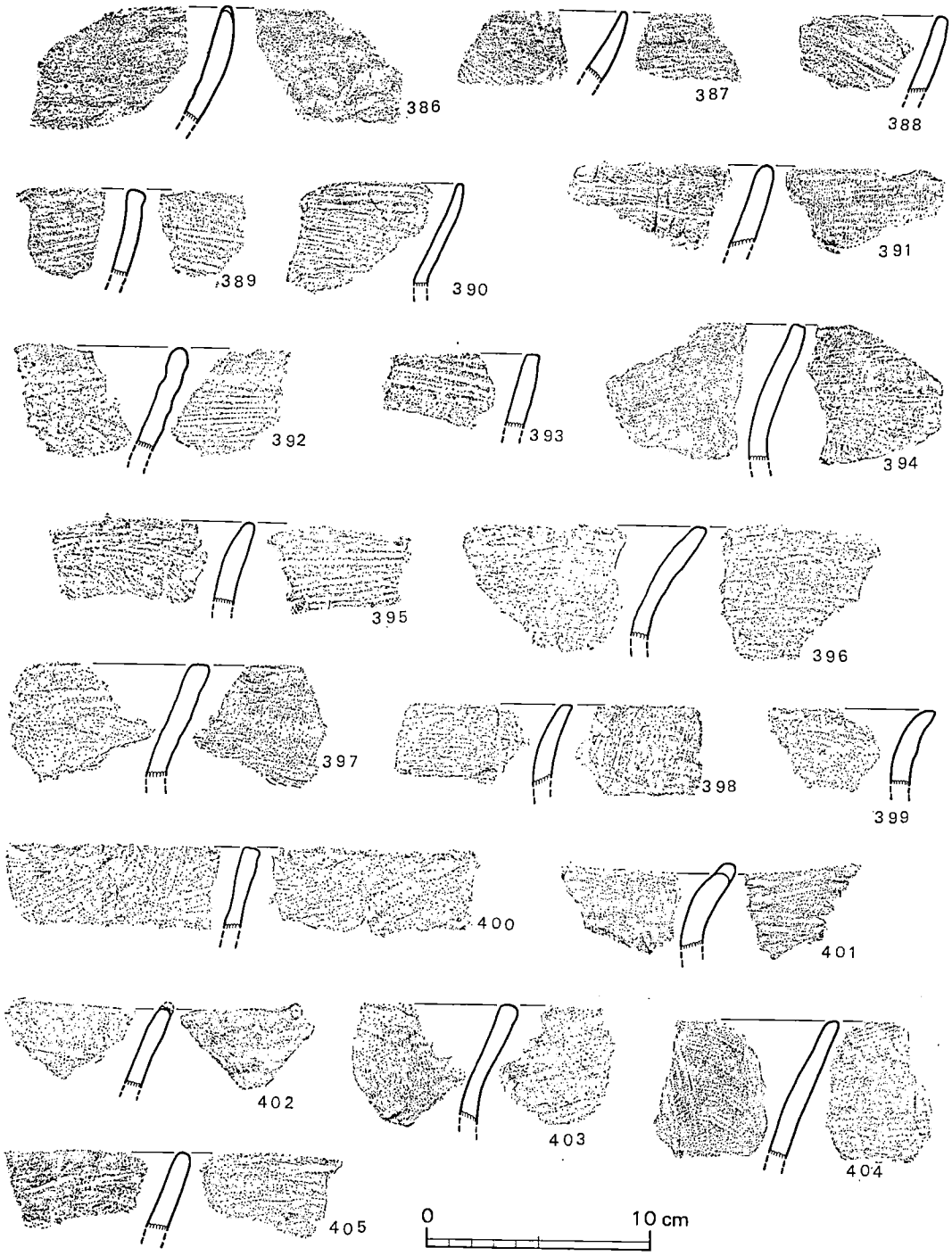
鉢形土器とみられる例は，247・248・407・409・411・413があり，247・248の例はやや器形の異なるものである。則ち，胴部が下ぶくれぎみにはり出し安定した器形であるが，丸底に近い底部をなすと推定される。406・408・410は浅鉢形土器であるが，器面は調整されない。414は皿形土器とみられる例で内外面ともヘラ磨きされる。

(9)～(11)は分類ではなく，部位別にまとめたもので，それぞれ(1)～(8)の各類に分類可能なものである。

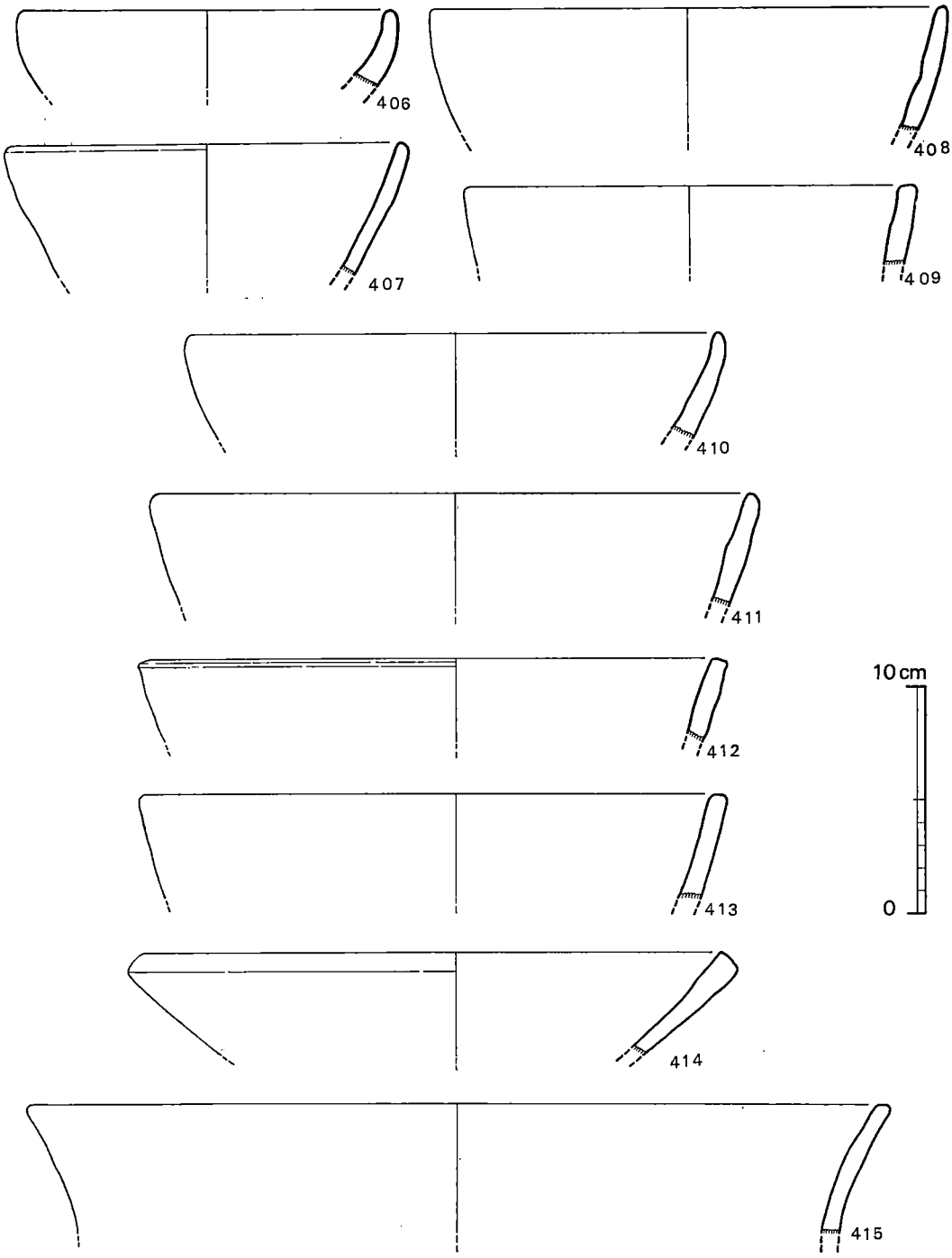
(9) 脚台，脚台の破片は，420～431の12点を取り扱った。その形態では4種類に分類できる。



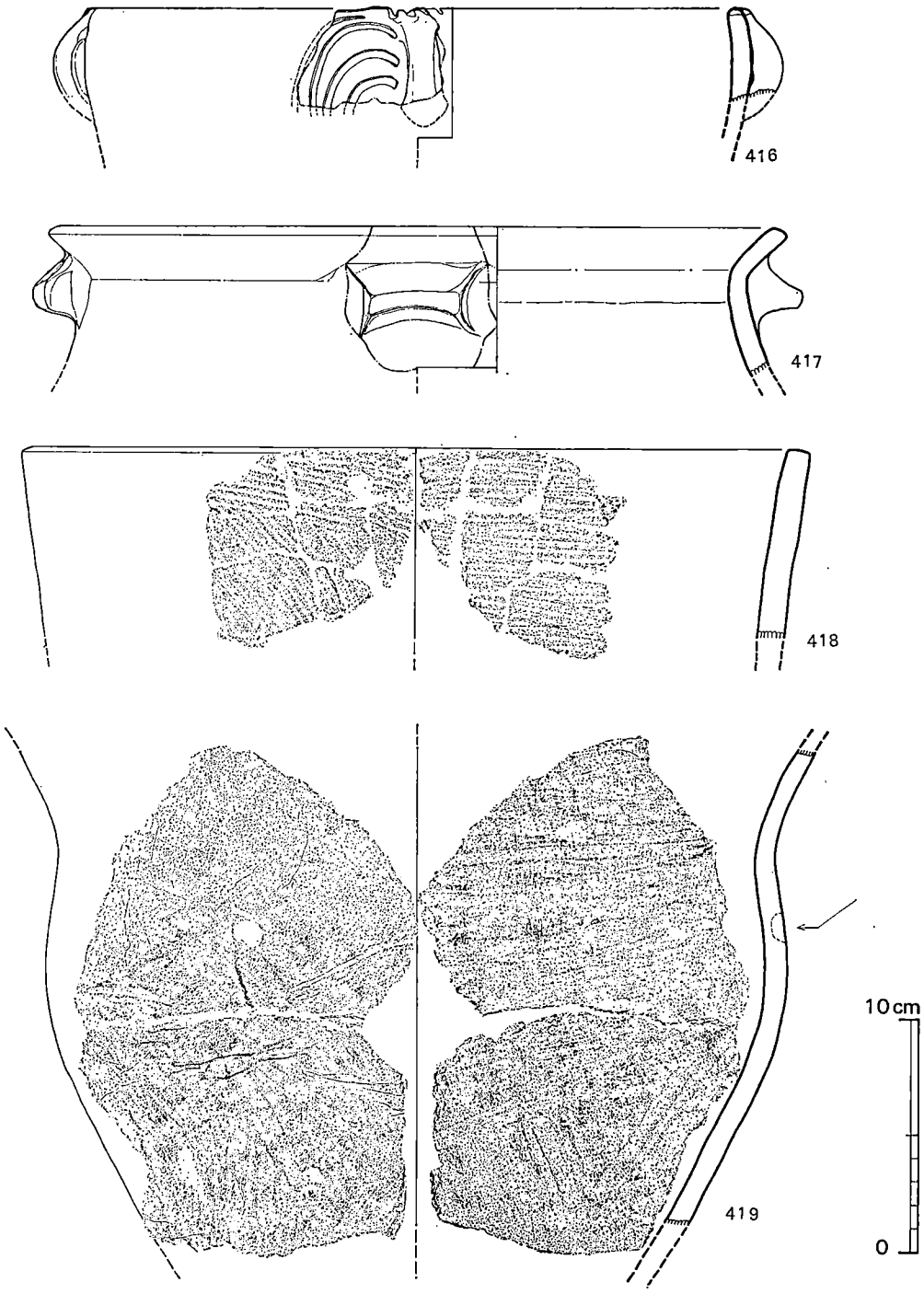
第43図　溝状遺構出土土器⑩拓影　(1/3)



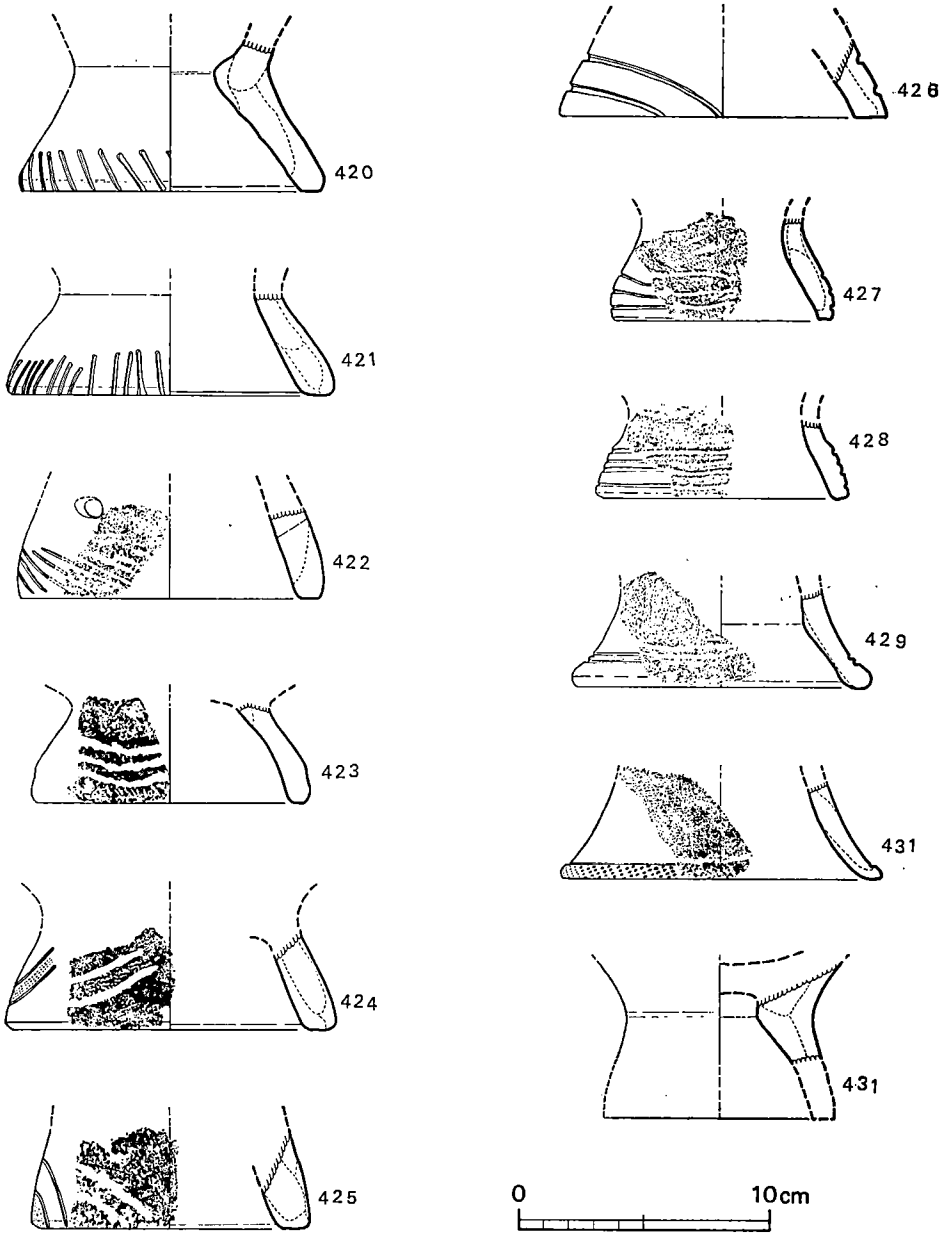
第44図　溝状遺構出土土器(1)拓影　(1/3)



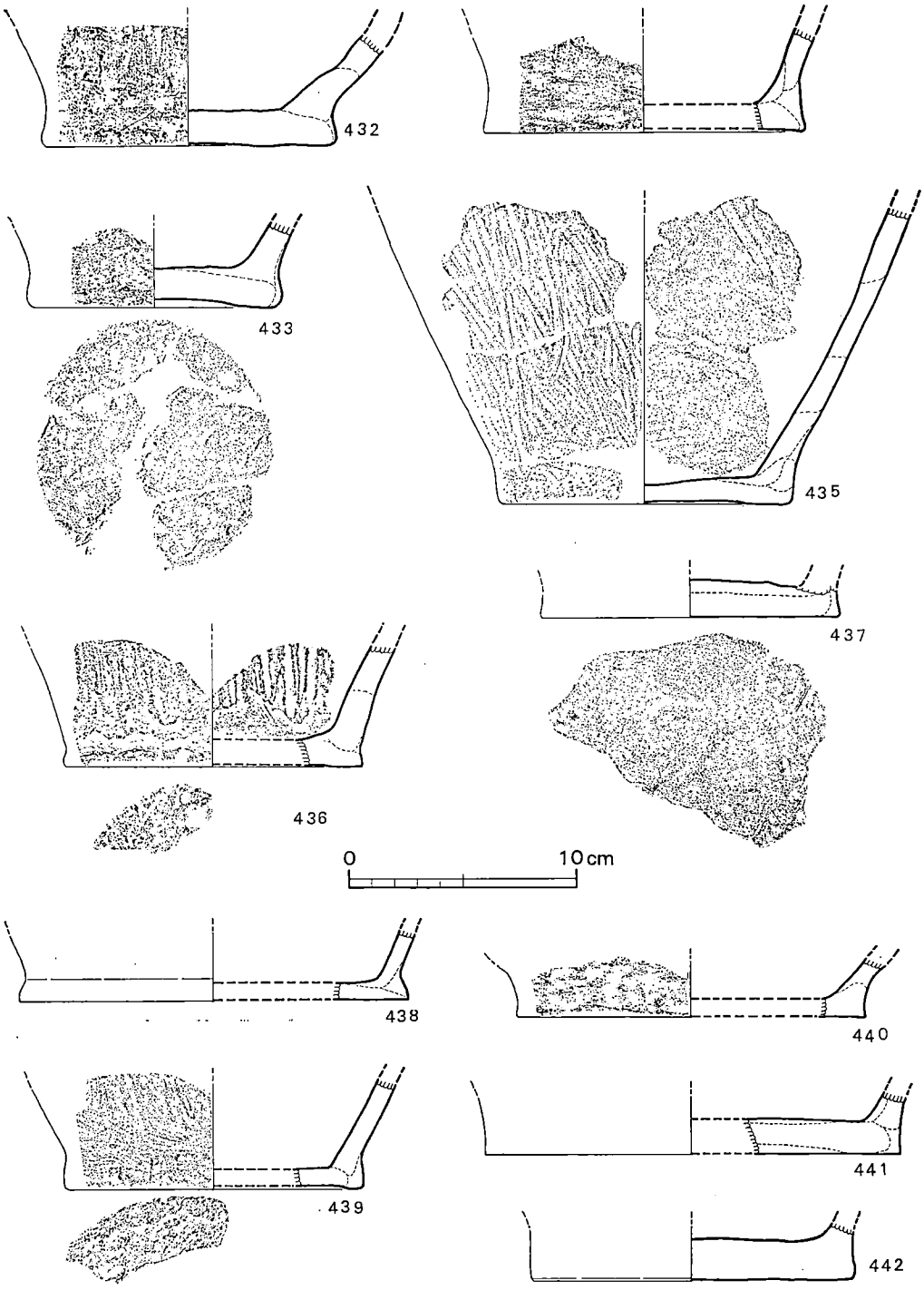
第45図　溝状遺構出土土器(2)実測図　(1/3)



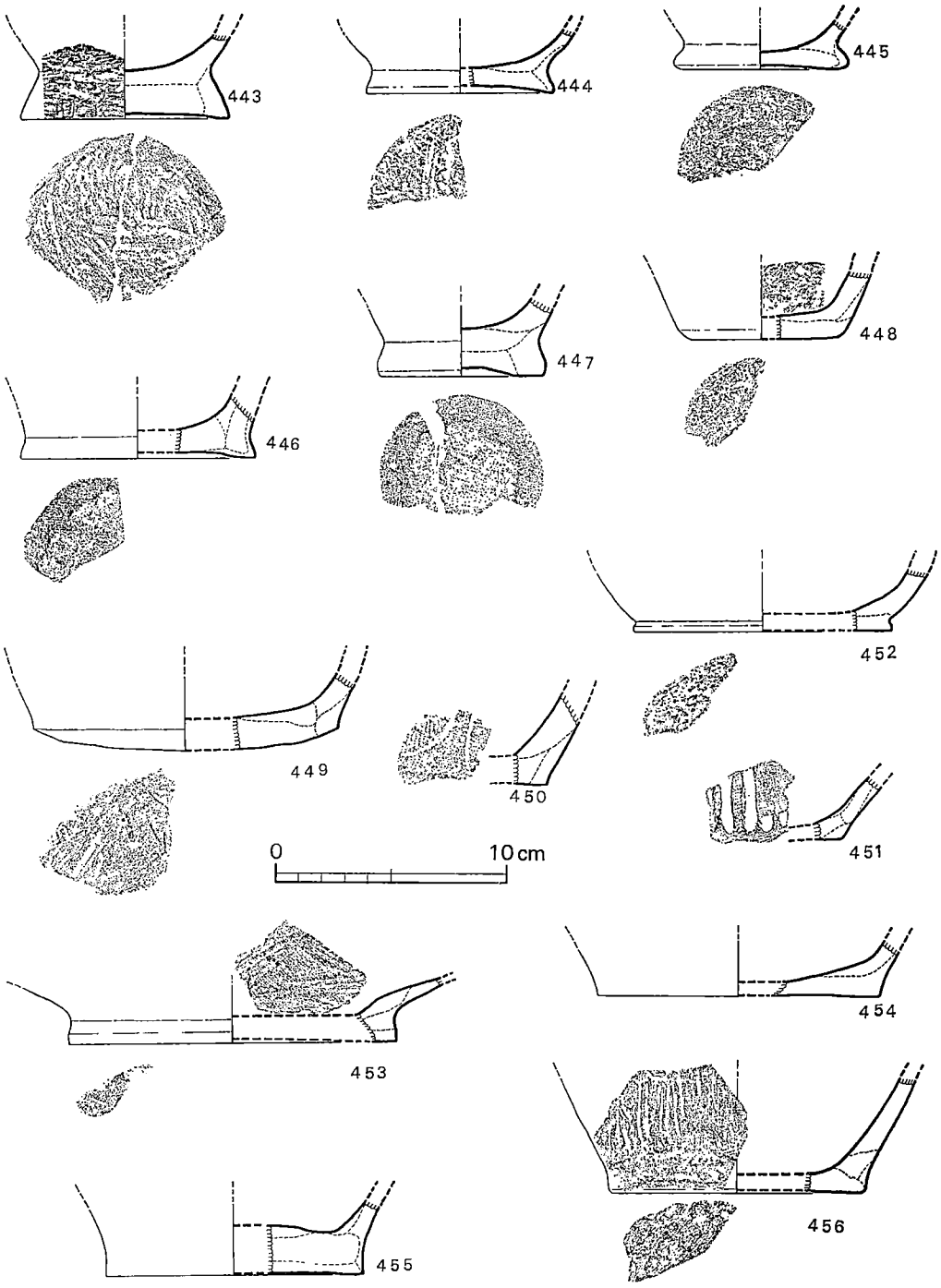
第46図　溝状遺構出土土器(13)拓影　(1/3)



第47図　溝状遺構出土土器(4)拓影　(1/3)



第48図　溝状遺構出土土器(15)拓影　(1/3)



第49図　溝状遺構出土土器⑯拓影　(1/3)

(a)やや内彎する脚でやや広がりぎみのもの，(b)内彎する脚で小さくまとまるもの，(c)直線的な脚。(d)脚端が外反するものである。また文様では3類あり，斜線文・縄文・沈線文のものがあり，文様の分類との組み合わせにより，1(a)・1(c)・2(a)・2(b)・2(c)・2(d)・3(b)・3(c)・3(d)の9種に区分される。

1(a)の例としては，420・421があり，1(c)の例は422があり穿孔もみられる。2(a)の例では，424があり，扇状貝圧痕がみられ，2(b)では423が縄文R{L/L の施文によ る。2(c)では，扇状貝圧痕が磨消若しくは充塡される。2(d)の例としては，430がある。3(b)としては，427・428がみられる。429は3(e)に分類される。

(10) 底部，深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・皿形土器の底部がみられる。深鉢形土器の底部としては，432～442・456がある。円盤貼付の手法を用い，円盤の上に輪積みを重ね，(輪積みの上に円盤を貼り付け）られていることを知る。殊に432～437はその痕跡が明瞭であり底部と胴部の接合面はやや角ばる。また接合部の補強された痕跡は，439の底面，440の外面に明瞭である。外面に施文される文様は条痕文と無文があり，傾向としては条痕文系の底面が凹むのに比して無文系は平坦である。なお433・437の底面には，クジラの背椎骨の圧痕がみられ，436の底面には，イトカケヘナタリの圧痕をみとめる。

鉢形土器の底部としては，444～451・454・455がみられる。基本的には，深鉢形土器同様円盤貼付手法がとられるが，接合面にみられる補強度は大きく安定性をもたせるような補強である。また，接合による内面の傾斜角度は大きく丸みをもつ。無文を主体とし，あげ底状に内彎する底部と平坦な底部及びやや外反する底部のバラエティがある。やや外反する底部の例は448～449にみられる。底面には，ナデによる条痕様の文様を有する例443～445と449のアナダラ条痕による例及び無文がある。

浅鉢形土器の底部としては，452があり，円盤貼付手法を用いながら補強をせず，接合による内面の傾斜はゆるやかである。

皿形土器とみられる例には453があり，大きく外反する。

(11) 圧痕を有する土器，器形に左右されるものではないが，土器の内外面に種子等の圧痕をみとめるものがあったので一括した。なお底部の圧痕については前述したので，これについては触れない。330～335・372にみられ，330・333・335・372には，堅果類の種子圧痕が明瞭であり，372の例は大きい。また331の例は小豆大の長楕円形であるが種子の種類は明確ではない。

（小池　史哲）

(3) 晩期の土器

炉跡内出土土器（図版29，第50図457～460）　炉跡内出土土器で図示した以外は，精製土器

片3片，粗製土器片4片，その他若干量の土器がみられた。

457は口縁部が4個所でわずかに山形隆起する鉢形土器である。復原口径17.9㎝を測る。口縁部はやや外彎しながら外方へ大きく開く。肩部で「く」字状に屈折し，いくぶん丸味をもちながら底部へと移行する。肩部の接合をみると，胴部の上に粘土帯を加え，それに頸部を接合している。胴部と粘土帯の間には補強を施している。外面は研磨し，内面はナデて調整していると思われる。胎土は精製し，非常に細かい石英・長石・雲母を含んでいる。焼成は良好で，色調は外面暗茶褐色・内面黒褐色を呈している。458は口縁部が外方へ開くが，頸部ですぼまり球形の胴部へと移行する。復原口径25㎝を測る浅鉢形土器である。器面は黒色研磨している。口縁部には内外面共に一条の沈線を施している。胎土は精製しており，若干の微砂粒含んでいる。焼成はやや良好で，色調は内外面共に黒褐色を呈している。459は横方向の粗い条痕を施す甕形土器であろう。肩部で「く」字状に屈折し，口縁部がやや外方へ開く器形であると思われる。胎土は粗い石英・長石を多く含み，微小な雲母もみられる。焼成は良好で，色調は外面暗褐色，内面淡褐色である。460は甕形土器あるいは鉢形土器の底部である。復原底径は約8㎝を測り，ややあげ底を呈している。胎土は粗い石英・長石を多く含んでいる。焼成は余り良くなく，外面黄色・内面灰褐色の色調を呈している。

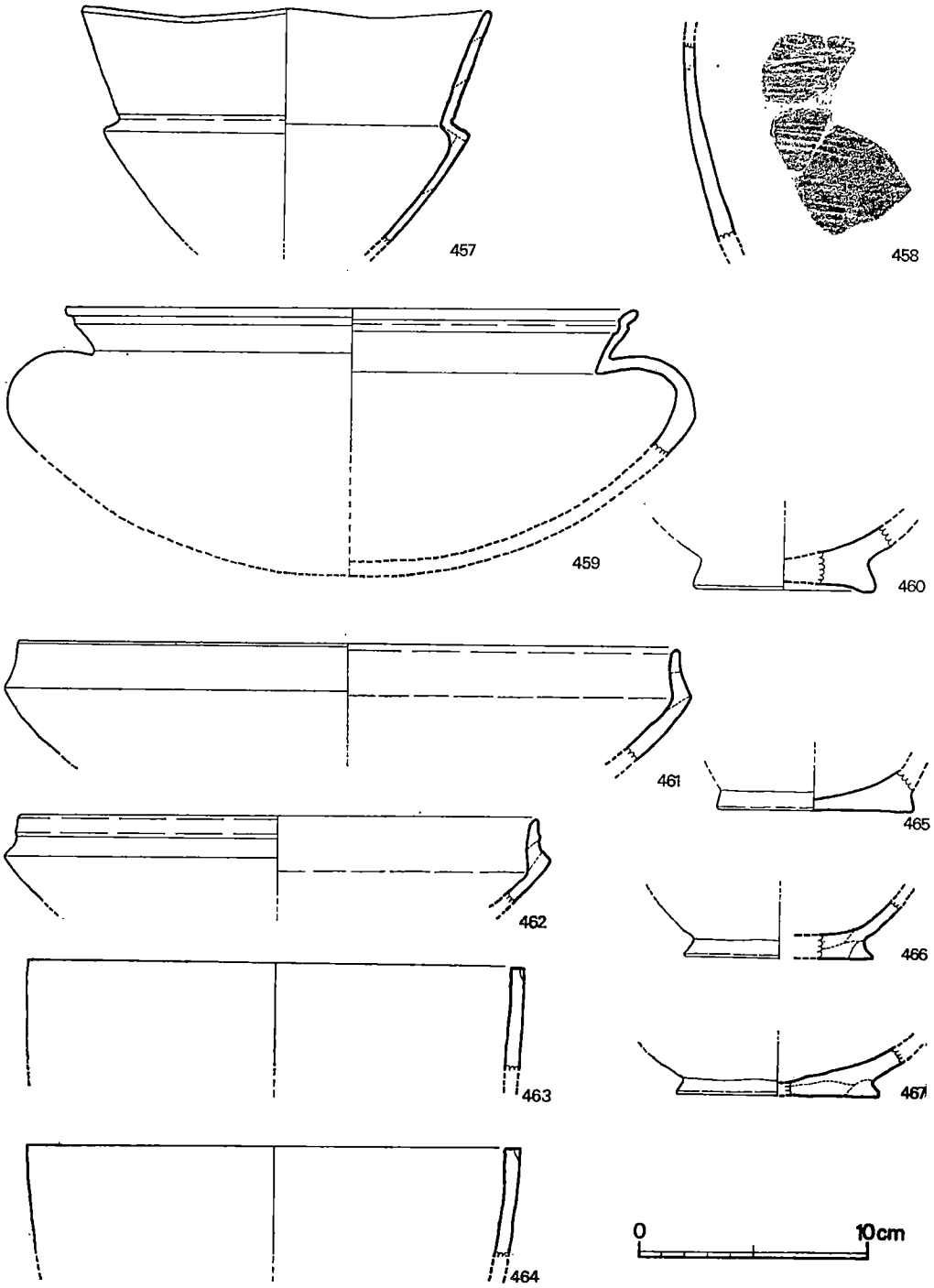
以上，炉跡内出土土器について述べてきたが，これらの土器は縄文時代晩期黒川式土器に相当するであろう。図示しえなかった他の土器についても，調整・胎土・焼成・色調から判断して同時期のものと考えられる。復原実測出来た457の浅鉢形土器は長崎県深掘遺跡，459の浅鉢形土器は鹿児島県黒川洞穴出土土器例に類似している。器形では甕形土器・鉢形土器・浅鉢形土器がみられ，セット関係としての近似値を示している。

V字溝出土土器（図版29，第50図・第51図）

甕形土器（463・464・468～495）

図示した甕形土器は30片である。全て夜臼式土器である。463・464は突帯をもたず，口縁部に直接刻目を施している甕形土器である。口唇部の内外面全てに粗い斜方向の条痕を施している。463の刻目は棒状の施文具で上から引いている。部分的に煤が付着している。胎土は細かい石英・長石粒を多量に含んでいる。焼成良好，色調は内外共黒色である。復原口径21.6㎝を測る。464は463と比べてやや細かい条痕を外面に施す甕形土器である。刻目は棒状の施文具で口唇部に押し付けている。胎土は非常に細かい石英・長石・雲母を含み，焼成良好である。色調は外面暗褐色，内面黒色を呈している。復原口径21.5㎝である。

468～480・459・494は口縁下に刻目突帯をもつ甕形土器である。468は口縁下に棒状の施文具で下から上に引いた刻目突帯をもつ。口縁上から口唇部にかけてはナデ，口縁下には粗い条痕で器面調整している。胎土は細かい長石・石英・雲母を含み，色調は暗褐色を呈する。煤が口縁下に付着している。469は口縁下に刻目突帯をもち，刻目は箆状の道具で下から上に引い



第50図　晩期土器(1)実測図（⅓）

ている。口唇部はナデ，器面は細かい刷毛状の道具で調整している。胎土は粗い石英と細かい長石を多量に含む。焼成は良好，色調は外面が暗茶褐色で，内面が淡茶褐色を呈している。470は篦状の道具で右から押え左から撥ね上げている刻目突帯をもつ。口唇部はナデている。胎土は細かい石英と長石を含み，焼成は良好，色調は赤褐色を呈している。471は口縁部に内彎する。刻目は細い棒状の道具で上から下へ引いている。色調は灰白色であるが，外面には煤が付着している。胎土は砂粒を若干含み，焼成はやや良好である。471は口縁下に刻目突帯をもつ土器である。口唇部はナデ，器面は細かい条痕を施している。刻目は棒状のもので下から上に引いている。胎土は細かい石英・長石を含み，焼成は普通である。色調は灰褐色を呈し，外面には煤付着。473は口縁下に棒状のもので押圧した刻目突帯をもつ甕である。器面はアナダラ条痕を施し，煤がかなり付着している。胎土は石英・長石多く含み，焼成良好，色調は黒褐色である。474は口唇部をナデ，刻目突帯は篦状のもので押えている土器である。外面は細かい条痕，内面は先端の丸くなった櫛状のもので調整を施している。胎土はやや粗い石英，細かい長石を少量含んでいる。焼成は良好，色調は口縁下が暗褐色それ以外は茶褐色である。475は口縁下に刻目突帯を施し，器面はナデている。胎土は粗い石英，細かい長石・雲母を多く含んでいる。焼成良好，色調は上と同様である。476は右から切り込み左へ撥ね上げている刻目突帯をもつ土器である。器面は縦方向の条痕で調整し，その他は横方向にナデている。細かく砕いた石英・長石を含む胎土で，焼成は良好，色調は褐色である。477は棒状の道具で上から下に引いたような刻目突帯をもつ土器である。器面は細かい条痕で調整し，煤が付着している。胎土は石英・長石を多く含み，焼成は普通である。色調は褐色を呈している。478はやや外方に開く甕形土器である。刻目は左から切り込み右に撥ね上げている。内面接合部分には櫛状のもので押え付けている。胎土は細かく砕いた石英・長石を含み，焼成は良好である。色調は内面黒褐色，外面には煤が付着している。479は内彎しながら外方に開く。刻目は細い棒状の道具で押圧している。外面は非常に細かい条痕を施し，内面はアナダラ条痕を施している。胎土は細かく砕いた石英・長石・雲母含み，焼成は良好である。色調は外面に煤が若干付着しているので暗茶褐色，内面は明かるい褐色を呈している。480は外方に開く甕形土器で，刻目は右から切り込み左へ撥ね上げている。調整は外面に細かい条痕，内面には接合から下に先端の丸くなった櫛状の道具でナデている。胎土は粗い石英・雲母を多量に含んでいる。焼成は良好色調は内面褐色，外面煤が付着し暗茶褐色を呈している。494は復原口径22.2㎝を測るやや外方に開く甕形土器である。刻目突帯は篦状の道具で下から上に引いたもの，外面は細かい条痕，内面は粗い櫛状のもので調整している。胎土は石英・長石を含み良好，焼成も良好である。色調は内面赤褐色，外面暗褐色で突帯付近に煤が付着している。459は鋭い篦状の道具で下から上に引き上げている刻目をもつ。石英・長石粒を含み，焼成は良好，色調は赤褐色である。

482～485は口縁に接して下向の斜面をもつ一群の甕形土器である。482は篦状の道具で押圧

した刻目をもつ土器である。外面は非常に細かい条痕，内面は粗い条痕で調整している。胎土は石英・長石粒・雲母含み，焼成は良好である。色調は内面黒色，外面漆黒色を呈している。483は太い棒状のもので押圧している刻目をもつ。突帯上下は横ナデ，内面は粗い条痕の後ナデている。胎土は細かい石英・長石含み良好である。色調は灰褐色，内面は褐色である。484は箆状の道具で下から上へ引いている刻目をもつ土器である。胎土は粗い石英と細かい長石を含み，焼成は良好である。色調は淡褐色を呈している。485はアナダラ条痕を施し，刻目は細い棒状の道具で押圧している。胎土はやや粗い石英と長石を少量含む。焼成普通，色調は黄褐色である。

486・487は口縁端と同高であり，口縁端にやや被いかぶさる感じの蒲鉾形断面をもつ甕形土器である。486は棒状のもので押え付けている刻目をもつ土器である。器面は浅いアナダラ条痕を施しており，突帯上下はナデている。胎土はやや粗い石英と雲母含む。焼成は良好，色調は外面暗茶褐色・内面褐色を呈している。487は，内外面ともアナダラ条痕で調整している土器である。刻目は小さく鋭い箆状の道具で不規則に施している。胎土は石英・長石粒含み，焼成は余り良くない。色調は赤褐色で，条痕の溝に煤が付着している。

481・490は小さく鋭い断面三角形の刻目突帯をもつ土器である。481は口縁端に接して下向の斜面をもち，刻目は箆状の道具で上から下に引いている。器面は非常に細かい斜方向の条痕を施し，内面には接合痕が残っている。胎土はやや粗い石英と細かい長石・雲母含んでいる。焼成は良好で，色調は茶褐色を呈し，外面には煤が付着している。490は口唇部が欠けているが481と同様で口縁端に接する三角突帯をもつ土器である。刻目は鋭い箆状のもので上から下に引いている。器面は条痕で調整している。胎土は石英と細かい長石多く含んでいる。焼成は良好，色調は黒褐色を呈している。

488は刻目の施文具は明確に把めないが，一度強く押え付けた後上に引き上げている刻目をもつ。外面はアナダラ条痕，内面には砂粒子の移動痕がみられる。胎土は粗い石英と細かい長石を多く含むが，焼成良好である。色調は赤褐色を呈している。491は口唇部がわずかにふくらみ，そこに刻目を施している土器である。胎土・焼成共に良好である。色調は外面暗茶褐色，内面褐色である。

492・493は口縁端より下がり，断面三角形の刻目突帯をもつ甕形土器である。492は突帯に鋭い刃物状のもので刻目を施している。器面は横方向の細かい条痕で調整している。胎土は細かく砕いた長石・雲母を含み，又，赤土粒を少量含んでいる。焼成は良好，色調は漆黒色を呈している。煤が付着している。493もやはり鋭い刃物状のもので刻目を施す土器である。器面は細かい条痕で調整している。胎土も上と同様であり，色調は外面黒褐色，内面褐色を呈している。やはり煤が付着している。495は胴部破片である。おそらく「く」の字状の反転部であろう。刻目は箆状の道具で右から切り込み左へ撥ね上げている。器面は横方向の細かい条痕で調

整している。胎土はやや粗い石英粒と細かい長石粒多く含む砂質性のものである。焼成余り良くなく，色調は内外面とも灰褐色である。

浅鉢形土器（第50図461・462）

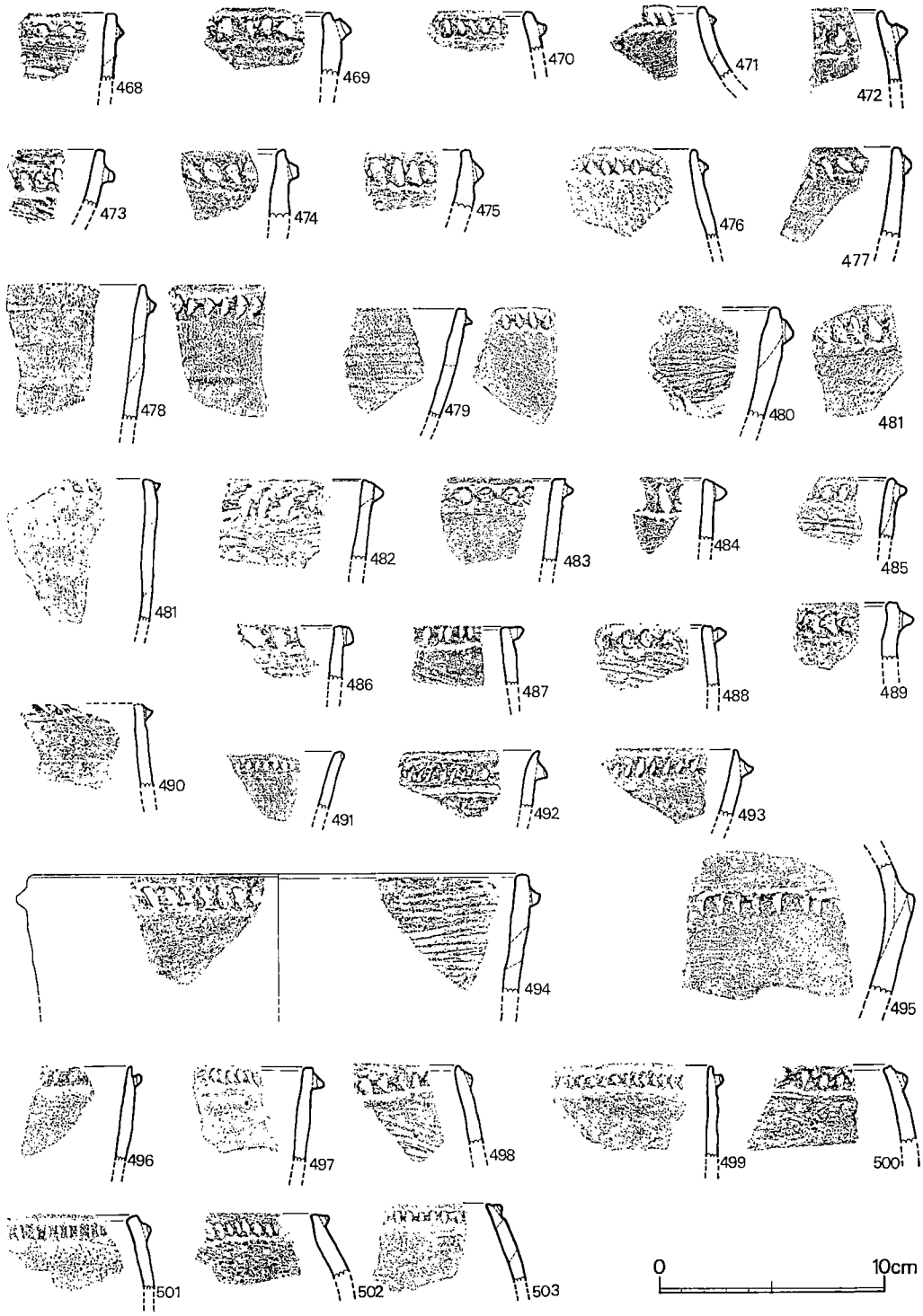
461・462は浅鉢形土器である。胴部で「く」の字状に屈折して，円盤貼付け状の底部をなす一群の土器であろう。461は口縁部に向かってすぼまるが口縁はやや外反する。復原口径28.6㎝を測る。胎土は非常に細かい長石若干量と雲母を多く含む。焼成普通で，色調は黒褐色を呈する。462は復原口径22.4㎝を測る黒色精製研磨している土器である。胴部で「く」の状に屈折するが，口縁下の接合個所で段を有し，沈線の如き様相を呈している。器面には丹を塗布したのか部分的にそれが残存している。胎土は緻密で，細かい長石若干量と雲母を多く含んでいる。焼成は良好で，色調は漆黒色で部分的に褐色を呈している。

底部（第50図465～467）

465～467は甕形土器・鉢形土器の底部であると考えられる。465は復原底部径8.4㎝を測り，浅鉢形土器の底部であろう。胎土は細かい長石と雲母をかなり含んでいる。焼成普通で，色調は黒色を呈している。接合は定かでないが，下部に断面三角形の粘土を置きその上に厚さ4～5㎜の粘土板を重ねたようである。466は甕形土器の底部であり，確証はないが穿孔しているかとも思われる。胎土はやや粗い石英と細かな長石・雲母を多く含んでいる。焼成はややあまい。色調は内面漆黒色・外面暗褐色を呈している。第二次焼成を受けたのか器面が風化している。467は精製研磨された浅鉢形土器の底部であろう。復原底部径8.7㎝を測る。胎土は緻密で，非常に細かな雲母を含んでいる。焼成良好，色調は外面漆黒色，内面暗褐色，底部外面は褐色を呈している。接合をみると，断面三角形の粘土紐を丸く置きその間を埋め，その上に粘土板を置き本体を作っていったのではないかと思われる。

以上これまで，V字溝出土の土器について述べてきたが，それにもとずき幾つかの問題について言及してみたい。V字溝出土の土器は大半縄文時代晩期夜臼式土器に編年される。大陸系磨製石器と思われるものは一点も出土してない，図示しなかった他の土器についても，同じ時期を与える事が出来る。調査区域が限られていたので限界性はあるが，それを前提として夜臼式土器の単純層の遺構と言っても良いと思う。

V字溝出土の甕形土器について，板付遺跡発掘調査（註1）に依る分類基準にもとづき分類してみたい。そうするA類の「口縁端よりも下がるもの」は図示しえた土器29点のうち12点を占める。そのうち8点に煤が付着していた。図示しえなかった土器では9点のうち3点がA類で，全て煤が付着していた。合計すると38点中15点がA類で，そのうち11点に煤が付着していた。このように本遺跡出土のA類は甕形土器の半数近くを占め，多くに煤が付着している。この事はA類の用途について考えさせられるものがある。今後の類例を待ちたい。B類の「口縁に接して下向の斜面をもつもの」は8点である。図示しえなかったものは2点である。合計で



第51図　晩期土器(2)拓影（1/3）

全体に占める比率は約25%である。このB類には煤の付着は1点しかみられなかった。C類の「口縁と同高であり，口縁端にやや被いかぶさる感じのもの」は4点である。図示しえなかったものは2点である。合計で全体に占める比率は15%弱である。煤は付着していない。その他に，三角の刻目突帯を有するが，先述の分類にはいらないものが2点ある。その2点共に煤が付着している。又，刻目はあるが突帯のないものが5点ある。そのうち3点に煤が付着している。その比率は20%弱である。

刻目の施文具については，図示しえなかったものも含め総点数39点中，19点が箆状道具で，14点が棒状道具で，その他と不明が6点である。限られた点数の中での比率であるが，箆状道具は50%前後を占める。棒状道具は35%，その他と不明は15%前後である。包含層土器でも同様の結果がでたが，箆状道具が棒状道具より多いと言える。A・B・C分類とその比率とは関係ないようである。

次に器形に関連して述べてみたい。出土土器の器種には甕形土器・浅鉢形土器が多くを占める。底部から類推出来る鉢形土器を加えても，バラエティに欠けている。（勿論，限られた発掘区域内での立論という限界性はある。）しかしそれにしても，高杯形土器はまだしも壺形土器が1点も出土してないのはどう解釈すべきであろうか。壺・甕・鉢・高杯のセット関係は縄文時代晩期に成立すると言われているが，その様相に合致しない。今後の発掘調査の解明すべき問題点としたい。

これまで甕形土器は粗製で，浅鉢形土器等は精製であると言われてきた。もちろん胎土自体を精製する，しないという本質的な差はあるが，ここでは胎土の混入物の差が観察出来た。本遺跡出土の甕形土器については，大半のものに石英粒・長石粒・雲母片を混入している。しかも比較的粗いものが多いようである。浅鉢形土器の胎土混入物は非常に細かく砕いた長石粒と雲母片しかみられなかった。精製土器と粗製土器とでは，石英粒を混入しない事と，長石粒等を混入するにしても非常に細かく砕いているという差が明確にあるようである。

既述したように，本遺跡V字溝は縄文時代晩期夜臼式土器単純層の遺構である。これまで，夜臼式土器の単純層遺跡としては，福岡県夏井ケ浜貝塚（註2），佐賀県宇木汲田遺跡（註3），長崎県里田原遺跡（註4），福岡県諸岡遺跡F区（註5）が知られている。本遺跡が第5例目であり福岡平野では第2例目となる。しかし前二者は貝塚で，後二者は包含層遺跡である。明確な遺構に伴い夜臼式器が出土したのは初めてである。但し，本遺跡での調査は極めて限定された区域内のものであるという事は言うまでもない。これも今後の発掘調査の課題としなければならない。現在，春成秀爾氏の問題提起以来縄文時代晩期土器について盛んに論議されている。長崎県山ノ寺遺跡（註6），長崎県原山遺跡（註7）等は時期を下げて考える傾向にある。又，佐賀県佐織遺跡や熊本県斉藤山遺跡，福岡県東菰田遺跡の一部の土器についても板付I式土器と同じ時期に下げる事等（註8）が提起されている。本遺跡V字溝出土の土器についても

同様の事が考えられても良いが，福岡平野とそれ以外の地域については様相を異にする可能性もある。一応本遺跡では縄文時代晩期終末期としておく。

以上，極めて限定された発掘区域であるという前提のもとでの立論を行なった。今後の目的意識的な発掘調査に期待したい。

包含層の土器（第51図496～503，第52図504～531）

甕形土器（496～518）

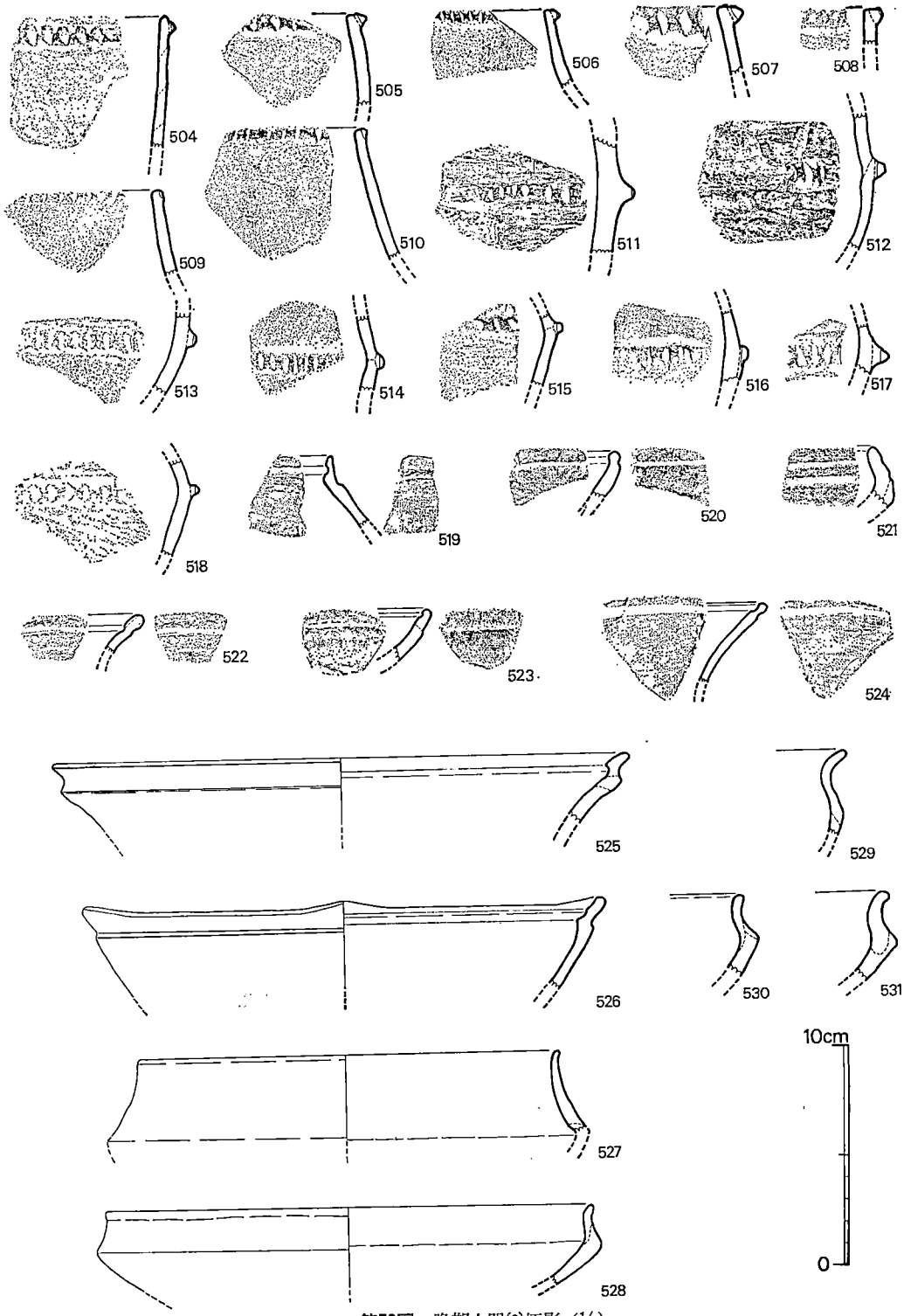
496～501は刻目突帯が口縁端より下がる甕形土器である。496・499は篦状の施文具で押え付けた刻目をもつ土器である。器肉が薄く，内外面共にナデて調整している。焼成は良好，色調は外面暗褐色，内面黄褐色を呈している。497は鋭い篦状の施文具で押え付けた刻目突帯をもつ土器である。器面はアナダラ条痕を施している。条痕の溝には煤が付着している。500は不定方向の細かい条痕を施し，棒状の施文具で下から上に押え付けた刻目突帯である。口縁部はやや内彎している。焼成良好で赤褐色を呈している。498・501は焼成があまい。胎土は全て石英，長石粒を含んでいる。

502～504は口縁端に接して下向の斜面をもつ甕形土器である。503・504は斜方向の細かい条痕を施した土器である。503は条痕の後ナデている。刻目は棒状の施文具で押え付ている。共に焼成良好で，色調は503が暗褐色，504は煤が付着しているが，黄褐色を呈している。502は棒状の施文具で上から下に引いた刻目突帯である。調整は器面風化していて判明しない。焼成あまく，色調は灰褐色を呈している。胎土は3片共に粗い石英粒と細かい長石粒，雲母を含んでいる。

505～508は口縁と同高であり，口縁端にやや被いかぶさる感じの刻目突帯をもつ甕形土器である。505は鋭い篦状の施文具で右から切り込み左へ撥ね上げた刻目突帯をもつ。506は鋭い刃物状の道具で切り込んだような刻目突帯をもつ。調整は共に横方向の条痕の後ナデている。焼成良好で，色調は暗茶褐色を呈する。胎土は粗い石英と細かい長石・雲母を含んでいる。507は篦状の施文具で右から切り込み左へ抜いている刻目突帯の土器である。508は篦状の道具の先端か何かで刻目を施している。共に調整は器面風化し判読出来ない。焼成あまく，色調は黄褐色を呈している。

509・510は突帯がなく，口唇部がやや肥厚して刻目を施す甕形土器である。口縁部は外彎しながらすぼまるタイプである。刻目は篦状道具の先端らしき個所で上から下に引いている。器面はナデ磨研していると思われる。胎土は509が非常に細かい長石・雲母を含み，510はそれに大粒の石英を若干加えている。共に焼成良好で，色調は暗黄褐色を呈している。

511～518は刻目突帯をもつ甕形土器の胴部破片である。511は器肉厚く，施文具は不明だが不規則な間隔に上から下に引いたような刻目をもった土器である。外面には突帯上下共に横方向の細かい条痕がみられ，内面にも横方向の粗い条痕がみられる。胎土粗く石英，長石，雲母



第52図　晩期土器(3)拓影（1/3）

を含んでいる。512は器面の風化が激しいが，突帯上部には横方向の細かい条痕がみられる。刻目は細い棒状のもので施している。胎土は粗い石英・長石と非常に細かい雲母を含んでいる。内面には接合部がみられ，その上をやや粗い条痕で調整している。513は左から切り込み右へ撥ね上げた刻目をもつ土器である。突帯上には横方向の条痕がみられる。胎土良好で石英・長石・雲母を若干量含む。焼成は普通で，色調は淡黄褐色を呈している。514は棒状の施文具で上から下に引いた刻目をもつ土器である。胎土は粗い石英と細かい長石を含んでいる。焼成良好で，色調は外面赤褐色・内面黄褐色を呈している。515は棒状の施文具で上から下に引いた刻目をもつ胴部破片である。調整は器面が風化し，読み取れない。胎土は粗く石英・長石を含んでいる。焼成あまく暗黄褐色を呈している。

516は丸味をもって屈折する胴部破片である。刻目は篦状の施文具で上から下へ引いているが突帯下まで及んでいる。胎土は細かい石英・長石・雲母を含んでいる。焼成はややあまく，暗黄褐色を呈している。517は小破片であるが，刻目は鋭い篦状のものでていねいに施しているので図示した。色調は淡黄褐色を呈している。焼成良好。518は篦状施文具で左から切り込み右へ撥ね上げている刻目突帯をもつ土器である。突帯上は横方向の条痕，突帯下は斜方向の条痕を施している。胎土は細かい石英，長石，雲母を含み良好である。焼成も良好である。色調は外面突帯下は暗褐色，上は灰褐色，内面暗黄褐色を呈している。

鉢形土器（第52図519～531）

519～531は浅鉢形土器である。519は体部から「く」字状の口縁部が立ち上がり，その上に細い粘土の「タガ」を加えている。器面は内外面共研磨している。胎土精製しており，非常に細かな石英・長石・雲母少量含む。焼成良好外面灰褐色，内面黒色である。520・523は口縁部が単純に開く器形だと思われる。520は外面に，523は内面に一条の沈線をもつ。共に胎土は砂っぽく余り良くない。焼成も良くない。色調は淡灰褐色を呈する。521は外面に二条の太めの沈線をもつ。胎土やはり砂質性で，焼成も良くない。色調は外面淡灰褐色，内面黒色である。522は口縁部が外反し，口が開く器形であろう。口唇部が肥厚し，外面に細い二条の沈線，内面に段を有する。胎土は砂質性で細かい長石，雲母若干含んでいる。焼成普通，色調暗褐色を呈している。器面研磨していると思われるが，風化している。524は口縁部内外面に太い沈線をもち，やや外彎しながら口が開く器形であろう。胎土良好で，非常に細かい長石，雲母を含んでいる。器面内外面共研磨している。焼成良好，色調外面灰褐色（部分的に黒色），内面黒褐色を呈している。525は口縁部が強く外反し，復原口径26.3㎝を測る。器面内外面共篦で研磨している。色調は外面褐色，内面灰褐色である。胎土は細かい石英・長石・雲母を含み，焼成良好である。526は復原口径23.8㎝を測る。口縁部は4ケ所でわずかに山形に隆起している。胎土は粗い石英と細かい長石，雲母少量含んでいる。内外面共研磨しており，外面灰褐色，内面淡褐色を呈する。焼成は非常に良好である。527は口縁部外反し，肩部「く」字状に屈折す

る単純な器形であろう。復原口径19.2㎝を測る。外面研磨し，茶褐色を呈する。胎土は細かい石英・長石・雲母を含む。焼成良好である。528～531は同様の器形であろう。528は復原口径22.3㎝を測る。胴部で「く」字状に屈折し，外反しながら口縁が立ち上がる器形である。内外面共研磨されているが，部分的に剝落している。胎土は細砂粒若干含み，良好である。焼成良好で，色調は外面黒褐色，内面褐色を呈している。529は口縁部が強く外反し，肩部で「く」字状にゆるく屈折している。内外面共箆で研磨している。色調は外面暗褐色，内面黒褐色である。胎土は粗い石英と非常に細かい長石・雲母を含んでいる。焼成普通である。530は胎土に粗い石英・細かい長石・雲母を含み焼成普通である。色調は内外面共灰褐色を呈している。531は器面風化し鉄分が付着しているが，石英・長石・雲母を含み良好である。焼成普通で，色調は暗褐色を呈している。

以上，包含層出土の縄文時代晩期土器について述べてきたが，次にそれぞれの土器の編年時期について述べてみたい。甕形土器（496～518）は全て夜臼式土器に編年される。甕の口縁部刻目突帯は，板付遺跡発掘調査（註9）による分類によれば，A類は496～501・B類は502～504・C類は505と508になる。その比率については限定された点数なのだが，総点数11点のうちA類が6点で最も多く，次いでB類の3点，C類の2点となる。刻目の施文具は，23点中箆状道具が12点で最も多く過半数を占めている。棒状道具は7点で，その他と不明が4点である。施文具の違いとその比率についての意味はわからない。

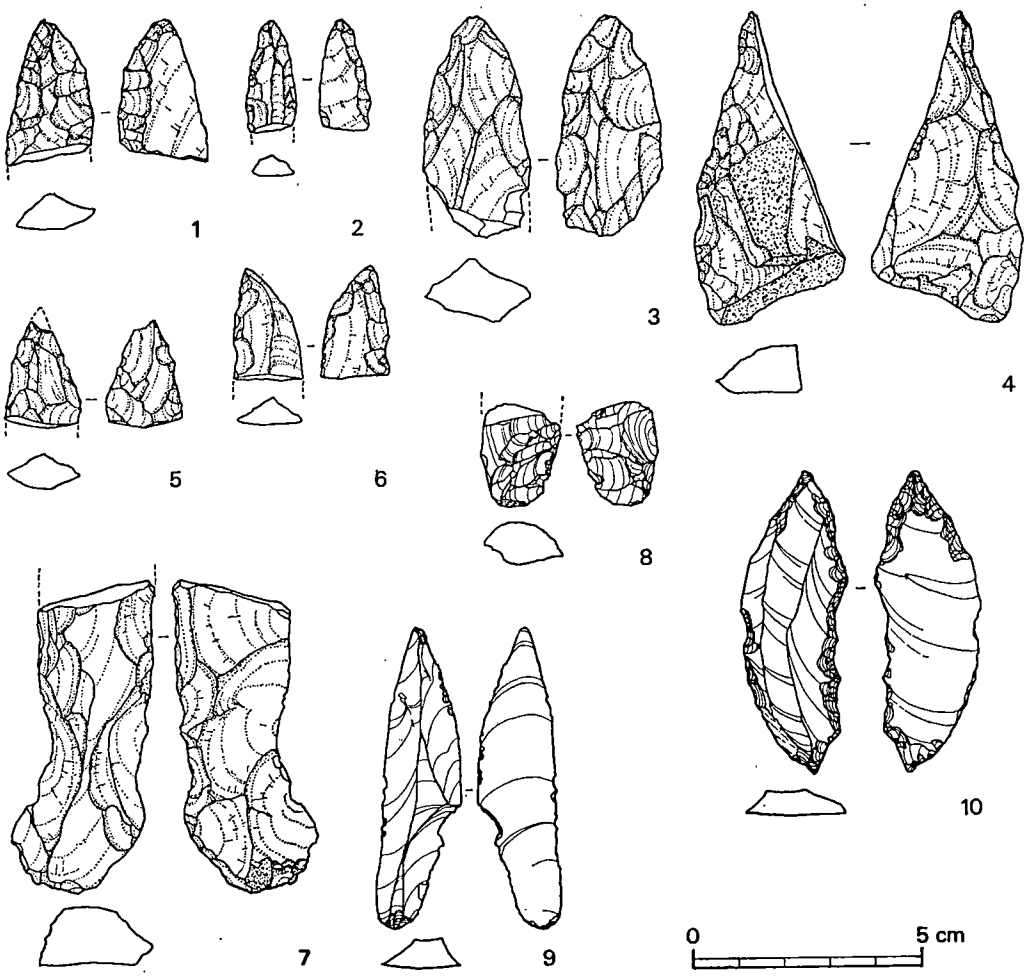
鉢形土器は519～526までが黒川式土器に，527～531が夜臼式土器に編年出来る。

（藤瀬禎博）

註1　森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
2　小田富士雄「入門講座・弥生式土器—九州2—」『考古学ジャーナル』77　1973
3　同　上
4　安楽勉・藤田和裕編「里田原遺跡」『長崎県文化財調査報告書』21　1975
5　山口譲治編「板付周辺遺跡調査報告書(3)」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』36　1976
6　古田正隆「山ノ寺・梶木遺跡」『百人委員会埋蔵文化財報告』1　1973
7　古田正隆「重要遺跡の発見から崩壊までの記録—縄文晩期原山遺跡—」『百人委員会埋蔵文化財報告』3　1974
8　高島忠平「三日月町佐織の夜臼式土器」『新郷土』319　1975
9　註1と同じ

(4)　尖頭状石器（図版30—2，第53図）

尖頭状石器として取り扱った資料には，いわゆる石槍と剝片尖頭器がある。1～8は前者に含まれ，9・10は後者である。完形品は4・9・10で，1～3・5・6は先端部，7・8は基部



第53図　尖頭状石器実測図（3/5）

表4　尖頭状石器計測表　（単位　mm・g）

実測図No.	遺物No.	地名	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	備考	図版No.
1	KKPT 1	A9	1層	サヌカイト	(30.1)	18.4	7.5	(4.75)	基部	30—2
2	KKPT 2	B2—16	3層	〃	(23.9)	11.2	4.6	(1.45)	先端	
3	KKPT 3	B2—9	3層	〃	48.2	23.4	12.1	(14.4)	先端	
4	KKPT 4	B2—11	4層	〃	76.2	32.6	10.8	20.0	完形	
5	KKPT 5	B2—11	3層	〃	(22)	16.0	6.5	(1.70)	先端	
6	1次 S—384		3層	〃	(24)	14.9	5.9	(1.9)	基部	
7	1次 S—226		3層	〃	72.4	24.6	13.8	(27.2)	基部	
8	2次 S—228	B5—16	3層	黒曜石	18.9	16.4	9.1	(3.1)	基部	
9	1次 S—420			〃	65.9	17.2	6.9	5.9	完形	
10	2次 S—188	B5—16		〃	75.8	22.1	5.2	8.9	完形	

考えられる断片である。石質は黒曜石とサヌカイトで剝片尖頭器はいずれも黒曜石製である。

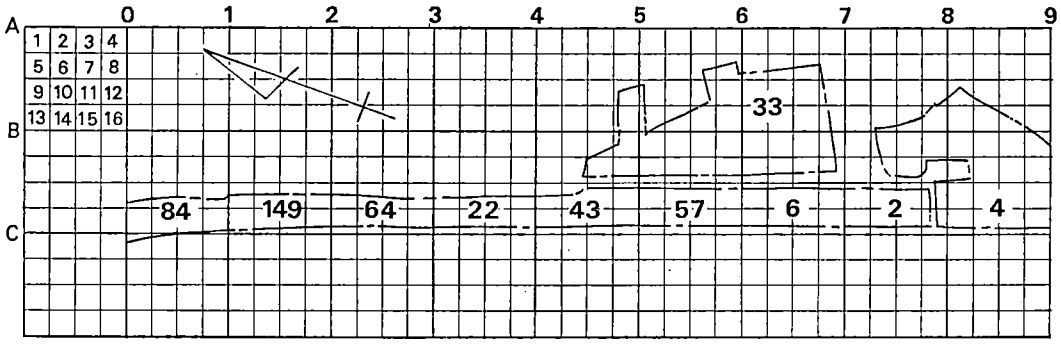
1・2は主要剝離面を残し，この面は片側の側縁にのみ調整を加え，他方の面は両側縁に調整を加えており，断面形は菱形を呈する。3・4は比較的大きな剝離を加えており，調整は少ないが先端部を形成し，3は基部にかかる部分かと思われる。4の片方の側縁は部厚いまま大きく残る。5も断面菱形を呈すが主要剝離面には一応両側縁から調整を加えている。6は主要剝離面側縁にわずかに浅く調整を加え片面では側縁をそのまま浅く断面形はむしろ三角形である。7は基部端がかなり部厚く残されており，やや先端寄りに浅く大きな抉りがみられる。8も基部端である。

9は，刃器状剝片でわずかに側縁に使用痕が残り，中ほどから先端にかけて尖る形状を有するが，尖頭器としての機能を充分に果すか疑問である。10は刃器状剝片の打瘤を細かく調整加工し，尖頭状を形成している。また側縁には片側に入念な調整があり，削器的な機能をも持ち得ている。

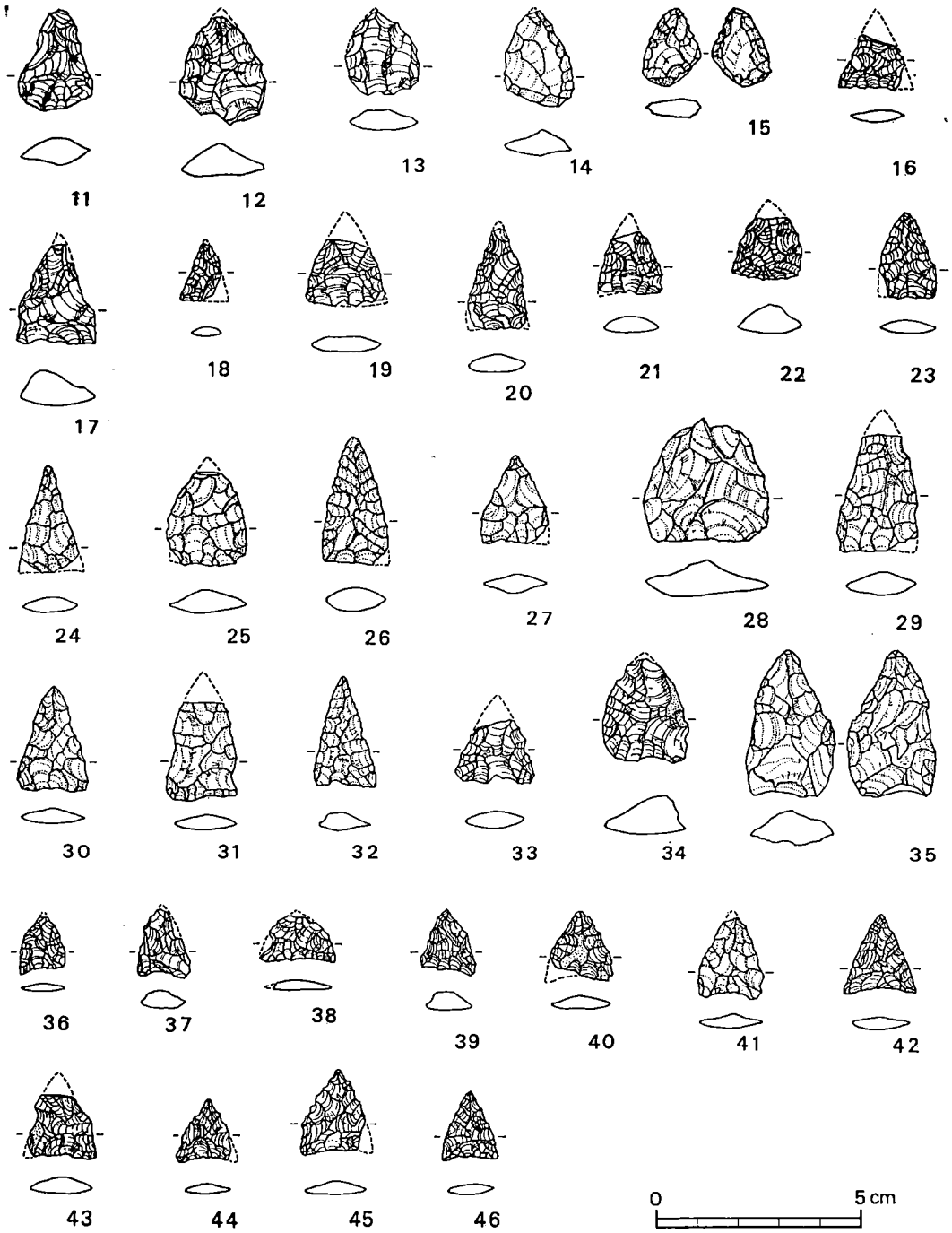
(5) 石　鏃

石鏃は3次にわたる調査により破損品を含めて481点が出土した。この内表採等の10点を除いた471点の出土地区分布を第54図に示すが，B2区において約31.6%を占める149点が出土しB2区周辺及びB6区付近に比較的集中する。時期的には第56図91等若干の混入はみられるが，後期中葉の遺物包含層からの出土でこの時期に属するものが大半を占める。石質は黒曜石がほとんどで，サヌカイト製が約10%，若干のチャート製等がみられる。黒曜石は，色調が漆黒色を呈し透明度が深く，佐賀県伊万里市腰岳産とみられるものがほとんどである。

完形品は68点のみで，破損品が多い。破損度の大きい例等の125点を除いた356点は図示し計測表を付した。なお図示しない125点については表52の未掲載石器計測表に記載した。また未収録分は分類不可能のため後述の分類は示さない。



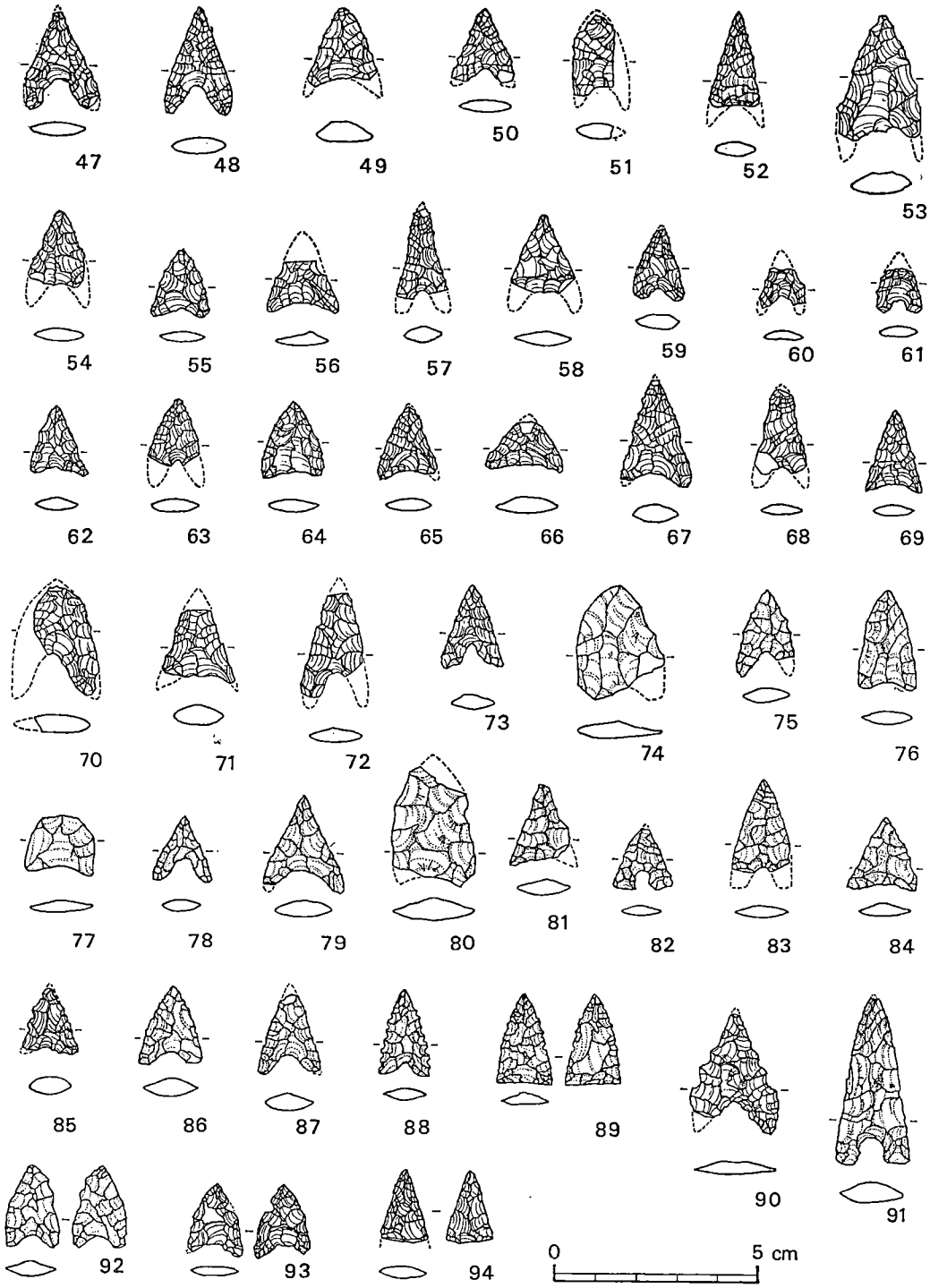
第54図　石鏃の地区別分布



第55図　石鏃実測図(1)　(3/5)

表5　石　鏃　計　測　表 (1)　　(単位 mm・g)

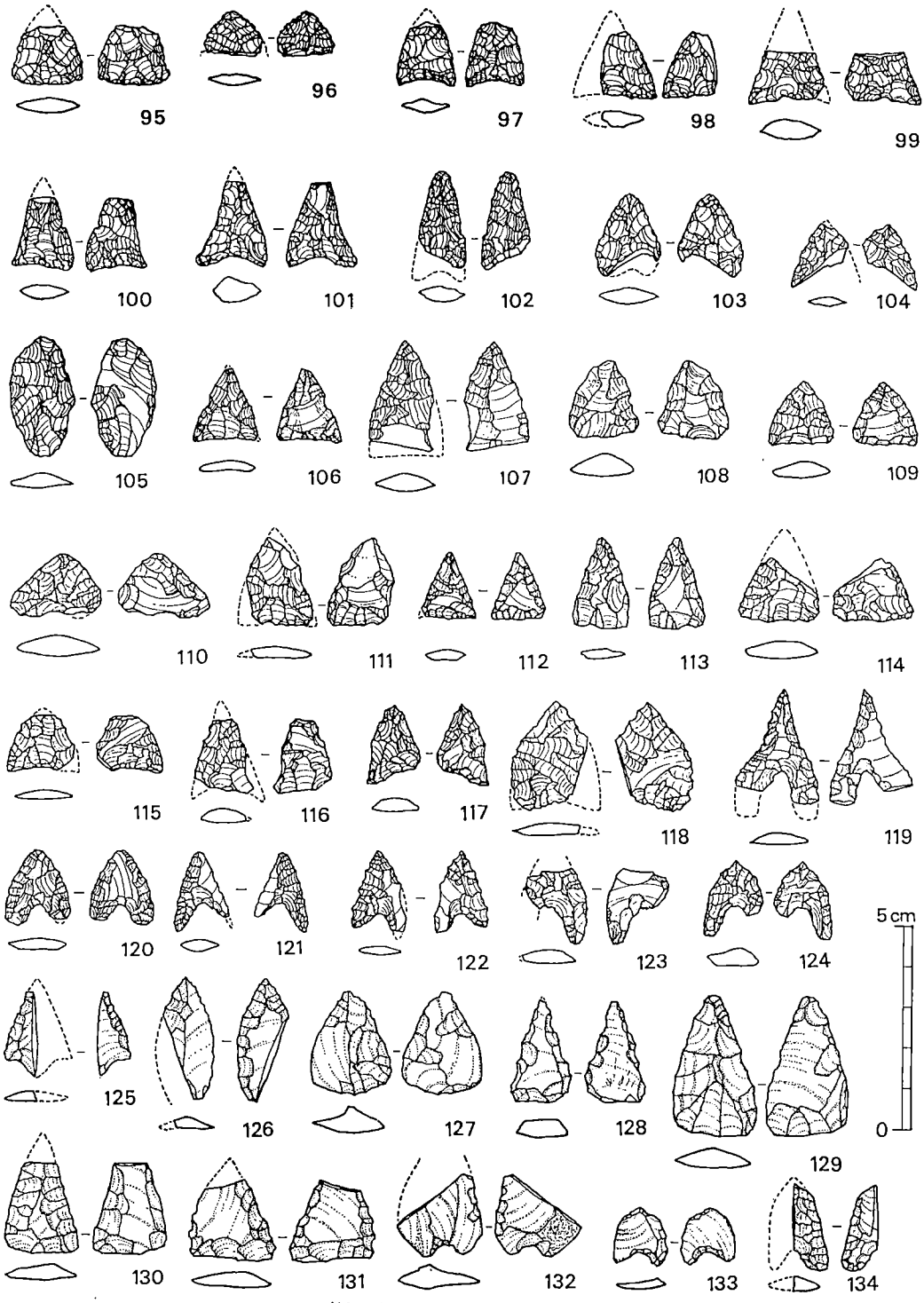
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	有効長	最大幅	厚	重	備考				図版No.
11	KKA-219	B3—9	3層	黒曜石	24.2	18.5	17.5	6.2	2.24	A	1a類		完形	
12	KKA-343	B1—12	3層	〃	(25.8)	(18.7)	20.5	8	(3.70)	〃	〃		ほぼ完形	
13	KKA-327	B1—16	3層	〃	(19.7)	(17)	17.5	4.9	(1.68)	〃	〃		ほぼ完形	
14	KKA-196	B2—13	3層	サヌカイト	(23)	(17.2)	16.6	6	(2.29)	〃	〃		ほぼ完形	
15	2S-53	B6—10	5層	〃	18.9	11.0	14.3	4.7	1.28	〃	〃		完形	
16	KKA-187	B2—14	5層	黒曜石	(12.7)		(16)	2.8	(0.58)	B	〃		1/4欠損	
17	KKA-192	B1—15	3層	〃	(23.9)		19	8.4	(3.05)	〃	〃		ほぼ完形	
18	KKA-210	B2—15	3層	〃	(13.5)		(9.8)	2.4	(0.31)	〃	〃		1/3欠損	
19	KKA-220	B3—9	3層	〃	(15.9)		(18.8)	3.6	(1.28)	〃	〃		1/4欠損	
20	KKA-221	B4—9	1層	〃	(24.3)		(14)	4.1	(1.28)	〃	〃		ほぼ完形	
21	KKA-248	B2—11	4層	〃	(14.5)		(15.5)	3.8	(0.88)	〃	〃		1/4欠損	
22	KKA-252	B1—11	4層	〃	(15)		16.6	6.6	(1.74)	〃	〃		1部欠損	
23	KKA-271	B1—12	4層	〃	20.3		(13)	3	(0.79)	〃	〃		1部欠損	
24	KKA-258	B3—11	3層	サヌカイト	(25.8)		(13.8)	3.6	(1.01)	〃	〃		1/4欠損	
25	KKA-267	B1—12	3層	〃	(22.6)		(19.4)	5.5	(2.61)	〃	〃		1部欠損	
26	KKA-227	B1—14	3層	〃	30.7		(15.6)	5.7	(2.28)	〃	〃		1部欠損	
27	KKA-279	B1—10	3層	〃	20.6		(16.1)	4.7	(1.16)	〃	〃		1部欠損	
28	KKA-362	B4	3層	?	30		30.2	8.8	8.49	〃	〃		完形	31
29	KKA-388	B2—13	4層	サヌカイト	(28)		(19.4)	5.4	(2.95)	〃	〃		1部欠損	
30	KKA-160	B3—9	4層	〃	25.3		17	3.4	1.33	C′	〃		完形	
31	KKA-324	B1—16	3層	〃	(24)		17	3.8	(1.99)	〃	〃		1部欠損	
32	KKA-339	B1—12	3層	〃	24.3		10.9	4.7	1.29	〃	〃		完形	
33	KKA-316	B2—15	4層	黒曜石	(15.2)		19	4	(1.17)	〃	〃		1部欠損	
34	KKA-351	B1—10	1層	〃	(25.2)		20.4	9	(4.81)	〃	〃		ほぼ完形	
35	2S-317	B6—14	3層	サヌカイト	37.5		21.7	7.6	4.7	〃	〃		完形	
36	KKA-55	B1—14	4層	黒曜石	(13.8)		10.7	2	(0.30)	〃	〃		ほぼ完形	
37	KKA-59	B2—13	4層	〃	(17)		15	4	(0.78)	〃	〃		ほぼ完形	
38	KKA-74	B1—15	4層	〃	(11)		(18.2)	2.4	(0.48)	〃	〃		1部欠損	
39	KKA-78	B3—14	3層	〃	(15.8)		13.3	4.3	0.78	〃	〃		完形	
40	KKA-96	B2—15	3層	〃	(16.5)		(15.2)	3.2	(0.60)	〃	〃		1部欠損	
41	KKA-155	B1—15	3層	サヌカイト	(19.7)		16	3.3	(0.80)	〃	〃		ほぼ完形	
42	KKA-156	B4—V字溝	4層	黒曜石	19.5		17	3	0.62	〃	〃		完形	
43	KKA-178	B2—15	4層	〃	(15.6)		(16.2)	3.8	(1.03)	〃	〃		1部欠損	
44	KKA-209	B2—15	3層	〃	15		(13)	2	(0.40)	〃	〃	鋸歯状	1部欠損	
45	KKA-214	B2—11	4層	〃	20.7		(15.6)	3.2	(0.85)	〃	〃	鋸歯状	1部欠損	
46	KKA-253	B1—11	4層	〃	17		13.7	2.4	0.39	〃	〃		完形	



第56図　石鏃実測図(2)　(3/5)

表6　石　鏃　計　測　表 (2)　　(単位 mm・g)

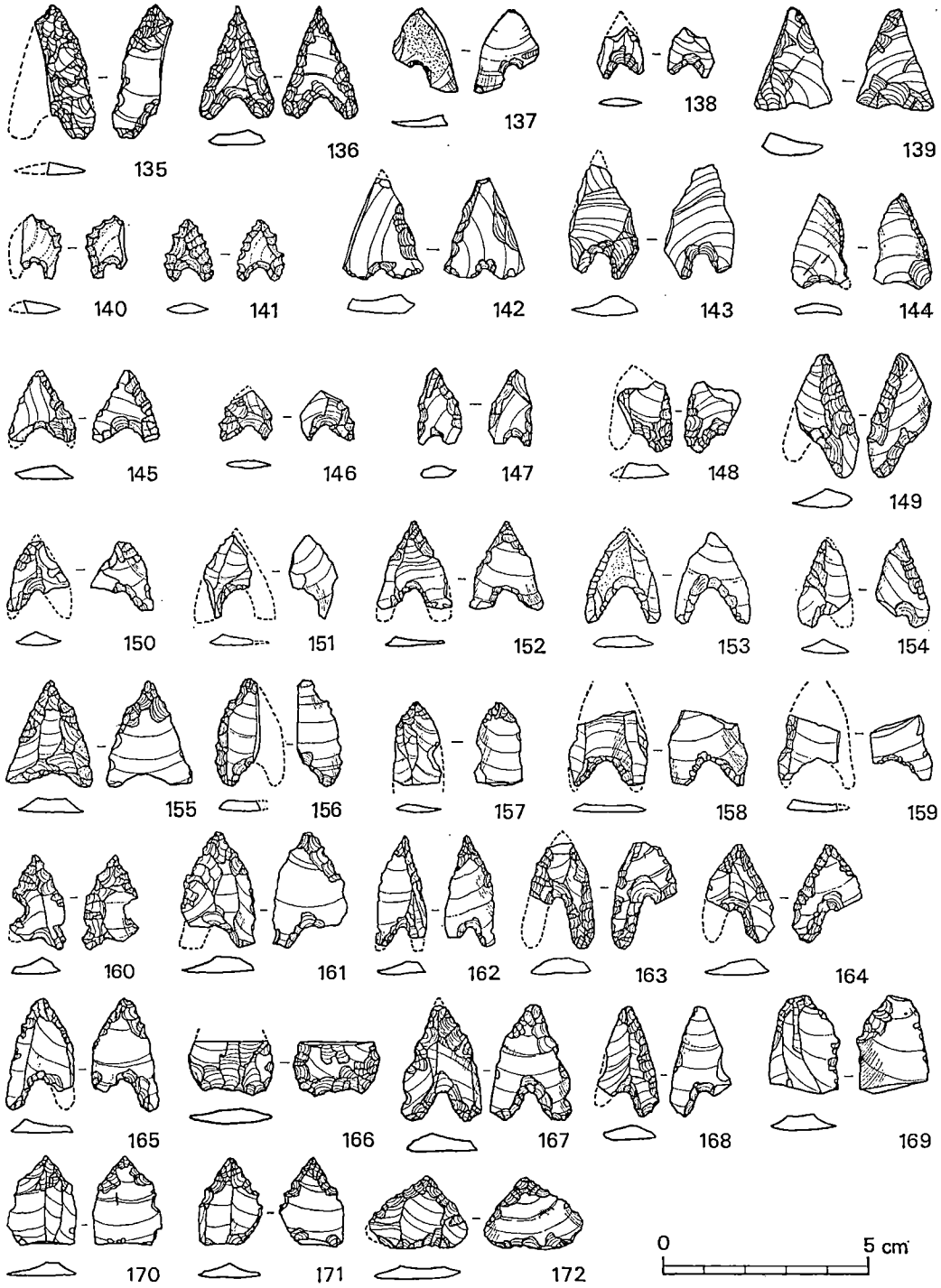
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考				図版No.
47	KKA- 4	B 4	1層	黒曜石	(23.6)	(17.8)	3.3	(1.00)	C	1 a 類		ほぼ完形	
48	KKA- 22	B 9	1層	〃	26	16	3.8	1.10	〃	〃		完形	
49	KKA- 53	B 3—10	2層	〃	(19.3)	(13.5)	4.8	(1.00)	〃	〃		1部欠損	
50	KKA- 85	B 1—15	4層	〃	(17.5)	(15.2)	2.6	(0.50)	〃	〃		ほぼ完形	
51	KKA-101	B 2—14	3層	〃	(19.4)	(10)	3.4	(0.81)	〃	〃		1/3 欠損	
52	KKA-103	B 3—14	3層	〃	(23)	(11.6)	3.2	(0.76)	〃	〃		1/4 欠損	
53	KKA-171	B 2—10	4層	〃	(29.9)	(20)	5	(2.51)	〃	〃		1部欠損	
54	KKA-199	B 1—16	3層	〃	(18)	(13.2)	2.7	(0.67)	〃	〃		1/4 欠損	
55	KKA-231	B 4—V字溝	6層	〃	16.5	13.9	2.4	0.49	C′	〃		完形	
56	KKA-242	B 3—10	3層	〃	(12.7)	17.2	3.3	(0.48)	〃	〃		1/3 欠損	
57	KKA-254	B 1—11	4層	〃	(21.8)	(12)	3.7	(0.81)	C	〃		1/4 欠損	
58	KKA-261	B 3—14	3層	〃	(18.6)	(15)	3.2	(0.78)	〃	〃		1/3 欠損	
59	KKA-264	B 1—16	3層	〃	(17.1)	11.8	3.7	(0.62)	〃	〃		ほぼ完形	
60	KKA- 79	B 3—14	3層	〃	(9.2)	(10.8)	1.7	(0.21)	〃	〃		1/4 欠損	
61	KKA-145	B 2—11		〃	(11)	11	2.8	(0.25)	〃	〃		1部欠損	
62	KKA-273	B 3—10	3層	〃	16.6	14	2.9	0.46	C′	〃		完形	
63	KKA-278	B 1—10	3層	〃	(16)	(12.2)	3	(0.51)	C	〃		1/3 欠損	
64	KKA-287	B 2—10	3層	〃	18	14.7	2.7	0.72	C′	〃		完形	
65	KKA-314	B 2—15	4層	〃	(17.2)	(14)	2.8	(0.52)	〃	〃		ほぼ完形	
66	KKA-318	B 5—14	3層	〃	(11.4)	18.2	3.7	(0.70)	〃	〃		ほぼ完形	
67	KKA-319	B 3—10	4層	〃	(25.6)	16.9	4.2	(1.17)	〃	〃		ほぼ完形	
68	KKA-334	B 2	1層	〃	(20.6)	(12.6)	2	(0.52)	C	〃		1/4 欠損	
69	KKA-347	B 3—9	2層	〃	12.7	13.1	2.5	0.45	C′	〃		完形	
70	KKA-348	B 5—13		〃	(26.5)	(15.9)	4	(1.48)	C	〃		1/3 欠損	
71	KKA-353	B 2—12	4層	〃	(17.3)	(17.2)	4.8	(1.29)	C′	〃		1/4 欠損	31
72	KKA-340	B 1—12	3層	〃	(25.4)	(14.8)	3.6	(0.95)	C	〃		1/4 欠損	
73	KKA- 19	B 4	1層	チャート	20.3	15	3.4	0.77	〃	〃		完形	
74	KKA- 56	B 1—14	4層	サヌカイト	(27.8)	(20.4)	4	(2.44)	C′	〃		1/4 欠損	
75	KKA- 58	B 2—13	4層	〃	21.2	(13.7)	3.4	(0.77)	C	〃		1部欠損	
76	KKA- 69	B 1—15	3層	〃	23.9	13.8	3	1.08	C′	〃		完形	
77	KKA- 89	B 1—15	4層	〃	14.8	16.3	3.2	0.73	〃	〃		完形	
78	KKA- 93	B 1—13	1層	〃	16.2	21.6	2.3	0.40	C	〃		完形	
79	KKA-183	B 2—16	4層	〃	(23.7)	20	4	(1.10)	〃	〃		ほぼ完形	
80	KKA-184	B 3—13	4層	〃	(29.2)	20.3	5.6	(3.14)	C′	〃		1部欠損	
81	KKA-201	B 4—V字溝	3層	〃	(20)	(14)	3.6	(0.85)	〃	〃		1部欠損	
82	KKA-301	B 1—11	3層	〃	(15.6)	14.5	2.7	(0.45)	C	〃		ほぼ完形	
83	KKA-302	B 1—11	3層	〃	(22.7)	(14.3)	3	(0.91)	〃	〃		1/4 欠損	
84	KKA-303	B 1—11	3層	〃	18.2	16.6	3.5	0.79	C′	〃		完形	
85	KKA-295	B 2—12	2層	黒曜石	(15.6)	(13.2)	4.5	(0.18)	〃	〃	鋸歯状	ほぼ完形	
86	KKA-276	B 2—12	4層	サヌカイト	18.9	15.2	4.2	0.90	〃	〃	〃	完形	
87	KKA-136	B 1—11	3層	〃	(19)	(15)	3.8	(0.87)	C	〃	〃	1部欠損	
88	KKA- 68	B 1—15	3層	〃	20.5	12.2	2.8	0.60	〃	〃	鋸歯鏃	完形	
89	KKA- 10	B 6—14	5層	〃	21.9	13.8	3.5	0.8	B	〃	〃	完形	
90	KKA- 46	B 3—12	3層	黒曜石	(28.5)	21.4	2.7	(1.43)	C	〃	鋸歯状	1部欠損	
91	KKA-289	B 8—4	5層	サヌカイト	(40.5)	17.6	5	(2.5)	〃	〃		ほぼ完形	
92	2 S-439	B 5—9	3層	〃	21.	13.4	3.5	0.6	〃	〃		完形	
93	2 S- 50	B 7—13	?	黒曜石	17.9	13.8	2.4	(0.3)	〃	〃		ほぼ完形	
94	KKA-381	B 4	2層	〃	(17.4)	(11.2)	2.8	(0.48)	?	〃		先端破片	



第57図　石鏃実測図(3)　(3/5)

表7　石　鏃　計　測　表 (3)　　(単位 mm・g)

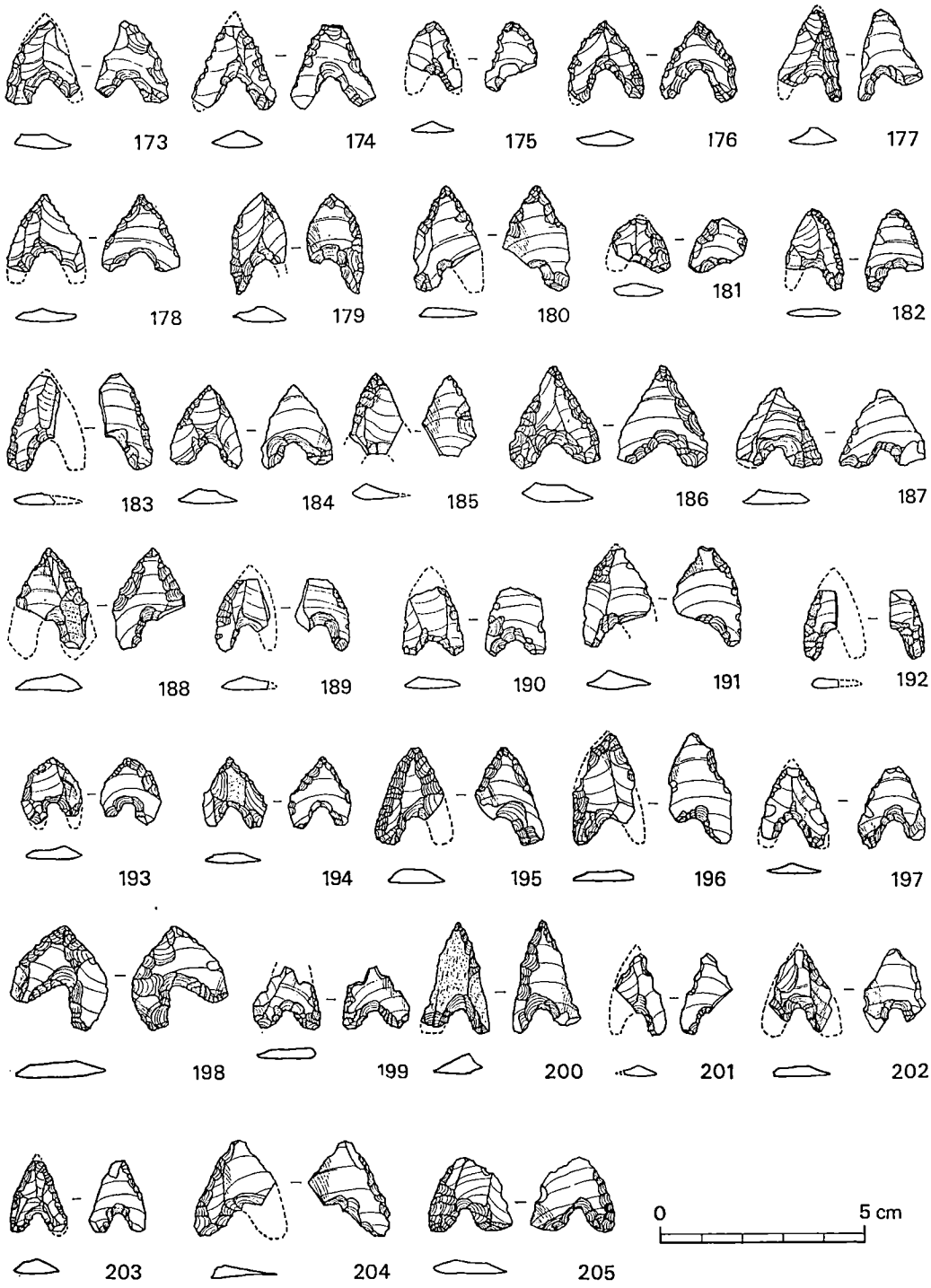
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考			図版No.
95	2S-44	B8—11	2層	黒曜石	(14.4)	16.4	3.9	(1.88)	B	1a類	1/4欠損	
96	2S-389	B7—9	3層	〃	(17)	14.3	3	(0.3)	?	〃 鋸歯鏃	1部欠損	
97	1S-201	?	3層	〃	(15.5)	14.5	3.6	(0.6)	C′	〃	1部欠損	
98	1S-202	?	3層	〃	(16.2)	(13.6)	3.8	(0.9)	〃	〃	1/3欠損	
99	2S-438	B6—11	3層	〃	(13.3)	18.7	4.8	(1.0)	〃	〃	1/3欠損	
100	1S-113	?	3層	〃	(17.7)	15.6	3.6	(0.8)	〃	〃	先端欠損	
101	1S-264	?	3層	〃	(20.5)	17.5	6.3	(1.5)	〃	〃	先端欠損	
102	2S-21	B6	1層	〃	(23.5)	12.1	3.9	(0.8)	?	〃	1/3欠損	
103	2S-32	—	表採	〃	(21)	16.1	4	(0.85)	〃	〃	1部欠損	
104	1S-265	?	3層	〃	(15.9)	13.8	2.5	(0.4)	〃	〃	1/2欠損	
105	KKA-307	B1—11	3層	〃	29.2	16	3.6	1.28	A	1b類	完形	
106	KKA-226	B1—14	3層	〃	(17.5)	(15.9)	2	(0.56)	B	〃	ほぼ完形	
107	KKA-230	B1—16	4層	〃	(26.8)	(15.7)	4.5	(1.60)	〃	〃	1/4欠損	
108	KKA-294	B2—12	2層	〃	18.3	17	5	0.70	〃	〃	完形	
109	KKA-311	B2—9	1層	〃	15	15.3	4	0.88	〃	〃	完形	
110	KKA-315	B2—15	4層	〃	(15.2)	21.8	5	(1.43)	〃	〃	先端欠損	
111	KKA-368	B1—13	3層	〃	(21.4)	(16)	3	(1.50)	〃	〃	1/4欠損	
112	KKA-272	B6	表採	〃	16.4	(13)	2.6	(0.41)	〃	〃	ほぼ完形	
113	KKA-342	B1—12	3層	〃	21.9	13.2	2	1.63	〃	〃	完形	
114	KKA-372	B6	表採	〃	(15.6)	19.4	2.8	(1.18)	〃	〃	1/3欠損	31
115	KKA-64	B2—16	3層	〃	(13.7)	(15.9)	2	(0.49)	C′	〃	1部欠損	
116	KKA-310	B3—9	3層	〃	(17.4)	(14)	3.4	(0.80)	〃	〃	各先端欠損	
117	KKA-320	B4—V字溝	2層	〃	19.4	12	3	0.73	〃	〃	完形	
118	KKA-349	B2—14	4層	〃	(26.7)	(18.3)	2.8	(1.43)	〃	〃	1/4欠損	
119	KKA-191	B3—9	4層	〃	(27)	20	3	(1.00)	C	〃	1/3欠損	
120	KKA-151	B2—12	4層	〃	18.8	15	3.8	(0.73)	〃	〃	ほぼ完形	
121	KKA-313	B2—15	4層	〃	20	(13)	3	(0.41)	〃	〃	ほぼ完形	
122	KKA-317	B2—12	4層	〃	(19.6)	13.3	2.2	(0.49)	〃	〃	1部欠損	
123	KKA-380	B14—14	2層	〃	(17.9)	(16.1)	3.6	(0.75)	〃	〃	1/3欠損	
124	1S-468	7号住	フクエ	〃	(18.4)	(13.5)	4.5	0.7	〃	〃	1部欠損	
125	KKA-149	B2—15	4層	サヌカイト	(20.8)	(7.8)	(2.5)	(0.40)	A	〃	1/2欠損	
126	KKA-188	B1—15	4層	〃	29.8	(12)	2.4	(0.96)	〃	〃	1/3欠損	
127	KKA-182	B1—16	4層	〃	24.6	19	6	2.34	〃	〃	完形	
128	KKA-140	B1—11	3層	〃	(24.7)	14.8	4.3	(1.45)	B	〃	ほぼ完形	
129	KKA-197	B2—11	4層	〃	33.8	20	4.7	3.18	〃	〃	完形	
130	KKA-181	B1—12	3層	〃	(22)	18	3.6	(1.26)	〃	〃	先端欠損	
131	KKA-161	B3—9	4層	〃	(19.5)	20.6	3.4	(1.60)	〃	〃	先端欠損	
132	KKA-159	B3—14	3層	〃	(20)	20.5	15.7	(1.51)	C′	〃	1/2欠損	
133	KKA-195	B2—10	4層	〃	13.6	12.9	2.7	0.41	〃	〃	完形	
134	KKA-364	B2—16	4層	〃	(21.2)	(8.6)	4	(0.68)	〃	〃	1/5欠損	



第58図　石鏃実測図(4)　(3/5)

表8　石　鏃　計　測　表 (4)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考			図版No.
135	1S-442	A7・B7	1層	黒曜石	31.8	(14.9)	29	(1.2)	C	1b類	1/3 欠損	
136	1S-114	A7・B7	3層	〃	(26.7)	18	3.9	1.3	〃	〃	完形	
137	KKA-308	B1—11	4層	〃	20.2	15.6	2.5	0.78	〃	〃	完形	
138	KKA-345	B5—13	3層	〃	(12.5)	11	1.4	(0.21)	〃	〃	1/4 欠損	
139	KKA-51	B1—16	4層	〃	24.6	18.2	5.4	1.38	C′	〃	完形	31
140	KKA-94	B3—13	3層	サヌカイト	15	(9.6)	2.7	(0.32)	C	〃 鋸歯鏃	1/3 欠損	
141	KKA-135	B1—11	3層	〃	14.5	11.8	2.4	0.32	〃	〃 〃	完形	
142	KKA-146	B2—10	4層	黒曜石	(24.7)	19	4.2	(1.75)	C′	〃	ほぼ完形	
143	KKA-150	B3—13	4層	〃	(27.2)	16.1	4.4	(1.28)	C	〃	1部欠損	
144	KKA-194	B1—15	4層	〃	22.4	(13.4)	2.4	(0.84)	C′	〃	ほぼ完形	
145	KKA-86	B1—15	4層	〃	(16.8)	15.6	3	(0.70)	〃	2a類	1部欠損	
146	KKA-143	B2—11	4層	〃	(11.6)	13.9	2	(0.20)	〃	〃	1部欠損	
147	KKA-269	B1—12	4層	〃	18.4	10.6	3	0.52	〃	〃	完形	
148	1S-123	?	3層	〃	(17.1)	(13.6)	3.7	(0.77)	〃	〃	1/3 欠損	
149	1S-116	?	3層	〃	29.7	15.6	4.5	(1.1)	C	〃	1/4 欠損	
150	KKA-66	B2—15	3層	〃	(16.5)	(14.8)	3.4	(0.52)	〃	〃	1/3 欠損	
151	KKA-167	B2—16	4層	〃	(20)	(11)	2.7	(0.41)	〃	〃	1/2 欠損	
152	KKA-102	B5—14	3層	〃	(20.8)	(18)	2.4	(0.67)	〃	〃	1部欠損	
153	KKA-208	B5—14		〃	(21.4)	18	2.5	(0.79)	〃	〃	ほぼ完形	
154	KKA-62	B2—16	2層	〃	(21)	(12.3)	3.3	(0.63)	〃	〃	1部欠損	
155	KKA-217	B2	1層	〃	25	20.4	3.2	1.53	C′	〃	完形	
156	KKA-229	B1—16	4層	〃	25.4	(10.5)	2.4	(0.77)	C	〃	1/2 欠損	
157	KKA-241	B3—13	3層	〃	(20)	(11.5)	1.7	(0.57)	?	〃	1部欠損	
158	KKA-243	B3—10	3層	〃	(17.7)	(18.6)	1.7	(0.68)	C	〃	1/3 欠損	
159	KKA-65	B2—16	3層	〃	(15.2)	(14.3)	2.4	(0.60)	〃	〃	1/2 欠損	32
160	2S-71	B5—16	3層	〃	22.9	13.7	4.2	(0.94)	C′	〃	先端欠損	
161	2S-7	B7—9	3層	〃	28.3	17.9	4.2	(1.60)	C	〃	1部欠損	
162	2S-54	B6—9	5層	〃	(26.9)	12.6	3.4	(0.80)	〃	〃	1部欠損	
163	2S-57	B5—12	5層	〃	(25.7)	16.1	4.4	(1.17)	〃	〃	1/3 欠損	
164	2S-223	B5—16	3層	〃	23.8	17.1	4	(0.9)	〃	〃	1/4 欠損	
165	2S-374	B5—12	3層	〃	(26.9)	16.9	3.7	(1.0)	C	〃	1部欠損	
166	KKA-361	B1—12	4層	〃	(12.4)	20.4	3.4	(1.04)	C′	〃	1/2 欠損	
167	1S-204	?	3層	〃	(27.5)	19.8	3.1	(1.9)	C	〃	先端欠損	
168	1S-115	?	3層	〃	(26.8)	15.4	3.7	(0.9)	〃		1部欠損	
169	2S-126	B6—10	5層	〃	23.7	17.4	4.4	1.68	—	〃 未製品	完形	
170	1S-266	?	3層	〃	21.7	16.7	3.7	1.0	—	〃 〃 つまみ形石器利用 ↑	完形	
171	2S-18	B6—13	3層	〃	21.3	15.5	3.7	1.10	—	〃 〃 〃 ↓	完形	
172	KKA-274	B4—10	3層	〃	17.3	(23.4)	2.8	(1.40)	C′	〃 〃	先端欠損	



第59図　石鏃実測図(5)　(3/5)

表9　石　鏃　計　測　表 (5)　　(単位 mm・g)

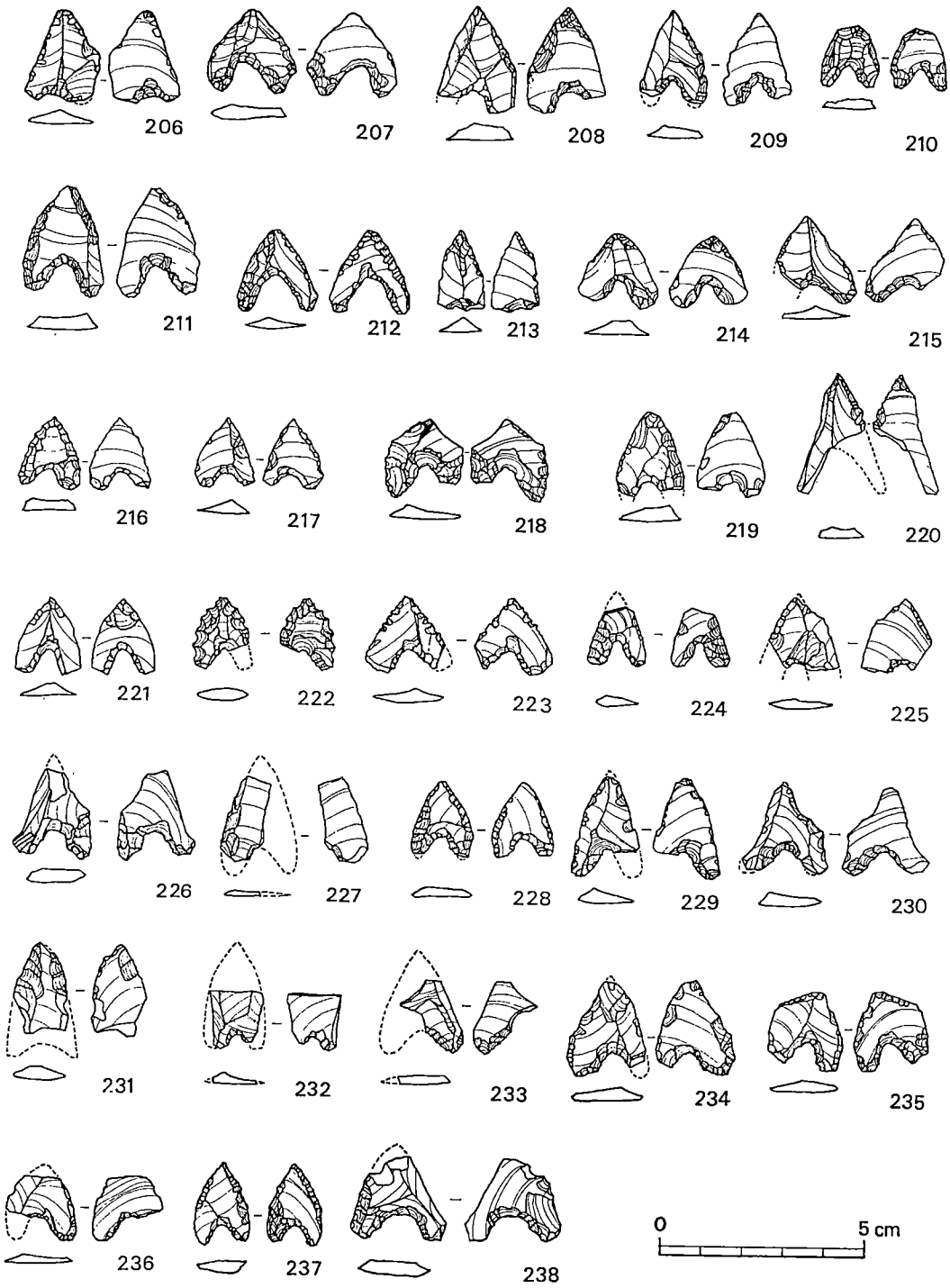
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考			図版No.
173	KKA- 47	B 2—15	3層	黒曜石	(19.9)	(17.8)	3.4	(0.88)	C	3類	1部欠損	
174	KKA- 49	B 3—14	3層	〃	(20)	20	4.2	(1.11)	〃	〃	先端欠損	
175	KKA- 67	B 2—15	3層	〃	(16.3)	(2.6)	2.8	(0.40)	〃	〃	1/3欠損	
176	KKA- 71	B 3—10	3層	〃	(19.5)	18.4	3.6	(0.83)	〃	〃	先端欠損	
177	KKA- 72	B 3—10	3層	〃	(21.8)	15.6	4.2	(0.95)	〃	〃	1部欠損	
178	KKA- 92	B 3—10	3層	〃	(18.8)	(18.5)	3	(0.80)	〃	〃	先端欠損	
179	KKA- 98	B 3—13	3層	〃	(24.2)	(13.4)	3.7	(0.82)	〃	〃	1部欠損	
180	KKA-105	B 3—15	3層	〃	(25.8)	(16.3)	2.4	(0.88)	〃	〃	1/4欠損	
181	KKA-106	B 3—13	4層	〃	(13)	(13.6)	2.8	(0.64)	C′	〃	1部欠損	
182	KKA-131	B 2—15	3層	〃	(19.2)	(13.8)	2	(0.46)	C	〃	1部欠損	
183	KKA-134	B 3—13	4層	〃	(23.2)	(12.4)	3	(0.68)	〃	〃	1/3欠損	
184	KKA-142	B 2—11	4層	〃	19.4	17.2	3.5	0.76	〃	〃	完形	
185	KKA-157	B 1—11	4層	〃	(19.3)	(12.9)	3.5	(0.63)	?	〃	1/3欠損	
186	KKA-163	B 2—16	4層	〃	25	21.7	4.5	1.70	C	〃	完形	
187	KKA-164	B 2—16	4層	〃	(18.4)	20.5	3	(0.88)	〃	〃	先端欠損	
188	KKA-190	B 3—9	4層	〃	(24)	(17)	3.6	(1.02)	〃	〃	1/3欠損	32
189	KKA-200	B 4—14	5層	〃	(17.6)	(12.6)	3	(0.64)	〃	〃	1/3欠損	
190	KKA-207	B 2—14	3層	〃	(16.5)	14.5	2.8	(0.71)	〃	〃	1部欠損	
191	KKA-244	—	表採	〃	(24)	(16.6)	4.2	(1.20)	〃	〃	1/3欠損	
192	KKA-237	B 4—10	3層	〃	(16.8)	(7.8)	1.4	(0.33)	〃	〃	3/4欠損	
193	KKA-232	B 2—13	4層	〃	(16)	14	3	(0.47)	〃	〃	1部欠損	
194	KKA-257	B 3—11	3層	〃	17	15.7	2.5	0.47	〃	〃	完形	
195	KKA-247	B 2—11	4層	〃	(23.4)	(16)	3.4	(1.11)	〃	〃	1/4欠損	
196	KKA-280	B 2—10	3層	〃	(26.5)	(14.5)	2	(0.95)	〃	〃	1部欠損	
197	KKA-281	B 2—10	3層	〃	(18.9)	(15.3)	2	(0.60)	〃	〃	各先端欠損	
198	KKA-282	B 2—10	3層	〃	25.4	22.6	3.2	1.56	〃	〃	完形	
199	KKA-288	B 2—12	4層	〃	(15.3)	16.3	2.5	(2.48)	〃	〃	1/3欠損	
200	KKA-346	B 3付近	表採	〃	(27)	(16.4)	5	(1.24)	〃	〃	1部欠損	
201	K K-298	B 3—14	4層	〃	(20.4)	12.3	2.8	(0.88)	〃	〃	1/3欠損	
202	KKA-321	B 4—V字溝	4層	〃	(19.7)	(15)	2.4	(0.66)	〃	〃	1/3欠損	
203	KKA-357	B 2—12	4層	〃	(17)	13.4	3.2	(0.50)	〃	〃	先端欠損	
204	KKA-374	B 4—12	3層	〃	(23)	(19.7)	2.9	(1.10)	〃	〃	1/3欠損	
205	KKA-354	B 2—12	4層	〃	17.7	20	3	0.93	〃	〃	完形	

と石鏃はその形態からA・B・C，3種に分類される。

A型，いわゆる凸基式の石鏃に含めるべきもの，基部は必らずしも明確に茎を形成しないが着装した際に基部端が逆刺としての役割を果さないとみられる。最大幅の位置は基部端ではない。

B型　いわゆる平基式の石鏃で，基部は平坦でわたぐりはない。逆刺が形成される。最大幅の位置は基部端にみられる。

C型，いわゆる凹基式の石鏃で，基部にわたぐりを有し，逆刺が形成される。最大幅の位置は基部端にみられる。またこの型に含まれる例では，わたぐりの抉りが浅いものと深いものが



第60図　石鏃実測図(6)　(3/5)

表10　石　鏃　計　測　表 (6)　　(単位 mm・g)

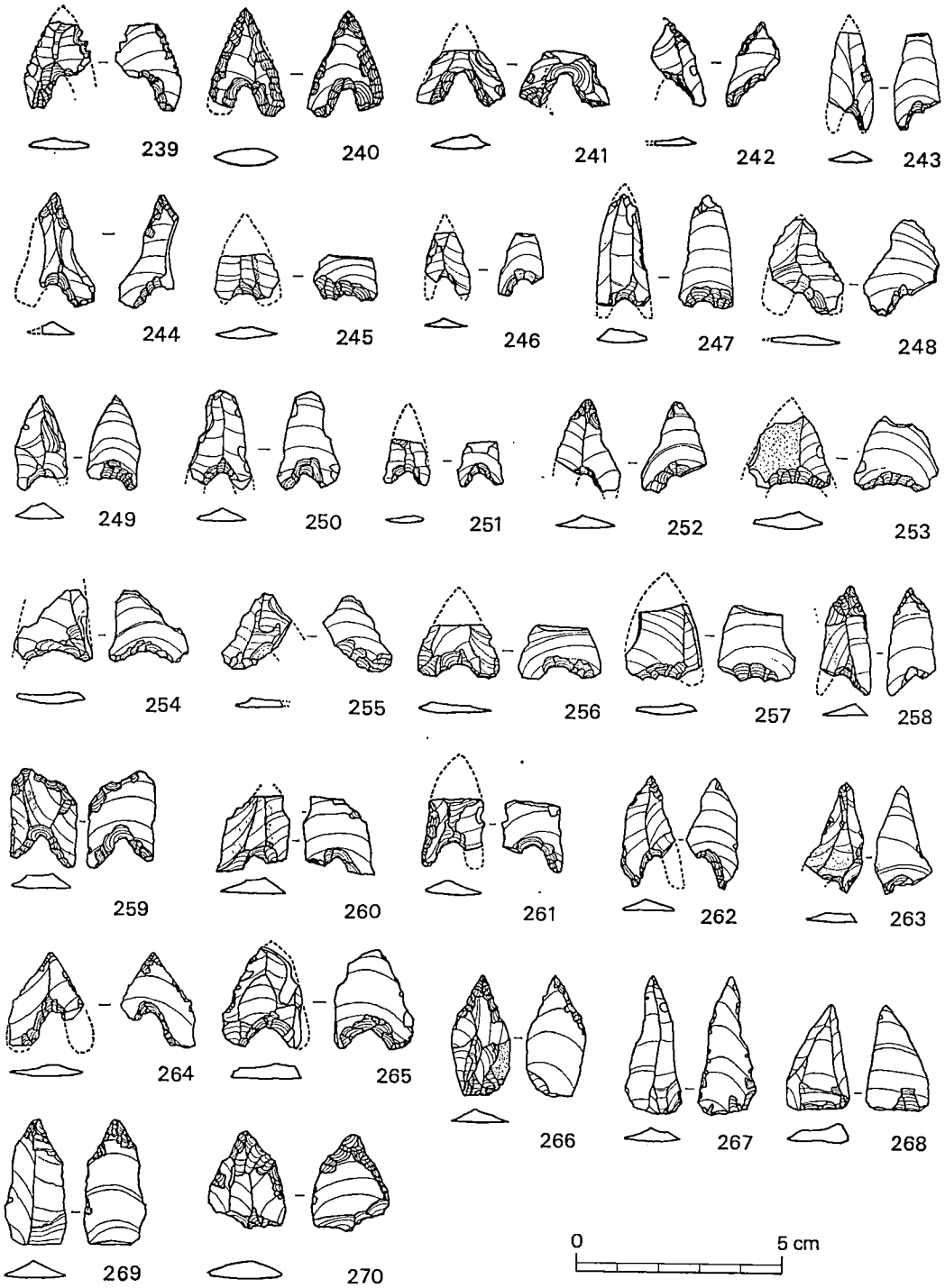
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考				図版No.
206	1次S-121	?	3層	黒曜石	21.6	17.9	3.7	(1.0)	C′	3類		ほぼ完形	
207	KK1S-441	A7・B7	1層	〃	19.9	21.9	3.8	1.1	C	〃		完形	
208	KK1S-453	A7・B7	3層	〃	(25.9)	19.1	4.2	(1.3)	〃	〃		1部欠損	
209	2S-4	B5—11	5層	〃	(22.2)	16.9	3.4	(0.70)	〃	〃		1部欠損	
210	KKA-13	B6—11	5層	〃	15	13.9	2.6	0.60	〃	〃		完形	
211	KK1S-469	7号往	ﾌｸ土	〃	26.5	21	4.3	1.6	〃	〃		完形	
212	KKA-3	B5—16	5層	〃	20	19.4	3.1	0.60	〃	〃		完形	
213	KKA-28	B5—16	3層	〃	19.5	11.6	3.5	0.60	C′	〃		完形	
214	KKA-34	B6—10	3層	〃	17.8	19.6	3.9	0.70	C	〃		完形	
215	KKA-120	B5—12	5層	〃	(28)	29.2	3.2	(0.80)	〃	〃		1/4 欠損	
216	KKA-127	B5—12	5層	〃	18.3	15.2	3.1	0.60	〃	〃		完形	
217	KK2S-222	B5—16	3層	〃	17.3	15	3.5	0.5	〃	〃		完形	
218	KK2S-239	B6	2層	〃	19.1	19.1	3.4	0.7	〃	〃		完形	
219	KK2S-321	B6—10	2層	〃	(27)	16.8	4.3	(1.1)	〃	〃		1/4 欠損	
220	KKA-128	B5—12		〃	(28.7)	16.2	2.9	(0.60)	?	〃		1/3 欠損	
221	KK2S-441	B6—13	3層	〃	18.6	16	3.6	0.6	C	〃		完形	32
222	KKA-152	B2—12	4層	〃	(17.3)	(13)	3	(0.45)	〃	〃	鋸歯鏃	1/4 欠損	
223	KKA-172	B2—10	4層	〃	18.3	(18.4)	3	(0.51)	〃	〃	〃	1部欠損	
224	KKA-177	B2—15	4層	〃	(14)	13.9	2.4	(0.41)	〃	〃		1部欠損	
225	KKA-204	B2—16	4層	〃	(17.5)	(17)	2	(0.60)	?	〃		1/3 欠損	
226	KKA-275	B2—12	4層	〃	(22)	18.6	3.3	(0.89)	C	〃		先端欠損	
227	KKA-325	B3—10	3層	〃	(20.7)	(11.6)	1.4	(0.40)	?	〃		2/3 欠損	
228	KKA-330	B3—13	4層	〃	(18)	14.6	2.5	(0.54)	C	〃		先端欠損	
229	KKA-356	B2—12	4層	〃	(24)	(15.9)	3.4	(0.81)	〃	〃		1部欠損	
230	KKA-359	B2—16	4層	〃	(21.4)	(20.7)	3.2	(1.12)	〃	〃		先端欠損	
231	KKA-367	B3—10	3層	〃	(21.7)	(13.2)	3	(0.80)	?	〃		1/3 欠損	
232	KKA-371	B3—14	3層	〃	(13.8)	(12.3)	2.8	(0.45)	C′	〃		1/2 欠損	
233	KKBF-109	B2—16	2層	〃	(17.3)	(15.6)	2.2	(1.10)	C	〃		1/2 欠損	
234	1次S-118	?	3層	〃	(22.8)	19.5	3.8	(0.9)	〃	〃		1部欠損	
235	1次S-120	?	3層	〃	19.1	18.3	3.2	(0.8)	〃	〃		完形	
236	2次S-424	B5—16	3層	〃	(15.4)	17.4	2.3	(0.4)	C	〃		1/4 欠損	
237	2次S-1	B6—13	5層	〃	20	13.8	3.6	0.50	〃	〃		完形	
238	1次S-470			〃	(19.6)	23.1	3.6	(1.3)	〃	〃		1部欠損	

あり顕著に浅いものをC′型として一応区別した。即ちC′型はB型に近い要素を有するものである。

また石鏃の素材を考慮して分類した。

1類　不定形の剝片を素材として製作されたもので，打欠きによる調整が顕著な一群である。この類に含まれる資料のうち，全面に剝離が及び主要剝離面を残さない例と主要剝離面を残す広義の剝片鏃に含まれる例があり，区別するために，前者を1a類，後者を1b類とした。

2類　刃器状の剝片の基部側（刃器状剝片を剝ぎ取る際の打面側）を利用した石鏃である。



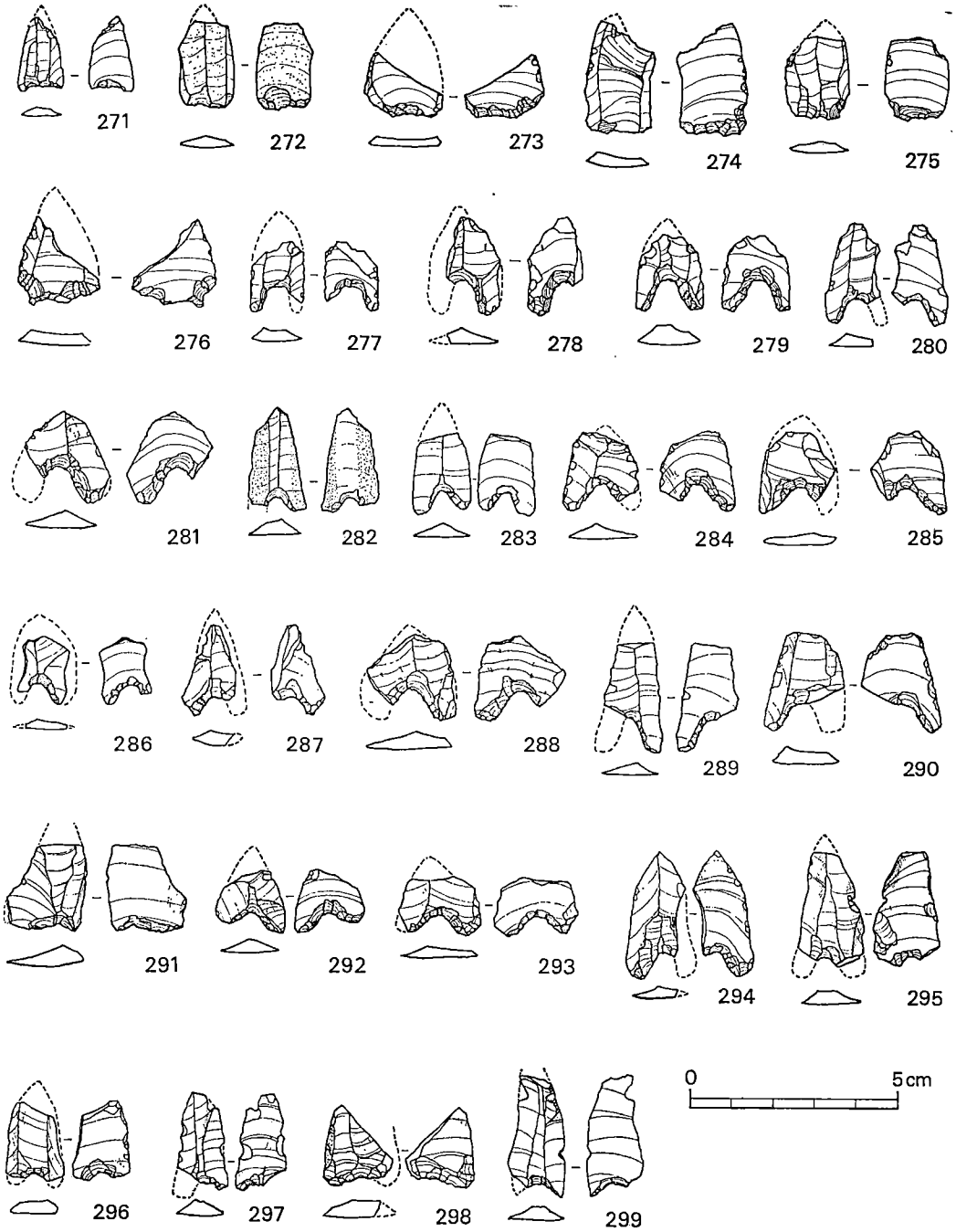
第61図　石鏃実測図(7)　(3/5)

表11　石　鏃　計　測　表 (7)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考			図版No.
239	KKA-233	B2—13	4層	黒曜石	(20.8)	(15.5)	2.4	(0.65)	C	2b類鋸歯鏃	1/3欠損	
240	KKA-265	B2—11	4層	〃	(25.5)	(17.8)	4.3	(1.29)	〃	〃	1部欠損	
241	KKA-304	B1—11	3層	〃	(12.7)	21.2	3.5	(0.69)	〃	〃	1/4欠損	
242	KKA-328	B2—12	4層	〃	(19.8)	12.6	1.4	(0.40)	〃	〃	1部欠損	32
243	KKA-50	B2—13	3層	〃	(23)	(10.7)	2.8	(0.55)	〃	〃	先端欠損	
244	KKA-84	B2—16	3層	〃	27	(13.7)	2.8	(0.78)	〃	〃	1/3欠損	
245	KKA-54	B3—10	2層	〃	(10.9)	(15.4)	3	(0.50)	C′	〃	1/2欠損	
246	KKA-88	B1—15	4層	〃	(15)	10.5	(1.8)	(0.26)	C	〃	1/3欠損	
247	KKA-162	B2—16	4層	〃	(26.7)	(12.8)	2.8	(1.12)	〃	〃	各先端欠損	
248	KKA-147	B2—10	4層	〃	(22.8)	(18)	2.2	(0.71)	〃	〃	1/4欠損	
249	KKA-175	B2—10	4層	〃	22.6	12.3	3	(0.62)	C′	〃	先端欠損	
250	KKA-185	B2—13	4層	〃	(23.6)	(15)	3	(0.89)	C	〃	先端欠損	
251	KKA-263	B2—9	3層	〃	(10.8)	11	2	(0.20)	〃	〃	1/3欠損	
252	KKA-268	B1—12	4層	〃	(22)	(15.3)	3	(0.58)	〃	〃	1/4欠損	
253	KKA-270	B1—12	4層	〃	(17.6)	(19.4)	4.3	(1.13)	C′	〃	1/4欠損	
254	KKA-293	B2—12	2層	〃	(16.7)	(18.4)	2.4	(1.37)	〃	〃	1/3欠損	
255	KKA-360	B2—16	4層	〃	18.3	(16.9)	2	(1.60)	〃	〃	1/3欠損	
256	KKA-363	B3—13	3層	〃	(12.5)	19.3	2.3	(0.74)	〃	〃	1/3欠損	
257	KKBF-165	B2—9	4層	〃	(18.2)	(18.3)	3	(1.08)	〃	〃	1/3欠損	
258	KK1S-471			〃	(26.4)	(12.6)	3.3	(0.9)	C	〃	1部欠損	33
259	1次S-119	?	3層	〃	23.7	16.7	4	1.2	〃	〃	完形	
260	KKA-14	B6—11	5層	〃	(18.9)	17.3	3.9	(0.90)	C′	〃	1部欠損	
261	2次S-15	B6—11	5層	〃	(17.3)	15	3.6	(0.60)	C	〃	1/2欠損	
262	KKA-30	B6—10	3層	〃	(27.4)	13.6	3.1	(0.66)	〃	〃	1部欠損	
263	KK2S-430	B6—11	3層	〃	(27)	14.2	2.6	(0.7)	?	〃	1部欠損	
264	2次S-456	B6—9	3層	〃	(2.24)	18.1	3.1	(0.6)	C	〃	1/4欠損	
265	2次S-500	B5	1層	〃	(24)	19.6	3.9	(1.5)	〃	〃	1部欠損	
266	2次S-38	B6—15	5層	〃	(29)	14.6	3.4	1.21	B	〃	完形	
267	2次S-325	B6—11	3層	〃	32.9	14.1	3.5	0.9	〃	〃	完形	
268	2次S-440	B6—13	3層	〃	24.6	15.2	4.6	1.1	〃	〃	完形	
269	1次S-452	A7・B7	3層	〃	33	15.2	4.4	1.4	〃	〃	完形	
270	KKA-326	B1—16	3層	〃	23	19.7	4	1.92	?	〃 つまみ形石器利用?	完形	

基本的には一方の面に1～2本の稜線を有し，あと一方の面に主要剥離面を残しており，広義の剥片鏃である。この類に含まれる資料には，鏃の先端部側に刃器状剥片の基部がみられるものと，鏃の基部側に刃器状剥片の基部がみられるものがあり，前者を2a類，後者を2b類として区別した。

3類　刃器状の剥片を素材として製作されており，刃器状の先端を利用した石鏃である。2類と同様，稜線を有す面と主要剥離面を残す。またこの類の資料は基本的に，鏃を形成するための加工が基部に集中し，先端部及び両側縁にはほとんど加工が施されておらず，素材となる



第62図　石鏃実測図(8)　(3/5)

表12　石　鏃　計　測　表 (8)　　(単位 mm・g)

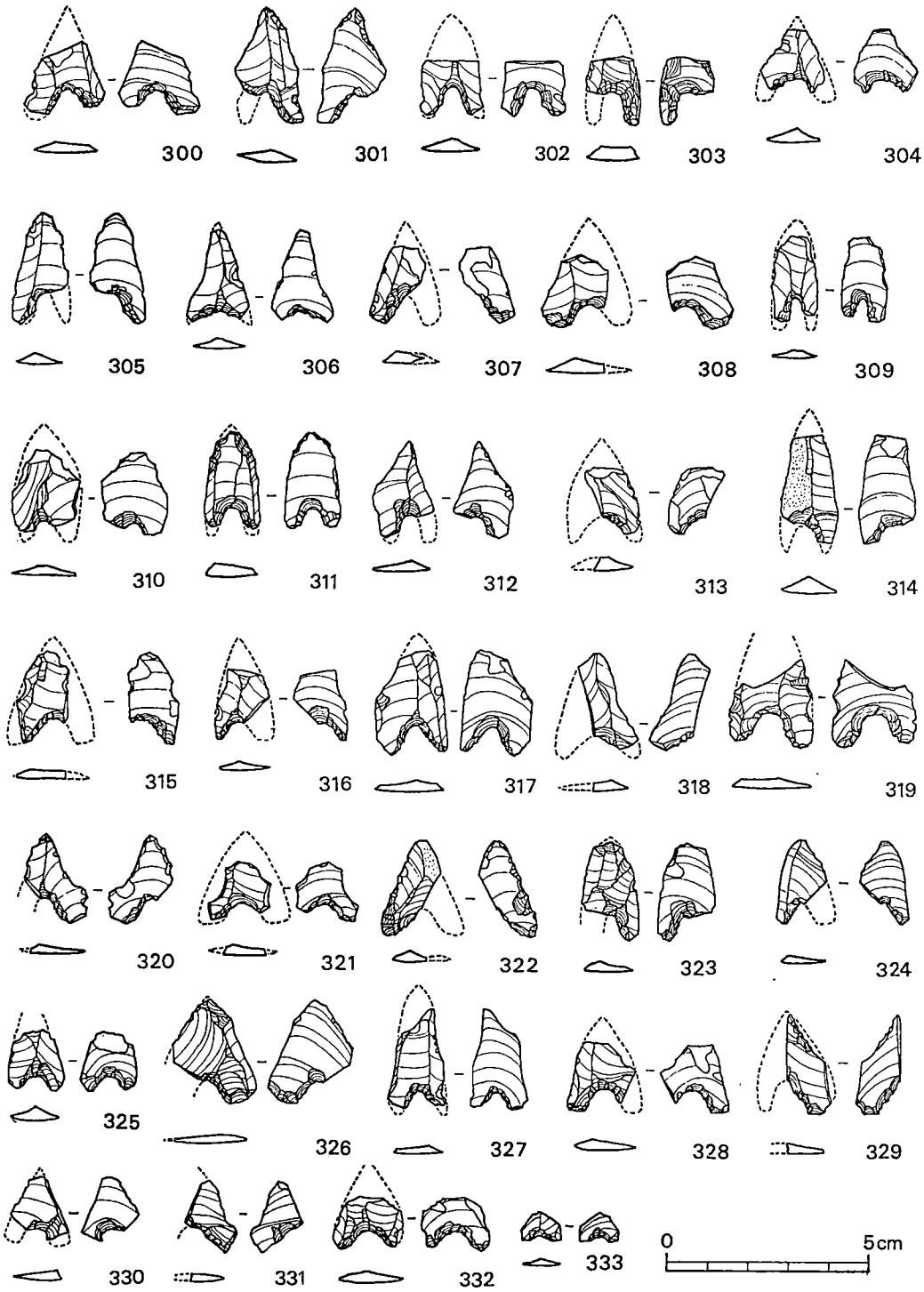
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考			図版No.
271	KKA-42	B3—13	3層	黒曜石	(17.7)	11	1.8	(0.42)	C′	3類	一部欠損	33
272	KKA-385	B4—12	3層	〃	(20)	12.7	3.4	(0.85)	B	〃	一部欠損	
273	KKBF-258	B2—14	4層	〃	(15)	18.2	2	(0.63)	〃	〃	1/2欠損	
274	KKBF-228	B2—12	4層	〃	(15)	16.3	3	(1.16)	〃	〃 つまみ形石器利用	先端欠損	
275	KKTM-159	B2—16	4層	〃	(19.4)	14.6	3	(0.77)	〃	〃 〃	一部欠損	
276	KKBF-197	B2—9	4層	〃	(20.6)	19.1	3	(1.30)	〃	〃 〃	1/3欠損	
277	2次S-2	B6—9	5層	〃	(16.8)	13.6	3.4	(0.55)	C	〃	1/3欠損	
278	2次S-5	B5—13	2層	〃	(23.2)	13.3	4	(0.85)	〃	〃	1/3欠損	
279	2次S-14	B6—11	5層	〃	(18.1)	16.7	5	(0.95)	〃	〃	一部欠損	
280	2次S-16	B6—12	3層	〃	(17.4)	16.3	5.1	(0.78)	〃	〃	一部欠損	
281	2次S-17	B5—16	5層	〃	22.2	20.7	4.4	(1.0)	〃	〃	1/3欠損	
282	2次S-22	B6—14	5層	〃	(24.8)	14.7	3.9	(0.85)	C′	〃	一部欠損	
283	2次S-23	B6—14	5層	〃	(19.6)	14.4	3.4	(0.65)	C	〃	1/4欠損	
284	2次S-52	B6—11	5層	〃	(18.9)	18.5	4.1	(0.82)	〃	〃	一部欠損	
285	2次S-24	B5—12	3層	〃	(19.9)	18.7	3.3	(0.80)	〃	〃	1/4欠損	
286	2次S-55	B5—15	5層	〃	(16.4)	12.7	2.5	(0.41)	〃	〃	1/3欠損	
287	2次S-225	B5—16	3層	〃	(21.8)	13.2	3.9	(0.6)	〃	〃	1/3欠損	
288	2次S-243	B6—14	3層	〃	(26)	21.9	4.8	(1.3)	〃	〃	1/4欠損	
289	KK2S-244	B6—14	3層	〃	(25.9)	14.6	3.4	(0.8)	〃	〃	1/3欠損	
290	2次S-245	B6—14	3層	〃	(23.2)	18.8	4.4	(1.2)	〃	〃	1/4欠損	
291	KK2S-378	B5—12	3層	〃	(2.1)	19.5	5.4	(1.3)	C′	〃	一部欠損	
292	1次S-117	?	3層	〃	(25.9)	16.9	3.5	(0.5)	〃	〃	1/3欠損	
293	1次S-122	?	3層	〃	(14.4)	22.0	3.1	(0.6)	〃	〃	一部欠損	
294	1次S-203	?	3層	〃	(34.6)	15.1	3.2	(0.8)	C	〃	1/4欠損	
295	1次S-205	?	3層	〃	(26.5)	16.1	3.2	(1.4)	?	〃	各先端欠損	
296	1次S-206	?	3層	〃	(19.0)	14.0	3.5	(0.8)	C′	〃	1/4欠損	
297	1次S-207	?	3層	〃	(22.9)	12.3	3.6	(1.8)	〃	〃	一部欠損	
298	1次S-208	?	3層	〃	(19.2)	16.5	4.5	(1.3)	〃	〃	1/3欠損	
299	KK1S-341	?	3層	〃	(29.3)	14.0	3.2	(0.9)	〃	〃	一部欠損	

刃器状剝片の先端部がそのまま利用されている一群である。いわゆる剝片鏃と称される。

この分類により，1a・1b・2a・2b・3類の5種類に区分される。なお，従来行なわれている鍬形鏃・三角鏃などといった分類では区分しなかったが，側縁が鋸歯状を呈する例があり，計測表に鋸歯鏃あるいは鋸歯状と記入した。

これらの分類によればA型に含まれる例が3.3%，B型10.7%，C型57.6%，C′型28.5%となり，わたぐりのある形態が顕著で，ほとんどの資料が基部端に逆刺の役割りを有していることを知る。

また素材による分類では，1a類94点（第55図11～第57図104），1b類40点（第57図105～114），2a類28点（第57図115～第58図172），2b類32点（第61図239～270），3類162点（



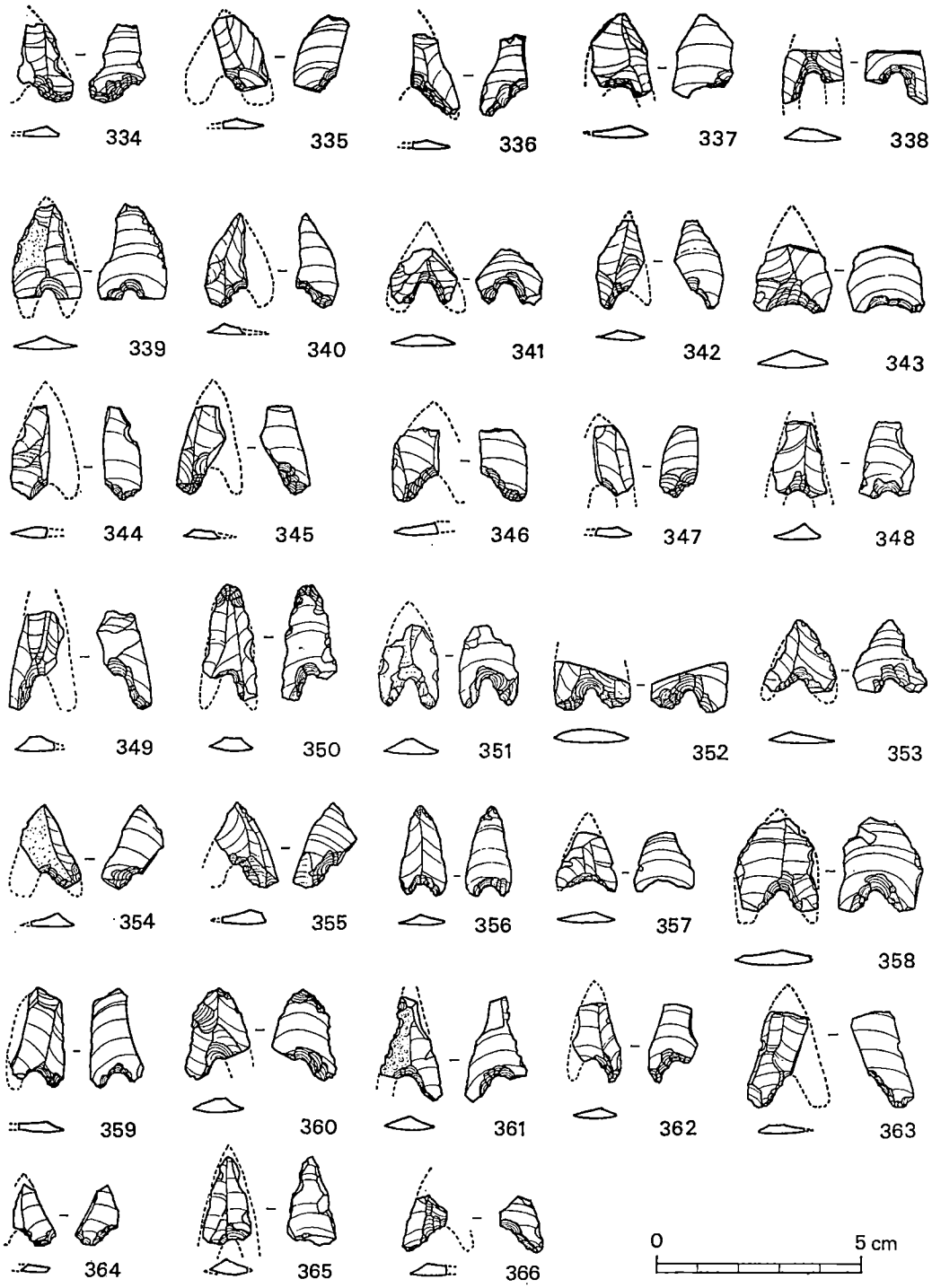
第63図　石鏃実測図(9)　(3/5)

表13　石　鏃　計　測　表 (9)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考			図版No.
300	KKA- 43	B3—14	3層	黒曜石	(18.4)	19	2.4	(0.68)	C	3類	1/3欠損	
301	KKA- 35	B7—14	2層	〃	(28)	16.8	3	(0.80)	〃	〃	一部欠損	
302	KKA- 52	B1—16	4層	〃	(13)	(15)	3	(0.50)	〃	〃	1/2欠損	
303	KKA- 63	B2—16	3層	〃	(16.4)	13	3.3	(0.65)	〃	〃	〃	
304	KKA- 61	B2—16	2層	〃	(15)	(15)	3	(0.50)	?	〃	1/3欠損	
305	KKA- 70	B1—15	3層	〃	(27)	(13)	2.7	(0.74)	C	〃	一部欠損	
306	KKA- 73	B2—13	〃	〃	(22.4)	(15)	2.5	(0.60)	C′	〃	各先端欠損	
307	KKA- 75	B1—15	4層	〃	(18.3)	(13.4)	(2.7)	(0.58)	C	〃	1/2欠損	
308	KKA- 80	B3—14	3層	〃	(17.3)	(15.5)	3	(0.70)	〃	〃	〃	
309	KKA- 81	B3—14	〃	〃	(20.7)	11.1	1.9	(1.45)	〃	〃	1/4欠損	
310	KKA- 87	B1—15	4層	〃	(19)	(17.3)	2	(0.80)	?	〃	1/3欠損	
311	KKA- 91	B3—10	3層	〃	(23.6)	13.4	3	(1.08)	C	〃	各先端欠損	
312	KKA- 99	B3—13	〃	〃	(23.8)	(24.8)	2.7	(0.52)	〃	〃	一部欠損	
313	KKA-100	B3—13	〃	〃	(16.2)	(13.2)	(3.1)	(0.58)	〃	〃	1/2欠損	
314	KKA-355	B2—12	4層	〃	(26.1)	13.6	4	(1.28)	〃	〃	1/3欠損	
315	KKA-132	B2—15	3層	〃	(22.4)	(12.3)	2.2	(0.74)	〃	〃	1/2欠損	
316	KKA-133	B2—15	〃	〃	(17.2)	(12.6)	2	(0.40)	〃	〃	〃	33
317	KKA-148	B1—11	4層	〃	(26)	17.2	3	(1.10)	〃	〃	一部欠損	
318	KKA-153	B2—12	〃	〃	(23)	(14.2)	2.6	(0.54)	C′	〃	1/2欠損	
319	KKA-165	B2—16	〃	〃	21.3	19.9	2.3	(1.86)	C	〃	〃	
320	KKA-166	B2—16	〃	〃	21.8	(14.8)	2	(0.42)	〃	〃	1/4欠損	
321	KKA-168	B2—16	〃	〃	(14.7)	(15)	2.9	(0.45)	C′	〃	1/2欠損	
322	KKA-169	B2—14	〃	〃	23	(14)	2.5	(0.61)	〃	〃	1/3欠損	
323	KKA-173	B2—10	〃	〃	(24.5)	13.8	2.8	(0.69)	C	〃	一部欠損	
324	KKA-176	B2—15	〃	〃	20.4	(12)	2	(0.32)	〃	〃	1/3欠損	
325	KKA-179	B2—9	〃	〃	(14.6)	13.6	3.4	(0.53)	〃	〃	〃	
326	KKA-180	B2—9	〃	〃	(25.3)	(12.0)	1.7	(0.83)	〃	〃	〃	
327	KKA-189	B3—9	〃	〃	(24)	(14)	2	(0.59)	〃	〃	〃	
328	KKA-205	B2—16	〃	〃	(17)	(16.6)	2.8	(0.55)	〃	〃	〃	
329	KKA-211	B3—12	3層	〃	(24)	(10.7)	(2.4)	(0.61)	〃	〃	1/2欠損	
330	KKA-223	B2—15	4層	〃	(15)	(13.7)	2.5	(0.34)	C′	〃	1/3欠損	
331	KKA-224	B2—13	〃	〃	(17.6)	(12.5)	(1.5)	(0.27)	〃	〃	1/2欠損	
332	KKA-225	B1—14	3層	〃	(12.5)	16.3	2.7	(0.50)	〃	〃	1/3欠損	
333	KKA- 97	B3—13	〃	〃	6.6	(9.3)	1.4	(0.10)	〃	〃	一部欠損	

第59図173～第60図238，第62図271～第64図366）である。

この分類に従い，出土点数の多いＢ１～Ｂ７区及び18地点として調査した区域（Ａ４～６・Ｂ４～６にわたる）での点数を第121図に示した。但し，18—１点として調査した区域のＢ１～Ｂ７区はほぼ同様の面積であるが，18地点とした区域は面積が著しく異なり直接比較する材料とならないが（18）として示した。１ａ類の資料がＢ１区に集中し，南方のＢ２～Ｂ７区にかけて減少し，３類がＢ２区を中心として集中しＢ１区では比率の下ることが興味深い。



第64図　石鏃実測図(10)　(3/5)

表14　石　鏃　計　測　表 (10)　　(単位 mm・g)

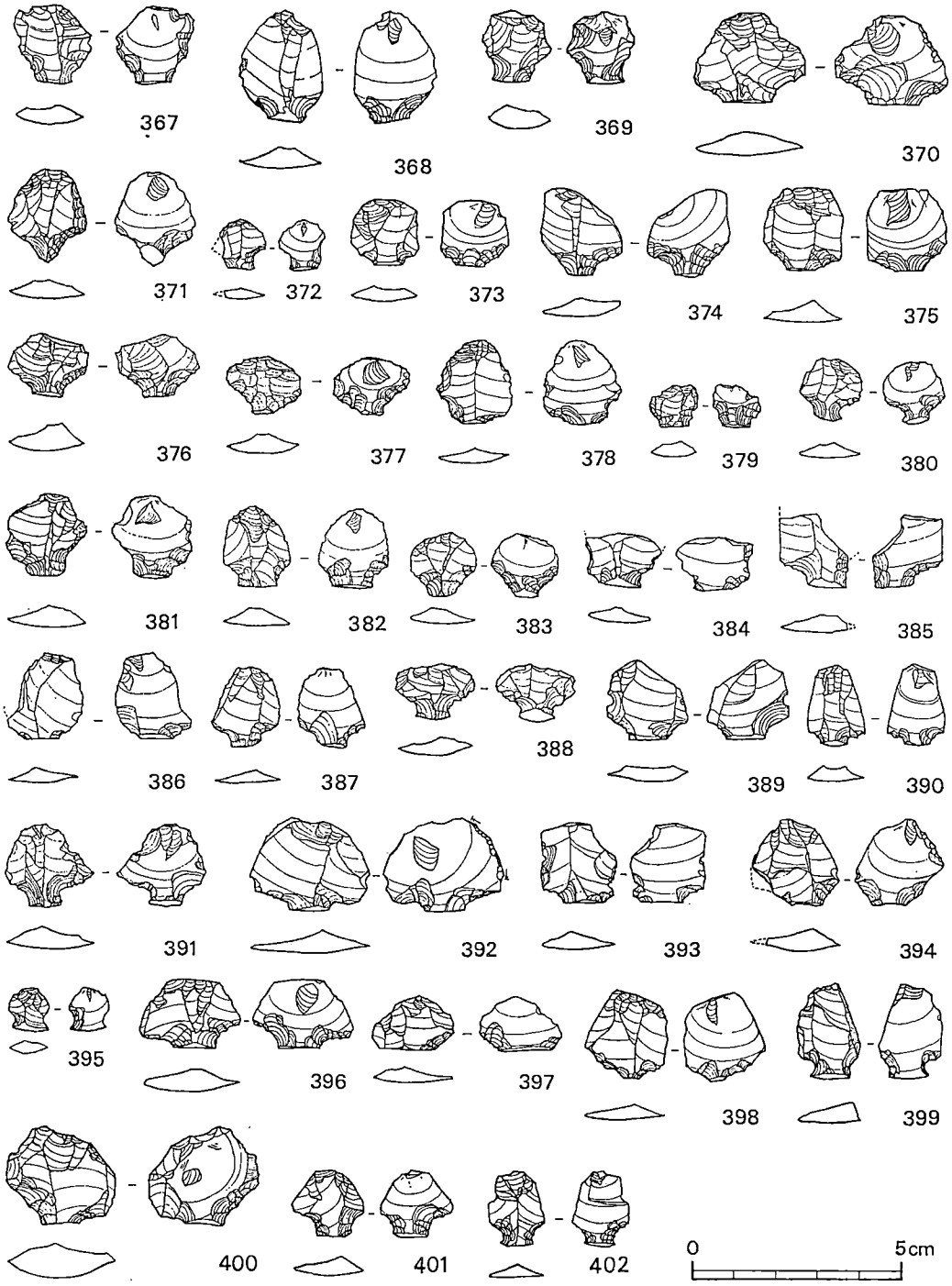
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考			図版No.
334	K K A-228	B2—14	3 層	黒 曜 石	(18.6)	(13.3)	2.4	(0.57)	C′	3 類	1/2 欠損	
335	K K A-234	3号住	フク土	〃	(18)	(13.2)	2	(0.48)	〃	〃	〃	
336	K K A-236	2号住	〃	〃	(19)	(11.2)	2	(1.35)	〃	〃	2/3 欠損	
337	K K A-238	B9—4	3 層	〃	(20)	(14.5)	2.6	(0.63)	?	〃	1/4 欠損	
338	K K A-245	B2—11	4 層	〃	(12.8)	14.7	2.7	(0.40)	C	〃	1/2 欠損	
339	K K A-246	B2—11	〃	〃	(22.8)	16.6	2.5	(0.90)	〃	〃	1/4 欠損	
340	K K A-249	B2—11	〃	〃	22.1	(10)	2.3	(0.53)	〃	〃	1/2 欠損	
341	K K A-251	B1—11	〃	〃	(13)	(15.6)	2.3	(0.50)	〃	〃	1/3 欠損	
342	K K A-255	B1—11	〃	〃	(21.4)	(11.3)	2	(0.42)	〃	〃	1/4 欠損	
343	K K A-256	B5—9	3 層	〃	(16.2)	18.4	3.8	(1.04)	C′	〃	1/3 欠損	
344	K K A-260	B3—14	〃	〃	(22.9)	(9)	2.4	(0.53)	〃	〃	2/3 欠損	
345	K K A-266	B2—11	4 層	〃	(21.4)	(11.2)	2	(1.58)	?	〃	1/2 欠損	
346	K K A-262	B2—9	3 層	〃	(17.1)	(11)	2.5	(0.53)	?	〃	〃	
347	K K A-277	B5—13	〃	〃	(17.1)	(9)	2.5	(0.40)	?	〃	〃	
348	K K A-283	B2—10	〃	〃	(18.3)	(12.8)	3.7	(0.75)	?	〃	1/3 欠損	
349	K K A-285	B2—10	〃	〃	(23.5)	(12.9)	3.4	(0.90)	C	〃	1/2 欠損	
350	K K A-291	B2—12	2 層	〃	(27.4)	(12.8)	3	(0.87)	〃	〃	一部欠損	33
351	K K A-292	B2—12	〃	〃	(19.5)	13.9	3.8	(0.78)	〃	〃	1/4 欠損	
352	K K A-297	B3—14	4 層	〃	(11.9)	18.6	3.2	(0.39)	〃	〃	1/2 欠損	
353	K K A-300	B2—12	〃	〃	(17)	(17)	2.4	(0.51)	C′	〃	一部欠損	
354	K K A-305	B1—11	3 層	〃	(20.3)	(14.1)	3	(0.60)	?	〃	1/3 欠損	
355	K K A-306	B1—11	〃	〃	20.4	(15)	3.6	(0.79)	C′	〃	〃	
356	K K A-312	B2—15	4 層	〃	21.5	11	2.1	0.40	〃	〃	完　形	
357	K K A-322	B4—V字溝	1 層?	〃	(14.8)	14.5	2.1	(0.39)	〃	〃	一部欠損	
358	K K A-323	B4—V字溝	〃	〃	(22.6)	19.6	3.4	(1.38)	C	〃	〃	
359	K K A-337	B2—9	3 層	〃	(23.8)	(12.8)	2.2	(0.73)	C′	〃	1/4 欠損	
360	K K A-350	B2—14	4 層	〃	22	(15)	2.8	(0.77)	C	〃	〃	
361	K K A-377	B5—14	3 層	〃	(25)	(14.5)	3	(0.75)	〃	〃	〃	
362	K K A-384	B5	2 層	〃	(19)	(11.5)	2.3	(0.40)	〃	〃	〃	
363	KKBF-256	B1—15	4 層	〃	(22.7)	(14)	1.8	(0.55)	〃	〃	1/2 欠損	
364	K K A-358	B2—14	〃	〃	(14.6)	(10)	1.6	(0.25)	C′	〃	1/3 欠損	
365	K K A-333	B2	1 層	〃	(21)	(11.4)	3.7	(0.74)	?	〃	1/4 欠損	
366	K K A-375	B5	2 層	〃	(13.3)	(1)	3	(0.30)	C′	〃	2/3 欠損	

なお鋸歯鏃とされる例はこの内の6点で88～90・140・141・222が好例である。

西北九州の縄文時代遺跡においてしばしば出土する局部磨製石鏃は当該遺跡では出土しなかった。

(6)　つまみ形石器

いわゆる「つまみ形石器」（註1）と称されるものが破損品を含めて539点出土した。この内表採品等地区の不明な4点を除いた535点の地区別分布は第74図に図示するが，B2区におい

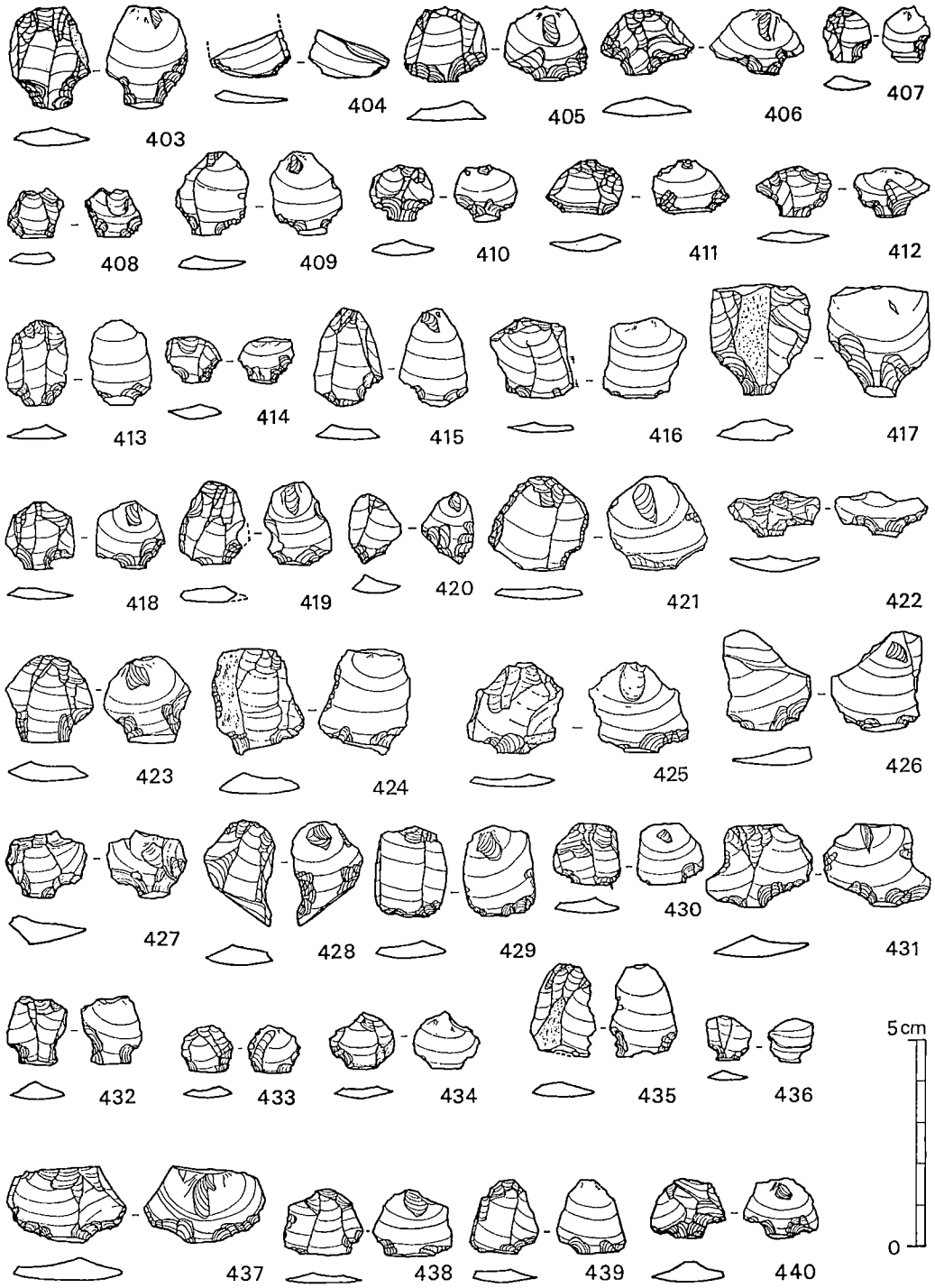


第65図　つまみ形石器実測図(1)　(3/5)

表15 つまみ形石器計測表 (1)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
367	KKTM- 14	?	1層	黒曜石	18.6	18	4.5	1.42	8.3×4.0	↑	完形	
368	KKTM- 58	B 2—14	3層	〃	26.4	19.5	5	2.52	8.7×4.5	↑	完形	
369	KKTM- 60	B 2—14	3層	〃	16.7	16	5.5	1.61	8.9×4.1	↓	完形	
370	KKTM- 62	B 3—15	3層	〃	20.8	26.2	5.5	3.20	12.1×5.8	↑	完形	
371	KKTM- 63	B 3—14	3層	〃	21.8	18.3	4.5	1.53	6.0×3.4	↘	完形	
372	KKTM- 65	B 3—14	3層	〃	11.6	(10.5)	2.7	(0.38)	6.4×3.2	↑	1部欠損	
373	KKTM- 67	B 3—14	3層	〃	15.4	15.7	3.7	0.93	7.7×2.5	↑	完形	
374	KKTM- 64	B 3—14	3層	〃	20.6	18.8	4	(1.58)	6.1×3.5	↑	1部欠損	
375	KKTM- 70	B 3—15	3層	〃	19.5	18.4	5	2.00	6.4×2.9	↓	完形	
376	KKTM- 80	B 3—13	3層	〃	14.9	18.8	6.5	1.56	7.6×5.5	↓	完形	
377	KKTM- 72	B 2—13	3層	〃	13.3	17	4.5	0.98	5.8×4.0	↓	完形	
378	KKTM- 82	B 2—13	3層	〃	19.4	17.7	3.5	1.25	6.6×3.3	↑	完形	
379	KKTM- 81	B 3—10	3層	〃	10	11	3.5	0.47	6.8×3.4	↓	完形	
380	KKTM- 75	B 1—14	4層	〃	14.2	14	3.5	1.70	6.4×2.3	↓	完形	
381	KKTM- 83	B 1—15	1層	〃	19.4	18.6	5	1.73	7.2×4.6	↑	完形	
382	KKTM- 84	B 1—15	1層	〃	18.5	15.9	4	1.24	9.1×2.9	↓	完形	34
383	KKTM- 85	B 1—15	1層	〃	15	15.3	4	0.98	5.9×3.8	↓	完形	
384	KKTM- 86	B 1—15	3層	〃	12.3	17.7	3.5	0.85	8.6×3.8	↑	完形	
385	KKTM- 87	B 3—15	3層	〃	(17.2)	(15.7)	4.5	(1.45)	9.0×4.7	↑	1/2 欠損	
386	KKTM- 88	B 3—15	3層	〃	20	(17.5)	3.5	(1.22)	8.6×3.9	↓	1/3 欠損	
387	KKTM- 89	B 3—11	2層	〃	18.6	15.6	3.3	0.98	5.7×2.8	↑	完形	
388	KKTM- 90	B 2—16	3層	〃	12.7	18	4.2	0.89	8.2×3.9	↓	完形	
389	KKTM- 91	B 2—16	3層	〃	18.5	18.8	3.7	1.51	9.4×3.1	↙	完形	
390	KKTM- 93	B 3—14	3層	〃	18.6	13.2	3.7	1.02	6.4×2.6	↓	完形	
391	KKTM- 94	B 1—16	3層	〃	19.7	20.7	5.2	1.80	7.5×4.3	↓	完形	
392	KKTM- 95	B 2—13	3層	〃	22.3	27.8	5.5	2.90	9.5×4.9	↑	完形	
393	KKTM- 96	B 2—13	3層	〃	18.9	17.5	4.5	1.67	9.5×3.6	↓	完形	
394	KKTM- 97	B 2—15	3層	〃	20.6	20.7	5.5	(1.93)	8.2×3.3	↓	1部欠損	
395	KKTM-103	B 3—13	3層	〃	10	9.1	3.2	0.30	8.9×2.6 [6.6]	↑	完形	
396	KKTM-104	B 3—13	3層	〃	11.1	23.3	5.5	1.97	9.9×4.5	↑	完形	
397	KKTM-105	B 3—13	3層	〃	12.7	19	4	0.85	13.7×3.4	↑	完形	
398	KKTM-106	B 3—13	3層	〃	20.7	18.8	3.5	1.43	5.1×2.9	↑	完形	
399	KKTM-121	B 2—15	3層	〃	22.7	14.6	5	1.27	9.3×2.4	↑	完形	
400	KKTM-123	B 1—11	3層	〃	23.2	25.5	8	5.03	9.0×4.7	↓	完形	
401	KKTM-124	B 1—11	3層	〃	15.6	16.5	4.5	1.05	8.2×4.1	↑	完形	
402	KKTM-129	B 2—11	4層	〃	17.5	13	3	0.58	8.7×3.6	↑	完形	

て33.5%を占める179点出土し，その周辺及びB 6区付近に比較的集中している。集中度からみると石鏃のそれと極めて近以的でもある。後期中葉の遺物包含層からの出土例が多くこの時期に属するとも考えられる。石質は全て黒曜石である。漆黒色で透明度の強い佐賀県腰岳産がほとんどで，若干産地の異なるとみられるものがあるが長崎県針生島等の産かと推定される。

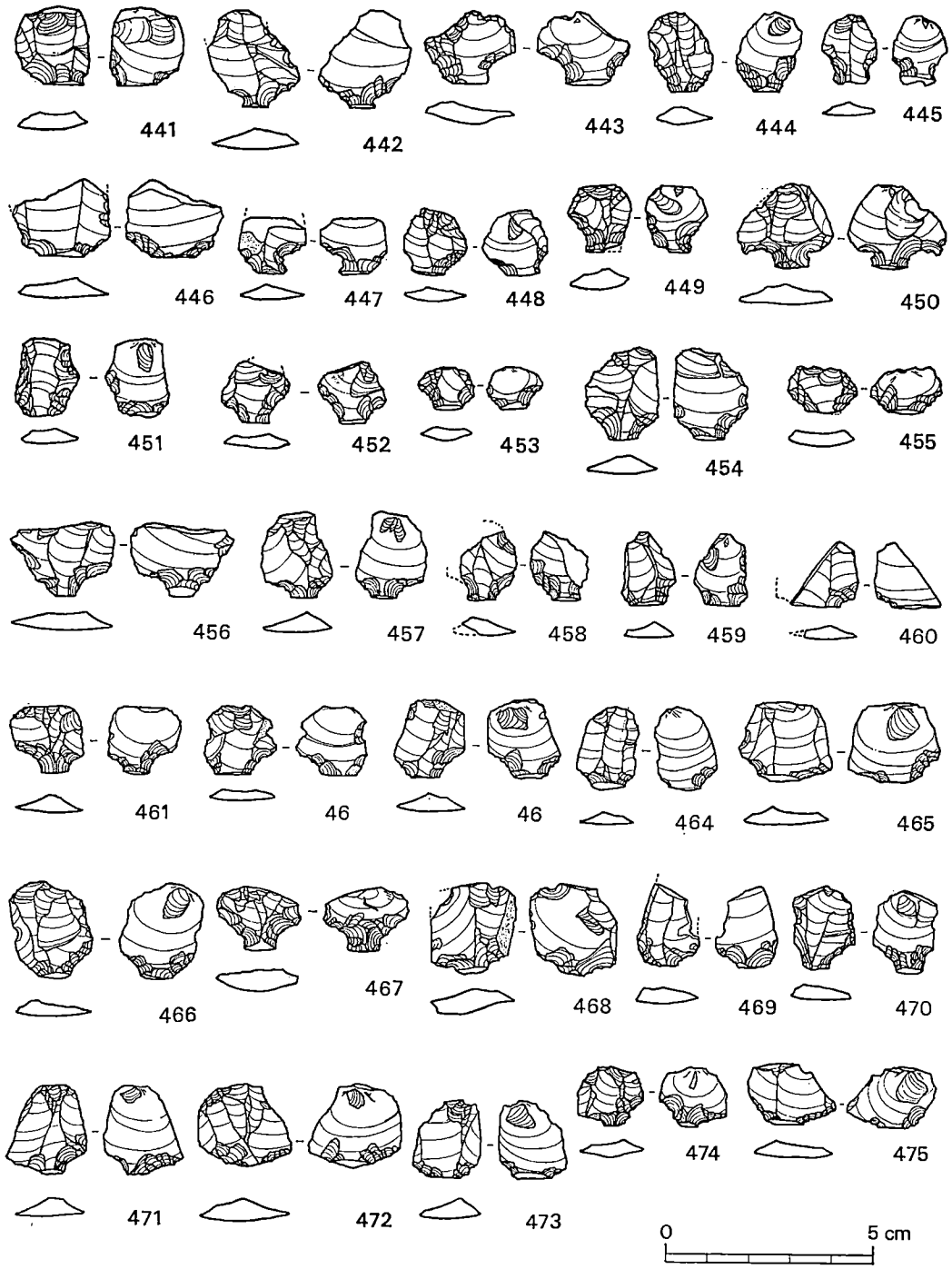


第66図　つまみ形石器実測図(2)　(3/5)

表16 つまみ形石器計測表(2)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
403	KKTM-130	B2-11	4層	黒曜石	24.4	19	4.5	2.43	9.5×4.4	↑	完形	
404	KKTM-133	B2—11	〃	〃	(11.4)	19.2	3	(0.43)	13.9×2.6	↙	1/2 欠損	
405	KKTM-134	B2—10	〃	〃	17.5	19.4	4.5	1.80	7.7×4.0	↓	完形	
406	KKTM-136	B2—10	〃	〃	15.6	22	4.5	1.33	7.6×2.8	↑	〃	
407	KKTM-138	B2—10	〃	〃	12.8	11	3.5	0.49	7.4×2.9	↑	〃	
408	KKTM-139	B2—10	〃	〃	11.8	13	2.7	0.47	8.0×2.0	↑	〃	
409	KKTM-137	B2—10	〃	〃	19.8	17.1	3	1.10	8.8×2.8	↓	〃	
410	KKTM-140	B2—10	〃	〃	13.4	15	4	1.71	6.9×3.0	↓	〃	
411	KKTM-142	B2—12	〃	〃	12.8	18.2	4.5	1.00	11.5×3.4	↓	〃	
412	KKTM-146	B3—13	〃	〃	11.8	17.7	3	0.54	7.4×3.2	↓	〃	
413	KKTM-150	B1—11	3層	〃	20	14.4	3.5	1.00	7.8×3.7	↓	〃	
414	KKTM-151	B2—9	4層	〃	10.8	13.5	3.5	0.51	5.6×3.0	↓	〃	
415	KKTM-155	B2—16	〃	〃	23.4	16.2	3.5	1.50	[2.8] 6.7×1.7	↓	〃	
416	KKTM-157	B2—16	〃	〃	19	19.6	2.5	0.92	8.8×2.6	↓	〃	
417	KKTM-158	B1—15	1層	〃	26.6	23.6	5.5	5.60	7.5×5.4	↓	〃	
418	KKTM-160	B2—14	4層	〃	26	16.2	2.5	0.81	6.2×2.7	↓	〃	
419	KKTM-161	B2—14	〃	〃	19.8	(15.6)	3.5	(1.28)	7.2×2.9	↑	一部欠損	34
420	KKTM-162	B2—14	〃	〃	16.8	12.2	4.5	0.61	5.7×2.3	↑	完形	
421	KKTM-167	B2—10	〃	〃	22	23.4	3	2.13	[2.6] 9.9×2.4	↑	〃	
422	KKTM-170	B2—10	〃	〃	11	21.4	4	1.61	7.6×4.0	↗	〃	
423	KKTM-173	B2—15	〃	〃	20.7	20.5	5	2.14	11.4×3.3	↙	〃	
424	KKTM-174	B2—15	〃	〃	25.6	21.8	5	2.51	11.2×3.4	↓	〃	
425	KKTM-175	B2—15	〃	〃	21.8	22.8	3	1.57	8.4×3.0	↓	〃	
426	KKTM-180	B3—13	3層	〃	24	20.8	4.5	2.49	9.7×3.2	↓	〃	
427	KKTM-176	B2—15	4層	〃	15.6	19	7	1.87	7.4×4.0	↓	〃	
428	KKTM-183	B2—9	〃	〃	26	16.6	5	1.64	[12.3] 16.3×3.4	↑	〃	
429	KKTM-181	B2—9	〃	〃	22	17.1	4.2	1.71	7.5×3 2	↓	〃	
430	KKTM-186	B2—16	3層	〃	15	16	3.7	1.03	8.8×2.8	↓	〃	
431	KKTM-188	B2—15	4層	〃	20	25.6	5.5	2.44	7.4×4.1	↑	〃	
432	KKTM-191	B2—14	3層	〃	16	14	4	1.07	9.3×4.2	↑	〃	
433	KKTM-192	B1—15	〃	〃	11	11.9	2.7	0.44	9.0×2.1	↓	〃	
434	KKTM-193	B4	1層	〃	13.2	15.4	3	0.70	7.0×2.2	↓	〃	
435	KKTM-190	B2—14	3層	〃	22.1	15.5	3.5	(1.29)	11.9×2.3	↑	ほぼ完形	
436	KKTM-196	B2—13	〃	〃	16.5	10.5	2.5	0.20	5.3×2.0	↓	完形	
437	KKTM-198	B5—10	〃	〃	18.2	28.6	5.5	2.70	9.4×3.6	↓	〃	
438	KKTM-199	B3—12	〃	〃	16	18.8	2.5	0.75	11.7×1.8	↙	〃	
439	KKTM-200	B4・V字溝	4層	〃	17.5	16.3	3	0.85	8.2×2.8	↓	〃	
440	KKTM-201	B2—12	1層	〃	14	17.8	4.5	0.94	6.9×3.1	↑	〃	

資料は極力図示することに努め，522点取り扱った。また図示した資料・図示しない資料各々に計測表を作成した。



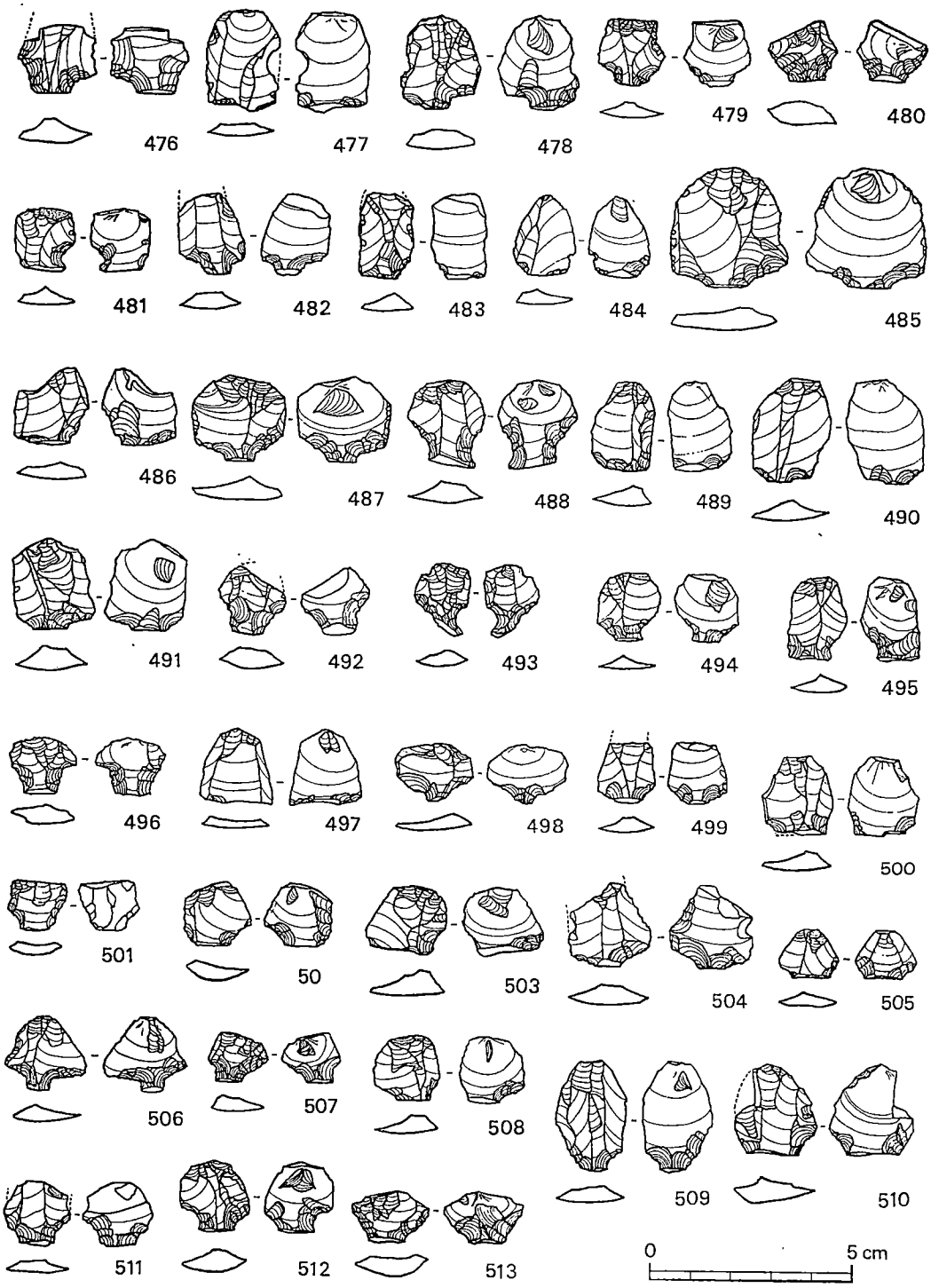
第67図　つまみ形石器実測図(3)　(3/5)

表17 つまみ形石器計測表(3)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
441	KKTM-202	B2—12	1層	黒曜石	18.3	17.4	4.2	1.99	9.2×3.9	↑	完形	
442	KKTM-203	B2—12	〃	〃	23	(21.7)	5	(2.30)	6.2×3.7	↓	一部欠損	
443	KKTM-204	B3—10	3層	〃	17.3	21.3	5.5	1.62	10.5×3.7	↑	完形	
444	KKTM-206	B2—16	4層	〃	18.5	15.4	4.5	1.32	6.3×4.1	↑	〃	
445	KKTM-207	B2—16	〃	〃	16 6	12.7	3.5	0.75	8.6×3.0	↑	〃	
446	KKTM-211	B2—16	〃	〃	18	(22.7)	4.7	(1.92)	10.5×4.7	↖	1/4 欠損	
447	KKTM-213	B3—13	〃	〃	(13)	15.5	3.7	(0.75)	8.0×3.3	↑	〃	
448	KKTM-215	B2—15	3層	〃	15.5	14.7	3.5	0.70	8.0×2.6	↓	完形	
449	KKTM-216	B1—10	〃	〃	15.5	14.5	5	(1.21)	5.0×5.1	↓	一部欠損	
450	KKTM-217	B2—11	4層	〃	20	22.6	5	(1.70)	8.0×4.0	↑	ほぼ完形	
451	KKTM-218	B2—11	〃	〃	18.5	15	3.7	1.34	7.5×2.7	↑	完形	
452	KKTM-220	B2—11	〃	〃	15	16	3.5	(0.79)	7.1×2.2	↓	一部欠損	
453	KKTM-221	B2—11	〃	〃	10	13	3.5	0.45	6.7×3.1	↓	完形	
454	KKTM-224	B2—11	〃	〃	21.9	17.4	4.5	1.83	7.2×4.0	↑	〃	
455	KKTM-222	B2—11	〃	〃	11	16	4	(0.73)	9.8×3.9	↑	ほぼ完形	
456	KKTM-227	B4・V字溝	2層	〃	17.5	24.5	4.5	1.73	8.0×4.0	↑	完形	
457	KKTM-228	B4・V字溝	〃	〃	20.4	16.7	5	1.46	6.0×3.5	↓	〃	
458	KKTM-230	B2—15	3層	〃	(16.5)	(13.5)	4.5	(1.05)	7.0×3.7	↓	1/3 欠損	34
459	KKTM-231	B2—15	〃	〃	17.5	12.4	3.7	0.80	8.0×3.2	↑	完形	
460	KKTM-233	B1—16	〃	〃	(15.8)	(15.8)	3.5	(0.73)	[10.2] ×3.0	↓	2/3 欠損	
461	KKTM-238	B3—15	〃	〃	16	17.3	4.7	1.21	6.3×3.5	↖	完形	
462	KKTM-240	3号住	フク土	〃	16.4	17	2.5	1.06	8.9×2.7	↑	〃	
463	KKTM-244	B4—V字溝	6層	〃	18.5	17	4.5	1.36	8.0×3.3	↖	〃	
464	KKTM-245	—	表採	〃	19.8	14.4	3	0.99	8.0×2.9	↓	〃	
465	KKTM-249	B3—9	3層	〃	18.5	22	4.5	1.91	10.6×3.4	↓	〃	
466	KKTM-251	B3—13	〃	〃	23.2	19.8	4	1.70	7.5×3.9	↓	〃	
467	KKTM-253	B2—11	4層	〃	25.2	19.7	5.5	1.46	7.6×4.5	↑	〃	
468	KKTM-256	B3—14	2層	〃	21.4	(19.8)	6.5	(3.01)	8.1×5.2	↓	一部欠損	
469	KKTM-257	B3—14	〃	〃	(19.7)	14.5	4	(1.19)	7.3×3.3	↑	1/3 欠損	
470	KKTM-269	B1—12	4層	〃	20	14.5	3.7	1.15	6.5×3.5	↓	完形	
471	KKTM-259	B2—9	3層	〃	21	18.8	4.5	1.72	7.1×3.0	↙	〃	
472	KKTM-261	B4—10	6層	〃	19.4	22	5	2.08	10.2×3.8	↑	〃	
473	KKTM-275	B4—15	3層	〃	18	15.9	4.7	1.44	9.8×4.6	↑	〃	
474	KKTM-278	B1—11	1層	〃	14	15.6	4.2	0.88	5.1×3.6	↑	〃	
475	KKTM-279	B2—9	4層	〃	14	20.8	4	1.21	8.7×3.0	↑	〃	

資料のほとんどは刃器状剝片を素材とし刃器状剝片の両側縁から細かい調整加工を施して抉り込みをつけ，その抉り込みの部分で折断した状態のものである。

折断面の計測値を示したaは幅を，bは厚さを示す。また折断の際に力の加わった方向も示した。実測図の断面図と同様で，下方が主要剝離面側である。そのほとんどは刃器状剝片の基部（打面）側で打瘤を残すが，835～846・875～878は刃器状剝片の先端例である。「つまみ形石器」に含めるべきではないかもしれないが一応同様に取り扱った。

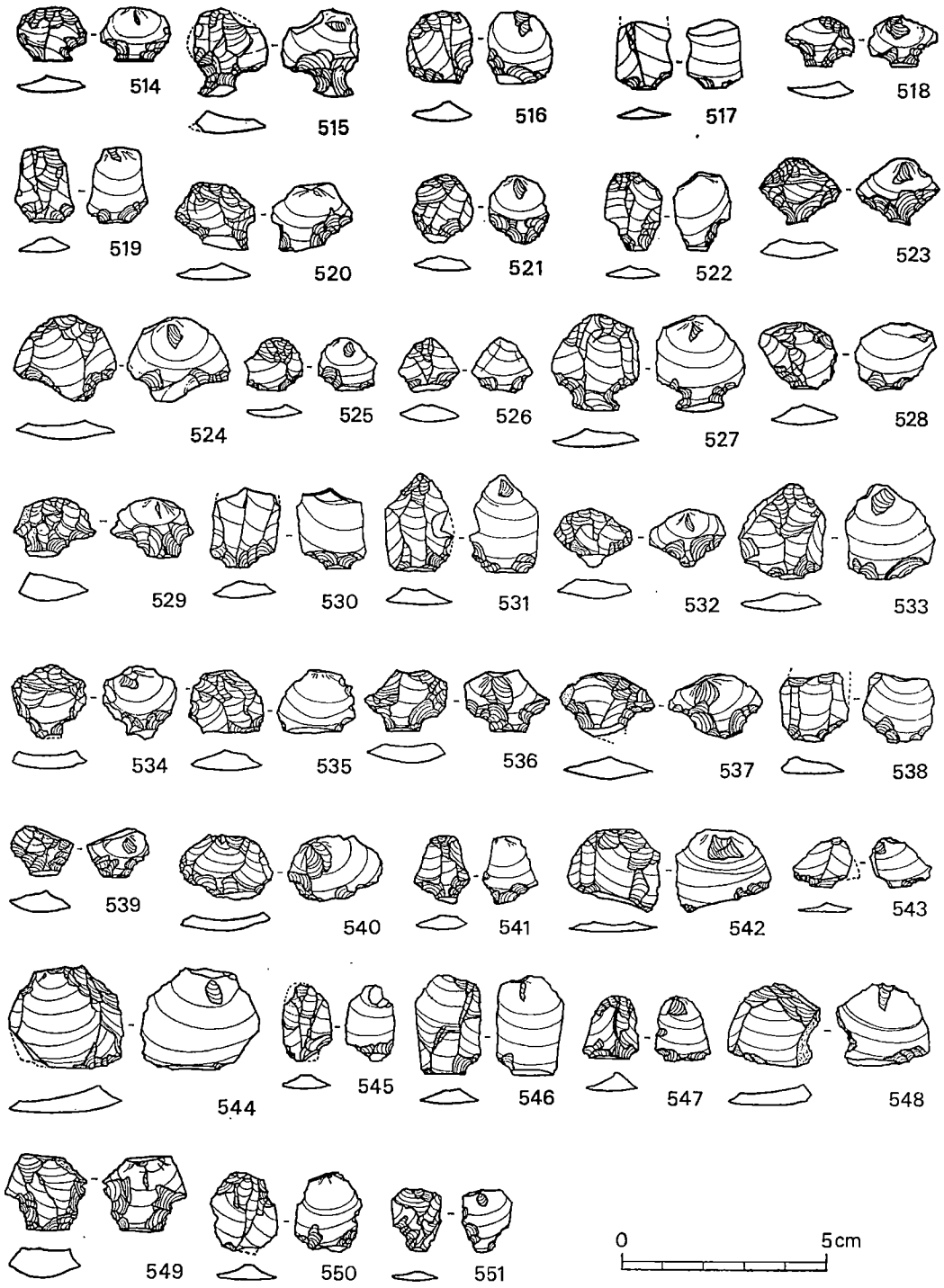


第68図　つまみ形石器実測図(4)　(3/5)

表18 つまみ形石器計測表(4)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
476	KKTM-262	B3—10	3層	黒曜石	(16.3)	18.7	6.0	(2.09)	9.3×6.2	↓	1/2 欠損	34
477	KKTM-276	B5—9	〃	〃	24.4	17.6	3.0	(1.58)	11.2×2.7	↑	一部欠損	
478	KKTM-281	B1—10	〃	〃	22.8	19.3	5.0	2.29	9.3×4.2	↑	完形	
479	KKTM-285	B2—10	〃	〃	25.7	16.0	4.0	1.20	8.4×4.0	↓	〃	
480	KKTM-286	B2—10	〃	〃	24.7	16.5	6.0	1.42	8.7×5.3	↓	〃	
481	KKTM-287	B2—10	〃	〃	25.3	14.0	4.7	1.10	10.5×3.8 [9.5×3.8]	↑	〃	
482	KKTM-288	B2—10	〃	〃	19.6	16.3	4.2	(1.35)	6.6×3.5	↓	1/4 欠損	
483	KKTM-290	B2—10	〃	〃	(20.5)	13.2	4.0	(1.12)	7.1×2.8	↑	一部欠損	
484	KKTM-291	B2—10	〃	〃	19.3	25.2	3.7	0.97	[6.8]×3.0	↓	完形	
485	KKTM-280	B1—16	4層	〃	29.0	28.3	5.5	4.53	10.5×4.6	↓	〃	
486	KKTM-293	B1—16	3層	〃	18.2	17.8	4.2	1.18	8.2×3.6	↑	〃	
487	KKTM-296	B1—16	4層	〃	20.5	22.6	6.0	2.79	7.1×4.5	↑	〃	
488	KKTM-298	B2—10	〃	〃	21.0	18.4	5.5	2.16	11.6×3.5 [9.8×3.7]	↑	〃	
489	KKTM-299	B2—10	2層	〃	21.3	15.2	5.0	1.62	8.5×4.4	↑	〃	
490	KKTM-300	B2—12	〃	〃	25.0	18.6	5.2	1.28	5.7×3.5	↓	〃	
491	KKTM-301	B2—12	〃	〃	22.3	19.8	6.0	2.8	7.9×4.3	↓	〃	
492	KKTM-303	B2—12	〃	〃	(16.6)	16.0	5.0	(1.10)	(7.6)×3.5 [9.0×3.5]	↓	1/4 欠損	
493	KKTM-304	B2—12	〃	〃	17.5	13.0	3.7	0.66	8.0×3.4 [5.3×3.4]	↗	完形	35
494	KKTM-305	B2—12	〃	〃	16.3	15.0	3.5	0.90	6.4×3.3	↑	〃	
495	KKTM-306	B2—12	〃	〃	20.0	14.2	4.5	1.24	7.0×3.8	↑	〃	
496	KKTM-307	B2—12	〃	〃	13.8	16.0	4.7	1.01	8.3×3.6	↑	〃	
497	KKTM-310	B3—14	4層	〃	18.0	17.4	2.5	0.97	12.2×2.0	↘	〃	
498	KKTM-311	B2—12	〃	〃	14.0	18.7	4.0	0.83	4.4×2.3	↑	〃	
499	KKTM-313	B2—12	〃	〃	(14.4)	14.0	3.5	(0.81)	7.4×3.9	↓	1/3 欠損	
500	KKTM-314	B1—11	3層	〃	18.8	17.2	5.0	(1.78)	12.7×3.9	↑	ほぼ完形	
501	KKTM-316	B1—11	〃	〃	12.0	13.9	3.0	0.61	8.1×2.3	↑	完形	
502	KKTM-318	B2—15	〃	〃	15.6	16.0	5.0	1.37	8.0×4.0	↓	〃	
503	KKTM-320	B3—9	〃	〃	16.6	19.0	6.2	1.81	12.7×5.8	↑	〃	
504	KKTM-321	B2—9	1層	〃	(20.4)	20.0	5.5	(1.95)	6.6×5.1	↑	1/4 欠損	
505	KKTM-319	B2—15	3層	〃	11.7	14.3	4.0	0.63	9.4×3.5	↖	完形	
506	KKTM-327	B2—12	4層	〃	17.8	19.4	4.0	1.13	5.6×3.3	↓	〃	
507	KKTM-330	B2—12	〃	〃	12.0	14.0	4.0	0.61	6.2×2.9	↓	〃	
508	KKTM-334	B—2	1層	〃	25.8	16.0	4.5	1.26	8.5×4.2	↓	〃	
509	KKTM-328	B2—12	4層	〃	27.8	16.9	4.0	2.10	6.4×4.2	↑	〃	
510	KKTM-331	B3—13	〃	〃	21.8	20.0	6.5	(2.55)	12.8×4.7	↑	一部欠損	
511	KKTM-338	B2—9	3層	〃	15.6	16.0		(0.85)	7.8×3.4	↓	〃	
512	KKTM-336	B2—9	〃	〃	17.3	16.9	6.0	1.64	9.3×4.8	↑	完形	
513	KKTM-340	B1—12	〃	〃	12.2	18.4	5.5	1.16	8.8×4.0	↓	〃	

664～727は比較的長さの長いもので，728～803は抉り込みのつけ方が一方に深い等片寄る傾向にある例である。804～834は抉込み部の最深部で折断されていないもので，折断の際の失敗例と考えられる資料である。849～887は削器等に利用されている資料で，折断面を一部残しながらもリタッチがみられる例や使用痕のみられる例である。



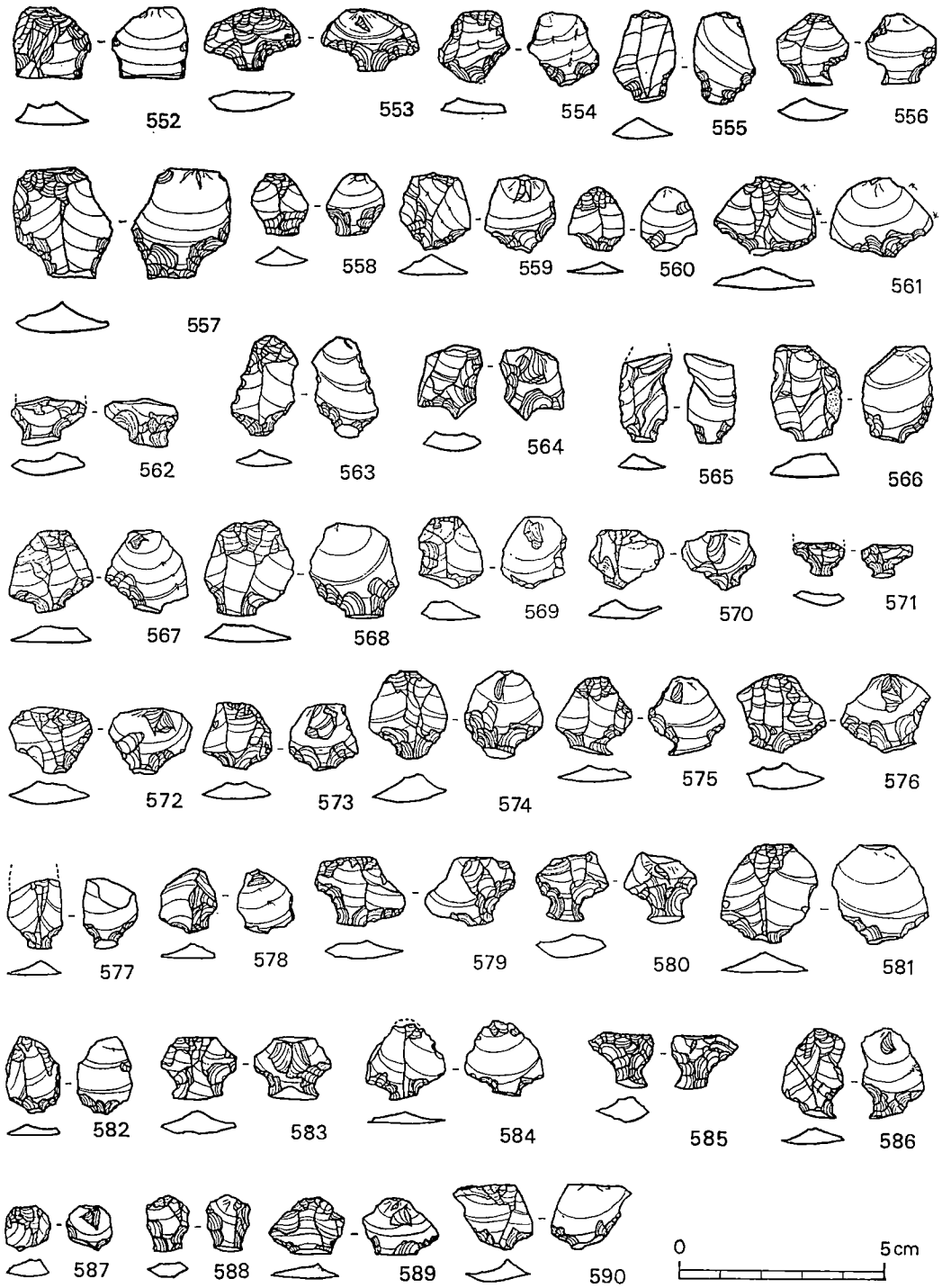
第69図　つまみ形石器実測図(5)　(3/5)

表19 つまみ形石器計測表(5)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
514	KKTM-343	B1—12	3層	黒曜石	12.6	16	4	0.80	9.1×3.0	↑	完形	
515	KKTM-344	B3—9	〃	〃	20.5	(17.5)	5.5	(1.57)	(9.0)×3.4 〔6.2×3.6〕	↗	一部欠損	
516	KKTM-345	B4	表採	〃	17	25.3	4.7	1.42	7.3×4.0	↑	完形	
517	KKTM-347	B3—14	4層	〃	(16)	12.8	2.7	(0.59)	5.7×2.4	↖	1/4 欠損	
518	KKTM-348	B3—9	2層	〃	11.8	16	4	0.63	6.5×3.8	↓	完形	
519	KKTM-349	B2—14	4層	〃	17.8	13.9	3.7	1.04	7.4×4.4	↓	〃	
520	KKTM-350	B2—12	〃	〃	15.7	19	4	1.49	11.5×4.3 〔10.9×4.3〕	↑	〃	
521	KKTM-354	B2—16	〃	〃	16.3	14	3.7	0.85	6.1×3.1	↓	〃	
522	KKTM-356	B3—13	〃	〃	18.5	13.2	3.2	0.88	4.6×2.8	↑	〃	
523	KKTM-357	B9—8	3層	〃	15.7	19	6	1.06	4.9×3.8	↓	〃	
524	KKTM-360	B3—15	〃	〃	20.4	24.4	4.5	1.93	12.0×3.5	↘	〃	
525	KKTM-363	B4—14	〃	〃	12.5	14	2.7	0.49	6.6×2.3	↓	〃	
526	KKTM-364	B5	2層	〃	13	24.8	4	0.72	9.3×4.6	↓	〃	
527	KKTM-365	B5	〃	〃	22.9	20.6	4.5	2.04	11.3×3.4 〔9.0×3.4〕	↓	〃	
528	KKTM-367	B4—11	3層	〃	15.7	18.4	5	1.29	6.3×2.8	↑	〃	
529	KKTM-371	B4	2層	〃	14.2	19	6.5	1.51	7.6×5.7	↓	〃	
530	KKTM-372	B4—16	3層	〃	18.8	16.2	4	(1.22)	5.8×4.4	↓	一部欠損	35
531	KKTM-373	B4—10	〃	〃	23.2	15.8	4	(1.61)	9.1×3.7	↓	〃	
532	KKTM-374	B4—10	〃	〃	13.9	18.4	5	0.88	6.3×3.4	↓	完形	
533	KKTM-377	B4	2層	〃	22.7	20.5	4.5	2.09	8.3×1.9	↓	〃	
534	KKTM-378	B4	〃	〃	17.8	17.4	4	(1.19)	〔7.4〕×3.5	↑	ほぼ完形	
535	KKTM-379	B5	〃	〃	15	17.8	5	1.39	13.9×4.3	↑	完形	
536	KKTM-381	B5	〃	〃	14.7	19.3	4.7	1.29	8.6×3.3	↓	〃	
537	KKTM-382	B5	〃	〃	(15.3)	22.4	5.5	(1.58)	7.6×2.4	↓	一部欠損	
538	KKTM-383	B4—15	3層	〃	16.4	16.5	4	(1.04)	7.6×2.4	↓	1/4 欠損	
539	KKTM-384	B5—9	〃	〃	12	14.6	5.5	0.92	7.2×4.0	↓	完形	
540	KKTM-385	B5—9	〃	〃	15.7	22.2	4.5	1.48	11.5×3.4	↓	〃	
541	KKTM-386	B5—9	〃	〃		12.9	3.5	0.69	5.3×2.9	↓	〃	
542	KKBF-29	B6—12	5層	〃	20	21.8	2.5	1.53	13.3×2.5	↓	〃	
543	KKBF-147	B2—10	4層	〃	12.5	14.5	2.2	(1.34)	5.6×2.0	↗	一部欠損	
544	KKBF-142	B1—11	〃	〃	24.6	27.3	6.5	(3.88)	〔14.4〕×4.3	↑	〃	
545	KKBF-187	B2—14	3層	〃	(18.3)	12	3.5	(0.89)	〔4.8〕×4.2	↑	〃	
546	KKBF-193	B3—10	〃	〃	23.6	15.6	3.5	1.50	10.0×2.9	↓	完形	
547	KKBF-198	B1—16	4層	〃	14.8	12.9	4.5	0.78	9.7×3.4	↓	〃	
548	KKBF-224	B2—14	〃	〃	19.5	22	5	2.19	12.4×5.0	↑	〃	
549	KKBF-269	B3—13	3層	〃	18	19.4	6.5	2.48	10.5×4.6	↑	〃	
550	KKBF-275	B3—10	〃	〃	(18.7)	16	3.5	(1.20)	〔9.6〕×3.3	↑	一部欠損	
551	KK F-21	B1—11	4層	〃	15	11.6	2.2	0.40	5.3×1.9	↙	完形	

なお失敗例と考えられる資料の抉込み部分の幅と厚さは計測表で〔　〕を付して示した。

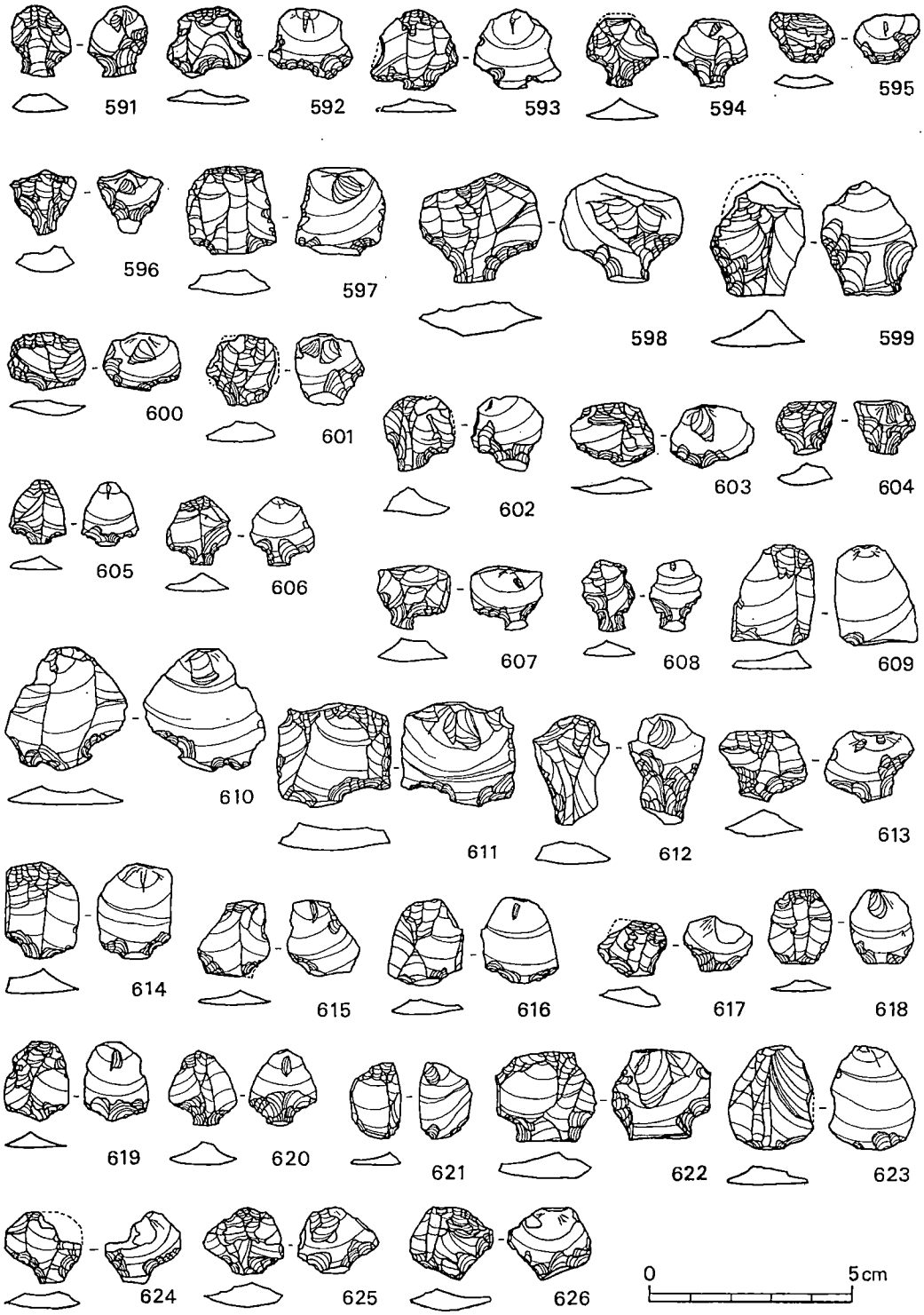
註1　片岡肇「いわゆる『つまみ形石器』について」古代文化22　1970　による。　　(小池　史哲)



第70図　つまみ形石器実測図(6)　(3/5)

表20 つまみ形石器計測表 (6)　　(単位 mm・g)

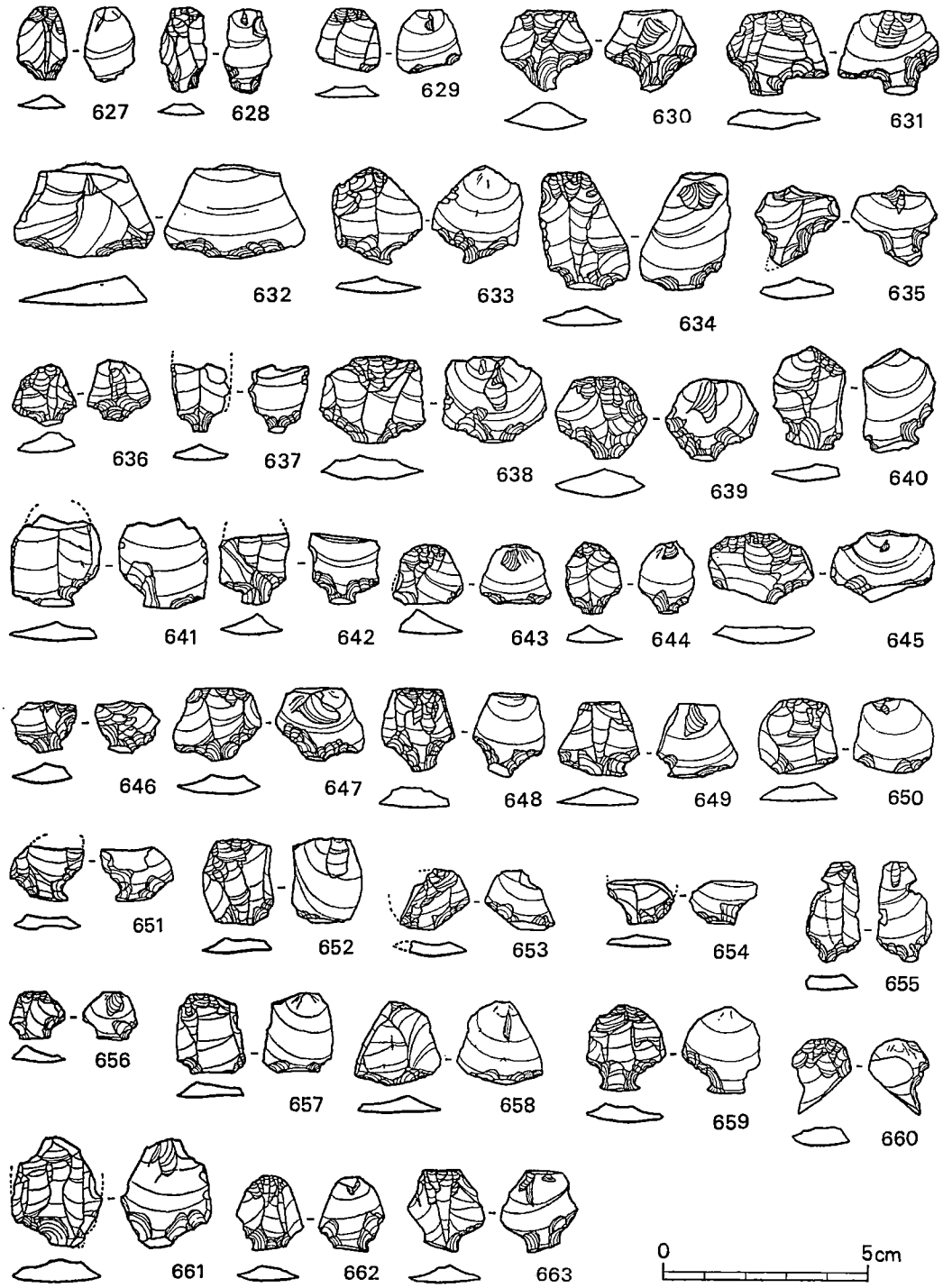
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
552	KKF- 23	B2—15	4層	黒曜石	17	18.2	5.7	1.85	15.4×[6.0]	↓	完形	
553	KKF- 49	B1—14	3層	〃	14.9	22.8	5	1.05	5.9×3.6	↑	〃	
554	2 S-290	B6	1層	〃	17.5	15	3.7	(0.9)	5.0×2.3	↗	ほぼ完形	
555	2 S-306	B6—11	3層	〃	21.5	15	5	1.3	7.5×3.8	↓	完形	
556	2 S-359	B6—13	〃	〃	17	17	5.2	1.0	8.0×2.2	↑	〃	
557	KKF- 57	B3—9	〃	〃	26.4	23.6	7.5	4.70	11.6×4.9	(↑)	〃	
558	2 S- 63	B6—14	5層	〃	14.5	14	4.5	0.79	7.8×3.9	↓	〃	
559	2 S- 64	B6—11	〃	〃	18.5	17	5.5	1.61	4.4×3.7	↓	〃	
560	2 S- 67	B6—14	〃	〃	15	14	3	0.52	6.2×2.3	↓	〃	
561	2 S- 68	B7—9	3層	〃	18.5	25	5.5	2.05	6.2×4.5	↓	〃	
562	2 S- 73	B6—10	〃	〃	(11.5)	18	5.5	(0.95)	8.7×4.0	↑	1/4 欠損	
563	2 S- 69	B5—12	〃	〃	23.5	16	4	1.07	5.8×3.9	↓	完形	
564	2 S- 72	B6—13	5層	〃	18	15.5	4.5	1.50	? ×4.0	↗	〃	
565	2 S- 74	B6—10	3層	〃	(21)	12.5	3.7	(0.81)	5.9×3.8	↑	1/4 欠損	
566	2 S- 75	B6—10	〃	〃	22.5	17	5.5	2.67	8.0×3.9	↑	完形	
567	2 S- 76	B6—10	〃	〃	19.5	20	4	1.51	7.2×3.2	↓	〃	35
568	2 S- 77	B6—10	〃	〃	22.5	21.5	4.5	2.05	9.2×3.6	↓	〃	
569	2 S- 79	B6—10	5層	〃	17	16	4.7	1.18	6.9×3.7	↓	〃	
570	2 S- 81	B6—14	〃	〃	14	18		0.81	4.6×3.0	↓	〃	
571	2 S- 84	B6—13	〃	〃	(8)	12.5	3.5	(0.25)	4.8×2.9	↓	1/3 欠損	
572	2 S- 82	B6—14	〃	〃	16	20	5.5	1.55	6.0×4.3	↑	完形	
573	2 S- 89	B6—9	〃	〃	16	16.5	4	1.10	5.6×4.2	↓	〃	
574	2 S- 87	B5—12	〃	〃	21	19	6.5	1.97	7.2×5.4	↑	〃	
575	2 S- 88	B6—9	〃	〃	20	16	3.5	1.60	10.7×3.7	↓	〃	
576	2 S- 92	B6—15	3層	〃	19	21	6	2.04	9.0×3.9		〃	
577	2 S- 93	B5—16	5層	〃	(17)	12	3.5	(0.64)	5.2×2.7	↓	1/3 欠損	
578	2 S- 94	B5-11.12	1層	〃	15.5	14	3.7	0.69	6.0×3.6		完形	
579	2 S- 94	B6—15	5層	〃	17.5	21.5	4.5	1.47	5.9×3.9	↓	〃	
580	2 S- 99	B6—16		〃	17	17	6	1.32	5.9×3.5	↓	〃	
581	2 S- 97	3号住	フク土	〃	24	23	5	2.42	8.3×4.2	→	〃	
582	2 S- 98	B5—16	2層	〃	18	13	2.7	0.68	4.3×2.4	↓	〃	
583	2 S-100	2号住	フク土	〃	15	18.5	5.5	1.44	10.8×4.2	↓	〃	
584	2 S-103	B6—13	5層	〃	(18)	19	2.7	(0.86)	6.6×3.8	↑	一部欠損	
585	2 S-104	B6—13	〃	〃	13	16	6.2	0.99	6.2×4.8	↑	完形	
586	2 S-110	B6—9	〃	〃	21.5	15	3.5	1.01	7.1×3.2	↑	〃	
587	2 S-105	3号住	フク土	〃	10.5	11	4	0.40	7.2×3.7	↑	〃	
588	2 S-106	B6—11	5層	〃	13	10.5	3.5	0.47	6.5×2.4	↓	〃	
589	2 S-108	B6—9	2層	〃	13.5	18.5	3.5	0.80	10.0×3.0	↑	〃	36
590	2 S-109	B6—11	5層	〃	15	19	5.2	1.00	8.4×3.7	↓	〃	



第71図　つまみ形石器実測図(7)　(3/5)

表21 つまみ形石器計測表 (7)　　(単位 mm・g)

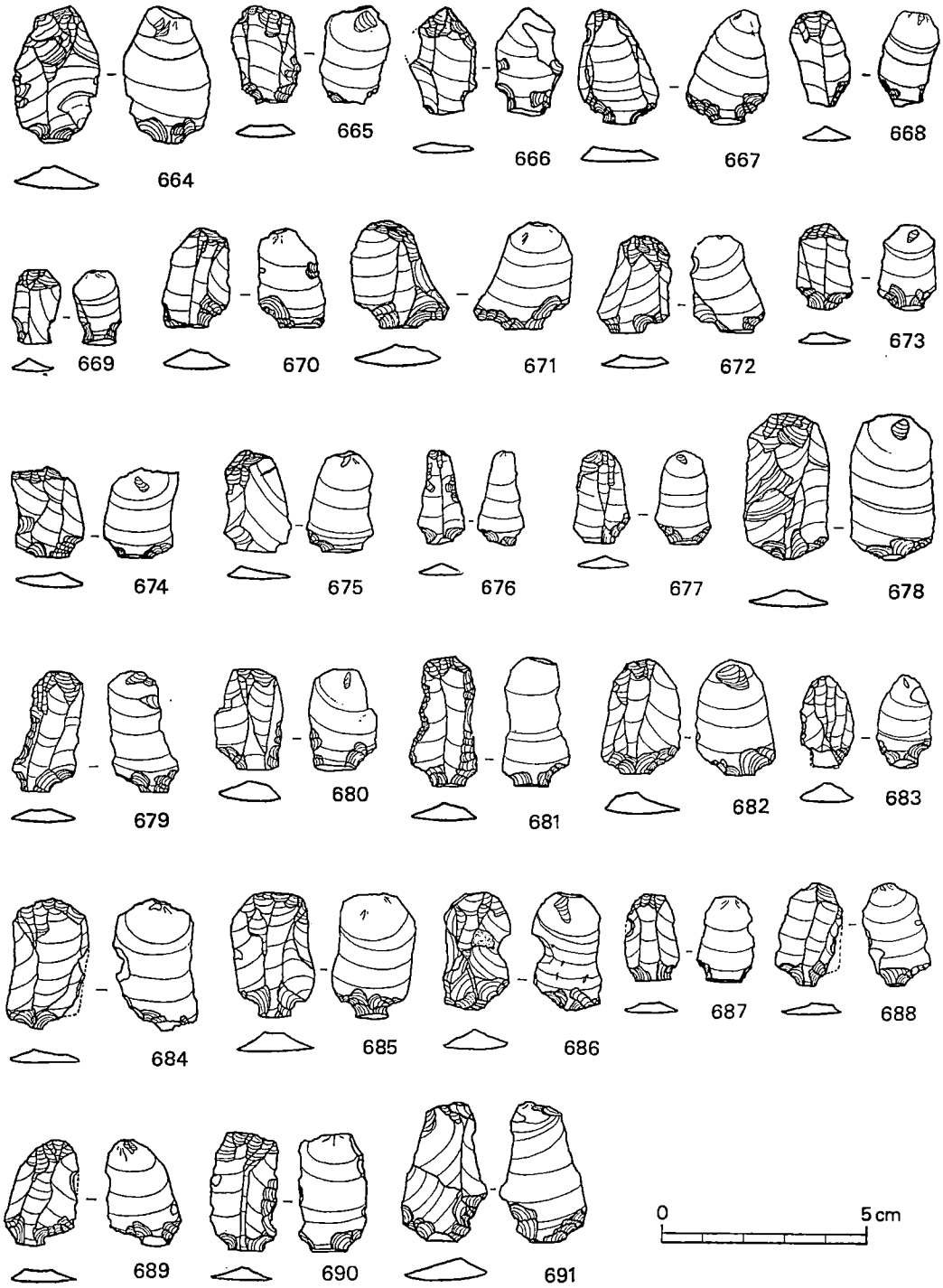
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
591	2 S -111	B6—10	5 層	黒曜石	17.5	14.5	4.7	1.09	7.2×3.2	↑	完形	
592	2 S -112	B6—9	〃	〃	17	20.5	3.5	1.03	6.6×3.2	↓	〃	
593	2 S -113	B6—9	〃	〃	19.5	21	3.5	(1.07)	6.4×2.2	↖	一部欠損	
594	2 S -114	B6—13	3 層	〃	(16.3)	17.5	5.5	(1.32)	5.7×2.6	↓	ほぼ完形	
595	2 S -122	B6—11	〃	〃	12	16	3.5	0.65	6.9×3.0	↑	完形	
596	2 S -199	B6—10	5 層	〃	15.5	16	6.5	1.3	6.0×4.2	↑	〃	
697	2 S -116	B6—10	3 層	〃	21	22	6	3.07	8.5×3.9	↓	〃	
598	2 S -128	B6—14	〃	〃	26.5	30	8.5	5.23	9.7×4.9	↓	〃	
599	2 S -183	3号住	フク土	〃	(28)	23	8.7	(4.4)	13.6×5.8	↗	1/5 欠損	
600	2 S -253	B6—14	3 層	〃	14	19	3.5	1.0	8.6×2.7	→	完形	
601	2 S -289	B 7	1 層	〃	18	(17)	5	(1.5)	8.8×3.6	↓		
602	2 S -291	B 7	〃	〃	18.5	17.5	6.7	(1.6)	7.7×5.8	↓	ほぼ完形	
603	2 S -305	B6—11	3 層	〃	15.5	20.5	4	1.0	5.9×3.3	↓	完形	
604	2 S -307	B6—11	〃	〃	13	15	5	1.0	6.4×4.3	↑	〃	
605	2 S -322	B5—16	〃	〃	15	14	3.5	0.6	4.2×2.8	↑	〃	
606	2 S -334	B5—15	5 層	〃	16.5	15.5	3.5	0.8	5.6×3.7	↑	〃	
607	2 S -360	B6—13	3 層	〃	15.5	18	5.5	1.5	4.9×3.0	↓	〃	36
608	2 S -370	B4—14	〃	〃	17	12.5	4	0.6	5.7×3.1	↓	〃	
609	2 S -381	B6—14	5 層	〃	24	20	4.5	2.2		←	〃	
610	2 S -347	B6—16	3 層	〃	29.5	30	4.5	3.7	9.3×3.4	↓	〃	
611	2 S -361	B5—12	〃	〃	25	28.5	6.5	5.1	10.1×2.8	↑	〃	
612	2 S -383	B6—15	〃	〃	27	18	6	1.6	9.7×5.2	→	〃	
613	2 S -399	B6—10	5 層	〃	17.5	22	6.5	2.0	8.2×5.0	↑	〃	
614	2 S -408	B6—16	3 層	〃	24	18	6	2.9	6.7×5.3	↘	〃	
615	2 S -415	B6—12	〃	〃	(28.5)	18	3.5	(1.1)	7.7×5.0	←	ほぼ完形	
616	2 S -482	B6—10	〃	〃	21.5	19	4	1.3	8.3×3.2	↑	完形	
617	2 S -503	B 5	1 層	〃	(14)	16	5	(1.1)	6.9×4.1	↑	一部欠損	
618	2 S -492	B6—11	3 層	〃	28.5	15.5	3	1.0	7.7×3.6	↓	完形	
619	2 S -510	B6—16	〃	〃	29	15.5	3.7	1.2		↓	〃	
620	1 S -128	?	〃	〃	18	16.5	5.5	1.3	6.2×4.2		〃	
621	1 S - 87	?	〃	〃	18	12.5	3.2	0.6	7.5×1.9	↓	〃	
622	1 S -124	?	〃	〃	21.5	24.5	6	3.6	16.5×3.7		〃	
623	1 S -126	?	〃	〃	25	21	4.5	(2.4)	7.1×3.2		ほぼ完形	
624	1 S - 16	?	〃	〃	17.5	18.5	4.2	(1.0)	5.7×2.6	↗	1/4 欠損	
625	1 S -129	?	〃	〃	16	20	6	1.5	7.8×4.5		完形	
626	1 S -131	?	〃	〃	17	20.5	5	1.5	?	↑	〃	



第72図　つまみ形石器実測図(8)　(3/5)

表22 つまみ形石器計測表 (8)　　(単位 mm・g)

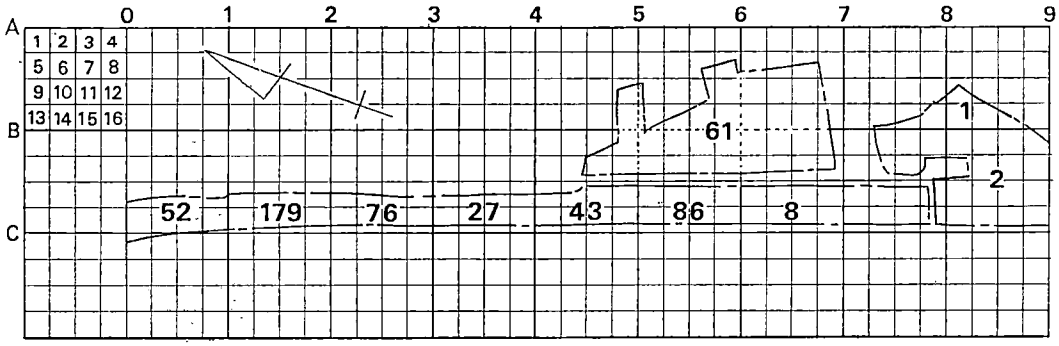
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
627	1 S-132	?	3層	黒曜石	17.5	12.5	3	0.7	5.1×3.2	↓	完形	
628	1 S-133	?	〃	〃	20	11.5	2.7	0.6	6.1×2.1	→	〃	
629	1 S-134	?	〃	〃	15	15.5	3	0.6	9.2×2.4	←	〃	
630	1 S-209	?	〃	〃	19.5	22	6.5	2.3	6.3×5.6		〃	
631	1 S-210	?	〃	〃	20	24.5	4	1.9	8.0×3.6		〃	
632	1 S-156	?	〃	〃	22	34	7	4.0	8.3×2.5	↖	〃	
633	1 S-213	?	〃	〃	23	21.5	4	1.5	6.3×3.0		〃	
634	1 S-212	?	〃	〃	27.5	22	4.5	3.2	9.1×4.4		〃	
635	1 S-215	?	〃	〃	19	21	5	(1.3)	8.8×2.9		先端欠損	
636	1 S-214	?	〃	〃	14	15	4.7	1.5	5.4×3.2	↓	完形	
637	1 S-216	?	〃	〃	(16)	14.5	3.7	(0.7)	3.7×2.7	↓	1/3 欠損	
638	1 S-267	?	〃	〃	20.5	25.5	6	2.8	7.8×4.0	↑	完形	
639	1 S-269	?	〃	〃	19	22.5	7	2.5	6.4×3.6	↓	〃	
640	1 S-270	?	〃	〃	24.5	16	4	1.7	10.0×2.8	↓	〃	
641	1 S-268	?	〃	〃	(21.5)	21.5	4.5	(1.8)	7.7×4.0	↑	1/5 欠損	
642	1 S-271	?	〃	〃	17	17	5	(1.3)	6.5×4.2	↓	1/3 欠損	
643	1 S-272	?	〃	〃	14	17	6	(1.3)	10.9×4.6	↓	ほぼ完形	36
644	1 S-273	?	〃	〃	17	12.5	4	0.8	4.6×3.4	↓	完形	
645	1 S-290	?	〃	〃	17	25.5	4	1.7	15.2×3.4	↑	〃	
646	1 S-274	?	〃	〃	12	16	5	0.8	5.2×3.0	↓	〃	
647	1 S-343	?	〃	〃	17	21	4.5	1.7	4.9×3.4	↓	〃	
648	1 S-344	?	〃	〃	19.5	17.5	5	1.7	6.4×4.3	↓	〃	
649	1 S-345	?	〃	〃	17.5	19.5	4.5	1.4	8.4×3.3	↑	〃	
650	1 S-346	?	〃	〃	18	19	4.5	1.7	11.1×3.9	↓	〃	
651	1 S-347	?	?	〃	(13.5)	18	3.5	(0.8)	7.6×3.3	↑	1/4 欠損	
652	1 S-373	A 6	〃	〃	21	17	3.5	1.4	9.7×3.1	↑	完形	
653	1 S-369	B 7	〃	〃	14.5	16.5	3.5	(0.7)	6.5×2.3	↑	1/3 欠損	
654	1 S-374	A 6	?	〃	(10.5)	(16)	3	(0.5)	6.4×2.7	↑	1/4 欠損	
655	1 S-383	A 6	3層	〃	24.5	13	3.5	1.2	3.5×2.5	→	完形	
656	1 S-386	A 6	5層	〃	11.5	13	4	0.5	7.2×2.2	↑	〃	
657	1 S-398	A 6 溝	10層	〃	19	17	3.5	1.3	1.3×2.8	↑	〃	
658	1 S-428	A 5 溝	11層	〃	20	21	3.7	1.4	7.4×3.0	↑	〃	
659	1 S-437	A 7・B 7		〃	21	19	4.5	1.7	7.8×2.1	↑	〃	
660	1 S-448	A 7・B 7	2層	〃	17.9	14.5	4.7	(1.0)	?	↑	〃	
661	1 S-446	A 7・B 7	〃	〃	26	22	5.5	(1.9)	8.1×4.1	↓	一部欠損	
662	1 S-472	?		〃	18	16	4	1.1	7.9×3.2	↖	完形	
663	1 S-473	?		〃	20	18.5	4.5	1.5	7.9×3.9	←	〃	



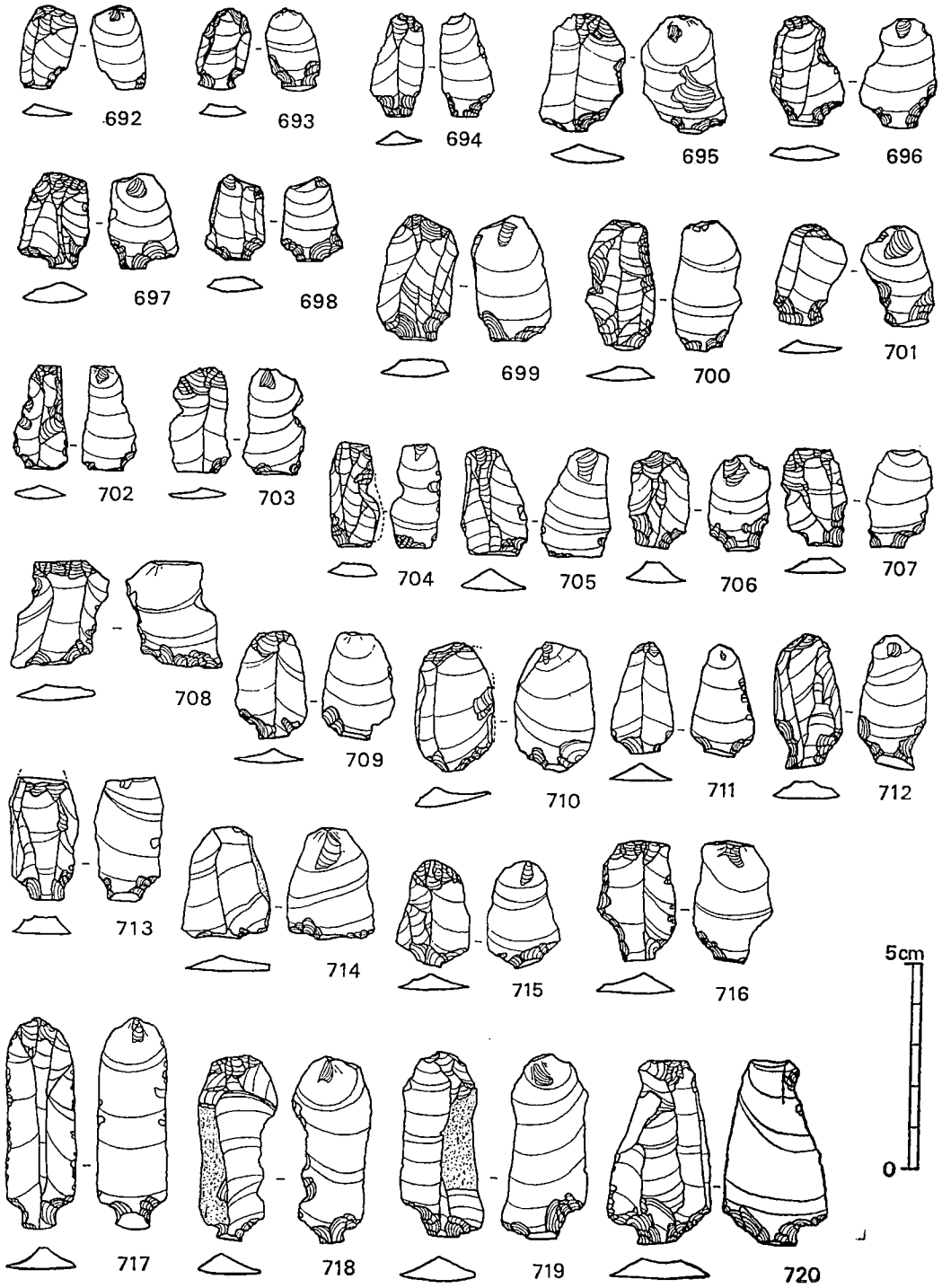
第73図　つまみ形石器実測図(9)　(3/5)

表23 つまみ形石器計測表(9)　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
664	KKTM- 45	B6—10	5層	黒曜石	33	20.2	5.5	3.45	7.2×4.7	↓	完形	
665	KKTM- 59	B2—14	3層	〃	23.3	16.3	3	1.53	7.5×2.8	↑	〃	
666	KKTM- 61	B2—14	〃	〃	25.4	(15.8)	2.5	(1.20)	8.6×2.6	↓	一部欠損	
667	KKTM- 78	B3—13	〃	〃	27.4	19	3.7	1.93	7.7×2.3	↘	完形	
668	KKTM-132	B2—11	4層	〃	22.8	14	3.7	1.10	7.2×3.4	↑	〃	
669	KKTM-143	B2—12	〃	〃	17.8	11.4	3.2	0.69	8.0×2.9	↓	〃	
670	KKTM-147	B3—13	3層	〃	23.8	15.7	4.5	1.92	8.9×5.0	↓	〃	
671	KKTM-141	B5—10		〃	25.4	23	5	2.97	9.4×4.7	↑	〃	
672	KKTM-148	B3—13	3層	〃	23.5	17.4	3	1.39	8.1×2.8	↑	〃	
673	KKTM-156	B2—16	4層	〃	20.5	13.3	3	0.81	6.5×3.0	↑	〃	
674	KKTM-163	B1—11	〃	〃	21.4	17.2	3.7	1.48	8.3×3.6	↑	〃	
675	KKTM-164	B1—11	〃	〃	24.3	15.8	3.2	1.52	10.3×2.8	↑	〃	
676	KKTM-168	B2—10	〃	〃	22	11	3	0.64	6.6×2.9	↓	〃	36
677	KKTM-172	B2—15	〃	〃	22	13.3	3	0.85	7.7×2.8	↓	〃	
678	KKTM-178	B2—12	5層	〃	34.8	20.2	4	3.02	6.5×3.8	↖	〃	
679	KKTM-187	B1—15	4層	〃	28.9	16.4	3.2	1.80	6.8×3.8	↑	〃	
680	KKTM-195	B3—9	〃	〃	23.8	16	5	2.37	10.5×4.7	↖	〃	
681	KKTM-205	B2—16	〃	〃	30.6	16.2	4.2	2.31	7.9×4.2		〃	
682	KKTM-235	B1—16	〃	〃	27.8	19	5	2.60	7.0×4.9	↙	〃	
683	KKTM-236	B3—10	3層	〃	22.2	12.8	5	(1.36)	[5.7]×[1.7]	↖	ほぼ完形	
684	KKTM-239	B3—15	〃	〃	31.5	19.4	3.5	(2.32)	6.7×3.0	↑	一部欠損	
685	KKTM-246	B2—16	4層	〃	30	20	4.7	3.46	7.8×4.5	↑	完形	
686	KKTM-248	B3—9	3層	〃	28.4	16	5	2.29	[4.7]×4.1	↗	〃	
687	KKTM-254	B2—10	4層	〃	20.7	13	2.5	(0.84)	8.4×2.5	↓	ほぼ完形	
688	KKTM-282	B2—11	〃	〃	25	15.8	3	(1.10)	4.6×2.7	↑	一部欠損	
689	KKTM-264	B2—9	3層	〃	25.3	17.5	3	(1.59)	6.7×3.3	↓	ほぼ完形	37
690	KKTM-284	B2—10	〃	〃	28.2	15.8	3	2.12	8.3×3.6	↑	完形	
691	KKTM-308	B1—11	〃	〃	33.2	20.4	5.5	3.09	7.7×4.1	↑	〃	



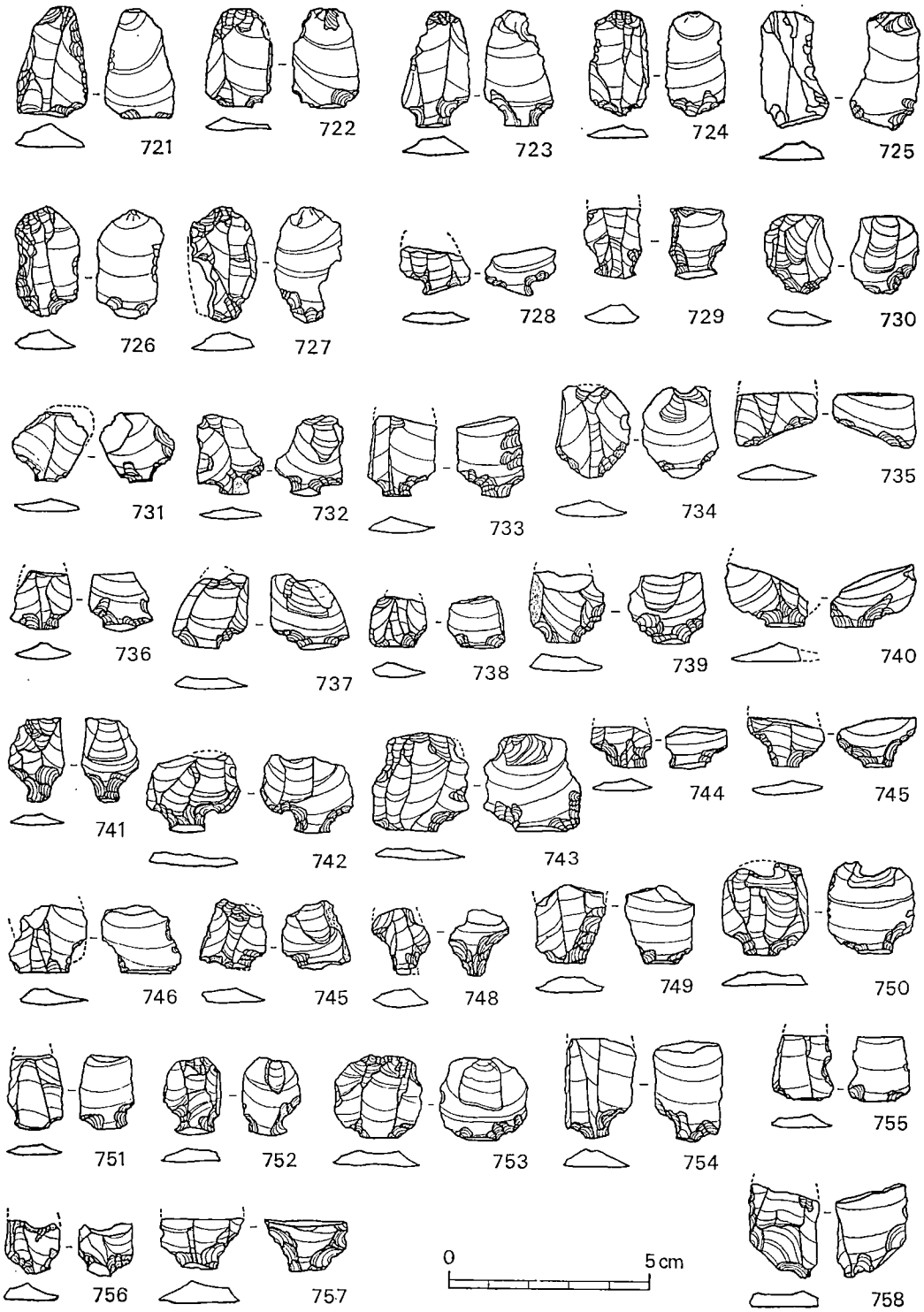
第74図　つまみ形石器の地区別分布



第75図　つまみ形石器実測図(10)　(3/5)

表24 つまみ形石器計測表(10)　　(単位 mm・g)

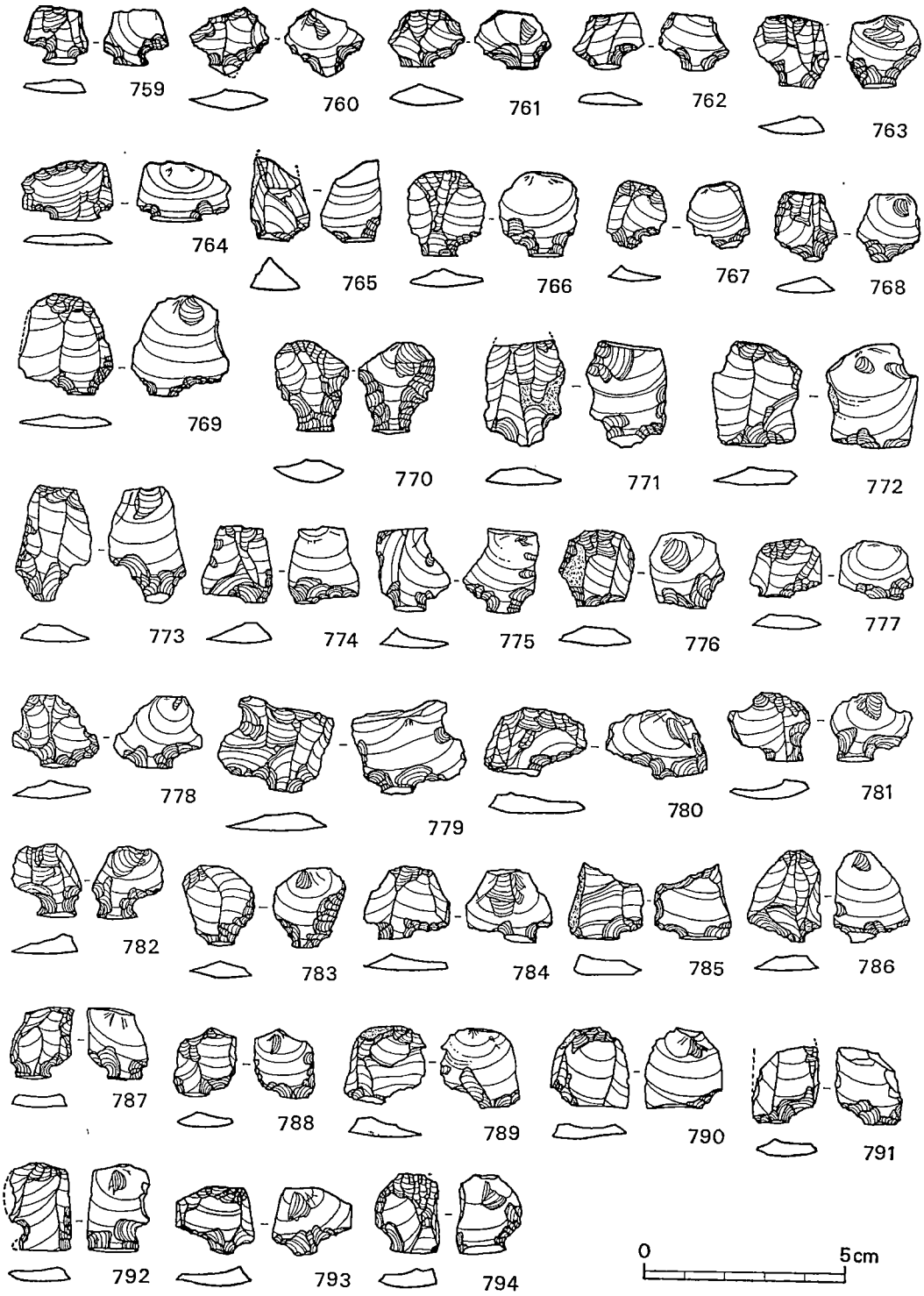
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
692	KKTM-312	B2—12	4層	黒曜石	19.6	13.4	3	0.85	5.4×3.0	↙	完形	
693	KKTM-322	B2—15	〃	〃	19.4	12.8	3.5	0.89	8.4×2.3	↓	〃	
694	KKTM-325	B3—14	〃	〃	25	12.8	3.5	1.08	6.4×3.2	↓	〃	
695	KKTM-326	B3—14	〃	〃	28	20	4.5	2.28	6.2×3.1	↓	〃	
696	KKTM-329	B2—12	〃	〃	26	27.9	3.5	1.42	8.0×3.9	↓	〃	
697	KKTM-332	B 2	1層	〃	22.8	17	4.7	1.92	6.5×3.0	↑	〃	
698	KKTM-333	B 2	〃	〃	20.5	14	3.5	1.17	6.5×3.2	↖	〃	
699	KKTM-346	B 2	3層	〃	30	19	4.5	2.85	8.7×4.6	↑	〃	
700	KKTM-362	B 5		〃	31	16.5	3.5	2.53	8 3×3 0	↓	〃	
701	KKTM-366	B 5	2層	〃	24.2	17.3	3.2	1.34	[10.3]×2.9 9.5×2.9	↓	〃	
702	KKTM-369	B5—14	3層	〃	24.8	13	3.5	1.0	8.2×3.5	↓	〃	
703	KKBF- 51	B5—12	4層	〃	25.2	14.7	2.7	11.1	9.7×2.8	↑	〃	
704	KKBF- 61	B2—15	3層	〃	25.1	(12)	3.5	(1.38)	7.2×4.1	↘	一部欠損	37
705	KKBF-238	B2—16	4層	〃	25.8	16	5.2	2.08	12.4×3.9	↓	完形	
706	2 S- 89	B6—11	3層	〃	23	15	5.5	1.77	8.1×4.4	↑	〃	
707	2 S- 91	B5—16	5層	〃	23.5	16	3.7	1.58	8.1×4.2	↑	〃	
708	2 S- 90	B6—10	2層	〃	26	23.5	3.7	2.19	7.3×3.5	↑	〃	
709	2 S-107	B6—14	3層	〃	26	17	3.7	1.70	7.2×2.9	↓	〃	
710	2 S-120	B6—12	〃	〃	31	19	5	(2.85)	5.8×3.5	↘	一部欠損	
711	2 S-121	B6—14	〃	〃	26.5	15	4.5	1.37	7.4×3.7	↓	完形	
712	2 S-123	B6—10	5層	〃	32	16.5	4.5	2.45	8.4×5.1	↓	〃	
.713	2 S-125	B6—10	〃	〃	(30)	16.5	4.5	(2.80)	8.6×4.6	↓	1/5 欠損	
714	2 S-124	4号住	フク土	〃	27	21.5	4	2.92	6.9×3.5	↖	完形	
715	2 S-131	B6—10	4層	〃	26	18	4.2	1.46	6.2×3.5	↘	〃	
716	2 S-129	B5—16	3層	〃	30	19	5.2	2.30	6.9×3.4		〃	
717	2 S-149	B6—13	4層	〃	50.5	17	5.5	4.3	8.1×5.2	↘	〃	
718	2 S-127	B6—10	5層	〃	44	19.5	5.5	3.38	7.6×4.8	↑	〃	
719	KKTM-294	B2—10	4層	〃	4.2	20.6	6	4.86	7.8×4.4	↙	〃	
720	1 S-382		3層	〃	44	25	5	6.3	8.9×4.4	↑	〃	



第76図　つまみ形石器実測図(11)　(3/5)

表25 つまみ形石器計測表 (11)　　(単位 mm・g)

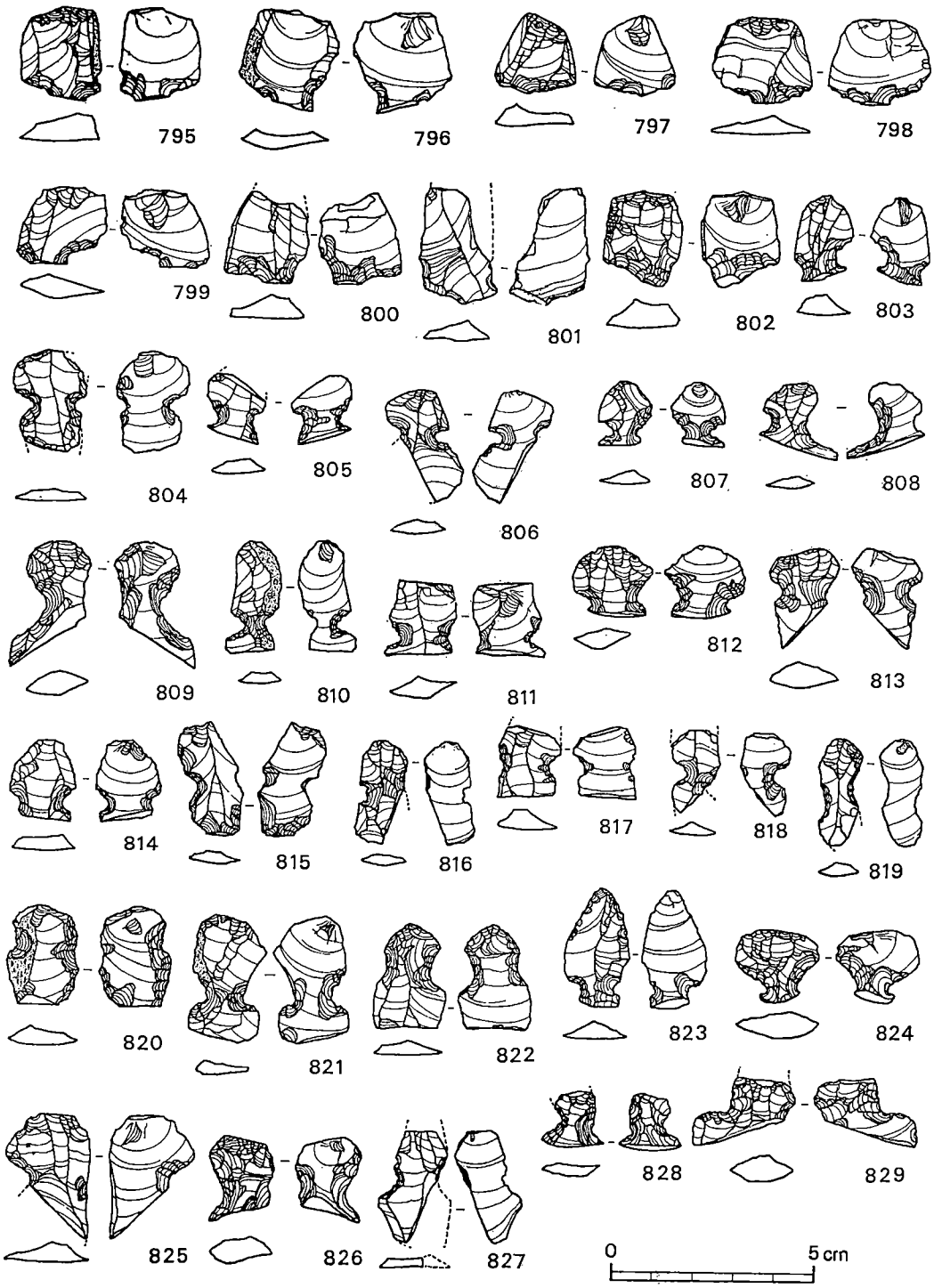
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
721	2 S-319	B5—15	3層	黒曜石	27	17.5	5.7	2.4	12.2×5.5	↓	完形	
722	2 S-326	B7	1層	〃	24.5	16	3	(1.2)	8.7×2.8	↙	ほぼ完形	
723	2 S-362	B5—12	3層	〃	28.5	16.5	4.5	1.6	8.2×3.8	↑	完形	
724	2 S-409	B6—16	〃	〃	25.5	15	3.2	1.2	4.0×2.9	↓	〃	
725	2 S-410	B6—16	〃	〃	28.5	17	4.7	2.2	11.3×3.7	↓	〃	
726	1 S-342	?	〃	〃	26.5	16	5	2.0	7.3×3.0	↑	〃	
727	1 S-443	A7・B7	1層	〃	28	16.5	4.5	(2.0)		↓	1/5 欠損	
728	KKTM- 77	B3—14	3層	〃	(11.8)	17.2	2.5	(0.48)	[6.6×2.0]	↑	1/3 欠損	
729	KKTM- 79	B3—13	〃	〃	(17.2)	14	4.5	(1.26)	10.2×4.1	↓	1/4 欠損	
730	KKTM- 98	B2—15	〃	〃	19.1	16.4	3.7	1.40	[5.7]×3.2	↑	完形	
731	KKTM-100	B1—16	1層	〃	(17)	(18.2)	3.2	(0.89)	5.6×3.4	↖	1/4 欠損	
732	KKTM-101	B3—13	3層	〃	19.5	16.1	3	0.79	7.2×2.8	↓	完形	
733	KKTM-144	B2—12	4層	〃	(19.7)	16	4	(1.17)	7.0×3.5	↑	1/3 欠損	
734	KKTM-149	B3—13	3層	〃	22.4	17.9	4.2	(1.58)	9.7×4.4	↑	ほぼ完形	
735	KKTM-165	B1—11	4層	〃	(13.4)	20	3.5	(1.01)	11.0×3.6	(↓)↓	1/2 欠損	
736	KKTM-177	B2—15	〃	〃	(14.4)	14.8	4	(0.83)	7.5×4.4	(↙)↑	1/3 欠損	
737	KKTM-209	B2—15	〃	〃	(18)	18	3	(0.93)	9.8×2.3	↑	一部欠損	
738	KKTM-225	B2—11	〃	〃	(12.4)	14	3.7	(0.81)	9.2×3.5	↓	1/4 欠損	37
739	KKTM-226	B4—15	3層	〃	(17.2)	18.4	4.5	(1.56)	[8.1]×3.6	↘	1/3 欠損	
740	KKTM-234	B2—11	〃	〃	(15.3)	(20.1)	4.7	(1.17)	9.5×4.1	↗	1/2 欠損	
741	KKTM-241	B4—16	〃	〃	20.6	13.4	2.7	0.87	5.1×3.4	↙	完形	
742	KKTM-247	B3—9	〃	〃	(18.8)	22.8	4	(1.45)	9.0×4.4	↖	ほぼ完形	
743	KKTM-295	B2—10	4層	〃	23.7	23.8	3.5	(2.22)	12.3×3.4	↓	〃	
744	KKTM-355	B2—16	3層	〃	(10)	14.3	3	(0.46)	9.7×2.4 [9.0×2.4]	↑	1/3 欠損	
745	KKTM-387	B5—9	〃	〃	(11.9)	18.8	3.7	(0.78)	6.4×3.0	↓	1/4 欠損	
746	KKBF- 53	B6—13	〃	〃	(16.8)	(18.5)	4	(1.35)	12.2×4.0	↑	〃	
747	KKBF-276	B3—15	〃	〃	17.1	16	4	(1.00)	[9.9]×[3.5]	↑	ほぼ完形	
748	BBBF-289	B3—10	〃	〃	(16.4)	14.3	4.5	(0.95)	[5.8]×4.0	↓	一部欠損	
749	KKBF-290	B2—15	〃	〃	19.2	(17)	4	(1.58)	8.1×3.8	↑	〃	
750		B6—11	5層	〃	(22.5)	21	3.2	(1.68)	8.6×3.8	↓	〃	
751	2 S- 78	B6—10	3層	〃	(18)	13.5	3	(0.70)	7.9×1.9	↑	1/4 欠損	
752	2 S- 80	B6—14	5層	〃	19	14	3.5	1.07	8.0×3.0	↑	完形	
753	2 S-227	B5—16	3層	〃	20.5	21.5	4	1.8	9.8×2.9	→	〃	
754	2 S-118	B6—15	〃	〃	(24.5)	18.5	4.5	(1.68)	4.9	↖	1/3 欠損	
755	2 S-504	B5	1層	〃	(15.5)	15	3	(0.8)	7.1×2.8	→	〃	
756	1 S- 4	?	3層	〃	(13)	13	4.5	(0.7)	5.9×3.9	↓	1/2 欠損	
757	1 S-447	A7・B7	1層	〃	(12.5)	20.5	5.5	(1.3)	8.9×5.1	↑	〃	
758	1 S-370		〃	〃	(23)	17.5	3.7	(2.0)	2.8×3.7	↓	1/3 欠損	



第77図　つまみ形石器実測図(12)　(3/5)

表26 つまみ形石器計測表 (12)　　(単位 mm・g)

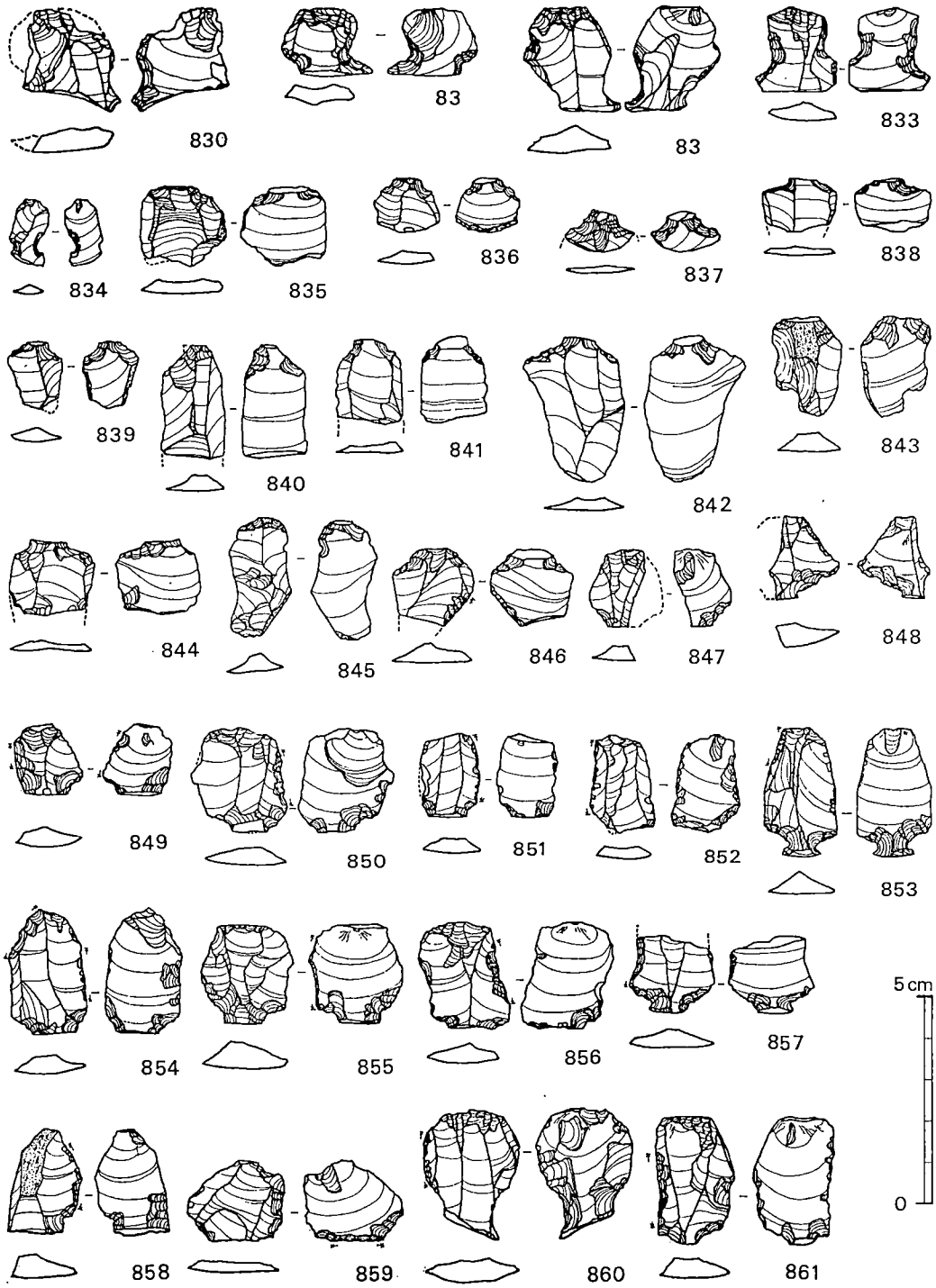
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a.×b	方向	備考	図版No.
759	KKTM- 76	B3—14	3層	黒曜石	14	15.7	3.5	0.74	8.0×3.1	↑	完形	
760	KKTM- 92	B3—14	〃	〃	(16.8)	19.4	5.2	(1.18)	(5.2)×3.2	↑	ほぼ完形	
761	KKTM- 99	B2—15	〃	〃	15	18.7	5.5	1.20	7.9×2.7	↙	完形	
762	KKTM-102	B2	表採	〃	13.8	17	3	0.80	7.4×3.1	↑	〃	
763	KKTM-120	B2—15	3層	〃	18	18	4.7	1.69	8.4×3.5	↓	〃	
764	KKTM-145	B2—12	4層	〃	14.6	22.4	2.5	1.00	12.5×2.0	↓	〃	
765	KKTM-152	B2—9	〃	〃	(20.4)	14.6	8	(1.68)	7.8×4.9	↑	1/4 完形	
766	KKTM-171	B2—15	〃	〃	20.7	19	4.5	1.89	8.6×3.3	↑	完形	
767	KKTM-208	B2—16	〃	〃	16.4	14.5	3.7	0.91	5.7×2.6	↑	〃	
768	KKTM-219	B2—11	〃	〃	16.9	15	4	1.13	4.7×3.5	↗	〃	
769	KKTM-194	B3—9	〃	〃	24.4	22.8	3	(2.00)	6.7×2.1	↑	ほぼ完形	
770	KKTM-212	B3—13	〃	〃	22.3	17.8	5.7	2.30	9.4×3.9	↓	完形	
771	KKTM-263	B3—14	3層	〃	(15)	19.5	4	(2.49)	9.7×4.2	↑	1/5 欠損	
772	KKTM-266	B2—11	4層	〃	26	21.4	4.5	2.75	9.3×4.7	↑	完形	37
773	KKTM-258	B2—9	3層	〃	28.4	19	4.5	2.59	6.1×4.4	↓	〃	
774	KKTM-250	B3—9	〃	〃	18.6	17.2	5	1.60	5.5×4.1	↑	〃	
775	KKTM-252	B3—13	〃	〃	20.3	18	5	1.72	7.8×3.8	↗	〃	
776	KKTM-255	B2—10	4層	〃	18.5	18.3	4.7	1.97	4.9×3.6	↖	〃	
777	KKTM-268	B1—12	〃	〃	14.3	17.4	3.5	0.86	7.4×2.6	↖	〃	
778	KKTM-270	B1—12	〃	〃	17.4	21.1	4.5	1.42	8.8×3.8	↑	〃	
779	KKTM-273	B1—12	〃	〃	23.1	28.4	4.5	2.69	7.8×4.3	↓	〃	
780	KKTM-277	B5—13	3層	〃	16.8	24.5	5	2.00	10.4×4.3	↓	〃	
781	KKTM-289	B2—10	〃	〃	16.7	20	4.5	1.33	9.0×4.6	↓	〃	
782	KKTM-297	B2—10	4層	〃	18	17.1	5.2	1.44	9.8×4.0 [7.9×4.0]	↑	〃	
783	KKTM-339	B1—12	3層	〃	19.4	17.4	4	1.31	6.2×3.4	↓	〃	
784	KKTM-341	B2—12	4層	〃	18	20.8	4	1.30	8.4×3.3	↓	〃	
785	KKTM-352	B2—14	〃	〃	18.3	17.8	5	1.91	10.2×3.3	↓	〃	
786	KKTM-361	B5—9		〃	22.7	18	4	1.72	7.2×4.3	↑	〃	
787	KKTM-368	B4—11	3層	〃	17.4	15	3.2	1.11	8.5×3.6 [7.7×3.6]	↑	〃	
788	KKTM-376	B4	2層	〃	17	15	4	0.97	6.5×3.0	↓	〃	
789	KKBF-184	B2—15	3層	〃	19.3	19.6	5	1.84	8.1×4.3	↓	〃	
790	KKBF-196	B1—16	5層	〃	19.8	19.2	3.5	1.99	14.1×3.7	↑	〃	
791	KKBF-284	B7・B8	表採	〃	(18.7)	16	4.2	(1.47)	8.0×3.9	↓	1/4 欠損	
792	KKBF-267	B1—15	3層	〃	21.5	(15.2)	3	(1.5)	(12.2)×3.5 (11.4)×3.6	↓	一部欠損	38
793	2 S- 65	3号住	床面下	〃	17	19.8	4.7	1.19	6.0×2.5	↓	完形	
794	2 S- 87	3号住	フク土	〃	19	18.5	4.7	1.60	11.6	←	〃	



第78図　つまみ形石器実測図(13)　(3/5)

表27 つまみ形石器計測表(13)　　(単位 mm・g)

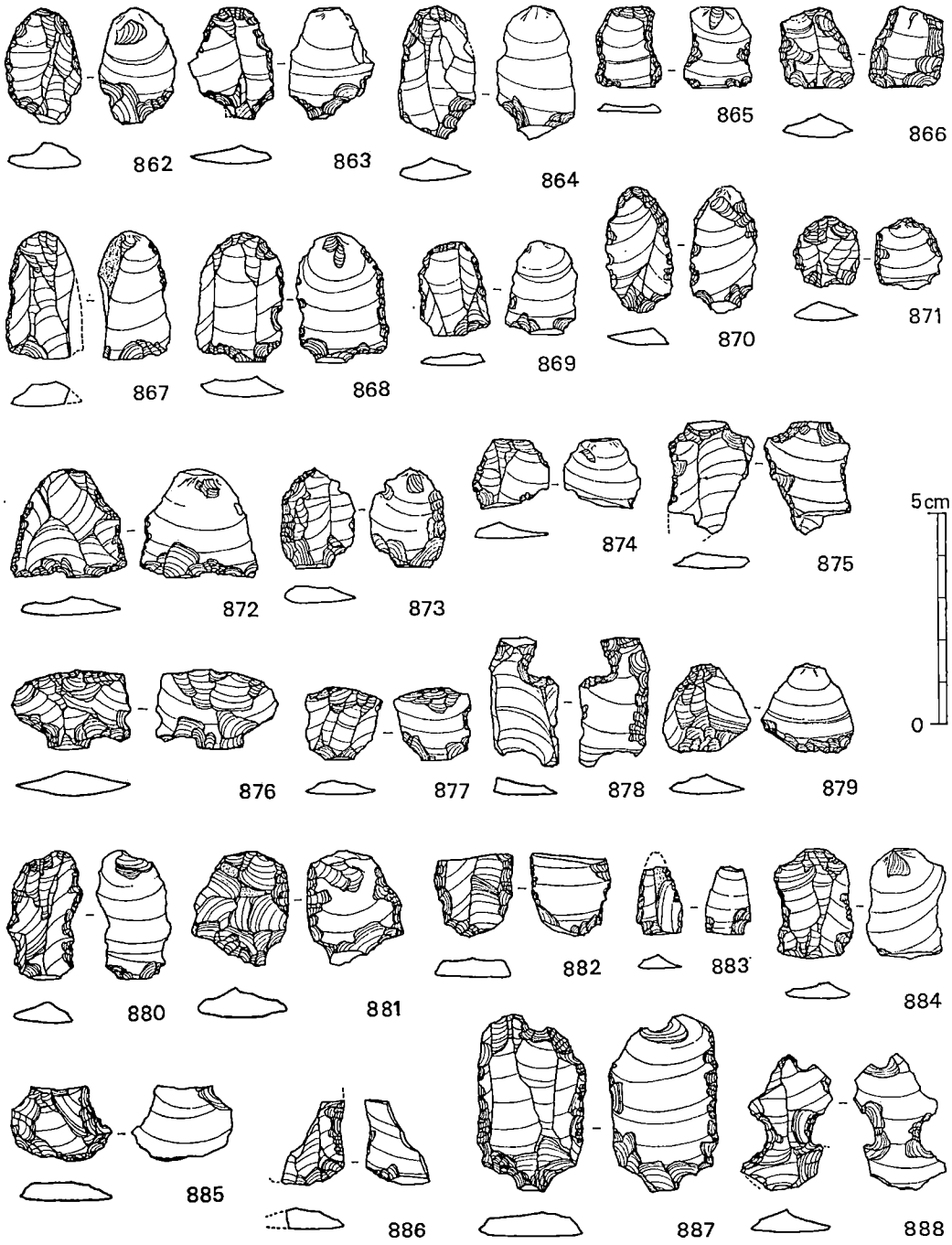
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
795	2 S-250	B6—14	3層	黒曜石	23	20	6.7	3.2	9.0×4.8	↑	完形	
796	2 S-445	B6—13	〃	〃	24	24.5	4.7	1.4	9.7×3.0	↓	〃	
797	2 S-521	B5—12	2層	〃	19.5	20	6	1.9	?×4.6	↓	〃	
798	1 S- 3	?	3層	〃	21	24.5	4.5	2.5	7.2×3.2	↓	〃	
799	1 S-127	?	〃	〃	19	22	6	2.1	8.7×3.8		〃	
800	1 S-211	?	〃	〃	(22)	20	6	(2.4)	6.8×5.2		1/4 欠損	
801	1 S-426	A5・溝	10層	〃	(28.5)	19.5	5	(2.1)	9.6×3.4	↓	〃	
802	1 S-427	A5・溝	11層	〃	22.5	19.9	7	31	6.8×5.8	↖	完形	
803	1 S-438	?	〃	〃	21	14.5	5.2	1.1	8.0×40	↑	〃	
804	KKTM- 40		表採	〃	24.7	(17.3)	3	(1.61)	?	↓	一部欠損	
805	KKTM-185	B2—16	4層	〃	(16.6)	13.8	3.5	(0.77)	[8.3] 12.7×3.0	↙	1/3 欠損	
806	KKTM-169	B2—10	〃	〃	27.1	18.9	3.5	(1.05)	[17.7×3.0]	↓	1/4 欠損	
807	KKTM-223	B2—11	〃	〃	15.6	12.0	3.5	0.67	5.8×3.0 [10.1×3.0]	↓	完形	
808	KKTM-243	B4—V字溝	6層	〃	18.5	18.8	3	0.79	18.8×3.0 [8.1×3.4]	↓	〃	
809	KKTM-265	B2—9	3層	〃	30.6	19.2	6	2.80	22.8 19.2×4.1 [9.3×4.4]	↖	〃	
810	KKTM-267	B1—12	4層	〃	27.2	13	3	1.04	10.5×2.6 [4.5×2.6]	↑	〃	38
811	KKTM-272	B1—12	〃	〃	18	17	5.5	1.60	6.0×4.4 [11.2×4.2]	↓	〃	
812	KKTM-292	B1—16	3層	〃	17	18.9	5	1.40	14.4×3.0 [10.8×3.2]	↑	〃	
813	KKTM-324	B2—15	4層	〃	23.8	16.6	6.5	1.78	(15.7×4.9) [10.0×5.8]	↑	〃	
814	KKTM-370	B4	2層	〃	19.6	15.8	4	1.42	12.7×3.0 [10.2×3.0]	↓	〃	
815	KKTM-353	B3	3層	〃	27.3	15.7	3.5	1.31	6.7×3.3	↓	〃	
816	KKBF- 73	B2—13	4層	〃	24.9	(12)	3	(0.85)	[7.0×2.4] (8.8×2.4)	(↑)	1/4 欠損	
817	KKBF-145	B2—10	〃	〃	(17.4)	15	5	(1.24)	[10.5×3.6] 13.0×3.9	(↑) ↓	〃	
818	KKBF-248	B1—12	3層	〃	(20.4)	11.7	3	(0.68)	[6.9×2.8]	↑	〃	
819	KKF- 59	B3—14	〃	〃	(26.1)	10	3.5	(0.85)	7.0×2.7		一部欠損	
820	KKF- 61	B5	1層	〃	24	17.3	5	2.50	10.0×2.8	↑	完形	
821	2 S- 62	B7—13	5層	〃	31	14	3.5	2.00	8.5×3.3		〃	
822	2 S- 66	B6	1層	〃	25	18	3.7	1.82	10.4×4.5		〃	
823	2 S- 99	2号住	フク土	〃	29	16	4.2	1.57	7.8×3.5		〃	
824	2 S- 95	B6—16	5層	〃	17.7	20	6.5	1.92	7.3×3.8	↓	〃	
825	2 S-249	B6—14	3層	〃	20		5.2	(2.5)	13.9×1.7		1/4 欠損	
826	2 S-252	B6—14	〃	〃		16	6.5	1.6	11.7×4.2	↙	完形	
827	2 S-416	B6—15	2層	〃	(26.8)	(16.8)	2	(0.8)	(9.7)×1.9		1/3 欠損	
828	2 S-115	B5—16	5層	〃	13.5	15	3	(0.59)	7.1×2.8	↓	一部欠損	
829	2 S-117	B6—10	3層	〃	16	25.5	6.5	(1.80)	12.9×6.8	↑	1/4 欠損	



第79図　つまみ形石器実測図(14)　(3/5)

表28 つ ま み 形 石 器 計 測 表 (14)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
830	2 S-288	B7	1層	黒曜石	24	(23.5)	5.5	(2.7)	20.3×4.5	↑	1/5 欠損	
831	2 S-486	B6	〃	〃	16	21.5	5	1.4	11.7×3.3	↑	完形	
832	1 S-125	B6—10		〃	25	23	6.5	3.1	11.2×5.2		〃	
833	1 S-130	?	3層	〃	20.5	19.5	4.5	1.8	12.2×4.2		〃	
834	KKTM-15	?	1層	〃	15.7	8.9	2	0.30	[5.3×2]	↘	〃	
835	KKTM-337	B2—9	3層	〃	18.8	20	3.5	(1.42)	9.7×3.0	↑	ほぼ完形	
836	KKTM-271	B1—12	4層	〃	17.8	15.5	3	0.60	6.7×3.5	↑	完形	
837	KKTM-309	B2—12	2層	〃	9.5	(16.4)	1.7	(0.34)	7.0×2.7	←	1/4 欠損	
838	KKTM-351	B2—13	3層	〃	(12.6)	17.4	2.5	(0.52)	6.8×2.2	↑(↑)	〃	
839	KKTM-375	B5	1層	〃	(15.6)	13	3	(0.68)	5.5×3.5	↓	一部欠損	
840	KKBF-266	B9—8	3層	〃	(27)	15	4	(2.02)	[3.7]×3.2	↓(↓)	1/4 欠損	
841	2 S-251	B6—14	〃	〃	(20.5)	16	2.5	(0.8)	7.9×2.7	↑	〃	
842	2 S-375	B5—12	〃	〃	34.5	25	3	2.3	7.9×3.2	↑	完形	
843	2 S-446	B6—13	〃	〃	23.5	17	4.7	1.8	8.9×4.1	↑	〃	38
844	2 3-502	B5	1層	〃	(18)	20.5	2.5	(1.0)	9.7×3.6	↓	1/4 欠損	
845	1 S-64	?	3層	〃	28.5	15.5	4.5	1.7	5.0×5.4	↓	完形	
846	1 S-429	B5溝	11層	〃	(19)	20	4.5	(1.3)	10.9×4.3	↓	1/5 欠損	
847	KKBF-109	B2—16	2層	〃	18.5	(13.3)	3.5	(1.10)	(4.5)×4.0	↑	1/3 欠損	
848	KKTM-335	B2	1層	〃	20	(16.6)	6	(1.40)	[5.7]×3.9	↓	〃	
849	KKTM-74	B2—15	3層	〃	17.2	16.3	5	1.51	9.5×(4.0)	↓	完形	
850	KKTM-122	B3—13	4層	〃	25.4	23	5	2.88	8.5×5.3	↑	〃	
851	KKTM-153	B1—16	3層	〃	20	14	3.5	1.58	9.5×3.7	↑	〃	
852	KKBF-186	B1—14	〃	〃	(23.6)	15.8	3.5	(1.49)	[7.2×1.7]	↓	ほぼ完形	
853	KKTM-154	B2—16	4層	〃	31.4	17.4	5.5	2.71	9.1×4.4	↑	完形	
854	KKTM-229	B3—9	3層	〃	30.2	18.7	4.5	2.97	10.0×4.3	→	〃	
855	KKTM-232	B2—15	4層	〃	23.9	21.8	6.5	3.56	9.1×4.2	↙	〃	
856	KKBF-76	B2—13	3層	〃	26	21.9	4.5	2.62	10.4×4.1	↓	〃	
857	KKTM-131	B2—11	4層	〃	18.4	20	4.5	(1.32)	(8.5)×3.6	↓	1/4 欠損	
858	KKBF-207	B2—15	〃	〃	25.4	17.3	6	2.07	12.9×4.1	↑	完形	
859	KKF-62	B4	2層	〃	19	23	2.5	1.45	12.1×2.4		〃	
860	2 S-287	B7	1層	〃	31	23.5	6.2	4.0	11.9×5.4	↗	〃	
861	1 S-401	A6溝	11層	〃	30.5	19.5	4.5	3.4	6.9×4.5	↑	〃	



第80図　つまみ形石器実測図(15)　(3/5)

表29　つまみ形石器計測表(15)　（単位 mm・g）

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	a × b	方向	備考	図版No.
862	KKTM- 71	B 3—10	3層	黒曜石	27	17.7	6	2.87	(7.4)×(4.3)	↓	完形	
863	KKTM-125	B 2—13	3層	〃	26	19.5	4.2	2.31	(5.1)× 4.0	↓	完形	
864	KKTM-166	B 2—10	4層	〃	31.5	18	5.5	3.22	9.5 × 5.4	↖	完形	
865	KKTM-182	B 2— 9	4層	〃	19.2	15.4	2.2	0.70	8.6 × 2.0	↓	完形	
866	KKTM-260	B 2— 9	3層	〃	18.4	16.8	5.5	1.84	8.8 × 4.5	↑	完形	
867	KKTM-274	B 1—12	4層	〃	30	(15.9)	6	(3.21)	(8.6)× 3.0	↓	1/5欠損	
868	KKTM-342	B 3—10	2層	〃	30	20.8	5	3.65	7.3 × 4.4	↓	完形	
869	KKTM-283	B 2—10	3層	〃	22.2	17	3	1.36	7.3 × 3.6	↓	完形	
870	KKTM-358	B 4	1層	〃	29.4	15.8	4.2	2.10	5.7 × 3.9	↓	完形	
871	KKTM-323	B 2—15	4層	〃	16.7	15.2	4.5	1.14	10.9 × 3.4	↓	完形	
872	KKTM-359	B 3—15	3層	〃	25.6	27	4.5	3.10	7.9 × 3.2	↑	完形	
873	KKTM-380	B 5	2層	〃	23.6	14.7	4	2.15	8.3 × 4.1	↑	完形	
874	KKBF-125	B 2—16	4層	〃	(16.6)	17.9	4	(0.65)	16.5 × 3.8	→	一部欠損	38
875	KKTM-184	B 3— 9	5層	〃	(26.3)	20	3.5	(2.07)	9.4 × 4.2	↑	1/5欠損	
876	KKTM- 66	B 3—14	3層	〃	18.8	27.8	6	2.71	10.0 × 5.1	↑	完形	
877	KKTM-135	B 2—10	4層	〃	17	17.8	3.2	1.15	6.9 × 3.2	↓	完形	
878	KKTM-179	B 2—12	5層	〃	30.2	15.6	4	(1.81)	8.6 × 5.5	↓	ほぼ完形	
879	K K F- 53	B 2—16	3層	〃	20.6	20.5	4.7	1.85	8.7 × 2.5	↑	完形	
880	K K S- 25	B 2—16	3層	〃	31	17	5	2.55	7.8 × 3.6	↓	完形	
881	K K S- 22	A 9	1層	〃	27.6	22.6	7	4.50	8.5 × 4.8	↗	完形	
882	K K S- 73	B 3—13	3層	〃	20	18	4.5	2.35	9.5 × 3.5	↑	完形	
883	K K F- 50	B 2—12	4層	〃	(16.2)	10.7	3.5	(0.65)	9.1 × 3.8	↓	一部欠損	
884	K K B- 70	B 3—14	4層	〃	(25.3)	(18.5)	3.7	(2.15)	13.2 × 3.0	↖	一部欠損	
885	K K S- 79	B 3—14	3層	〃	18	23.4	4.5	2.00	?	↓	完形	
886	K K S-115	B 2—16	4層	〃	(20)	(14.5)	5	(1.10)	(10.4)×4.3	↑	1/3欠損	
887	K K S-110	B 4—V字溝	5層	〃	41.8	25.6	6	7.80	(10.2 ×5.2)	↑	完形	
888	K K S- 38	B 2—16	3層	〃	(32.3)	(21.2)	5.5	(2.80)	(10.4 ×4.7)	—	一部欠損	

(7) 刃　器

縦長剝片の側辺に沿って使用によると考えられる刃こぼれ・擦痕などの使用痕および小さな調整剝離が局部的に認められるものを一括し，『刃器』として分類した。

縦長剝片のエッヂやそれに接する主要剝離面・背面に観察される磨痕・擦痕・刃こぼれ，さらに主要剝離面の方向から施されている，小さな調整剝離などがすべて人為的なものとして処理されることに問題の残ることは確かであろう。ここで刃器として取扱った資料にも使用痕あるいは調整痕と判断するのに迷うものが含まれている。また使用痕とすべきか調整痕とすべきかその認定に困難を伴うものも存在するのである。今後，何らかの方法で認定の一定の基準が

設けられる必要を痛感するのである。

図示した資料の石材は数点のサヌカイト質のものを除けば総て黒曜石が用いられている。しかも黒曜石の大半は断口や自然面の観察から伊万里市の腰岳産のものと考えられる。

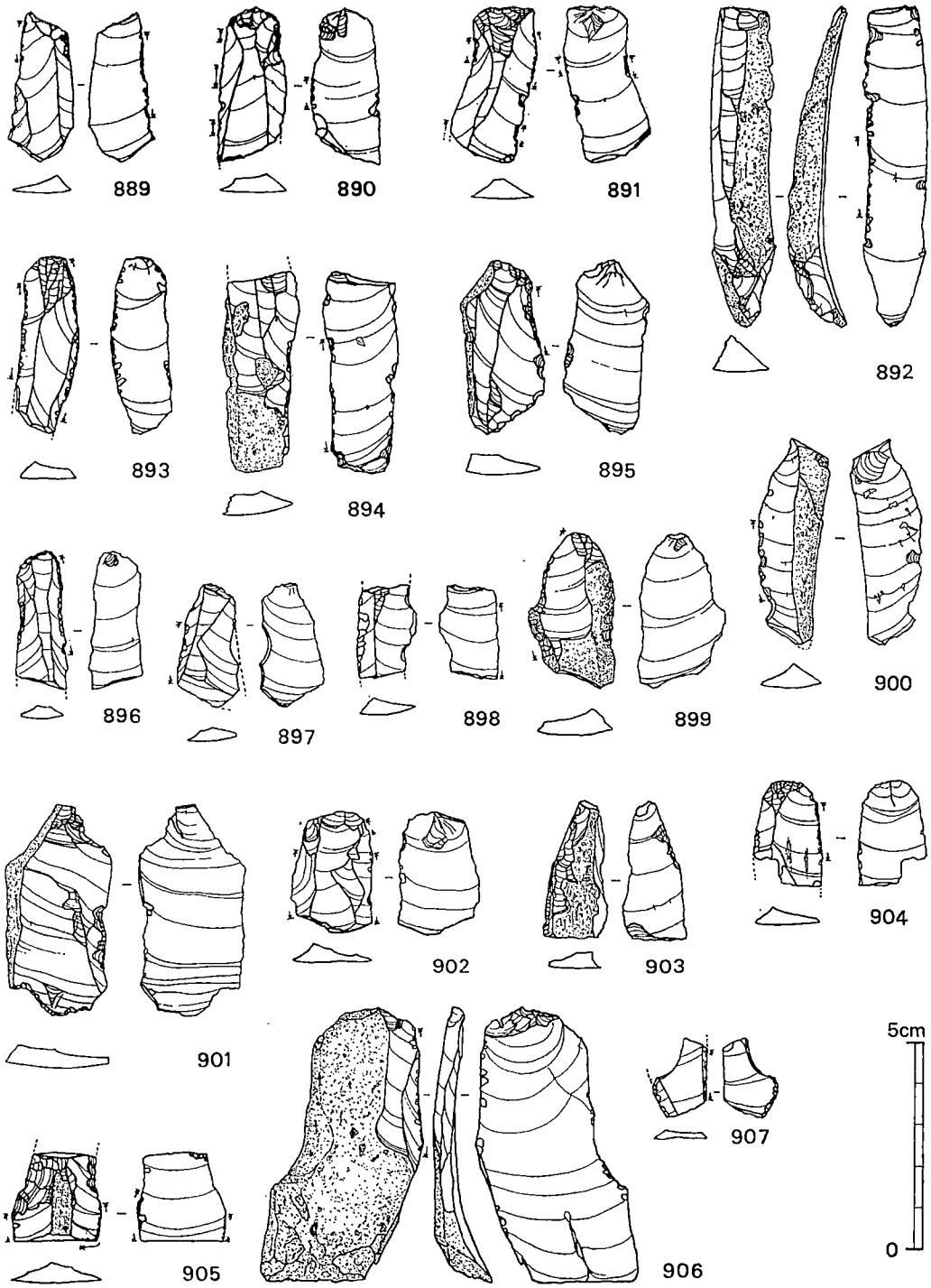
刃器として分類した石器は他の黒曜石製の剝片石器に比較して，素材となった縦長剝片の鋭利な側辺がほとんどそのままの状態で利用されている事を最大の特徴として指摘できるのである。これは素材が具備する鋭い刃部がcutting-toolとしての機能を充分果たすためであろう。一方縦長剝片の打面部あるいは末端部については整形の施されたと考えられるものが存在するが素材を大きく変化させるものは少なく，大勢としてはやはり素材の形が生かされている。

刃器の大きさは幅1.5〜2.0㎝，長さ4.0〜5.0㎝に集中する傾向が窺え，幅に対して長さが2倍以上ある全体的に縦に長い形状を有している。この石器の中で自然面が認められるものや不整形なものがかなりの数占めており，石核から剝離された幾分不揃いの縦長剝片も無駄なく利用されている事を知る事ができる。それと共に自然面の一部付着や，形状のある程度の違いがその機能・用途を果す上で特に支障のない使用が示唆されているように考えられる。

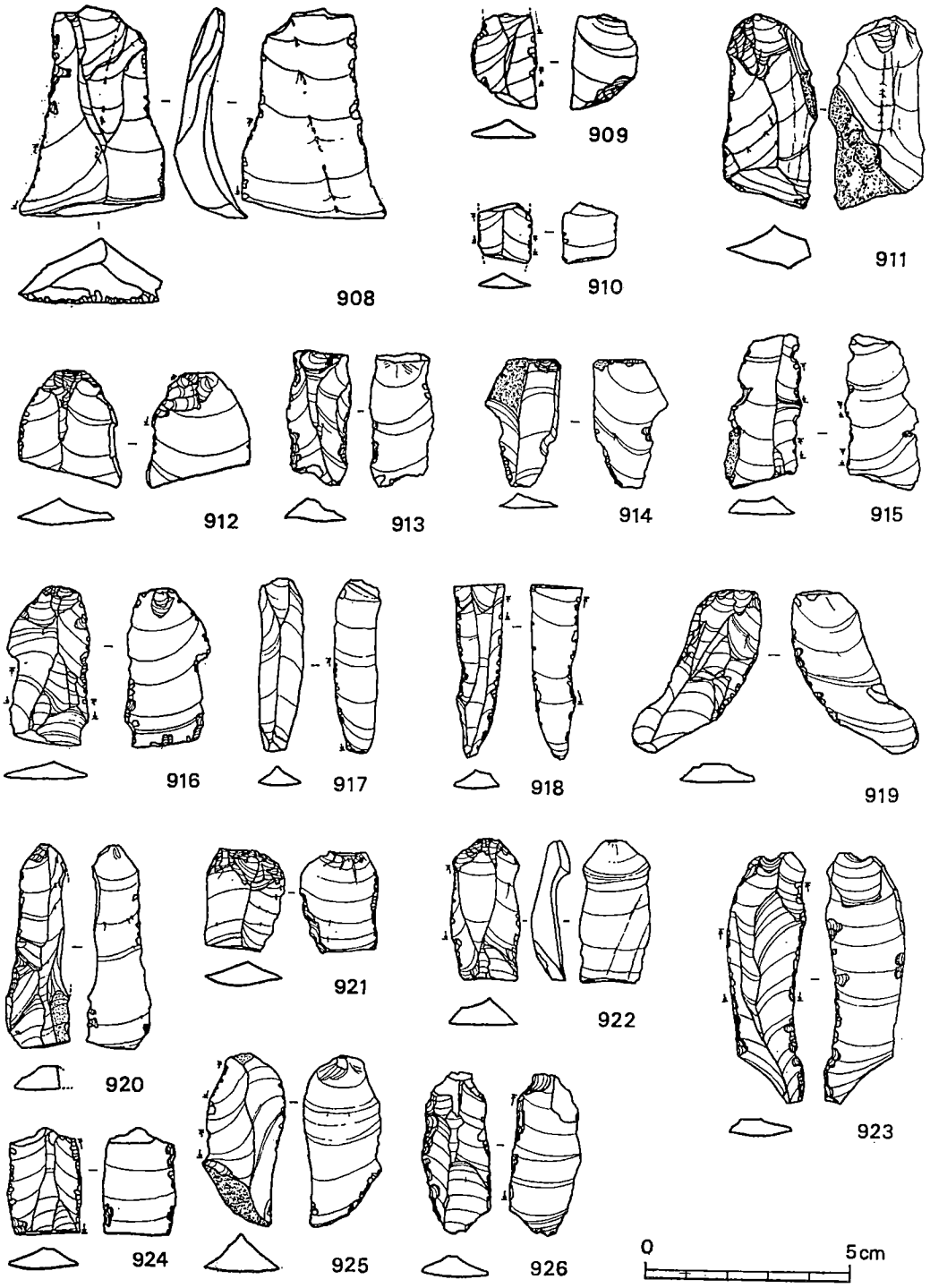
刃器の形状は縦に長いものを基本とするが，その大きさおよび形態から大きく三類に分けて考えることができよう。

Ⅰ類　全長がほぼ4.0㎝〜5.0㎝前後の縦長剝片をほとんどそのまま利用している一群である。この中でも5㎝を越す大形で細長いものや，4㎝前後のやや小形で幾分ずんぐりしたもの，さらに背面の一部に自然面や調整剝離面を有するものなどが認められる。また，Ⅰ類の刃器には打面から薄くなって尖り気味の末端まで認められる縦長剝片の形状がそのまま利用されているものが相当数存在し，これらは素材の縦長剝片が具備している鋭い側辺と共に尖り気味の先端を利器として用いる際に意図したと考えられ，同時に素材の大きさ（長さ）を最大限に活用する事も考慮されるであろう。一方，縦長剝片の打面ないし末端部のカットされている状態のものも存在しており形態の違いに興味がもたれるのである。

Ⅱ類　縦長剝片の両端ないし一端がカットされている2〜3㎝前後の長さを有するほぼ長方形をした特徴的な小形の剝片石器である。Ⅱ類の形態的特徴とも言うべき，短辺のカットが意図的なものか，あるいは使用ないしその他の原因による偶然的なものかという問題が当然提起され，その認定についての検討が具体的にされる必要があろう。縦長剝片のカットの状況については後でまとめて考察するが，他の剝片石器の認定や分類の一つの基準となるのでその要点のみをまとめて挙げておきたい。①カットされた面に調整痕や使用痕が明瞭に観察されるものが存在すること。②使用痕あるいは調整痕と考えられる痕跡の多くがカットされた面と接する側辺に認められないこと。③直線的でない不規則なカットの状態を示す資料が存在し，それらの側辺に使用痕や調整痕の痕跡を観察できるものが顕著に存在すること。④相当数の石器のカットされた断面に剝片のどちらか一方の面のほぼ中央近くに力の加わったリングの状態が観



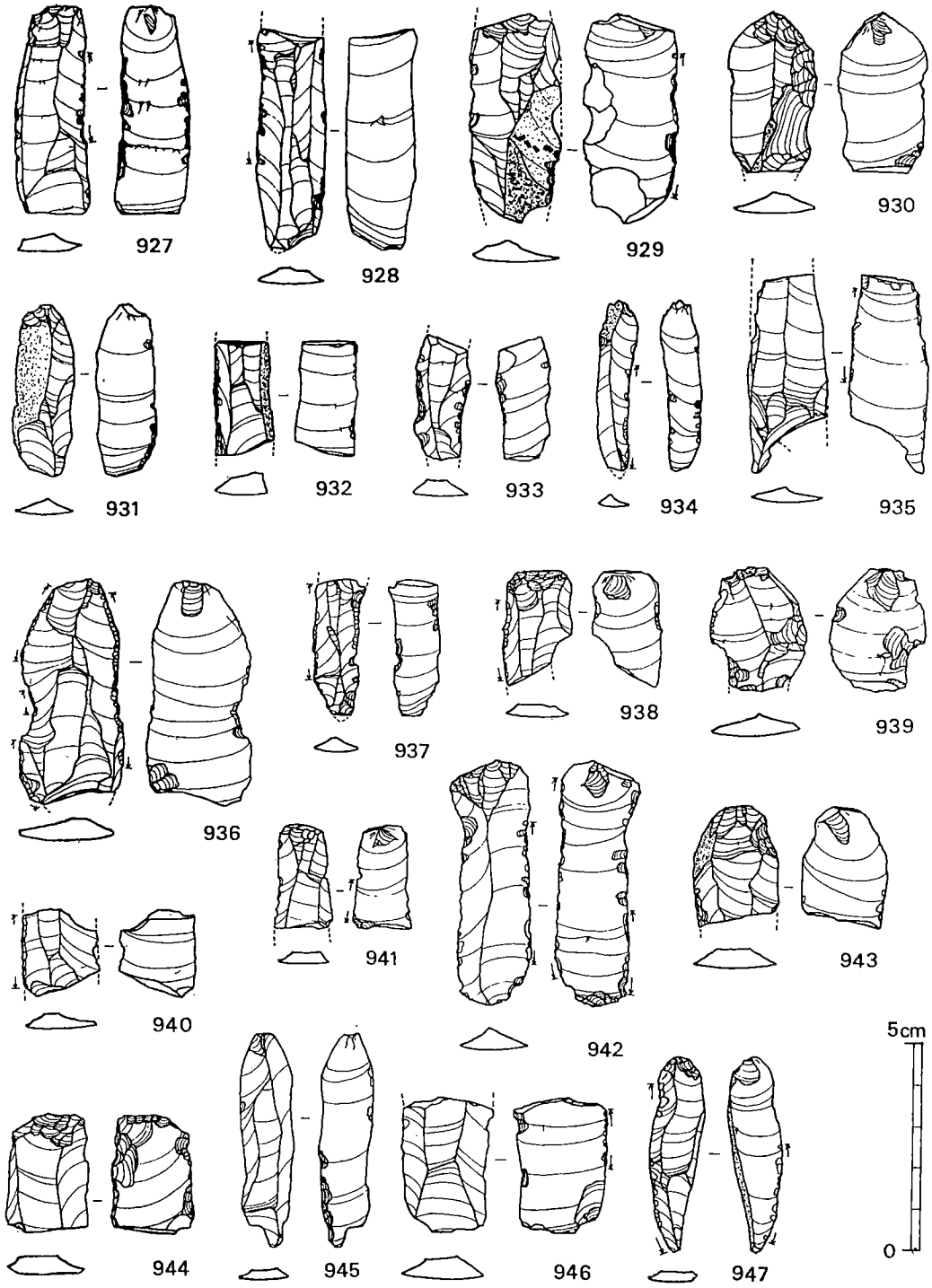
第81図　刃器実測図 (1) (3/5)



第82図　刃器実測図 (2) (3/5)

表30　刃器計測表 (1)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	方向	備考		図版No.
889	2次B- 2	B6—9	3層	黒曜石	35.1	15.7	4.0	1.7		Ⅰ類	完形	
890	2次S-145	B5—11	2層	〃	37.0	16.0	4.4	2.8		〃	完形	
891	2次S-151	4号住	フク土	〃	37.0	20.0	4.8	3.0		〃	完形	
892	2次S-152	B6—10	5層	〃	76.0	15.0	8.4	8.3		〃	完形	
893	2次S-142	B6—10	5層	〃	41.4	14.2	4.2	2.5		〃	完形	
894	KKB- 28	B2—16	4層	サヌカイト	(47.8)	17.7	5.1	(6.39)		〃	先端	
895	KKB- 26	B2—11	4層	黒曜石	41	20	4.2	4.47		〃	完形	
896	KKB- 34	B3—14	3層	〃	(32.6)	12.2	3.2	(1.45)		Ⅱ類	先端	
897	KKB- 44	B5	1層	〃	(28.6)	(14.8)	3.1	(1.25)	↑	Ⅰ類	一部欠損	
898	KKB- 56	B2—15	4層	〃	22.2	12.7	4.1	1.27	↓	Ⅱ類	完形	
899	KKB- 49	B3—10	3層	〃	36.6	20.4	6	3.90		Ⅰ類	完形	
900	KKB- 33	B2—9	4層	〃	48.3	16.3	5.9	(4.25)		〃	先端	
901	2次S-394	B7—9	3層	〃	50.3	25.1	5	7.0		〃	完形	
902	2次S-268	B6—14	3層	〃	28.2	19.9	4.9	2.3		〃	完形	
903	2次S-176	2号住	フク土	〃	32.4	15.9	4.2	2.0		〃	完形	
904	1次S-190		3層	〃	24.6	16.7	3.9	1.4		〃	完形	
905	1次S-192		3層	〃	21.3	21.6	5.0	(2.1)		Ⅱ類	先端	
906	1次S-240		3層	〃	65.5	38.8		14.3		Ⅰ類	完形	
907	1次S-259		3層	〃	17.8	33	5.8	0.4		不明	完形	39
908	1次S-358		3層	〃	49.8	35.4	15.6	12.2		Ⅰ類	完形	
909	1次S-305		3層	〃	22.3	16.2	4	1.4		Ⅱ類	完形	
910	1次S-380			〃	14.3	13.8	3.5	0.6		〃	完形	
911	1次S-416			〃	46.7	23.1	10.6	10.6		Ⅰ類	完形	
912	1次S-425		9層	〃	27.5	25.3	6.7	3.6		〃	完形	
913	1次S-461			〃	32.1	15.6	5.6	2.4		〃	完形	
914	2次S-136	4号住	フク土	〃	30.9	18.1	3.6	2.0		〃	完形	
915	2次S-140	3号住	フク土	〃	36.6	17.9	4.4	2.5		〃	完形	
916	2次S-144	B6—11	5層	〃	37.8	20.1	4.4	3.3		〃	完形	
917	2次S-148	B6—9	5層	〃	41.2	11.4	4.5	1.6		〃	完形	
918	2次S-154	B6—11	5層	〃	41.7	12.1	4.7	2.0		〃	完形	
919	2次S-379	B5—12	3層	〃	38.4	30.2	4.5	3.8		〃	完形	
920	2次S-395	B7—9	3層	〃	49.6	15.4	5.9	3.8		〃	完形	
921	2次S-411	B6—16	3層	〃	24.3	18	5.6	2.8		〃	完形	
922	2次S-447	B6—13	3層	〃	34.6	17	6.5	3.5		〃	完形	
923	KKS-121	B2—15	3層	〃	(60.7)	18	4	(5.10)		〃	ほぼ完形	
924	KKS- 76	B2—11	4層	〃	26	17.4	4.1	2.60		Ⅱ類	完形	
925	2次S-527	B6—12	3層	〃	41.0	19.4	9.1	4.6		〃	完形	
926	KKS-136	B10		〃	38.6	17.1	5	2.95		Ⅰ類	完形	



第83図　刃器実測図 (3) (3/5)

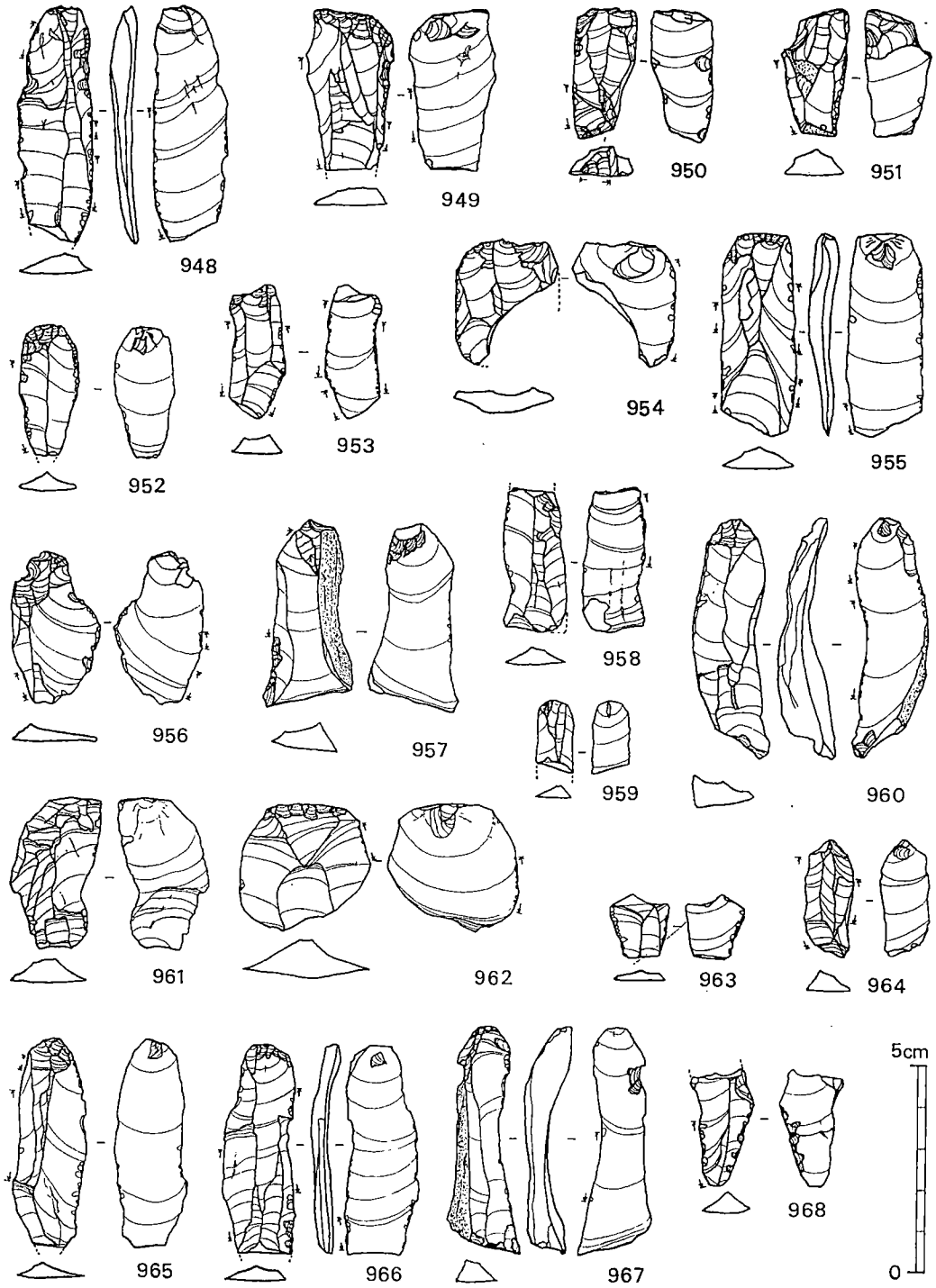
表31　刃器計測表 (2)　（単位 mm・g）

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	方向	備考		図版No.
927	KKB-20	B3—13	4層	黒曜石	49.4	18	4.6	4.48		Ⅰ類	完形	
928	KKB-25	B2—11	4層	〃	(52.9)	16.5	4	(4.04)		〃	先端	
929	KKB-27	B2—10	4層	〃	(49.6)	21.9	5.1	(6.16)	↑	〃	先端	
930	KKB-31	B3—13	4層	〃	(38)	20.8	5.1	(4.38)	↑	〃	先端	
931	KKB-30	B1	表採	〃	41	14.1	4	2.36		〃	完形	
932	KKB-32	B3—13	3層	〃	(27)	14.8	5.2	(2.08)		Ⅱ類	先端	
933	KKB-35	B2—14	4層	〃	(29.8)	13	3.9	(1.70)	↑	〃	先端	
934	KKB-42	B3—12	3層	〃	(40.6)	8.9	3	(1.05)		Ⅰ類	先端	
935	KKB-37	B2—15	4層	〃	(47)	(18.9)	3.9	(3.15)	{↓↑}	〃	先端	
936	KKB-41	B2—15	4層	〃	(53.9)	25.1	4.2	(7.20)	↑	〃	先端	
937	KKB-46	B3—9	3層	〃	(32.3)	(12)	3.3	(1.40)		Ⅱ類	先端	39
938	KKB-58	B3—13	3層	〃	(27.9)	16.2	2.8	(3.10)		Ⅰ類	先端	
939	KKB-60	B2—11	4層	〃	27.5	10.9×4.8 22.7	6	(84.05)	↑	〃	一部欠損	
940	KKB-51	B2—16	4層	〃	(20.8)	18.2	3.9	(1.95)	{↑↓}	Ⅱ類	胴部	
941	KKB-67	B2—10	3層	〃	(25.4)	(14)	2.9	(1.50)	↑	〃	先端	
942	KKB-75	B5—10		〃	59.5	19	5.4	6.30		Ⅰ類	完形	
943	KKB-84	B2—16	3層	〃	(30)	20.6	4.9	(3.60)	↑	〃	先端	
944	KKB-91	B4	2層	〃	28.5	19.7	4.6	2.85	↑	サイドブレイド	完形	
945	KKB-89	B5—14		〃	50.8	12.8	2.8	2.50		Ⅰ類	完形	
946	KKB-94	B5	2層	〃	(32.2)	(21.5)	5.6	(4.05)		〃	基部	
947	KKB-92	B5	1層	〃	46.7	12.9	2.5	1.80		〃	完形	

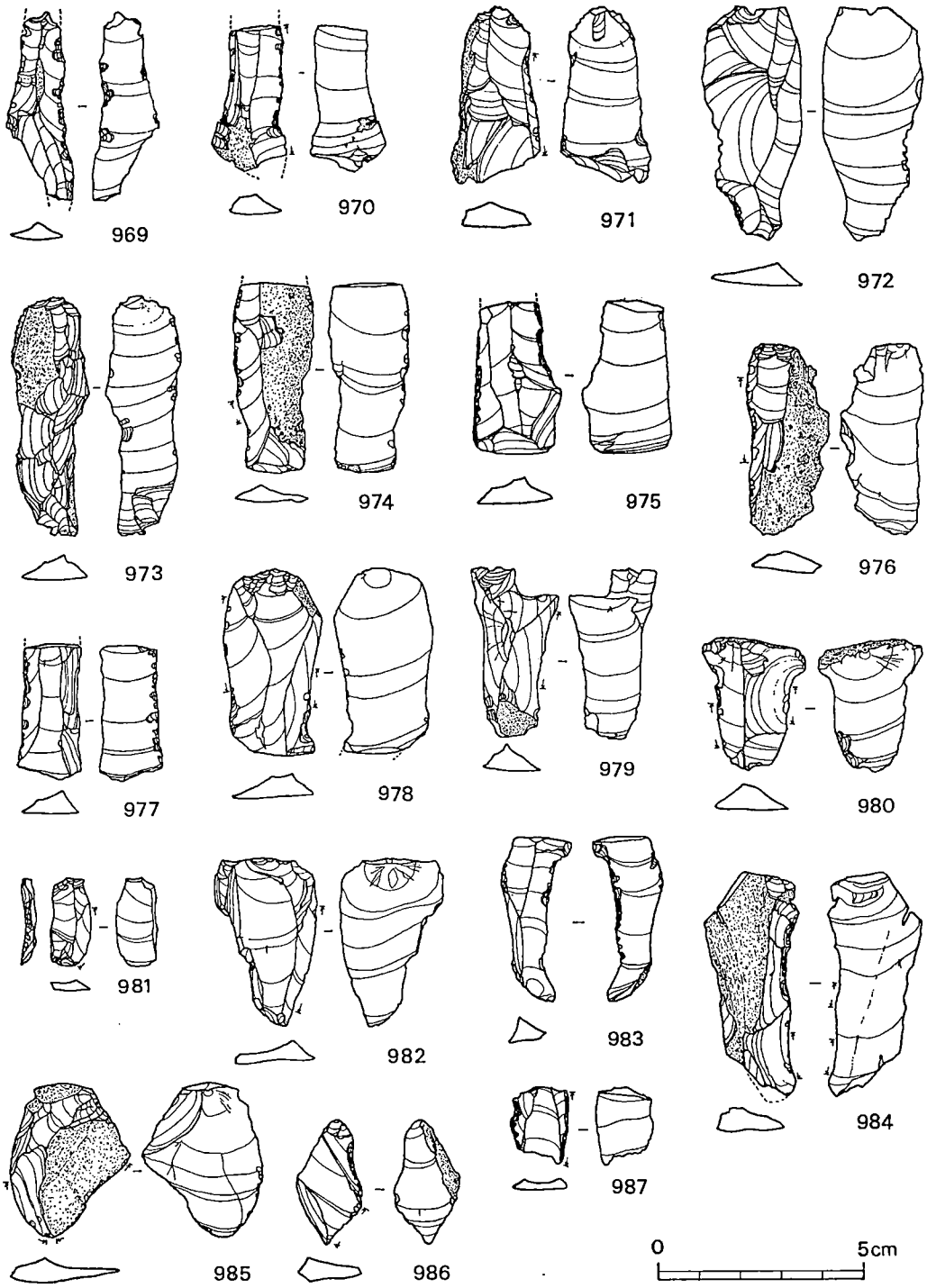
察されること。⑤台形状石器やサイドブレードと分類した石器の中にもカットされたものが多数存在し，しかも大きさ（長さ）に斉一性が認められること。⑥カットされた断面と剝片の面が接する個所に加撃痕と考えられる痕跡の認められる資料が存在すること。⑦加撃痕が移動したと判断される擦痕が観察されるものがあること。以上の理由から意図的なある目的をもったカットすなわち『折断』による縦長剝片の整形方法の存存を考えるのである。それでいて，なおかつ意図的なカットか，それとも他の原因によるものなのかを速断し難い資料の存在することも否定できないのである。

Ⅲ類　全般的に小さな不定形な剝片を素材に用いている為，方形・三角形・台形等バラエティに富んでおり，一部に自然面を残す例が多い。Ⅰ・Ⅱ類が刃器あるいは他の剝片石器の素材を意図した目的的剝片が使用されているのに対し，Ⅲ類の場合は必ずしもその様に看取されないのである。当遺跡において特徴的な縦長剝片を素材とした刃器の範疇から除外して取扱うべきものと考えられよう。

使用痕・調整痕の認定については問題の残る事を前に触れたが，当遺跡出土の刃器に観察される使用痕・調整痕の在り方から一応の分類を試みることにしたい。



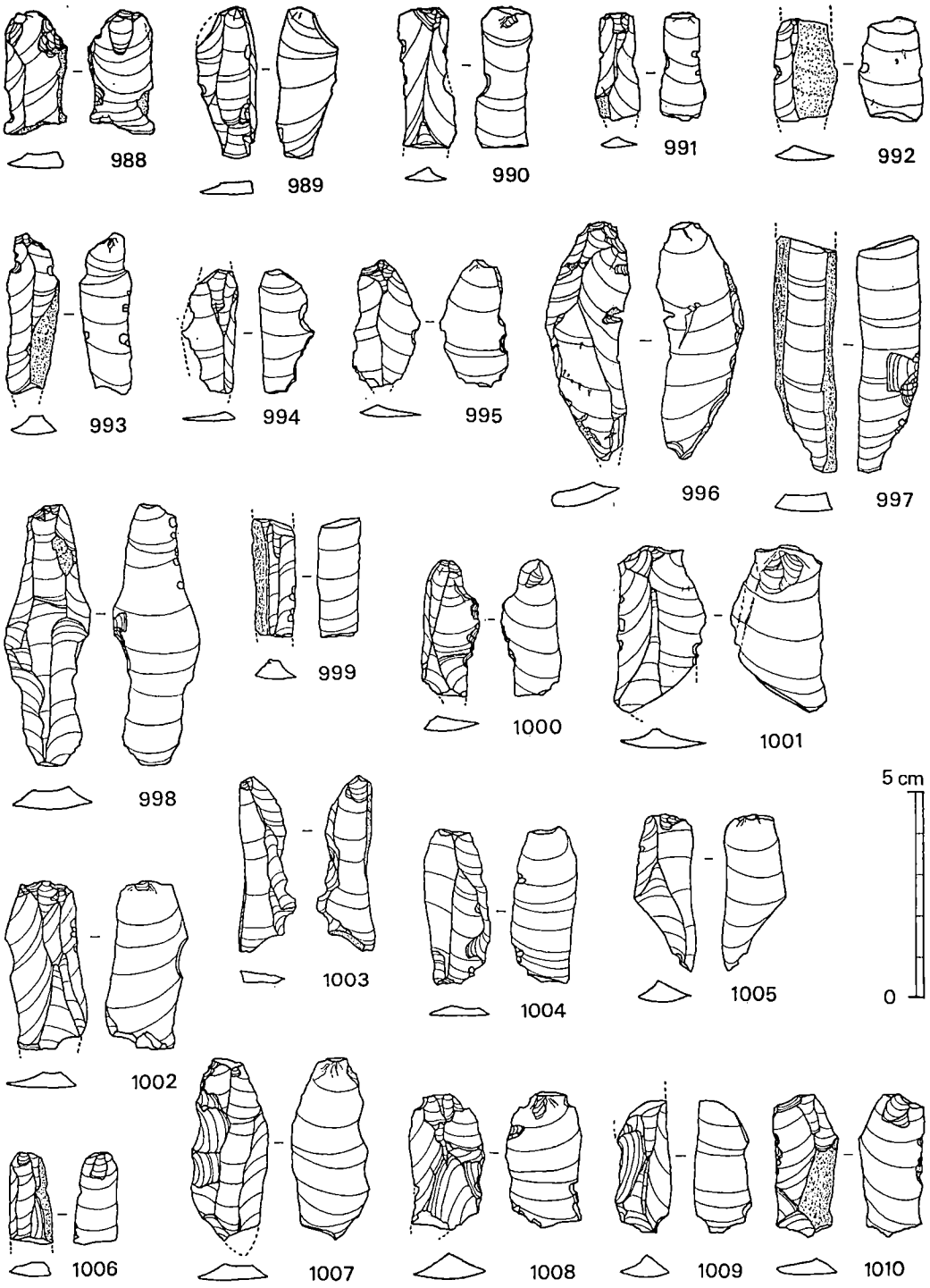
第84図　刃器実測図 (4) (3/5)



第85図　刃器実測図 (5) (3/5)

表32　刃器計測表 (3)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	方向	備考		図版No.
948	1次S-173		3層	黒曜石	(56.0)	18.3	4.8	(5.3)		Ⅰ類	先端	
949	1次S-176		3層	〃	(38.0)	20.8	4.3	(3.8)		〃	先端	
950	1次S-182		3層	〃	31.7	14.8	7.2	2.5		〃	完形	
951	1次S-183		3層	〃	29.8	16.0	6.2	2.8		〃	完形	
952	1次S-184		3層	〃	31.1	14.5	4.5	1.9		〃	完形	
953	1次S-186		3層	〃	31.8	13.8	4.5	1.9		〃	完形	39
954	1次S-243		3層	〃	29.4	24.5	6.0	2.6		〃	完形	
955	1次S-241		3層	〃	47.9	18.4	5.2	4.5		〃	完形	
956	1次S-249		3層	〃	36.2	21.7	4.0	2.2		〃	完形	
957	1次S-296		3層	〃	44.9	21.8	6.7	5.9		〃	完形	
958	1次S-297		3層	〃	(34.0)	14.9	4.2	(2.1)		Ⅱ類	先端	
959	1次S-260		3層	〃	17.1	9.2	3.0	0.5		〃	完形	
960	1次S-298		3層	〃	56.9	19.6	8.1	8.1		Ⅰ類	完形	
961	1次S-300		3層	〃	36.0	21.6	5.8	4.2		〃	完形	
962	1次S-329		3層	〃	30.4	31.2	9.2	7.0		Ⅱ類	完形	
963	1次S-434		11層	〃	15.2	14.3	3.8	0.5		〃	完形	
964	1次S-334		3層	〃	28.0	11.6	4.8	1.6		Ⅰ類	完形	
965	1次S-368		3層	〃	(49.3)	17.7	3.8	(2.8)		〃	先端	
966	1次S-371		1層	〃	(49.4)	18.3	3.5	(3.6)		〃	先端	
967	1次S-359		3層	〃	53.9	17.5	6.4	4.7		〃	完形	
968	1次S-376			〃	(27.3)	15.0	4.9	(1.4)		〃	基部	
969	KKB- 66	B4—13	3層	〃	(44.9)	16.2	4	(2.05)		〃	先端	
970	KKB- 86	B3—13・14	4層	〃	(35.1)	17.9	4.9	(3.50)	↓	〃	先端	
971	KKB- 95	B6— 9	2層	〃	42.4	19.7	6	5.4		〃	完形	
972	KKB- 96	B6—12		〃	55.8	21.4	5.5	6.5		〃	完形	
973	KKB- 97	B6—10	3層	〃	57.3	17.7	5.9	5.8		〃	完形	
974	1次S-174		3層	〃	45.2	19.2	4.0	3.6		〃	完形	40
975	1次S-177		3層	〃	31.1	21.5	6.2	4.6		〃	完形	
976	1次S-175		3層	〃	45.1	20.0	5.1	4.3		〃	完形	
977	1次S-180		3層	〃	32.4	15.6	5.4	2.6		Ⅱ類	完形	
978	1次S-242		3層	〃	44.2	23.5	5.5	6.4		Ⅰ類	完形	
979	1次S-244		3層	〃	40.1	21.0	6.5	4.3		Ⅲ類	完形	
980	1次S-245		3層	〃	31.4	24.8	6.2	4.7		〃	完形	
981	1次S-257		3層	〃	20.5	9.7	3.8	0.7		Ⅰ類	完形	
982	1次S-407			〃	40.0	24.8	5.8	3.5		〃	完形	
983	1次S-435			〃	39.3	16.5	5.9	2.2		〃	完形	
984	1次S-479			〃	53.1	23.7	5.6	7.1		〃	完形	
985	1次S-360		3層	〃	36.6	29.1	6.2	6.7		Ⅲ類	完形	
986	1次S- 45		3層	〃	29.6	16	64.5	1.6		〃	完形	
987	1次S-364		3層	〃	18.3	13.5	2.5	0.7		〃	完形	

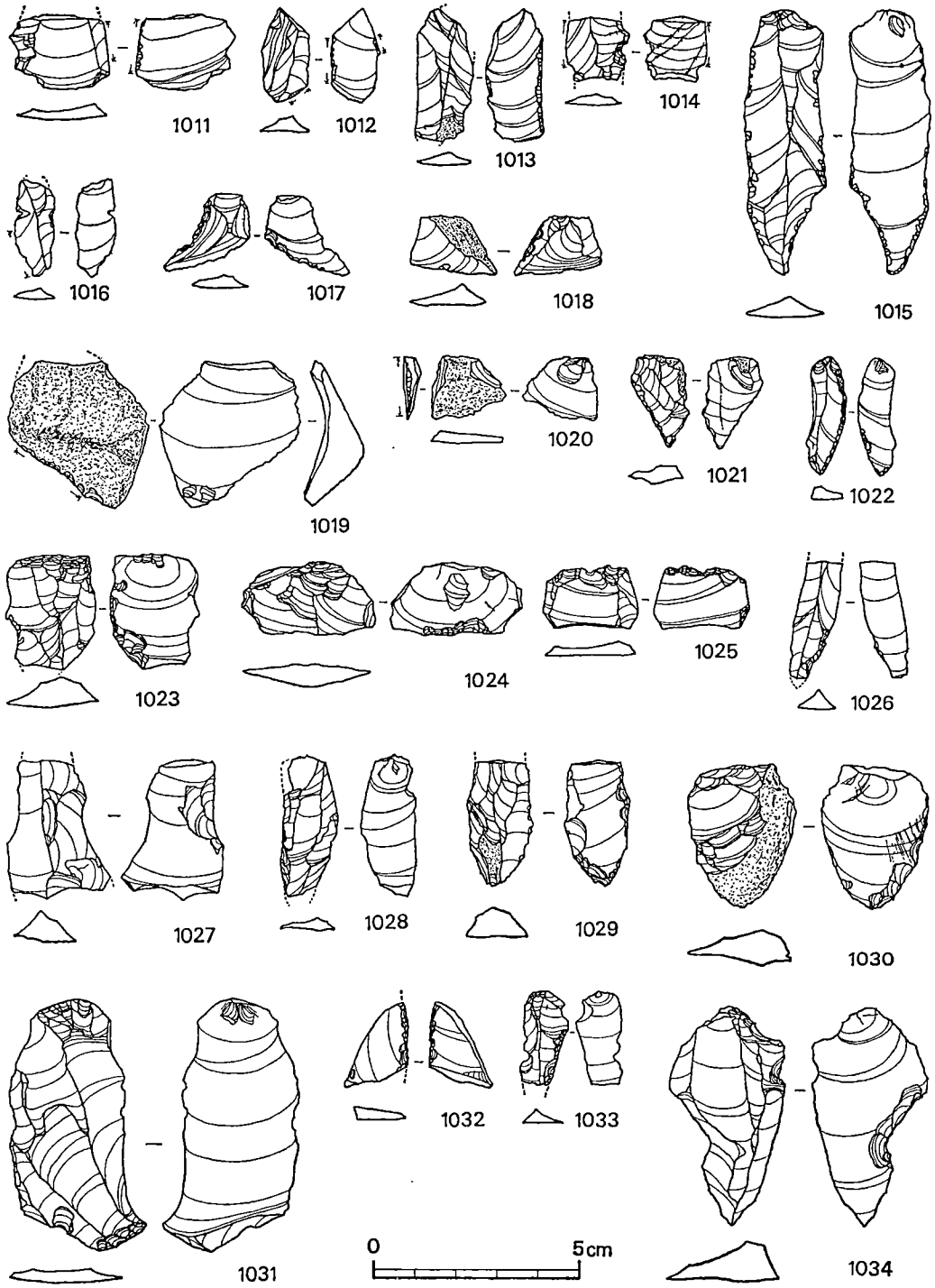


第86図　刃器実測図 (6) (3/5)

表33　刃器計測表(4)　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	方向	備考		図版No.
988	KKB-40	B2—9	4層	黒曜石	29.4	14.7	3.7	2.15		Ⅰ類	完形	
989	KKB-45	B3—9	3層	〃	(35.9)	14	4.1	(1.90)		〃	一部欠損	
990	KKB-50	B3—10	3層	〃	(33.2)	14	3.4	(1.70)	↓	〃	先端	
991	KKB-52	B2—16	4層	〃	(25.3)	10.5	2.4	(0.70)	↘	〃	先端	
992	KKB-68	B1—16	3層	〃	(24.6)	15	3.1	(1.30)	↓	Ⅱ類	胴	
993	KKB-77	B1—16	3層	〃	(38.4)	12.3	4.3	(1.85)	↑	Ⅰ類	先端	
994	KKB-69	B2—10	4層	〃	(29)	(12.7)	2	(0.75)		〃	先端 胴	
995	KKB-79	B2—12	4層	〃	(30.5)	15.9	2.9	(1.40)		〃	先端	
996	KKB-76	B5—10		〃	(56.7)	20.3	4.5	(5.30)		〃	先端	
997	KKB-100	B7—13	5層	〃	(53.3)	14.5	4.1	(4.6)		〃	先端	
998	KKB-48	B3—10	3層	〃	62	20	5.2	6.05		〃	完形	
999	KKB-72	B2—12	4層	〃	(28)	10.2	4.9	(1.75)	↑	Ⅱ類	胴・	40
1000	KKB-80	B3—13	4層	〃	32.5	13.7	3.7	1.55		Ⅰ類	完形	
1001	KKB-90	B5—14		〃	(39.5)	22	4.4	(2.10)		〃	1/5欠損	
1002	KKB-93	B5	2層	〃	(40.6)	19.8	3.9	(3.15)		〃	一部欠損	
1003	KKB-98	B6—15	5層	〃	42.2	11.3	3	(2.70)		〃	完形	
1004	KKB-99	B5—11	5層	〃	36.9	14.7	2.5	1.9		〃	完形	
1005	KKB-38	B2—15	4層	〃	37.5	14.9	4.9	1.70		〃	完形	
1006	KKB-74	B1—11	4層	〃	(21.7)	10.6	3.1	(0.90)		Ⅱ類	先端	
1007	KKB-47	B3—10	3層	〃	(43.4)	18.1	4	(3.25)	↓	Ⅰ類	先端	
1008	KKB-61	B2—16	4層	〃	(32.2)	17.8	6.1	(2.80)		〃	先端	
1009	KKB-81	B2	1層	〃	(31.2)	13.2	5.3	(1.85)		〃	胴	
1010	KKB-39	B3—13	3層	サヌカイト	34	14.9	3.8	2.30		〃	完形	

刃器として把握した石器の半数近くは，縦長剝片の側近に二次調整の小さなリタッチが施されずに，側辺がそのまま刃部として使用されており，その痕跡として刃こぼれ・擦痕・磨痕などが認められる。残りの約半数には側辺に沿って主要剝離面側からの調整による小さな剝離面が側辺のどこかに施されている。この調整痕が認められるものについては，以下の三通りに細別されるであろう。調整が施された個所以外のエッヂに使用痕の観察されるもの，調整痕の部位にも使用によると思考される痕跡の認められるもの。この両者の占める比率については極めて大まかな傾向であるが，ほぼ同数を示している。調整痕は観察されるものの使用痕が全く認められないものが極く僅か存在する。結局，側近のエッヂに施されている調整は刃部の補強を意図するものと，使用する際の保持を容易にするための目的とが推察されるのである。しかもその両者の割合いがほぼ等しい傾向が予想されるのである。



第87図　刃器実測図 (7) (3/5)

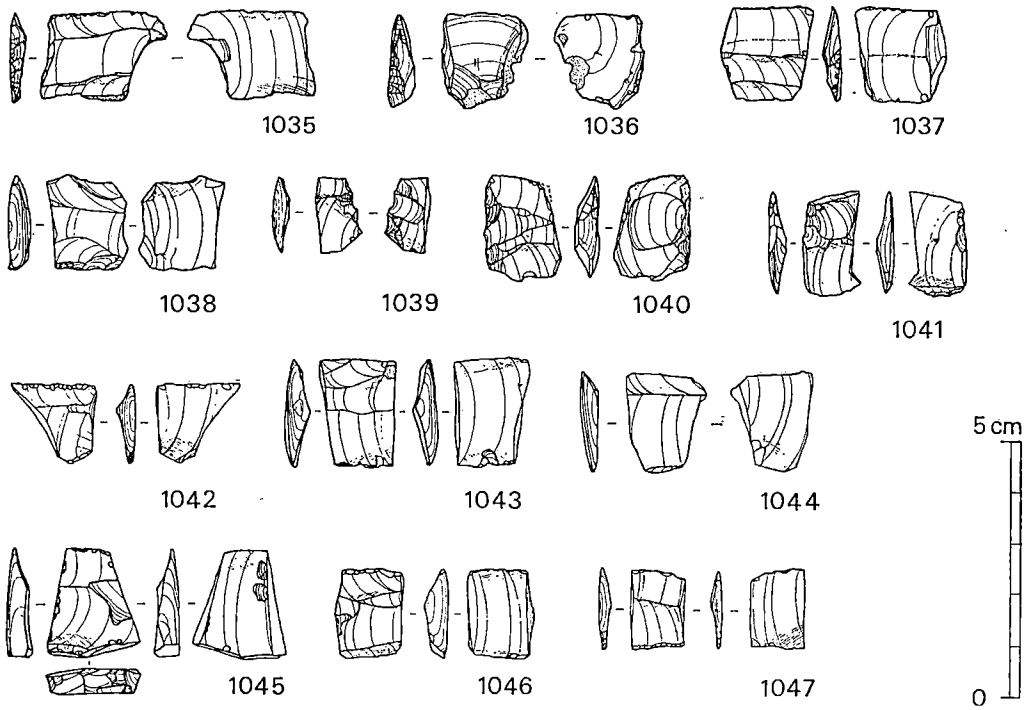
表34　刃器計測表 (5)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考	図版No.
1011	1次 S-40		3層	黒曜石	(22.85)	24.8	4	(1.5)	Ⅱ類	
1012	1次 S-85		3層	〃	(21.9)	(11.4)	4.4	(0.8)	Ⅲ類	
1013	1次 S-139		3層	〃	(31.3)	(14.8)	4.3	(1.3)	Ⅰ類	
1014	1次 S-219		3層	〃	(14.4)	(15.4)	3.8	(0.65)	Ⅱ類	
1015	1次 S-276		3層	〃	62.6	19.8	5.3	5.1	Ⅰ類	
1016	1次 S-339		3層	〃	(23)	9.1	2.5	(0.4)	Ⅲ類	
1017	1次 S-366		3層	サヌカイト	21.9	20.3	3.2	0.7	〃	
1018	1次 S-378			黒曜石	14	20.9	4.9	1.1	〃	
1019	1次 S-375			〃	(32.4)	34	18.5	(8.5)	〃	
1020	1次 S-450		2層	〃	15.15	18.0	3.8	0.8	〃	
1021	1次 S-454		3層	〃	22.1	14.6	4.5	0.9	〃	
1022	2次 S-513	B6—14	3層	〃	18.3	9.1	3.0	0.6	Ⅰ類	40
1023	KK2 S-146	B6—14	5層	〃	21.45	22.4	7.9	4.25	〃	
1024	KK2 S-259	B6—14	3層	〃	32.4	12.9	2.4	2.45	Ⅲ類	
1025	2次 S-427	B5—16	3層	〃	22.8	24.0	5.6	1.2	Ⅰ類	
1026	KK2 S-431	B6—11	3層	〃	(27.85)	(12.5)	4.8	(0.95)	〃	
1027	KK2 S-526	B6—12	3層	〃	(32.5)	(26)	7.4	(4.8)	Ⅲ類	
1028	KK2 S-458	B6—9	3層	〃	(33.5)	(14.1)	3.3	(2)	Ⅰ類	
1029	KK2 S-538	B6—12	3層	〃	(29.8)	15.6	7.2	(3.5)	〃	
1030	KK2 S-5550	B6—11	3層	〃	33.85	26.2	8	6.9	Ⅲ類	
1031	K K B-102	B5—12	3層	〃	60.8	28.95	5.3	7.8	Ⅰ類	
1032	K K B-63	B3—13		〃	(24.4)	(16)	3.1	(0.90)	不明	
1033	K K 2-553	B6—11	3層	〃	(23.2)	12	3.5	(0.8)	Ⅰ類	
1034	KK2 S-310	B6—11	3層	〃	(52.4)	28.4	10.3	9.6	〃	

(8)　台形状石器

剥片の両側辺および中央の1～2本の稜線が並行に走る形状の整った黒曜石の縦長剥片を素材に用い，その一端ないし両端を大きくカットした台形～長方形の小形の石器をその形状の特徴から台形状石器として分類した。その数は必らずしも多くなく形の整ったものは図示した13点のみである。幅は1.5～2.0cmにおさまっており，これは当遺跡出土の縦長剥片のそれと一致するものである。長さは 1.5cm前後であり，縦長剥片の打面部近くと中央部が選択されていると考えられる。全体的に台形状に仕上げられているが，その製作は三通りに分類することができよう。

Ⅰ類，縦長剥片の両端を折断しただけのもの（1037，1043，1044）。Ⅱ類，折断した面ないし打面の部位に加工を施したもの（1035，1036，1039～1041）。Ⅲ類，折断した両端はそのままで側辺の一辺に小さな調整剥離を施したもの（1038，1042，1045～1047）である。縦長剥片の一端ないし両端の意図的なカット—折断—については刃器の項で触れており，また後でまと



第88図　台形状石器実測図　(2/3)

表35　台形状石器計測表　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考	図版No.
1035	2次S-196	B6—10	5層	黒曜石	18.3	25.6	3.4	1.2		
1036	KKTR11	B9— 8	3層	〃	19.5	17.5	5.5	1.50		
1037	2次S-488		1層	〃	18	18.9	3.4	1.2		
1038	KKTR 8	B1—11	4層	〃	18.2	15.9	4.4	1.40		
1039	KKTR12	表採		〃	13.5	9.5	4	0.35		
1040	KKTR 6	B1—11	3層	〃	20.7	15	6	1.50		41—1
1041	KKTR 7	B1—11	3層	〃	20.5	11.5	3.4	0.70		
1042	KKTR 4	B2—11	4層	〃	11	17	5.4	0.75		
1043	2次S-195	B6—10	3層	〃	21.7	15.4	5.4	1.5		
1044	KKTR10	B2— 9	4層	〃	20	15.5	4.5	1		
1045	2次S-194	B6—13	5層	〃	21.3	18.1	5.3	2.1		
1046	KKTR 5	B2—12	2層	〃	18	13.5	5	1.35		
1047	KKB- 53	B2—16	4層	〃	16	11	2.5	0.50		

めるのでここでは割愛することにしたい。この石器の用途については直ちに明確にし得ないであろうが，台形状石器の一側辺に沿って使用によると推察される刃こぼれ・擦痕を認めることができるので，形態の斉一性と共に石器として認定できるのである。利器としてそのまま用いるには余りにも小さすぎること。また素材で最も厚味のある打面周辺，逆に薄くなる剝片の末端近くを折断あるいは調整剝離によって整形し，剝片の厚味を均一化しようとする意図が察知できること。さらに使用痕の在り方などは組合せ道具のサイドブレイドとしての一つの予想を可能にさせる条件と思われるのである。

先に刃器のⅡ類として一括して分類した石器の中にもやや長めだがサイドブレイドを彷彿させるものが含まれており，さらに縦長剝片の一端ないし両端を折断あるいは調整加工を施したものや周辺に沿って二次加工を行なった石器も存在している。台形状石器としたものはこれら一群の石器との関連も無視できないであろう。

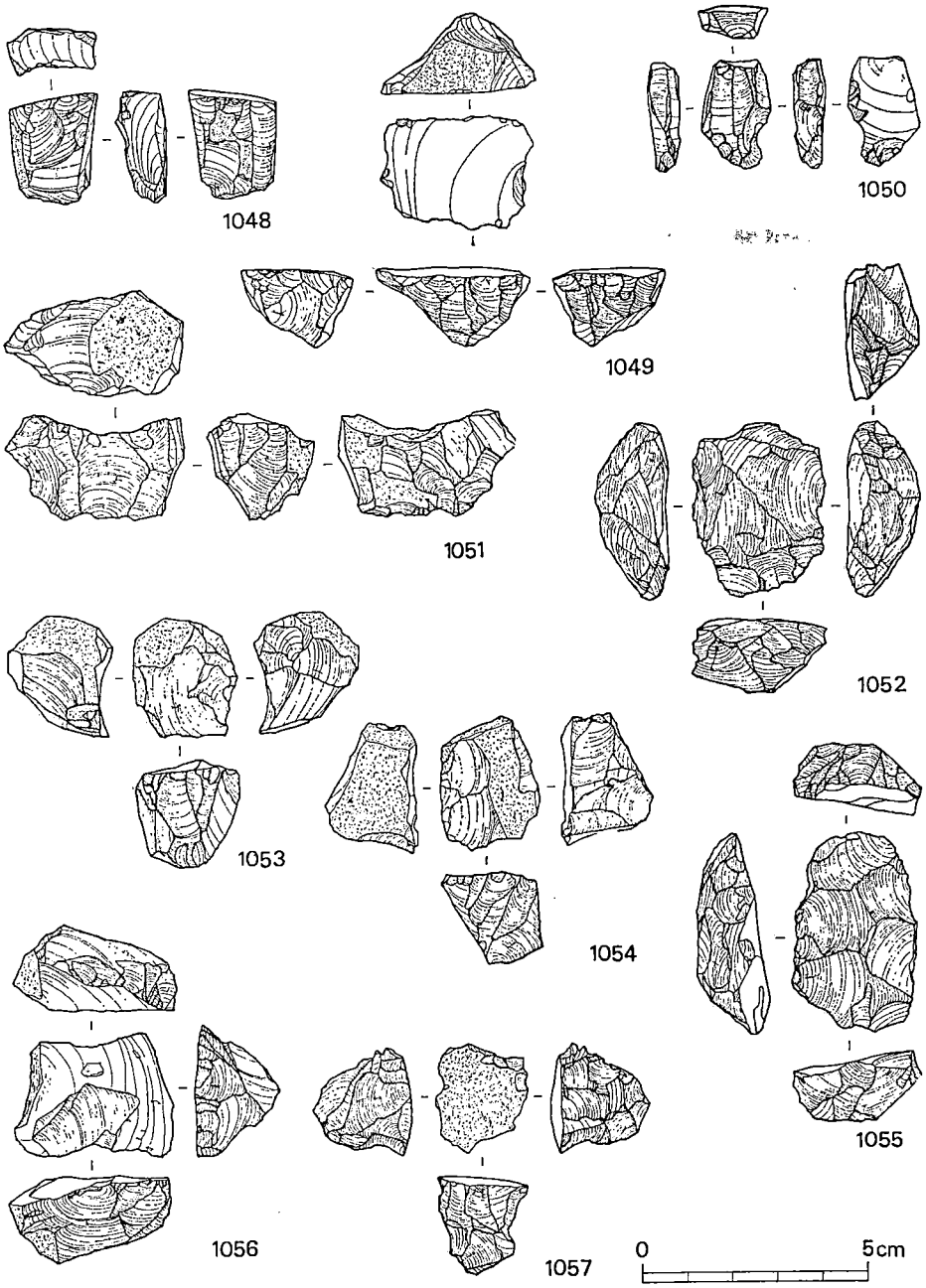
(9) 石核・残核

柏田遺跡から石核および残核と認定できるものが35点出土しており，32点は黒曜石で残り3点がサヌカイト質の石材である。黒曜石製の石核は大きさを含めての形状および剝離技術から分類することができるのである。

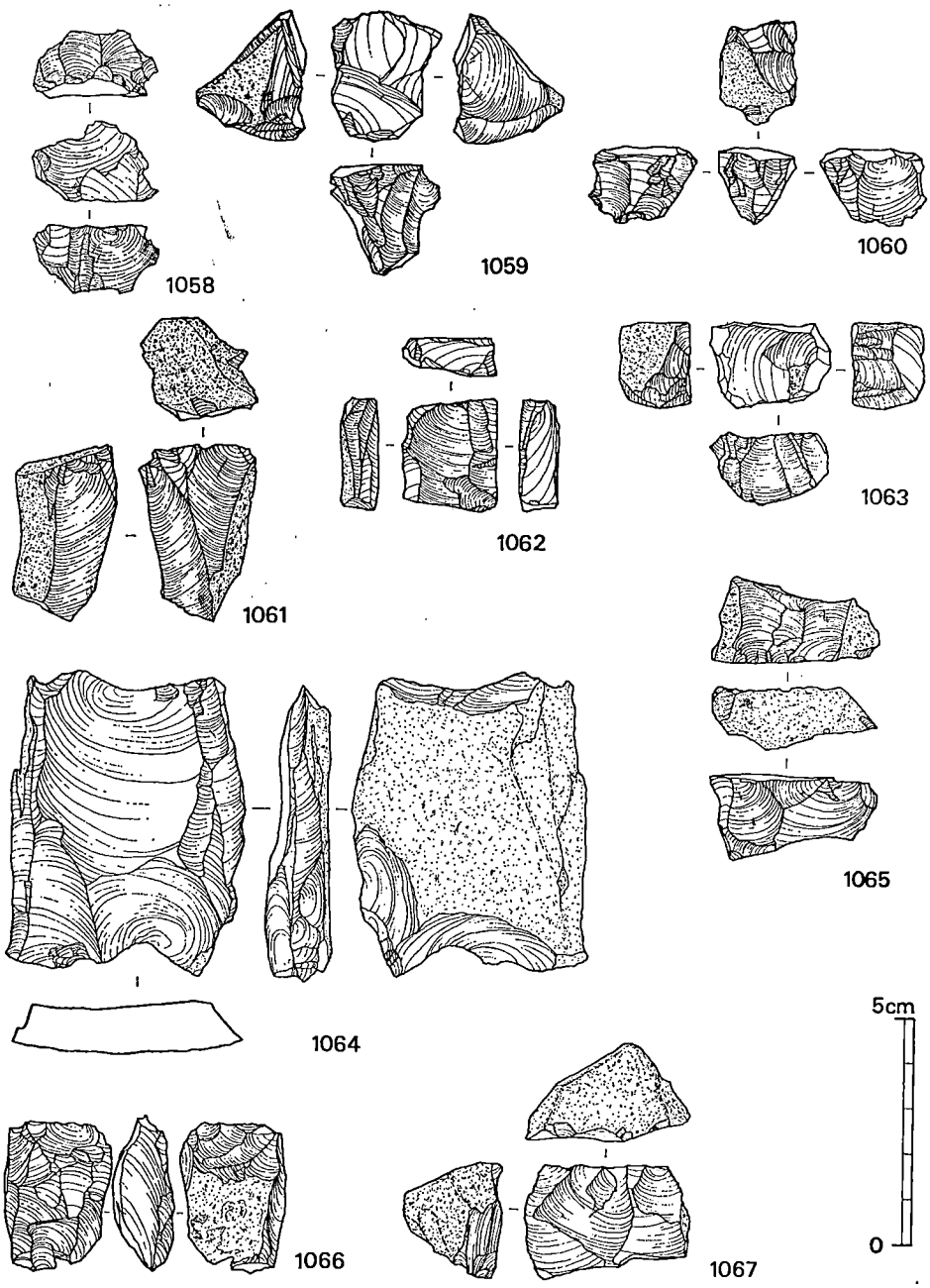
Ⅰ類　大きさは高さ・幅共に6㎝前後であるが，やや長方形に近い平面形を呈する。両端の二ケ所に打面を有し，その打面は両方とも剝片剝離面から背面に向って斜め方向の大きな剝離面によって構成されている。石核に残されている剝片の最終剝離作業面と打面との角度は60度前後を示している。剝片の剝離は石核の一面のみから行なわれており，しかも上，下の二方向からである。剝離の順序は両端部→中央部の繰返しによって進められていると考えられる。なお剝離作業面と反対の面―背面―には自然面が大きく残されている。Ⅰ類の石核については縦長剝片との関連で述べることにしたい。Ⅰ類の大形の石核（1064）は僅か2点のみで，他は小形のもの（Ⅱ類）である。

Ⅱ類a　小形で両方向から剝離が認められるもので，全体の形態はほぼ角柱状を呈し，剝片の剝離作業面は2～3面に及んでいる。打面は1～数回の剝離面によって形成されており打角は90度に近いものから60°前後の鋭角を呈するものなどあり，幅が見られるようである。(1051・1054・1060・1062・1066)

Ⅱ類b　一方向からのみ剝離が行なわれており，その打面は自然面・節理面・大きな剝離面を用いているものの他に厚味のある剝離の主要剝離面を打面としてそのまま使用しているものなどが見られるのである。剝片の剝離作業が一方向からのみ行なわれているため，Ⅱ類aと異なり全体的に角錐状を呈する傾向が認められる。(1048～1050・1053・1056～1059・1061・1063・1065・1067)



第89図　石核実測図 (1) (2/3)



第90図　石核実測図 (2) (2/3)

表36　石　核　計　測　表　　（単位 mm・g）

実測図No.	遺物No.	地　区	層序	石　質	長さ	最大幅	厚	重	備　考	図版No.
1048	K K C- 7	B1—11	3層	黒曜石	23.8	19	12.8	5.25		
1049	K K C- 10	B1—11	4層	〃	16.7	33.2	33.1	11.90		
1050	K K C- 15	B 5	1層	〃	23.5	15	6.9	2.70		
1051	K K C- 12	表採		〃	23	38.8	39.2	16.40		
1052	K K C- 14	B2—12	1層	〃	15.8	37.6	29	16.60		
1053	K K C- 16	B2—15	3層	〃	23.3	22.4	24.3	13.10		
1054	K K C- 18	B2—15	3層	〃	20	27.8	27.1	11.00		
1055	K K C- 19	B2—15	4層	〃	15.6	43	28	16.00		
1056	K K C- 17	B2—15	3層	〃	18.8	35.3	35	14.50		
1057	K K C- 21	B2—14	3層	〃	20.7	20	19.4	8.15		41—2
1058	K K C- 22	B4—10	3層	〃	15	28	28	5.10		
1059	K K C- 25	B2— 9	3層	〃	24	24	29	11.85		
1060	K K C- 26	B1—12	4層	〃	16.5	12.5	24	5.85		
1061	K K C- 30	B4—V字溝	5層	〃	39	25.9	22.1	20.90		
1062	K K C- 31	B5— 9	3層	〃	24.3	21	18.1	5.75		
1063	K K C- 33	B1—15	4層	〃	16.2	25.6	18.5	9.30		
1064	K K C- 8			〃	67.2	51.9	12.3	59.7		
1065	K K C- 38	B2—16	4層	〃	35	18.4	17.3	7.00		
1066	KK2 S-560	B6—11	3層	〃	33.1	23.7	14.2	11.2		
1067	K K C- 35	B5— 9	3層	〃	25.4	35.5	35.8	15.30		

Ⅱ類c　打面と剝離面の関係がⅡ類a・bの様に一定してなく，全面から剝片の剝離が行なわれていると考えられるものである。両面加工の石器と類似しているが，剝片の剝離面の状態から石核と判断した。（1052・1055）

Ⅱ類の石核の最終剝離面に認められる剝離面は1061の長さが約4cmのものを除けば，いずれも長さが2cm前後と短かく，幅も狭少で全体的に不定形なものである。刃器・台形状石器その他の剝片石器の素材となり得る大きさに到底及ばない数値と形状を呈しているのである。これらの石核が残核の状態での大きさや形を示しているとしても石核に残されている自然面の状態から現存する大きさの2倍以上の値は想定できず，むしろ当初の礫に近い大きさを示唆している可能性が極めて強いのである。実際，当遺跡出土の剝片の中に打面から末端までの長さが2.0cm～3.0cm，幅が1cmを僅かに越える程度のものがかなりの数見られ，しかもそれらの打面は剝片の大きさに比較して大きいという特徴が抽出でき，Ⅱ類の石核から剝離されたと考えられるのである。

(10) 彫　　器

縄文時代の遺跡では珍らしく彫器と考えられる石器がまとまって出土しており注目される。彫器と認定するのに一抹の不安を残すものを含めて，29点を数えることができるのである。これらの彫器は製作手法およびその形態から二大別できるであろう。

Ⅰ類　旧石器時代の石器で『彫器・彫刻刀（Graver）』と呼称されているものと全く同様な方法で製作されていると考えられるものである。すなわち比較的厚味のある縦長剥片を素材に，剥片の一側辺に沿って樋状剥離を施して彫刻刀面を形成している石器であり，樋状剥離の打面構成の違いによって細別できる。

Ⅱ類　剥片の一端に細長い小さな調整剥離を加えて鋭利な刃部を形成するもので，刃部の形状から細別が可能である。

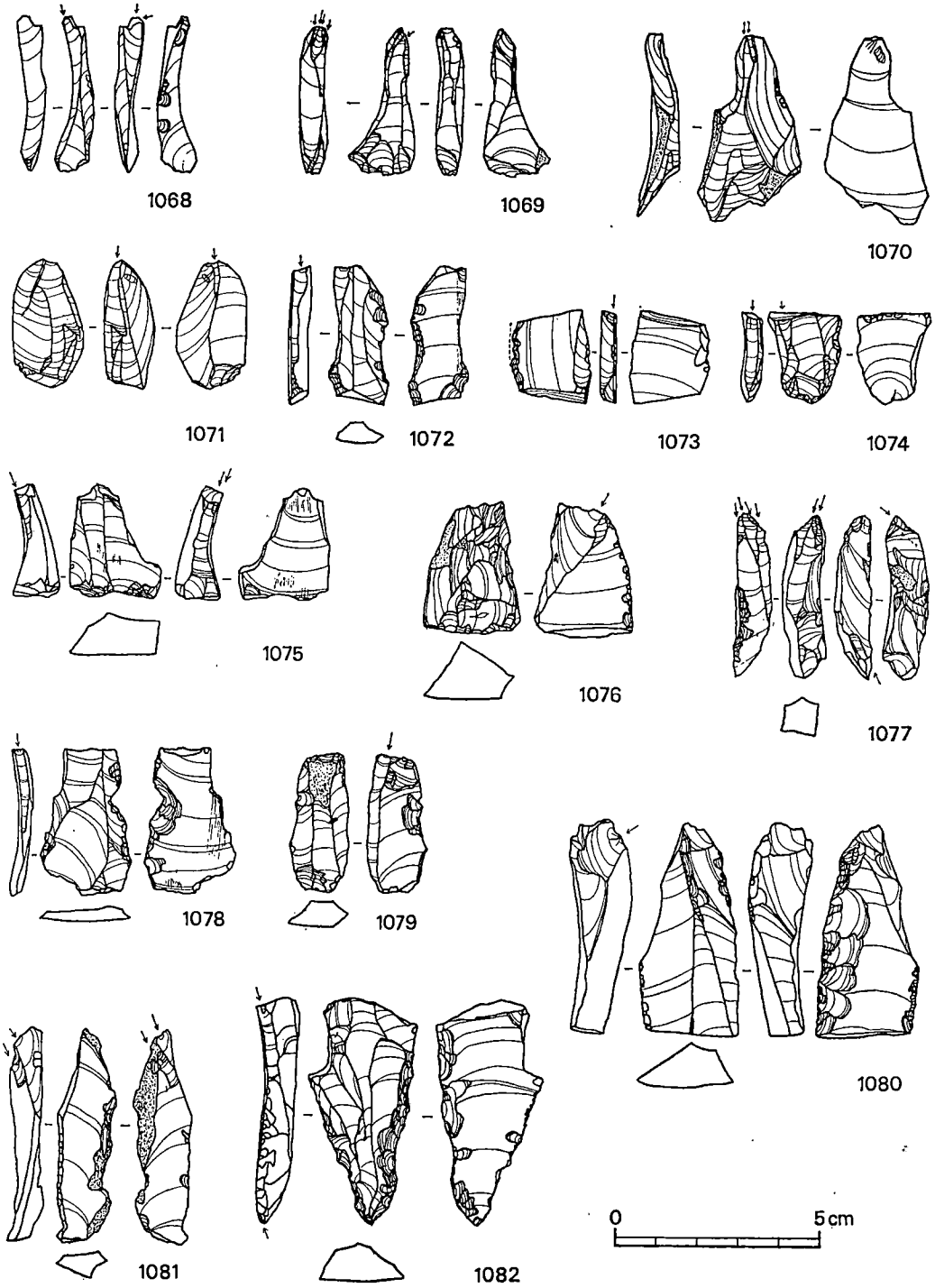
他に Graver-spoll と認定できるものが数点出土しており，Ⅰ類の彫器製作過程での産物であると判断される。（1068・1086）

Ⅰ類a　縦長剥片の平坦な一端を打面として樋状剥離を施した一群である。この平坦な打面は，自然面・節理面・素材の剥片の剥離作業ですでに形成されている剥離面，それに彫器の打面として意図的に剥片を折断した面，とその用い方の範囲は広いようである。彫刻刀面形成の打面として特に問題になるのは剥片の一端がほぼ一直線にカットされているものである。すべてを意図的な折断として把握できないかも知れないが，折面形成という目的で準備されている可能性は非常に強いと考えられる。(1070・1073・1074・1078・1080～1082・1084・1108・1121)

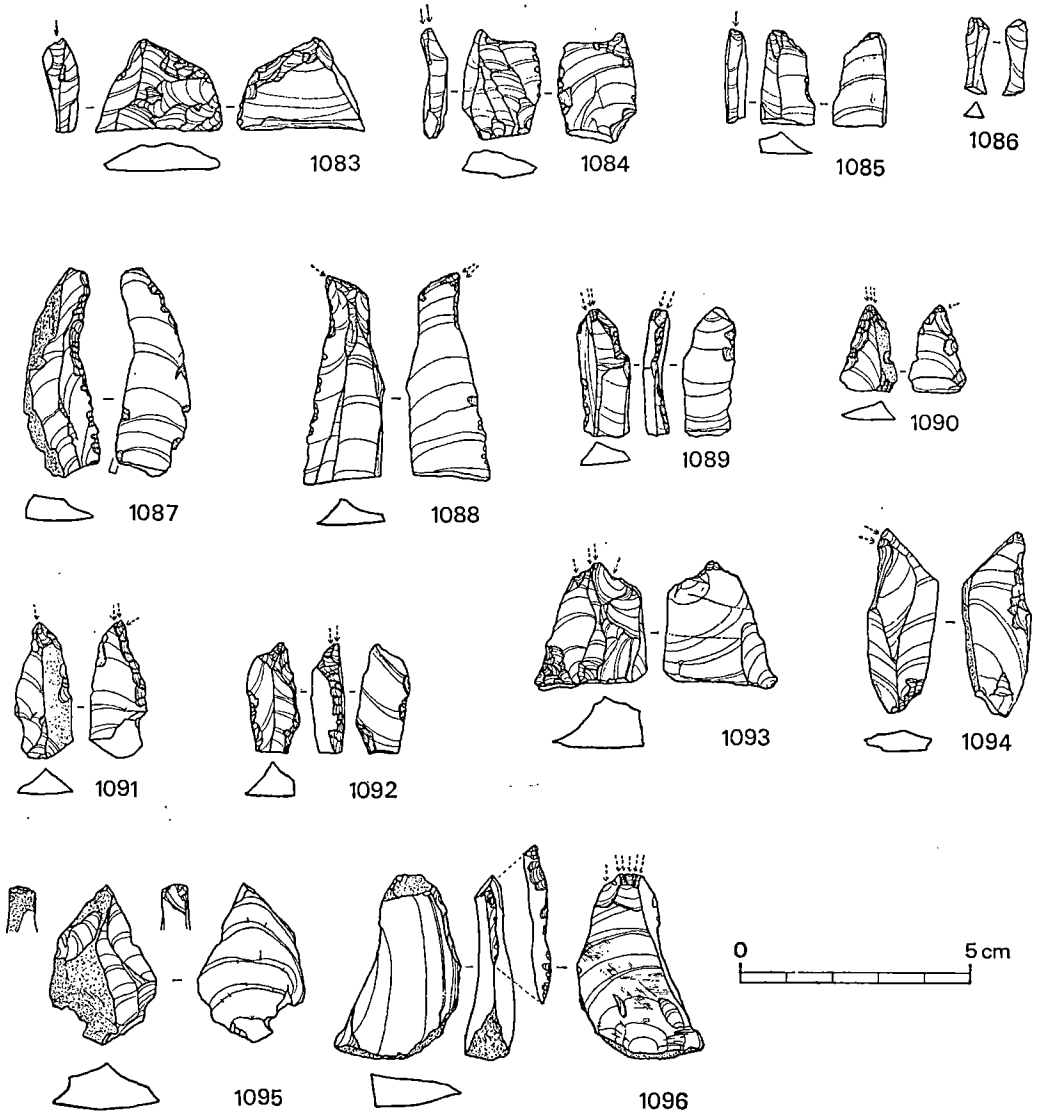
Ⅰ類b　樋状剥離のための打面形成が樋状剥離面と反対の方向からの剥離によって準備されているものである。Ⅰ類aが平坦なほぼ一直線をなす打面を利用しているため "Single blow Graver" となるのに対して，Ⅰ類bは彫器の刃部と考えられる一端がほぼ山形を呈しており "Bec-de-flute" と分類される彫器と類似している。樋状剥離の打面形成を問題にすれば，Ⅰ類aの折断による打面製作と同一と考えられるが，平らで直線的な打面，それに偶然の機会に折れた面を打面として利用する場合が皆無であると断言できないことからⅠ類bを分離したのである。（1069・1071・1072・1076・1077）

Ⅰ類c　樋状剥離の打面が剥片の主要剥離面側からの小さな調整剥離によって整えられているもので，いわゆる "Angle graver" に相当する刃部を形成するものである。（1075・1079・1083・1085・1207）

縦長剥片の主要剥離面に直交する細長い樋状剥離面（彫刻刀面）を有するⅠ類の多くは彫刻刀面の一側ないし両側のエッヂの部分に小さな刃こぼれあるいは擦痕が観察される。1072・1075・1085では彫刻刀面の先端近くとエッヂそれに主要剥離面の輪波の盛り上った個所に擦痕が認められる。またⅠ類の彫器のうち比較的大形でしかも厚味のある剥片を素材に用いたもの



第91図　彫器実測図 (1) (3/5)



第92図 彫器実測図(2) (3/5)

は，側辺に丹念な調整剥離が施され，削器・掻器としての機能を兼ねているものと考えられる。(1078・1080・1082)

Ⅱ類は主要剥離面に直交する細長い樋状剥離は施されていないが，素材の一端に小さな調整を行なって刃部を形成しているもので，graving-tool として把握できるものであろう。

Ⅱ類a　錐状の鋭い尖頭部を有し，しかもそれらがくちばし状に彎曲した共通する特徴を備えている。錐状の尖頭部には明らかに使用によると判断される擦痕が顕著に観察される。

表37　彫　器　計　測　表　（単位 mm・g）

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考		図版No.
1068	KKS-59	B4—10	5層	黒曜石	37.5	8.5	6	1.20		完形	
1069	KKGR-1	B2—12	5層	〃	35.5	16	6.5	2.4		完形	
1070	KKGR-2	B4—10	4層	〃	45.5	25	10	5.6		完形	
1071	KKGR-3	B2—10	5層	〃	31	17.5	11.7	5.15		完形	
1072	KKB-55	B2—15	4層	〃	33.5	14.5	5.5	2.75	11.5×4.6	完形	
1073	KKBF-169	B3—9	4層	〃	22	19	3.7	2.0		完形	
1074	KKBF-301	B14—14	2層	〃	21.7	17.5	4.7	1.9		完形	
1075	2次S-204	B6—11	5層	〃	27.1	22.5	10	5.2		完形	
1076	2次S-292		1層	〃	31.8	23.7	14	9.7		完形	
1077	2次S-348	B6—16	3層	〃	39.1	10.8	9	3.8		完形	
1078	2次S-349	B6—16	3層	〃	35	22	3.5	3.1		完形	
1079	2次S-487		1層	〃	32.9	14.6	6.4	3.2		完形	
1080	2次S-166	B6—12		〃	51.2	24.7	10.8	14.3		完形	
1081	1次S-152		3層	〃	51.1	14.4	6.3	4.2		完形	
1082	1次S-283		3層	〃	54.1	26.2	9.1	11.9		完形	42—1
1083	1次S-153		3層	〃	19.8	27.5	6.1	3.4		完形	
1084	1次S-169		3層	〃	23.7	17	5.9	2.2		完形	
1085	1次S-317		3層	〃	20.3	12	4.8	1.1		完形	
1086	2次S-264	B6—14	3層	〃	16.3	5.2	3.3	0.2	スポール	完形	
1087	2次S-135	B6—10	5層	〃	44.7	16.5	5.5	3.3	削器	完形	
1088	2次S-147	B6—14	5層	〃	44.4	17.5	5.8	3.5	彫器(?)	完形	
1089	2次S-150	3号住	フク土	〃	27.8	12	4.9	1.5	〃	完形	
1090	2次S-376	B5—12	3層	〃	18.4	12.4	4.1	0.7		完形	
1091	1次S-154		3層	〃	29.2	12.6	5.5	1.5		完形	
1092	1次S-155		3層	〃	23.7	11.9	7.3	1.6		完形	
1093	1次S-388		3層	〃	27.3	24.6	11.2	5.9	彫器(?)	完形	
1094	1次S-178		3層	〃	39.3	15.3	4.5	2.7		完形	
1095	1次S-389		5層	〃	34.9	23.6	9.9	5.3		完形	
1096	1次S-356		3層	〃	40	27.7	7.4	8.4		完形	

(1090～1092)

Ⅱ類b　小さな調整剥離が施されているのはⅡ類aと同様であるが，その部位は他の彫器と異なり主要剥離面に平行するように行なわれており刃部の先端は丸味をおびているいわゆる"flat-graver"との類似性が指摘できるのである。なお，この石器の側辺のエッヂと主要剥離面には擦痕が観察され，しかも擦痕の部位は主要剥離面を平坦な面に置いた場合，丁度対象物と接する位置に相当しているのである。(1096・1135・1140)

1088・1089・1093は彫器とするのに今一歩説得力に欠けると思われる資料であり，1087はコンケィブスクレィパーと判断されるものである。

(11) 石　錐

石錐の出土は彫器のそれをさらに上回り欠損したものを含めると50点近い数になるのである。石材では他の剝片石器と同様圧倒的に黒曜石製のものが多く，サヌカイト質の石錐は僅か4例みられるだけである。各種の形態が多量に出土しているが，刃部とそれに続く柄の部分の状態から分類を試みることにしたい。

Ⅰ類a　細長く鋭い尖頭状の刃部を有し，柄との区別が二次加工の状態からある程度区別できるもので，刃部・柄ともに全体的に細長い形状を呈する。(1103・1112・1113・1118・1122・1123・1125・1141・1144・1145・1147・1157・1158・1162)

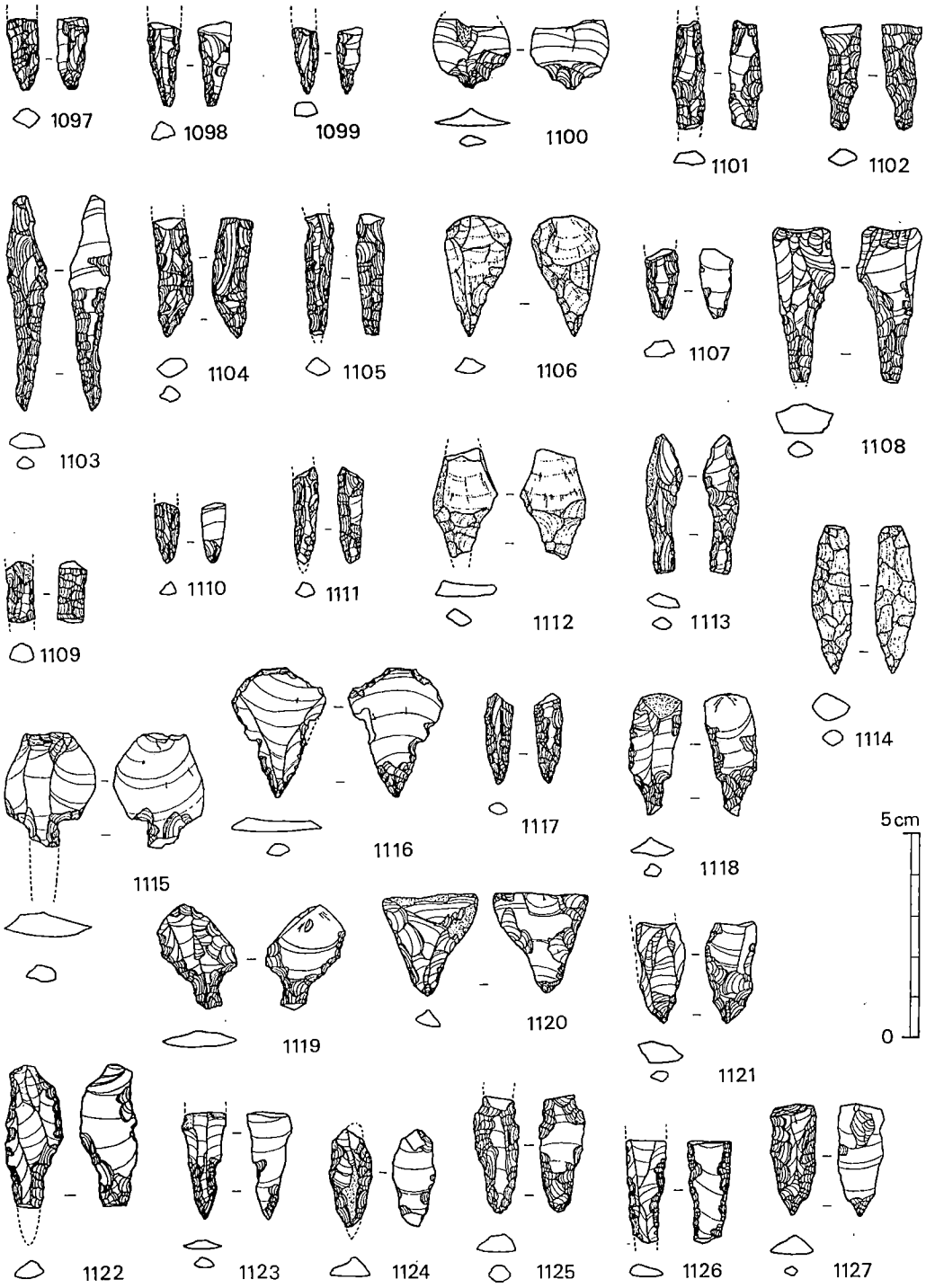
Ⅰ類b　刃部と柄との境界がノッチ状の加工によって明瞭に分類されているもので，Ⅰ類aに比較してやや幅広である。刃部が途中で欠損しているため正確な刃部の長さを判断できないが，素材の状態から推測するとⅠ類aほど長くはならないであろうが，それに近いものと推測されよう。ただⅠ類bと分類したものは，当遺跡から極端に多く出土している『つまみ形石器』と類似しており速断しがたいものがみられるのである。(1100・1115・1119・1134・1136・1139)

Ⅰ類c　これについては資料が少ないため明確にし得ないが，Ⅰ類bとほぼ同様な特徴を有しながらも刃部が特に短かいものを考えたのである。(1132・1133)

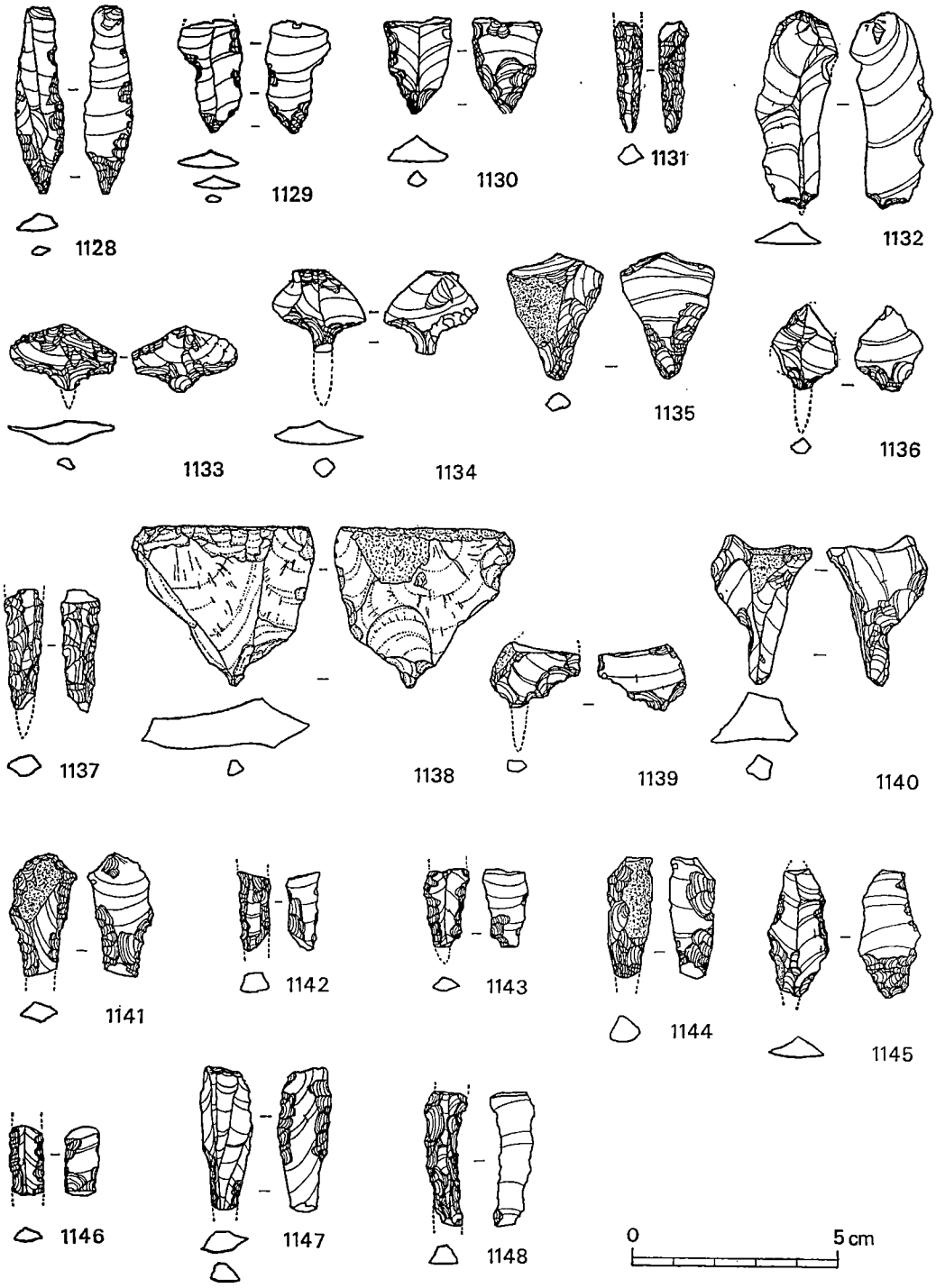
この他に，Ⅰ類aないしbの刃部と推定されるほぼ両加工で横断面が不整形な凸レンズ状，菱形，あるいは台形を呈する細長い欠損品が相当数出土している。(1097～1099・1101・1102・1104・1105・1107・1109～1111・1117・1126・1131・1137・1142・1143・1146・1148・1149・1153～1155)

Ⅱ類a　石錐の刃部の柄の部位が明確に判断できにくく，全体的な形は細長いPoint状のものである。全面的に剝離の施されたものと片面に集中的に見られるものとが存在している。(1114・1124・1127・1128)

Ⅱ類b　全体の形状はほぼ三角形を呈し，刃部と推定される先端にのみ調整を施したものである。他の石錐に比較して刃部の部位が短かくしかもそれほど鋭利に成形されてないように見受られる。むしろ彫器のⅡ類に共通する要素がその形態上および使用痕に観察されるものがあり，石錐と彫器の両方から充分な検討を加えながらその用途を思考すべきであろう。(1106・1116・1120・1129・1130・1138・1140)



第93図　石錐実測図 (1) (3/5)



第94図　石錐実測図 (2) (3/5)

表38　石錐計測表 (1)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	方向	備考		図版No.
1097	2次 S-197	3号住	フク土	黒曜石	(17.3)	8.2	4.9	(0.6)			先端	
1098	2次 S-198	B6—14	3層	〃	(20.4)	7.5	4.5	(0.7)			〃	
1099	2次 S-200	B6—10		〃	(16)	6.5	3.5	(0.3)			〃	
1100	KKDR- 6	B2—16	3層	〃	(16.4)	8.4	4.1	(1.05)			基部	
1101	KKDR- 7	B2—14	〃	〃	(25.8)	(8)	3.1	(0.90)	↑		先端	
1102	KKDR- 8	B2—16	4層	〃	(25.2)	(8.9)	3.9	(1.15)			〃	
1103	KKDR- 5	B2—16	〃	〃	51.3	9.8	3.8	1.45			完形	
1104	KKDR- 9	B4—V字溝	2層	〃	(28.2)	(9.8)	4.5	(1.30)	↑		先端	
1105	KKDR- 10	B2—15	3層	〃	(18.9)	(6.4)	4.3	(1.05)	↑		〃	
1106	KKDR- 11	B2—11	4層	サヌカイト	28.6	15.7	3.9	2.35			完形	
1107	KKDR- 12	B2— 9	3層	黒曜石	(16.6)	(7.6)	3.8	(0.70)			先端	
1108	KKDR- 13	B3—13	〃	〃	37	14.7	7.1	3.30	↘	彫器	〃	
1109	KKDR- 20	B3—15	〃	〃	(14.7)	(6.8)	4.7	(0.50)	↑		胴	
1110	KKDR- 14	B2—12	4層	〃	(14.4)	5.6	3	(0.30)	↑		先端	
1111	KKDR- 16	B3— 9	3層	〃	(23)	5.8	3.5	(0.50)			〃	
1112	KKDR- 15	B1—11	〃	サヌカイト	(26)	15.4	3.9	(1.50)			〃	
1113	KKDR- 17	B2—15	4層	黒曜石	(33)	8.3	3.2	(0.90)	↓		〃	
1114	KKDR- 18	B1—12	3層	サヌカイト	35.5	9.4	6.9	2.10			完形	
1115	2次 S-119	B6—15	〃	黒曜石	(27)	22	5.9	(30)			先端	
1116	KKDR- 19	B1—12	〃	〃	30.7	22	3.2	1.90			完形	
1117	KKDR- 22	B2—16	4層	〃	(21.6)	(6.2)	2.8	(0.45)	↑		先端	
1118	KKDR- 23	B5—14	3層	〃	(28.8)	11.8	4.2	(1.25)	↖		〃	
1119	KKTM-197	B1—15	〃	〃	25.6	5.9×2.9 18.6	4.3	1.81	↑	彫器	完形	42—2
1120	2次 S-161	B5—11	〃	〃	25.2	23.6	(4.9) 有効幅	3.8			〃	
1121	K K F- 14	B3—14	〃	〃	(24.8)	(11.4)	5.0	(4.35)	↑		先端	
1122	2次 S-164	B5—12	〃	〃	(34.5)	14.4	(4.2) 有効幅	(1.8)			〃	
1123	K K F- 16	B2—11	4層	〃	(25.2)	10.2	2.1	(0.50)	↓		〃	
1124	K K F- 36	B2—12	1層	〃	(23.7)	10	4.6	(1.05)	↓		〃	
1125	K K F- 42	B3— 9	3層	〃	(27.8)	7.2×4.7 10.5	4.7	(1.70)	↑		〃	
1126	K K F- 52	B2—13	4層	〃	(24.6)	9.2	2.8	(0.80)	↑		胴	
1127	K K F- 54	B1—10	3層	〃	26.4	11	4.9	1.30			完形	
1128	K K F- 60	B4— 9		〃	44.4	11.4	4.1	1.90			〃	
1129	KKBF-121	B2—16	4層	〃	26.8	15	4.1	1.29			〃	
1130	K K S-128	B2—15	3層	〃	23	16.2	6.5	2.05			〃	
1131	2次 S-257	B6—14	〃	〃	(26.6)	17.1	5	(0.7)			先端	
1132	2次 S-390	B7— 9	〃	〃	(46.7)	20.2	5.2	(3.5)			〃	
1133	2次 S-470	B6—14	〃	〃	(15.9)	25.9	5.8	(1.4)			〃	
1134	2次 S-483	B6—14	〃	〃	(19.6)	23.2	5.9	(1.6)			〃	
1135	2次 S-525	B6—12	〃	〃	33	23.4	(4.5)	3.4		彫器	完形	
1136	1次 S-157		〃	〃	(23)	16.2	3.6	(1.3)			先端	
1137	1次 S-158		〃	〃	(29)	9.7	5.1	(1.3)			〃	
1138	1次 S-159		〃	サヌカイト	37.9	4.4	12.4	19.3			完形	
1139	1次 S-223		〃	黒曜石	(16.1)	21.8	(3) 有効幅	(1.2)			先端	

表39　石錐計測表 (2)　　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	方向	備考		図版No.
1140	1 次 S-234		3層	黒曜石	35.4	24.2	12.2	5.3		彫器	完形	
1141	KKDR- 24	B6— 9	5層	〃	(33)	12.4	4.4	(2.25)	↓		先端	
1142	KKDR- 25	B2—11	4層	〃	(31.4)	(10)	3.2	(1)	↑		胴	
1143	KKDR- 27	B2—10	〃	〃	22	8.5	3.1	(0.65)			先端	
1144	KKDR- 26	B5— 9	3層	〃	21.6	5.2	6.1	(2.1)			〃	42--2
1145	K K F- 24	B2—16	〃	〃	(31)	14.6	5.2	(1.95)			〃	
1146	K K F- 47	B3—10	〃	〃	16.6	(8)	3.6	(0.60)	↑		胴	
1147	K K F- 41	B11—10	〃	〃	(33)	12.4	5.0	(2.50)	↓		先端	
1148	K K F- 55	B2—13	〃	〃	(31.4)	(10)	5.5	(1.70)	↑		〃	

(12) サイドブレイド

黒曜石製の縦長剝片を素材に用い，剝片の長軸あるいは短軸の両端ないし一端に小さな調整剝離や折断によって加工を施した方形～長方形の小形の石器をサイドブレイドとして分類したいと考えているのである。二次加工の調整剝離が剝片の縁辺のみでなく，ほぼ全体的に及んでいる長方形を呈する小形の石器もサイドブレイドとして把握されるが，当遺跡においては好資料が出土していない。これらは名称をはじめ，概念規定・用途等で必ずしも意見の一致を見ず多くの問題点をかかえているのは周知の通りである。

柏田遺跡出土のサイドブレイドと考えた石器は大きく二つのタイプに分類したのである。

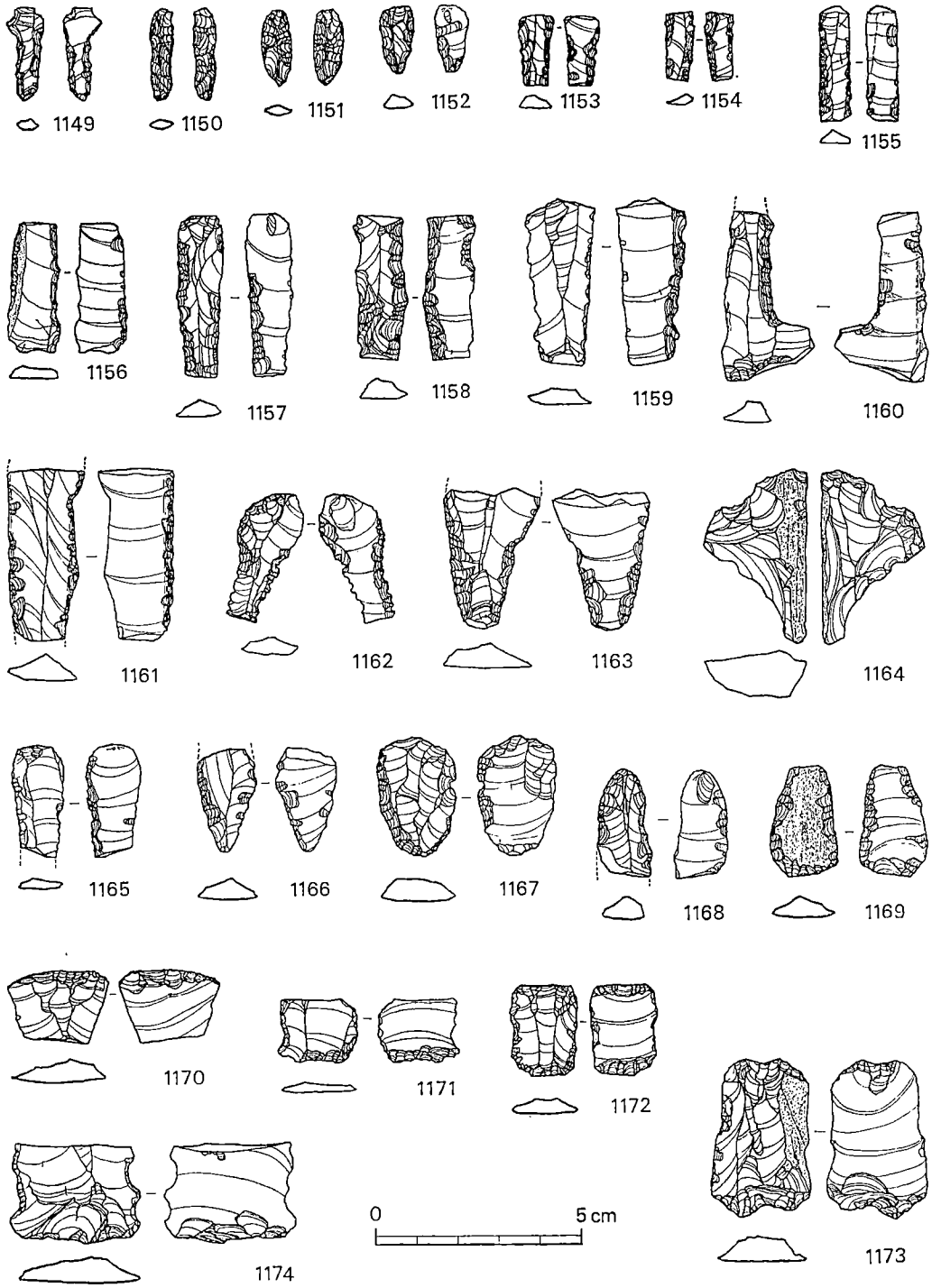
Ⅰ類　短軸の一端ないし両端に整形のための細部加工が施されたもので，長さは2～3cm，幅 2.0cm前後の大きさを有し，全体的に方形に近い形状を呈するものである。　(944・1167・1169～1175・1186・1199・1209・1218・1220・1222・1230)

Ⅱ類　短軸の一端ないし両端が折断によって整形されていると考えられ，さらに調整剝離が長軸の側辺に集中して施されているもので，Ⅰ類に比較してやや大きく長方形に近い形状を有している。(1156・1165・1177・1181・1215・1219・1221・1224・1225)

サイドブレイドおよび縦長剝片の折断については項を改めて若干の論考を準備しているのでここではそれらに関連する具体的な資料を挙げておきたいのである。

1170・1171・1219は背面の稜線・主要剝離面の一点に力が加わったと考えられる痕跡が明瞭に認められ，その直下から広がるリングを断面に観察されるのである。さらに1224の主要剝離面の上端には加撃点が線条痕としてのびており，力が移動したことを示唆しているのである。

1181はカットされている一端の横断面の中央から約半分に擦痕が認められる資料であり，1171・1172・1175・1186は主要剝離面に擦痕あるいは光沢が認められる資料で，それも全面にではなくほぼ直線的にどちらかの一端に観察されるのである。また1177・1219では石器の中央部のみ直線的な擦痕が観察されるのである。これらの資料はサイドブレイドの使用法を考慮す



第95図　サイドブレイド・不明石器実測図　(3/5)

表40　サイドブレイド・不明石器計測表　（単位 mm・g）

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考	図版No.
1149	F- 25	B2—16	3層	黒曜石	21.8	8.8	3.25	0.45	石錐？	
1150	F- 31	B1—15	〃	〃	21.3	5.5	2.5	0.30	不明	
1151	F- 43	B2—9.10.11	2層	〃	17.85	7.2	2.4	0.35	〃	
1152	B F-202	B2—10	3層	〃	16.15	7.7	3.45	0.48		
1153	2 S-255	B6—14	〃	〃	16.9	8.3	3.2	0.6	石錐？	
1154	2次S-384	B6—15	〃	〃	16.6	8.4	3.8	0.3	〃	
1155	2次S-190	B6—14	2層	〃	27.4	7.8	3.4	0.75	〃	
1156	1次S-137		3層	〃	31.1	12.6	3.2	1.45		
1157	1次S-144		〃	〃	38.4	11.5	4.2	1.85		
1158	1次S-145		〃	〃	35.1	13.2	5.0	2.75		
1159	1次S-349		〃	〃	39.0	16.7	4.1	3.15		
1160	KKF- 20			〃	41.2	23.5	5.5	4.45		
1161	1次S-348		〃	〃	40.4	17.0	6.5	4.85		43
1162	2次S-165	4号住	フク土	P7 〃	29.8	18.1	4.3	1.7		
1163	2次S-480	B5—12	5層	〃	(33.4)	(23.2)	6	(4.1)		
1164	1次S-150		3層	〃	41.8	25.0	11.4	7.9		
1165	KKF- 22	B2—15	4層	〃	27.5	12.4	2.5	1.00		
1166	KKF- 64	B 6	1層	〃	25.5	13.8	5.9	1.45	不明	
1167	KKS- 49	B1—10	3層	〃	29	18.6	5.7	3.40		
1168	KKS- 72	B3—13	〃	〃	26	12.2	5.5	1.65	不明	
1169	KKS- 93			〃	21.5	16.4	5.3	2.40		
1170	2次S-237	B5—12	5層	〃	18.0	24.1	5.6	2.1		
1171	KKF- 63	B 6	1層	〃	16.9	19	2.5	6.30		
1172	1次S-138		3層	〃	21.9	16.4	4.6	1.60		
1173	1次S-136		〃	〃	37.6	24.1	5.8	6.1		
1174	2次S-242	B7—13	〃	〃	24.8	32.2	6.1	4.80		

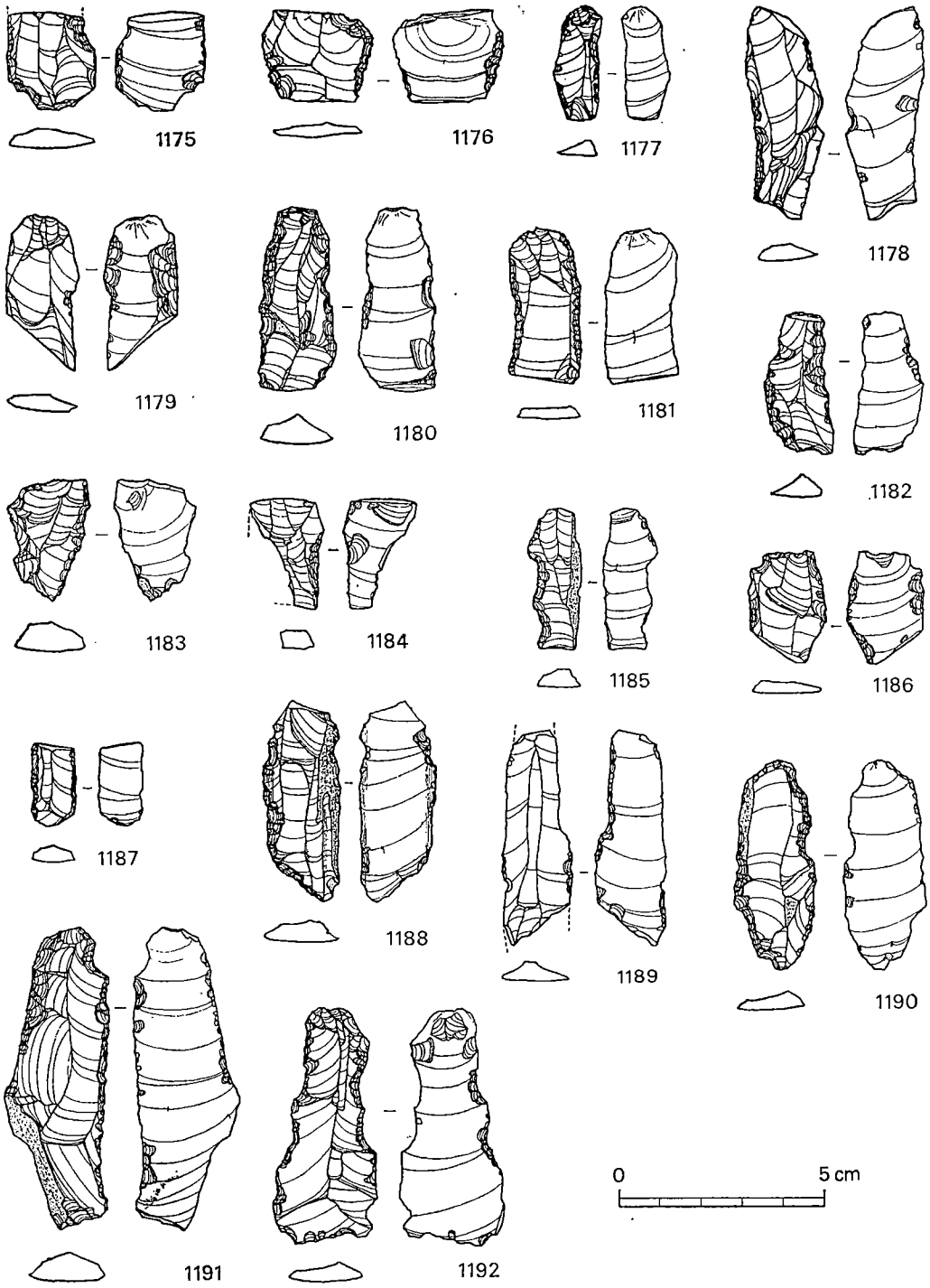
る際の貴重な資料となり得るであろう。

(13) 削　器

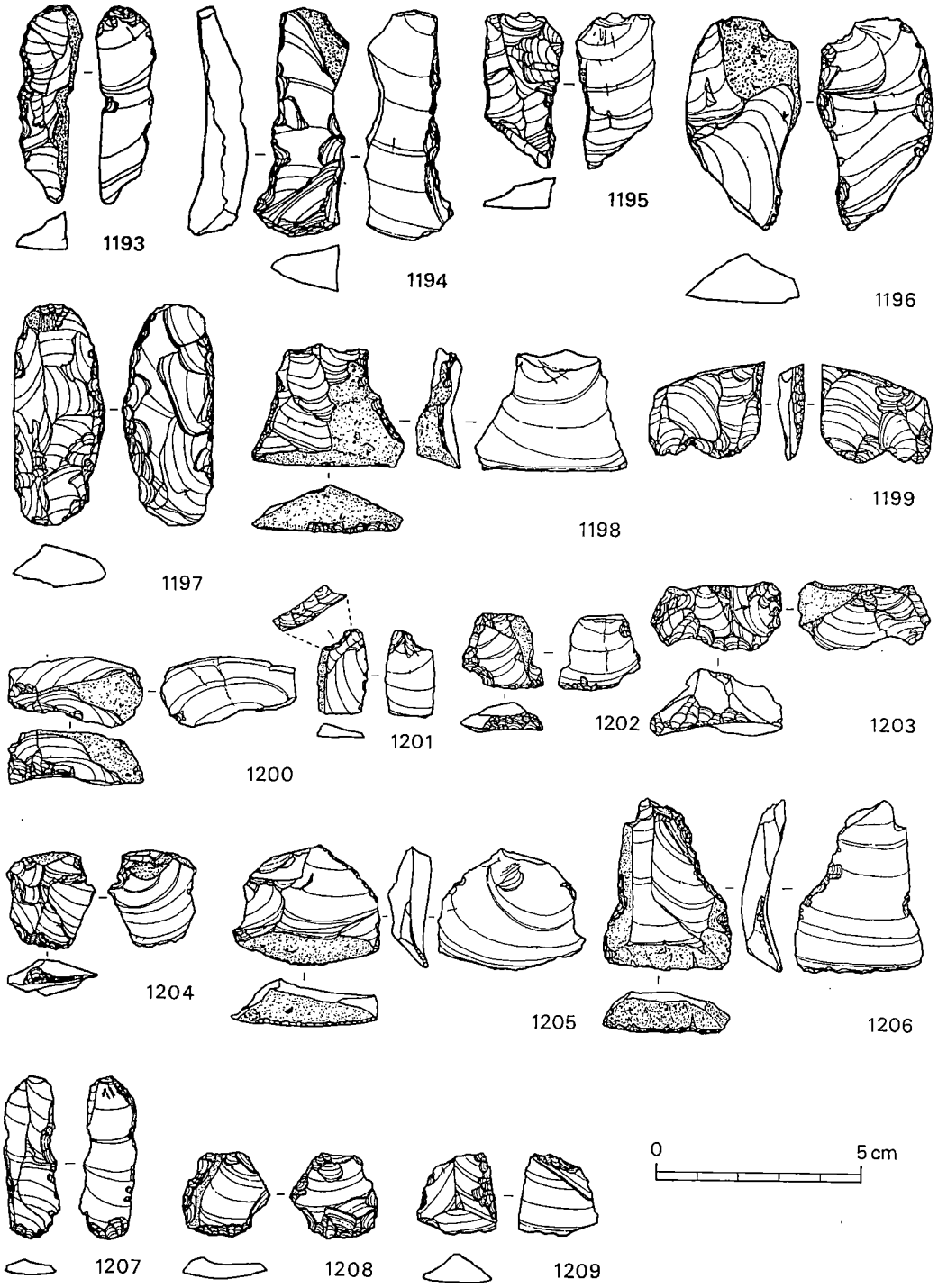
比較的大形でしかも全般的に厚味を有する黒曜石製の縦長剝片の側辺に沿って入念な調整が施されている石器を削器とし，形態および二次調整，さらに使用痕の観察から大きく二つに分類した。

Ⅰ類　両側辺が併行にのび背面中央に稜線がほぼ一直線に走る形の整った剝片を用い，一側辺もしくは両側辺に主要剝離面の方向から調整を施している。その調整剝離は素材の形をそれほど大きく変化させない程度に行なわれており，全般的にリタッチの角度は鋭角で刃部はほぼ直線的である。削器の中でも特に大形で一端が尖頭状に整形される傾向が把握される。

Ⅰ類の背面および主要剝離面には使用痕が明瞭に観察され，しかもそれらは特に刃部に沿って認められる擦痕と表裏に見られる手ずれと判断される周辺の痕跡がぼやけた光沢とであ



第96図　削器・掻器実測図 (1) (3/5)



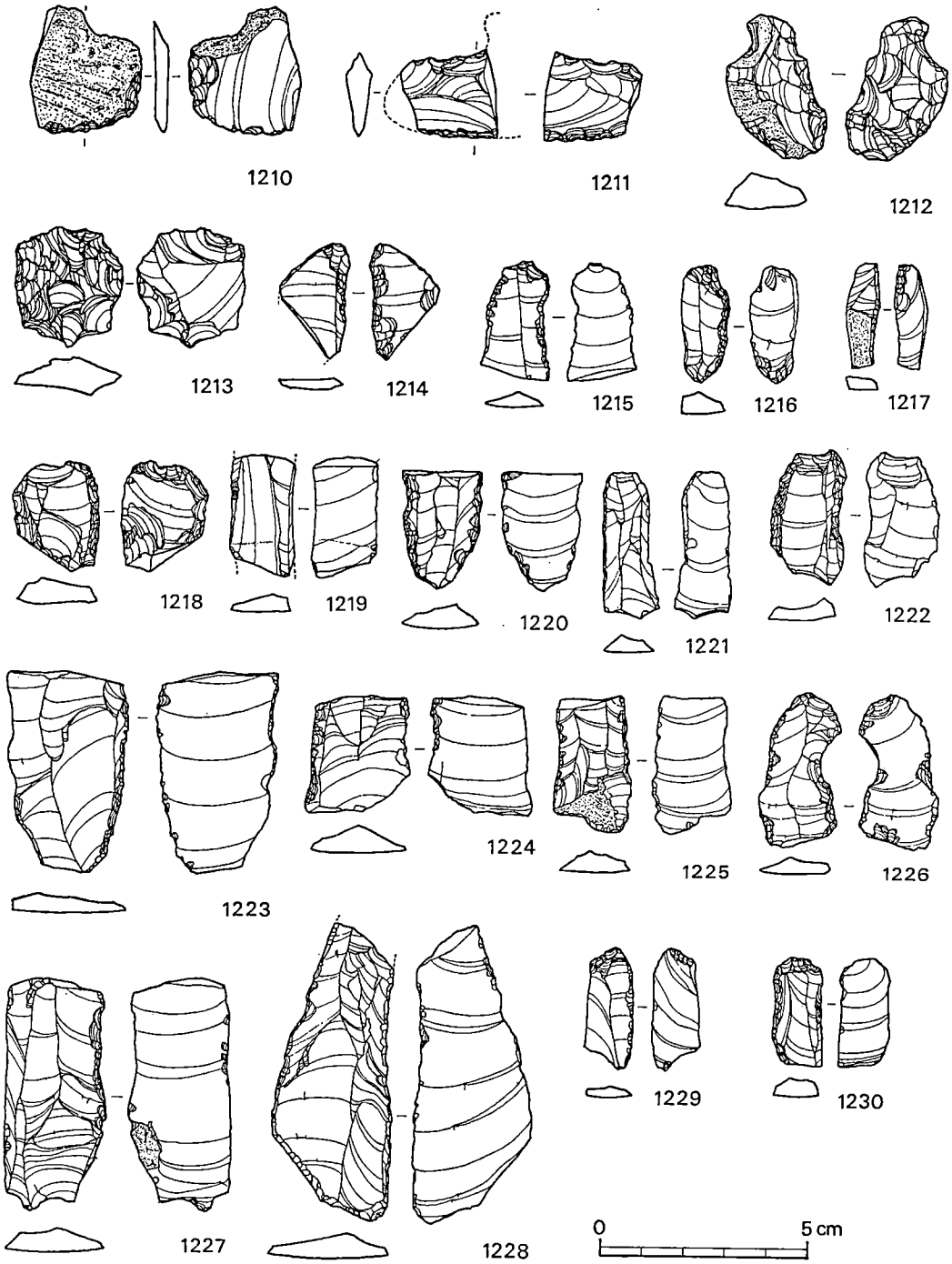
第97図　削器・掻器実測図 (2) (3/5)

表41　削器・掻器計測表(1)　(単位 mm・g)

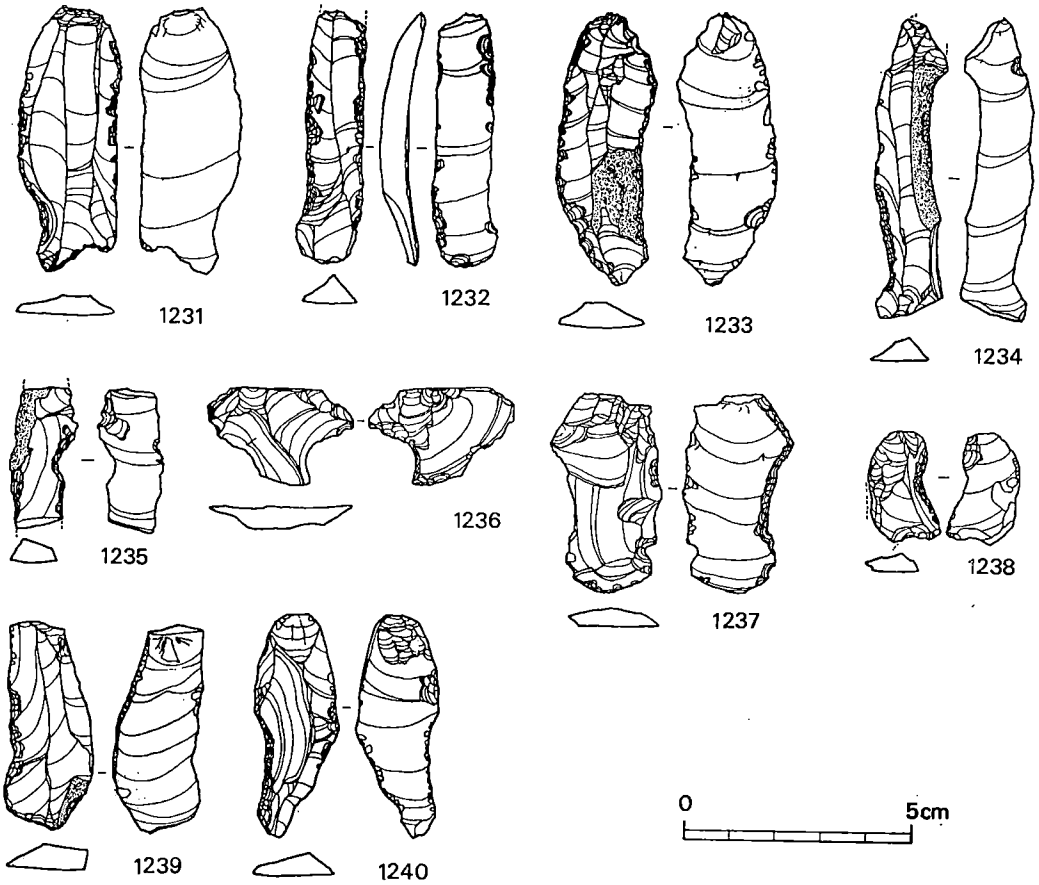
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考		図版No.
1175	KKB-29	B1—16	4層	黒曜石	(23.5)	21.5	5	(3.10)		基部	
1176	KKB-54	B2—15	〃	〃	(22)	26.5	3.7	(2.65)		先端	
1177	KKF-38	B2—12	1層	〃	27.5	11.5	3.7	1.25		完形	
1178	KKB-65	B3—11	フク土	〃	51	18.5	4.2	4.40		〃	
1179	KKB-85	B3—13	3層	〃	(32.5)	17.5	4.2	(2.80)		胴	
1180	KKS-17	B5—11	〃	〃	(44)	18.5	7.2	(6.30)		先端	
1181	KKS-24	B3—10	〃	〃	(37.5)	17.5	2.7	(3.40)		〃	
1182	KKS-56	B3—12	2層	〃	34.5	16.7	6	10.50		完形	
1183	KKS-57	B4—V字溝	4層	〃	29.2	20	7	3.50		〃	
1184	KKS-58	B4—10	5層	〃	26.5	17.5	4.5	(1.70)		1/3欠損	
1185	KKS-91	B2—10	3層	〃	33.7	13	4	2.20		完形	
1186	KKS-105	B3—13	4層	〃	27	18.7	3	1.80		〃	
1187	KKS-109	B2—12	〃	〃	20	11	4	1.10	不明	〃	
1188	KKS-112	B2—16	〃	〃	48.5	18.5	5.2	4.80		〃	
1189	KKB-88	B1—14	3層	〃	(52)	17	4.7	(4.20)		先端	
1190	KKB-64	B2—9	〃	〃	50.5	19.5	4.2	4.60		完形	
1191	KKS-103	B3—14	4層	〃	73	25.5	7	13.55		〃	
1192	KKB-29	B1—16	〃	〃	57	24.7	5	6.28		〃	43
1193	2次S-168	B5—12	5層	〃	47.4	14.0	9.2	5.2		〃	
1194	1次S-225		3層	〃	54.3	20.8	11.3	9.8		〃	
1195	1次S-277		〃	〃	36.6	19.2	6.9	4.0		〃	
1196	1次S-350		〃	〃	51.2	27.4	11.6	10.3		〃	
1197	2次S-163	B5—16	5層	〃	53.0	21.8	10.0	13.2		〃	
1198	1次S-316		3層	〃	29.0	36.0	11.3	8.3		〃	
1199	1次S-220		〃	〃	23.4	26.7		3.0		〃	
1200	1次S-148		〃	〃	17.0	32.4	13.2	5.5		〃	
1201	1次S-221		〃	〃	20.7	12.1	3.4	0.9		〃	
1202	1次S-149		〃	〃	17.9	19.1	7.1	2.2		〃	
1203	1次S-351		〃	〃	16.6	31.1	16.2	5.5		〃	
1204	2次S-256	B6—14	〃	〃	24.7	21.5	8.9	(2.95)		〃	
1205	2次S-240		2層	〃	29.3	35.4	11.2	7.4		〃	
1206	2次S-173	B6—13	3層	〃	41.5	30.0	9.7	8.3		〃	
1207	KKB-57	B1—16	4層	〃	39.2	13.5	3.5	2.30	彫器	〃	
1208	KKS-124	B3—10	3層	〃	20.5	21	5	2.10		〃	
1209	KKS-113	B3—13	〃	〃	19.5	19	6.5	1.50		〃	

る。手ずれと考えられるものについてはその石器の調整痕と使用痕の状況を加味することによって保持の方法がかなり限定して推察されるのである。(1161・1178・1179・1188～1190・1223・1227・1228・1231・1233)

Ⅱ類　縦長剝片を素材に用いている点は基本的に共通するがⅠ類に比較すると長さ幅ともに若干小形で，しかも背面は横方向からの剝離面や自然面によって形成されているものなどが大



第98図　削器・掻器実測図 (3) (3/5)



第99図　削器・掻器実測図 (4) (3/5)

半を占めている。石核から剝離された初期の段階の縦長剝片が多く利用されていることを知るのである。側辺の調整剝離はⅠ類と比べて幾分角度が大きくしかも素材の剝片をかなり大幅に整形し，刃部の形状は全般的に大きく彎曲するものが顕著である。使用痕と考えられる痕跡が刃部近くや中央部に観察されるものも存在している。(1087・1159・1160・1163・1180・1182・1185・1191～1195・1226・1232・1234・1237・1239・1240)

(14) 掻　　器

不定形な剝片の側辺に二次加工が施されたものを一括して掻器と考えたのである。大部分の剝片には自然面あるいは節理面を残しており，極端に厚味のあるものと小さくて薄いものとが見られる。

Ⅰ類　やや大きめの厚味のある剝片が用いられており，その加工も素材が厚いことに関連して，調整剝離の角度も大きく広いため全般に粗雑な感じを受ける。(1183・1196～1198・1200

・1203・1205・1206・1210・1213・1235・1236)

Ⅱ類　小形薄手の剝片を用いている。その調整は旧石器時代のナイフ形石器のブランティングを彷彿させる直角に近い小さな剝離が施されている。刃部がほぼ直線的ないわゆる小形のエンドスクレィパー的なものと，彎曲するコンケィブスクレィパー的なものとが共に数点出土している。Ⅱ類は小形でしかも特徴的な刃部の様子からある種の限定した機能・用途を窺うことができよう。(1201・1202・1204・1208・1209・1218・1238)

その他の剝片石器

1150～1152は両面ないし半両面加工の極めて小形の石器である。周囲に見られる調整から考

表42　削器・掻器計測表(2)　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考	図版No.
1210	2次S-180	B6—11	3層	黒曜石	30.1	26.6	4.0	3.6		
1211	1次S-355		〃	サヌカイト	(21.1)	(23.1)	6.7	(3.2)	石匙(?)	
1212	1次S-151		〃	黒曜石	33.3	23.8	8.6	5.5	〃	
1213	1次S-474		フク土	〃	27.8	25.8	8.6	6.7		
1214	KKB- 43	B2—12	1層	〃	18.65	21.5	2	1.10	不明	
1215	2次S-162	B5—12	5層	〃	28.0	16.5	4.9	1.7		
1216	2次S-182	B6—13	3層	〃	27.8	11.2	5.1	1.8	彫器	
1217	2次S-185	B6—10	〃	〃	24.6	8.2	4.1	1.6	不明	
1218	S-172	3号住	フク土	〃	26.0	21.2	6.0	3.2		
1219	2次S-184	B6—10	3層	〃	28.4	15.2	4.3	2.4		
1220	2次S-191	B6—11	5層	〃	27.8	19.2	5.8	2.0		
1221	2次S-505		1層	〃	34.6	13.4	4.2	2.0		
1222	2次S-363	B5—12	3層	〃	31.6	17.6	5.3	2.5		
1223	2次S-346	B6—13	〃	〃	47.4	29.1	4.6	8.9		
1224	2次S-426	B5—16	〃	〃	28.0	25.0	6.6	4.4		
1225	1次S-217		〃	〃	32.1	18.8	5.0	3.2		43
1226	1次S-146		〃	〃	36.3	18.8	4.5	3.0		
1227	1次S-135		〃	〃	54.7	24.2	6.2	9.6		
1228	1次S-275		〃	〃	69.7	28.6	6.2	10.5		
1229	1次S-140		〃	〃	28.6	11.7	2.5	0.7		
1230	1次S-141		〃	〃	25.7	12.0	4.4	1.7		
1231	2次S-153	B6—10	5層	〃	57.1	22.2	4.4	7.2		
1232	1次S-402		11層	〃	54.1	14.1	6.4	4.1		
1233	1次S-414		3層	〃	58.0	21.4	6.5	7.1		
1234	1次S-480		フク土	〃	65.0	14.6	5.3	4.0		
1235	1次S-147		3層	〃	30.4	14.3	5.0	1.8		
1236	1次S-352		〃	〃	21.2	31.2	5.0	(2.6)		
1237	1次S-280		〃	〃	42.5	24.3	4.0	5.9		
1238	1次S-281		〃	〃	23.8	16.6	4.3	1.5		
1239	2次S-345		〃	〃	44.3	19.0	5.5	6.2		
1240	2次S-177	4号住	フク土	〃	47.4	18.2	4.8	4.6		

えてそれ自体石器として完成していると判断できるであろうが，1150・1151については石錐の刃部の再加工とも思考される。1149・1153～1155については両端ないし一端がカットされておりその形態から推測すると石錐の刃部が予想されるであろう。1157・1158・1162はサイドブレードとして把握できそうな資料であるが，石錐の中に類似したものが存在することを考慮して一応石錐としておきたい。1207・1216は彫器に含められるものである。1211はサヌカイト製で横型石匙の欠損したものと判断できる資料であるが，当遺跡出土の石器に典型的な横型石匙の完形品を1点も認められないので一抹の不安を残すのである。1212についても同様に考えられる資料である。1189・1214・1217・1229はカットされている部分が大きいため器種の認定は困難とされる。1166・1168・1187は風化が著しく進んでおり判断しかねる。サイドブレイドとして把握できそうにも思えるが，カットされた断面およびそのエッヂの観察は行えないので一応分離しておきたい。

こゝで図示していない資料中にも不定形な黒曜石の剝片の一部に二次加工の調整剝離を施した石器が認められる。また一方では製作途上の未製品や製作過程での放棄品と推測されるもの，あるいは再加工による器種の変更の意図が窺えるもの，破損品などが存在している。これらの認定には多大な困難が予想されるであろうが，今後不定形な石器も含めて破損品・未製品・放棄品・再加工品などの石器についての究明が必要と考えられる。　　（橘　昌信）

サヌカイト製の削器・掻器（第100～102図）

ここではいわゆるサヌカイト（註1）を石材としたスクレイパーを取り扱う。「スクレイパーは生活用具であり，様々な機能を持った万能の道具として使用された」（註2）と定義されている。従ってその様々な目的にそって素材が考えられ，その素材に調整・加工を施していると考えられる。もちろん，雑器的という性格であるが故に素材について選択もされず，調整・加工も施されない事もありうる。この章ではその前提のもとに，「素材の形状」「重量」「厚さ」と「調整剝離」「刃部の位置」更には「刃部の角度」「使用痕」について観察し記述した。記述と理解の便義上，まず素材の形状・刃部の位置等に注目しそれにより分類し説明する。

Ⅰ類　（1241～1244）

Ⅰ類としたのは縦長の大形剝片を素材とし，粗いバルブ調整を施しており，刃部は一側辺に片面から簡単な加工を施しているタイプである。1241は縦長の剝片の一側辺に主要剝離面から主に刃部を形成している。調整剝離は殆んど施さず，刃部反対側辺は平らな自然面をそのまま残し保持しやすいようにしている。石質はやや不純物を混じ，黒灰色のサヌカイトである。1242は縦長の剝片を素材にし，調整剝離は主要剝離面・表面共に施していない。縁辺部は折損している。刃部は表面から簡単な加工で形成している。石質は粗く，灰色を呈したサヌカイトである。1243も刃部は片面から一側辺部のみに加工している。刃部の一部分には，刃つぶれ現

象が認められる。石質はやや粗く，黒色のサヌカイトである。1244も刃部は一側辺に片面から加工している。その反対側辺には保持の為の調整剥離を施している。石質はキメが細かく，色調は漆黒色に近いものである。

Ⅱ類　(1245・1246・1248～1250)

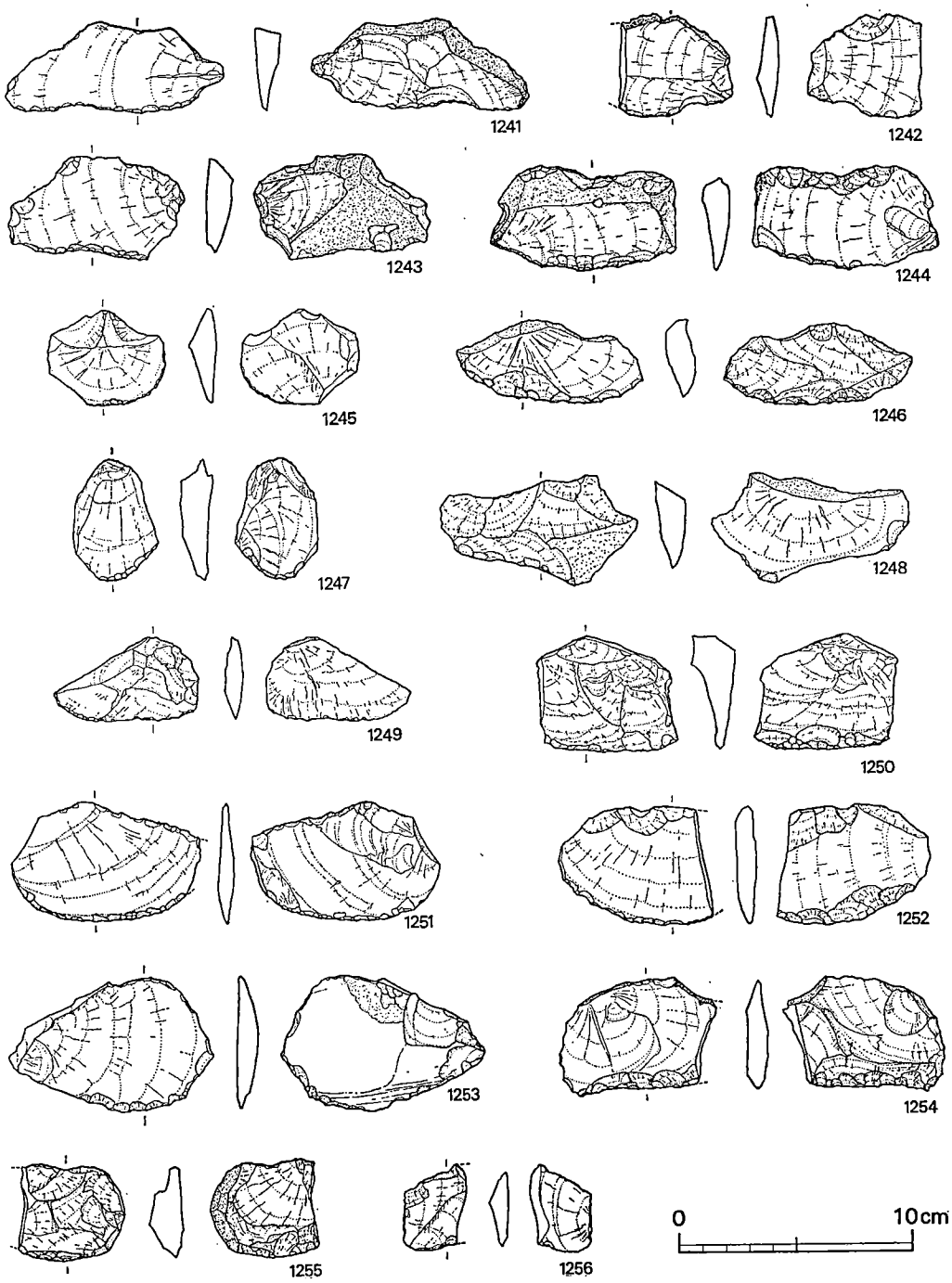
Ⅱ類に属するものは，横長の剥片を素材とし縁辺部に刃部を形成しているタイプである。刃部形成は粗雑であり，使用痕が多く認められる。石質は余り良くないサヌカイトである。1245は両面共に調整剥離を施さず風化した面そのままを残している。刃部は主要剥離面から主に加工している。石質は黒灰色の粗いサヌカイトである。1246は打面側に自然面をそのまま残し，刃部加工は両面から施している。石質はやや粗く，色調は灰色を呈している。1248も打面に自然面を残し，表面に若干の調整剥離を施しているスクレイパーである。刃部は殆んど加工せず，鋭利な縁辺を利用しているかと思われる。石質は黒灰色の粗いものである。1249は若干のバルブ調整を施し，表面にも簡単な調整剥離を加えている。刃部は細くなった横長剥片の縁辺部に片面から加工している。石質は不純物多く，茶灰色。1250は横長の剥片の両側辺を切り取り，刃部は縁辺に両面から形成している。主要剥離面には若干のバルブ調整を施し，表面は保持の為か厚い断面をそのまま残している。

Ⅲ類　(1251～1254)

やや大形の縦長の剥片を素材とし，刃部は側辺と縁辺にていねいな加工を施しているタイプである。1251はバルブ調整を施し，打面は自然面を残している。刃部は両側辺と縁辺に両面からていねいに加工している。ラウンド・スクレイパーであろう。石質はややきめが細かく，灰黒色である。1252はバルブ調整をていねいにし，頭部を除去している。表面は研磨したかの如くなめらかである。刃部は側辺と縁辺に片面からていねいに加工している。石質は良質のサヌカイトで，色調は灰色を呈している。1253は磨製石器（石斧か？）の破片を転用したスクレイパーである。剥片の形態としては縦長となっている。バルブ調整を施し，頭部を切り取っている。刃部は剥片の鋭利な縁辺部を利用せんとしているが一応縁辺部と側辺部に両面から加工している。石質は良質の安山岩である。1254は頭部を切り取り，両面に調整剥離を施している。刃部は主要剥離面側から縁辺と側辺に，表面は側辺に形成している。石質はかなり良質のサヌカイトで黒色に近い色調を呈している。

Ⅳ類　(1257～1259)

第Ⅳ類としたのは，大形の厚い縦長剥片を素材とし，調整剥離を余り施していないタイプである。刃部は縁辺か側辺のいずれか一辺に形成している。1257は打面と側辺の一部に自然面を残し，調整剥離は殆んど施していない。刃部は側辺に粗い加工で形成しているが，鋭利な縁辺も利用している。刃部でない側辺には保持の為と思われる調整剥離を施している。石質はやや緻密で，灰黒色サヌカイトである。1258は打面に両面から調整剥離を施し，保持しやすくして



第 100 図　削器・掻器実測図 (5) (1/3)

いる。刃部は剝片の先端に両面からていねいに形成している。石質はやや良質の黒灰色サヌカイト。1259はバルブ調整を施し，表面は全体に粗い調整剝離を施している。打面に保持の為の調整剝離をしている。刃部は主要剝離面から加工しているが，かなり使用したのか刃つぶれ現象がみられる。石質はかなり粗く不純物の多い，暗茶灰色である。

Ⅴ類（1260～1262）

薄手の半円形に近い剝片を素材とし，刃部は縁辺と側辺に両面から形成しているものが多いタイプを第Ⅴ類とした。1260はバルブ調整を施し，頭部を折り取っている。刃部は主要剝離面から形成している。石質はやや不純物の混じった黒灰色サヌカイトである。1261は打面と一側辺に自然面を残している。刃部は両面からていねいに加工している。石質は良質の青灰色サヌカイトである。1262は打面を調整し，頭部を折り取っている。刃部は両面から加工している。石質は良質で，青灰色サヌカイトである。

Ⅵ類　（1263～1265）

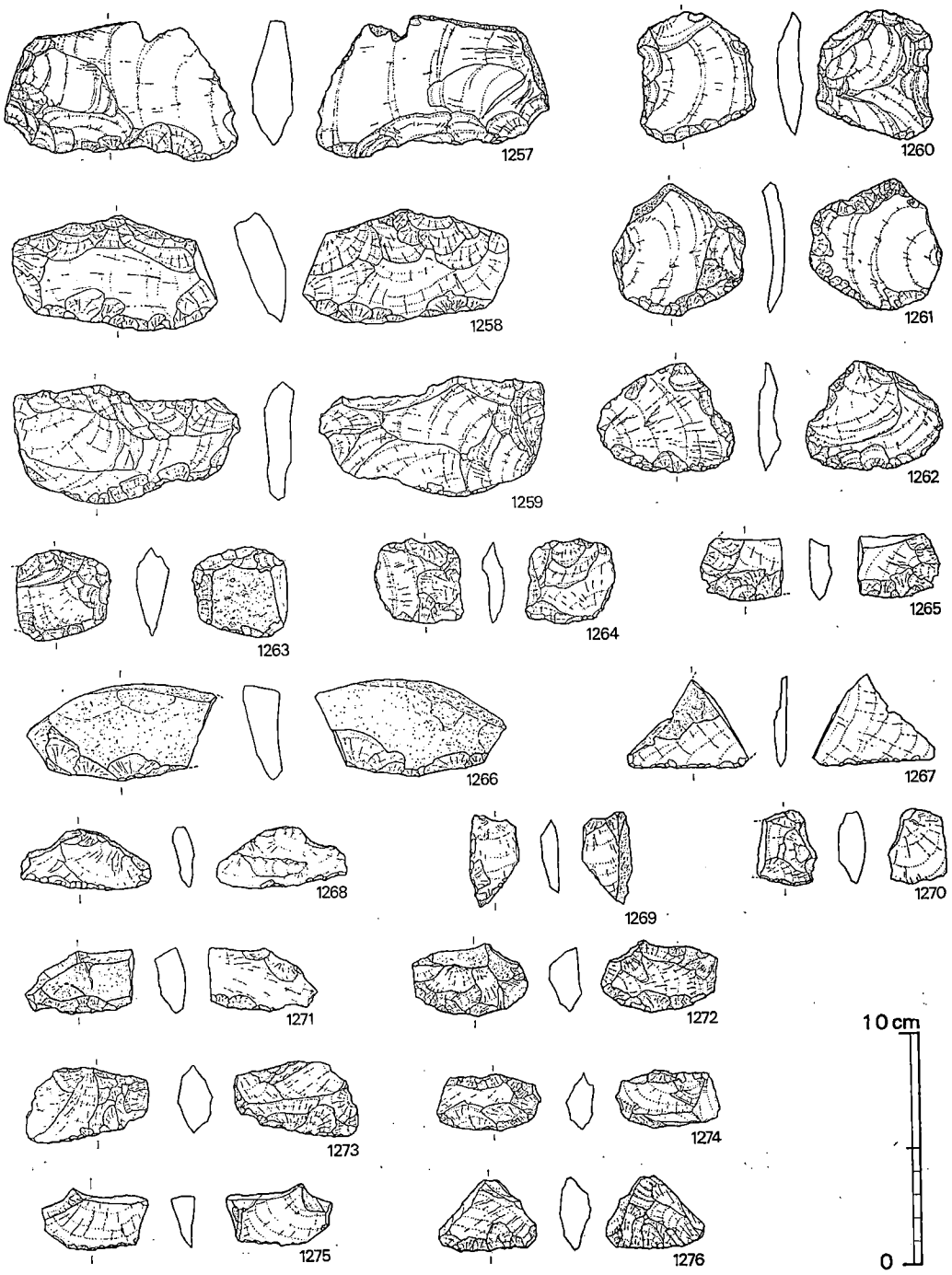
剝片の形態は楕円形に近い小さな剝片で，二辺に刃部形成をしているタイプである。1263は表面をそのまま残し，主要剝離面に若干の調整剝離をしている。頭部を折り取り，縁辺・側辺に刃部加工を施している。もう一側辺には保持の為の調整剝離を加えている。石質は良質で，灰色サヌカイトである。1264は縁辺・側辺の二辺に刃部を形成し，やや不純物の多い石質で，灰色を呈している。1265は二辺が放棄後の新らしい剝離で割れてしまっているが，素材はやはり楕円形に近いものを利用していると思われる。両面共風化が激しいので，調整剝離はわからない。

Ⅶ類　（1271～1274）

小さな拇指形の剝片を素材とし，縁辺部カットして側辺に刃部を片面から形成しているタイプである。1271は頭部と縁辺を折り取り，その後縁辺部にノッチを入れて，つまみ状にしている。刃部は片面から加工しており，刃つぶれ現象が起きている。石質は青黒色の良質なサヌカイト。1272は表面に自然面を風化面そのまま残しているが，主要剝離面は全面に調整剝離を施している。刃部は主要剝離面側から粗い刃作りをしている。刃つぶれ現象がみられる。石質は不純物が混入しており，茶灰色サヌカイトである。1273は主要剝離面全面にわたり調整剝離を施している。打面側には簡単なノッチを加え，つまみ状のものを形成している。縁辺は折り取っている。刃部は表面から粗い剝離を加えている。刃つぶれがみられる。石質はやや不純物が多く，色調は黒灰色を呈している。1274はバルブ調整を粗く施し，打面は小さく残している。縁辺は折り取っている。刃部は主要剝離面側から加工している。石質は不純物をやや混じ，黒灰色である。

Ⅷ類　（1277～1279）

第Ⅷ類としたのはいわゆる石匙と呼称されているものである。1277は石錘形状をした石匙である。打面は頭部を折り取り，ていねいに調整している。表面は一部自然面を残しているが，



第 101 図　削器・掻器実測図 (6) (1/3)

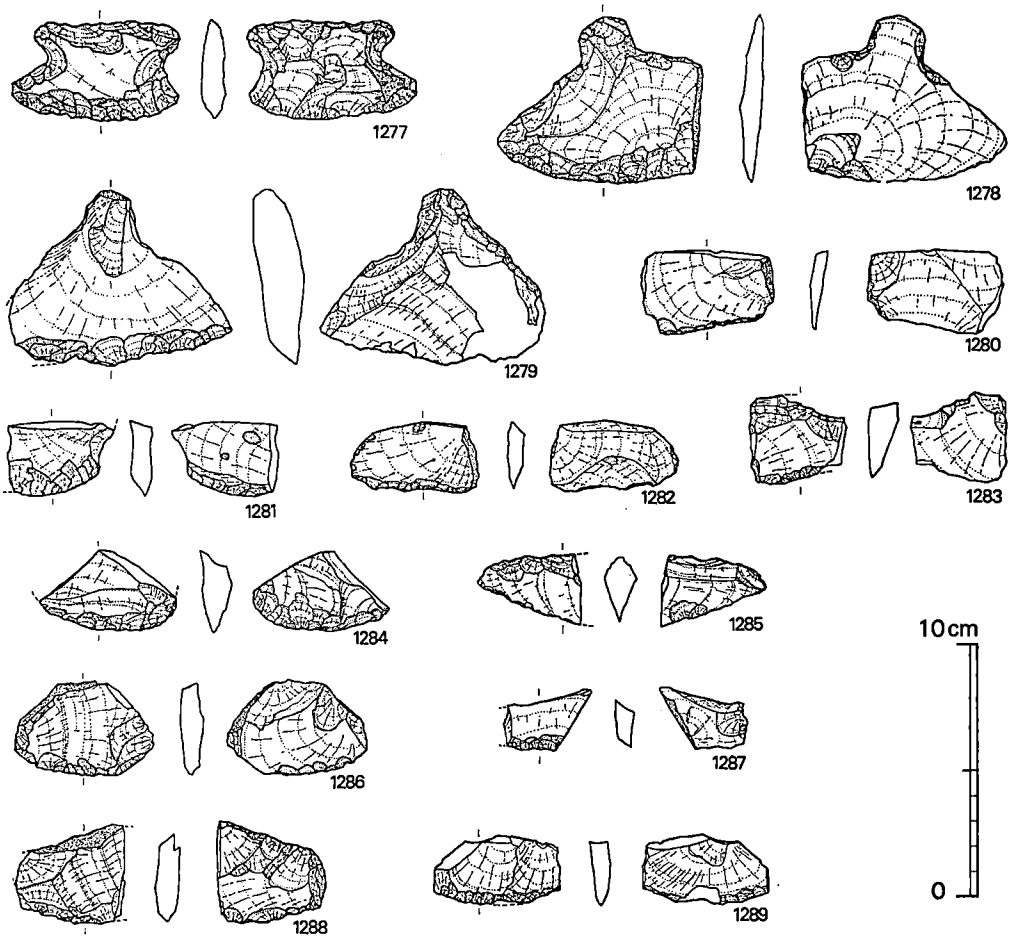
それ以外は全面に調整剝離を施している。刃部は主要剝離面からていねいに，表面から簡単な加工を施している。打面側と縁辺側に大きなノッチを加え石錘形にしている。その部分には刃つぶれ現象が認められる。石質は良質で，灰黒色サヌカイトである。1278は横長剝片を素材とした石匙である。打面にはバルブ調整を施し，そこに刃部を形成している。又，側辺にも表面から剝離を施し，刃部を形成している。つまみは縁辺部にノッチを加えて作り出している。石質はかなり良質で，灰色サヌカイトである。1279も横長の剝片を素材とした石匙である。バルブ調整を施し，打面側にノッチを加えつまみとしている。刃部は縁辺に主要剝離面から加工している。石質は良質のサヌカイトだが，表面風化し灰白色を呈している。

Ⅸ類　(1268・1280～1283・1289)

第Ⅸ類としたのは，薄い小形の横長剝片を素材とし，刃部は縁辺に形成しているタイプである。1268は主要剝離面そのままにし，刃部は表面から縁辺に形成している。石質はやや良質の青灰色サヌカイトである。1280は若干のバルブ調整を施し，刃部は縁辺に主要剝離面から，細かくていねいな加工を施している。側辺の一辺は自然面を残しそこに表面からのノッチらしき痕跡を認める。他の一辺は折り取っているか折損していると思われる。石質は不純物の少ない灰色サヌカイトである。1281は刃部を縁辺に両面から形成している。両側辺を折り取っている。石質は良質で，灰色サヌカイトである。1282は若干のバルブ調整を施し，刃部は縁辺と一側辺とに片面からていねいに形成している。石質は良質で，灰色サヌカイトである。1283はバルブ調整を施し両側辺は折り取っているか折損している。刃部は縁辺に表面から加工している。石質は不純物の多いやや混じた黒灰色を呈している。1289は若干のバルブ調整を施し，縁辺に両面から刃部を形成している。石質は余り良くない暗灰色サヌカイトである。

Ⅹ類　その他 (1247・1255・1256・1266・1267・1269・1270・1284～1288)

1247は縦長の剝片を素材とし縁辺に刃部を形成している。石質はかなり粗く，黒灰色のサヌカイトである。1255は横長剝片を素材とし，一側辺に自然面を残し，他側辺は折り取っている。刃部は縁辺に形成している。刃つぶれ現象がみられる。石質はやや良質で，黒灰色である。1256は縁辺を折り取っている縦長剝片を素材とし，両側辺とも刃部として利用しているスクレイパーである。石質はややきめの細かい，茶灰色サヌカイトである。1266は剝片ではなく，石器として都合の良い礫を素材としている。一辺を折り取り，一辺に刃部を両面から形成している。刃つぶれ現象がみられる。石質は大半が自然面であるが，不純物が多く粗い，灰色を呈している。1267は不定形の薄い剝片を素材としている。三角形の最長辺を刃部として利用し，両面から形成している。石質は不純物のやや多い，灰黒色サヌカイトである。1269は不定形の剝片を素材とし，尖った先端二辺に片面から刃部を形成している。打面は自然面を残している。石質はやや良質で，黒灰色サヌカイトである。1284は二辺を折り取った不定形の剝片である。刃部は最長辺に両面から形成している。石質は良質のサヌカイトである。1287は打面に自然面残した不



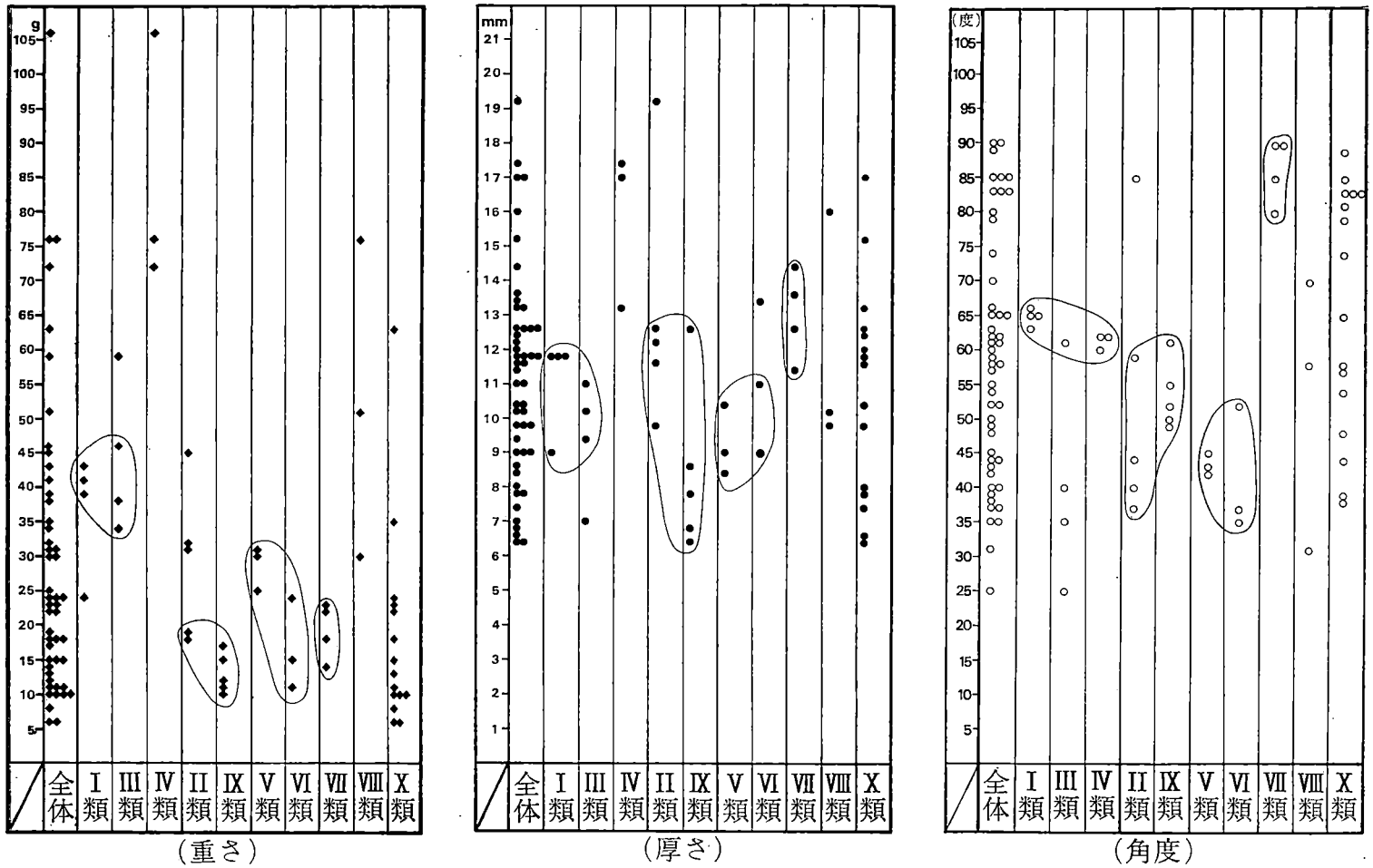
第 102 図　削器・掻器実測図 (7) (1/3)

表 43　削器・掻器計測表 (3)　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物 No.	地区	層序	石質	長さ	幅	厚さ	重量	角度	備考
1241	KK1S-367			サヌカイト	36.2	91.6	11.8	39.45	63°	Ⅰ類
1242	KKS- 61	B2—10	4層	〃	42.7	48.2	9.0	24.20	65°	Ⅰ類
1243	KKS- 108	B1— 9	1層	〃	43.3	73.5	11.7	41.45	65°	Ⅰ類
1244	KKS- 43	B2— 9	4層	〃	39.8	78.6	11.8	43.20	66°	Ⅰ類
1245	KKS- 42	B1—12	4層	〃	40.2	50.0	12.1	18.85	40°	Ⅱ類
1246	KKS- 83	B9— 4	3層	〃	34.0	76.8	11.6	31.70	59°	Ⅱ類
1247	KKS- 102		4層	〃	50.0	35.3	12.6	22.85	79°	Ⅹ類
1248	KKS- 37	B2— 9	4層	〃	43.4	80.0	12.5	30.90	44°	Ⅱ類
1249	KKS- 13	B6—11	5層	〃	37.1	54.8	9.7	18.30	37°	Ⅱ類

表44　削器・掻器計測表(4)　(単位 mm・g)

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	幅	厚さ	重量	角度	備考
1250	KK1S-430			サヌカイト	48.5	56.1	19.1	44.70	85°	Ⅱ類
1251	KK1S-353			〃	49.8	76.6	7.0	33.50	25°	Ⅲ類
1252	KKS-100	B4—10	5層	〃	50.7	62.2	9.3	37.50	35°	Ⅲ類
1253	KKS-130	B1—15	4層	〃	85.8	57.2	10.9	59.10	40°	Ⅲ類
1254	KKS-84	A9—15	3層	〃	48.2	59.6	10.1	45.70	61°	Ⅲ類
1255	KKS-60	B3—13	2層	〃	39.1	42.0	15.1	35.20	74°	Ⅹ類
1256	KK2S-512			〃	26.2	31.4	8.0	7.90	65°	Ⅹ類
1257	KK1S-160			〃	55.5	99.0	17.0	106.00	60°	Ⅳ類
1258	KK1S-354	B4—12	3層	〃	45.5	83.2	17.3	75.50	62°	Ⅳ類
1259	KKS-101	A7		〃	50.2	96.5	13.2	71.90	62°	Ⅳ類
1260	KK1S-462			〃	51.2	46.8	10.4	30.30	42°	Ⅴ類
1261	KK1S-439	A7		〃	55.9	57.0	8.4	31.40	43°	Ⅴ類
1262	KKS-12	B5	2層	〃	46.3	59.0	8.9	25.00	45°	Ⅴ類
1263	KKS-28		1層	〃	36.8	40.5	13.3	24.00	37°	Ⅵ類
1264	KKS-5	B6—9	5層	〃	34.7	36.5	11.0	14.60	35°	Ⅵ類
1265	KKS-75	B1—10	3層	〃	25.8	34.1	9.0	10.85	52°	Ⅵ類
1266	KKS-114	B2—10	3層	安山岩	41.0	82.4	17.0	63.00	83°	Ⅹ類
1267	KKS-138	B4	2層	サヌカイト	37.4	52.3	6.4	10.10	54°	Ⅹ類
1268	KKS-39	B1—12	5層	〃	25.3	55.0	7.8	10.10	61°	Ⅸ類
1269	KKS-74	B1—12	3層	〃	21.4	37.9	7.7	5.90	57°	Ⅹ類
1270	KKS-56	B3	2層	〃	31.0	24.0	11.8	10.50	83°	Ⅹ類
1271	KKS-82	B2—11	2層	〃	27.2	45.5	12.6	18.40	90°	Ⅶ類
1272	KKS-133	B7—13	3層	〃	29.1	48.3	13.5	23.45	80°	Ⅶ類
1273	KKS-68	B2—10	4層	〃	30.8	49.3	14.4	21.95	85°	Ⅶ類
1274	KKS-117	B1—14	4層	〃	24.0	41.4	11.3	13.50	90°	Ⅶ類
1275	KKS-51	B2—14	4層	〃	26.6	45.0	10.4	12.90	39°	Ⅹ類
1276	KKS-36	B1	1層	〃	30.3	40.8	12.0	14.70	85°	Ⅹ類
1277	KKS-139	B4	2層	〃	39.1	65.5	10.2	30.10	70°	Ⅹ類
1278	KKS-85	B1—14	4層	〃	64.4	79.4	9.7	50.75	31°	Ⅷ類
1279	KKS-129	B1—14	3層	〃	67.4	87.0	15.9	75.65	58°	Ⅷ類
1280	KKS-33	B2—12	4層	〃	32.0	51.9	6.4	12.20	52°	Ⅹ類
1281	KKS-126	B1—16	3層	〃	28.4	40.0	8.5	15.00	55°	Ⅹ類
1282	KKS-44	B1—13	3層	〃	26.9	49.2	6.8	11.40	49°	Ⅸ類
1283	KKS-120	B2—12	2層	〃	31.8	37.2	12.6	16.50	50°	Ⅸ類
1284	KK1S-279			〃	32.5	54.0	12.4	18.00	48°	Ⅹ類
1285	KKS-9	B5—10	2層	〃	41.0	25.2	13.2	10.20	44°	Ⅹ類
1286	KKS-27	B1—16	4層	〃	36.1	53.1	9.7	24.40	83°	Ⅹ類
1287	KKS-116	B1—14	4層	〃	21.0	30.0	6.6	5.50	58°	Ⅹ類
1288	KKS-55	B1—15	4層	〃	38.5	41.4	11.3	22.05	89°	Ⅹ類
1289	KKS-132	B5	2層	〃	24.3	48.2	7.3	10.40	38°	Ⅹ類



(重さ)　(厚さ)　(角度)

第 103 図　削器・掻器計測値分布

定形剝片を素材としている。刃部は一側辺に表面から形成している。他の側辺と縁辺は折り取っている。石質は灰色を呈する良質のサヌカイトである。1288は縁辺を折り取った不定形の剝片を素材としている。自然面を残した側辺の反対側辺に両面から刃部を形成している。石質はやや不純物が混じ，黒灰色サヌカイトである。

以上これまで素材の形状，刃部形成を中心に，形態分類し説明してきたが，その他の点について言及しまとめてみたい。もちろん，50点未満という限定された点数の中での論述なので限界性はある。その限界性を前提としたまとめである事をまず最初にことわっておきたい。（第103図参照）

剝片の形態については，これまで述べた通り縦長剝片・横長剝片・半円形もしくは楕円形の剝片・拇指形剝片・その他不定形の剝片とがある。刃部の位置については，側辺・縁辺・側辺と縁辺・二側辺・その他とに分類出来た。以下ではそれに基づき形態分類と重量・厚さ・刃部の角度（註3）・刃つぶれ現象の有無等との関連性について言及してみたい。

まず縦長の剝片はⅠ類・Ⅲ類・Ⅳ類とがある。点数は11点で柏田遺跡出土のサヌカイト製スクレイパーの20%強を占める。重量では約34～106 g とかなりの幅がある。Ⅳ類が約72～106 g と非常に大きい数値を示し，他は 40 g 前後とやや大きめのものが多い。厚さでもやはり9.0～17.3㎜とかなりのばらつきを示している。角度では 25～66° とやや幅のあるようにみえるが，Ⅲ類が25～61°でばらつきその他は大半が60°代である。分類別にみてみると，Ⅰ類はやや大形の縦長の剝片を利用し，刃部は一側辺に形成し，石質は不良である。重量は約36～43 g ・厚さは 1 点 9 ㎜のものがあるが他は11.7～11.8㎜・刃部角度は 63～66° と素材の形態のわりには安定した数値を示している。Ⅲ類はやや大形の剝片を利用し，刃部は側辺と縁辺に形成し，石質は良質のサヌカイトを選定している。重量は約34～49 g ・厚さ 7.0～10.6 ㎜・刃部の形態のわりには数値にばらつきがある。Ⅳ類は非常に大きい縦長剝片を素材とし，刃部は縁辺に主に形成し，石質はやや良質のサヌカイトを利用している。重量は約72～106 g ・厚さ 13.2～17.3 ㎜・刃部角度 60～62° を示している。縦長剝片は総じて雑器的な様々な用途が考えられる。

横長剝片としては，Ⅱ類・Ⅸ類がある。点数は12点で20%強を占める。重量では約11～32 g ，厚さ6.4～12.6㎜とかなり幅があるが，Ⅱ類とⅨ類とでは区分される。刃部角度は37～59°だが大半が50°前後に集中している。Ⅱ類は横長の剝片を素材とし，刃部は縁辺部に粗く形成している。石質は粗い。重量は18～32 g ，厚さは9.7～12.6㎜，刃部角度は37～59°である。Ⅸ類は薄い小形の横長剝片を素材とし，縁辺に刃部を形成している。石質は良質のサヌカイトである。横長剝片は総じて削器的な使用をしていると思われる。半円形もしくは楕円形の剝片については，Ⅴ類・Ⅵ類とがある。点数は 6 点で10%強を示している。重量はⅤ類とⅥ類とでは大きく違い，Ⅴ類は約25～31 g で30 g 前後に集中し，Ⅵ類は約11～24 g である。厚さではやや近似値を示し8.4～13.3㎜であり，刃部角度でも35～52°と近似値を示す。刃部は両方共側辺と縁

辺の二辺に形成され，ラウンド・スクレイパー状になっている。用途としては削器的であると考えられる。

拇指形をした剝片はⅥ類である。点数は4点で約8％を占める。重量は14～23ｇでかなり小さい部類にはいる。厚さでは11.3～14.4㎜で，大きさのわりにはかなり厚味がある。刃部は3点が側辺一辺に，他の1点は両側辺に形成している。石質はやや不純物の多いサヌカイトを利用している。刃部角度はこのタイプの最も特徴ある点で，80～90°のかなり広角度を示している。又，いわゆる刃つぶれ現象が多く認められる。この拇指形剝片は掻器的な用途に使われたと考えられる。

Ⅷ類の石匙状のものについては，重量・厚さ・刃部角度について近似値を示すと思われたが実際はその逆で非常に大きなばらつきを示している。点数のわりにはばらつきがあると思われるが，それを言うには余りにも点数が少なすぎる。但し，石質についてはかなり選定していると思われる。つまみを有しているという石器の形状にこそ意味があるのかも知れない。

Ⅹ類のその他のグループについては，素材の形態・刃部形状等については法則性がみられないが，大きさ・重さについては6～24ｇと非常に小さい値を示している。その他，厚さと刃部角度については非常に大きなばらつきを示している。これは不定形の剝片を殆んど刃部形成もせず利用したのではないかと考えられるが確証はない。

以上の説明してきたスクレイパーの時期についてであるが，遺構ないしは土器に伴うものは1点もなく全く包含層出土のものである。従って時期の同定については厳密な判断は出来ない。但しこの柏田遺跡は縄文時代後期北久根山式土器を主体とする遺跡である。又，層位的には北久根山式土器を主に包含する層から，スクレイパーも多く出土している。従って少なくとも言える事は，スクレイパーについても同時期の遺物と考えて良い可能性があるという事である。厳密な時期判断については，この時期の他の調査類例の増加を期待したい。

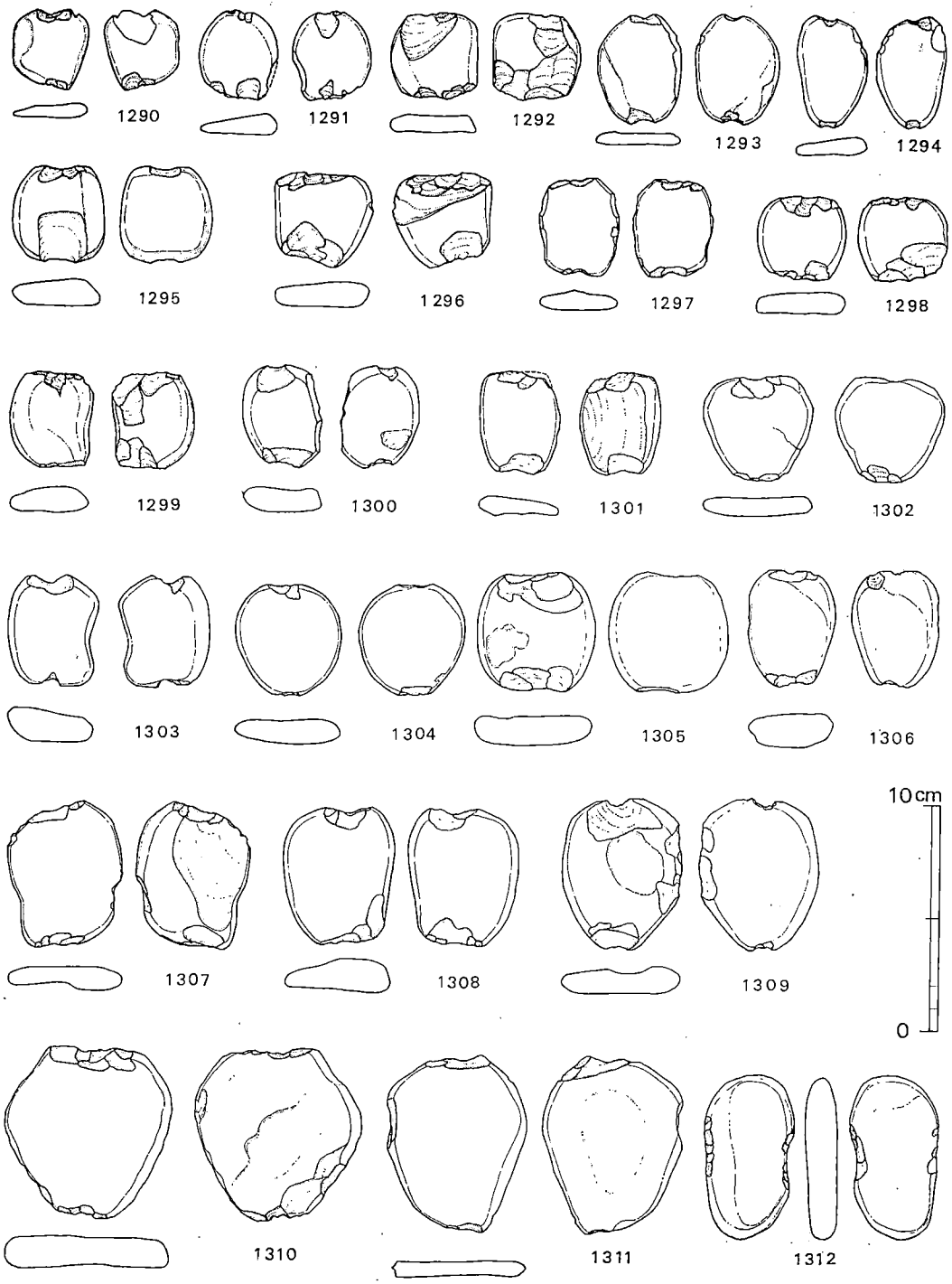
以上，柏田遺跡出土のサヌカイト製スクレイパーについて論及してきたが，断片的なものに終始してしまった。いま少し詳しい分析と相互の関連性について論及したかったが，今後に託したい。

（藤瀬禎博）

註1　岩石学上でいう「サヌカイト」と考古学上のそれとはかなり違い，後者の方が広義に使用されている。この稿は後者に従った。
2　吉田格「日常生活用具」『日本の考古学Ⅱ』1965
3　重量については破損している場合もあるが現状で計測した。厚さについてた実測断面の最も厚い部分を計測した。刃部角度についてもやはり実測断面を計測した。

⑮　石　錘

石錘は破損品を含めて29点出土した。このうち表採等出土地の不明な点を除いた27点の出土地区別分布を第105図に示すが，Ｂ２区を中心とした地域とＢ６区を中心とした地域で比較的集中して出土した。



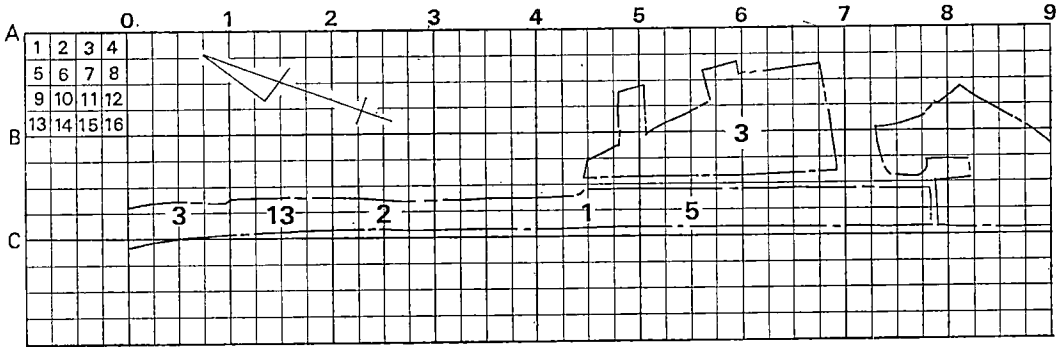
第104図　石　錘　実　測　図 (1/3)

表45　石　錘　計　測　表　　（単位 mm・g）

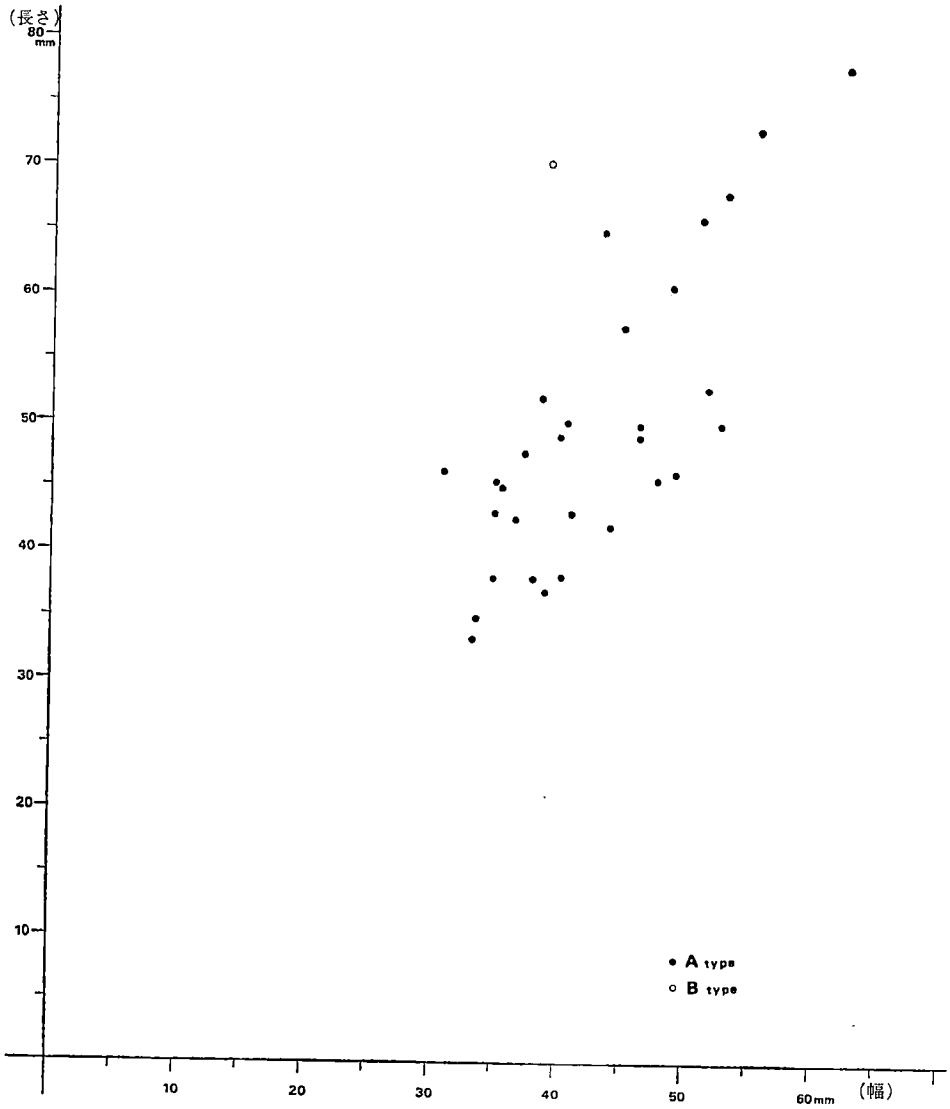
実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	有効長	最大幅	厚さ	重さ	備考	残存状況	図版No.
1290	KKNC- 2	B2— 9	4層		35.0	30.0	33.5	6	(8.5)	打欠石錘A	一部欠損	
1291	KKNC- 8	B1—16	3層		38.0	36.5	34.7	10	(14.4)	〃	〃	
1292	KKNC- 6	B1—15	4層		38.0	35.0	38.0	7.5	15.84	〃	完形	
1293	KKNC- 7	B5—11	5層		47.6	43.5	37.4	5.8	17.8	〃	〃	
1294	KKNC- 3	B6—10	3層		46.3	44.0	30.8	7.8	17.9	〃	〃	
1295	KKNC- 11	B3— 9	4層		43.0	39.5	41.0	12.0	32.28	〃	〃	
1296	KKNC- 17	B2—12	4層		42.0	35.5	44.0	11.0	26.55	〃	〃	
1297	KKNC- 22	B2—15	4層		43.0	29.5	35.0	10.5	18.35	〃	〃	
1298	KKNC- 16	B1—16	4層		37.0	32.5	39.0	9.0	19.0	〃	〃	
1299	KKNC- 26	B2—12	3層		42.5	40.5	36.5	11.0	22.47	〃	〃	
1300	KKNC- 14	B2— 9	4層		45.5	41.0	35.0	11.0	23.6	〃	〃	
1301	KKNC- 21	B3—14	4層		45.0	40.0	35.5	8.0	(18.9)	〃	一部欠損	44
1302	1次 S-111	?	?		45.7	43.8	47.7	9.0	28.2	〃	完形	
1303	KKNC- 25	—	—		49.0	42.0	40.0	15.5	36.15	〃	〃	
1304	KKNC- 1	B6—14	5層		49.0	47.7	46.3	10.5	39.7	〃	〃	
1305	1次 S-261	?	?		52.6	5.0	51.7	11.9	44.0	〃	〃	
1306	KKNC- 19	B2—10	4層		52.0	48.0	38.5	15.0	39.35	〃	〃	
1307	KKNC- 20	B2—10	4層		66.0	59.0	51.0	10.5	43.4	〃	ほぼ完形	
1308	KKNC- 4	B6—10	3層		60.6	57.0	48.7	14.6	52.4	〃	完形	
1309	KKNC- 9	B2—11	4層		68.0	63.0	53.0	12.0	53.8	〃	〃	
1310	KKNC- 15	B2— 9	4層		75.5	70.5	70.5	14.0	112.4	〃	〃	
1311	1次 S-110	?	?		77.6	74.1	62.4	8.6	61.6	〃	〃	
1312	KKNC- 10	B2—9	5層		70.3	34.5	39.0	14.5	45.75	打欠石錘B	〃	

石錘は全て打欠石錘(礫石錘)であり，形状から2種類に分類される。即ち素材の礫の長軸両端に糸掛けのための打欠きを施した例をA種，短軸両端に打欠きを施した例をB種とする。B種は1312の1点のみで他の全てA種である。縄文時代後期頃から九州地方にみられるとされる，切目石錘や有溝石錘はみられなかった。

重量は完形品で15.8g～112.4gを測り，30g以下のものが多い（第107図）・B種の例は



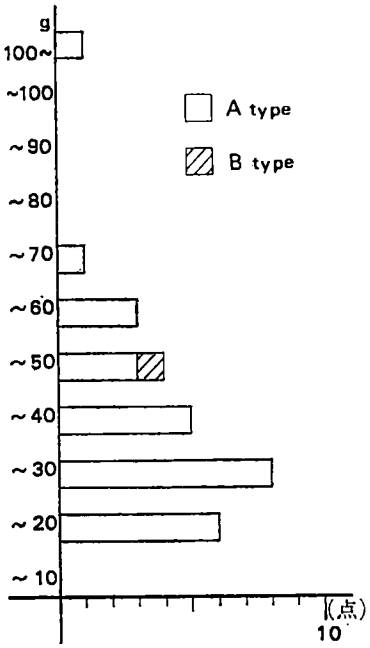
第105図　石錘の地区別分布



第 106 図　石錘の長さと幅による分布

45.8 g を測る。

素材の大きさによる分布を第106図に示すが，長軸と短軸の長さが同様なグループと，やや長軸の長いグループがあり，長軸のグループには大きさのばらつきがある。またB種はこれらのグループよりもなお長軸が長い。これからA種は比較的安定した大きさであることを知る。



第 107 図　石錘の重量分布

⑯　石　斧（図版45～47・第108図～第110図）

石斧は破損品を含めて86点出土した。完形品は８点である。地区の明確な資料76点のうち43%を占める33点がＢ２区より出土している。86点のうち39点を図示し計測表を付した。

石斧は，その製作技術の相違によって，磨製石斧・半磨製石斧・打製石斧に分類される。

磨製石斧　1313～1332の20点を図示した。図示しない資料に12点ある。これらの資料は次の８種類に分類される。

(1)　１類　乳棒状を呈し撥型でやや扁平なもの。1314・1316～1320がこの類に含まれる。

(2)　２類　乳棒状を呈すがやや厚みのあるもの，蛤刃で，刃先の角度はやや鈍い。1325・1326が含まれる。

(3)　３類　乳棒状であるが，基部が扁平なもの。1313がこの類に分類される。完形で，基部は使用によるものと思われる叩かれた痕跡を残す。研磨は全面に及ばず，両側面には整形時の痕跡が留まる。１類に近い。

(4)　４類　乳棒状の短冊型。1321～1324が含まれる。小形で短冊型。断面形は楕円形。

(5)　５類　小形で短冊型。断面形は楕円形であるが1315・1328・1329が含まれる。

(6)　６類　小形で短冊型。断面形は扁平で，側縁には角がつく。定角式に近い。1330・1331が含まれる。図示しない資料に２点みられる。

(7)　７類　定角式。1327があり，図示しない資料に２点みられる。

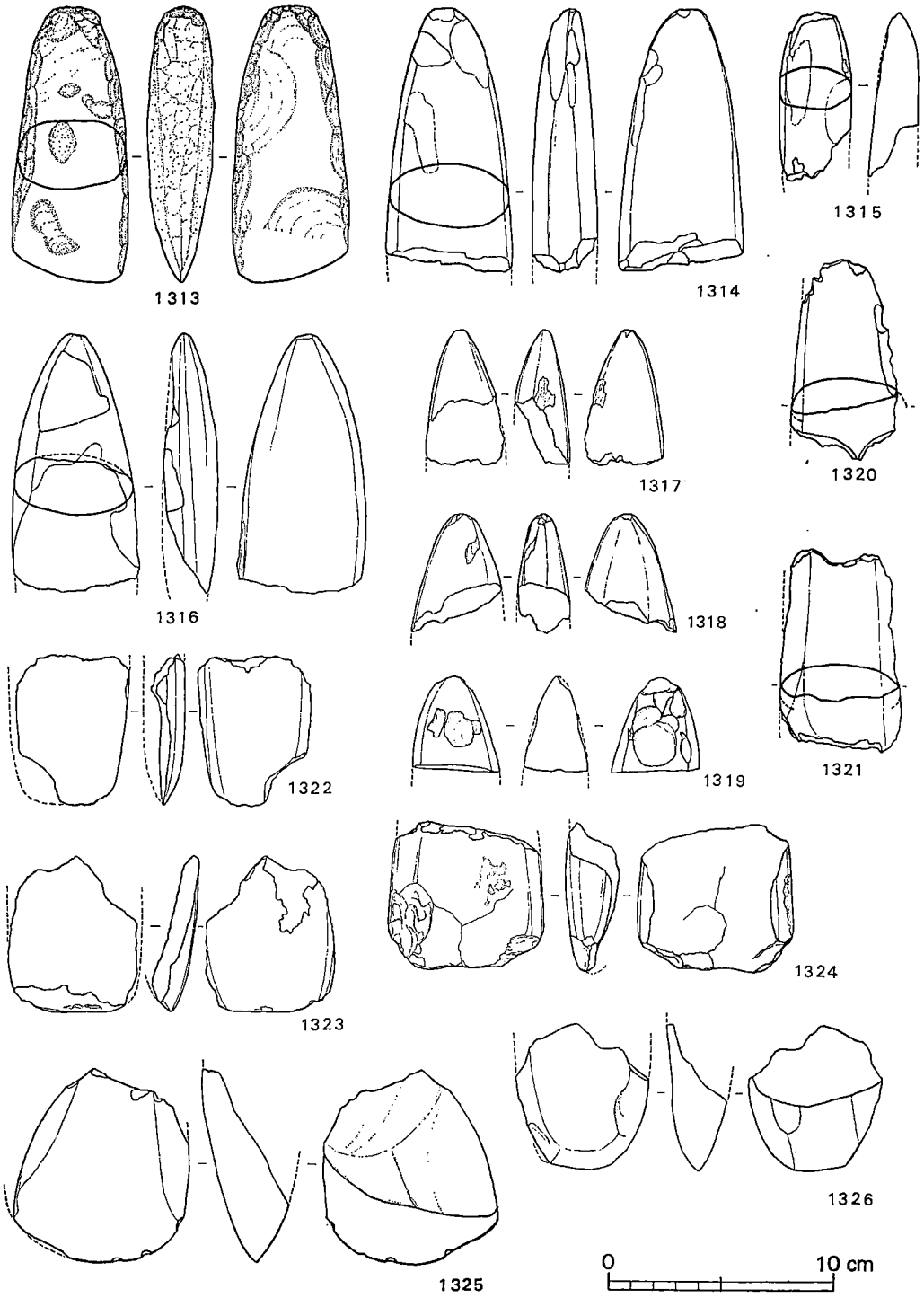
(8)　８類　扁平片刃。1332がある。

半磨製石斧　1333～1337の５点を図示した。図示しない資料に４点ある。刃部及びその周辺部までの局部を磨製にした例で扁平なもの。磨製石斧と打製石斧の中間的存在である。これらの資料は次の２種類に分類される。

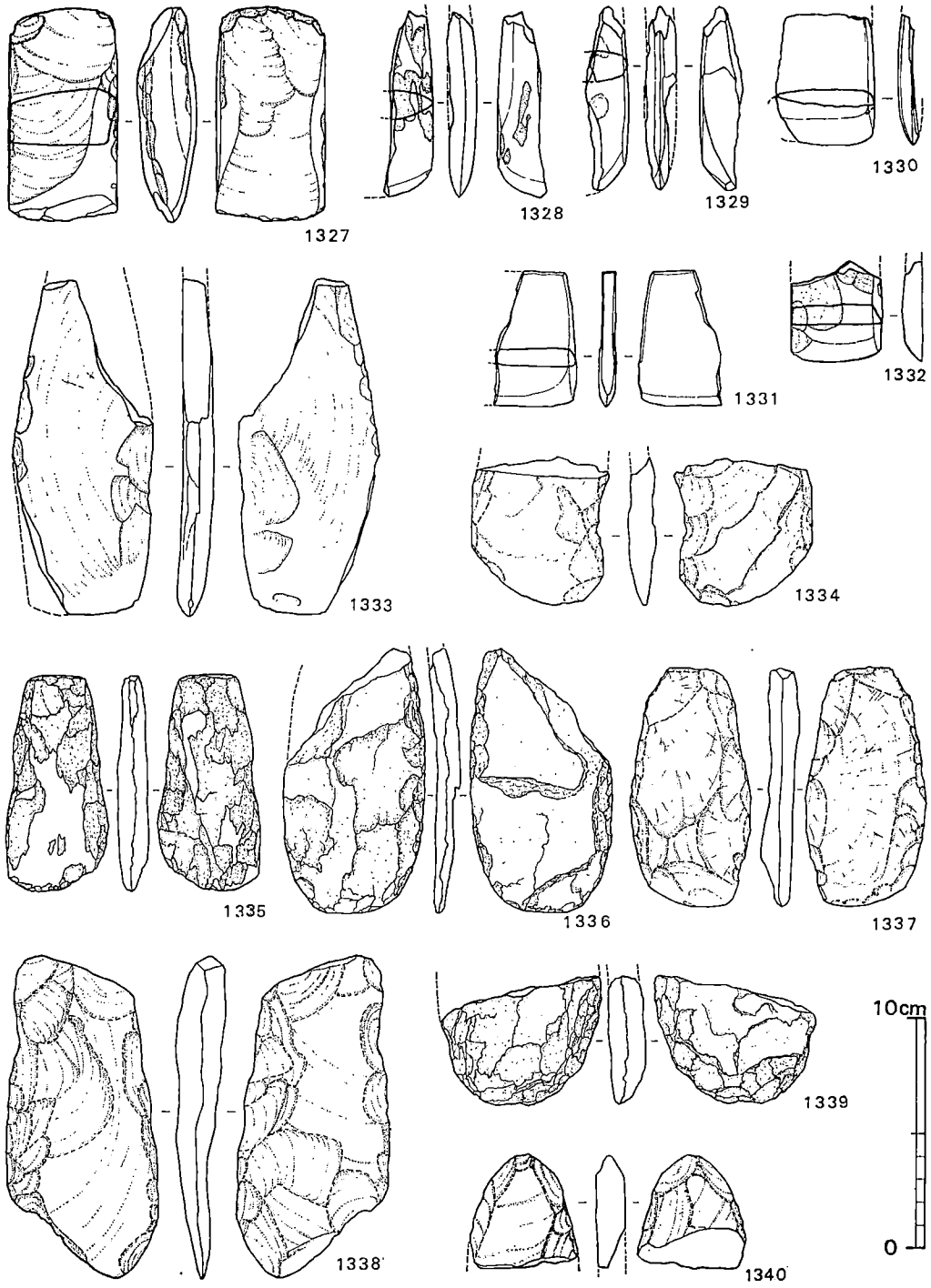
(1)　１類　短冊型。1333・1334・1336・1337が含まれる。1336・1337は打製石斧の磨耗度の顕著な例とも考えられるが一括した。

(2)　２類　撥型及びそれに近い型。1335があり小形である。図示しない資料にもこれに含まれるとみられる例が１点ある。

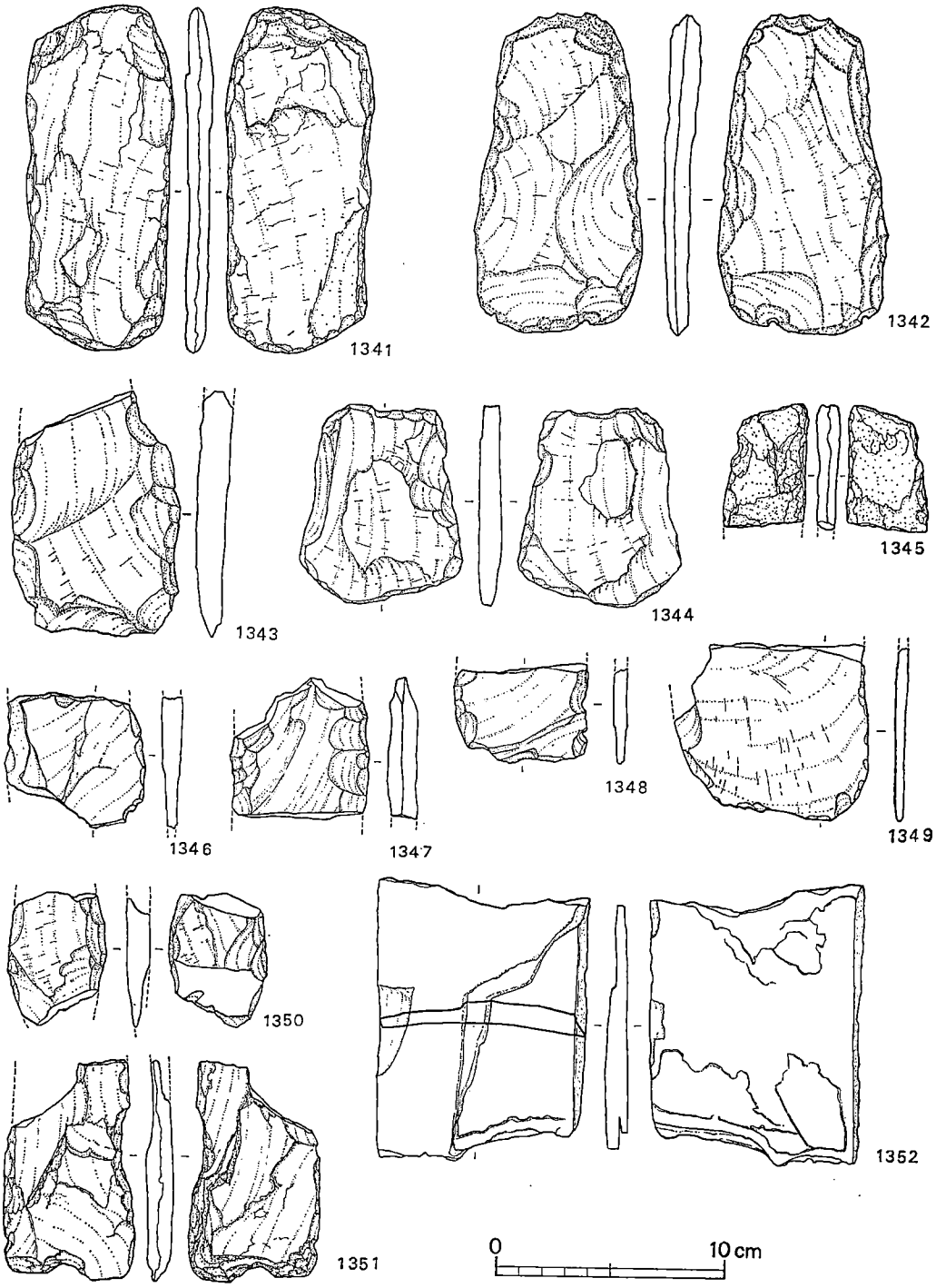
打製石斧　1338～1351の14点を図示した。図示しない資料に30点あるがほとんどが緑泥片岩



第 108 図　石 斧 実 測 図 (1) (1/3)



第 109 図　石 斧 実 測 図 (2) (1/3)



第 110 図　石 斧 実 測 図 (3) (1/3)

表46　石　斧　計　測　表　（単位 mm・g）

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考		図版No.
1313	K K H- 14	B2—15	3 層		121	49	29	257	磨製石斧3類	完形	
1314	K K H- 59	B1—16	4 層		116	56	19	269	〃 1類	刃部欠損	
1315	K K H- 80	B3—13	〃		74	31.5	19.5	45.80	〃 5類	〃	
1316	K K H- 15	B2—14	3 層		113.5	56.5	19.5	215	〃 1類	〃	
1317	1 次 S-164			蛇紋岩	58.9	33.0	24.5	47.1	〃 〃	基部	
1318	2 次 S-339			〃	(51.5)	39.6	24.3	41.8	〃 〃	〃	
1319	K K H- 76	B2—15	〃		41.5	39	29.5	52.70	〃 〃	〃	45
1320	K K H- 12	B5—10			88	46.5	(16.25)	86	〃 〃	胴部半欠	
1321	K K H- 25	B5—15	2 層		89.5	52.3	(17.25)	59	〃 4類	〃	
1322	KK1 S-419				(64.4)	48.6	13.4	52.1	〃 〃	刃部半欠	
1323	KK2 S-421				(68.5)	56.6	13.4	52.3	〃 〃	〃	
1324	KK2 S-213	B6—13	5 層	砂岩	(68)	67.3	23.5	15.8	〃 〃	〃	
1325	K K H- 68	B3—14	3 層		85	77.5	22.5	209	〃 2類	刃部	
1326	K K H- 40	B2—14	4 層		63.5	59	19	81.0	〃 〃	〃	
1327	K K H- 16	B2—15	3 層		92.8	47.5	25.9	179	〃 7類	完形	
1328	K K H- 69	B1—15	4 層		81	21.5	12.5	24.70	〃 5類	1/2欠損	
1329	K K H- 6	B1—14	3 層		81	17.8	13	18.50	〃 〃	〃	
1330	K K H- 34	B2—11	4 層		57.2	43	6.2	37.5	〃 6類	刃部	
1331	K K H- 62	B2—14	3 層		58.5	36	7	29	〃 〃	1/2欠損	
1332	K K H- 70	B3—13	4 層		42.9	38.5	8.5	24.80	〃 8類	刃部	
1333	K K H- 74	B9— 4	3 層		145	61.5	13.6	164	半磨製石斧1類	基部半欠	
1334	K K H- 48	B1—16	4 層		64	58	11.5	46.70	〃 1類	〃	46
1335	2 次 S-212	B6—14	5 層		93.6	45.1	13.0	75.7	〃 2類	完形	
1336	2 次 S-407			緑泥片岩	143.6	61.0	10.2	74.0	〃 1類	基部欠	
1337	K K H- 17	B2—12	3 層	緑泥片岩	102.5	51	13.5	108	〃 1類	完形	
1338	K K H- 61	B4—16	5 層	玄武岩緑	141	67	20	244	打製石斧1類	〃	
1339	2 次 S-511			緑泥片岩	(63.7)	68.6	13.6	73.0	〃 2類	刃部	
1440	K K H- 55	B2—12	3 層	〃	49.9	47.2	12.7	37.40	〃 2類	基部	
1441	2 次 S-209	B5—11	5 層	〃	148.1	63.8	11.0	168.0	〃	完形	
1442	K K H- 82	B5— 9	3 層	〃	138	72.5	12.5	201	〃	〃	
1443	K K H- 85	B2—12	3層～4層	緑色片岩	107	74	9.5	174	〃 3類	基部欠	
1444	K K H- 56	B1—16	5 層	緑泥片岩	82.5	10.5	72	83.3	〃 4類	ほぼ完形	
1445	2 S-413			緑色片岩	(54.0)	35.1	10.1	(25.0)	〃 4類	胴部	
1446	K K H- 38	B2—11	4 層	緑泥片岩	58.5	60.2	9	38	〃 2類	基部	
1447	K K H- 60	B4—14	溝2層	角閃片岩	60	61	13	83	1類	胴部	47
1448	K K H- 45	B2—14	4 層	緑泥片岩	43	59	5.7	24.80	2類	胴部片	
1449	K K H- 19	B2—16	3 層	緑色片岩	75	84.5	5.5	48	〃	刃器	
1450	K K H- 83	B2—14	4 層	緑泥片岩	59	43	10.5	42	〃	胴部	
1451	2 次 S-343			緑色片岩	(95.3)	51.3	10.3	70.0	〃	基部欠	
1452	K K H- 20	B2—16	3 層	緑泥片岩	123	93.5	10	95	石斧素材		

製である。これらの資料は次の4種類に分類される。

(1) 1類　短冊型で厚みのあるもの。緑泥片岩の如く薄く剝離する素材を用いる。1338・1339・1347が含まれる。

(2) 2類　短冊型で薄手であるもの。緑泥片岩を素材とする。1㎝程度の厚さである。1339～1342・1346・1348～1351が含まれる。

(3) 3類　基本的には短冊型であるが，胴部に凹みが付けられ，分銅型に似るもの。1343がある。

(4) 4類　撥型及びそれに近いもの。1344・1345が含まれる。

なお1342はやや撥型に近いが一応短冊型に含めた。撥型と短冊型の境界は明確にし得なかったことによる。1352は，緑泥片岩の石斧素材である。両端に原面をみとめる。

(17) 磨　石

3点出土しており，3号住居跡及び住居跡群周辺から出土したものである。石質は花崗岩及び花崗岩質である。1355・1356の平坦面両面に磨耗痕が，側面には敲打痕が顕著にみとめられる。とりわけ，1355の例は磨る作業が過度に至り，断面長三角形状を呈す。

1357は磨耗痕が片面のみにみられ敲打痕もみとめられるがそれほど顕著ではない。

この磨石の形態が，いずれも磨る機能と敲く機能を兼ね備えていることは，平坦面も側面も同一対象物に使用されることを示すものとすることが可能である。

(18) 石　皿

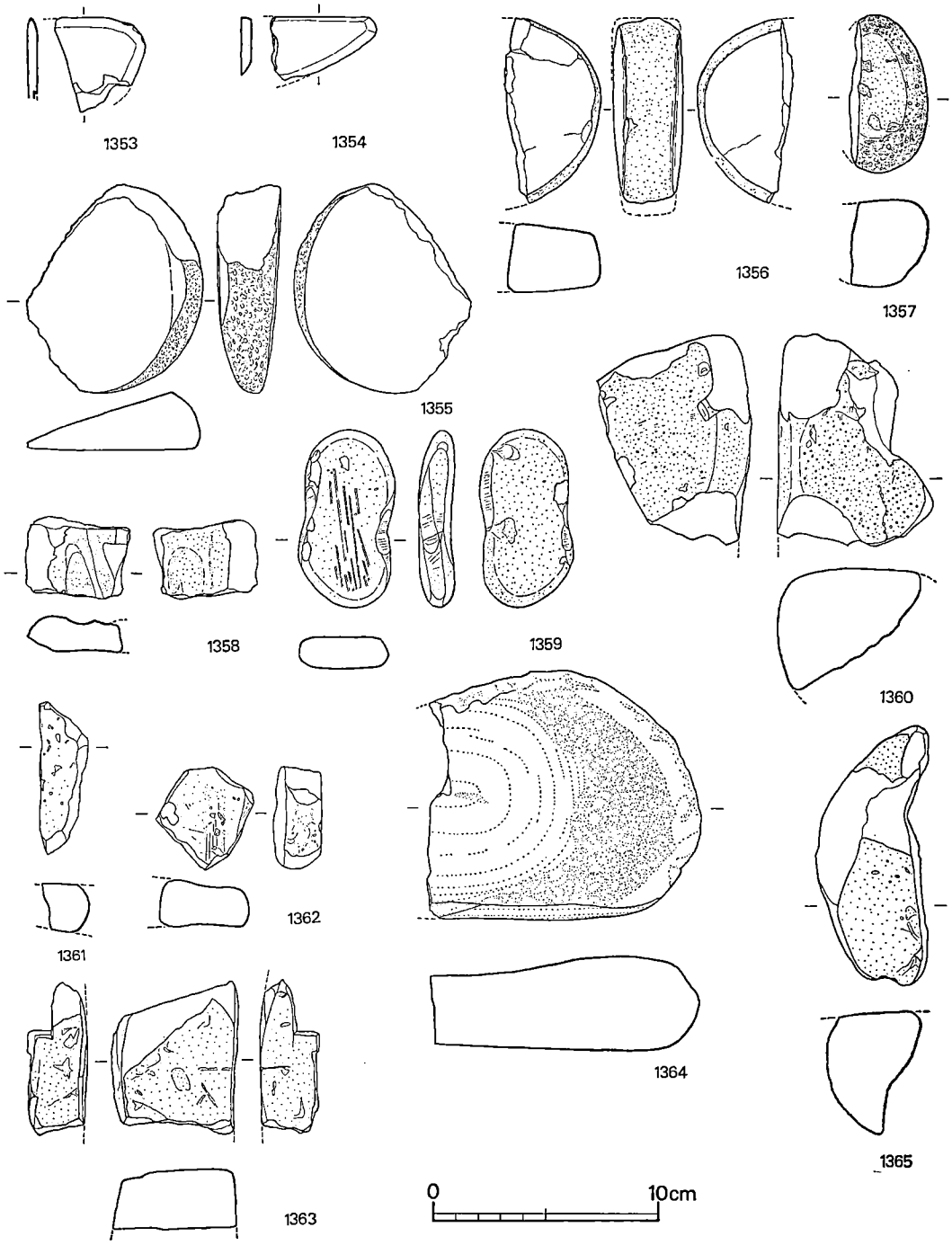
磨耗痕のみられる石器のうち，手に握るというよりはむしろ置いて使用されるとみられる比較的大きな素材を用いたものを石皿とした。

いずれも破損品で完形品はない。いずれも使用面に凹みがあり，磨石と伴に使用されたと考えられる。

1360は2号住居跡横からの出土による。1364は溝状遺構の出土で，この2点は縄文時代後期に属するとみられる。1365はV字溝の出土で，晩期末に属するとみられる。全て2面以上に磨耗痕がみられる。前述した磨石とセットになるものと考えられ，石皿の上で敲いて磨くという一連の作業を想定することが可能である。

(19) 砥　石

5点が出土した。全て縄文時代後期遺物とともに出土したものである。これらは2種類に分



第 111 図　磨石・石皿・砥石・石庖丁実測図 (1/3)

けられる。

1類　砥面に溝をもつもの。1358・1359が含まれ，1358は幅広い凹みであるのに比し，1359は細い数条の溝を有する。また後者はやや反りのある円礫を打欠き調整し，磨ることによって指をかけ易くし，円礫の突面を使用面としている。

2類　平坦な砥面のみられるもの。1361～1363破損であるため原形は明確ではない。

⑳　石庖丁

2点出土しており，いずれも磨製である。1353はやや幅広で扁平度が大きくこれに比して1354はやや細身であり穿孔の痕跡が認められる。1点はB7区表土層からの出土，あと1点はB5—13区からの出土で，2点とも縄文時代後期の遺物の減少する地域に出土する。従って弥生時代以降の所産によるものと思われる。　（小池史哲）

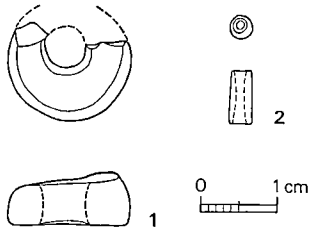
表47　磨石・石皿・砥石等計測表　（単位 cm・g）

実測図No.	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚さ	重さ	備考	図版No.
1353	KKH-02	B7	表土層		(3.8)	(4.2)	0.45	9	石庖丁	
1354	KKH-01	B5—13	3層		(4.7)	(2.7)	0.5	9.7	〃	
1355	KKP-1	3号住	5層	花崗岩	(7.3)	(9.3)	2.55～0.25	230	すり石	
1356	KKP-3	B5—9	3層	花崗岩質	(4.15)	(8.1)	3.0～2.3	140	〃	
1357	KK1S-381			〃	6.9	3.4	3.7	135	砥石	
1358	KK2S-241			砂岩質	(3.1)	(4.5)	1.6～1.0	27.3	〃	
1359	KKT-4	B2—14	4層	花崗岩質	7.8	4.0	1.6～1.0	72.4	〃	48
1360	KKT-11	B1—11	〃		(8.8)	(6.7)	(6.3)	389	石皿	
1361	KKT-6	B2—11	3層		(6.6)	(1.9)	2.1～1.7	39.7	砥石	
1362	KK2S-423				(4.4)	(4.4)	2.0～1.6	43	〃	
1363	KKT-5	B2—16	〃	花崗岩	(6.1)	(5.2)	(2.7～1.3)	132	〃	
1364	KKT-1 2 S-221	B5—15	5層	砂岩	(11.75)	10.8	4.2～3.0	889	石皿	
1365	KKT-10	B4—13	溝4層	花崗岩質	(11.4)	(3.8)	6.6	327	〃	

㉑　装身具（図版49—2　第112図）

B1—10，B2—15区よりそれぞれ玉・管玉が1点づつ，西側から溝の中へ流れ込んだ状態で出土した土器に混じって発見された。

1は淡茶褐色を呈した滑石製の玉だが，鉄分の影響によるもので，地色は灰白色に近い。最大径は下部にあり，断面はまるみをおびた台形状をなし，稜線は比較的はっきりしてい



第112図　装身具実測図（1/1）

る。径は16.3～14.8㎜で厚さ6.6～4.7㎜，孔径は5.0～4.2㎜を測る。両側より穿孔を行なっているが孔は正円形をなしていない。径の短い面は比較的丁寧に仕上げを行なっているが片方の面はあまり良くない。⅓程欠損している。

2の管玉は青緑色の碧玉製で長さ7.2㎜，径3.1～2.8㎜。一方が多少細くなっている。内径は1㎜前後で両側から穿孔を行なっている。その穿孔は中央を貫通していなくて，やや片よっている。両端の面は丁寧に仕上げを行なっており，良質の管玉である。

1・2とも縄文後期の土器と共伴し，まわりにそれ以外の土器がみられないことから，これらは縄文後期のものと推定される。（大石　昇）

(22) 木炭・種子

柏田遺跡の縄文後期の堆積土壌中より採集された木炭片及び炭化植物種子についての観察結果を報告します。

遺跡の情況及び試料のサンプリングについては他の稿に詳述されている通り。

木炭について　2号，3号，4号の各住居跡の床面の土壌中から採集された木炭片の内，各10個について観察した。

木炭片の観察は，パラフィン包埋の後，木口面の切片プレパラートを作って行なったが，木炭が硬質であったり，粘土が侵透していて切片の得られないものについてはミクロトームによって平らに削り出された木炭表面を観察した。

結果を表に示す。樹種は常緑ガシと広葉樹の2つに分類した。針葉樹は含まれていなかった。2号住居ではカシ以外の広葉樹が多く，3号及び4号では常緑ガシの比率が高い。試料とした木炭の数が少ないので，このちがいの意味については言及できない。三つの住居跡の結果を合計した数値でみると，常緑ガシの占める割合が高いと言える。例えば同じく縄文後期の京都府桑飼下遺跡での木炭分析の結果によれば，100個の木炭の内常緑ガシは20個であった。基本的には共に照葉樹林帯にある遺跡であるが，九州の柏田遺跡では，桑飼下遺跡に比べて，より緑の濃い植性であったと言えないだろうか。このことは今後さらにデータを重ねて検討しなければならない問題であるが，当時の人々の生活と植物環境への影響力のちがい，あるいは両地域での二次林形成の植物社会学的な反応のちがいと関連して興味ある問題がひそんでいるようである。

表48　柏田遺跡における木炭分析結果

	常緑ガシ	広葉樹	不明	計
2号住居	1	7	2	10
3号	7	1	2	10
4号	5	1	4	10
計	13	9	8	30

植物種子について　いずれも炭化した植物種子が各住居跡より採集された。この内比較的原形をとどめているのは3号住居よ

り出土したブナ科の堅果2片のみである。コナラ亜属のものであるが，常緑ガシか落葉性のものかは決定できない。

他の種子はいずれも細片であって十分な観察ができなかった。　　（西田正規）

文献　西田正規〝炭化材の樹種同定〟渡辺誠編「桑飼下遺跡発掘調査報告」第12節　平安博物館　1975

3.　自然科学系の調査

当該遺跡における古代の生活環境復原作業を目的として，花粉分析用土壌サンプルの採取及び土壌の水洗選別を実施した。このうち前者の試料を花粉分析とプラント・オパール分析，両方の供試試料とした。この結果については，それぞれ以下に報告する。また後者の選別で得られた種子，木炭は樹種を同定し，結果は2―（23）に報告した。花粉分析は広島大学総合科学部環境科学研究室安田喜憲助手，プラント・オパール分析は宮崎大学農学部作物管理学研究室藤原宏志助教授，樹種同定は近畿大学医学部解剖学研究室西田正規助手が担当した。

（小池史哲）

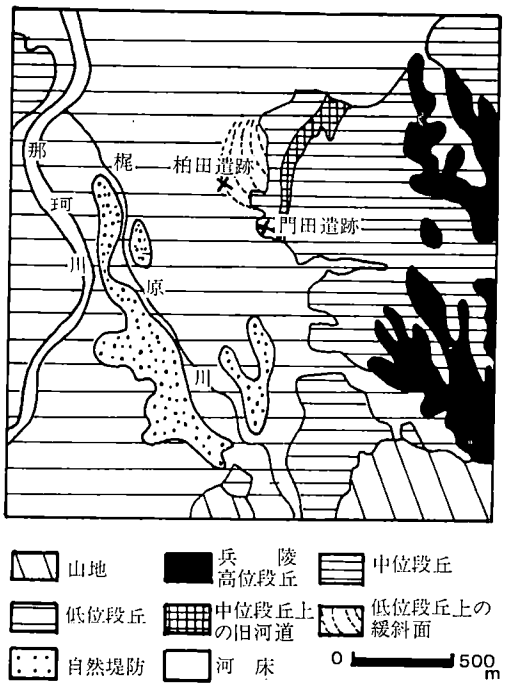
(1)　泥土の花粉分析

1　地　形

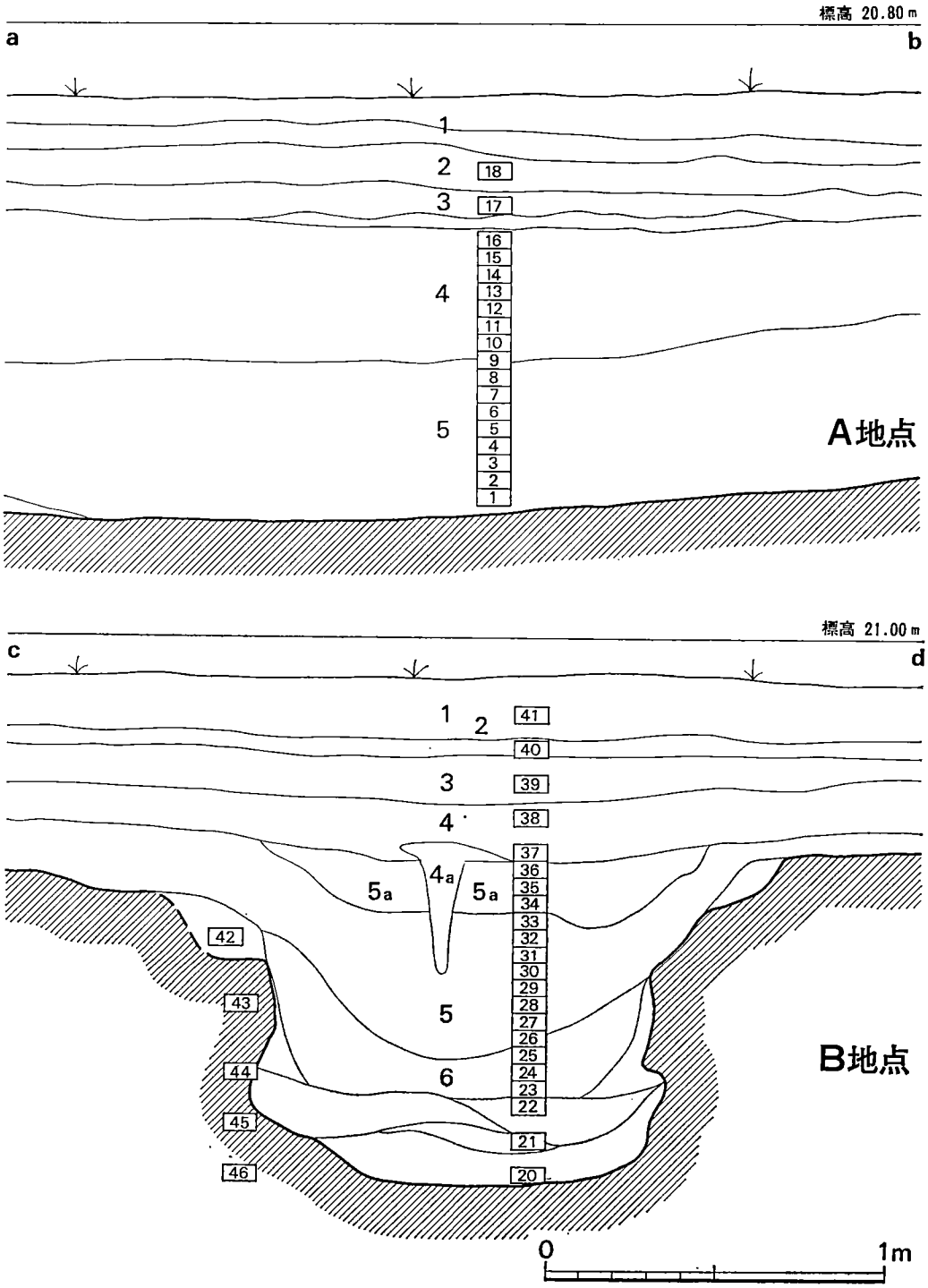
柏田遺跡周辺の地形は第113図に示す如くである。地形単位は山地，丘陵，高位段丘，中位段丘，低位段丘，自然提防に区分される。

高位段丘は遺跡東方の春日丘陵一帯に分布する。海抜50～70m前後の開析された小起伏平坦面を形成している。平坦面は基盤岩類の侵蝕平坦面の場合が多く，段丘堆積物は顕著でない。このため丘陵とのみわけがむずかしい。砂礫層よりなる段丘堆積物はくさり礫の状態を示し，表層は赤色化作用を受けている。

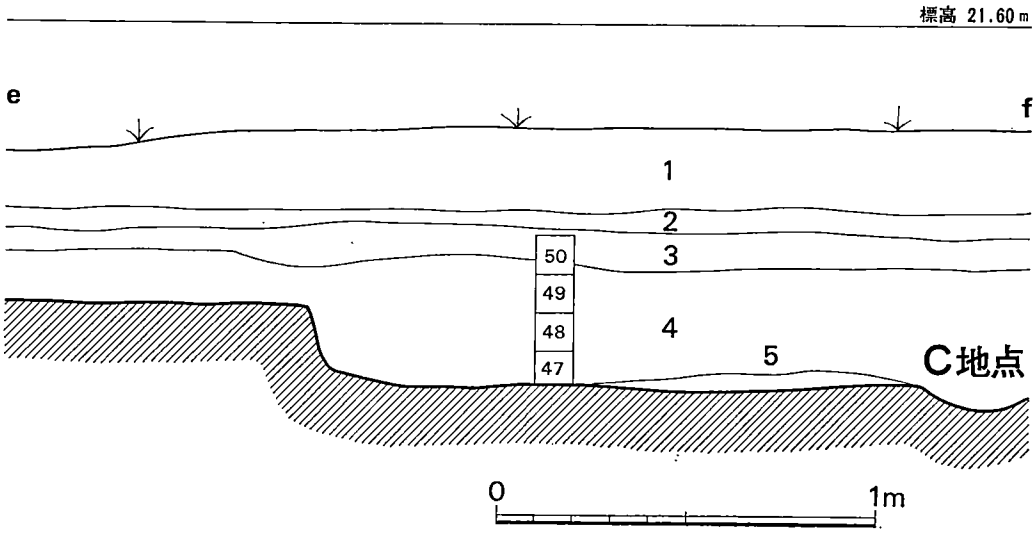
中位段丘は白水周辺を中心として顕著に分布する。海抜高度は30m前後で面の残りはよい。この中位段丘面上に弥生時代の門田遺跡が立地する。門田遺跡の東方（第113図参照）



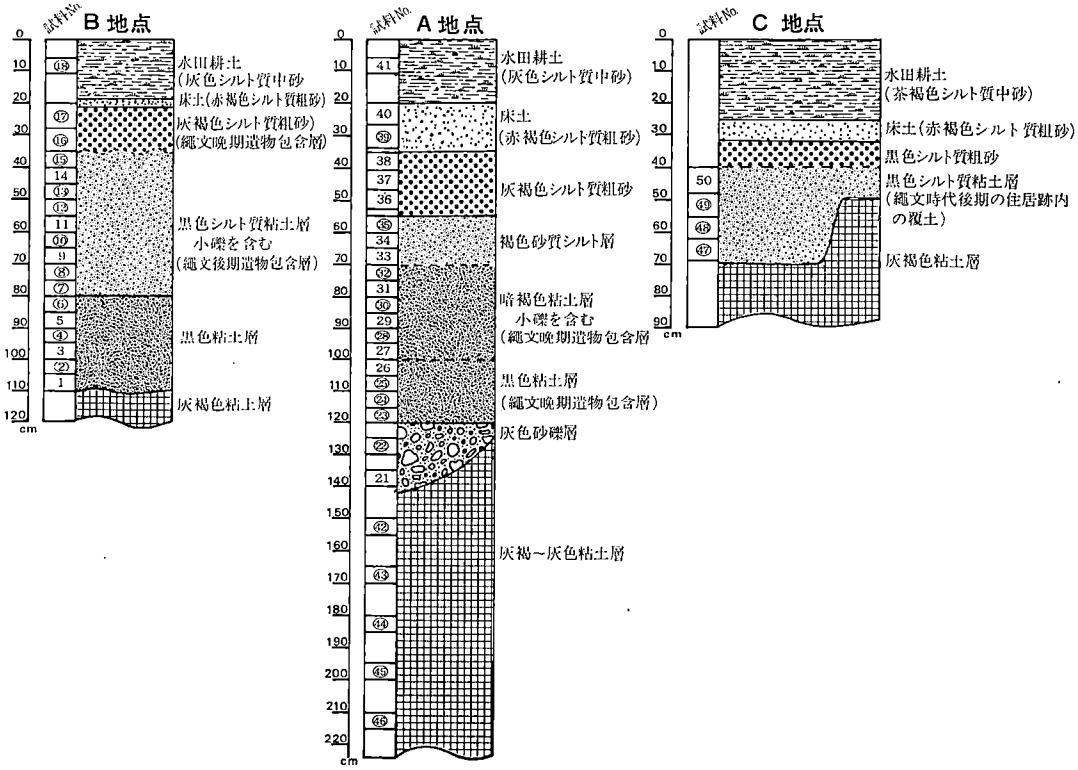
第113図　地形分類図



第114図　花粉分析試料採取A－B地点



第115図　花粉分析試料採取 C 地点



第116図　花粉分析試料採取地点の層序　　数字は花粉分析試料のNo.を，○は今回分析した試料を示す。

には中位段丘面上に残された旧河道が認められる。この柏田遺跡周辺の中位段丘を構成する堆積物はAso—Ⅳと呼ばれる火砕流である。門田遺跡の立地する中位段丘の段丘崖においては，層厚3 m前後の砂礫層—層厚3 m前後の白色粘土層（八女粘土層）—層厚3 m前後のパミスを含む褐色火山層（鳥栖ローム層）が下位より順に堆積しているのが観察できた。この中位段丘は古川氏の中位段丘Ⅱ（註1）に相当し，板付遺跡の立地する地形面にあたる。弥生時代の板付遺跡と門田遺跡がともに同じ地形面に立地することは興味深い。

低位段丘は那珂川右岸のこの地域において最も広い分布を示す。海抜高度は20～25m前後で，中位段丘との比高は10m前後，現河床との比高は5～7 m前後である。低位段丘を構成するのは層厚2～3 m前後の新鮮な砂礫層であり，その上位には二次堆積と考えられる褐色～黒色の火山灰質粘性土が堆積している。その層厚は0.5～1 m前後である。低位段丘面上を南東から北西にかけて梶原川が流下する。梶原川は低位段丘を著しく侵蝕することなく，両岸に顕著な自然堤防を形成している。したがって，自然堤防は低位段丘面上に載る形で分布する。縄文時代後・晩期の柏田遺跡が立地するのは，この低位段丘面上である。柏田遺跡の近くにも丘陵から流下する小支谷が低位段丘面上を流れている。遺跡が営まれた当時は，梶原川のような低位段丘面上を流れる小支谷が，縄文時代の人々にとってかなり大きな意味を持ったものと考えられる。

2　層　序

遺跡の層序は第114～116図に示す如くである。地表下1 m前後より下位には，灰褐色～灰色のよくしまった粘土層が堆積する。この粘土層が遺跡の地山をなしている。粘土層は凝灰質で中位段丘を構成する火砕流堆積物の二次堆積物と考えられる。遺跡周辺の地形をこまかにみると，中位段丘の崖下から扇状地性の緩斜面が形成されており（第113図参照），中位段丘からの堆積物の流下をおもわせる。この遺跡の地山をなす灰色～灰褐色の粘土層の上位には，褐色～黒色の火山灰質粘性土が堆積する。この火山灰質粘性土は低位段丘面上に広く認められる。柏田遺跡の縄文時代後・晩期の遺物が含まれるのは，この火山灰質粘性土である。

第114～116図のA地点とB地点はいずれも縄文時代後・晩期の溝の部分にあたる。A地点では溝の基底に砂礫層が堆積した後，黒色の火山灰質粘性土が堆積したことがわかる。またC地点では縄文時代後期の住居跡を覆って黒色の火山灰質粘性土が堆積している。火山灰質粘性土の中には，砂礫が多く含まれ二次堆積の性格が強い。

3　花粉分析

花粉分析の試料は第114～116図に示す如く，平均5 cmの間隔で連続的に採取した。分析方法はKOH処理—水洗—$Zncl_2$処理—水洗—酢酸処理—アセトリシス処理—酢酸処理—水洗—マウントの順に行なった。花粉分析の結果は，表49に示す如くである。縄文時代後・晩期の遺物包含層は火山灰質粘性土からなるため，花粉の残存率が悪い。一方比重分離するとプラント・オパールは大量に認められ，この方面の研究成果が期待される。

A地点

表49 花粉・胞子出現個体数

科・属 ＼ 試料No.	46	45	44	43	42	22	23	24	25	28	30	32	35
							個	個	個	個	個	個	個
Podocarpus	—	—	—	—	—	—	1						
Abies	—	—	—	—	—	—	4		1			1	
Tsuga	—	—	—	—	—	—	1	1					
Pinus	—	—	—	—	—	—	6	1		1			
Cryptomeria	—	—	—	—	—	—		1					1
Salix	—	—	—	—	—	—	5						
Alous	—	—	—	—	—	—	40	2	1			10	2
Corylus	—	—	—	—	—	—	2	1					
Quercus	—	—	—	—	—	—	19	2	3		1	1	4
Cyclobananopsis	—	—	—	—	—	—	247	59	15	7	4	25	7
Castanopsis	—	—	—	—	—	—	519	74	19	5	2	1	1
Celtis-Aphananthe	—	—	—	—	—	—	6						
Ulmus	—	—	—	—	—	—	1						
Acer	—	—	—	—	—	—	4						
Elaegnus	—	—	—	—	—	—	1						
Caricallpa	—	—	—	—	—	—	4		1				1
Elaeocarpus	—	—	—	—	—	—	1						
Akebia	—	—	—	—	—	—	1						
Mallotus	—	—	—	—	—	—	1						
Rosaceae	—	—	—	—	—	—	9	9	2				
Legminoseae	—	—	—	—	—	—	1	2				1	
Catalpa	—	—	—	—	—	—	1						
Rhus	—	—	—	—	—	—	1						
Ilex	—	—	—	—	—	—	1						
Ligstrum	—	—	—	—	—	—	4				1		
Cornus	—	—	—	—	—	—	2						
Myrica	—	—	—	—	—	—						1	
Symplocos	—	—	—	—	—	—	1						
Unknown							4						
Total AP	—	—	—	—	—	—	887	152	42	13	8	40	16
Chenopodiaceae								1					
Compositae	—	—	—	—	—	—	10	5	2	4	3		
Artemisia	—	—	—	—	—	—	19	35	14	10	2	5	5
Cyperaceae	—	—	—	—	—	—	11	3	3		1		1
Gramineae	—	—	—	—	—	—	56	35	6	3	4	3	4
Gramineae(*Oryza* type)	—	—	—	—	—	—		9	1			4	1
Potamogeton	—	—	—	—	—	—	1						
Sagittaria	—	—	—	—	—	—	1	1					
Umbelliferae	—	—	—	—	—	—	3		1	1			
Labiatae	—	—	—	—	—	—	5	3				2	
Liliaceae	—	—	—	—	—	—	3					1	
Caryophyllaceae	—	—	—	—	—	—							

科・属 ＼ 試料No.	46	45	44	43	42	22	23	24	25	28	30	32	35
							個	個	個	個	個	個	個
Persicdria	—	—	—	—	—	—	3	12	1		1	1	
Valeriana	—	—	—	—	—	—	1						
Impatiens	—	—	—	—	—	—	1						
Typha	—	—	—	—	—	—						1	
Myriophyllum	—	—	—	—	—	—							1
Spore	—	—	—	—	—	—	1	4	3	4	5	6	
Anthoceros	—	—	—	—	—	—	1	1					
Monolete tyoes	—	—	—	—	—	—	43	20	8	2	5	26	37
Trilete types	—	—	—	—	—	—	9	2		2	6	7	
Osmunda	—	—	—	—	—	—	2	1				1	
Gleichenia	—	—	—	—	—	—	3						3
Ceratopteris							1						
Total NAP	—	—	—	—	—	—	174	132	39	26	27	57	52
Total AP + NAP	—	—	—	—	—	—	1061	284	81	39	35	97	68
Concentricystis	—	—	—	—	—	—	4	1		1		1	

B・C地点

科・属 ＼ 試料No.	2	4	6	7	8	10	12	13	15	16	17	18	47	48	49
	個			個		個	個	個							
Pinus	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Alnus	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Carpinus	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Cyclobalanopsis	6	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—
Castanopsis	4	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Quercus	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Compositae	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Artemisia	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Cyperaceae	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Gramineae	2	—	—	—	—	1	3	2	—	—	—	—	—	—	—
Gramineae (oryza type)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Justicia	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
monolete type	2	—	—	3	—	—	7	1	—	—	—	—	—	—	—
trilete type	—	—	—	—	—	—	2	4	—	—	—	—	—	—	—
other Spores	5	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—
Concentricystis	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—

A地点の分析結果　A地点の分析結果は表49に示す如くである。遺跡の地山を形成する灰褐～灰色土層からは，全く花粉を検出することができなかった。このことはこの堆積物が火砕流堆積物の二次堆積であるという前記の推測を裏付ける。縄文時代晩期の溝の基底の砂礫層からも花粉は検出されなかった。砂礫層の上位に堆積する黒色粘土層は比較的花粉の保存が良好であった。縄文晩期の遺物包含層の最下部にあたる試料No.23においては，シイノキ属（*Castanopsis*）が最も高い出現率を示し，常緑カシ属（*Cyclobalanopsis*）がこれにつづく。またアケビ属（*Akebia*）などのつる性植物の花粉も検出され，この時代，遺跡周辺にはシイ林を中心としたうっそうとした照葉樹林が生育していたとみられる。またハンノキ属（*Alnus*）が高い出現率を示し，ヒルムシロ（*Potamogeton*）オモダカ属（*Sagittaria*）ミズワラビ属（*Ceratopleris*）などの沼沢地性植物，胞子や *Cancentricystis* が出現することから，低位段丘面を流れる小支谷や遺跡の溝の周辺にはハンノキ林や水生植物の生育する低湿地が存在したと考えられる。イネ科花粉の総樹木花粉に対する出現率は 6.3%前後で低率である。

試料No.24に入ると，樹木花粉が著しく減少し，かわってヨモギ属（*Artemisia*），イネ科(Gramineae)，タデ属(*Persicaria*)などの草本類が増加してくる。特にハンノキ属(*Alnus*)の減少は著しい。このことは，この時代に入って人類の森林破壊が行われたことを示すとみられる。イネ科花粉も28.9%と出現率を増させる。イネ型花粉が 5.9%と低率ではあるが検出された。

一方，試料 No.25・28・30・32・35においては花粉の残存率が悪い。また残存している花粉も，花粉膜の表面が破壊されている。したがってその残り方にも酸化作用に強いものと弱いものとでは差があり，読み取った花粉の個体数の比率が当時の花粉フローラをそのまま反映しているとは考えられない。埋没深度が浅くなるにつれ，花粉の残存率は減少している。

B地点の分析結果　B地点の試料採取方法ならびに分析方法はA地点と同様である。分析結果は表49に示す如くである。試料No.2とNo.12においては，若干の花粉が含まれていたが，それ以外の試料からはほとんど花粉を検出できなかった。トレンチの最下部の黒色粘土層はA地点の下部の黒色粘土層と堆積物が類似しており，花粉が検出される期待がもたれたが，むりであった。この点については，採取試料の保管状態が問われる。A地点の試料は，採取直後研究室に持ち帰り，冷凍庫に保管してあったため，分析時にも土壌の構造がくずれることなく，そのままの状態で分析が行なわれた。一方B地点の試料はプラント・オパール分析のため宮崎大学に送られた。再び筆者の手元に帰って来た時は，土壌の構造がくずれており，酸化もかなり進んだことがうかがわれた。もともと花粉の含有量が少ない試料では，採取後の保管の状態が重要な意味を持つことが明らかとなった。

C地点の分析結果　この地点の堆積物は縄文時代後期の住居跡内に堆積した火山灰質粘性土である。埋没深度が浅いため，クラックが入り表面はボロボロとくずれる。このような土壌のため花粉はほとんど検出できなかった。

4　考　察

1）**地形環境**　縄文時代後・晩期の柏田遺跡は那珂川の形成した海抜20～25m前後の低位段丘上に立地した。遺跡の背後にはAso—Ⅳ火砕流によって形成された中位段丘が海抜30m前後に広がっていた。中位段丘を構成する八女粘土層のC^{14}年代はB・P.33,000±$^{3,000}_{2,200}$年，鳥栖ローム層はB・P.30,600±3,000年の値が得られている（註2）。したがってこの中位段丘の原面は約30,000年前には形成されていたといえよう。この時代はWürm氷期の中ではいくらか温暖な時代にあたっている。この中位段丘を侵蝕して形成された低位段丘は，御笠川沿いでは沖積面に没する（註3）ということである。したがって低位段丘の形成は現在より海水準の低い時代，おそらくWürm氷期の最盛期（B・P.20,000～18,000年頃）に形成されたものであろう。低位段丘が形成された時代には，背後の中位段丘を構成する火砕流堆積物が崩壊して，低位段丘上に堆積した。この火砕流の二次堆積物の上に縄文時代後・晩期の柏田遺跡が立地する。遺跡が営まれた当時，低位段丘面上には梶原川などの丘陵から発する小支谷が流下していた。これらの小支谷は低位段丘面上に自然堤防や低湿地を形成していた。縄文時代後・晩期の人々の居住地は，こうした低位段丘面上の小支谷沿いにあったものと考えられる。一方弥生時代に入ると，人々は低位段丘上の集落を放棄して，より高い中位段丘面上に集落を営むようになる。なに故弥生時代に入ると集落がより高位の段丘面上で営まれたのかは，現在では明らかにし得ない。発掘の進みぐあいによっては，今後低位段丘上からも弥生の集落が発見される可能性もあろう。

2）**植物性環境**　A地点の縄文時代晩期の遺物包含層の最下部にあたる試料No.23においてはシイノキ属(*Castanopsis*) が優占し，常緑カシ属(*Cyclobalanopsis*) がこれにつづいた。またアケビ属（*Akebia*）などのつる性植物の花粉も検出された。このことから，柏田遺跡周辺に縄文時代晩期の人々が居住を開始した当初は，遺跡周辺にはシイ林からなるうっそうとした照葉樹林が生育していたとみられた。またハンノキ属（*Alnus*）が高い出現率を示し，ヒルムシロ属（*Potamogeton*），オモダカ属（*Sagittaria*），ミズワラビ属（*Ceratopteris*）などの沼沢地性植物が生育することから，低位段丘面上を流れる小支谷周辺にはハンノキ林や水生植物の生育する低湿地が存在した。一方，板付遺跡の分析結果（註4）では，この時代の層準において最も優占するのは常緑カシ属（*Cyclobalanopsis*）であり，同じ照葉樹林でも，樹種の構成は異なっていたといえる（下巻図版50参照）。

試料No.24に入ると，シイノキ属（*Castanopsis*），常緑カシ属(*Cyclobalanopsis*) が減少し，かわってヨモギ属（*Artemisia*），タデ属（*Pcrsicaria*），イネ科（Gramineae）などの草本花粉が増加してくる。またハンノキ属（*Alnus*）もこの時代に入って人類の森林破壊があり，低湿地周辺に生育していたハンノキ林や，遺跡周辺のシイ林が伐採されたとみられる。もっとも試料No.23の時代においても，二次林的性格の強いコナラ属(*Quercus*)，ムラサキシキブ属(*Callicarpa*) が出現しており，人類のImpactがあったことは考えられる。試料No.25以降になると

花粉の出現個数が少なくなり，明瞭な植生変遷は把握しがたい。一方，既に筆者が報告した門田遺跡の花粉分析結果（註5）では，弥生時代には常緑カシ属（*Cyclobalanopsis*）の優占する植生であり，シイノキ属（*Castanopsis*）は10～20%前後の出現率を示すにすぎなかった。また，エノキ属（*Celtis*）—ムクノキ属（*Aphananthe*）が比較的高い出現率を示すのも特徴的であった。植物遺体ではイチイガシの球果が多数検出されており，優占する常緑カシ属の母樹はイチイガシであったと考えられた。既に述べた如く，門田遺跡に近接する柏田遺跡においては，縄文時代晩期の人々が居住した当初は，シイ林を中心とする照葉樹林が生育していた。したがって弥生時代の人々が居住した当時の照葉樹林とでは，照葉樹林の樹種構成に大きな違いがあったことが考えられる。

3）縄文農耕論　高知大学の中村純教授は，イネ科花粉の電子顕微鏡の観察を基礎として，位相差顕微鏡によるイネ科花粉の中からイネ（*Oryza Sativa*）を同定する方法を開拓した（註6）。中村教授らはこの方法を持って板付遺跡泥土の花粉分析を行ない（註7），縄文時代後期にあたる層準からすでに稲作が行なわれていた可能性を指摘した（図版50図参照）。筆者もまたこの方法（註8）をもって長崎県里田原遺跡の泥土を分析した結果（図版51参照），縄文時代晩期終末期の夜臼式土器の時代には稲作農業の形態を取っていたことを指摘した（註9）。板付遺跡の分析結果（図版50）では，縄文時代晩期の包含層において，イネ花粉は総樹木花粉に対して30%前後の出現率を示している。一方，柏田遺跡の縄文晩期の包含層の最下部にあたる試料No.23ではイネ型花粉（*Oryza* type）はほとんど検出されなかった。人類の森林破壊が顕著になるNo.24に入ると，イネ型花粉（*Oryza* type）がわずかながら出現している。しかしその樹木花粉に対する出現率は5%前後である。試料No.25以上の試料では花粉の残存状態が悪く，花粉膜の微細な構造を位相差像で観察することは困難であった。

このように，柏田遺跡の花粉分析結果のみからは，縄文時代晩期の稲作農耕を裏付ける積極的な証拠を得ることはできなかった。しかし，晩期の包含層からわずかであるがイネ型花粉（*Oryza* type）が検出されていることは注目されよう。　（安田喜憲）

註1　古川博恭「地質・地理的環境」『板付』上巻所収。福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 1976
2　註1に同じ
3　註1に同じ
4　中村純・畑中健一「板付遺跡の花粉分析的研究」『板付』下巻　所収
5　安田喜憲「門田遺跡谷地区花粉分析結果」『昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1976
6　中村純「イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第4紀研究』13．1974
7　註4に同じ
8　註6に同じ
9　安田喜憲「里田原遺跡の古環境復元(第1報)」『里田原遺跡』（投稿中）長崎県教育委員会　1977

(2) 柏田遺跡土壌のプラント・オパール分析

古代における農耕の起源あるいはその様式に関する問題は単に農耕技術の歴史というだけでなく，古代社会の性格を規定するものとして関心が寄せられている。私たちは農作業体系の史的変遷をテーマとして自然科学的方法による古代農耕をめぐる諸問題を実証的に追究しようとしている。最近出されたいくつかの報告では，イネを含む栽培植物が縄文時代にまでさかのぼり存在することを示唆している。

本遺跡は，縄文後期に堆積したと推定される土層があり，ここに栽培植物遺物が検出されるかどうか興味のある対象である。本報では，古代植生を推定する新しい方法として，プラント・オパール分析の概要と方法を説明し，さらに，本遺跡土壌における分析結果について述べることにしたい。

プラント・オパール分析の概要　イネ科植物は人類と係わりの深い植物である。花粉分析によれば，人類の増加はイネ科植物の増加に比例しているという。このことは人類がイネ科植物を栽培し始めることにより同科植物が増加するといいう単純な図式だけで説明されるものではなく，おそらく，人類による自然植生：生態系の破壊にともなう植物相の変化として理解されるべきであろう。人類とイネ科植物の関係は木本性の原始林を人類が破壊し，そのあとに陽性草本のイネ科植物が繁茂するというパターンを繰り返すなかで深められたものと思われる。人類とイネ科植物はそのような生態的な結びつきを持つものである。そのイネ科植物群の中から，人類が主食を選びだすことになるのは極めて自然なことと思われる。五穀と呼ばれ，古来重用される主要穀類（イネ，ムギ，ヒエ，アワ，キビ）が総てイネ科植物に属することも前述の関係から理解されるであろう。これらの他に，モロコシ，トウモロコシ，ハトムギ，シコクビエ，サトウキビなど人類の食生活に欠かせない植物群が同科に含まれる。

農作業体系の史的変遷を探究しようとする場合，その時代，そこに栽培された作物種を明らかにすることが前提条件になる。古代イネ科植生を追究する方法の確立がどうしても必要な理由はここにある。

花粉分析法は古代の植生を探究する方法として20世紀初頭に提案され，多くの研究者により方法的改良と分析例の蓄積が行なわれた，いわば確立された古代植生分析法である。古代遺跡における花粉分析例も数多く報告されており，古代の植生を復原するうえで貴重な成果を挙げてきたことは周知のとおりである。しかし，双子葉植物類の花粉を識別するのに較べ，単子葉植物類，とくにイネ科に属する各植物の花粉を識別することは難しいとされている。そのため遺跡土壌の花粉分析結果をみると「イネ科植物」とだけ記されておりイネ科の属・種名までは明らかにされていない場合が多い。もっとも，最近，イネ科植物の花粉を識別する研究が行なわれ，イネ科の中でもイネ（**Oryza sativa L.**）については他の属と区別できるという報告が

なされており，この面での今後の研究が期待されるところである。また，花粉の残留土壌条件として，火山灰台地のような乾燥地，遺構にともなう植物灰，炉跡焼土などが不適とされるのはやはり同分析法の制限要因であろう。

次に，花粉分析法を補足し，イネ科植物種を推定する新しい植生分析法として植物珪酸体の残留性に着目したプラント・オパール分析法の概要について紹介する。

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ，その植物体内に珪酸で囲まれた細胞を多く持っており，これを植物学的には植物珪酸体と呼んでいる。機動細胞珪酸体は植物珪酸体の一種で葉身だけ存在し，葉のせつ捲作用に関与している。機動細胞珪酸体の大きさは植物種によって異なるがほぼ20～100μの柱状体である。機動細胞珪酸体の断面は植物によって固有の形状をしており，裏面の紋様とともに植物の種類を判別するkeyになる植物SiO_2（シリカ）であり光学的に等方ないわゆるガラスである。

イネ科植物が枯死し土壌中に入ると有機物部分は酸化分解され植物組織は通常崩壊してしまう。ところが，機動細胞珪酸体は前述のとおりガラス（SiO_2）であるから分解されず，細胞の形状を残したまま土粒子の一部として長期間残留する。土壌学の分野では，このような植物起源土粒子を称してプラント・オパールと呼んでいる。機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールを土壌中から取り出すことができれば，その形状から給源植物を推定することができる。

第118図に，ダイアグラムにより，植物珪酸体標本の作製法と土壌を試料にした場合のプラント・オパール分析法を示した。

試料および分析法

試料

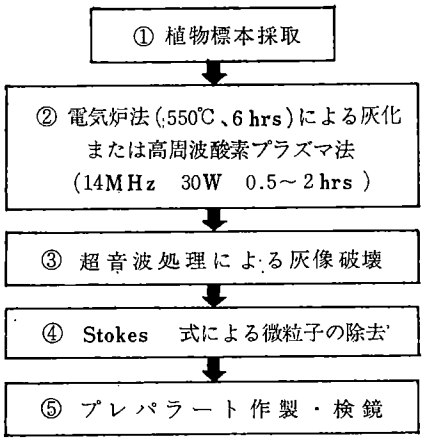
供試試料は花粉分析のため広島大学総合科学部安田喜憲氏が採取されたものの一部である。試料は柏田遺跡B３区（B地点）18点，B４区（A地点）２点の計20点である。各試料番号と採取地点土壌断面は表および図に示すとおりである。供試土器片は同遺跡B３区溝状遺構から出土した北久根山式土器の破片を用いた。

分析法

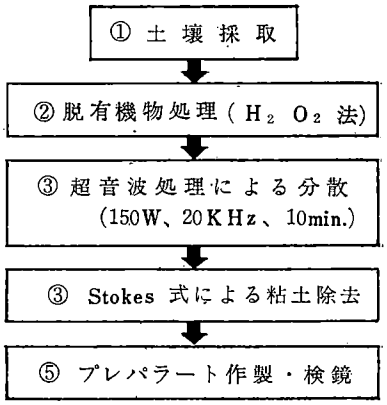
土壌中から検出されたプララント・オパールの給源植物を同定するためには現生植物から作製された珪酸体標本が必要である。第117図に珪酸体標本作製のプロセスをダイアグラムで示した。

土壌中のプラント・オパールを検出する方法についてもダイアグラムで示したので参照されたい。

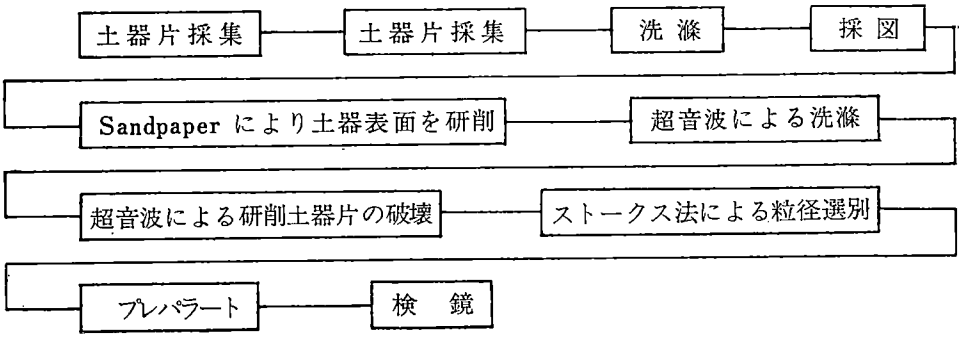
古代土器の作製に用いられた胎土中にプラント・オパールが含まれておれば，プラント・オパールの耐熱性（約800°C）からみて土器中に残留している可能性が十分考えられる。他の遺



第 117 図　イネ科植物珪酸体標本の作製



第 118 図　土壌試料の定性分析



第 119 図　土器片中のPlant opalを検出する方法

跡で出土した土器片中にも多量のプラント・オパールが含まれていることが確認され，その分析法もほぼ確立され得たので，遺跡出土土器片についても分析を試みることにした。分析法についてはダイアグラムを参照されたい。

土壌中から検出されたプラント・オパールの場合，後代植物に由来するプラント・オパールを考慮する必要があり，生産時代を特定できないことがある。土器片に含まれるプラント・オパールは少なくとも土器製作時代もしくはそれ以前に生産された植物に由来するものと考えることができる。

分析結果

土壌試料の分析結果は表に示したとおりである。

各土層を通じてヨシ，タケ類が多くススキ，チガヤなどがこれに混った状態であり，低湿地性のイネ科植生を示している。B地点の試料1～7はタケ・野草類だけであり，イネその他の栽培植物は認められない。この点については考察の項で検討したい。試料8～18には野草，雑

表50　土壌のプラント・オパール分析結果

試料番号	地点・深さ cm	植物名
1	B 120～115	ヨシ・タケ・チガヤ・ススキ
2	B 115～110	タケ・ススキ・ヨシ・チガヤ・ウシノシッペイ・ダンチク
3	B 110～105	タケ・ヨシ・チガヤ・ススキ・アゼガヤ
4	B 105～100	ススキ・タケ・チガヤ・ヨシ
5	B 100～ 95	ススキ・タケ・チガヤ・ヨシ・ヒエ・マコモ
6	B 95～ 90	タケ・ススキ・チガヤ・ヨシ
7	B 90～ 85	ヨシ・タケ・ススキ・スズタケ・チガヤ・ツルヨシ
8	B 85～ 80	ヨシ・タケ・ススキ・チガヤ・ジュズダマ・イネ
9	B 80～ 75	タケ・ススキ・ヨシ・チガヤ・メガルカヤ・ヒエ・イネ(?)・マコモ
10	B 75～ 70	タケ・ススキ・ヨシ・ツルヨシ・チガヤ・ジュズダマ・マコモ・ヒエ・モロコシ・イネ
11	B 70～ 65	ヨシ・ススキ・タケ・チガヤ・ジュズダマ・ヒエ・モロコシ・イネ
12	B 65～ 60	タケ・ヨシ・ススキ・チガヤ・ヒエ・モロコシ・マコモ・イネ
13	B 60～ 55	タケ・ヨシ・ススキ・チガヤ・マコモ・モロコシ・ヒエ
14	B 55～ 50	タケ・ススキ・チガヤ・ダンチク・マコモ・サヤヌカグサ・ダンチク・イネ
15	B 50～ 45	タケ・ススキ・ヨシ・ツルヨシ・チガヤ・マコモ
15	B 45～ 40	ススキ・タケ・ヨシ・ツルヨシ・チガヤ・マコモ・ダンチク・イネ(多)
17	B 35～ 30	タケ・ススキ・ヨシ・ツルヨシ・チガヤ・シバ・イネ(多)
18	B 25～ 20	タケ・ススキ・ヨシ・チガヤ・メガルカヤ・シバ・イネ(多)
19		
20	A 150～145	タケ・ススキ・ヨシ・チガヤ・ツルヨシ・サヤヌカブサ
21	A 140～135	ススキ・ヨシ・チガヤ・ツルヨシ

表51　出土土器のプラント・オパール分析結果

試料	植物名
北久根山式土器片	チガヤ・タケ・ヨシ

草とともにイネが認められ，とくに試料16～18には多量に存在した。A地点の試料はV字溝遺構の底部にあたる試料20，21の2点である。ここでは野草に由来するプラント・オパールのみ検出された。

考察および結論

① 試料の採取にあたっては細心の注意を払う必要がある。採取過程での異物の混入を避けることはいうまでもないが，同時に採取地周辺の現況，土層断面の状況を考慮のうえ採取されねばならない。今回の試料は前述のとおり，広島大学：安田喜憲氏が採取されたものであり，上述の諸点については同氏が十分に留意してあたられたものである。

A地点はV字溝遺構（溝状遺構）であるが，B地点はいわゆる遺物包含層である。考古学的に遺物包含層とされる土層は土器その他の遺物を包含する土層を指している。したがって，包含層土壌の堆積時代と土器その他の遺物が活用された時代が同一であるかどうかについては充分慎重に検討される必要があろう。土壌試料を分析対象にする場合，とくに低湿地では土層の攪乱，後代堆積土壌の落ち込みの可能性を考慮しておくべきであろう。何らかの形で遺構にともない，さらに上層からの混入の可能性が少ないと思われる試料，あるいは包含層の場合，rollingの可能性の少ない伏せた完形土器に包まれた土壌のように確かな試料が望ましい。無論，常にこのような試料が得られるものではなく，一般的な包含層土壌を分析対象にすることは必要である。

② 前項で触れたように，土壌を試料にする場合は，その堆積時代を充分吟味しなければならない。これに対して，土器胎土に包含されるプラント・オパールはその生産時代を土器製作以前として限定できる利点がある。プラント・オパールはSiO_2でできており，熱に強く800°Cの高温に耐えることができる。縄文・弥生土器の焼成温度は600～800°Cと推定されていることから，土器製作の際胎土にプラント・オパールが含まれておれば充分残留することになる。最近，土器胎土中のプラント・オパールを壊さずに土器を壊す方法を開拓することができ，この分析が可能になった。本遺跡出土の縄文・北久根山式土器を対象に胎土中のプラント・オパールを分析した。

③ B地点の縄文後期土器（北久根山式土器）包含層（5層の上部）からイネ機動細胞様プラント・オパールが検出された。同層に包含されている土器は縄文後期前半に属するものであり，プラント・オパールで確認されたイネ機動細胞様プラント・オパールとしてはもっとも古い時代に属する。このことは同時代にすでにイネが存在したかもしれないという可能性を示唆するものではあるが，必ずしも確度の高いものとはいえない。前述のとおり，土器包含層土壌を試料にする場合とくに低湿地ではその分析結果を充分吟味する必要がある。同遺跡出土の北久根山式土器片を相当数分析したが，遂に一例もイネ機動細胞様プラント・オパールは検出されなかった。従って，この縄文後期前半にイネが存在したという確認は得られなかった。勿論，仮に同時代にイネが存在したとても，必ずしも土器片にそのプラント・オパールが含まれるというものではなく，この時代にイネが存在しなかったという証しではない。同時代にイネが存在しなかったかどうかは，今後同時期遺跡の調査分析例を増し，より確かな試料の分析を

行ない判断する必要があろう。

④ 一般に自然科学的分析はそれぞれの分析科学固有の理論と方法にもとづき行なわれるもので，同一試料を対象にする限り同じ結果が出るのが通例である。さらに，分析結果は具体的に表現される場合が多い。

しかし，この分析結果は，理論そのものが含む前提と分析過程にともなう実験誤差を考慮して意味づけされることが必要である。自然科学と考古学における共同研究が進められる中で両分野の相互理解がまだ充分とはいえない現状である。

プラント・オパール分析についても，分析結果を例えば「イネ機動細胞様プラント・オパール」と表現しているが，これは上述の配慮にもとづくものである。 (藤原宏志)

参考文献

(1) 藤原宏志・佐村洋昭「南九州火山灰土壌の水保機構に関する研究(3)・Plant opal の性状」農業土木学会講演集 1974

(2) 藤原宏志「野方中原遺跡土壌の plant opal 分析」福岡市埋蔵文化財報告書 vol.30 1974

(3) 藤原宏志・佐々木章・末吉孝行「熊本・上ノ原遺跡（縄文晩期初頭）土壌の plant opal 分析」日本作物学会九州支部会報No.42 1975

(4) 藤原宏志「板付遺跡における plant opal 分析」福岡市埋蔵文化財調査報告書 vol.35 1976

(5) 加藤芳朗「黒ボク土壌中の植物起源土粒子について（予報）」土肥誌 vol. 31 1960

(6) 森浩一・藤原宏志「plant opal 分析による黒壁中のスサ材の推定」古代学研究No.75 1975

(7) 藤原宏志「古代土師胎土に含まれるプラント・オパールの検出」考古学ジャーナル No. 125 1976

(8) 藤原宏志「プラント・オパール分析による古代栽培植物遺物の探索」考古学雑誌62巻2号 1976

(9) 藤原宏志「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)」考古学と自然科学 9 1976

4. おわりに

この遺跡の調査によって，住居跡群・溝状遺構等の遺構と多量の遺物を発見することができた。これらの遺構・遺物とそれをとりまく環境については，種々の問題がふくまれており，これについて充分な検討がなされなければならない。しかしこれら全てについて考察をすれば，紙面はつくされてしまうであろう。ここでは，これらの内のいくつかの問題をとりあげて記すことによって，総括にかえた。

(1) 立地条件をめぐる問題

周辺の環境

柏田遺跡を含む梶原川流域における縄文時代遺跡の時期別の分布は付図1に示し，各遺跡の時期的な概観については，Ⅱにおいて前述した。ここでは各時期別に細分を行ないながら，それぞれの遺跡立地との関わりかたから，柏田遺跡をとりまく立地環境を考えてみたい。

まず柏田遺跡に痕跡を認める先土器時代をみると，門田遺跡に同時期の例をみとめることができる。ただし，柏田遺跡にみる細石刃核は，門田遺跡にみる多量のそれとは必ずしも形態的に一致しない，門田遺跡と柏田遺跡との相互距離は約250 *m*という近距離であるが，かといって柏田遺跡を門田遺跡の従属関係として単純に考える訳にはゆかない。柏田遺跡出土の側縁磨耗の細石刃核については一応，門田遺跡から流されたことによるローリングの痕跡としているが，一定の技術として考えることも可能であり，地形条件をも含めて今後の検討を要するものである。

縄文時代の初頭の所産とみられる爪形文土器が門田遺跡谷地区より出土している。(註1) 早期の遺跡としてはこの他，押型文土器（早水台・田村期等）と石組炉をそれぞれ出土する深原遺跡・原遺跡がみられ，深原遺跡では殊に顕著である。また梶原川上流の瀬戸遺跡(註2)・四郎五郎池遺跡にも(註3)この時期に属する土器の出土がみられる。柏田遺跡にはみられない。

前期では，門田遺跡谷部・下原遺跡・中原遺跡に前期前半の曽畑式土器の出土をみる。手向山式，及び塞ノ神式土器は深原遺跡に出土例をみる。柏田遺跡にはこの時期の例をみない。

中期になると並木式土器が柏田遺跡にみられる。しかし柏田遺跡の主体を占める後期中葉の時期まで継続することはなく生活の痕跡を断続する。この空白の時期に属する遺物の出土は深原遺跡に阿高式土器が，松ノ木遺跡に南福寺式土器がみられる。

また後期後葉の柏田遺跡の空白時には，深原遺跡の西平式・御領式，宗石遺跡で三万田式土器の出土がみられる。

一方，縄文時代後期になると粗製条痕文土器が増加し，条痕文土器は晩期にもみられる。条痕文土器片の出土のみでは時期の判別ができないものが多くなるのであろうか，後・晩期遺跡とされる遺跡は数ケ所をかぞえる。

晩期では，前半～中頃に属する遺跡として中原遺跡があり，中頃から末にかけて柏田遺跡に存在が知られる。また松ノ木遺跡では晩期末を欠くが同様の時期にあたる土器の多量出土が知られる。また晩期後半から末にかけては地余遺跡にみられ，門田遺跡谷部にも晩期末の土器の出土が知られる。

このように梶原川流域の遺跡で縄文時代の各時期をほとんど埋めることができたが，次に各遺跡の立地条件を3種類に分類してみると，

(1) 山麓及び高位・中位段丘上に立地する遺跡　　標高30m以上

(2) 扇状原先端部に立地する遺跡　　標高25m前後

(3) 沖積地自然堤防上に立地する遺跡　　標高20m前後

1類の遺跡としては，深原遺跡・瀬戸遺跡・原遺跡等があり，門田遺跡の台地上もこの類に含まれる。

2類では松ノ木遺跡・中原遺跡・鳥ノ巣遺跡・下原遺跡・門田遺跡谷部等があり，この中では鳥ノ巣遺跡はやや高位で標高30mに近く，1類との中間位を占める。

3類には，弥永遺跡・地余遺跡・宗石遺跡及び柏田遺跡が含まれる。

この分類によると1類には早期に顕著で前期以降は深原遺跡で断続的にみられる。2類では前期前半の曽畑式土器の出土が顕著で晩期の一部がみられる。3類では柏田遺跡で後期が顕著であり晩期もみられる。

ここで視点をかえて，各遺跡の水平分布による分類も行なう必要がある。ここでは各遺跡の水系による区分を試みた。

A群，柏田遺跡の横を流れる河川の東側に位置する遺跡，門田遺跡，原遺跡が含まれる。柏田遺跡も現状では含まれるがB群に含まれる可能性が高い。

B群，下原遺跡・地余遺跡・宗石遺跡・中原遺跡・鳥ノ巣遺跡・深原遺跡が含まれる。下原遺跡は現状ではこの類に入るが，A群に含まれる可能性が高い。また宗石遺跡はC群に含まれることも考えられる。

C群，松ノ木遺跡・瀬戸遺跡等が含まれる。

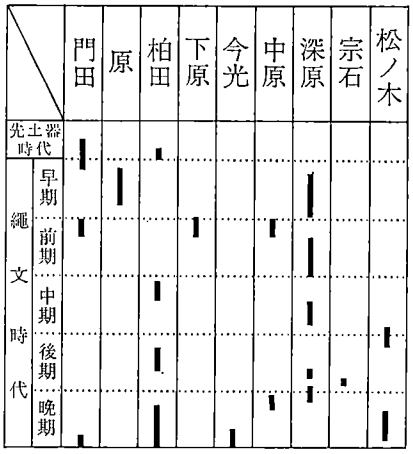
この分類によるとA群では，門田・原遺跡間に早・前期の時期に相互に補うが如き状況がみとめられる。前期後半から晩期にかけて2遺跡では全く空白になる。柏田遺跡の例はこの空白時期の中に含まれる。

B群では，早期に顕著な深原遺跡が空白になる曽畑期に中原遺跡・下原遺跡がみられる等，深原遺跡の断続性を中期末～後期前葉を除いて埋めるあり方を示す。

C群では，B群の空白な時期にあたる，南福寺式土器が出土する。

これによると河川による区分は一応考えられるが，常に決定的であるわけではなく，河川の流路変更等を考慮しなければならない。

低地の遺跡に出現する時期は曽畑式期・並木式期・南福寺式期・北久根山式期（鐘ケ崎式期に既にある）・三万田式期・晩期初頭以降である。逆に深原遺跡に再出現する時期は手向山式期・阿高式期・西平式期・御領式期である。また弥生期に入っても，同様な現象があらわれるようである。



第 120 図　縄文時代遺跡の時期別分布

土器のみにみる出現時期の変遷を概観すれば以上の如くであるが，これについては今後，生産用具を中心として，各遺跡の立地条件，環境等多岐にわたって検討を加えてゆかねばならない。

ただ，低地遺跡の空白時期には，自然条件による生活地としての規制が存在すると考えられる。洪水・水没等により，生活地として利用できる条件ではなかったと考える。また低地に出現する様相にも垂直分布による2類・3類の2段階があり，低地への変遷が1類→2類→3類とみられるのに比し，高地への変遷が3類→1類で2類を介しないことは，低地の使用不可能な状況が急激に起ったことによるとみられないだろうか。

これらを整理すれば，

1. 縄文時代の遺跡立地には3種類の垂直分布がみられる。
2. 段丘上の遺跡は各時期に利用され易い。
3. 低地への利用の変遷がみられる。
4. 低地利用の幅は河川によって区画されるとみられるが，目下のところ明確ではない。
5. 低地への変遷に伴って扇状原がまず利用される。
6. 低地の遺跡において急激な利用不可能な状態が起っている。
7. 利用不可能な状況になる時期には，縄文時代早期・前期中頃・中期中頃，後期中頃等がある。

溝状遺構について

柏田遺跡の北部において西方から北流する溝状遺構は，この遺跡から出土する遺物の大半を出土する。また溝状遺構内にみられる遺物の出土状況は左岸側の西方からなだれ込むような状態であり，西側に豊富な包含層の存在したことを推測せしめる。

一方，同様の時期の遺物をまとまって出土させる住居跡群は溝の右岸側の東南方に位置す

る。

この状況は，溝状遺構が両者を寸断するという一面を呈するのである。しかしこのようなあり方は通常認められる状況ではない。両者の立地的条件を考える必要性があるといえる。

住居跡群の標高は地山面で20.8～20.9mである。これに対し溝状遺構では20m前後である。溝の底面では19.4mを測る。住居跡群周辺の地山面は粗い砂粒で，溝状遺構周辺の地山は粘土層である。また，それぞれの堆積土は，前者が黒色シルト質の粘質砂粒であり，後者は下位に黒色有機質粘土・上位に黒色シルト質粘土である。

一方遺跡周辺の現況での標高を微細に調べると東側に10～20cmの高低差を認める。また西側には2段の小さな段を有して小河川が流れる。この小河川は遺跡の南方約250 m付近で支流と合流しているのであるが，門田遺跡の扇状谷ともぶつかり，流路を屈曲させている。この屈曲部から直流すれば，流路は柏田遺跡の東側をとるのである。このような地形をみることにより，増水時いずれかあるいは両方に水が流れ，島状に残る微高地に立地することを知る。すなわち増水による自然堤防を形成する例としてとらえられるのである。

柏田遺跡における溝状遺構はこのような環境の中での小規模な後背湿地を示すのではなかろうか。プラント・オパール分析における，ヨシ・ススキ・タケ・チガヤといった種類の様相はまさにこうした低湿地にみられる植生としてみることができるのである。

これに対し住居跡群の立地は，シルト質の砂粒を堆積する自然堤防の頂部付近とみることができる。

溝状遺構における上位と下位の堆積土はシルト質と有機質に分かれ，遺物の多量に出土する層は上位と下位の境に近い部分である。この堆積した時期が北久根山式土器の時期であることはほぼまちがいないとしても，溝状遺構の形成される時期は明確ではない。中期の土器の出土はこの溝状遺構の下位に多くみられるが上位にも含まれる。

溝状遺構の成立期が北久根山式期以前である。とすれば，住居跡群と溝の西側との間に低湿な溝が存在していたことになる。

溝状遺構の成立期が北久根山式期であるとすれば，溝状遺構の成立は換言すれば居住地としての廃絶を示すものである。

このように溝状遺構の成立は重要な意味を有すものである。今回の調査ではこれについて言及できるだけの解析は行ないえなかったので問題点を提示することに留めたい。

ただ後者については，北久根山式期の後に続くと思われる西平式期の遺跡・遺物が周辺の低地にみられず，深原遺跡の如く高位段丘・山麓地にみられるということから可能性を充分にはらんでいると考えられるのである。

V字溝の性格も含めて調査区域西側の今後の調査及び周辺遺跡での解明を期待するものである。

註1　柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会　1975
2　鷺久嗣郎他編「山陽新幹線埋蔵文化財調査報告」1　福岡県教育委員会　1976
3　赤崎敏男「福岡県那珂川町四郎五郎池発見の縄文土器」『九州考古学』39・40　1970

(2)　出土後期土器について

柏田遺跡の縄文時代後期の土器は，住居跡・土壙・住居跡周辺・溝状遺構から出土し，殊に第1号住居跡とそのすぐ横に位置する土壙内から出土した一群の土器には器形の明瞭な資料が多くみられた。この土器を分類することによって，この時期の生活に使用された器形のセットが明確になるものとみられる。また溝状遺構からは多量の土器片の出土があった。これについては器形の明確な例が少ないため，文様を中心として分類した。従ってここでは両者の関連について記述し，整理しておきたい。

住居跡等出土土器による器形の分類は，器形・口縁の形状・文様の順でおこなった。

深鉢形土器1類　波状口縁を呈する。

a類　波状口縁の頂部に貼付を有する。橋状把手が付される。斜線文を反転させ綾杉文を形成する。文様は口唇部を1周する。貼付文にはM字・W字及びN字・逆N字組合せ文がみられる。

b類　波状口縁の頂部は貼り付けられるがつまみ上げたように薄くなる。文様は口唇部を1周する。貼付文には斜線文でN字・逆N字文を付ける。

c類　波状口縁の頂部は貼り付けられず，頂部口唇はやや角ばる。V字・逆V字文を中心として左右に4本づつ計8本の斜線文が放射状に付され凹点を伴う。文様は口唇部を1周するものと1周しないものがある。またV字文等を有さず口唇部上面に連続斜線文を施文し，疑似縄文化するものがある。

深鉢形土器2類　平縁の口縁を呈する。

a類　ヘナタリ条痕文を施文したもの。内外面ともヘナタリ条痕文を施文する例と内外面のいずれかを無文にする例がある。

b類　アナダラ条痕文を施文したもの。a類同様，内外面共にみられるものとどちらかを無文にする例がある。

鉢形土器1類　波状の口縁を呈する。

a類　縄文を施文する。磨消縄文を伴うことがある。

b類　疑似縄文を施文する。充填疑似縄文を伴うことがある。疑似縄文には扇状貝圧痕・アナダラ属貝殻腹縁を用いた疑似縄文・ヘナタリ疑似縄文等がある。

鉢形土器2類　平縁の口縁を有するもの。

a・b類ともに鉢形土器1類の分類に準じる。

鉢形土器3類　無文の鉢形土器。

頸部のくびれるものとくびれないものがあり口縁上に突起を貼付けるものがある。

浅鉢形土器1類　波状口縁を呈するもの。

a類，縄文を施文するもの。磨消縄文が施される。

b類　疑似縄文を施文するもの。充塡疑似縄文が施文される。

浅鉢形土器2類　平縁の口縁を呈するもの。

分類は浅鉢形土器1類に準じる。

皿形土器

a類　縄文を施文する。

b類　疑似縄文を施文する。

c類　無文

一方，溝状遺構等の土器は文様による分類をおこなった。

1類(a)　斜線文で綾杉文をなしたもの。深鉢形土器1a類に伴う。

(b)　斜線文。深鉢形土器1b類・深鉢形土器1c類に伴う。

2類(a)　縄文。鉢形土器2a類・皿形土器a類に伴う。

(b)　疑似縄文。鉢形土器1b類・鉢形土器2b類・浅鉢形土器1b類・浅鉢形土器2b類・皿形土器b類に伴う。

3類　沈線文。器形の分類に直接あてはまらない。

4類(a)　刻目突帯文。器形の分類に直接あてはまらない。

(b)　無文突帯。器形の分類に直接あてはまらない。

5類　列点文。器形の分類にはあてはまらない。

6類(a)　縄文を口唇部に施文。2類(a)と同じ。

(b)　疑似縄文を口唇部に施文。2類(b)と同じ。

(c)　列点を口唇部に施文。5類と同じ。

(d)　刻目を口唇部に施文するもの。4類(a)と同じ。

(e)　口唇部に凹凸のあるもの。器形の分類に直接あてはまらない。

7類(a)　ヘナタリ条痕文。深鉢形土器2a類に伴う。

7類(b)　アナダラ条痕文。深鉢形土器2b類に伴う。

8類　無文。深鉢形土器1類・鉢形土器1～3類・浅鉢形土器1・浅鉢形土器2類・皿形土器等に伴う。

この他脚台，底部等を取り扱ったが，器形と直接あてはまらず多岐にわたるため，ここでは省略する。

住居跡から出土した土器の深鉢形土器において，『W』字等の貼付文を有する等，おおむね特徴が北久根山式土器のそれと類似する。

鉢形土器でも扇状貝圧痕などの疑似縄文・充填疑似縄文がみられること，また皿形土器にも同様の文様がみられること等から北久根山式土器の類にあてるのが妥当であろう。しかし各器形の分類によって，わずかながらであるが，従来北久根山式土器とされているものと若干の差異のあることを認知する。

すなわち深鉢形土器１ｂ類においてその特徴が北久根山式土器に通常みられる，綾杉文・M字文・橋状把手等を有し，沖ノ原遺跡で示される1a類と特に変化はみとめられないが，1b類では口唇部が肥厚することなく，貼付文の省略化がみられること，及びN字文を有することは差異とすることができよう。また1c類における貼付文の消滅・口唇部が薄く角ばること・文様が放射状になりながらV字（逆V字）になることをみるに至っては，従来の北久根山式土器とされるのと大きなへだたりがあるといわざるをえない。

この１類土器の器形の面では，口唇部の外反も，頸部のしまり，胴部のはりださないなだらかなカーブというような特徴は，類似資料の多い沖ノ原遺跡資料（註１）中にみいだすことができなかった。

また口唇部の斜線文が省略化して疑似縄文風に浅く付される口唇文様もみいだせない。口唇部に集中する文様帯の省略化とも考えられ，注目に値する。またV字文と凸点の存在は西平式土器の頂点部V字口縁の状態の前駆的なものであるともみられる。

一方，鉢形土器では磨消縄文手法と充填疑似縄文の併存がみられ，まだ磨消縄文を施文する段階からそれほど離れていないとみるべきであろう。鉢形土器のみならず，皿形土器にも疑似縄文の手法が用いられており，鉢形土器の特徴と同様である。

これらのことをみるだけでも，３種類の差異をみとめることができるといえる。しかしこれらは１軒の住居跡とその横にみられる土壙での一括出土の土器においてであり，いわゆる遺物包含層・貝塚等の出土による資料よりも，確実性の高い資料であることを考慮すれば，わずかな時期間における変化，あるいは多様性として考えなければならないであろうし，地域性も当然ありうると考えられる。

後期中葉における北久根山式の位置づけは，西北九州における最近の資料増加によってやや明らかにされてきた感がある。しかし熊本・長崎県等を中心とした資料増加の圏内でも，やや東北隅にあたる当該地方では，やはり模糊としており，この域を脱し得るためにも，柏田遺跡の住居跡内出土土器にみられる様相は，今後の類例検討を要するものである。

ここでは，柏田遺跡の土器群にみられる，差異を提示することによって，今後の北久根山式土器及びその周辺の解明への一布石になることを目的としたが，型式設定等をするだけの準備はなしえなかった。

註１　坂田邦洋「縄文時代に関する研究，北久根山式土器の設定」考古学論叢３　1975

(3) 生産用具をめぐる問題

柏田遺跡で出土した豊富な石器のうち生産活動に直接関係するとみられるものは，尖頭状石器・石鏃・石錘・石斧・石庖丁等がある。

これらの内，比較的多量に出土している，石鏃・石錘・石斧はそれぞれ狩猟活動・漁撈活動・植物質食料採集活動に直接かかわる用具であり，この遺跡の生産活動は生産基盤を考える上に重要な遺物である。

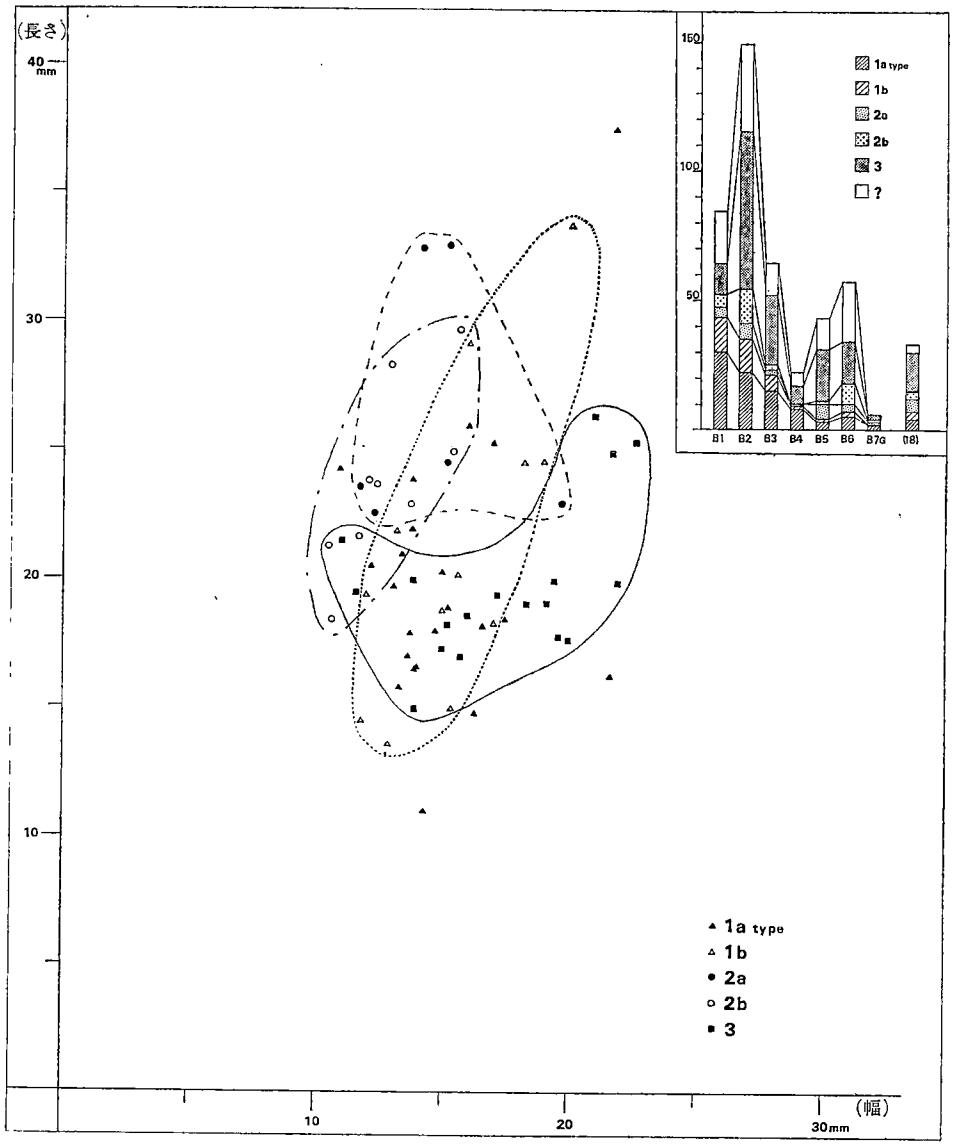
石鏃　この遺跡では，普通一般にいわれる打製石鏃と剝片鏃があり，両者の中間形態と及び剝片鏃のバラエティとみられる石鏃がある。量的には，剝片鏃及び剝片鏃の類がいわゆる打製石鏃を圧倒的に上回る。形態としてはA凸基・B凹基・C凹基と，C′凹基があるが平基に近い例があり，A型11点，B型36点，C型194点，C′型96点が内訳である。打製石鏃におけるA・B・C・C′の比は，5：16：29：41であり，わたぐりの浅い例が多いという様相を示す。また剝片鏃では凹基が占める。

現在知られている剝片鏃の出土遺跡は西北九州長崎県北部を中心として70ケ所以上を数える（註1）がその加工部位にはばらつきもみられる。柏田遺跡においても差異が見られる。

刃器状剝片を素材として主要剝離面を残す剝片鏃の加工部位の差異は，その素材の形状及び部位に左右されるものであると考えられる。2a・2b類にみられる刃器状剝片の基部利用と3類の先端部利用の差異をまず考えなければならない。刃器状剝片の基部を利用する場合，その素材の性格上，厚みを有す。先端部を利用する場合にはこれに対して厚みが減少する。また，基部を利用する場合では，2b類は打瘤を打欠くことによってわたぐりを形成することから厚みは減少する。これに対し，不定形剝片を利用する打製石鏃1a類及び周辺加工の1b類では厚みが，1a類3.6～4㎜，1b類2.6～3㎜に集中する傾向があり，1b類のそれは2b類と3類と同様の数値である。2a類の厚みは4.0㎜前後に集中し，厚みの面では2a類が1a類に近く，1b類，2a類・3類はほぼ近い。

1b類及び2a類及び1a類はその特徴から，先端部に厚みを有し，刺突具として安定した形態であり，2b・3類は刃器状剝片の先端部をそのまま利用することから刺突具としては不安定な要素が強いと換言することが可能である。

剝片鏃は打製石鏃と他の計測値の上で大きな差異をみとめない（第121図に完形品の長さと幅による分布を示したが，打製石鏃の分布圏内にほぼ剝片鏃が含まれる。）が，厚さから用途に関する問題を提起することができるのである。しかしこの現象がこの遺跡のみなのであるか否か，この問題について充分な検討を加えるには至らなかった。従って剝片鏃と打製石鏃の区分という問題の一部を提示するに留めた。



第 121 図　石 鏃の長さと幅及び地区別分布
(棒グラフは地区別出土点数を示す)

1.　剝片鏃は，加工される部位によって区分される。すなわち1b・2a・2b及び3類である。

2.　剝片鏃は，用途を考えると1b・2a類のグループと，2b・3類のグループに区分される。

3.　剝片鏃の定義については(1)刃器状剝片を素材とする。(2)主要剝離面を残す。(3)わたぐりを含めて基部のみに加工を施す。(4)刃器状剝片の先端部を鏃の先端側に用いるとする。

しかし，剝片鏃に類するものとして，(a)石刃状剝片の基部を鏃の先端側に用いる。及び(b)

不定形な剝片を用いることもある。の2項目を含めたものが広義に用いられる。

剝片鏃の製作に関しては，既に「つまみ形石器」と伴うものと考えられており，つまみ形石器が剝片鏃製作の際の残余あるいはその過程によるものであるとする説は通説化している。(註2)。このつまみ形石器は柏田遺跡で多量に出土している。剝片鏃が多量に出土し，3類の先端部側剝片鏃が打瘤を残さないことを考えると両者は伴うものとみられる。それぞれの計測値による分布の最大値を比較すると，次表の如くになる。

	長さ	幅	厚さ	重さ	数量
	cm	cm	mm	g	
剝片鏃（3類）	2.0	1.6～2.0	2.6～1.0	0.6～1.0	162
つまみ形石器	1.8	1.6～2.0	4.0	1.1～1.5	539

これにより，長さを合計すると3.8 cmとなる。また幅はほぼ同様の数値を示す。なおつまみ形石器の折断方向は，稜のある面からのものと，主要剝離面からのものとほぼ同数である。

しかし剝片鏃の製作過程による，つまみ形石器以外の，残滓については確認できなかった。剝片鏃とつまみ形石器をめぐる問題については今後，両者が共存する遺跡を含めて充分に検討されてゆかねばならない。

また石鏃を用いる為には弓矢の存在も考慮しなければならない。打製石鏃及びその周辺が刺突に適した条件と，不安定な条件のあることは，対象物に差異があると考えざるをえない。柏田遺跡の立地条件を考えれば，両者の併存は河川及び後背湿地と，段丘若しくはその後方につづく山麓部という条件を有することから，剝片鏃は河川及び後背湿地等での使用ということも考えてみる必要があろう。

石錘　柏田遺跡で出土した石錘は全て礫（打欠）石錘である。礫石錘についてはその重量が大きく縄文時代にみられる他種の石錘の重量をかけはなれることから，漁網錘とは考え難いとされる(註3)。柏田遺跡から出土した石錘はその重量が15.8～112.4 gであり，30 g以下のものが多いことから漁網錘としての可能性があるものと考えられる。

重量の点では，漁網錘として縄文時代後期に北部九州でもみられる切目石錘を対象として比較してみると，縄文時代後期の遺跡で最近多量の切目石錘を出土した京都府桑飼下遺跡(註4)では10 g以下～70 g台に分布し，20 g台に最も集中することから，柏田遺跡の15.8～11.24 gでしかも112.4 gの1点を除けば70 g以下で21～30 gに集中する傾向は，切目石錘と近似しているといえよう。また，柏田遺跡が那珂川，梶原川に近く，低位河岸段丘の自然堤防上に立地していることから河川での利用等を想定するのは容易である。

ただし，1点含まれるB種については45.8 gという比較的軽い重量であるが，A種のものと同一の用途よりも他の用途を考慮することが適当ではなかろうか。

石斧　柏田遺跡では3種類の石斧がみられ，磨製石斧と半磨製石斧・打製石斧がある。磨製石斧には，乳棒状石斧と定角石斧・小形石斧に含まれるものがあり，定角石斧は東日本において多量出土する種類からあり方については注目されよう。また半磨製石斧は，嘉穂郡筑穂町北古賀遺跡において多量出土しており，扁平打製石斧の前駆的存在だとされることから注目されるが(註5)，柏田遺跡では扁平打製石斧の出土も数多くみられる。これらの石斧のあり方は後期中葉から後半にかけてみられる現象だとされる(註6)。磨製石斧は木材伐採等に使用されたと考えられ，小形磨製石斧の中には扁平片刃のものも含まれることから加工に関わる可能性は高い。半磨製石斧と打製石斧のあり方については後晩期における農耕存在論ともかかわるが，柏田遺跡の立地条件を考慮すると，晩期農耕の舞台とされる高地とはかけはなれており，直ちにこれにあてはめることは出来ない。むしろ自然堤防上での使用ということを第一に考える必要がある。

（小池　史哲）

註1　下川達弥「剝片鏃考」『昭和46年度長崎県立美術博物館館報』1972　において長崎・佐賀両県にわたる47ケ所が既に数えられる。分布は，福岡・熊本県及び朝鮮半島にも及ぶ。

2　片岡肇「いわゆる『つまみ形石器』について」『古代文化』22—10　1970　及び下川前掲書等。

3　渡辺誠『縄文時代の漁業』1973

4　渡辺誠編『桑飼下遺跡』1976

5　潮見浩「北古賀遺跡」『嘉穂地方史』先史篇　1973

6　島津義昭「西北九州の縄文後期社会—石器からみた素描—」どるめん　10　1976

(4)　西北九州における黒曜石製の縦長剝片についての一考察

I　柏田遺跡出土の縦長剝片と石核

柏田遺跡から多量の黒曜石製の剝片や各種の剝片石器が出土しており，その量の多いことがまず注目されるのである。そこでそれ自体で利器として，また剝片石器の素材となっている縦長剝片について考察を行うこととしたい。

後期旧石器時代の石刃ないし石刃状剝片と形態的に極めて類似した黒曜石製の縦長剝片が西北九州の縄文時代の遺跡において注意されたのは意外に古く，その最初のものとして大正時代の末，佐賀県嬉野遺跡(註1)・長崎県有喜貝塚(註2)において剝片鏃と共に発見されているのである。石鏃に関心の主体が置かれているが，石鏃の素材として，またそれ自体が利器として使用された可能性が指摘されているのである。その後は特別問題視されることなく年月が流れており，昭和30年代の中頃，長崎県筏遺跡の調査(註3)　さらに佐賀県伊万里市の鈴桶遺跡の発掘調査は西北九州の縦長剝片の存在を一躍学界に知らしめたのであった(註4)。すなわち鈴桶遺跡の発掘で4000点近い莫大な量の縦長剝片（刃器・刃器状剝片）および約250点の石核が出土

し，その所産の時期について大きな波紋が投ぜられた。多くの問題を残しながらも先土器時代の可能性がより強いとの結論が提出され，『鈴桶型刃器技法』の存在が具体的に確認し得た事を第一の意義と考えられ報告された。それ以後西北九州の縄文時代遺跡において断片的な資料の出土があり，それらの報告や考察が行なわれる(註5～11)一方，縦長剝片を素材にした剝片鏃・つまみ形石器・サイドブレイド等についての論巧を見ることができるのである(註12～16)。

西北九州（長崎・佐賀・福岡）の縄文時代に黒曜石製の縦長剝片の存在することはもはや疑いの余地を挾むことができないほど明確にされており，その時期・分布についても一定の見通しをたてることができ，その在り方についてもある程度把握される段階に進みつつあると目されるのである。この点については後に触れることにして，まず当遺跡出土の縦長剝片についてその形態および技術から思考して，併せて鈴桶遺跡との対比を行なってみることにする。

『縦長剝片』については次の様な概念規定を一応考えている。剝片の両側辺および背面の稜線がほぼ併行に走り，横断面が薄い三角形ないし台形を呈すること。剝片の最大幅に対して，その最大長が二倍以上ある縦に長い整った形状を有し，側辺に鋭いエッヂを形成していること。それ自体が利器として用いられる一方，他の剝片石器の素材となり得る目的的な剝片であること。製作技術の点は縦長剝片を剝離したと考えられる石核で，確実なしかもまとまった数量をもつ出土例が乏しいため現時点では控えておきたい。ただ縦長剝片の観察による限り，また断片的な石核からの判断では『鈴桶型刃器技法』ないしそれと極めて強い関連を指摘できるものと考えている。従来『刃器・刃器状剝片・石刃状剝片』と呼称されているものに該当する剝片である(註17)。これらの名称を用いなかったのは刃器としての利器以外に他の剝片石器の素材に用いられる要素を多分に含んでいることを重要視したかった為であり，またこれまでの縦長剝片について技術的な問題が充分な裏付けをもって明確にされるまで至っていないと考え，形態的な特徴から仮に縦長剝片と呼んでいるのである。しかし，『縦長剝片』という名称では先の概念規定以外の単に縦に長い剝片の総称として理解され明確さを欠くため必ずしも適当な名称と思われないのでいずれ改変すべきと考えている(註18)。

a石材　縦長剝片の石材として用いられている黒曜石の大多数は漆黒色～黒色を呈しガラス光沢が強く半透明で介在物のほとんどない良質なものである。自然面は縦に細長い縞状の流理あるいは虫蝕状の小さな凸凹が認められ，同一個体の石核・剝片に両者が共に見られるものもあるのである。黒曜石製の資料には角ばった自然面や節理面の残されているものが存在し，角礫状の母岩・原石が使用されたと容易に推察されるのである。また縦長剝片を用いた剝片石器の一部に自然面ないし節理面の付着しているものが相当数認められ石核の素材となった母岩の大きさ（容積）を知る上での一つの示唆を与えてくれるのである。と同時に縦に長い比較的整った剝片がほとんど無駄なく利用された事を示めすものと考えられる。

他に灰白～灰黒色で介在物が全く認められない透明な良質なもの，それに黒色で介在物の目

だつものなどが利用されている。これらの原産地の同定についてはフイションントラック法や顕微鏡観察など科学的方法に拠らなければならないであろうが，断口および自然面の肉眼的観察に拠る限りその大半は佐賀県の腰岳産と判断して大過ないものと考える。

b 大きさ　縦長剝片の大きさについては刃器の項で触れたが，打面から末端まである資料の分析の結果，長さ4.0～5.0㎝，幅1.5～2.0㎝に集中する傾向が窺えるのである。集中の度合は長さよりもむしろ幅に顕著でありいかに目的的剝片であったかが察知でき，一定の剝片剝離技術が想定されるのである。当遺跡で極めて多量に出土している剝片鏃やつまみ形石器の素材には明かに形の整った縦長剝片が利用されており，これらの石器からもとの縦長剝片の正確な長さを知りえないのであるが，石器の幅からの推測ではやはり4.0～5.0㎝前後になるものと思える。

以上の数値によって縦長剝片の大きさについてある程度の目安がつき，幅に対して長さが2倍以上（大部分は3倍までにはならないようである）あることを一つの基準とされよう。

縦長剝片の石核と想定される資料が2点出土しており，その石核は共に全高がほぼ6.0㎝である。一般に残核では剝片の長さよりやや短かめになる傾向を示めすが，この2点とも縦長剝片の平均的な大きさを上廻っているのである。しかしながら当遺跡出土の縦長剝片の中にも完形で6.0㎝以上の長さを有するもの，あるいは剝片の一端がカットされていてなおかつ6.0㎝を越えるものが存在しており，しかも僅か2点なので大きさで特に問題とならないと思える。

c 形状　一般的な形状については先に述べているので打面近くとその逆の末端についての補足を行うこととする。打面構成はバリエィションに富んでいるが，その大半は1回ないし数回の大きな剝離によって形成された平坦打面をなしているのである。しかもその打面は総じて小さく打面近くに小さな調整剝離—頭部調整—が何回となく繰り返し丹念に施されているのである。中には打点の痕跡を残すだけのものや，背面と打面の接する個所ないし打面の一部にスリガラス状の擦痕が観察されるものも存在するのである。

縦長剝片の打面近くに観察されるこれらの痕跡は剝片剝離作業の過程において認められるものである。すなわち，剝離作業を行う際，その前に剝離された剝片の剝離面の両側辺にあたる部位は幾分盛り上っており，特に打面近くにおいて突出が顕著なため予めその部位を入念に除去した後剝離を行なっているのである。石核に施された頭部調整の結果，剝離された剝片の打面近くの平面形は緩やかな山形を呈しているものが相当数存在するのである。

一方末端の形状については全般的に薄くて尖りぎみになるのであるが，平坦なヒンヂフラクチャーを示めすものも認められており，数は少ないが，下端に逆方向からの打面を残しているものも見られる。

d 剝離技術　剝片の剝離技術については本来相当数の剝片およびその石核を通じて行なわれるべきことは論をまたないであろう。しかし石核の資料が僅か2点という状態なので，ここでは

剝片のどちらか一方の側辺に自然面・節理面ないし石核調整剝離の残されている縦長剝片27点の観察を行なって剝離面の切り合い関係（剝離面の新旧）を検討したのである。

その結果25点の剝片では外側から内側へという順序で，すなわち剝片剝離作業は石核の両側にまず剝離が行なわれた後，中央の部分に数回の剝離が行なわれている事を示唆しているのである。両側から中央へという順序を繰返しながら剝離作業が進行されたものと考えられ，打面の位置を上下逆にして剝離を施す場合も同様な順序がとられているようである。2点の大形石核の最終剝離面においても剝片の観察結果と同じ面構成が認められるのである。

縦長剝片の打角（剝片の打面と主要剝離面のなす角度）については，先に触れた様に全般的に打面が小さいため充分な観察は困難であったが，120度前後（石核の打面と剝片剝離作業面とのなす角度では60度前後になる）のものと，それよりやや小さいものとが認められるがそれも直角に近い角度にはならないと考えられる。

剝片の背面に見られる剝離面の方向は上下の二方向のものと，一方向のみのものとが存在しているが，前者の方が量的に勝っており極めて大まかな割合は2：1になるものと予想されるのである。

e 鈴桶遺跡との対比　上述した柏田遺跡出土の縦長剝片と鈴桶遺跡の刃器・刃器状剝片との比較を試みることとする。ただ両遺跡における資料の数量に極端な開きのある事に対する批判が出されるかも知れないが，今後も西北九州の生活遺跡において鈴桶遺跡に匹敵する遺物の出土量は到底望めないと判断されるので，量的な事は特別問題にしなくてもよいと考えているのである。遺跡の性格については無論あらゆる面から問題にされなければならないであろうが。

まず大きさの点は，鈴桶遺跡では長さ5.0～8.0cmのものが全体の50%以上を占めているのに対し柏田遺跡は4.0～5.0cmに集中する傾向が把握されており，全般にやや小形である。一方幅については両者とも1.0～2.0cmにほぼ収まっているので，全体的な形状では前者がより細長い整った剝片とされ，幅に対して長さが3倍あるいはそれ以上のものが多数を占めることになろう。

剝片の打面構成は平坦打面を基本とする点で一致し，同様に両遺跡とも打面近くの小さな調整剝離―頭部調整―が認められるのである。剝片の剝離技術の面でも上・下両端からの剝離方向を示めすものが半数ないしそれ以上認められることや，その剝離順序が両側から中央部へと行なわれることなど「鈴桶型刃器技法」の特徴と符合すると目されるのである。

両遺跡の比較で特に問題視したい刃器技法については石核で行なわれる方がより適切であると考えられ，柏田遺跡では僅か2点と少ないが，これまでの西北九州の縄文遺跡においてもその出土例・出土量共に少ないし，今後も期待できそうもないので非常に貴重な存在と言える。

角礫状の素材を用い，一方の面にのみ剝離作業面が形成され，逆の一面には自然面が大きく残されたままの状態である。しかも剝離作業に先だって一回の大きな剝離によって打面形成が

準備され，その角度は約60度を示めしているのである。残核の平面観はほぼ長方形を呈し，一方側面観は両設の打面が残されている背面に向って傾斜しており，扁面ないしほぼ山形を呈すものが出土しており，鈴桶遺跡出土のA群の石核と多くの共通点を抽出できるのである。

以上の事から，柏田遺跡の縦長剝片は鈴桶遺跡の刃器・刃器状剝片と大きさの他は全く共通するものと考えられ，石核についてはさらに近似しているとの結論が提出される。これらの事は，柏田遺跡の出土の縦長剝片が鈴桶型刃器技法によるものであると判断することが許されよう。縦長剝片およびそれを素材にした多量の剝片石器の存在については，鈴桶遺跡で見られる遺物の出土状況すなわち約4000点の刃器・刃器状剝片，約250点のその石核の数量が注目される。しかも遺跡の立地が黒曜石の原産地に位置しており，生活の条件として必ずしも恵まれない場所に占地していることや北松浦郡世知原町観音木・平河原両遺跡(註19) などの同様な遺跡の存在と無関係と思われないのである(註20)。

Ⅱ　西北九州における縦長剝片について

a　出土遺跡とその状況　黒曜石製の形の整った縦長剝片が出土している縄文時代の遺跡は西北九州において50個所に近い数になり，縦長剝片を素材にしたと考える剝片鏃やつまみ形石器の出土遺跡を加えるとその数は70個所前後に増加するものと推定される(註21)。この遺跡数からみれば西北九州の縄文時代にあって，縦長剝片の利用は程度の差こそあれかなり普遍的な状態と見なすことができよう。縦長剝片の石核と推定される資料の出土が極めて限られていることや縦長剝片およびそれを素材にした石器が少ない遺跡における資料についてはそれが直ちに「鈴桶型刃器技法」によるものと断定できないかも知れないが，遺跡の分布や時期から考慮して，その可能性は極めて強いと予測されるのである。

縦長剝片の在り方は各遺跡においてかなり異なった様相を示めしいくつかのタイプに分類する事が可能と思われ，その一つの基準を縦長剝片の石核の有無に置くことができるであろう。

70個所を越える遺跡の中で，縦長剝片を剝離したと考えられる石核の出土例は乏しく，現在の所，10数個が挙げられるに過ぎない状態である。その石核も鈴桶遺跡，北松浦郡世知原町の観音木・平河原の両遺跡など数ケ所の遺跡ではかなりの数まとまって発見されているのに対して，他の遺跡においては数点から10数点前後と少ないのである。残りの大多数の遺跡では皆無の状態である。石核を多量に出土している遺跡は腰岳に隣接する地域に限定されており，しかもそれらの遺跡における石器の組成は単純で限られた器種―刃器・刃器状剝片・つまみ形石器など―が主体的に認められるという共通した要素を抽出できるのである。これらの遺跡のうち，正式な調査が実施され報告書の出されたものは鈴桶遺跡だけなので推測の域を脱し得ないが，その立地および遺物の出土状態から考慮すると特殊な性格，剝片石器の素材である縦長剝片ないし刃器などの製作地の色彩が極めて濃厚に感じられるのである。

刃器ないし剝片石器の素材の製作地がある一定の地域に存在していたという仮説が成立すれば，石核が核極に少ないかあるいは全く見られないにもかかわらず，縦長剝片・刃器それに剝片鏃・つまみ形石器さらに縦長剝片を素材にしたと推測される石器などが相当数出土する遺跡の理解が初めて容易になるものと考えられるのである。

石核の出土状況と同様に，縦長剝片やそれを用いたと考えられる剝片石器の出土数も遺跡によって異なっている。黒曜石製のそれらの石器と，同じ地域に原産地のあるサヌカイト製の剝片石器との関連や剝片鏃と両面加工の石鏃との量的な比較，さらに腰岳産以外の黒曜石製の石器類など重要な問題が数多く提出されるのである。これらの重要な課題に対処するための一つの基礎的作業となる縦長剝片の分布と時期についての若干の予察を試みることにする。

b　分布　縦長剝片が出土している遺跡について伊万里市腰岳を中心にしてその拡がり，特に周辺地域を抽出してみたい。北および東の確実と想定される分布は現在の所，遠賀川沿いに認められ，遠賀郡の山鹿貝塚（註22）・榎坂貝塚（註23），嘉穂郡の北古賀遺跡（註24），田川市の上野遺跡（註25）などを挙げることができる。いずれの遺跡も典型的な縦長剝片の石核を見ないが，榎坂・北古賀では比較的まとまった資料が出土しおりしかも縦長剝片の特徴は鈴桶型刃器との共通性が指摘できるのである。東南では熊本県泗水町三万田遺跡（註26），南は宇土半島の突端に接する戸馳島の浜ノ洲貝塚（註27），天草の本渡市大松戸遺跡・同妻の鼻遺跡（註28）での出土例が知られており，長崎県では長崎半島の突端に位置する脇岬貝塚（註29）において好資料が出土しているのである。西南では本土と離れている福江島の宮下貝塚（註30），三井楽貝塚（註31）に存在しているのである。

以上の諸遺跡が縦長剝片の出土する最も離れた遺跡として分布での周辺地域を構成しているものと考えられ，その大半が河川流域の平野部ないし海岸に近接した地点に立地しているのである。縦長剝片を素材にしたと考えられる剝片鏃の出土遺跡を加えると多少は拡がると思えるが大勢を大きく変ることとはならないであろう。当然の事ながら分布の最も集中する地域は腰岳に近接する西松浦郡および北松浦郡である。それも腰岳の西側に大多数見られ，南東の武雄を中心とする平野部では著しく少なく，また北にあたる東松浦半島においては皆無に近い状況を示めしており，腰岳との距離の遠近だけの問題では把握できない面が指摘できるのである。

c　時期　縦長剝片の時期については従来から予測されている通り，そのピークは縄文時代後期に置くことができよう。しかしながらその時期はある幅を有しておりしかも時期によって分布の在り方に相違が認められる傾向を知るのである。石器および剝片自体では時期の決定やその中での細分は至極困難であり土器に頼らざるを得ないし，それも確実な包含層や単純遺跡のものでなければ正確に決定できないなどの問題が横たわっている為，現時点での予察として述べておきたい。

西九州においてここ10年間の調査で相当数の好資料が知られており，特に洞穴・岩陰遺跡の調査結果によると縄文時代前期の曽畑式土器に共伴する可能性が示唆されているのである。前

期に溯る可能性は強いと推察されながらも，各遺跡の曽畑式土器を出土する文化層（包含層）から中期あるいは後期土器や無文土器の出土が報告されており，今一歩その裏付けに欠ける観を拭い去ることができないのである（註32）。次の中期の時期では単純遺跡の出土例からも確実と考えられ(註33～35)，共伴の土器はいわゆる阿高式系土器である(註36)。しかも阿高式系土器群に伴う縦長剝片の出土遺跡の分布範囲は腰岳に近接する西側の地域にほぼ限定される傾向が窺えるのである（註37）。一方後期では縦長剝片およびそれを素材にした剝片石器が最も盛行する時期と目され，その分布範囲についても先に述べた周辺地域まで拡がるのである。晩期以後について存在は前期以上に明瞭にし得ないのである（註38）。

縦長剝片およびそれを素材とする剝片石器は西北九州の縄文文化において，極めて特長的な存在と考えられるだけに現時点ではその時期についても中・後期すなわち西北九州における阿高式系土器の展開以後から黒色磨研土器の盛行以前という限定した時期をあてておきたいと考えるのである。

縦長剝片の時期と分布については今後各遺跡の資料について鈴桶型刃器技法ないしそれと密接な関連が予想される剝片技術の確認をはじめ，他の遺物や立地などの分析を通じて検討される必要があるので後日改めて論考したい。

註1　島田貞彦「肥前国嬉野石器時代遺跡」人類学雑誌　40—11　1925

2　浜田耕作・小牧実繁・島田貞彦「肥前国有喜貝塚発掘報告」人類学雑誌　41—1　1926

3　賀川光夫・古田正隆・上田俊之「剝片利用の石器文化」西日本史学会研究発表要旨　1962

4　杉原荘介・戸沢充則・横田義章「九州における特殊な刃器技法」考古学雑誌　51—3　1966

5　賀川光夫・内藤芳篤他「深堀遺跡」人類学考古学研究報告1　1967

6　麻生優「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会　1968

7　木下之治・柴元静雄・森醇一郎「坂の下遺跡」佐賀県文化財調査報告18　1969

8　永井昌文・前川威洋・橘昌信他「山鹿貝塚」山鹿貝塚調査団　1972

9　潮見浩「北古賀遺跡」嘉穂地方史—先史篇　1973

10　森醇一郎「白蛇山岩陰遺跡」佐賀県立博物館調査研究書1　1974

11　片岡肇「長崎県北松浦郡世知原町岩谷口遺跡群の発掘調査」平安博物館紀要6　1976

12　賀川光夫「北九州西北部にみられるサイドブレイド（Side blade）について」考古学ジャーナル16・17　1968

13　片岡肇「いわゆる『つまみ形石器』について」古代文化　22—10　1970

14　下川達弥「剝片鏃考」長崎県立美術館研究紀要1　1973

15　萩原博文・久原巻二「九州西北部の石鋸，サイドブレイドについて」古代文化　27—4　1975

16　横田義章「西北九州における縄文時代の一剝片石器群」九州歴史資料館研究論集2　1976

17　註4において，鈴桶型刃器および鈴桶型刃技についての規定がおこなわれている。

18　ここで述べている『縦長剝片』は「鈴桶型刃器技法」ないし，それと密接な関連が予想される剝片

技術による製作の可能性が極めて強いものであり，しかもそれらが西北九州における縄文時代中・後期文化の一つの大きな要素を構成するものと考えているのである。つまり，「縦長剝片石器文化」あるいは「石刃状剝片石器文化」という名称で総括され得ると考えている。この事を踏まえた上で「縦長剝片」の名称を考慮したいと考えている。

19 観音木遺跡については註12・13・14において触れられており，かって実見する機会があった。平河原遺跡についても同様実見すること機会を得た。両遺跡から出土している縦長剝片およびその石核は「鈴桶型刃器技法」による製作と確実に判断できる資料である。

20 特定の地域において製作された素材ないしそれを用いた製品の製作が予想されるので今後，他地域への何らかの形での移動についての究明が一つの課題として提起されるものと思われる。

21 註14，1973年の時点において長崎・佐賀県内の「剝片鏃出土遺跡一覧」が見られ，すでに47遺跡が挙げられている。これ以後の調査および福岡県と熊本県の出土例を加えると70個所を越えるものと思われる。

22 註8に同じ

23 福岡県遠賀郡岡垣町に所在する縄文時代後期の貝塚で，昭和46年に調査が実施されている。

24 註9に同じ

25 九州考古学会「北九州古文化図鑑」1　1950　第7図「縄文式後期晩期の石器」の中に見られる。

26 坂本経堯・緒方　勉・富田紘一・稲田誠也「三万田東原一調査概報一」

27 乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化一九州」新版考古学講座3　1969

28 山崎純男「天草地方の始原文化の一側面」熊本史学40　1972

29 長崎県西彼杵郡野母崎町に所在する縄文時代後期を主体とする貝塚で，昭和41年～46年にかけて3次にわたる調査が実施されている。

30 賀川光夫「宮下貝塚」長崎県文化財調査報告9　1971

31 鈴木重治「三井楽貝塚」『五島遺跡調査報告』所収，長崎県文化財調査報告2　1965

32 岩下洞穴・白蛇山岩陰・岩谷口第1岩陰遺跡などでは前期に伴う可能性が考えられているのである。また佐賀県の「金剛島遺跡」では「曽畑式土器」がほぼ単純に出土しているだけに特にその可能性が強く示唆されている。

佐賀県教育委員会「金剛島遺跡発掘調査概報」佐賀県文化財調査報告書23　1973

33 紫元静雄・森醇一朗「西有田縄文遺跡盗人岩洞穴遺跡」佐賀県文化財調査報告18　1969

34 正林護・馬場哲良「つぐめのはな遺跡の概要」長崎県考古学会会報2　1974

35 森醇一朗編「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究書2　1975

36 前川威洋「九州における縄文中期研究の現状」古代文化　21—3・41　1969

阿高式系土器として，並木式一阿高式一南福寺式一出水式一御手洗A式という一つの系統で展開していることが述べられている。

37 縦長剝片との関連を考える時，西九州においては並木式土器がほとんどみる事ができずこの土器との関連については現在のところ不明であり，阿高式および南福寺式との共伴が顕著に認められる。

なお，阿高式は西九州と西南九州では地域差が考慮されるのであるが，その地域差が縄文時代中期の「縦長剝片文化」とほぼ符合するものと思われるようである。次の南福式土器についても西北九州と西南九州との相違が予測され，同様に縦長剝片の存在との関連が示唆される。

38 五島三井楽貝塚はで弥生時代中期前半の時期に剝片鏃と縦長剝片が出土していると考えられる。もしこれらの石器類が「鈴桶型刃器技法」ないしその一連の剝片技術の所産であれば，その時期と共に離島という遺跡の所在から大いに興味がもたれるのである。

(5) 折断技法の考察

柏田遺跡出土の石器で刃器・台形状石器・サイドブレイド，それに彫器・削器・掻器などの中に縦長剝片の一端ないし両端がカットされている資料が多数存在することを述べ，またそれらを形態的・技術的な特徴として把握し分類も行った。不明あるいは速断できないものも確かに存在しているが，その大半を意図的な整形と考え，縦長剝片の二次加工の一方法として意図的な折断を繰返し説いたのである。そこで，縦長剝片の『折断技法』の存在を提唱するにあたってその根拠について考察したいと考える。

a 折断面と調整痕・使用痕 折断による整形の施された石器の中で特に刃器・台形状石器・サイドブレイドに折断による剝離面（断面）の一部に二次加工の調整剝離面が数面認められる資料が存在するのである。この場合，縦長剝片の一端ないし両端に見られる横断面が意図的な折断によるものかどうかの疑問が当然提出されるであろうが，この点については後で詳しく説明することにして，ここでは折った面にしろ折れた面であれいずれにしても断面の一部に調整痕が観察されることを重視しておきたいのである。同様に断面のエッヂに使用痕と推定できる刃こぼれや，サイドブレイドの中には表裏面の擦痕と共に断面のほぼ半分の面にだけ擦痕が明瞭に認められるものが存在するのである。これらの事はいずれも縦長剝片の断面が使用中あるいはその後のアクシデントによる折れた面でない事を知るのに充分な資料として挙げることができよう。さらに刃器・サイドブレイド・削器・掻器の折断面近くの調整痕および使用痕の状況から，使用あるいはその他の原因で折れたとは考え難い資料を相当数適出できるのである。すなわち，縦長剝片のエッヂに沿って施された調整が折断面に到達する以前に大部分は完了しており，仮に末端まで及んだとしてもその調整痕はそれ以外のエッヂに比較してその度合は極めて低いのである。使用痕についても同様なことが見られるのである。反対に明らかにアクシデントによると思れわる直線的でない不規則な折れ方を示めす石器ではカットされている面と剝片の側辺が接する個所に使用痕や調整痕の観察されるものが顕著に見られるのである。

使用あるいはその後に何らかの要因で折れたものでない資料が相当数存在することが明白になれば，後は製品になる前の段階が考えられなければならないであろう。これについては石核

から剝片が剝離される時点がひとつ考えられるのである。しかしながら縦長剝片の一般的な形状では先端が薄くて尖り気味になり，カットされた様な平坦な先端はほとんどみられないのである。ただ剝離の段階で剝片の中途で折れるものの出現は充分考え得るであろうが，大量にしかも長さにある斉一性をもつことは不可能であろう。剝片から製品になる過程で折れる蓋然性は少ないと判断される。また，縦長剝片および剝片石器の一端のみのカットは偶然的な要素が加味される可能性は強いであろうが，両端と言うことになると逆に意図的なカットとして見方がより強調されることになろう。

以上のことから剝片石器に見られる一端もしくは両端のカットは意図的な折断による可能性の一部が抽出し得たものと考えるのである。折断面の使用痕や調整痕のみの観察では意図的な折断を証明するのには不充分であるので，さらにその可能性を究明することにしたいが，その前に具体的な石器を挙げてそれらから意図的な折断の可能性を触れてみる。

上述した観察は刃器・削器の形態の上で具体的に示めすことができよう。すなわち，上記の石器では一端が尖り気味のものと折断によると考えられる平坦なものとの二種類に大別できるのである。後者の資料は折断によって整形されたと推定できる断面の多くに先で述べたのと同じ痕跡が認められ，使用あるいはその他の要因で折れたものでないと判断される。それで，石器製作の当初から先端の尖るものについては剝片のもつ形状を生かしながら調整し，あるいはそのまま用いることによって目的を果たしたと考え，一方平坦な先端を必要するものでは折断による簡単でしかも多量に行なえる方法を用いて整形したものと思考するのである。

b 大きさの均一性と折断の意義　適当なタイトルとも思われないが，ここでは使用痕・調整痕を明確に観察できない資料も含めて折断技法の存在を大きさの均一性から検討し合わせてその目的について簡単に触れておきたいのである。先の折断面と使用痕・調整痕の観察から折断による縦長剝片の一端ないし両端の加工の可能性を述べた。その事から特に調整痕が施されていない石器の中にも折断による加工の存在はある程度肯定できるものと考えるが，さらに大きさの上での均一性をつけ加えておく必要があろう。この場合の大きさは石器の長さということになるのである。と言うのは縦長剝片は目的に剝離されているため幅においては概に1.5～2.0㎝前後とほぼ統一されているため，後はこの素材をどの位の長さに成形するかに石器製作の目的を読みとることができよう。

刃器・削器と考えた石器では長短にかなりの開きが認められ斉一性を抽出し難い。これに対して，台形状石器およびサイドブレイドと分類した石器では器種の各項目で述べた様に長さにある均一性が認められ意図的な整形を窺わせるのに充分である。この両者の違いはその石器の用い方に起因するものと思えるのである。

シャフトの装着が予想される台形石器・刃器の一部・サイドブレイドの一群の石器では，多くの縦長剝片が有する縦断面の彎曲を除去する目的で折断が行なわれたと考えられるのである。

また複数のサイドブレイドを用いる組合せ道具にあっては，一段と個々の大きさに均一性が要求されるであろうし，逆の面から言えば大きさにほぼ共通した要素が抽出できることがサイドブレイドの基本的な条件となるであろう。刃器・削器とは用い方の上で大きな差が存在するものと考えられそれが大きさの開きとして具現される所以であろう。

c 折断技法の加撃点と断面の観察　折断したと考えられる剝片の断面についての分析を試みることにしたい。

折断していると判断できる断面では一点を中心にリングの拡がりが認められ，これは一点に力が加わって剝離された痕跡と見なすことができ，中にはバルブが明確に残っているものが存在するのである。それらの多くは縦長剝片背面の稜線近くに観察されると同時に，これとは逆な主要剝離面のほぼ中央の断面に認められる傾向が窺えるのである。力が加わった痕跡は折断面だけでなく，背面あるいは主要剝離面と断面が接するエッヂあるいはそれを少し離れた個所にボールペンの先位の大きさの潰れた痕跡の認められるものが存在するのである。この痕跡を『加撃点』と仮に呼んでおくことにしよう（註1）。明確に観察される資料は必ずしも多くないが，加撃点が1個所認められるものの他に2～3個所に並んだ状態と考えられるものや，加撃点が移動して線条痕の状態で残っていると判断されるものが存在するのである。折断面にやや離れた位置および線条痕は直接的な加撃による意図した折断作業が一回で終了しなかった事を物語るものとして把握することができよう。

先に触れたリングの状況と加撃点の関係については以下の事が予想されるのである。基本的にはリングの状況は加撃点を中心にして拡がると考えられる。しかし加撃点自体に直接的に力を加えたものと間接的に力の加わったものとが存在すると考えられることから，リングの方向が必ずしも力を加えた方向と一致しないということである。すなわち剝片の断面に観察されるリングの方向によって，力を加えた方向を認知できないのである。例えば，縦長剝片の背面を上にして置き，その中央の一点に直接力を加えた時，折断された剝片の断面には背面の一点を中心にして拡がるリングが形成される場合と，打撃の方向と逆の方向からのリングの拡がりを観察される場合があると言うことである。

力の強さ・方向とその力の加わり方―剝離―の状況については種々の物理的な条件が加味されるものと考えられるであろうが，ここで述べたいのはその様な複雑なメカニズムを究明するのではなく，縦長剝片を素材に用いた石器のカットされている断面の大多数に，主要剝離面ないし背面からの方向のリングをはじめバルブ・フィシャーなどの力の加わった事を示す痕跡が認められると言うことである。しかもそれらを含む総合的な分析から，縦長剝片を素材にした剝片石器のカットは目的とする一個所に力を集中させることによる意図的な折断の方法が存在した可能性の大きいことが示唆されるのである。

d 折断技法　縦に長い剝片を折りとる方法で，一般的に考えられるものとして，剝片の両端を

握ってそのまま力を加えて折取るあるいは剝片の一部を鋭い稜線上にあてた上で力を加える事による最も簡単な方法がまず挙げられるであろう。この方法は剝片を手に持った状態で力を加える作業という事で共通しているが，縦長剝片の長さが5㎝前後と短くしかも鋭いエッヂを有しているので保持して力を入れる事は困難と思われる。しかもカットされている素材の剝片の中央部よりもむしろ両端に近い部位からの折断が大多数であり，中央部近くのものでは2～3㎝前後と極端に短くしかも両端にカットが施されている事などからこの方法が採用された可能性は低いと考えられる（註2）。そこで先に述べた直接的な加撃点と判断される痕跡の存在や折断面のリングの集中の度合などを考慮して，工具を用いての折断を予測するのである。以下その方法についての試論を提起して結びとしたい。

まず工具については一回の直接的な加撃によって折断が行なえなかったと考えられる加撃点の痕跡および加撃点からそれた線条痕の大きさから，先端が極めて小さい尖ったものでしかもかなり固い工具が推定できるのである。ただ具体的に何を用いたかは不明である。

力の加え方については全くの推測になってしまうが二通りの方法が考えられるであろう。①工具の先端を対象物にあて，真上からプレスする様な状態で強く押す方法と②工具をパンチに仕立て工具の基部をハンマーで敲打する方法である。大形で厚味のある縦長剝片を素材にした石器が折断されている事や一点に集中するリングの状況やバルブを明瞭に観察される断面の存在は瞬間的にかなり強い力が加わった状況を示唆するものと思われ，恐らく②の方法が採用されたのであろう。逆にリングの集中の度合いが弱いものや加撃点が明瞭に観察されないものなどは①の方法によるものであろう。

折断を行う際の剝片の据方については，素材の大きさや厚さそれに縦断面の反りなどの状況などの他，意図する折断の部位や長さ等によっていろんなケースが考えられる。そのため全く推測の域を出ないが，加撃点やリングの集中する個所が剝片の背面の稜線上およびその直下に観察される資料の顕著な事から，主要剝離面を上にして平坦な面に置かれる場合が多かったものと思われるのである（註3）。

以上の事から剝片石器の整形の仕方として，折断技法とも言うべき一つの方法が存在した事を提唱するものである。ただこの事から一端ないし両端にカットの見られる全ての剝片が折断によるもので，しかも上述した折断技法を駆使して折断されたものであると結論を下すことはできないであろう。使用中あるいはその他の要因による意図しないカットの存在は常に含まれていると予想しなければならないからである。

今後折断技法自体についての検討は無論続けられなければならないが，同時に縦長剝片を素材に用いた剝片鏃やつまみ形石器との技術的関連についての究明が残されているのである。

註1　縦長剝片の折断における「加撃点」については，直接的に力を加えた点と間接的に力が加わった点の両者の存在が考えられる。すなわち前者の場合は折断のための工具が直接接するあるいは接した

と判断されるものである。後者はその点に直接的に力を加えたのでなく他の個所に加えた力に対して最も先に反応を示した点を考えている。具体的には断面が反っているあるいは稜を有する剝片に対してその反対の面から力を加えた際，最も早く力の反応を示すのは反っている面の弧の内側あるいは稜線上が考えられるのである。縦長剝片に観察される加撃点が直接的なものかあるいは間接的なものかの判断が困難な場合特に区別せず「加撃点」あるいは「加撃痕」として用いている。

2　比較的大形でしかも厚味の剝片で3～4 cmの短いものが存在しており，これらは手で折取る事は困難と思われる。またこの方法では力の集中する度合が弱いためか，リングの状況が一点に集中することが少なく，多くの場合，リングが大きく開き全体的に流れる様な状態がみられる。

3　縦長剝片を小さな台に斜めに置く方法もあるであろうが，これでは力を加えた個所以外の所―例えば剝片が支えられている両支点―に力が入りその部位からの折断も考えられるので必ずしも最適な方法とは言えないであろう。

(6)　サイドブレイドについて

柏田遺跡出土の剝片石器のある一群に対して，先述の如くサイドブレイドとして分類を行なったので，その名称と形態についての補足と若干の考察を加えることにしたい（註1）。

まず名称についてであるが，本来的には植刃として木あるいは骨のシャフトに植込んで使用した石器について用いるべきであろう。その点のみを重視すれば現在サイドブレイドと考えられている諸遺跡の資料で軸に植込んで使用したと確実に判断される石器は恐らく極端に少なく，皆無に近い状態と思われ，適当な名称と言えないであろう。しからば，旧石器時代終末の所産である『細石刃・細刃器』と呼称されているものについてはどうであろうか。細石核から剝離され定型的なものが多量に製作され，形態的に極端に小さいことや大陸の出土例などを考慮して，組合わせ道具 (Composite tool) の刃としての使用法が一般的に認められ固定化した概念となっているようである。しかしながら反面では細石刃を石屑との見方も存在するように，その装着や使用法について具体的な考察や検討が充分行なわれているようには思われないのである（註2）。

一方，西九州の海岸部において古くから注目されている鋸歯状の刃部を有する長方形の小形の石器にたいして『石鋸』の名称が用いられている。さらにこの石器の使用法については先端の石銛と組み合わせて軸に装着される事が想定され，漁撈と結びつけて考える説が定着しそうである（註3・4）。『石鋸』という名称から連想される機能とはおよそかけ離れた石器として理解されているのである。しかし軸へ装着された事についてはやはり明確な資料で充分説明されているとは考えられないようである。

細石刃にしても石鋸にしてもその製作技術および形態の特異性が軸への装着という使用法を推測させていると考えられる。西北九州で出土しているサイドブレイドと呼称される石器にも

製作と形態に特徴が指摘できると考えられるので，『サイドブレイド』と言う名称を現時点において特に否定されなければならない理由があると考えられないのである。

今日，サイドブレイドの形態については三通りの意見が提出されていると見なすことができよう。

(1) 素材の両面に調整加工が施された小形の石器で石鋸も含めて考えられる一群である。この形態を有する石器についてサイドブレイドと呼称する事は大かたの意見が一致するところであり，狭義のサイドブレイドである(註5・6)。

(2) 縦剝片の側縁に加工痕ないし使用痕が観察されるあるいは小形で長方形をした一群であり素材となった縦長剝片の形状がほとんどそのままの状態である点に一つの特色が見い出せる(註7)。これについては，形態が縦長剝片のそれと一致しているだけに調整痕・使用痕の認定が問題視されている。サイドブレイドとして最も広義に用いられている。

(3) 縦長剝片を素材に用いることでは(2)と全く同様であるが，側辺部の調整加工と同時にそれ以上に縦長剝片の短辺（打面部および逆の末端部）に何らかの方法で整形を施し，全体的に長方形に近い形状を呈する小形の一群である（註8）。

現在までに考えられているサイドブレイドは以上の三通りと思われる。この中で(3)の考え方を基本にして柏田遺跡のサイドブレイドを把握しているのでいくらかの説明を加えておく必要があろう。

この概念規定から，周辺より両面に調整加工を施した石器は含められるので当然石鋸もサイドブレイドの一タイプとして扱われるわけである。さらにその認定は常に困難がつきまとうが，縦長剝片の一端ないし両端をカットしただけで周辺からの調整がほとんど認められない長方形に近い形態を有するものも含めるのである。カットされている縦長剝片について，使用による欠損あるいはアクシデントによる破損の資料が含まれる危険性は充分想定されるであろう。しかしながらあるまとまった数に大きさの上で斉一性が抽出されることによって，また，刃部や表面の使用痕・調整痕の状況を観察することによってある程度まで危険性を除去することは可能であろう。同時にカットされた面および周辺の観察からも意図的な折断とそれ以外の折断についての判断も可能と思われる。縦長剝片の短辺の折断はすぐには解決できない部分もあるかも知れないが，サイドブレイドとして定型的な大きさのものを多量に製作する特殊な方法として把握して積極的に取扱いたいと考えている（註9）。

サイドブレイドとしての考え方が定着しつつある石鋸や両面調整の施された長方形の小形の石器は海岸部にその分布が集中することや鋸歯状の石鋸との共伴関係から漁撈具として見なされるであろう。ところがこれらの石器は一遺跡において出土する数が著しく限られており，ほとんどの遺跡で数点という状態である。海岸部の生活において漁撈は主体的な生業とされるのにそれにかかわる利器が余りにも僅少である。上記の狭義のサイドブレイド以外にも他の方法

で製作された形態を有する小形の剝片石器の存在を考える上での一根拠として挙げておきたい。ただこの事から直にサイドブレイドの総てを漁撈具として結びつけるのでなく，用途については速断をさけ今後の課題としたい。

多量の彫器の出土はサイドブレイドと関係なしには論ぜられない資料として把握され，サイドブレイドの可能性を示唆する上での重要な資料と考えられる。　　（橘　昌信）

註1　柏田遺跡出土の剝片石器のある一群について，サイドブレイドとして考えることやその名称を用いることについては調査者の間で必ずしも意見の一致をみていないので、あくまで私見として理解していただきたい。なおサイドブレイドと考えている石器は，刃器Ⅱ類，台形状石器それにサイドブレイドである。

2　細石刃が組合せ道具の刃部として積極的に取上げられ論考されてたものにほとんど接することができないのである。せいぜい多量の資料中に，細石刃の左右の表面の風化の度合の違うものや使用痕・調整痕の観察されるものが断片的に挙げられている事，あるいは分割して使用されている可能性が示唆されている程度と思えるのである。この様な状況でありながら細石刃の使用法が組合せ道具として考えられている現状である。

3　賀川光夫・内藤芳篤他「深堀遺跡」人類学考古学研究報告　1　1967

4　前川威洋・木村幾多郎「天神山貝塚」志麻町文化財調査報告書　1　1974

5　芹沢長介「周辺文化との関連」日本の考古学Ⅱ　1966

6　萩原博文・久原巻二「九州西北部の石鋸・サイドブレイドについて」古代文化　27—4　1975

7　賀川光夫「北九州西北部にみられるサイドブレイド（Side blade）について」考古学ジャーナル16・17　1968

8　橘昌信「山鹿貝塚における石器の考察」『山鹿貝塚』所収　山鹿貝塚調査団　1972
この中においてサイドブレイドを三類に分けている。Ⅰ類は狭義のサイドブレイドで剝片のほぼ全面近くに調整剝離のおよぶもの。Ⅱ類は剝片の側辺に調整が集中する小形で長方形を呈するもの。Ⅲ類は縦長剝片の一端ないし両端を意識的に折断したと考えられるもので，剝片の短軸への整形以外にはほとんど加工の見られない小形のものである。

9　福岡県嘉穂郡の北古賀遺跡において，鈴桶刃器技法によると考えられる剝片石器が多量に出土している。石刃として82点の実測図が掲載されており，このうち両端ないし一端がカットあるいは調整の施されたと考えられる長さ2.0～4.0cmの石器が約4割を占めているのである。しかもその半数以上が3cm前後に集中する傾向が示され，大きさの均一性を窺うことができるのである。これらの剝片石器はサイドブレイドの可能性が極めて強いと考えられよう。

表52　未掲載石器計測表　（単位 mm・g）

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
石鏃	KKA-44	B3—14	3層	黒曜石	(12.5)	(12.0)	(2.8)	(0.38)	
	KKA-45	B3—14	〃	〃	(12.1)	(13.8)	(1.7)	(0.20)	
	KKA-48	B2—15	〃	〃	(17.0)	13.8	(3.0)	(0.72)	
	KKA-57	B2—13	〃	〃	(13.9)	(6.7)	(2.2)	(0.77)	
	KKA-60	B2—13	4層	〃	(9.5)	(17.2)	(2.7)	(0.33)	
	KKA-76	B1—15	〃	〃	(9.2)	(10.5)	(2.5)	(0.23)	
	KKA-77	B1—15	〃	サヌカイト	(14.1)	(9.4)	(2.9)	(0.40)	
	KKA-82	B3—14	3層	黒曜石	(15)	(16.0)	(3.5)	(0.52)	
	KKA-83	B3—14	〃	〃	(16.8)	(9.5)	1.7	(0.32)	
	KKA-90	B1—15	4層	サヌカイト	(20.1)	(13.8)	2.7	0.55	
	KKA-95	B1—14	3層	黒曜石	(11.5)	(19.0)	(3.7)	0.68	
	KKA-104	B3—14	〃	〃	(18.9)	(9.0)	(2.7)	0.42	
	KKA-130	FG—7.8	2層	〃	(18.0)	(5.7)	(1.8)	0.30	
	KKA-137	B1—11	3層	サヌカイト	(10.0)	(14.5)	(3.0)	0.29	
	KKA-138	B2—13	4層	黒曜石	(15.8)	(13.5)	(4.5)	0.92	
	KKA-139			〃	(9.2)	(7.0)	(1.8)	0.12	
	KKA-144	B2—11	4層	〃	(9.5)	(7.9)	(2.9)	0.20	
	KKA-154	B2—16	2層	〃	(17.0)	(14.2)	(3.2)	0.64	
	KKA-158	B1—11	4層	〃	(14.2)	(15)	(2.45)	0.31	
	KKA-212	B1—10	3層	〃	(13.2)	(9.0)	(1.7)	0.38	
	KKA-170	B2—14	4層	〃	(19.0)	(13.8)	(4.1)	0.74	
	KKA-174	B2—10	〃	〃	(17.2)	(11)	(4.4)	0.72	
	KKA-186	B2—13	〃	〃	(14.8)	(9.8)	(3.1)	0.36	
	KKA-193	B1—15	3層	〃	(16.5)	(10.2)	(4.3)	0.60	
	KKA-198	B1—14	4層	〃	(14.8)	(9.8)	(3.0)	0.31	
	KKA-202	B3—10	3層	〃	(16.0)	(8.2)	(2.9)	0.37	
	KKA-203	B2—16	4層	〃	(14.1)	(10.2)	(2.8)	0.32	
	KKA-206	B3—13	〃	〃	(15·5)	(9.0)	(3.1)	0.48	
	KKA-213	B1—10	3層	〃	(15.5)	(11.5)	(2.0)	0.30	
	KKA-215	B2—11	4層	〃	(9.8)	(11.8)	(3.4)	0.29	
	KKA-216	B2—11	〃	〃	(14.3)	(8.0)	(3.0)	0.47	
	KKA-218	B2—11	1層	〃	(9.8)	(19.2)	(3.2)	0.53	
	KKA-222	B1—11	〃	〃	(11.5)	(9.5)	(2.8)	0.31	
	KKA-235	2号住	フク土	〃	(13.0)	(6.3)	(1.8)	0.12	
	KKA-239	B3— 9	3層	〃	(10.9)	(8.5)	(2.5)	0.23	
	KKA-240	B3— 9	〃	〃	(10.0)	(12.0)	(2.0)	0.27	
	KKA-249	B2—11	4層	〃	(11.5)	(13.2)	(3.5)	0.53	
	KKA-250	B1—11	〃	サヌカイト	(15.5)	(10.3)	(2.1)	0.26	
	KKA-259	B2—10	3層	黒曜石	(13.1)	(16.3)	(3.4)	0.88	
	KKA-284	B2—10	〃	〃	(12.0)	(9.1)	(2.0)	0.23	
	KKA-286	B2—10	〃	〃	(13.0)	(9.8)	(2.8)	0.26	
	KKA-296	B2—12	2層	〃	(11.2)	(6.8)	(2.7)	0.18	
	KKA-309	B2—15	3層	〃	(18.0)	(9.9)	(2.6)	0.42	
	KKA-331	B3—13	4層	〃	(18.5)	(9.5)	(3.1)	0.47	

	KKA-332	B2	1層	黒曜石	(22.9)	(13.0)	(2.7)	0.90
	KKA-335	B2—9	3層	〃	(15.5)	(8.8)	(1.7)	0.21
	KKA-336	B2—9	〃	〃	(20.5)	(12.6)	(2.8)	0.63
	KKA-365			〃	(17.7)	(8.0)	(3.6)	0.45
	KKA-339	B1—12	3層	サヌカイト	(24.2)	(11.0)	(4.4)	1.29
	KKA-341	B1—12	〃	黒曜石	(10.5)	(13.8)	(3.0)	0.36
	KKA-352	B1—10	1層	サヌカイト	(18.5)	(13.2)	(4.8)	1.17
	KKA-366	B9—8	3層	黒曜石	(18.5)	(13.0)	(2.4)	0.408
	KKA-369	B2—13	〃	〃	(9.2)	(6.2)	(2.2)	0.10
	KKA-370	B2—13	〃	〃	(7.0)	(5.1)	(2.0)	0.08
石	KKA-373	B5		〃	(15.8)	(12.0)	(4.2)	0.858
	KKA-376	B5—10	3層	〃	(12.0)	(10.5)	(2.3)	0.20
	KKA-378	B4	2層	〃	(11.5)	(11.5)	(2.2)	0.25
	KKA-379	B4—16	3層	〃	(18.5)	(8.0)	(2.7)	0.45
	KKA-382	B5	2層	〃	(22.2)	(12.5)	(3.2)	0.65
	KKA-383	B4	2層	〃	(16.5)	(12.8)	2.3	0.40
	KKA-386	B2	1層	〃	(9.0)	(18.2)	(4.1)	0.60
	KKA-387	表採		〃	(28.0)	(18.2)	(4.7)	2.20
	KKA-389	B1—12	4層	〃	(7.5)	(13.9)	(2.9)	0.27
	KKA-390	B1—14	3層	〃	(12.5)	(8.5)	(2.0)	0.10
	KKA-391	B2—15	〃	〃	(19.8)	(11.5)	(3.2)	0.50
	KKA-392	B3—13	〃	〃	(12.5)	(13.8)	(2.8)	0.40
	KKA-393	B2—11	4層	〃	(17.2)	(10.5)	(3.2)	0.50
	KKBF-229	B2—12	〃	〃	21.2	(18.0)	(2.4)	0.95
	KKBF-305	B4	2層	〃	(24.5)	(24.5)	(4.1)	2.60
	KKF-18	B3—13	4層	〃	(13.8)	(11.8)	(2.0)	0.30
	KKF-19	B1—16	3層	〃	(14.3)	(27.3)	(8.3)	6.20
	KKF-26	B1—14	〃	〃	(24.5)	(17.5)	(6.3)	3.25
	KKF-48	B2—11	4層	〃	(17.8)	(10.5)	(2.2)	0.45
	KKF-51	B2—9	3層	〃	(11.5)	(12.8)	(3.2)	4.50
	KKBF-10	B6—13	〃	〃	(18.0)	(11.1)	(2.5)	0.50
	KKBF-201	B2—10	〃	〃	(14.5)	(13.7)	(3.6)	0.60
	KKBF-215	B1—15	〃	〃	(12.1)	(18.7)	(2.3)	0.50
	KKBF-255	B2—14	4層	〃	(12.0)	(22.4)	(2.6)	0.40
	KKBF-285	B5—16		〃	(17.5)	(13.5)	(3.6)	0.70
鏃	KKS-1	B6—9	3層	〃	22.4	16.0	5.2	1.3
	KKS-2	B5—12	〃	〃	15.0	(15.1)	1.7	0.3
	KK1S-459	B1—7	2層	〃	(15.0)	13.6	1.9	0.4
	KK2S-6	B7—9	〃	〃	(11.3)	21.2	2.8	0.6
	KK2S-10	B6—14	3層	〃	(13.0)	13.6	2.3	0.3
	KK2S-19	4号住	フク土	〃	18.4	(15.3)	3.7	0.5
	KK2S-20	4号住	フク土	〃	23.6	(27.8)	2.8	0.9
	KK2S-28	B6—10	3層	〃	(16.6)	(6.9)	3.9	(0.6)
	KK2S-32	?	〃	〃	(20.2)	(16.2)	3.8	0.9
	KK2S-37	B6—10	〃	〃	(19.6)	(18.4)	2.9	0.9
	KK2S-33	B5—12	〃	〃	(15.0)	(11.7)	2.5	0.5

（単位 mm・g）

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
石鏃	KK2S-29	B5—16	3層	黒曜石	(22.0)	(12.5)	3.2	0.7	
	KK2S-160	B6—12	〃	〃	(20.7)	(16.4)	3.7	(0.9)	
	KK2S-30	B6—12	〃	〃	(19.4)	(12.5)	2.9	(0.81)	
	KK2S-8	B6—11	〃	〃	(18.3)	(10.7)	2.7	(0.31)	
	KK2S-61	B6—11	〃	〃	(7.9)	(8.9)	2.5	(0.21)	
	KK2S-43	B6—15	〃	〃	(10.5)	11.4	2.8	0.3	
	KK2S-47			〃	(19.2)	11.4	2.3	0.4	
	KK2S-60	B5—16	3層	〃	(12.2)	9.1	2.5	0.3	
	KK2S-323	B5—12		〃	28.9	(14.5)	2.3	1.0	
	KK2S-405	B5—12	地山直上	〃	(19.4)	(13.9)	4.6	0.9	
	KK2S-247	B6—14	3層	〃	(8.0)	(14.8)	1.9	0.3	
	KK2S-285	B6	1層	〃	(13.6)	(22.2)	3.0	0.8	
	KK2S-286	B7	〃	〃	(18.7)	(11.6)	2.1	0.5	
	KK2S-224	B5—16	3層	〃	(16.0)	(23.4)	2.3	0.9	
	KK2S-547	B6—11	〃	〃	18.6	14.0	2.9	0.7	
	KK2S-537	B5	1層	〃	20.0	(13.1)	2.1	0.5	
	KK2S-403	B6—9	地上直上	〃	(12.01)	12.7	2.0	0.2	
	KK1S-385	A6	3層	〃	14.2	17.0	2.7	0.5	
	KK2S-443	B6—13	〃	〃	(9.6)	(4.6)	(1.8)	(0.1)	
	KK2S-457	B6—9	〃	〃	(15.9)	(12.1)	33.0	(0.5)	
	KK2S-246	B6—14	〃	〃	(14.9)	(15.6)	2.6	(0.5)	
	KK2S-226	B5—16	〃	〃	(22.5)	(9.5)	3.9	(0.9)	
	KK2S-442	B6—13	〃	〃	18.6	(10.8)	4.4	0.6	
	KK2S-335	B5—15	〃	〃	(10.2)	(9.1)	2.6	0.2	
	KK2S-367	B4—14	〃	〃	(17.6)	(10.1)	2.4	(0.21)	
	KK2S-398	B6—10	地山直上	〃	(20.3)	(8.4)	4.1	(0.6)	
	KK2S-308	B6—11	3層	〃	(13.3)	(9.3)	2.7	(0.3)	
	KK2S-304	B6—11	〃	〃	(10.7)	7.9	2.5	(0.3)	
	KK2S-34	B6—10	〃	〃	23.2	18.0	3.3	0.8	
	KK2S-519	B6—15	〃	〃	(8.4)	1.0	2.6	0.2	
	KK2S-524	B6—12	〃	〃	(14.6)	12.6	2.6	0.4	
	KK2S-518	B6—15	〃	〃	(11.5)	9.7	3.4	0.3	
	KK2S-517	B6—15	〃	〃	(14.9)	12.5	2.9	0.5	
	KK2S-49	B6—11	〃	〃	(15.4)	7.1	2.3	10.21	
	KK2S-46			〃	(23.4)	(18.4)	4.8	(1.81)	
つまみ形石器	KKTM-391	B1—11	4層	〃	13	12.5	3.2	0.60	→
	KKTM-389	B2—12	〃	〃	(17.7)	(15.5)	2.2	(0.60)	↑
	KKTM-390	B2—12	〃	〃	(9.0)	(14.8)	(4.3)	(0.58)	↓
	KKTM-392	B2—9	5層	〃	(24.2)	(25.7)	4.0	(2.50)	↓
	KKTM-393	B3—15	3層	〃	(18.1)	(16.7)	4.1	(1.37)	↑
	KKTM-394	B6—10	〃	〃	(29.8)	15.5	4.9	(2.10)	↑
	KKTM-395	B1—14	〃	〃	15.8	(18.0)	2.4	(0.68)	↓
	KKTM-396	B1—14	〃	〃	14.8	12.5	3.7	0.90	↑
	KKTM-397	B5—11	5層	〃	19.2	22.5	4.3	2.15	↑

つまみ形石器	KKTM-398	B2—15	3層	黒曜石	22.0	21.5	6.8	2.70	↓
	KKTM-399	B2—16	4層	〃	(14.0)	(17.0)	4.0	(0.87)	↑
	KKTM-400	B3—13	3層	〃	(20.8)	12.5	4.0	(0.80)	(↓)
	KKTM-401	B2—11	4層	〃	(12.8)	(10.0)	3.7	(0.80)	↑
	KKTM-402	B2	1層	〃	(13.2)	(15.0)	6.0	(1.30)	↓
	KKBF-190	B2—10	4層	〃	(19.0)	(19.0)	(4.6)	1.80	
	KKBF-191	B2—11	〃	〃	(22.5)	(17.5)	(4.8)	2.10	
	KKBF-217	不明	?	?	(26.3)	(19.3)	(4.9)	1.90	
刃器	KKBF- 1	B6—13	5層	黒曜石	32.6	16.9	2.9	1.91	
	KKBF- 2	B6—10	〃	〃	11.7	10.4	4.15	0.35	
	KKBF- 3	B6—10	〃	〃	22.4	10.45	3.2	0.50	
	KKBF- 4	B6—16	〃	〃	15.5	20.45	2.6	1.05	
	KKBF- 5	3号住	フク土	〃	20.8	22.0	3.5	2.46	
	KKBF- 6	3号住	〃	〃	27.0	26.7	5.4	1.80	
	KKBF- 7	3号住	〃	〃	25.0	15.5	20.4	1.15	
	KKBF- 8	B6—10	5層	〃	15.35	15.45	2.2	0.60	
	KKBF- 9	B6—13	3層	〃	23.6	5.0	4.3	1.10	
	KKBF- 11	B6—13	〃	〃	1.65	9.2	3.9	0.40	
	KKBF- 13	3号住	フク土	〃	24.8	10.0	4.0	0.80	
	KKBF- 14	B6—10	3層	〃	21.5	16.1	3.9	1.20	
	KKBF- 18	B5—16	5層	〃	21.25	14.2	2.55	0.85	
	KKBF- 19	B6—13	〃	〃	19.6	17.3	3.95	1.30	
	KKBF- 20	4号住	フク土	〃	11.1	13.45	2.20	0.50	
	KKBF- 22	B6—12	3層	〃	17.0	12.2	2.4	0.70	
	KKBF- 23	B6—14	5層	〃	17.15	12.15	2.6	0.50	
	KKBF- 25	B6—11	〃	〃	21.0	12.6	2.4	1.35	
	KKBF- 26	2号住	フク土	〃	24.2	14.0	3.15	0.85	
	KKBF- 27	B6—11	3層	〃	35.5	17.9	4.5	2.90	
	KKBF- 28	B6— 9	5層	〃	20.3	16.5	4.1	1.92	
	KKBF- 30	4号住	フク土	〃	24.2	12.9	2.0	0.80	
	KKBF- 31	B6—10	3層	〃	19.8	16.3	2.85	0.60	
	KKBF- 32	B6—14	2層	〃	12.0	11.9	2.3	0.90	
	KKBF- 33	B6—10	5層	〃	19.7	11.6	2.5	0.55	
	KKBF- 35	B5—11	〃	〃	19.5	16.0	6.45	1.60	
	KKBF- 36	B5—11	〃	〃	32.95	20.7	3.5	2.20	
	KKBF- 37	B5—11	〃	〃	15.0	14.4	4.7	1.22	
	KKBF- 38	B5—11	〃	〃	12.5	11.0	2.2	0.15	
	KKBF- 39	B6—10	〃	〃	16 9	8.3	4.15	0.60	
	KKBF- 40	B6—10	〃	〃	11.8	15.0	4.0	0.60	
	KKBF- 41	B6—10	〃	〃	10.2	10.4	3.3	0.35	
	KKBF- 42	2号住	フク土	〃	16.4	23.4	3.9	1.40	
	KKBF- 43	B6—11	5層	〃	14.8	19.0	4.4	1.20	
	KKBF- 44	B6—14	〃	〃	18.0	13.4	3.2	11.30	
	KKBF- 45	2号住		〃	22.8	11.0	4.6	1.30	
	KKBF- 46	B6—11	5層	〃	14.5	12.15	2.15	0.46	
	KKBF- 48	4号住	フク土	〃	10.95	11.2	2.5	0.25	

（単位 mm・g）

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
	KKBF-49	4号住	フク土	黒曜石	23.2	9.6	3.1	0.65	
	KKBF-50	B4—14	5層	〃	27.0	14.8	3.95	1.95	
	KKBF-52	B6—14	3層	〃	19.3	3.45	3.0	0.65	
	KKBF-54	B6—16	5層	〃	13.6	14.3	3.1	0.60	
	KKBF-55	B6—16	〃	〃	20.0	16.85	3.6	1.10	
	KKBF-56	B3—14	3層	〃	24.7	20.5	5.0	2.10	
	KKBF-57	B4	1層	〃	25.85	16.7	2.65	1.39	
	KKBF-58	B5	〃	〃	14.45	19.75	4.4	1.50	
	KKBF-59	B3—14	3層	〃	6.65	6.8	2.4	0.30	
	KKBF-60	B3—14	〃	〃	29.9	10.65	2.15	0.65	
刃	KKBF-62	B3—13	4層	〃	23.6	15.25	4.85	1.65	
	KKBF-64	B1—11	3層	〃	18.95	20.45	2.9	1.35	
	KKBF-65	B1—11	〃	〃	7.85	11.4	2.95	0.50	
	KKBF-66	B1—11	〃	〃	14.0	14.35	1.95	0.45	
	KKBF-67	B1—11	〃	〃	15.1	19.8	3.7	1.20	
	KKBF-68	B1—11	〃	〃	10.95	14.85	3.6	0.5	
	KKBF-69	B1—11	〃	〃	10.3	11.6	3.0	0.35	
	KKBF-70	B1—11	〃	〃	13.0	13.1	2.0	0.35	
	KKBF-72	B1—13	4層	〃	11.15	13.2	3.3	0.40	
	KKBF-74	B6—10	5層	〃	22.2	15.85	4.3	1.74	
	KKBF-75	B6—10	〃	〃	15.75	13.0	3.4	0.80	
	KKBF-77	B2—13	3層	〃	18.0	17.0	4.01	1.30	
	KKBF-78	B2—13	〃	〃	21.1	16.4	5.05	2.05	
	KKBF-79	B2—13	〃	〃	12.4	18.5	3.5	0.5	
	KKBF-80	B2—13	〃	〃	15.2	17.0	3.4	0.90	
	KKBF-82	B6—11	5層	〃	11.3	15.6	4.8	0.45	
	KKBF-84	B2—11	4層	〃	16.15	23.6	4.0	1.70	
	KKBF-85	B2—11	〃	〃	26.4	12.9	2.65	0.95	
	KKBF-86	B2—11	〃	〃	23.2	11.9	2.4	0.95	
	KKBF-87	B2—11	〃	〃	21.9	18.15	4.85	1.85	
	KKBF-88	B2—11	〃	〃	18.4	14.6	9.95	1.10	
	KKBF-89	B2—11	〃	〃	12.95	12.8	1.8	1.8	
	KKBF-90	B2—11	〃	〃	26.0	10.0	2.0	0.35	
器	KKBF-91	B2—11	〃	〃	31.45	10.95	3.4	1.10	
	KKBF-92	B4—10	V字溝	〃	22.0	17.5	2.85	0.80	
	KKBF-93	B1—11	5層	〃	27.6	15.65	5.2	1.85	
	KKBF-94	B2—14	4層	〃	24.5	11.3	4.55	1.35	
	KKBF-95	B2—15	〃	〃	9.4	12.3	2.0	0.45	
	KKBF-96	B2—10	〃	〃	32.3	9.7	5.15	1.55	
	KKBF-97	B2—10	〃	〃	22.3	5.3	4.8	1.35	
	KKBF-98	B2—10	〃	〃	20.0	12.2	3.4	1.0	
	KKBF-99	B5—14		〃	21.0	11.4	3.4	0.95	
	KKBF-100	B5—10		〃	18.9	16.6	2.15	0.65	
	KKBF-101	B2—15	4層	サヌカイト	15.15	4.2	3.75	0.45	

	KKBF-102	B2—12	4層	サヌカイト	24.0	20.65	4.3	1.95	
	KKBF-103	B2—12	〃	〃	20.0	13.55	4.0	1.15	
	KKBF-104	B2—12	〃	〃	18.0	11.4	2.45	0.5	
	KKBF-105	B3—13	〃	〃	20.6	17.4	2.3	0.95	
	KKBF-106	B3—13	〃	〃	27.0	12.8	3.0	1.10	
	KKBF-107	B3—13	〃	〃	27.3	12.15	4.35	1.15	
	KKBF-108	B3—13	3層	〃	23.8	16.7	2.65	1.05	
	KKBF-110	B3—11	2層	〃	23.5	18.9	2.3	1.20	
	KKBF-111	B2—11	〃	黒曜石	17.45	13.9	2.7	0.65	
	KKBF-112	B3—14	3層	〃	25.5	12.15	2.8	1.0	
刃	KKBF-113	B2— 9	4層	〃	10.2	18.2	2.5	0.6	
	KKBF-114	B2— 9	〃	〃	17.55	14.0	2.0	0.6	
	KKBF-115	B3—14	3層	〃	33.0	16.9	5.0	2.7	
	KKBF-116	B3—14	〃	〃	24.4	23.15	5.25	2.95	
	KKBF-117	B3—14	〃	〃	18.35	13.8	3.4	0.80	
	KKBF-118	B3—14	〃	〃	24.0	14.4	2.9	2.95	
	KKBF-119	B3—14	〃	〃	18.2	5.7	2.7	0.2	
	KKBF-120	B1—16	〃	〃	17.0	22.4	5.5	1.9	
	KKBF-122	B2—16	4層	〃	28.4	14.75	5.45	2.6	
	KKBF-123	B2—16	〃	〃	27.5	12.0	3.6	1.1	
	KKBF-124	B2—16	〃	〃	22.65	18.9	4.3	1.55	
	KKBF-126	B2—16	〃	〃	24.15	11.0	2.5	0.7	
	KKBF-127	B1—15・14	1層	〃	23.0	13.8	2.8	0.9	
	KKBF-128	B1—15・14	〃	〃	28.55	11.4	3.9	1.45	
	KKBF-129	B1—15・14	〃	〃	23.7	12.65	2.2	0.8	
	KKBF-130	B1—15・14	〃	〃	16.5	19.4	4.7	1.1	
	KKBF-131	B1—15・14	〃	〃	18.35	12.65	3.95	0.75	
	KKBF-133	B2—14	4層	〃	15.95	16.55	2.6	0.6	
	KKBF-134	B2—14	〃	〃	22.15	16.55	3.55	0.95	
	KKBF-135	B2—14	〃	〃	14.4	8.7	2.9	0.4	
	KKBF-137	B1—11	〃	〃	30.2	15.7	5.2	1.20	
	KKBF-138	B1—11	〃	〃	21.0	14.95	3.35	2.85	
	KKBF-139	B1—11	〃	〃	19.3	12.2	2.85	0.80	
	KKBF-140	B1—11	〃	〃	14.3	11.0	2.8	0.6	
	KKBF-141	B1—11	〃	〃	11.7	12.15	2.25	0.4	
器	KKBF-143	B2—10	〃	〃	28.0	17.5	2.65	1.30	
	KKBF-144	B2—10	〃	〃	18.7	19.5	2.0	0.70	
	KKBF-146	B2—16	〃	〃	15.1	15.15	2.5	0.5	
	KKBF-148	B2—10	〃	〃	16.15	9.55	2.4	0.35	
	KKBF-149	B2—10	〃	〃	17.9	11.85	3.45	0.45	
	KKBF-150	B2—10	〃	〃	19.35	10.5	19.9	0.4	
	KKBF-151	B2—10	〃	〃	17.25	16.6	4.8	2.05	
	KKBF-152	B2—15	〃	〃	22.2	11.7	2.95	0.95	
	KKBF-153	B2—15	〃	〃	19.45	12.65	3.35	0.85	
	KKBF-154	B2—15	〃	〃	15.5	21.4	4.95	1.40	
	KKBF-155	B2—15	〃	〃	15.3	17.3	7.9	2.0	

（単位 mm・g）

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
	KKBF-156	B2—15	4層	黒曜石	19.15	18.6	4.9	1.8	
	KKBF-157	B2—15	〃	〃	26.35	19.5	3.4	1.6	
	KKBF-158	B2—15	〃	〃	11.2	14.5	2.9	4.85	
	KKBF-159	B2—15	〃	〃	14.85	16.1	3.1	1.0	
	KKBF-160	B2—15	〃	〃	21.0	11.0	3.0	0.65	
	KKBF-161	B2—15	〃	〃	25.85	10.9	5.8	1.85	
	KKBF-162	B3—13	3層	〃	19.1	24.5	4.0	1.55	
	KKBF-163	B3—13	〃	〃	13.2	13.6	2.3	0.55	
	KKBF-164	B2—14	〃	〃	27.3	12.9	3.1	1.40	
	KKBF-166	B2— 9	4層	〃	29.55	16.0	5.0	2.2	
刃	KKBF-167	B3—10	3層	〃	17.5	14.55	4.0	1.0	
	KKBF-168	B2—15	4層	〃	23.45	11.1	2.8	0.8	
	KKBF-170	B3— 9	〃	〃	15.0	19.6	2.5	0.8	
	KKBF-171	B3— 9	〃	〃	27.0	15.4	3.25	0.85	
	KKBF-172	B2—14	3層	〃	19.0	26.5	3.75	1.45	
	KKBF-173	B2—14	〃	〃	35.3	9.8	4.0	0.9	
	KKBF-175	B1—15	〃	〃	21.0	11.9	3.85	0.75	
	KKBF-177	B1—14	4層	〃	21.0	13.1	4.6	1.0	
	KKBF-179	B3—10	3層	〃	15.45	18.5	3.6	0.75	
	KKBF-182	B2—16	4層	〃	23.0	12.9	5.35	1.9	
	KKBF-183	B2—11	1層	〃	17.8	24.25	4.85	2.15	
	KKBF-185	B2—15	4層	〃	28.25	11.9	2.65	0.9	
	KKBF-187	B2—16	〃	〃	17.9	13.3	2.8	0.7	
	KKBF-188	B2—11	3層	〃	23.8	14.5	6.0	1.95	
	KKBF-192	B2—10	〃	〃	22.4	14.7	3.95	1.10	
	KKBF-194	B5— 9	〃	〃	22.6	11.0	3.6	0.80	
	KKBF-195	B4—15	5層？	〃	24.75	12.9	4.45	1.50	
	KKBF-200	B2—11	4層	〃	27.0	14.4	4.3	1.70	
	KKBF-206	B1—11	3層	〃	24.95	16.7	3.8	1.70	
	KKBF-209	B5—10	〃	〃	27.0	12.4	5.25	1.60	
	KKBF-210	B1—16	〃	〃	14.05	18.9	3.35	0.75	
	KKBF-211	B1—16	〃	〃	33.6	18.0	4.0	1.55	
	KKBF-212	B3—13	4層	〃	27.6	11.55	3.25	0.95	
器	KKBF-213	B2	1層	〃	16.0	21.55	5.25	2.2	
	KKBF-214	B2— 9	3層	〃	17.15	16.6	3.0	0.9	
	KKBF-216	B1—15	〃	〃	14.0	15.4	2.3	0.45	
	KKBF-218	B2—15	〃	〃	38.1	18.9	4.8	2.5	
	KKBF-219	B2—15	〃	〃	18.7	15.5	3.85	1.2	
	KKBF-220	B3—13	〃	〃	16.4	13.0	4.5	0.9	
	KKBF-221	B1—B2	表採	〃	30.0	13.1	3.2	1.3	
	KKBF-222	B2—13	5層	〃	27.5	12.1	2.7	0.95	
	KKBF-223	B2—16	3層	〃	17.9	17.0	3.2	1.1	
	KKBF-225	B2—14	4層	〃	25.7	14.0	3.1	1.35	
	KKBF-226	B2—14	〃	〃	18.9	18.7	4.45	1.8	

	KKBF-227	B1—10	1層	黒　曜　石	29.0	13.85	4.5	1.85	
	KKBF-230	B1—16	4層	〃	26.0	13.0	4.1	1.45	
	KKBF-231	B2—12	〃	〃	15.2	18.7	3.4	0.8	
	KKBF-232	B2—12	〃	〃	19.65	14.3	2.15	0.5	
	KKBF-233	B3—15	3層	〃	37.65	23.95	4.5	3.1	
	KKBF-234	B3—15	〃	〃	33.0	17.45	3.85	2.45	
	KKBF-235	B3—15	〃	〃	14.0	17.25	2.95	0.70	
	KKBF-236	B2—14	4層	〃	21.0	17.4	14.35	1.0	
	KKBF-237	B2—14	〃	〃	15.1	5.6	1.8	0.2	
	KKBF-239	B2—16	〃	〃	24.55	14.75	2.9	1.50	
刃	KKBF-240	B1—12	〃	〃	3.15	19.9	4.9	2.02	
	KKBF-241	B1—12	〃	〃	24.4	11.6	5.0	1.25	
	KKBF-242	B2—10	3層	〃	26.1	16.2	4.4	1.50	
	KKBF-243	B2—16	4層	〃	30.25	5.9	2.85	0.45	
	KKBF-244	B2—16	〃	〃	18.4	11.0	2.8	0.58	
	KKBF-246	B1—12	3層	〃	20.3	13.6	3.6	0.95	
	KKBF-247	B1—12	〃	〃	21.4	11.95	3.0	0.75	
	KKBF-249	B1—12	〃	サヌカイト	27.65	25.0	3.85	2.90	
	KKBF-250	B1—12	〃	〃	27.4	14.95	4.75	2.30	
	KKBF-251	B5—13	5層	黒　曜　石	12.5	2.8	0.75	0.01	
	KKBF-252	B5—13	〃	〃	19.55	13.0	2.0	0.60	
	KKBF-254	B2—16	3層	〃	18.95	9.8	4.6	0.90	
	KKBF-257	B1—16	5層	〃	21.5	19.7	2.0	1.10	
	KKBF-259	B2—14	4層	〃	17.95	13.1	3.2	0.50	
	KKBF-260	B2—14	〃	〃	32.5	12.5	4.4	1.80	
	KKBF-261	B2—14	〃	〃	18.0	12.2	2.6	0.50	
	KKBF-262	B2—14	〃	〃	12.0	12.0	3.2	0.45	
	KKBF-263	B9	3層	〃	19.8	12.15	4.0	1.15	
	KKBF-264	B9	〃	〃	12.4	14.0	2.9	0.55	
	KKBF-265	B9	〃	〃	18.9	22.0	2.5	0.75	
	KKBF-268	B1—15	〃	〃	24.7	15.8	6.4	1.20	
	KKBF-271	B3—13	〃	〃	14.8	20.9	4.6	1.20	
	KKBF-272	B3—13	〃	〃	16.1	17.65	4.0	1.05	
	KKBF-273	B3—13	〃	〃	31.45	11.25	3.85	1.5	
	KKBF-274	B3—13	〃	〃	27.75	10.75	2.6	0.75	
器	KKBF-277	B3—15	〃	〃	27.4	12.4	4.8	1.7	
	KKBF-278	B3—15	〃	〃	12.6	12.1	3.4	0.6	
	KKBF-279	B4—14	V字溝	〃	19.4	24.3	4.1	1.45	
	KKBF-281	B2—14	3層	〃	21.6	12.7	4.0	1.15	
	KKBF-282	B2—13	〃	〃	31.0	16.9	8.0	3.70	
	KKBF-283	B5—14	Pit	〃	27.65	12.55	6.25	2.05	
	KKBF-286	B2—14	3層	〃	16.35	14.2	4.5	1.25	
	KKBF-287	B3—14	〃	〃	17.65	12.0	2.85	0.55	
	KKBF-288	B3—10	〃	〃	15.6	19.6	3.2	0.95	
	KKBF-293	B5	2層	〃	20.4	20.35	5.7	2.4	
	KKBF-294	B5	〃	〃	12.45	14.2	3.35	0.65	

（単位 mm・g）

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
	KKBF-295	B4—16	3層	黒曜石	29.35	10.45	5.3	1.70	
	KKBF-296	B4	2層	〃	25.9	14.55	1.55	21.4	
	KKBF-298	B4—10	3層	〃	23.0	11.7	5.0	0.9	
	KKBF-300	B4	2層	〃	14.15	14.0	3.5	0.65	
	KKBF-302	B4	〃	〃	26.0	8.7	4.6	0.95	
	KKBF-304	B4	〃	〃	21.0	21.45	4.95	2.35	
	KKBF-306	B4	〃	〃	26.2	13.0	4.6	1.25	
	KKBF-307	B4	〃	〃	21.0	15.4	4.7	1.85	
	KKBF-308	B4	〃	〃	31.8	20.85	6.8	3.85	
	KKBF-309	B4	〃	〃	21.7	13.25	5.0	2.05	
刃	KKBF-297	A9—13	3層	〃	27.0	22.15	6.0	3.75	
	KKS-80	表採	〃	〃	(32.5)	(15.7)	(6.6)	(3.3)	
	KKS-88	B2—11	4層	〃	(31.2)	(12.5)	(7.4)	(1.9)	
	KKS-98	B2—15	〃	〃	(20.2)	(22.3)	(5.7)	(2.6)	
	KKS-142	B2	1層	サヌカイト	(22.2)	(25.0)	(4.2)	(2.0)	
	KKS-144	B2—11	4層	黒曜石	(23.2)	(27.3)	(5.4)	(3.4)	
	KKTM-210	B3—13	〃	〃	(24.2)	(11.5)	(6.6)	(1.8)	
	KKBF-12	B6—15	5層	〃	(23.3)	(17.2)	(2.4)	(0.95)	
	KKBF-17	B5—16	〃	〃	(10.5)	(15.5)	(3.4)	(0.7)	
	KKBF-21	B5—12	〃	〃	(12.5)	(14.5)	(3.2)	(0.75)	
	KKBF-24	B6—14	〃	〃	(18.9)	(13.0)	(3.8)	(1.0)	
	KKBF-71	B2—13	4層	〃	(11.7)	(10.8)	(3.2)	(0.5)	
	KKBF-133	B2—15	〃	〃	(33.0)	(18.2)	(3.6)	(1.9)	
	KKBF-204	B2—12	2層	〃	(20.5)	(10.5)	(4.0)	(0.85)	
	KKBF-205	B2—12	〃	〃	(17.8)	(12.5)	(4.0)	(1.1)	
	KKBF-208	B2—16	4層	〃	(22.7)	(15.5)	(3.7)	(1.1)	
	KKBF-245	B1—12	3層	〃	(32.3)	(20.6)	(3.2)	(2.0)	
	KKBF-270	B3—13	〃	〃	(22.7)	(11.5)	(3.0)	(1.2)	
	KKBF-280	B3—13	〃	〃	(15.5)	(18.6)	(2.7)	(1.0)	
	KKBF-291	B2—15	〃	〃	(24.0)	(20.5)	(4.3)	(3.2)	
	KKF-17	B3—13	4層	〃	(9.5)	(8.5)	(4.5)	(0.4)	
	KKF-32	B2—11	〃	サヌカイト	(38.2)	(25.0)	(6.5)	(6.6)	
	KKF-35	B2—10	〃	〃	(49.0)	(38.5)	(7.6)	(13.4)	
器	KKF-39	B2—16	〃	〃	(38.5)	(22.5)	(7.8)	(4.5)	
	KKF-40	B2—15	3層	黒曜石	(24.5)	(10.5)	(4.0)	(1.25)	
	KKF-45	B1—12	4層	サヌカイト	(22.5)	(10.0)	(7.3)	(1.4)	
	KKF-65	B4	1層	黒曜石	(31.5)	(17.5)	(7.6)	(2.8)	
	KKB-71	B3—14	4層	サヌカイト	(28.0)	(23.5)	(5.9)	(4.7)	
	KK1S-330	?	3層	黒曜石	31.5	28.9	8.9	5.3	
	KK1S-331	?	〃	〃	24.2	18.6	6.5	2.5	
	KK2S-39	B6—13	〃	〃	12.2	14.0	2.3	0.4	
	KK2S-101			〃	19.6	12.4	3.2	0.6	
	KK2S-132	B6—10	3層	〃	24.3	12.1	3.8	1.0	
	KK2S-137	B6—15	〃	〃	29.8	17.0	2.4	1.3	

	KK2S-138	B6—15	3層	黒曜石	18.9	16.9	3.8	1.0	
	KK2S-139	B6—15		〃	26.7	10.0	3.0	0.7	
	KK2S-140	B6—15		〃	36.7	18.6	4.0		
	KK2S-141	B5—16	3層	〃	34.0	10.7	3.4	1.1	
	KK2S-143	B5—16	〃	〃	28.7	24.3	8.5	6.3	
	KK2S-156	B5—11	〃	〃	20.5	14.8	4.3	1.1	
	KK2S-157	B5—11	〃	〃	25.0	4.3	1.4	1.4	
	KK2S-158	B5—11	〃	〃	32.9	9.7	5.0	1.5	
	KK2S-186	B6—12	〃	〃	19.2	12.5	2.2	0.7	
	KK2S-231	B5—16	〃	〃	23.7	24.5	5.7		
刃	KK2S-232	B5—16	〃	〃	26.3	24.0	3.0	2.1	
	KK2S-233	B5—16	〃	〃	25.6	15.8	3.6	1.4	
	KK1S- 95		〃	〃	13.4	17.7	4.3	0.6	
	KK1S- 96		〃	〃	17.9	16.3	3.2	0.5	
	KK1S- 97		〃	〃	(17.4)	13.1	3.5	0.6	
	KK1S- 98		〃	〃	13.1	15.5	2.2	0.5	
	KK1S- 99		〃	〃	16.0	11.6	3.6	0.6	
	KK1S-100		〃	〃	17.4	12.1	2.2	0.6	
	KK1S-101		〃	〃	15.1	13.2	3.6	0.6	
	KK1S-102		〃	〃	10.9	11.5	3.2	0.5	
	KK1S-103		〃	〃	(14.5)	13.7	3.1	0.6	
	KK1S-104		〃	〃	(18.3)	7.6	3.8	0.4	
	KK1S-105		〃	〃	11.4	19.0	3.0	0.4	
	KK1S-106		〃	〃	14.3	17.1	5.0	0.5	
	KK1S-107		〃	〃	8.4	11.5	1.7	0.2	
	KK1S-108		〃	〃	(1.6)	10.6	1.9	0.2	
	KK1S-109		〃	〃	(12.3)	(7.9)	1.9	0.3	
	KK1S-179		〃	〃	42.9	16.6	6.7	2.6	
	KK1S-181		〃	〃	34.5	15.8	3.9	1.4	
	KK1S-187		〃	〃	(25.4)	16.1	2.5	1.3	
	KK1S-189		〃	〃	(26.2)	10.5	3.5	1.1	
	KK1S-191		〃	〃	(12.9)	19.7	4.8	2.1	
	KK1S-193		〃	〃	(17.7)	20.8	4.1	1.7	
	KK1S-194		〃	〃	22.5	16.4	3.0	1.1	
	KK1S-195		〃	〃	22.9	8.9	2.0	0.4	
器	KK1S-196		〃	〃	24.9	8.9	2.5	0.7	
	KK1S-246		〃	〃	(31.0)	14.4	5.6	2.2	
	KK1S-247		〃	〃	31.9	20.8	4.7	3.7	
	KK1S-248		〃	〃	25.8	19.7	9.2	3.8	
	KK1S-250		〃	〃	24.0	11.2	5.5	1.6	
	KK1S-251		〃	〃	22.8	18.6	4.9	1.6	
	KK1S-252		〃	〃	30.5	13.7	3.3	1.1	
	KK1S-253		〃	〃	20.4	19.0	4.0	1.3	
	KK1S-254		〃	〃	21.4	19.2	4.3	1.6	
	KK1S-256		〃	〃	(21.7)	16.5	2.3	1.4	
	KK1S-295		〃	〃	(29.9)	16.8	2.7	1.4	

(単位 mm・g)

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
	KK1S-299		3層	黒曜石	(32.1)	36.9	8.4	7.1	
	KK1S-301		〃	〃	23.8	24.7	6.4	3.4	
	KK1S-302		〃	〃	23.0	22.0	3.4	1.6	
	KK1S-303		〃	〃	20.5	28.4	3.9	1.3	
	KK1S-304		〃	〃	26.5	14.6	3.9	1.5	
	KK1S-306		〃	〃	19.6	20.4	3.4	1.3	
	KK1S-307		〃	〃	19.4	20.9	4.6	1.4	
	KK1S-308		〃	〃	14.6	20.1	4.0	1.5	
	KK1S-309		〃	〃	23.2	16.7	8.4	2.2	
	KK1S-310		〃	〃	19.1	14.2	4.8	1.1	
刃	KK1S-311		〃	〃	(17.3)	22.8	3.6	0.9	
	KK1S-312		〃	〃	19.9	14.6	3.5	0.7	
	KK1S-313		〃	〃	19.3	10.1	1.7	0.5	
	KK1S-314		〃	〃	(7.5)	17.9	5.6	0.8	
	KK1S-315		〃	〃	(2.3)	(13.3)	3.4	0.7	
	KK1S-333		〃	〃	(27.0)	(20.3)	4.3	1.3	
	KK1S-335		〃	〃	21.6	10.2	4.8	1.1	
	KK1S-336		〃	〃	20.1	14.2	2.9	1.0	
	KK1S-337		〃	〃	14.6	10.0	2.7	0.8	
	KK1S-338		〃	〃	17.2	14.7	2.8	0.7	
	KK1S-340		〃	〃	19.3	9.0	2.0	1.3	
	KK1S-361		〃	〃	27.2	16.2	3.9	2.2	
	KK1S-362		〃	〃	(23.0)	16.0	2.6	1.2	
	KK1S-363		〃	〃	(25.9)	16.4	3.5	1.5	
	KK1S-377	A6		〃	29.5	11.9	5.0	1.1	
	KK1S-393	A6	5層	〃	20.3	23.6	2.2	0.9	
	KK1S-394	A6	〃	〃	19.7	17.5	3.5	1.3	
	KK1S-395	A6	〃	〃	21.9	19.4	3.0	1.3	
	KK1S-396	A6	〃	〃	15.6	10.9	4.3	1.1	
	KK1S-397	A6	〃	〃	(36.0)	(17.2)	3.9	2.9	
	KK1S-399	A6	10層	〃	(33.8)	20.5	5.5	2.9	
	KK1S-400	A6	〃	〃	(25.3)	10.2	2.6	0.6	
	KK1S-408	A6		〃	22.4	23.3	6.2	1.7	
器	KK1S-409	A6		〃	29.3	10.1	2.0	0.6	
	KK1S-410	B5		〃	36.8	26.3	5.8	3.9	
	KK1S-411	B5		〃	35.4	23.6	4.6	2.0	
	KK1S-412	B5		〃	(18.3)	(23.5)	6.5	2.0	
	KK1S-413	B5		〃	(21.0)	10.4	2.5	0.5	
	KK1S-432	B5	11層	〃	23.4	21.2	5.2	1.6	
	KK1S-433	B5	〃	〃	19.6	16.7	4.7	1.7	
	KK1S-436	B5	最下層	〃	20.3	14.6	3.0	0.6	
	KK1S-451	A7	1・2層	〃	30.3	19.0	7.4	2.9	
	KK1S-484		1層	〃	20.7	18.0	3.7	1.7	
	KK1S-485		〃	〃	20.3	13.6	3.8	1.1	

	KK2S-35	B6.10	3層	黒曜石	21.3	11.3	2.8	0.6	
	KK2S-372	B4—14	〃	〃	12.5	17.9	3.3	0.8	
	KK2S-380	B5—12	〃	〃	19.2	16.4	3.9	1.4	
	KK2S-385	B6—15	〃	〃	40.2	11.9	4.3	2.4	
	KK2S-386	B6—15	〃	〃	19.4	18.8	2.8	0.9	
	KK2S-387	B6—15	〃	〃	17.3	19.6	4.2	1.2	
	KK2S-388	B6—15	〃	〃	16.8	10.0	2.4	0.4	
	KK2S-393	B7—9	〃	〃	(25.3)	21.8	2.2	2.4	
	KK2S-395	B7—9	〃	〃	20.8	23.4	2.5	5.0	
	KK2S-396	B7—9	〃	〃	32.2	20.7	14.5	1.1	
刃	KK2S-397	B7—9	〃	〃	21.0	23.3	17.1	3.4	
	KK2S-400	B6—10	地山直上	〃	23.1	19.7	6.2	2.1	
	KK2S-401	B6—10	〃	〃	22.9	15.3	3.5	1.0	
	KK2S-404	B6—14	3層	〃	29.3	11.9	4.7	1.3	
	KK2S-406	B5—12	地山直上	〃	11.1	10.9	2.1	0.3	
	KK2S-411	B6—16	3層	〃	35.5	21.9	4.3	2.0	
	KK2S-412	B6—16	〃	〃	36.2	18.3	5.4	3.6	
	KK2S-417	B6—15	2層	〃	15.2	12.9	3.9	0.8	
	KK2S-418	B6—15	〃	〃	16.0	23.2	4.5	1.8	
	KK2S-419	B6—15	〃	〃	23.0	14.6	3.5	1.0	
	KK2S-420	B6—15	〃	〃	17.3	16.7	3.0	1.0	
	KK2S-422	B7—9	3層	〃	15.9	19.3	2.9	0.8	
	KK2S-428	B5—16	〃	〃	21.4	18.6	3.3	1.0	
	KK2S-432	B6—11	〃	〃	30.7	19.8	7.8	4.4	
	KK2S-433	B6—11	〃	〃	16.0	41.7	8.4	3.2	
	KK2S-434	B6—11	〃	〃	13.8	14.3	3.6	0.7	
	KK2S-435	B6—11	〃	〃	18.9	10.8	4.3	1.2	
	KK2S-436	B6—11	〃	〃	14.9	14.2	2.1	0.4	
	KK2S-448	B6—13	〃	〃	21.4	(14.4)	2.2	0.6	
	KK2S-449	B6—13	〃	〃	15.9	17.4	10.0	2.1	
	KK2S-450	B6—13	〃	〃	19.8	12.4	2.1	0.5	
	KK2S-451	B6—13	〃	〃	32.0	19.5	8.0	1.7	
	KK2S-452	B6—13	〃	〃	21.1	14.0	2.6	0.5	
	KK2S-453	B6—13	〃	〃	10.9	15.2	2.4	0.4	
	KK2S-454	B6—13	〃	〃	7.4	18.8	2.4	0.2	
器	KK2S-455	B6—13	〃	〃	12.0	12.3	2.3	0.3	
	KK2S-463	B6—9	〃	〃	27.5	19.8	6.1	2.9	
	KK2S-465	B6—9	〃	〃	34.5	20.0	6.4	3.1	
	KK2S-466	B6—9	〃	〃	20.3	23.9	9.6	3.6	
	KK2S-467	B6—9	〃	〃	15.0	24.0	5.8	1.7	
	KK2S-468	B6—9	〃	〃	23.5	20.1	5.7	3.0	
	KK2S-469	B6—9	〃	〃	19.0	18.9	3.3	0.8	
	KK2S-471	B6—14	〃	〃	22.3	13.3	7.3	1.7	
	KK2S-472	B6—14	〃	〃	18.3	11.2	5.9	0.8	
	KK2S-473	B6—14	〃	〃	25.8	12.5	6.3	1.7	
	KK2S-474	B5—11	地山直上	〃	23.4	14.2	4.0	1.0	

（単位 mm・g）

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
	KK2S-475	B5—11	地山直上	黒曜石	22.9	19.4	3.8	1.4	
	KK2S-476	B6—9	〃	〃	24.1	9.6	2.0	0.6	
	KK2S-477	B6—9	〃	〃	21.0	14.0	3.1	0.7	
	KK2S-478	B6—9	〃	〃	21.2	10.2	2.8	0.7	
	KK2S-484	B6—14	3層	〃	23.0	22.8	4.0	2.2	
	KK2S-485	B6—14	〃	〃				1.5	
	KK2S-489	B6—11	1層	〃	22.5	16.8	3.3	1.3	
	KK2S-490	B6—11	〃	〃	16.4	10.8	3.0	0.3	
	KK2S-493	B6—11	3層	〃	38.1	17.0	6.6	3.1	
	KK2S-494	B6—11	〃	〃	19.5	10.6	3.0	0.3	
刃	KK2S-495	B6—11	〃	〃	19.6	18.5	4.4	1.6	
	KK2S-496	B6—11	〃	〃	20.0	9.2	2.9	0.7	
	KK2S-497	B6—11	〃	〃	18.5	1.2	3.0	0.4	
	KK2S-498	B6—11	〃	〃	16.0	8.5	2.0	0.3	
	KK2S-507	B5	1層	〃	21.8	18.1	3.3	1.5	
	KK2S-508	B5	〃	〃	23.3	19.0	3.7	1.3	
	KK2S-509	B5	〃	〃	18.2	14.7	5.4	1.0	
	KK2S-514	B6—14	3層	〃	24.5	13.5	4.7	1.6	
	KK2S-515	B6—14	〃	〃	27.0	15.4	4.0	1.3	
	KK2S-516	B6—14	〃	〃	16.7	7.7	2.8	0.6	
	KK2S-520	B6—15	〃	〃	14.6	17.3	4.3	1.2	
	KK2S-522	B5—12	2層	〃	22.7	14.6	4.8	1.4	
	KK2S-523	B5—12	〃	〃	8.5	7.0	2.0	0.4	
	KK2S-528	B6—12	3層	〃	33.3	19.7	13.5	3.7	
	KK2S-529	B6—12	〃	〃	24.5	20.8	4.5	1.3	
	KK2S-530	B6—12	〃	〃	22.3	19.4	4.4	2.1	
	KK2S-531	B6—12	〃	〃	22.5	15.3	2.7	1.0	
	KK2S-532	B6—12	〃	〃	24.0	11.2	2.8	0.7	
	KK2S-533	B6—12	〃	〃	20.2	10.1	2.3	0.4	
	KK2S-534	B6—12	〃	〃	13.2	9.8	3.2	0.4	
	KK2S-535	B6—12	〃	〃	11.7	8.6	1.6	0.2	
	KK2S-542	B5	1層	〃	25.6	35.4	7.8	4.2	
	KK2S-544	B5	〃	〃	22.7	19.0	4.2	1.9	
器	KK2S-545	B5	〃	〃	21.1	9.8	2.5	0.6	
	KK2S-546	B5	〃	〃	13.0	6.0	2.7	0.3	
	KK2S-555	B6—11	3層	〃	38.4	27.1	6.3	3.6	
	KK2S-556	B6—11	〃	〃	26.1	13.3	2.8	1.0	
	KK2S-557	B6—11	〃	〃	24.8	9.5	2.7	0.7	
	KK2S-558	B6—11	〃	〃	24.0	11.7	2.4	0.5	
	KK2S-559	B6—11	〃	〃	22.7	9.6	2.3	0.6	
	KK2S-564	B6—12	〃	〃	17.1	19.2	4.6	1.5	
	KK2S-565	B6—12	〃	〃	30.6	14.2	2.8	1.2	
	KK2S-566	B6—12	〃	〃	17.0	23.4	4.4	1.1	
	KK2S-567	B6—12	〃	〃	20.8	26.2	4.2	1.4	

	KK2S-568	B6—12	3層	黒曜石	17.3	14.9	2.0	0.5	
	KK1S-185				27.8	15.0	6.7	2.3	
	KK1S-379	A7						0.7	
	KK1S-282				22.7	27.0	5.4	2.7	
	KK1S-255				15.4	19.4	5.8	1.3	
	KK1S-258				16.9	14.7	4.9	0.8	
	KK1S-365				(19.0)	14.9	2.4	0.5	
	KK2S-329	B7						1.3	
	KK2S-379	B5—12			11.9	14.9	4.2	0.5	
	KK2S-234	B5—16	地山直上	黒曜石	17.3	22.0	2.9	0.9	
刃	KK2S-265	B6—14	3層	〃	32.6	19.2	6.2	3.4	
	KK2S-267	B6—14	〃	〃	26.8	25.1	12.4	5.8	
	KK2S-268	B6—14	〃	〃	28.4	20.4	5.2		
	KK2S-269	B6—14	〃	〃	36.7	28.6	3.8	2.4	
	KK2S-270	B6—14	〃	〃	33.4	9.8	6.4	1.9	
	KK2S-271	B6—14	〃	〃	21.0	26.1	6.6	2.8	
	KK2S-272	B6—14	〃	〃	21.2	19.6	6.4	1.7	
	KK2S-273	B6—14	〃	〃	29.3	9.4	2.8	0.8	
	KK2S-274	B6—14	〃	〃	24.1	14.9	6.9	1.8	
	KK2S-275	B6—14	〃	〃	21.0	15.9	2.3	0.8	
	KK2S-276	B6—14	〃	〃	15.3	16.7	3.9	1.3	
	KK2S-277	B6—14	〃	〃	15.2	17.8	2.9	0.6	
	KK2S-278	B6—14	〃	〃	16.2	14.4	3.4	0.8	
	KK2S-279	B6—14	〃	〃	14.8	14.3	2.7	0.7	
	KK2S-280	B6—14	〃	〃	20.5	10.2	1.2	0.3	
	KK2S-281	B6—14	〃	〃	14.0	7.3	2.0	0.2	
	KK2S-282	B6—14	〃	〃	12.8	9.3	2.8	0.3	
	KK2S-296	B7	1層	〃	23.9	11.0	4.4	1.2	
	KK2S-297	B7	〃	〃	19.3	21.2	5.0	1.6	
	KK2S-299	B7	〃	〃	17.4	10.0	4.0	0.7	
	KK2S-300	B7	〃	〃	11.3	14.0	2.2	0.3	
	KK2S-301	B7	〃	〃	18.1	8.8	2.8	0.5	
	KK2S-310	B6—11	3層	〃	18.7	15.3	4.4	0.8	
	KK2S-311	B6—11	〃	〃	13.6	20.6	4.4	1.1	
	KK2S-312	B6—11	〃	〃	16.2	7.7	1.8	0.3	
器	KK2S-313	B6—11	〃	〃	10.6	11.3	3.9	0.4	
	KK2S-320	B5—15	〃	〃	17.0	25.9	3.7		
	KK2S-324	B5—12		〃	36.7	41.7	6.5	3.0	
	KK2S-327	B7	1層	〃	21.6	13.7	3.8	1.2	
	KK2S-330	B6—15	3層	〃	52.7	25.4	10.4	14.6	
	KK2S-331	B6—15	〃	〃	21.4	27.6	3.6	2.5	
	KK2S-336	B5—15	〃	〃	16.7	18.5	3.3	0.9	
	KK2S-337	B5—15	地山直上	〃	14.0	12.7	3.3		
	KK2S-338	B5—15	〃	〃	12.0	7.4	2.6	0.2	
	KK2S-340	B6—11		〃	21.9	19.4	3.6	0.7	
	KK2S-341	B6—11		〃	18.0	18.0	4.4	13.0	

（単位 mm・g）

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
	KK2S-342	B6—11		黒曜石	17.1	12.1	1.8	0.4	
	KK2S-353	B6—16	3層	〃	29.5	20.4	8.5	3.3	
	KK2S-354	B6—16	〃	〃	22.5	12.7	2.9	0.7	
	KK2S-355	B6—15	〃	〃	28.7	22.4	4.0	1.8	
	KK2S-356	B6—15	〃	〃	24.0	18.7	3.9	1.4	
	KK2S-357	B6—15	〃	〃	26.4	13.3	2.7	0.6	
	KK2S-358	B6—15	〃	〃	13.2	13.0	2.9	0.5	
	KK2S-364	B5—12	〃	〃	22.8	16.6	3.9	1.6	
	KK2S-365	B5—12	〃	〃	40.0	20.5	5.5	3.5	
	KK2S-366	B6—16	〃	〃	27.8	12.8	3.5	1.7	
刃	KK2S-367	B6—16	1層	〃	29.8	18.6	6.7	3.6	
	KK2S-368	B6—16	〃	〃	16.8	11.9	3.3	0.6	
	KK2S- 85			〃	20.3	21.3	5.6	1.6	
	KK2S-146	B6—14	3層	〃	26.7	21.7	6.9	4.3	
	KK2S-159	B6—15	〃	〃	44.1	16.7	7.6	3.4	
	KK2S-169	B5—11. 12	〃	〃	24.2	28.7	11.5	5.0	
	KK2S-192	B5—11. 12		〃	29.3	20.6	11.7	6.6	
	KK2S-229	B5—16	3層	〃	10.9	13.3	1.7	0.4	
	KK2S-258	B6—14	〃	〃	21.0	26.7	7.2	3.6	
	KK2S-262	B6—14	2層	〃	18.7	26.0	4.7	1.9	
	KK2S-293	B7	1層	〃	29.5	14.6	5.5	2.6	
	KK2S-298	B7	〃	〃	13.0	17.7	2.6	0.6	
	KK2S-308	B6—11	5層	〃	9.0	19.9	4.3	0.7	
	KK2S-314	B6—11	〃	〃					
	KK2S-328	B7	1層	〃	14.1	13.4	8.6	0.8	
	KK2S-335	B5—15	地山直上	〃	8.9	15.5	2.8	0.4	
	KK2S-350	B6—16	2層	〃	20.6	20.7	5.3	1.9	
	KK2S-351	B6—16	〃	〃	23.1	24.6	7.1	2.9	
	KK2S-315	B6—11	5層	〃	18.6	10.9	3.2	0.6	
	KK2S-309	B6—11	〃	〃	2.2	17.2	2.1	0.8	
	KK2S-294	B5	1層	〃	19.7	12.4	3.2	0.7	
	KK2S-295	B5	〃	〃	18.0	15.2	7.4	3.3	
	KK2S-259	B6—14	2層	〃	17.4	33.0	5.1	2.5	
器	KK2S-260	B6—14	〃	〃	26.6	28.7	4.4	2.2	
	KK2S-263	B6—14	〃	〃	12.8	18.4	3.5	0.8	
	KK2S-230	B5—16	〃	〃	12.6	7.0	4.4	0.4	
	KK2S-170	B5—11	5層	〃	20.2	23.3	6.8	2.5	
	KK2S-371	B4—15	3層	〃	26.3	26.6	8.0	6.2	
	KK2S-377	B5—12	5層	〃	47.3	15.9	1.1	7.2	
	KK2S-382	B6—14	地山直上	〃	23.1	12.6	2.6	0.9	
	KK2S-391	B7— 9	2層	〃	35.9	26.0	8.2	6.9	
	KK2S-392	B7— 9	〃	〃	17.1	8.7	4.7	0.5	
	KK2S-431	B6—11	〃	〃	28.2	9.7	3.7	1.0	
	KK2S-444	B6—13	〃	〃	18.4	17.8	4.3	1.0	

	KK2S-458	B6-- 9	2層	黒 曜 石	34.0	13.5	3.0	2.0	
	KK2S-459	B6-- 9	〃	〃	25.8	17.8	1.7	1.0	
	KK2S-460	B6-- 9	〃	〃	14.4	23.8	8.2	2.0	
	KK2S-461	B6-- 9	〃	〃	20.6	26.4	6.0	2.2	
	KK2S-462	B6-- 9	〃	〃	21.0	15.1	4.0	1.2	
	KK2S-506	B5	1層	〃	20.7	12.1	6.6	1.5	
	KK2S-526	B6—12	3層	〃	31.2	24.0	7.3	4.8	
	KK2S-538	B5	1層	〃	29.6	15.1	7.1	3.6	
	KK2S-539	B5	〃	〃	27.2	21.9	4.6	2.5	
	KK2S-540	B5	〃	〃	15.7	18.0	3.9	1.0	
刃	KK2S-541	B5	〃	〃	12.2	17.7	5.2	1.0	
	KK2S-543	B5	〃	〃	23.9	19.3	6.2	1.7	
	KK2S-550	B6—11	3層	〃	33.6	25.4	9.9	6.9	
	KK2S-551	B6—11	〃	〃	22.8	9.7	3.5	1.0	
	KK2S-552	B6—11	〃	〃	10.0	21.9	4.2	0.6	
	KK2S-553	B6—11	〃	〃	22.1	12.0	3.3	0.8	
	KK2S-554	B6—11	〃	〃	11.7	10.4	2.7	0.3	
	KK2S-561	B6—12	2層	〃	21.0	23.0	5.8	3.1	
	KK2S-562	B6—12	〃	〃	24.2	10.8	4.8	1.3	
	KK2S-563	B6—12	〃	〃	13.8	15.6	2.8	0.6	
	KKB- 36	B2—14	4層	サヌカイト	(28.4)	15.4	3.8		
	KKB- 62	B3—11	3層	黒 曜 石	(64.45)	(13.0)	(7.8)	6.30	
	KKB- 73	B2—12	4層	〃	(16.6)	(5.4)	(2.0)	0.25	
	KKB- 78	B1—16	3層	〃	(29.0)	(14.2)	(4.65)	1.90	
	KKB- 82	B2— 9	〃	〃	(22.4)	12.0	3.0	0.95	
	KKB- 83	B2— 9	〃	〃	(26.3)	4.7	2.5	0.70	
	KKB- 87	B9	〃	〃	(34.6)	15.4	3.7	1.40	
	KKB-101	B5—12	〃	〃	(23.0)	(20.4)	(3.2)	1.60	
	KKS- 79	B3—14	〃	〃	(39.4)	(11.65)	(3.7)	2.0	
器	KKS-118	B1—15	4層	〃	(18.3)	(19.0)	(6.9)	(2.5)	
	KKBF- 63	B3—13	〃	〃	(11.5)	(14.5)	(3.0)	(0.65)	
	KKBF- 83	B6—11	5層	〃	(7.5)	(18.5)	(4.0)	(0.6)	
	KKBF-136	B7—11	4層	〃	(14.4)	(17.5)	(3.0)	(0.8)	
	KKBF-180	B2—16	〃	〃	(14.5)	(15.7)	(2.5)	(0.65)	
	KKBF-189	3 号 住	フク土	〃	(10.5)	(16.0)	(4.0)	(0.65)	
	KKBF-199	B2—11	4層	〃	(13.5)	(16.0)	(4.5)	(1.5)	
	KKBF-253	B2—16	3層	〃	(15.0)	(14.1)	(3.7)	(0.65)	
	KKBF-303	B5—14	〃	〃	(26.5)	(23.5)	(4.6)	(2.7)	
	KKBF-174	B2—14	〃	〃	32.0	10.6	5.95	1.7	
	KKBF-299	B5	1層	〃	40.4	(18.9)	(5.9)	2.3	
台石	KKBF- 15	B1—12	5層	黒 曜 石	(12.85)	(19.0)	(4.0)	1.1	
形	KKBF- 16	B5—16	〃	〃	(10.25)	(17.65)	(2.0)	4.5	
状器	KKBF- 47	B6—14	3層	〃	(16.8)	(19.1)	(5.7)	1.8	

(単位 mm・g)

	遺物No.	地区	層序	石質	長さ	最大幅	厚	重	備考
削器・掻器	KK1S-278		3層	サヌカイト	87.6	43.0	13.5	40.7	
	KK1S-228		〃	〃	45.3	41.9	11.1	26.4	
	KK2S-344	B5—16	〃	〃	27.6	28.8	15.8	23.8	
	KK1S-162		〃	〃	54.6	40.6	7.2	15.6	
	KK1S-161		〃	〃	48.9	43.6	15.7	32.9	
	KK1S-224		〃	〃	53.7	38.4	11.4	26.9	
	KK1S-262		〃	〃	15.4	33.0	14.3	21.7	
	KK1S-163		〃	〃	26.3	45.7	12.4	12.1	
	KKS-65	B2—11	4層	黒曜石	(21.5)	(23.2)	(4.8)	(2.1)	
	KKS-145	B3—14	〃	〃	(21.0)	(24.0)	(8.2)	(4.8)	
	KKS-63	B3—14	3層	〃	(27.3)	(10.8)	(3.9)	(1.05)	
	KKS-69	B3—10	2層	〃	(34.2)	(29.2)	(6.0)	(5.3)	
	KKS-70	B1—11	4層	〃	(35.2)	(31.5)	(5.7)	(4.6)	
	KKS-97	B2—15	〃	〃	(29.0)	(17.2)	(6.7)	(2.7)	
	KKS-107	B2—9	3層	〃	(28.0)	(25.4)	(6.9)	(4.5)	
	KKBF-176	B2—13	〃	〃	(16.0)	(17.2)	(3.0)	(0.85)	
	KKBF-178	B2—15	4層	〃	(43.5)	(15.5)	(5.3)	(2.5)	
	KKBF-292	B5—10	3層	〃	(29.3)	(16.0)	(5.1)	(2.4)	
	KKS-11			〃	47.4	18.2	4.8	4.6	
	KK1S-352		3層	〃	20.7	31.5	4.9	2.7	
	KKS-40	B2—16		〃	(43.5)	(25.7)	(9.5)	(11.6)	
	KKF-34	B2—10	4層	サヌカイト	(29.5)	(23.7)	(6.0)	(3.9)	
石錘	KKNC-2				50.0	52.8	13.8	59.1	
	KKNC-5				57.8	45.0	10.6	37.1	
	KK2S-414				60.7	43.7	9.3	26.3	
	KKNC-27				50.0	46.4	9.2	25.8	
	KKNC-12				73.0	55.5	8.4	44.7	
	KKNC-13				50.1	40.55	8.3	17.2	
	KKNC-23				38.1	40.1	9.8	22.8	
	KKNC-18				35.4	33.3	8.1	21.6	
石斧	KKH-7	B1—14	3層		(49.4)	(48.0)	(14.3)	25.70	
	KKH-8	B1—14	〃		(28.5)	(32.3)	(7.6)	9.40	
	KKH-10	B1—13	1層		(41.8)	65.7	(83.5)	26.55	
	KKH-11	B7. B8	〃		(63.3)	50.9	(12.35)	47.0	
	KKH-21	B6—10	5層		(37.4)	(55.65)	(6.6)	22.10	
	KKH-22	B1—16	3層		(70.95)	(44.1)	(8.95)	31.60	
	KKH-23	B6—14	5層		(33.3)	(62.0)	(7.6)	20.60	
	KKH-26	B5—11			(30.5)	(26.9)	(5.65)	9.20	
	KKH-27	B5	2層		(29.4)	(40.4)	(6.45)	11.90	
	KKH-28	B5—15	5層		(25.9)	32.7	10.3	12.65	
	KKH-30	B2—16	〃		(124.3)	65.4	(19.9)	169.0	
	KKH-31	B2—11	〃		(82.0)	24.2	11.9	46.0	
	KKH-33	B2—11	〃		(87.65)	(34.7)	16.9	39.0	

	KKH-35	B2—19	5層		(36.5)	(26.1)	(10.2)	11.0	
	KKH-36	B1—15	〃		(74.6)	(36.6)	(15.5)	60.05	
	KKH-37	B2—11	〃		(72.8)	84.9	18.6	169.0	
	KKH-38	B2—11	〃		(26.0)	40.3	17.65	44.0	
	KKH-39	B1—16	〃		(50.6)	59.7	(6.1)	26.1	
	KKH-43	B1—16	〃		(27.0)	61.1	7.9	18.25	
石	KKH-44	B2—12	〃		(22.8)	(32.9)	(7.3)	7.50	
	KKH-46	B3—10	3層		(3.9)	39.0	6.6	14.05	
	KKH-47	B2—14	〃		(39.25)	34.25	6.3	22.10	
	KKH-51	B2— 9	〃		(46.7)	(37.6)	10.8	24.50	
	KKH-52	B3—15	〃		(72.35)	38.6	16.5	63.60	
	KKH-53	B4—10	溝3層		(59.0)	66.4	(6.3)	39.0	
	KKH-54	B2—11	3層		(33.0)	(36.6)	(7.35)	12.15	
	KKH-57	B2— 9	4層		55.4	73.2	(9.6)	64.20	
	KKH-63	B2—10	3層		(75.85)	(53.5)	(9.7)	64.0	
	KKH-65	B2—13	4層		(29.45)	(47.0)	(6.85)	15.05	
	KKH-72	表　採			(57.1)	(35.65)	(10.4)	21.0	
	KKH-73	B2— 9	4層		(40.3)	(31.35)	(12.2)	21.0	
	KKH-77	B2—16	〃		(60.0)	(34.2)	(7.95)	19.70	
	KKH-81	B2—10	3層		(29.8)	(58.9)	(7.3)	174.0	
	KKH-84	B2—14	4層		(57.0)	(45.5)	(7.15)	25.85	
	KKH-87	B5— 9	3層		(63.7)	(53.7)	(6.8)	34.50	
	KKH-88	B2—10	〃		(36.45)	(50.5)	(12.0)	26.00	
	KK1S-199				(79.8)	90.5	14.0	145.0	
	KK1S-200				93.4	67.7	14.6	107.0	
斧	KK1S-198				(91.8)	60.1	12.6	106.0	
	KK1S-197				(111.0)	75.6	10.8	140.0	
	KK2S-437				77.6	43.8	10.6	45.0	
	KK2S-284				(61.6)	52.0	10.5	50.0	
	KKH-2				119.6	62.4	27.2	200.0	
	KKH-3				(50.3)	37.7	4.5	20.2	
	KK2S-283				89.7	46.8	7.4	35.7	
砥	KK1S-372				40.2	37.0	15.5	31.5	
	KK1S-458				46.3	25.5	13.0	24.1	
	KK1S-112				(27.3)	18.6	13.4	7.5	
	KK2S-423				(44.2)	(43.4)	20.0	43.2	
石	KK1S-263				75.5	28.5	14.1	23.0	

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第 4 集

昭和52年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲 6—29

印刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1丁目

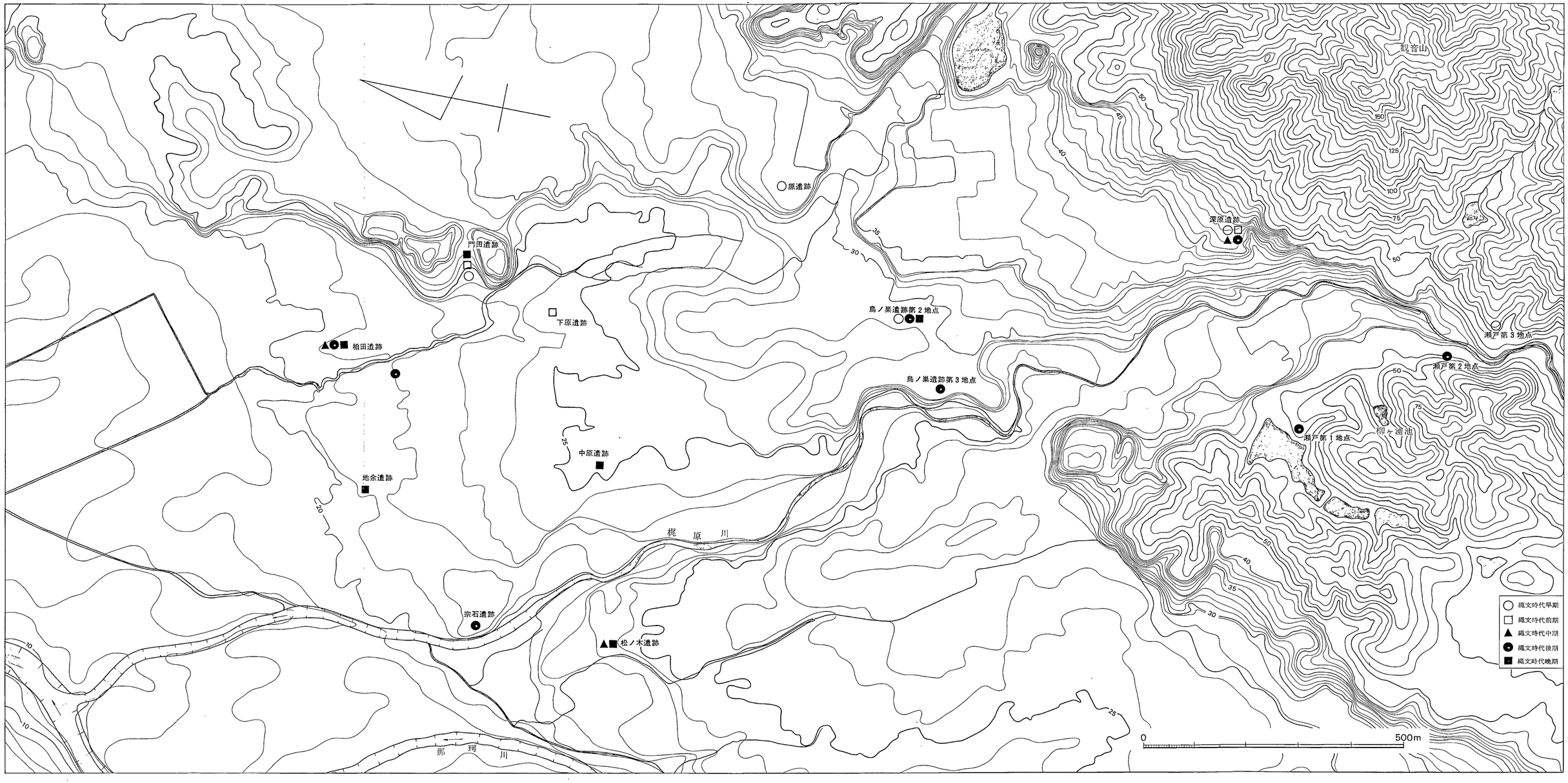
山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第４集

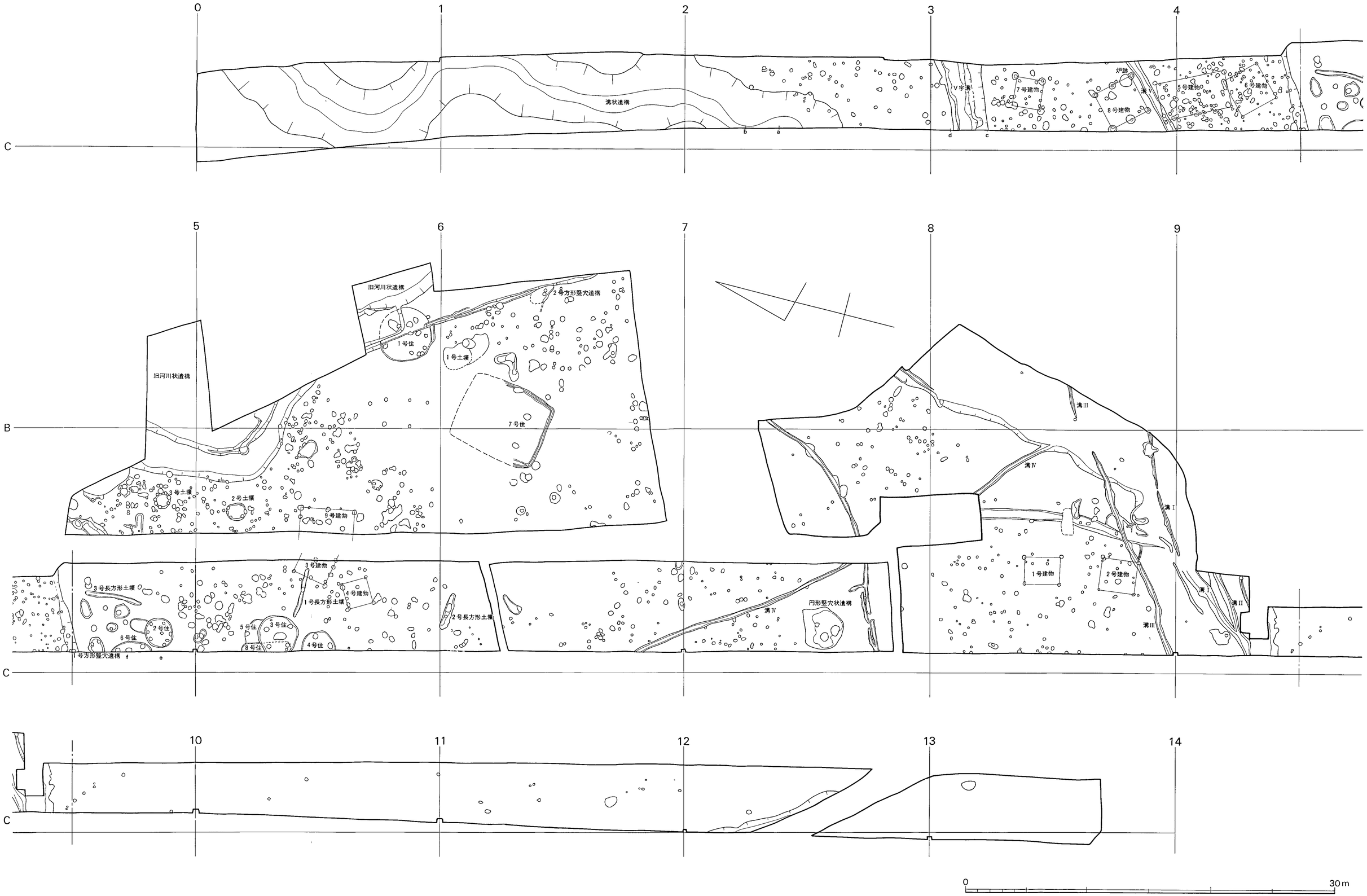
付　　図

１９７７

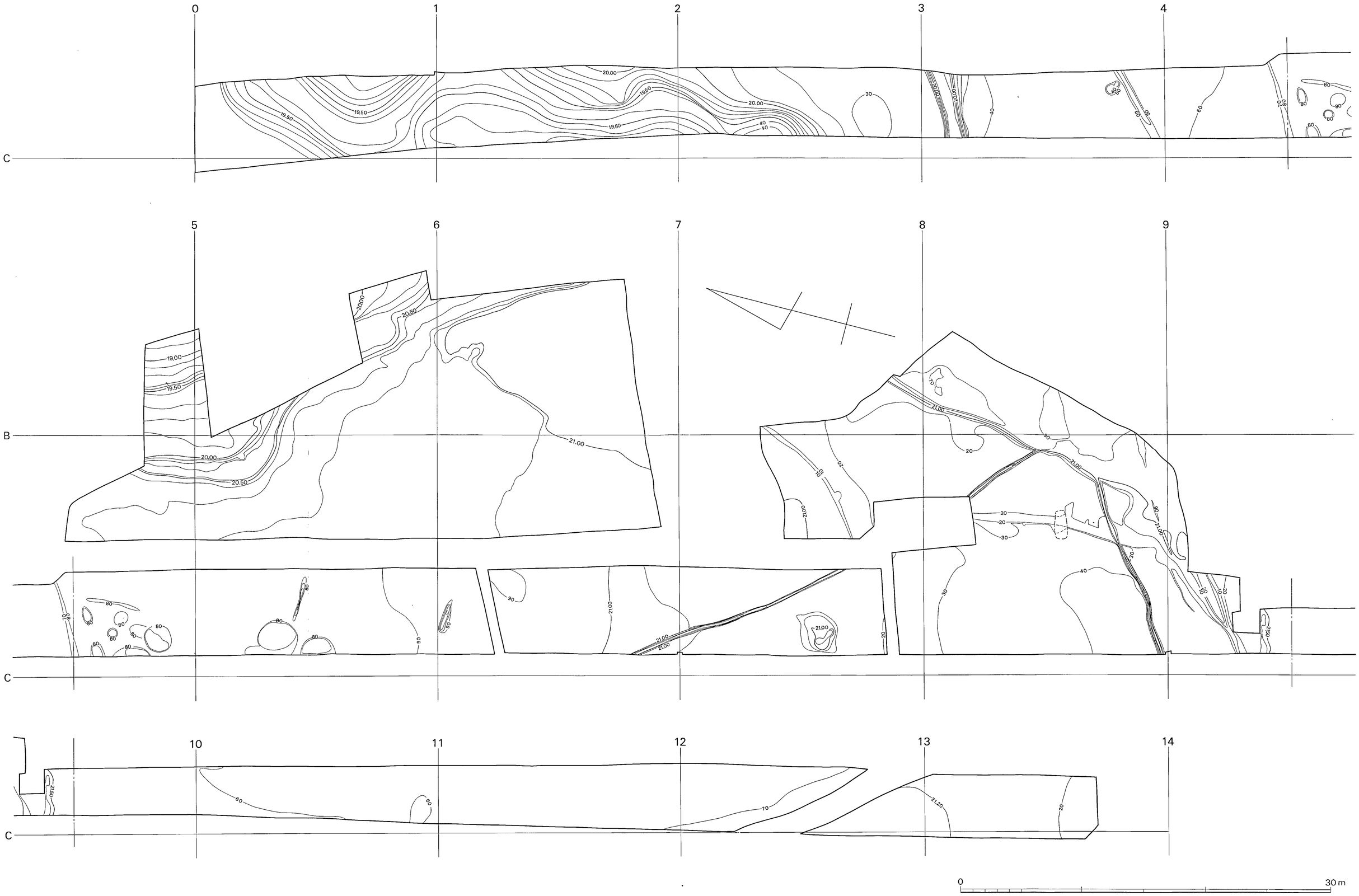
福岡県教育委員会



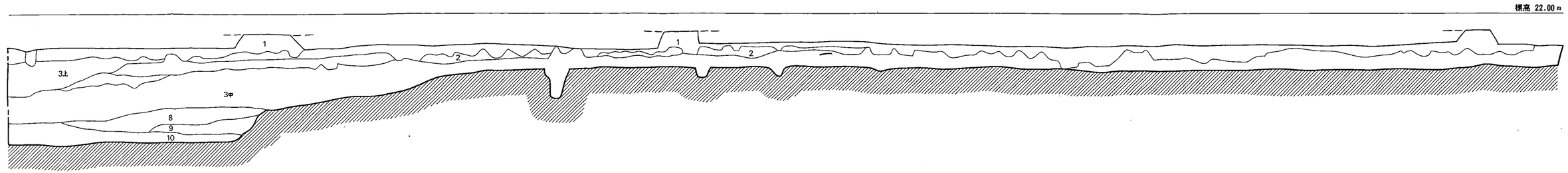
付図1　梶原川流域縄文時代遺跡分布図（微地形図）（1/5000）

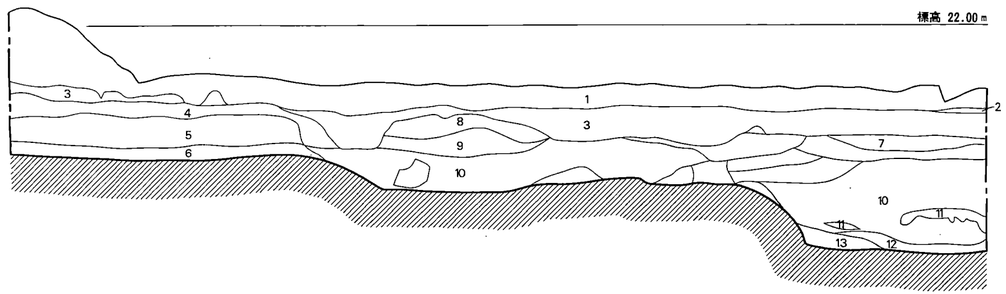


付図2　柏田遺跡遺構配置図　(1/200)

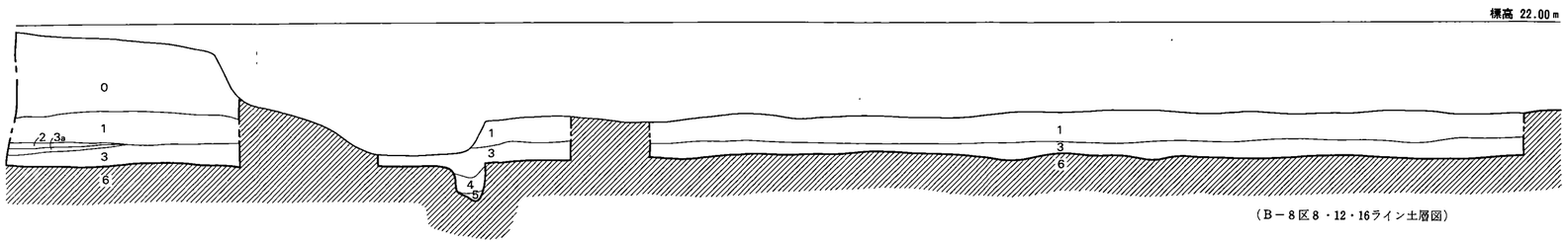


付図3　柏田遺跡旧地形図　(1/200)





1　褐色土層(耕作土)
2　褐色土層にマンガン粒を含む(床土)
3上　黒色砂層
3中　黒色砂層(奈良時代の遺物包含層)
3下　黒色砂層(縄文時代の遺物包含層)
4　灰褐色粘土層(無遺物層)
5　茶褐色粘土層(無遺物層)
6　青色粘土層(無遺物層)
7　黒色粘土層(無遺物層)
8　黒褐色砂層(遺物包含層)
9　橙褐色砂層(遺物包含層)
10　黒褐色土層
11　茶褐色砂層
12　青白色砂層(植物遺体を含む)
13　黒色粘質土層

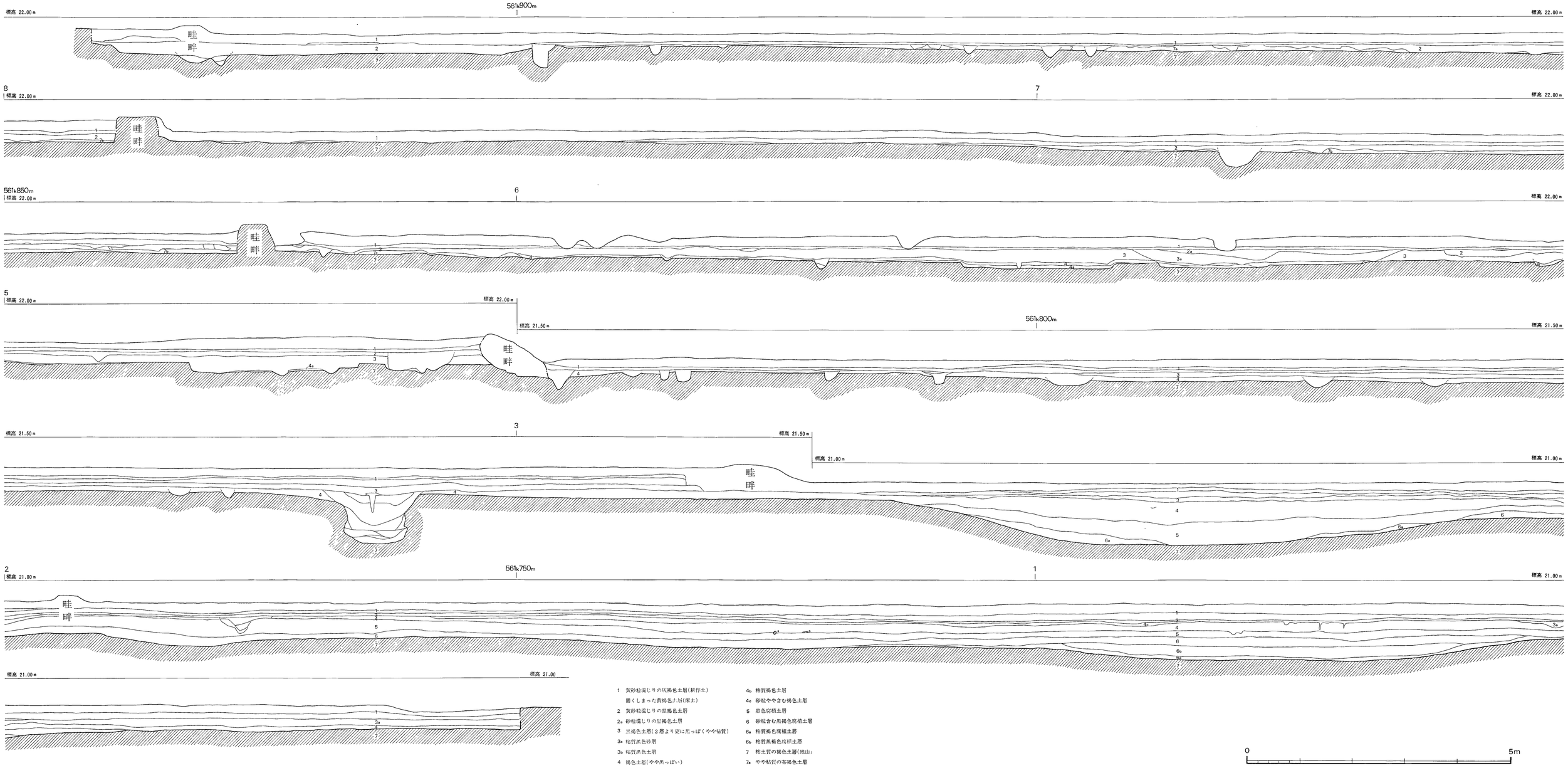


(B－8区8・12・16ライン土層図)

0　再堆積土
1　暗黄褐色土層(耕作土)
2　鉄分を混じた暗黄褐色土層(床土)
3　黒色土層
3a　茶褐色土を混じた黒色土層
4　砂質性の黒褐色土層
5　砂質性の灰黄褐色土を混じた黒色土層
6　粘質性の黄褐色土層(地山)

0　5m

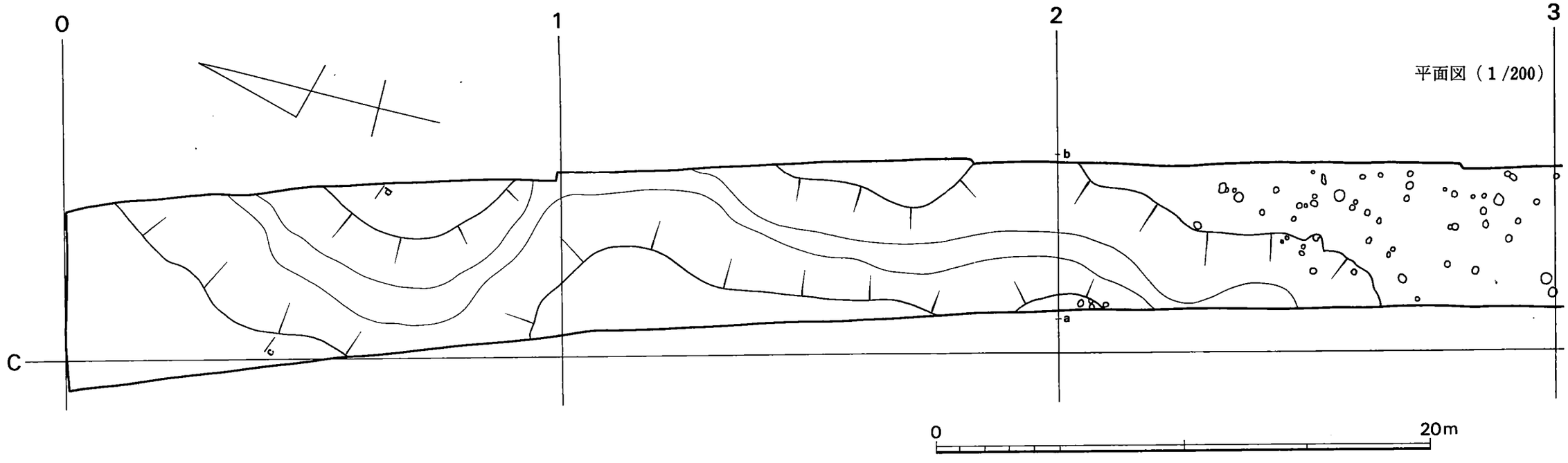
付図4　柏田遺跡B列層序 (1/40)

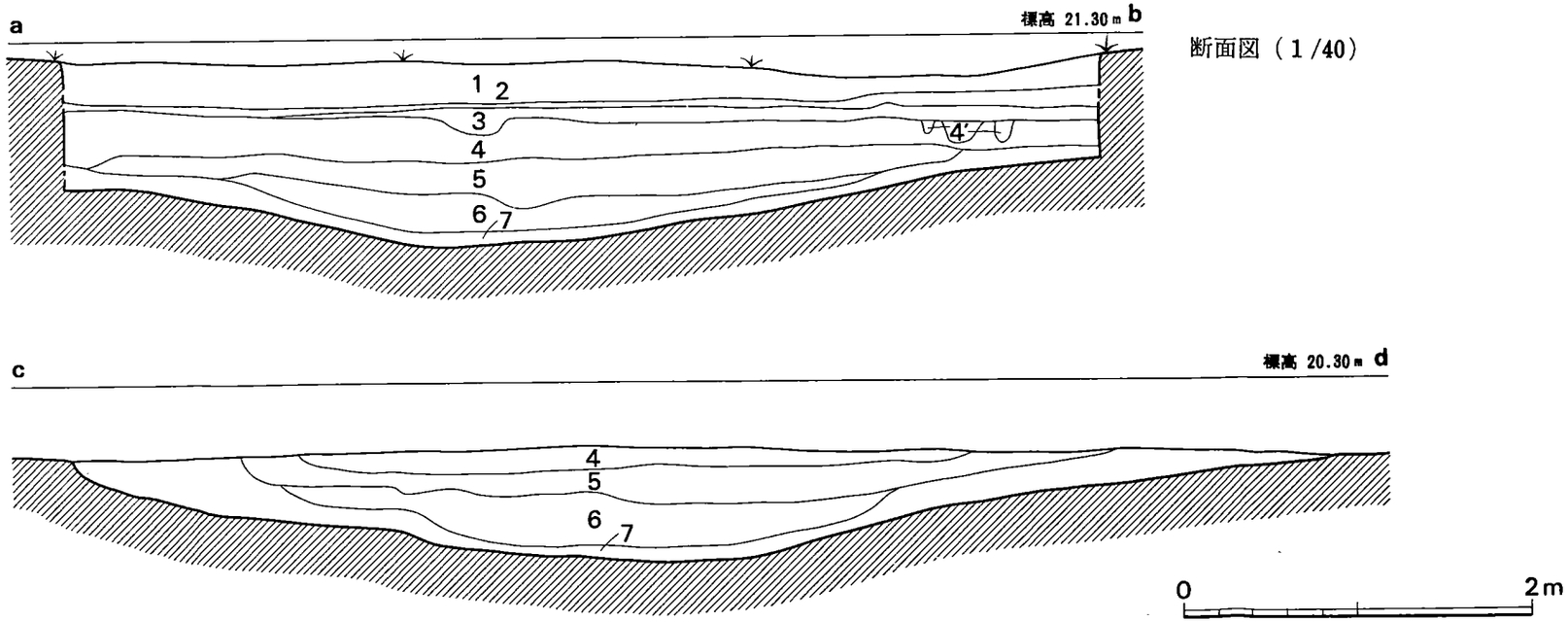


1 黄砂粒混じりの灰褐色土層(耕作土)
　固くしまった黄褐色土層(床土)
2 黄砂粒混じりの黒褐色土層
2a 砂粒混じりの黒褐色土層
3 黒褐色土層(2層より更に黒っぽくやや粘質)
3a 粘質黒色砂層
3b 粘質黒色土層
4 褐色土層(やや黒っぽい)
4a 砂質褐色土層
4b 粘質褐色土層
4c 砂粒やや含む褐色土層
5 黒色腐植土層
6 砂粒含む黒褐色腐植土層
6a 粘質褐色腐植土層
6b 粘質黒褐色腐植土層
7 粘土質の褐色土層(地山)
7a やや粘質の茶褐色土層
7b 暗褐色土層(黄砂粒含む)

0　5m

付図5　柏田遺跡C列層序 (1/40)

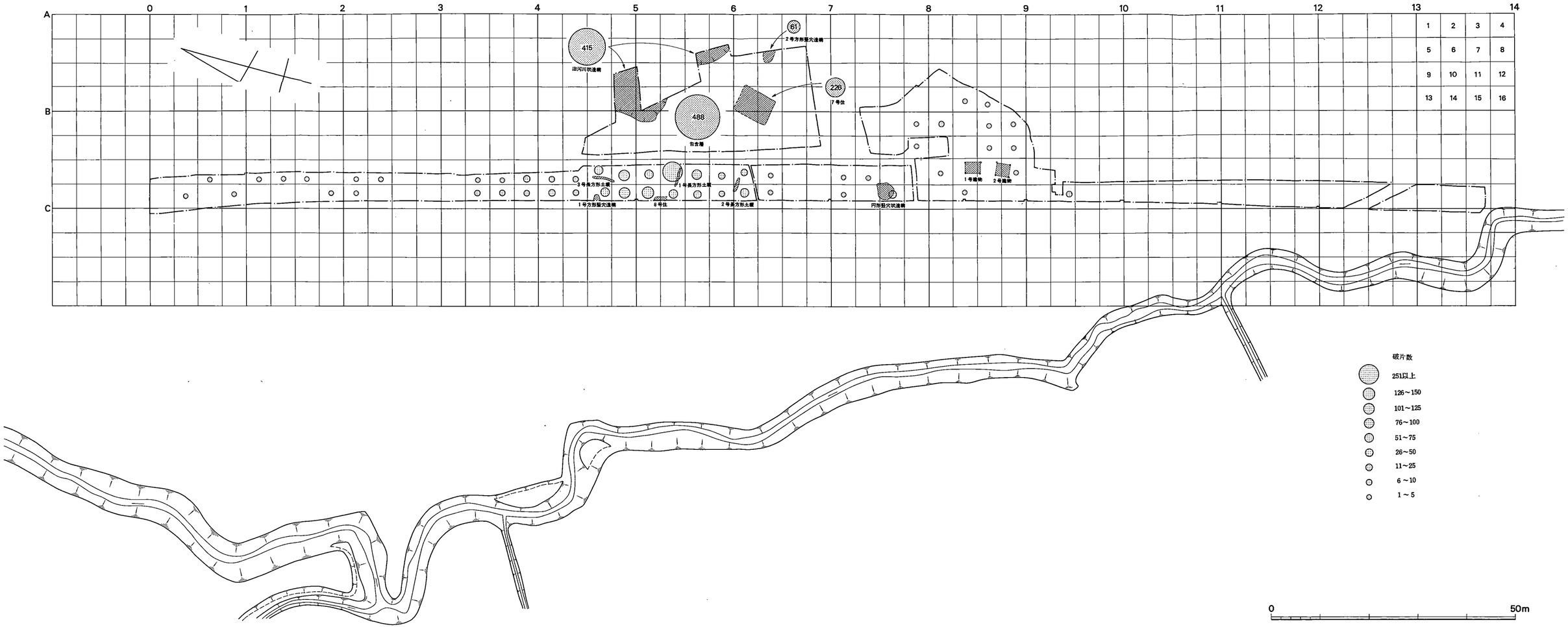




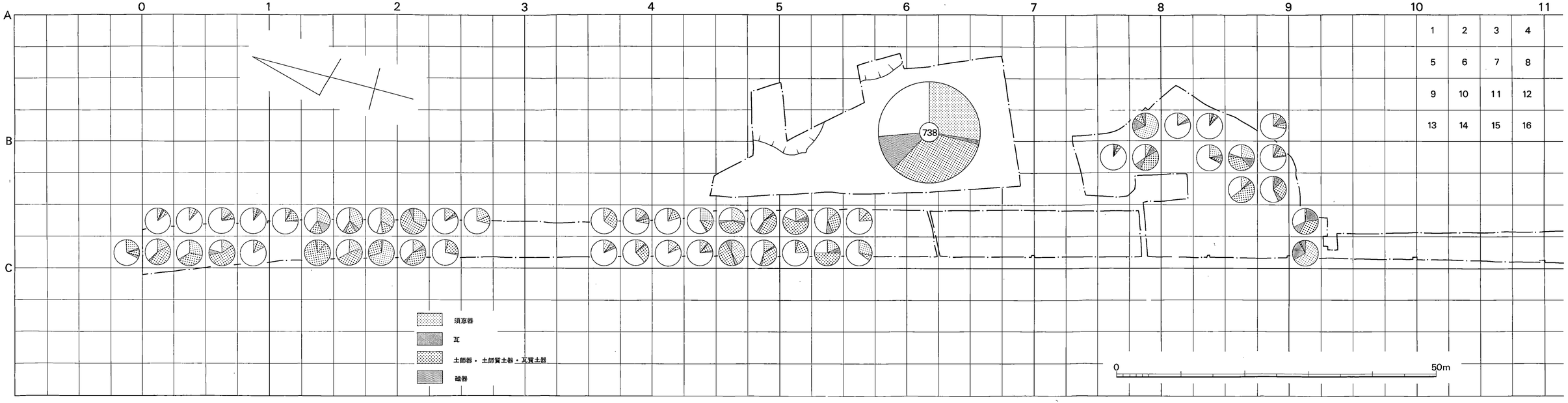
断面図（1/40）

1 表土層
2 卵黄褐色土層
3 暗黄褐色土層
4 黒褐色土層
4' 暗褐色土層
5 暗褐色粘質土層
6 黒色粘質土層
7 灰褐色粘質土層

付図6　柏田遺跡溝状遺構実測図 (1/200)



付図7　柏田遺跡古墳時代遺物分布図 (1/600)



付図8　柏田遺跡歴史時代遺物分布図 (1/400)